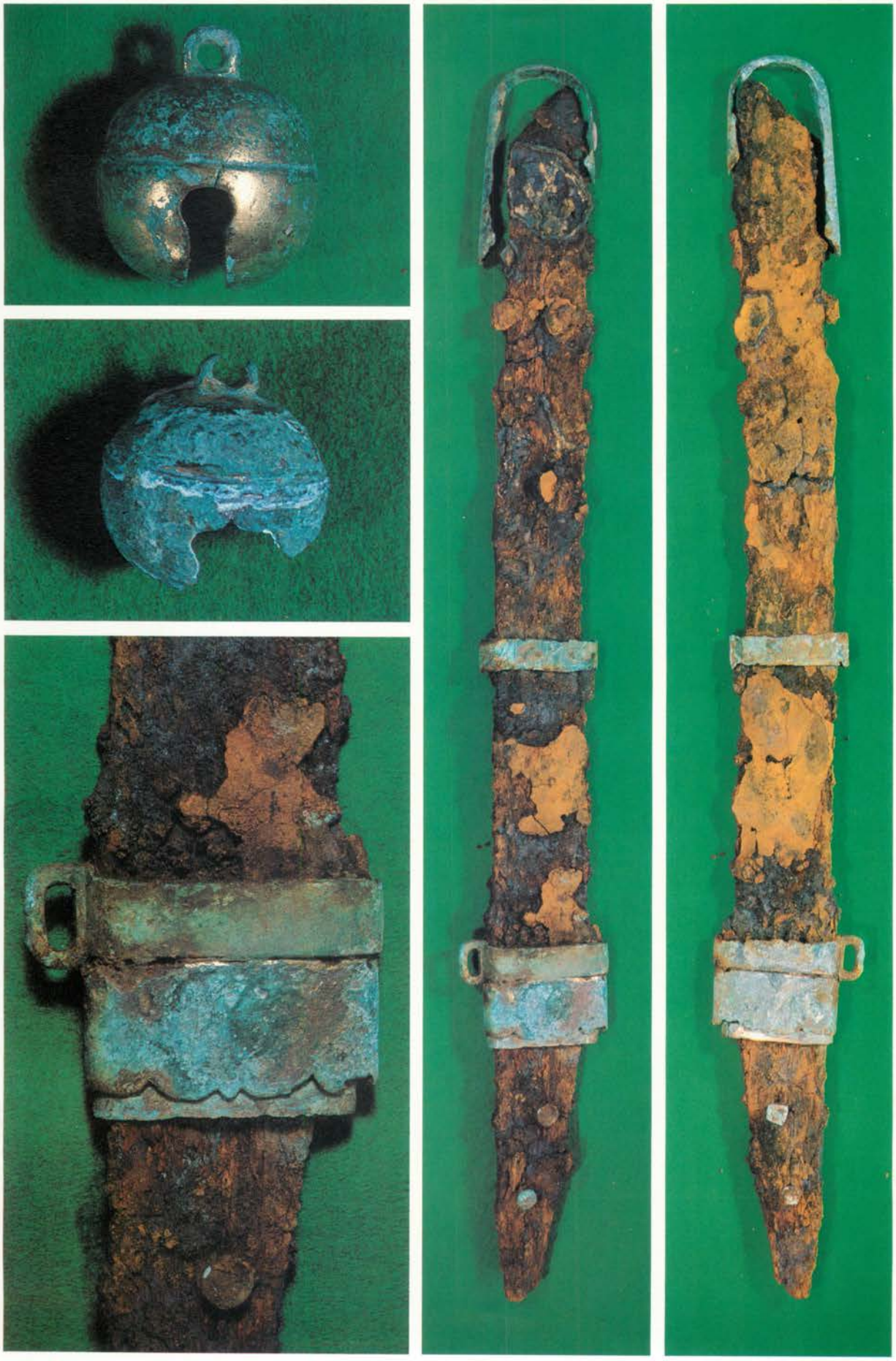
千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書 Ⅷ

船尾町田遺跡
谷田木曽地遺跡
谷田神楽場遺跡

1984

千葉県企業庁
財団法人 千葉県文化財センター



船尾町田２号墳出土直刀・鈴

千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書 Ⅷ

船尾町田遺跡
谷田木曽地遺跡
谷田神楽場遺跡

1984

千葉県企業庁
財団法人 千葉県文化財センター

序　　文

千葉北部地区新市街地造成整備事業（千葉ニュータウン）に関連する調査は、昭和45年８月より財団法人千葉県都市公社内に設置された文化財調査事務所によって開始され、昭和50年４月からは当(財)千葉県文化財センターで実施しております。

この10余年の間約55遺跡の発掘調査を実施しこれらの調査成果は、「千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書」として都合７冊にまとめられ今回第８冊目を刊行することとなりました。

このたび報告する遺跡は、昭和53年度から昭和57年度にかけて調査を実施した、神崎川流域に所在する船尾町田・谷田木曽地・谷田神楽場の３遺跡であります。船尾町田遺跡は、弥生時代から古墳時代にかけての集落跡のほか、前方後円墳を含む計３基の古墳が調査され、金銅製の鈴が２点出土しております。また、谷田木曽地遺跡は先土器時代の石器群、縄文時代、弥生時代、そして古墳時代の集落跡と長期間にわたった生活跡が、谷田神楽場遺跡では近世の塚群が確認され、それぞれ貴重な資料を提供しています。

これらの資料が、郷土の歴史を知る手がかりの一助となり、房総の歴史解明への糸口となることを期待するとともに、広く一般に活用されることを望んでやみません。

最後に、千葉県企業庁及び白井町・印西町教育委員会の御協力と、寒風、酷暑の中で調査に従事され、報告書刊行まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から謝意を表します。

昭和59年３月

(財)千葉県文化財センター

理事長　今　井　　正

凡　　例

1．本報告書は、千葉北部地区新市街地造成整備事業（千葉ニュータウン）に関連する埋蔵文化財調査報告書である。

2．本書所収の遺跡は、印旛郡印西町船尾字町田128番地先所在の船尾町田遺跡（ＣＮ709）、同郡白井町谷田字木曽地827番地先所在の谷田木曽地遺跡（ＣＮ411）、及び同郡同町谷田字神楽場791番地先所在の谷田神楽場遺跡（ＣＮ504）である。

3．発掘調査から本報告書作成に至る業務は、千葉県企業庁の委託を受け、千葉県教育庁文化課の指導のもとに、財団法人千葉県文化財センターが行った。

4．各遺跡の発掘調査の期間及び組織は、第１篇－１章のとおりである。

5．整理作業及び報告書作成作業は、調査部長　白石竹雄、調査部長補佐　山田友治・栗本佳弘・天野　努・岡川宏道の指導のもと、下記の者が実施した。

船尾町田遺跡（昭和56年10月１日～昭和58年３月31日）

班長　古内　茂、清藤一順、主任調査研究員　田坂　浩、菊池真太郎

谷田木曽地遺跡（昭和55年４月１日～昭和57年９月30日・昭和58年４月１日～昭和58年５月31日）

班長　古内　茂・清藤一順、主任調査研究員　菊池真太郎、調査研究員　及川淳一

谷田神楽場遺跡（昭和58年６月１日～昭和58年７月31日）

班長　清藤一順、調査研究員　及川淳一

6．報告書作成に至る作業期間中、下記の調査研究員の協力を得た。

宮　重行・岩井　正・糸川道行

7．本書の執筆分担は、別記のとおりである。

8．編集は、清藤一順・及川淳一が行った。

9．本文中挿図の第１・２・103図は、国土地理院著作発行の、５万分の１「佐倉」、２万５千分の１「白井」を使用している。

10．図面及び遺物等の資料は、財団法人千葉県文化財センターで保管している。

11．発掘調査から報告書刊行に至るまで、千葉県企業庁ニュータウン整備部建設第一課及び建設第二課、印西町教育委員会、白井町教育委員会をはじめ、多くの方々に御協力をいただいた。深く謝意を表する次第であります。

目　　次

巻首図版（カラー）船尾町田遺跡出土直刀・鈴

序　　文

凡　　例

本文目次

第1篇　経過と環境…… 23

1章　経過と組織……及川…… 25

2章　遺跡の位置と環境……田坂・及川…… 29

第2篇　船尾町田遺跡（CN709）…… 31

1章　調査の概要……田坂…… 35

2章　古墳の調査……田坂…… 37

3章　住居跡の調査……田坂…… 52

4章　その他の遺構の調査……101

1．溝状遺構……田坂……101

2．土　壙……田坂……105

3．性格不明の遺構……田坂……111

5章　遺構外出土の遺物……144

1．弥生時代以降の遺物……田坂……144

2．縄文時代の遺物……清藤……152

6章　小　結……158

1．古墳について……田坂……158

2．住居跡について……田坂……159

3．その他の遺構について……田坂……165

第3篇　谷田木曽地遺跡（CN411）…… 167

1章　調査の概要……菊池・及川……169

2章　先土器時代の調査……173

1．層　序……古内・及川……173

2．53～55年度調査分……古内……174

3．56・57年度調査分……宮……177

3章　住居跡の調査……203

1．縄文時代……清藤・及川……203
2．弥生時代……古内・清藤・菊池・及川……204
3．古墳時代……及川……222
4章　その他の遺構の調査……232
1．塚の調査……及川……232
2．土　壙……及川……233
3．溝状遺構……及川……242
5章　遺構外出土の遺物……243
1．縄文土器……清藤・菊池……243
2．石　器……古内……263
3．土製品……古内……268
6章　小　結……269
1．先土器時代の遺物について……宮……269
2．住居跡について……及川……269
3．その他の遺構について……及川……272
4．Ⅰ群土器について……清藤……272
第4篇　谷田神楽場遺跡（CN504）……275
1章　調査の概要……及川……279
2章　遺構の調査……280
1．塚……及川……280
2．住居跡……及川……282
3．溝状遺構……及川……286
3章　遺構外出土の遺物……287
1．縄文土器……清藤……287
2．石　器……古内……287
4章　小　結……及川……290
第5篇　結　語……清藤……291

挿図目次

第 1 図　千葉ニュータウン関係遺跡分布図 …… 27

船尾町田遺跡

第 2 図　船尾町田遺跡周辺地形図 …… 33
第 3 図　船尾町田遺跡地形図 …… 34
第 4 図　グリッド呼称例 …… 35
第 5 図　船尾町田遺跡グリッド配置図 …… 36
第 6 図　1 号墳実測図 …… 38
第 7 図　1 号墳主体部実測図 …… 39
第 8 図　1 号墳遺物出土状態 …… 40
第 9 図　1 号墳出土遺物実測図 …… 41
第10図　2 号墳実測図 …… 42
第11図　2 号墳遺物出土状態 …… 43
第12図　2 号墳主体部実測図 …… 44
第13図　2 号墳主体部内出土遺物実測図 …… 44
第14図　2 号墳周溝内出土遺物実測図 …… 45
第15図　2 号墳周溝内出土遺物実測図 …… 47
第16図　3 号墳実測図 …… 48
第17図　3 号墳主体部実測図 …… 49
第18図　3 号墳主体部遺物出土状態 …… 50
第19図　3 号墳出土遺物実測図 …… 51
第20図　1 号住居跡実測図 …… 53
第21図　1 号住居跡出土遺物実測図 …… 54
第22図　7 号住居跡実測図 …… 55
第23図　7 号住居跡出土遺物実測図 …… 55
第24図　8 号住居跡実測図 …… 56
第25図　8 号住居跡出土遺物実測図 …… 57
第26図　9 号住居跡実測図 …… 58
第27図　9 号住居跡出土遺物実測図 …… 58
第28図　12号住居跡実測図 …… 59
第29図　12号住居跡出土遺物実測図 …… 60
第30図　14号住居跡実測図 …… 61
第31図　14号住居跡出土遺物実測図 …… 62

第32図　16号住居跡実測図 …… 63
第33図　16号住居跡出土遺物実測図 …… 64
第34図　17号住居跡実測図 …… 65
第35図　17号住居跡出土遺物実測図 …… 65
第36図　18号住居跡実測図 …… 66
第37図　18号住居跡出土遺物実測図 …… 67
第38図　19号住居跡実測図 …… 68
第39図　19号住居跡出土遺物実測図 …… 68
第40図　23・24号住居跡実測図 …… 69
第41図　23号住居跡出土遺物実測図 …… 70
第42図　24号住居跡出土遺物実測図 …… 71
第43図　25号住居跡実測図 …… 72
第44図　25号住居跡出土遺物実測図 …… 72
第45図　26号住居跡実測図 …… 73
第46図　26号住居跡出土遺物実測図 …… 74
第47図　26号住居跡出土遺物実測図 …… 75
第48図　26号住居跡出土遺物実測図 …… 76
第49図　28・29号住居跡実測図 …… 78
第50図　29号住居跡出土遺物実測図 …… 79
第51図　30A・B・32号住居跡実測図 …… 80
第52図　30A号住居跡出土遺物実測図 …… 81
第53図　30B号住居跡出土遺物実測図 …… 83
第54図　32号住居跡出土遺物実測図 …… 84
第55図　33号住居跡実測図 …… 85
第56図　33号住居跡出土遺物実測図 …… 86
第57図　33号住居跡出土遺物実測図 …… 87
第58図　33号住居跡出土遺物実測図 …… 88
第59図　34号住居跡実測図 …… 89
第60図　34号住居跡出土遺物実測図 …… 89
第61図　35号住居跡実測図 …… 90
第62図　35号住居跡出土遺物実測図 …… 91
第63図　35号住居跡出土遺物実測図 …… 92
第64図　36号住居跡実測図 …… 93
第65図　36号住居跡遺物出土状態 …… 93

第66図　36号住居跡出土遺物実測図 …… 94
第67図　37号住居跡実測図 …… 95
第68図　37号住居跡出土遺物実測図 …… 96
第69図　40号住居跡実測図 …… 97
第70図　40号住居跡出土遺物実測図 …… 98
第71図　46号住居跡実測図 …… 99
第72図　46号住居跡出土遺物実測図 …… 99
第73図　51号住居跡実測図 …… 100
第74図　3号址出土遺物実測図 …… 102
第75図　11号址出土遺物実測図 …… 102
第76図　15号址出土遺物実測図 …… 103
第77図　53号址出土遺物実測図 …… 104
第78図　21・22号址実測図 …… 106
第79図　39号址実測図 …… 107
第80図　41号址実測図 …… 107
第81図　43号址実測図 …… 108
第82図　42号址実測図 …… 109
第83図　44号址実測図 …… 109
第84図　50号址実測図 …… 110
第85図　58号址実測図 …… 110
第86図　59号址実測図 …… 111
第87図　13号址実測図 …… 112
第88図　13号址出土遺物実測図 …… 112
第89図　48号址実測図 …… 113
第90図　48号址出土遺物実測図 …… 114
第91図　52号址実測図 …… 114
第92図　Aグリッド出土遺物実測図 …… 144
第93図　Cグリッド出土遺物実測図 …… 145
第94図　Dグリッド出土遺物実測図 …… 146
第95図　Gグリッド出土遺物実測図 …… 147
第96図　Hグリッド出土遺物実測図 …… 148
第97図　Hグリッド出土遺物実測図 …… 149
第98図　Iグリッド出土遺物実測図 …… 151
第99図　縄文土器 …… 153

第100図　縄文土器 ……154
第101図　縄文土器 ……155
第102図　石器実測図 ……156

谷田木曽地遺跡

第103図　谷田木曽地遺跡・谷田神楽場遺跡及び周辺遺跡の位置 ……170
第104図　谷田木曽地遺跡跡及び谷田神楽場遺跡周辺地形図 ……171
第105図　先土器時代遺物出土状態実測図（6 D－53、54、55、63、64、73、74）……175
第106図　先土器時代遺物出土状態実測図（6 C－53）……176
第107図　先土器時代遺物出土状態実測図（7 E－57）……177
第108図　先土器時代遺物出土状態実測図（7 E－88）……178
第109図　先土器時代遺物出土状態実測図（8 E－13）……179
第110図　先土器時代遺物出土状態実測図（9 D－55）……180
第111図　先土器時代遺物出土状態実測図（9 D－71）……181
第112図　先土器時代遺物出土状態実測図（9 D－73）……182
第113図　先土器時代遺物出土状態実測図（10E－13、14、23、24、25）……183
第114図　先土器時代遺物出土状態実測図（12F－13）……185
第115図　先土器時代遺物出土状態実測図（12F－50）……186
第116図　先土器時代遺物出土状態実測図（12F－55）……187
第117図　先土器時代遺物出土状態実測図（12F－62）……188
第118図　先土器時代遺物出土状態実測図（12F－80）……189
第119図　先土器時代遺物集中地区出土平面図 ……191
第120図　先土器時代石器実測図（1）……193
第121図　先土器時代石器実測図（2）……194
第122図　先土器時代石器実測図（3）……195
第123図　先土器時代石器実測図（4）……196
第124図　先土器時代石器実測図（5）……197
第125図　先土器時代石器実測図（6）……198
第126図　先土器時代石器実測図（7）……199
第127図　先土器時代石器実測図（8）……200
第128図　先土器時代石器実測図（9）……201
第129図　先土器時代石器実測図（10）……202
第130図　021号住居跡実測図 ……203
第131図　021号住居跡出土遺物実測図 ……204
第132図　001号住居跡実測図 ……205

第133図　001号住居跡出土遺物実測図……206
第134図　010号住居跡実測図……207
第135図　010号住居跡出土遺物実測図……207
第136図　019号住居跡実測図……208
第137図　019号住居跡出土遺物実測図……209
第138図　022号住居跡実測図……210
第139図　026号住居跡実測図……211
第140図　026号住居跡出土遺物実測図……212
第141図　028号住居跡実測図……213
第142図　028号住居跡出土遺物実測図……213
第143図　031号住居跡実測図……214
第144図　031号住居跡出土遺物実測図……215
第145図　035号住居跡実測図……125
第146図　035号住居跡出土遺物実測図……216
第147図　038号住居跡実測図……217
第148図　038号住居跡出土遺物実測図……218
第149図　弥生土器拓影図（1）……220
第150図　弥生土器拓影図（2）……221
第151図　002号住居跡実測図……223
第152図　002号住居跡出土遺物実測図……224
第153図　004号住居跡実測図……226
第154図　004号住居跡出土遺物実測図……228
第155図　023号住居跡実測図……229
第156図　023号住居跡出土遺物実測図……230
第157図　036号址実測図……232
第158図　036号址出土遺物実測図……233
第159図　003号址実測図……234
第160図　005号址実測図……235
第161図　005号址出土遺物実測図……235
第162図　012号址実測図……236
第163図　013号址実測図……237
第164図　024号址実測図……238
第165図　025号址実測図……239
第166図　056号址実測図……240

第167図　061号址・062号址実測図 ……241
第168図　グリッド出土遺物実測図 ……247
第169図　縄文土器拓影図（1）……248
第170図　縄文土器拓影図（2）……249
第171図　縄文土器拓影図（3）……250
第172図　縄文土器拓影図（4）……251
第173図　縄文土器拓影図（5）……252
第174図　縄文土器拓影図（6）……253
第175図　縄文土器拓影図（7）……254
第176図　縄文土器拓影図（8）……255
第177図　縄文土器拓影図（9）……256
第178図　縄文土器拓影図（10）……257
第179図　縄文土器拓影図（11）……258
第180図　縄文土器拓影図（12）……259
第181図　縄文土器拓影図（13）……260
第182図　縄文土器拓影図（14）……261
第183図　縄文土器拓影図（15）……262
第184図　縄文時代石器実測図（1）……264
第185図　縄文時代石器実測図（2）……265
第186図　縄文時代石器実測図（3）……266
第187図　縄文時代石器実測図（4）……267
第188図　土玉実測図 ……268
第189図　出土石器一覧 ……270

谷田神楽場遺跡

第190図　遺構及びトレンチ配置図 ……277
第191図　001・002・003号址実測図 ……281
第192図　005号住居跡実測図 ……283
第193図　005号住居跡遺物出土状態実測図 ……284
第194図　005号住居跡出土遺物実測図 ……285
第195図　住居跡外の出土遺物実測図（縄文）……288
第196図　縄文土器拓影図 ……289
第197図　石器実測図 ……289

付図目次

船尾町田遺跡

付図1　船尾町田遺跡全測図

谷田木曽地遺跡

付図2　谷田木曽地遺跡全測図

表目次

船尾町田遺跡

表1　船尾町田3号墳ガラス小玉計測値一覧……152

表2　住居跡一覧……164

谷田木曽地遺跡

表3　002号住居跡出土遺物一覧……225

表4　004号住居跡出土遺物一覧……227

表5　023号住居跡出土遺物一覧……231

図版目次

船尾町田遺跡

図版1　1　航空写真（東から）
　　2　同上　　（北から）
図版2　1　遺跡遠景（南から）
　　2　同上　　（南西から）
図版3　1　1号墳現況（参考資料）
　　2　同上
図版4　1　2号墳主体部
　　2　2号墳周溝内遺物出土状態
図版5　1　3号墳全景（南から）
　　2　3号墳主体部
図版6　1　1号住居跡全景
　　2　7号住居跡全景
図版7　1　8号住居跡全景
　　2　9号住居跡全景
図版8　1　12号住居跡全景
　　2　16号住居跡全景
図版9　1　17号住居跡全景
　　2　18号住居跡全景
図版10　遺跡近景
図版11　1　19号住居跡全景
　　2　23・24号住居跡全景
図版12　1　24号住居跡遺物出土状態
　　2　同上
図版13　1　25号住居跡全景
　　2　26号住居跡全景
図版14　1　26号住居跡遺物出土状態
　　2　同上
図版15　1　30A・B号住居跡全景
　　2　30B号住居跡遺物出土状態
図版16　1　33号住居跡全景
　　2　33号住居跡遺物出土状態
図版17　1　遺跡近景
図版18　1　36号住居跡全景
　　2　34号住居跡遺物出土状態
図版19　1　35号住居跡遺物出土状態
　　2　同上
図版20　1　36号住居跡遺物出土状態
　　2　同上
図版21　1　37号住居跡全景
　　2　37号住居跡遺物出土状態
図版22　1　46号住居跡全景
　　2　21・22号址全景
図版23　1　39号址全景
　　2　41号址全景
図版24　1　42号址全景
　　2　44号址全景
図版25　1　48号址全景
　　2　52号址全景
図版26　1　H31グリッド遺物出土状態
　　2　同上
図版27　1　1号墳出土遺物
　　2　2号墳出土遺物
図版28　2号墳出土遺物（周溝内1）
図版29　2号墳出土遺物（周溝内2）
図版30　3号墳出土遺物
図版31　1　7号住居跡出土遺物
　　2　8号住居跡出土遺物
　　3　12号住居跡出土遺物
図版32　1　14号住居跡出土遺物
　　2　16号住居跡出土遺物
　　3　18号住居跡出土遺物
図版33　1　23号住居跡出土遺物
　　2　24号住居跡出土遺物

3　25号住居跡出土遺物
図版34　26号住居跡出土遺物（1）
図版35　26号住居跡出土遺物（2）
図版36　29号住居跡出土遺物
図版37　30A号住居跡出土遺物
図版38　1　30B号住居跡出土遺物
2　33号住居跡出土遺物
図版39　1　33号住居跡出土遺物
2　34号住居跡出土遺物
図版40　35号住居跡出土遺物
図版41　1　36号住居跡出土遺物
2　37号住居跡出土遺物
図版42　1　46号住居跡
2　Aグリッド出土遺物
3　Cグリッド出土遺物
4　Dグリッド出土遺物
図版43　1　Gグリッド出土遺物
2　Hグリッド出土遺物
図版44　縄文土器（1）
図版45　縄文土器（2）
図版46　縄文土器（3）
図版47　石器

谷田木曽地遺跡

図版48　1　遺跡全景（航空写真）
2　53年度調査区全景（航空写真）
図版49　1　54年度調査区全景（航空写真）
2　遺跡近景（53年度調査区）
図版50　1　遺跡近景（53～55年度調査区）
2　遺跡近景（56・57年度調査区）
図版51　1　2B－19土層断面
2　6D－86土層断面
3　3D－15遺物出土状態
図版52　1　6D－53遺物出土状態
2　6D－64遺物出土状態
3　6D－64（0021）遺物出土状態
4　6D－64（0028）遺物出土状態
図版53　1　6C－53遺物出土状態
2　6D－97遺物出土状態
3　6D－85遺物出土状態
図版54　1　10E－24・25遺物出土状態
2　10E－13遺物出土状態
3　10E－14（0007）遺物出土状態
4　10E－24（0001、0006、0010）遺物出土状態
5　10E－25遺物出土状態
図版55　1　12F－13（0007）遺物出土状態
2　12F－50（0002）遺物出土状態
3　先土器時代の遺物（その1）1～8
図版56　先土器時代の遺物（その2）9～30
図版57　1　先土器時代の遺物（その3）31・33～37
〔以上53年度～55年度出土遺物〕
2　先土器時代の遺物（その4）38～44
図版58　先土器時代の遺物（その5）47～52
図版59　先土器時代の遺物（その6）45・46・53～67
図版60　先土器時代の遺物（その7）68～84
図版61　先土器時代の遺物（その8）85～99
図版62　1　021号住居跡全景
2　021号住居跡遺物出土状態
3　021号住居跡出土遺物
4　グリッド出土の縄文土器
図版63　1　001号住居跡全景
2　001号住居跡炭化材出土状態
図版64　1　010号住居跡全景

2　019号住居跡全景
図版65　1　022号住居跡全景
2　026号住居跡全景
図版66　1　028号住居跡全景
2　031号住居跡全景
図版67　1　035号住居跡全景
2　038号住居跡全景
3　026号住居跡出土遺物
4　035号住居跡出土遺物
図版68　遺構出土の弥生土器（その１）
図版69　遺構出土の弥生土器（その２）
図版70　1　002号住居跡全景
図版70　2　004号住居跡全景
図版71　004号住居跡
遺物出土状態及び調査風景
図版72　1　023号住居跡全景
2　023号住居跡
カマド及び遺物出土状態
図版73　1　002号住居跡出土遺物
2　004号住居跡出土遺物
3　023号住居跡出土遺物
4　005号址出土遺物
図版74　1　036号址（塚）全景
2　036号址全景
3　036号址土層断面
図版75　1　003号址全景
2　005号址全景
3　012号址全景
図版76　1　013号址全景
2　025号址全景
3　027号址全景
図版77　1　052号址全景
2　061号址・062号址全景
3　061号址土層断面
4　062号址土層断面
4　062号址土層断面
図版78　1　014・015・016号址全景
2　024号址全景
3　032・033号址全景
図版79　グリッド出土の縄文土器片（その１）
〔第169図〕
図版80　グリッド出土の縄文土器片（その２）
〔第170図〕
図版81　グリッド出土の縄文土器片（その３）
〔第171図〕
図版82　グリッド出土の縄文土器片（その４）
〔第172図〕
図版83　グリッド出土の縄文土器片（その５）
〔第173図〕
図版84　グリッド出土の縄文土器片（その６）
〔第174図〕
図版85　グリッド出土の縄文土器片（その７）
〔第175図〕
図版86　グリッド出土の縄文土器片（その８）
〔第176図〕
図版87　グリッド出土の縄文土器片（その９）
〔第177図〕
図版88　グリッド出土の縄文土器片（その10）
〔第178図〕
図版89　グリッド出土の縄文土器片（その11）
〔第179図〕
図版90　グリッド出土の縄文土器片（その12）
〔第180図〕
図版91　グリッド出土の縄文土器片（その13）
〔第181図〕
図版92　グリッド出土の縄文土器片（その14）
〔第182図〕
図版93　グリッド出土の縄文土器片（その15）

〔第 183図〕
図版94　縄文時代の石器（その１）１～38
図版95　縄文時代の石器（その２）39～73

谷田神楽場遺跡

図版96　1　遺跡遠景（谷田木曽地遺跡より）
　　2　遺跡近景
　　3　遺跡近景
図版97　1　001号址全景
　　2　001号址土層断面
　　3　001号址土層断面
図版98　1　002・003号址全景
　　2　002号址土層断面
　　3　003号址土層断面
図版99　1　005号住居跡全景
　　2　005号住居跡土層断面
　　3　005号住居跡遺物出土状態
　　4　005号住居跡
　　遺物出土状態（カマド右）
図版100　1　005号住居跡出土遺物
　　2　住居跡外出土遺物（その１）
〔第195図〕
図版101　住居跡外出遺物（その２）
〔第196図〕

第1篇　経過と環境

1章　経過と組織

本報告書に掲載した船尾町田遺跡（CN709)、谷田木曾地遺跡（CN411)、谷田神楽場遺跡（CN504）の各遺跡の調査期間及び組織は以下のとおりである。

(1)昭和53年度調査

谷田木曾地遺跡（1次）

昭和53年9月1日～昭和54年3月31日

調査対象面積 7,400m²

調査部長　西野　元、班長　種田斎吾、調査研究員　菊池真太郎・池田大助

(2)昭和54年度調査

谷田木曾地遺跡（2次）

昭和54年4月1日～昭和55年3月31日

調査対象面積　12,000m²

調査部長　白石竹雄、調査部長補佐　山田友治、班長　古内　茂、調査研究員　菊池真太郎

谷田神楽場遺跡（1次）

昭和55年2月1日～昭和55年3月31日

調査対象面積　6,000m²

調査部長　白石竹雄、調査部長補佐　山田友治、班長　古内　茂、調査研究員　菊池真太郎

(3)昭和55年度調査

谷田木曾地遺跡（3次）

昭和55年4月1日～昭和55年6月30日

調査対象面積　2,500m²

調査部長　白石竹雄、調査部長補佐　栗本佳弘、班長　古内　茂、調査研究員　菊池真太郎・岩井　正

谷田神楽場遺跡（2次）

昭和56年2月1日～昭和56年3月31日

調査対象面積 2,100m²

調査部長　白石竹雄、調査部長補佐　栗本佳弘、班長　古内　茂、調査研究員　菊池真太郎・岡田誠造

船尾町田遺跡

昭和55年7月1日～昭和56年1月31日

調査部長　白石竹雄、調査部長補佐　栗本佳弘、班長　古内　茂、調査研究員　菊池真太郎・岩井　正

(4)昭和56年度調査

谷田木曾地遺跡（4次）

昭和56年4月1日～昭和56年10月12日

昭和57年1月4日～昭和57年1月31日

調査対象面積 8,360m²

調査部長　白石竹雄、調査部長補佐　天野　努、班長　古内　茂、調査研究員　小宮　孟・岩井正

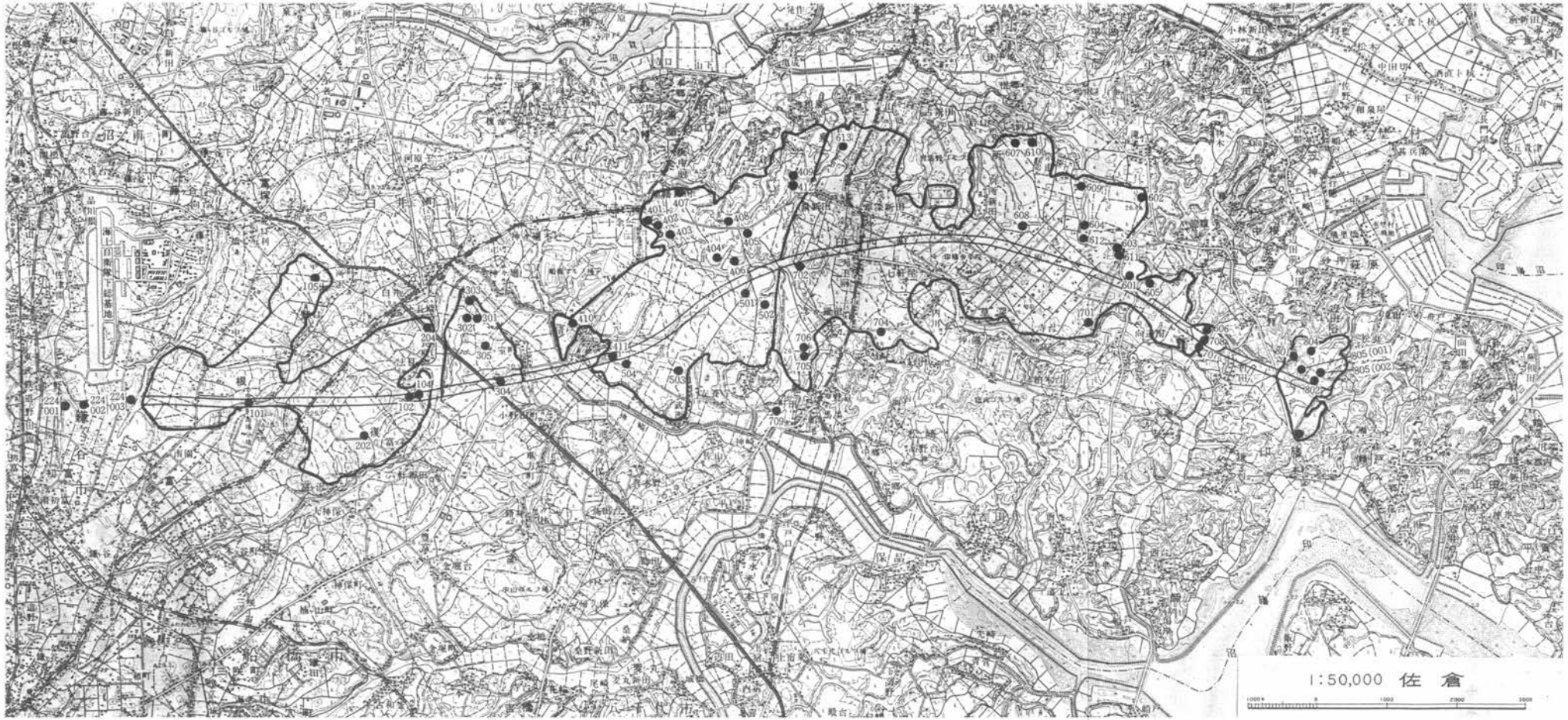
(5)昭和57年度調査

谷田木曾地遺跡（5次）

昭和57年4月1日～昭和57年8月20日

調査対象面積　5,106m²

調査部長　白石竹雄、調査部長補佐　岡川宏道、班長　清藤一順、調査研究員　及川淳一



報告書 Ⅰ. 301～303(小窯)
Ⅱ. 101(根) 304(池谷津) 305(白井先A) 401,403(一本桜) 404(榎峠) 405(大塚前) 601(向原) 602(大門) 603(地国穴台) 801(萩原,柳谷) 802(松虫丑むぐり) 803(瀬戸遠薗) 804(萩原出戸) 805(梵天塚)
Ⅲ. 102(法目) 202(白井第2塚群) 407(木苅峠) 408(大塚塚群) 409(並塚塚群) 501(猿塚) 502(大野庚申塚) 503(北の台) 604(石道谷津) 607(別所大山)
Ⅳ. 406(高根北) 605(五斗蒔) 606(雨古瀬) 608(六角) 701(一ノ作) 702(南西ケ作)
Ⅴ. 402(一本桜) 410(清戸) 609(鳥見神社塚群) 610(宗甫北) 704(結縁寺塚群) 705(船尾白幡) 706(船尾中峠) 707(関所塚群)
Ⅵ. 204(復山谷) Ⅰ次～Ⅲ次 104(白井第1)
Ⅶ. 204(復山谷) Ⅳ次,Ⅴ次
本書. 709(船尾町田) 411(谷田木曽地) 504(谷田神楽場)
未報告. 708(角田台大塚) 105(白井根塚群) 612(石頭第2) 412(大木戸根13塚) 613(泉北側第2) 224-001(五本松) 224-002(上葉貫台) 224-003(落山)

第1図 千葉ニュータウン関係遺跡分布図

２章　遺跡の位置と環境〔第１図〕

船尾町田遺跡・谷田木曾地遺跡・谷田神楽場遺跡は、何れも神崎川流域の北側台地上平坦部に立地する。

船尾町田遺跡は、国鉄成田線木下駅より通称木下街道を千葉方面へ６ km 程南下し、船尾交差点を船橋方面へ右折して0.5km 程行った右手の台地上、平坦部に立地する。この台地は、神崎川支流により開析され、南へ樹枝状に張り出しており、その西側部分が、北側から入り込んでくる浅い谷により一旦馬の背状になって西方へ広がっている。そのため、この部分は、一見独立した狭い平坦部を構成しているようにみえる。遺跡は、この平坦部の西端に位置し、標高約22m を測る。

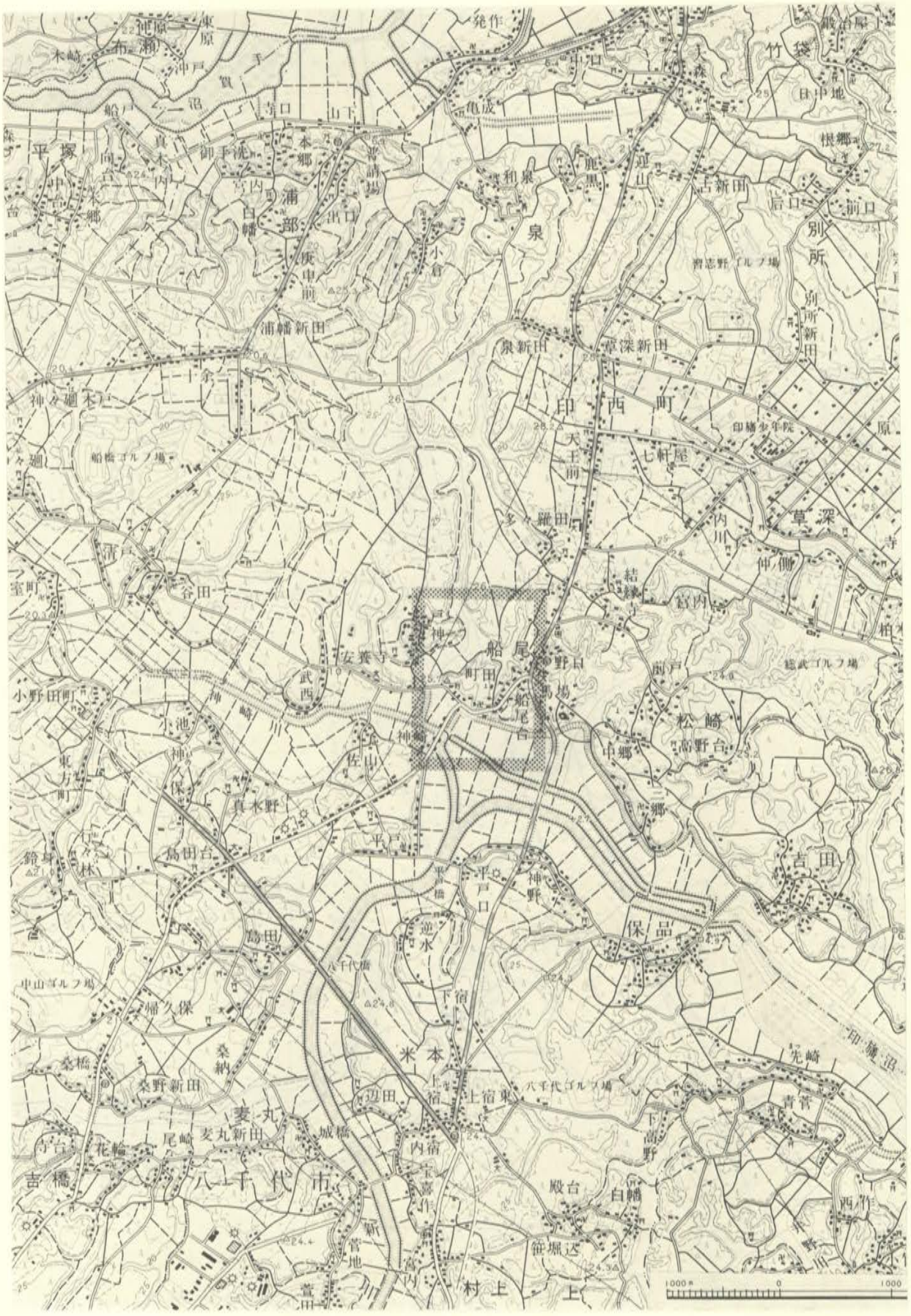
谷田神楽場遺跡は、船尾町田遺跡下を通過し、木下街道から小室方面へ分かれる町道へ右折して、2.5km 程進んだ右手の平坦部に位置する。さらに、同じ町道を小室方面へ約0.4km 進むと谷田木曾地遺跡であり、このように、両遺跡は同じ台地上に隣接して立地する。この台地は、船橋ゴルフ場付近を基部として、南側へ扇状に張り出しており、標高約20m で安定した広い平坦部となっている。谷田神楽場遺跡は、この平坦部中央やや西寄りに位置し、谷田木曾地遺跡は、その西南方向に位置している。

３遺跡が立地する各台地上からは、神崎川を眼下に望見することができる。この神崎川は、船橋市三咲町付近などを源とし、一旦白井町法目を経て下長殿へ向かって北上し、神々廻付近で南東方向へ流れを変え、谷田・印西町町田を経て印旛村吉田付近で印旛沼へ注いでいる。

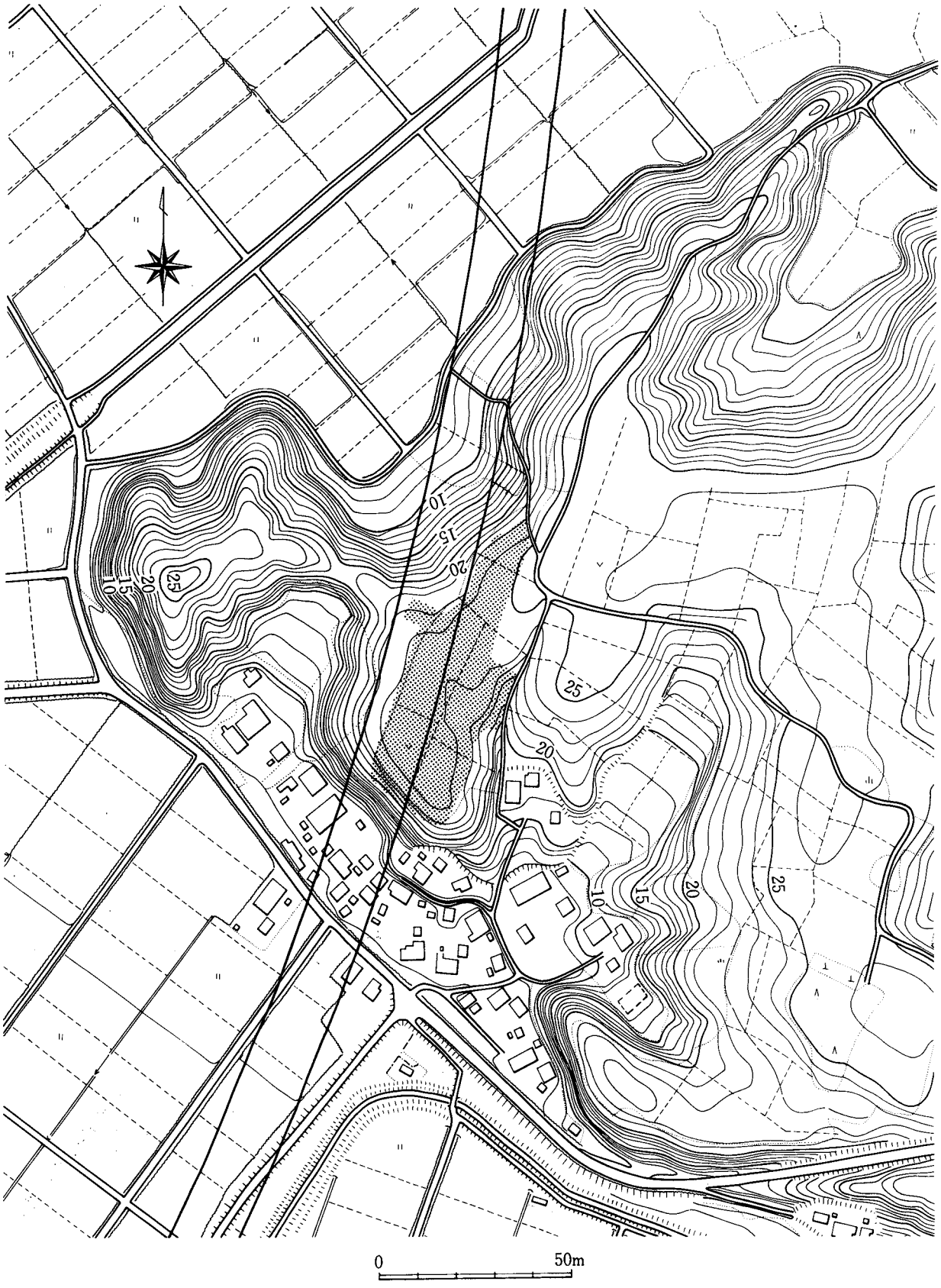
この神崎川流域には、遺跡が多数分布していることが知られており、すでに発掘調査が行なわれ、成果が報告されている遺跡も多い。千葉ニュータウン関係遺跡〔第１図〕のうち、すでに報告されたものを列挙すると、まず上流域左岸の台地上では、白井第２塚群（CN202）や縄文時代土器の包蔵地である法目（ほうめ）遺跡（CN102）・白井第１遺跡（CN104）などが分布し、やや下った所には、先土器時代から古墳時代にかけての複合遺跡として、多くの成果を得た復山谷（ふくさんや）遺跡（CN204）が位置している。中流域では、流れが変わる付近の右岸台地上に、古墳時代の大集落を構成する小室遺跡（CN301～303）や、縄文時代土器の包蔵地である白井先Ａ遺跡（CN305）が点在し、そのやや下流右岸台地上には、縄文時代集落跡の池谷津遺跡（CN304）が立地する。また、その対岸台地上には、縄文時代土器の包蔵地である清戸（きよと）遺跡（CN410）が位置する。さらに、清戸遺跡のやや下流には、本書所収の谷田木曾地遺跡・谷田神楽場遺跡が位置し、同じ台地上の南東約１ km に、縄文時代と古墳時代から平安時代にかけての集落跡を検出した北の台遺跡（CN503）が分布する。下流域では、本書第II篇所収の船尾町田遺跡が、左岸台地上に立地する。また、その北側やや奥まった所には、先土器時代から平安時代にかけての複合遺跡である船尾白幡遺跡（CN705）や、塚１基の調査を行った船尾中峠（なかびよう）遺跡（CN706）が分布している。

第2篇　船尾町田遺跡

（CN709）



第２図　船尾町田遺跡周辺地形図（１:50000）



第3図　船尾町田遺跡地形図（1/1500）

１章　調査の概要

基準点測量によって得られた基本杭により、一辺40m の大グリッドを設定した〔第５図〕。大グリッドは、第５図のとおり南東部をＡとし、北へ向ってＢ、Ｃと呼称することとした。一辺40m の大グリッドは、表土除去作業等に際して遺物の出土地点をより詳細に表わすために、さらに一辺４ｍの最小単位のグリッドに分け、それぞれの呼称は第４図にＡ大グリッドを例として提示した。

前述のように基本杭は40m 間隔であるが、調査の必要に応じ適宜補助杭を設け、遺構の実測、遺物出土地点の実測等に利用した。補助杭は小グリッドの北東にそのグリッドと同じ名称を付して設けた。

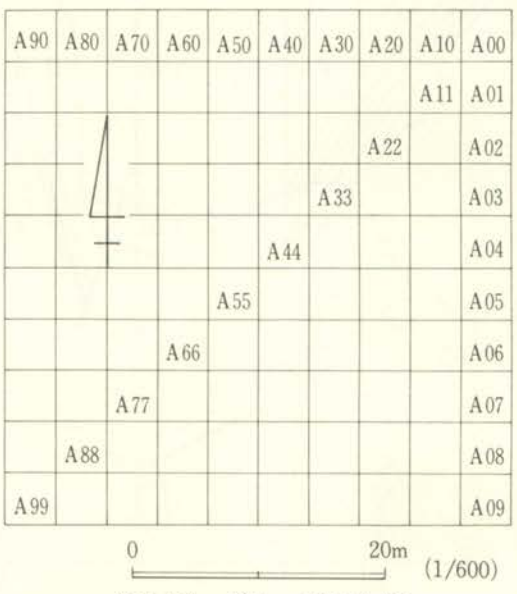
発掘作業はＦグリッドよりトレンチ掘りを開始した。トレンチは幅１ｍで南北方向へ３ｍの間隔で配し、遺構確認面に至るまで人力で掘り下げる方法をとった。トレンチ発掘の際包含層中より出土した遺物は、小片に関しては出土地点の最小単位のグリッド名を付して取り上げ、重要と思われる遺物に関しては出土地点を実測・撮影して記録した。

トレンチ発掘はＦ→Ｇ→Ｈ→Ｄグリッドの順で上記手順に従って行なった。

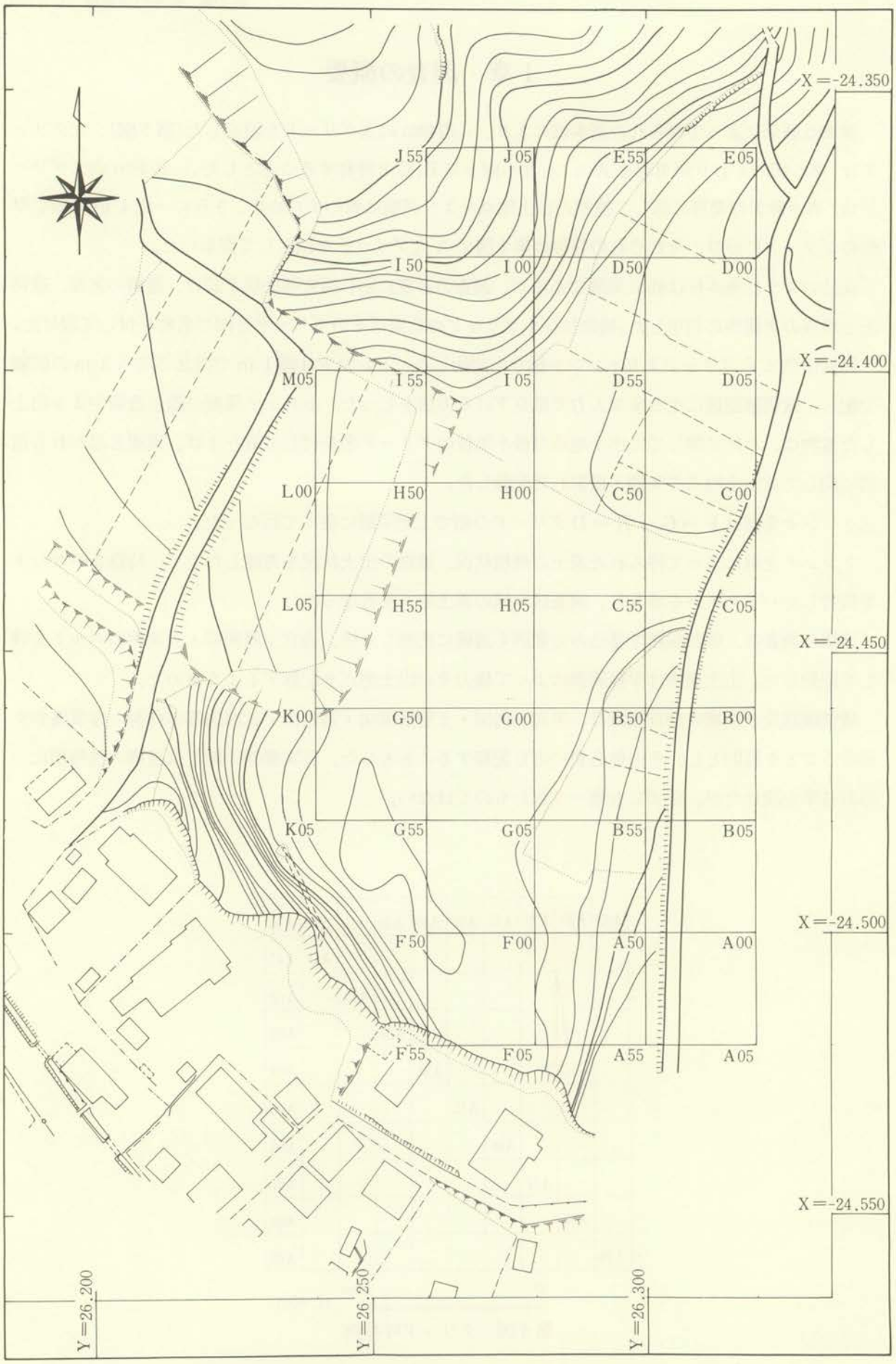
トレンチ発掘によって得られた表土の堆積状況、遺物の出土状況を考慮した上で、特殊なバケットを装着したバックホーを導入し、調査区全域の表土除去を行なった。

遺構の調査は、確認段階で落込みの範囲を適確に把握した後、適宜土層観察・実測用のベルトを残して開始した。出土遺物は平板実測によって極力その出土地点を記録するよう努めた。

遺構確認及び遺構の調査記録は、平面実測図・土層断面図・遺物出土状況図等の作図と写真撮影を行なうことを原則とし、その他必要に応じ記録することとした。各実測図の縮尺は遺構の性格別に一応の基準を設けたが、必ずしも統一されたものではない。



第４図　グリッド呼称例



第５図　船尾町田遺跡グリッド配置図（1/1000）

２章　古墳の調査

船尾町田遺跡の調査の結果、前方後円墳１基（２号墳）、円墳―未完掘―２基（１・３号墳）を確認できた。

２号墳は周溝の完掘によって、その平面規模を明瞭にできたが、１・３号墳は周溝の1/2～1/3の部分が調査区域外に含まれていたため周溝の完掘は為し得なかった。しかし調査の区域内で明らかにされた周溝の形態から推察すれば、１・３号墳ともに円墳として相違なかろう。

現況で、その所在が明らかだったのは１号墳のみであり、２・３号墳は表土除去後に確認できた円形に巡る溝（周溝）の形態と、その内側に検出した主体部と考えられる施設とによって古墳の所在を知ることができた。３基の古墳はいずれも墳丘が削平され、現地形から古墳の所在を知る術はなかったが、１号墳だけは石棺の残存か所が認められたことでその所在を知ることができた。

本遺跡の古墳はいずれも表土除去後、直ちに周溝の発掘に着手することができたが、墳丘が残存しないため旧表土の位置、墳丘の構築方法、墳丘の規模等は知ることができなかった。

船尾町田１号墳〔第６～９図・図版３・27―１〕

位置と景観

神崎川を眼下に見下す台地の西側縁辺部に位置し、調査区の中央西寄りに所在する。東方20mに３号墳、南方40mに２号墳がある。

現況では樹木の茂る中に小規模な盛土が認められる程度であった。

調査の方法

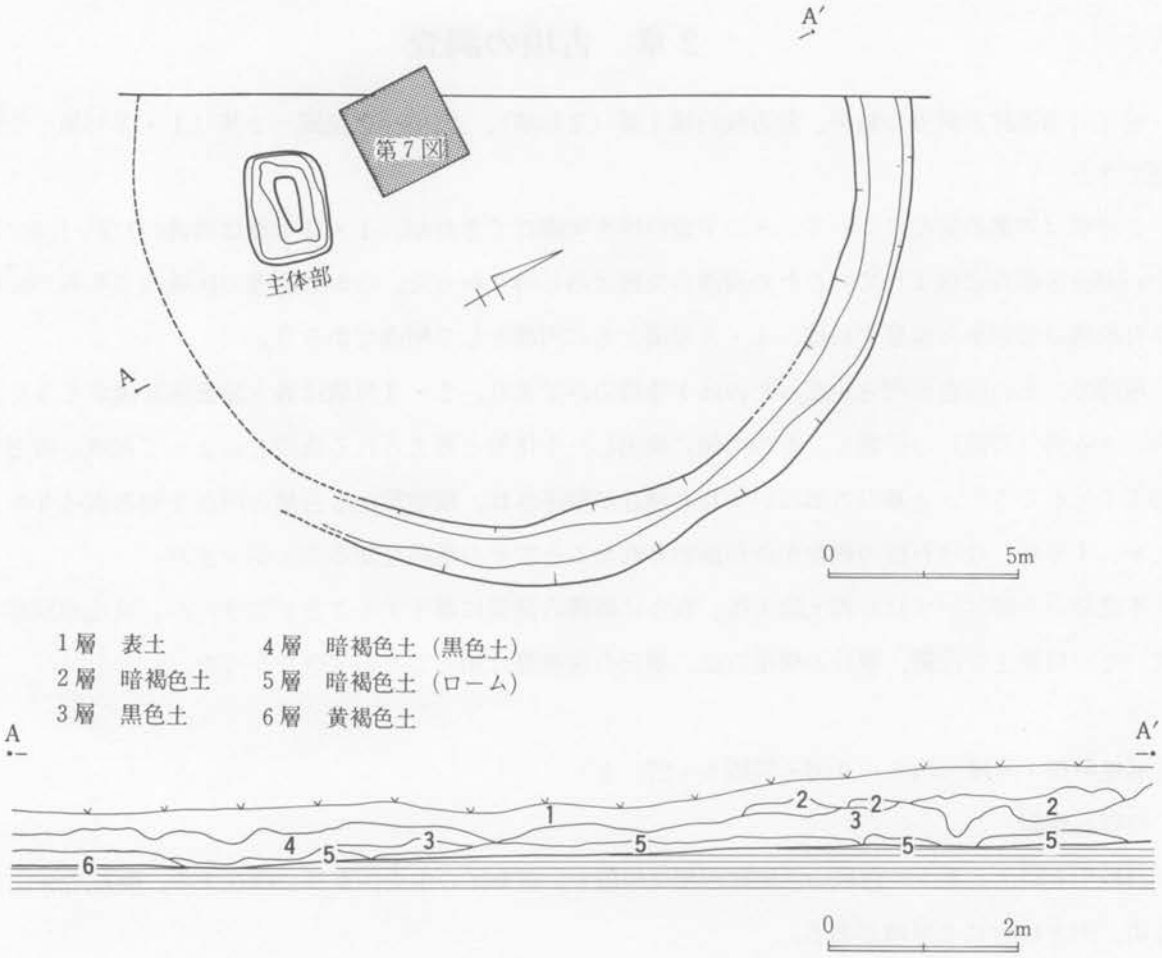
調査前より所在が明らかであったので、調査に先立ち土地所有者より事情聴取を行なった。

その結果、１号墳は大正時代にその主体部が完全に破壊、解体され副葬品も盗掘された事実を知った。

後世になって“祟り”を怖れた当事者は、解体、搬出した石材の一部を再び土壙内に組み直し内部に遺骨を納めて埋め戻した。さらに埋め戻した土壙の上に余った石材を組み立て盛土し、現在に至ったということである。

従って、主体部に関しては以後の調査方法もこうした事情を前提に進めることとし、後世の所産である石組についての報告は省略する。

現地表面に構築された石組を撤去後、土壙状の落ち込みを確認した。念のため長軸方向と、これと直交する十文字の土層観察用ベルトを設定し、土壙内の調査を行なった。土壙内からは、新たな石組を検出したがこれも上部の石組同様、後世の所産であるので詳細は省略するが、参考資料として、図版３に掲載した。この石組を撤去して土壙内の裏込めの実測を行なった。土壙内を完掘した後、土壙の平面図・周溝の平面図を作成して調査を終了した。



第6図　1号墳実測図（1/200・1/80）

周溝と古墳の規模

周溝は全体の1/2程度が調査区域外にあり、また調査区内の南西部分も削平によって検出できなかったため、復原できた部分は全体の1/3程度であった。掘込み上端線での幅は1.5～2.0mを測りほぼ一定する。深さは北側で50cm、南へ向って徐々に深さを減じ、掘込みの形状は浅いU字状を呈する。

周溝の内側上端線を基準として径19mの円墳である。

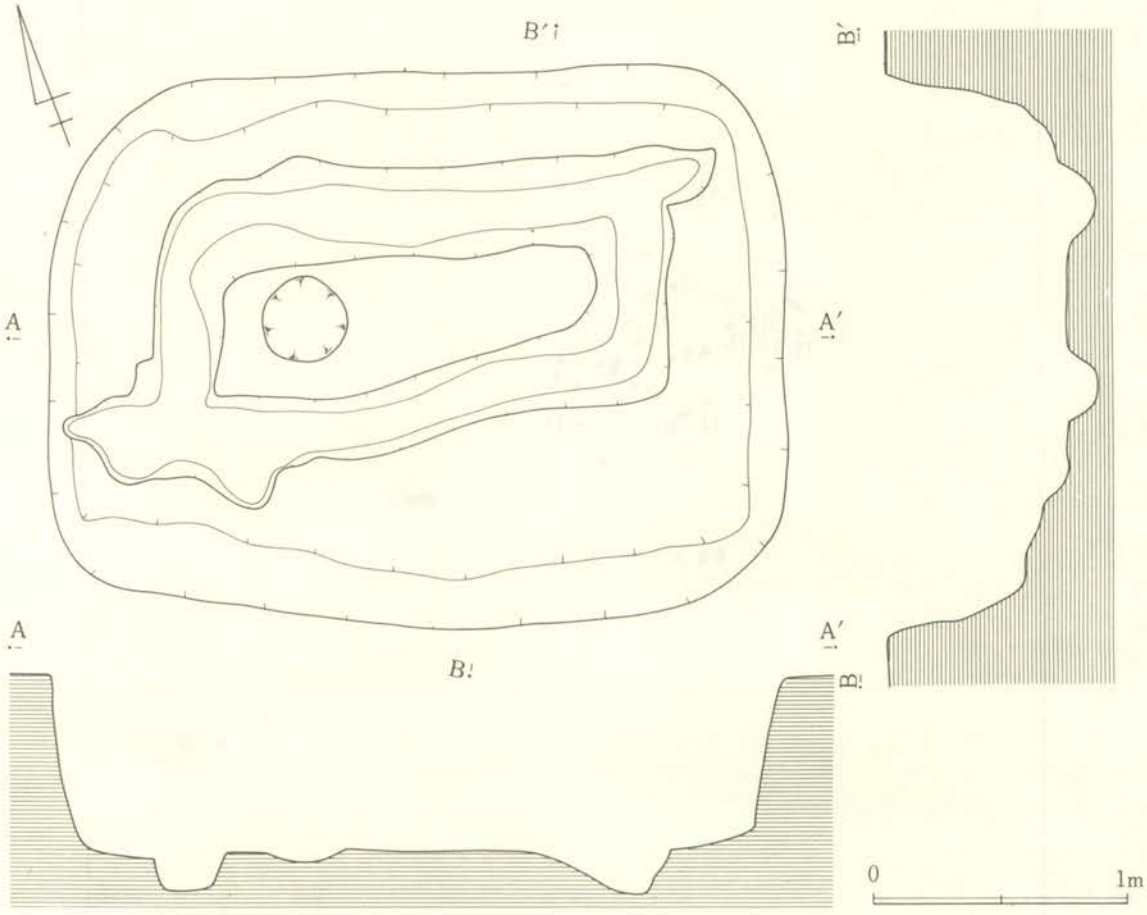
主体部

墳丘の中心から南へ6 m、やや西寄りに位置し、その形態は土壙内に構築された箱式石棺であろうと考える。

前述したとおり、石棺は破壊された後に再構築されたため、構築時の形態・規模は不明であるが、残存した石材の形状と数量から推察すれば、板状の石を使用した箱式石棺と考えたい。

土壙は掘込み上端線で長軸2.9m、短軸2.1m、深さ70cmを測る隅丸の長方形である。土壙底にはさらに幅25～35cm、深さ12～15cmの浅いU字状の溝が長方形状に巡る。板状の石材を立てた基底部であろう。溝の内側―石棺の内側―には敷石はなく平坦に整地しただけである。西端部に径30cm、深さ5 cmの円形の凹みを掘り込んでいる。

長軸の方向はＮ－70°－Ｗを指す。



第７図　１号墳主体部実測図（1/30）

土壙内の調査中、多量の粘土塊を検出したが、盗掘によって土壙内は完全に掘り下げられたことから、土層断面図・平面図からは省いた。おそらく石棺周囲の裏込めに用いられたものであろう。

遺物の出土状態

主体部

盗掘により主体部内からの出土遺物はなかった。主体部の北約３ｍの地点から、盗掘時に搬出されたと思われる鉄製品片、鉄鏃、人骨片、歯等が集中して出土した。原位置を留めるものではないが、これも参考資料として掲載することとした。

周溝内

周溝内からは土器小片の出土が少量あったが、実測に耐え得るものはなかった。

出土遺物

実測し得たものは全て鉄製品である。いずれも遺存度が悪く、使途の明らかなものは８・９・10の鉄鏃だけで、他は小片あるいは断片である。（単位はｍｍ）

１．　鉄製品小片。断面の観察から刀身の一部とも考えられるが、断定し難い。現存長105、身幅29、

棟幅７。

第８図　１号墳遺物出土状態（1/20）

２．　鉄製品小片。使途不明。現存長95、断面幅20、厚５。

３．　鉄製品小片。刀子の茎であろうか。現存長83、断面幅13、厚５。

４．　鉄製品小片。使途不明。現存長40、断面幅19、厚３。

５．　鉄製品小片。使途不明。現存長44、断面幅21、厚４。

６．　鉄製品小片。使途不明。現存長35、断面幅10、厚４。

７．　鉄製品小片。使途不明。偏平な板状の鉄製品であるが、遺存が悪く断面の実測はできなかった。現存長95、幅30。

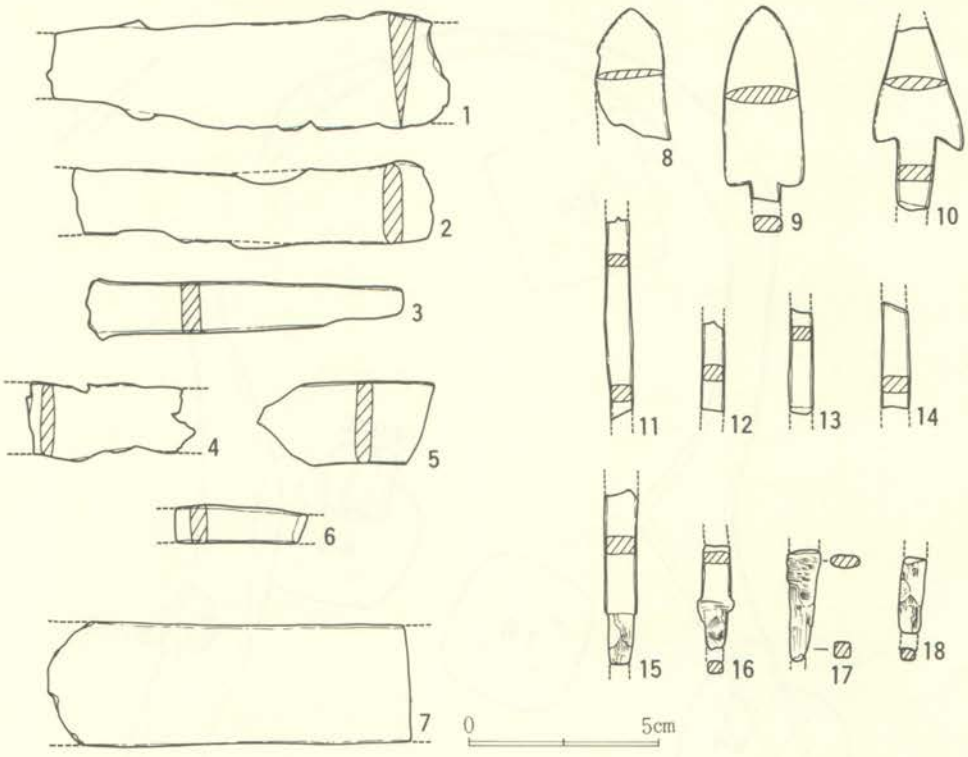
８．　鉄鏃。下部1/3を欠損する。有茎の長三角形式であろう。現存長35、身幅18、厚２。

９．　鉄鏃。茎の下端部を欠損する。有茎の長三角形式であろう。現存長50、身幅20、厚５。茎幅８、厚４。

10．　鉄鏃。茎の下端部と鏃身の先端部を欠く。逆刺をもつ有茎の長三角形式である。現存長48。身幅24、厚４。茎幅19、厚４。

11～14．鉄鏃の箆被片であろう。

15～18．鉄鏃の茎の一部であろう。いずれも木質部が若干残存する。



第９図　１号墳出土遺物実測図（1/2）

まとめ

１．台地の西側縁辺部に所在する。

２．直径約19m の円墳である。墳丘は削平され残存しない。

３．主体部は墳丘の中心から南へ６ m に位置し、土壙内に構築された箱式石棺と考える。

４．主体部外から、鉄鏃・鉄製品小片等が出土した。

船尾町田２号墳〔第10～15図・図版４・27－２、28・29〕

位置と景観

調査区の南端、台地の南側縁辺部に所在する。１号墳の南50m、３号墳の南西60m に位置する。

調査前にはその所在を知ることができなかったが、表土除去によって検出した溝の形状により前方後円墳である事が確認された。耕作による削平が著しく周溝の一部は消滅しており、残存部も掘込みは浅く、特に外側の立上がりは不明瞭なか所が多かった。

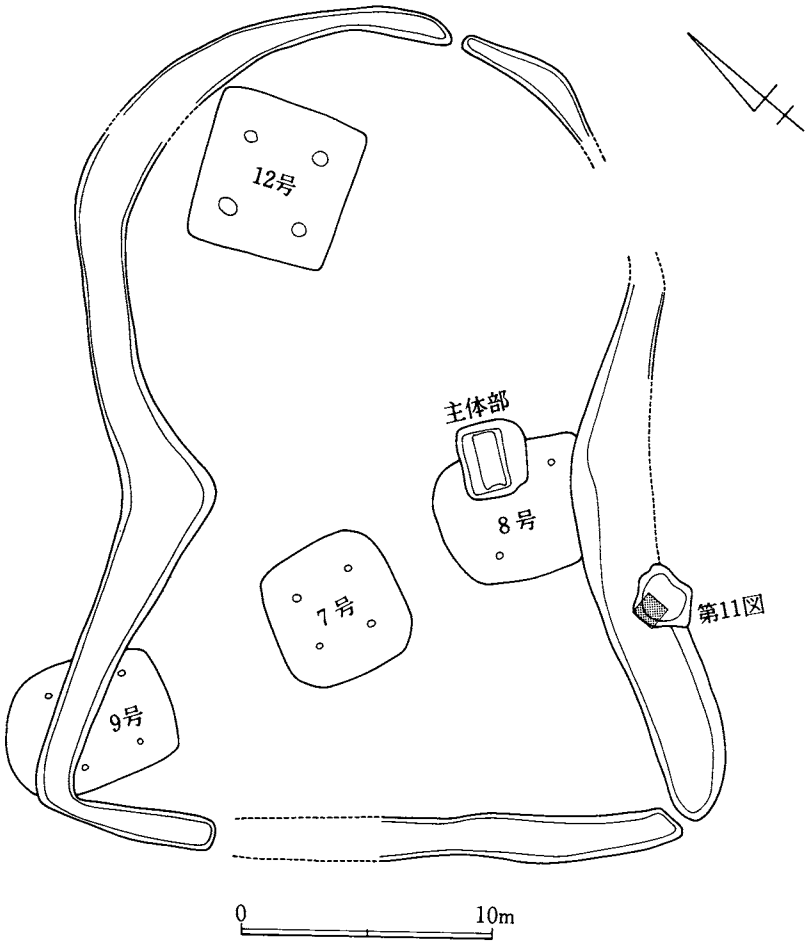
８号址・９号住居跡は２号墳周溝によって一部を削平されており、墳丘下には７・12号住居跡を検出した。

調査の方法

表土除去によって確認できた周溝の全掘から開始し、墳形の復原作業を行なった。

周溝は遺存状態が悪く、しかも削平されたか所が多かったが、幸い内側の上端線は良好な状態であっ

たため墳形の復原は容易であった。



第10図　2号墳実測図（1/300）

周溝の確認段階では、主体部の所在は不明であったが、8号住居跡の調査に伴ない2号墳主体部はこれを切って構築されたことが判明した。主体部は長軸方向と短軸方向に土層観察用ベルトを設け調査を進めた。

周溝と古墳の規模

周溝は前方部と後円部でそれぞれに一部消滅か所があるがほぼ全周する。削平されたことで上端線の幅は1.0～3.0m、深さも30～50cmと一定しない。

前方部の南隅部と後円部の東にブリッジ状のか所が認められる。2号墳の占地か所を考慮すると、西側からの封土の搬入は困難であり東側の台地平坦部より土砂を採取搬入したと考えるのが妥当であろう。従って前記のブリッジ状のか所は墳丘構築時の封土搬入路と考えてよいだろう。

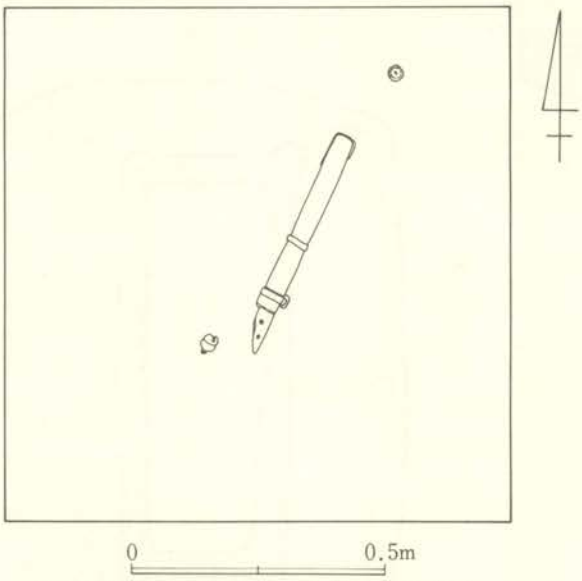
2号墳の規模は周溝内側上端線をもとに計測した結果以下の通りである。

全長　30m。前方部幅　24m。後円部径　19m。くびれ部幅　14m。主軸はN—49°—Eを指す。

主体部

前方部から後円部に向って、右側のくびれ部の土壙内に構築された箱式石棺と考える。

土壙の調査中、覆土中から多量の石材片が出土したが、完掘の結果、石棺は遺存しなかった。



第11図　２号墳遺物出土状態（1/15）

土壙の実測図からも理解できるように東側の掘込みか所が大きく削り取られ、しかも覆土の土層観察からも一部を除いて攪乱が認められた。以上の状況から土壙は盗掘され石棺は完全に破壊されてしまったようである。

土壙底は平坦に整地され、１号墳同様幅10～20cm、深さ10cm の溝が長方形状に巡る。この土壙内の溝は後述する３号墳の土壙内にも認められた。おそらく、板状の石材を立てて石棺を構築する際の基底部に当たる掘込みであろう。

土壙各部は遺存状態の良い西側及び南・北側を基に復原して計測した。計測値は以下のとおりである。

上端線長軸3.1m、短軸2.0m。掘込みの深さ1.2m。長軸の方向は N－38°－E を指す。

遺物の出土状態

主体部内

主体部内からは切子玉、管玉等を検出したが、いずれも攪乱された覆土中からのもので原位置を留めるとは考えられず、出土状態は省略した。他に鉄製品の小片数点を検出したが、いずれも遺存は悪く実測に耐えるものではなかった。

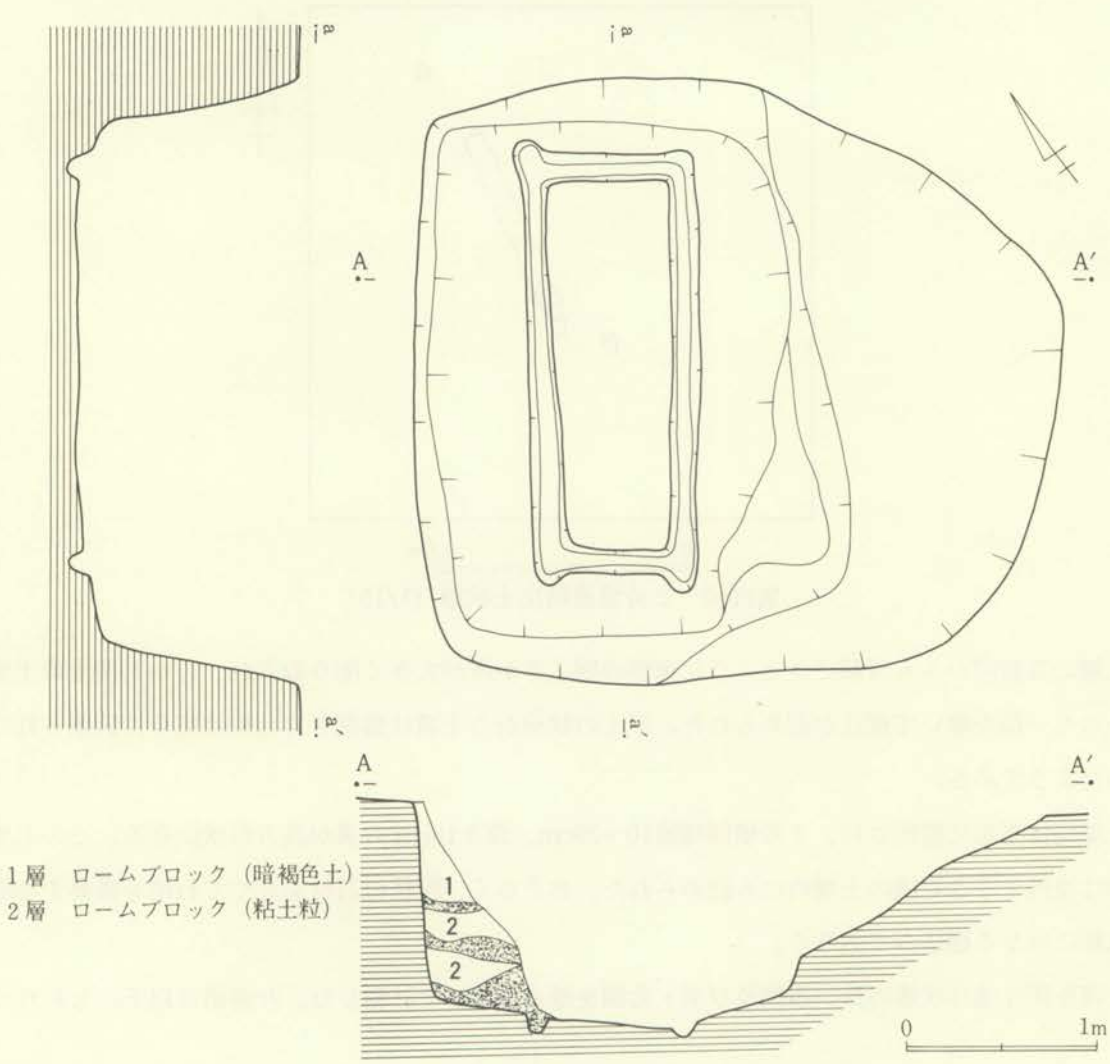
周溝内

前方部の東側周溝底から直刀１振と鈴２点を検出した。土器類はいずれも覆土中から出土したものである。

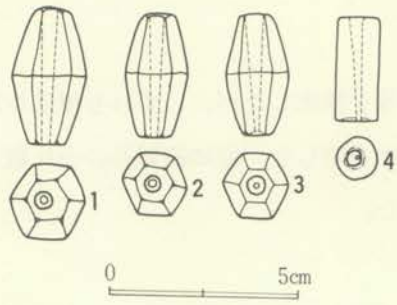
直刀は鋒を北東方向に向け、刀部は西側を向いた出土状態だった。鋒から15cm 離れて小振りの鈴、茎の西脇10cm から大振りの鈴が出土した。

本来、被葬者の副葬品として主体部内に納められるべきものが、主体部の南８ m の周溝底部から出土したことは不自然であり、副葬時の原位置を留めるものとは考えられない。

主体部の盗掘者により搬出され、周溝内へ廃棄された結果ではないだろうか。



第12図　2号墳主体部実測図（1/40）



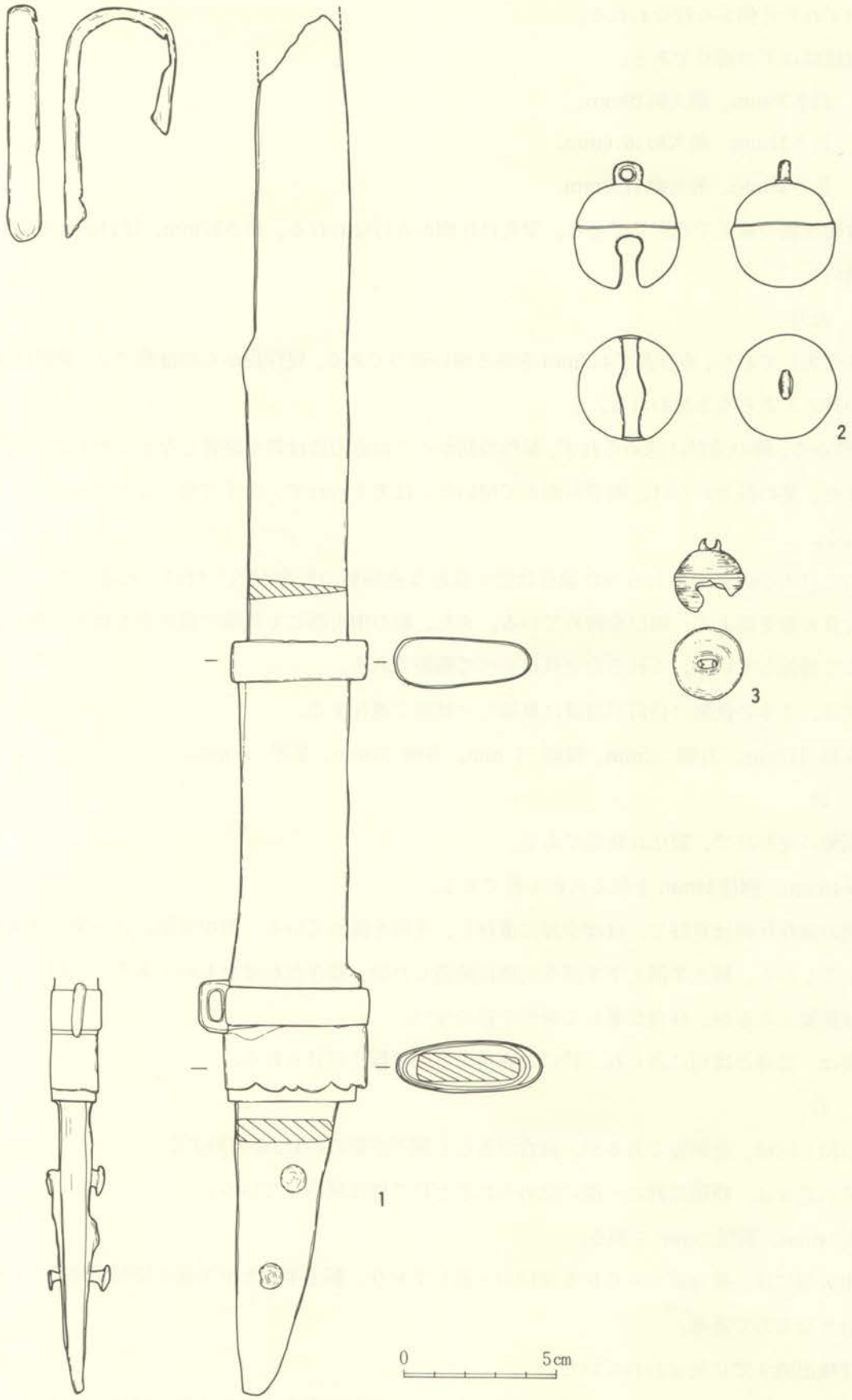
第13図　2号墳主体部内出土遺物実測図（1/2）

出土遺物

主体部内

土壙内は前述のとおり攪乱を受けていたが、切子玉3個、管玉1個を検出した。

1～3は水晶製の切子玉でいずれも完形品である。横断面は六角形を呈し、中央部に稜が巡る。穿



第14図　２号墳周溝内出土遺物実測図（1/2）

孔はいずれも片側から行なわれる。

計量値は以下の通りである。

1．　長さ35mm、最大幅19mm。

2．　長さ31mm、最大幅16.6mm。

3．　長さ35mm、最大幅17.2mm。

4は碧玉製の管玉で完形品である。穿孔は片側から行なわれる。長さ27mm、径11mmを測る。

周溝内

1．　直刀

鋒を欠失しており、現存長で443mmを測る短い直刀である。現存長からの推測では、原形は500mm前後の長さであろうと思われる。

検出時から、鍔の遺存は認められず、製作当初からこの直刀には鍔を装着しなかったものと考えられる。また、茎の長さからは、両手を添えて用いたとは考えられず、片手で用いる刀であろうことが推測される。

鞘口には大小の弧をあしらった遺存状態の良好な金銅製の板金が取り付けられる。さらに佩環を持った責め金を添えて、鞘口を締めている。また、鞘の中央部にも佩環付責め金をはめ、鞘尻は石突をはめて補強している。これらの金具はすべて銅製である。

茎には、2本の鉄製の目釘が目貫に貫通した状態で遺存する。

現存長 443mm。身幅 32mm。棟幅 7 mm。茎幅 32mm。茎厚 7 mm。

2．　鈴

金銅製の完形品で、製法は鋳造である。

現長40mm、胴径34mmを測る大形の鈴である。

金銅の遺存状態は良好で、ほぼ全面に遺存し、光沢を保っている。胴中央部には一条の沈線が巡っていることから、胴上半部と下半部を別個に鋳造した後、接ぎ合わせたものであろう。封じ込められた丸は鉄製であるが、腐食が著しく原形を留めない。

鈕環は、鈴身とは別に造られ、鈴口と直角の方向に取り付けられる。

3．　鈴

2の鈴と同様、金銅製であるが、腐食が著しく胴下半部の約1/2を欠損する。

金箔の遺存は、鈕環周囲の一部に認められるだけで他は剝落している。

現高24mm、胴径23mmを測る。

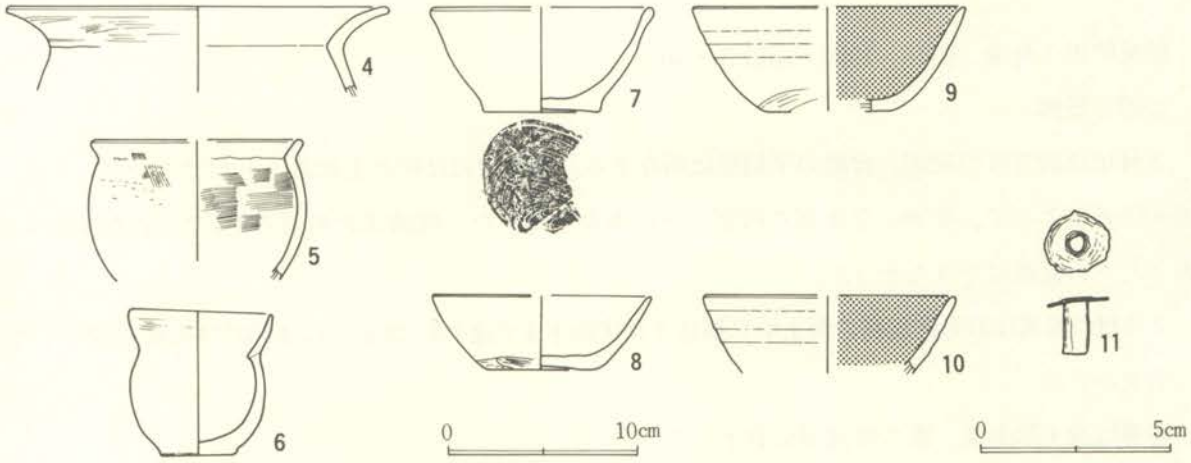
胴中央部には、接合痕とみられる部位が一巡しており、胴上半部と下半部を別個に鋳造した後、接ぎ合わせたものである。

丸は検出時すでに失なわれていた。

鈕環は頂部を欠損している。鈴身とは別に造られ、鈴口と直角の方向に取り付けられる。

4．　甕の口縁部小片である。口径は推測値で200mm。口縁部は内外面共ヨコナデ、胴部は内外面共

ナデを施す。内面の口縁部下に明瞭な稜をもつ。



第15図　２号墳周溝内出土遺物実測図（1/2・1/4）

５．小形甕の口縁部小片である。口径は推測値で106mm。口縁部は内外面共にヨコナデ。胴部外面は、一部に刷毛目を残すナデ、内面は全体に斑点状の剝離があるが、一部に刷毛目を残す。

６．小形甕。完形。器高73～76mm、口径72mm、底径38mm。手捏ね成形によると思われる。口縁部は内外面共にヨコナデ、胴部は内外面共にヘラナデを施す。口縁部と胴部の境に接合痕を残す。

７．坏。全体の1/3。器高48mm、口径114mm、底径60mm。ロクロ成形である。体部は内外面共、丁寧な回転ナデが施され、内面底部には水引痕を残す。外面の底部は回転糸切り痕のまま未調整である。

８．坏。全体の約1/3。器高48mm、口径114mm、底径60mm。ロクロ成形である。体部は内外面共に回転ナデ。内面の底部には水引痕を残す。外面の体下部と底部は静止ヘラ削りが施される。

９．内黒坏。全体の約1/4。計測値はいずれも推測値で、器高55mm、口径140mm、底径66mm。ロクロ成形。内面は全面ヘラミガキ。体部の外面は水引後、雑な回転ナデのため一部に水引痕を残す。体下部は静止ヘラ削り、底部は回転ヘラ削りを施す。

10．内黒坏。口縁部1/4。推定口径130mm。ロクロ成形。内全面ヘラミガキ。外面は水引痕のまま未調整である。

まとめ

１．調査区の南端、台地の南側縁辺部に所在する。

２．全長30m の前方後円墳である。前方部幅24m、後円部径19m、くびれ部幅14m を測る。主軸はＮ－49°－Ｅを指す。

３．主体部は東側のくびれ部に位置し、土壙内に構築された箱式石棺であろう。

4．　主体部内から水晶製切子玉３個、碧玉製管玉１個が出土した。周溝内からは直刀１振、金銅製の鈴２個、小形甕、坏が出土した。

船尾町田３号墳〔第16～19図・図版５・30〕

位置と景観

３号墳は調査区の東端、台地の平坦部に所在する。調査前には所在を知ることができなかったが、表土除去によって、周溝と主体部を確認しその所在を知った。周溝は北東部の約1/3が調査区域外にあったため完掘はできなかった。

３号墳の周溝は37号住居跡の覆土中に掘込まれ床面下まで達する。墳丘下には46号住居跡を検出した。

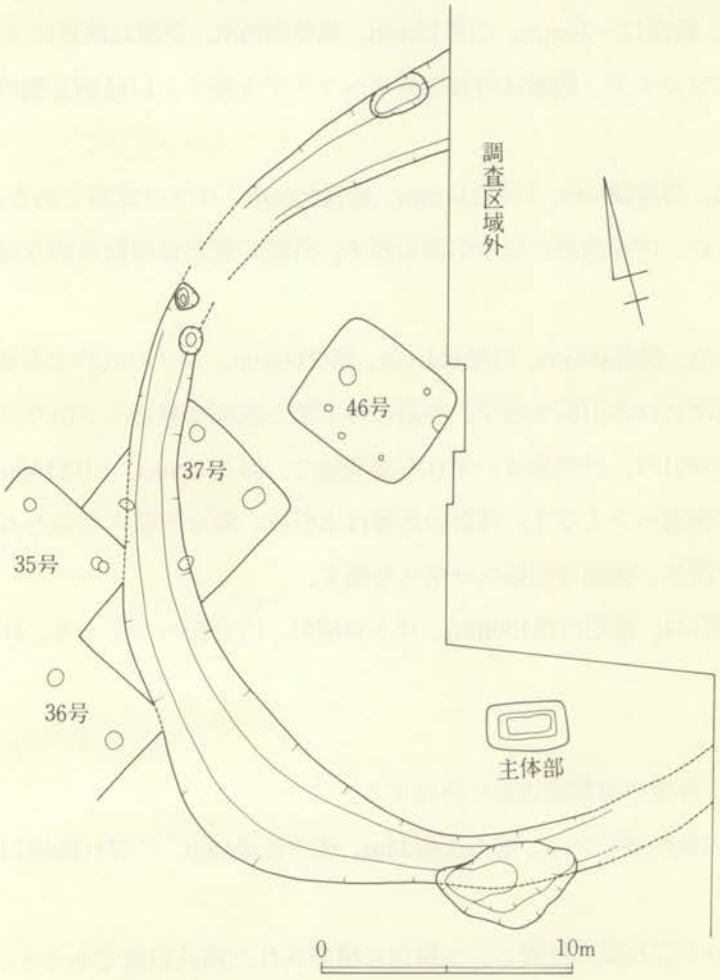
調査の方法

周溝は表土除去後、直ちに発掘に着手した。

主体部は確認面において隅丸の長方形を呈しており、調査に先立ち長軸方向とこれに直交する土層観察用のベルトを設定し、主体部の調査に着手した。

周溝と古墳の規模

周溝は北東側の一部と南側で耕作時の削平によって消滅したか所があり、しかも外側の立上りが不明瞭であったため、完掘後の形状は精度を欠くかとも思われる。しかし、内側上端線の復原は遺存状



第16図　３号墳実測図（1/300）

態が良く、容易に調査を進められた。完掘の結果は、周溝内側上端線の計測によって径26m の円墳である。

周溝の幅は２～５ m、深さは30cm 程度である。

北及び北東部にピット状の掘込みを検出したが、いずれも近世の所産であり、３号墳との関連は認められない。

主体部

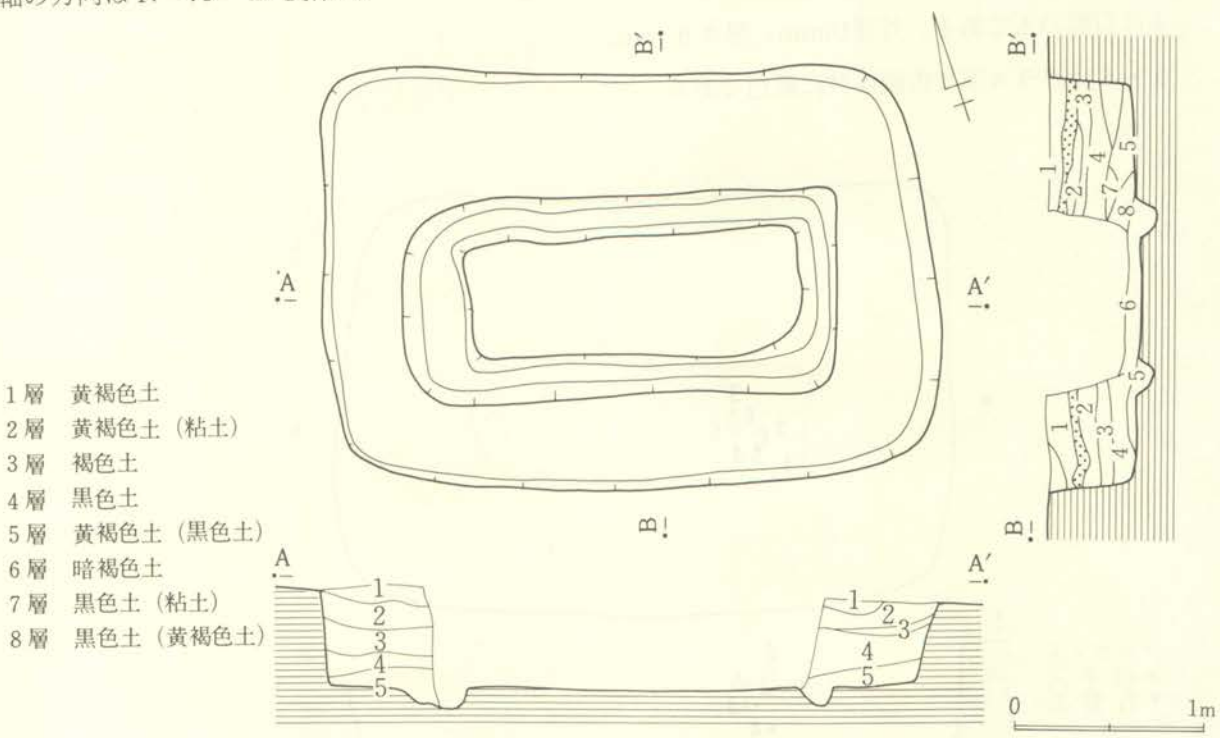
墳丘の中心から南へ９ m、周溝の内側４ m に位置する。

土壙内の調査中、少量ではあるが石材片の出土があり石棺等の遺存が予想されたが、完掘の結果、石棺は遺存しなかった。

また土層断面の観察からも、特に中央部は攪乱が著しく後述する遺物の出土状況からも明らかに盗掘された様相を呈していた。

幸い石棺周囲の裏込めが攪乱を免がれ良好な状態で遺存したので、実測図を作成することができた。

土壙は上端線で長軸3.2m、短軸2.15m、深さ30cm を測り、やや形の歪んだ隅丸の長方形を呈す。長軸の方向はＮ－78°－Ｅを指す。



第17図　３号墳主体部実測図（1/40）

土壙底は幅20～35cm、深さ10cm の溝が方形に巡り、１・２号墳主体部と同形態であった。

従って、３号墳主体部も土壙内に構築された箱式石棺であろうと考える。

遺物の出土状態

主体部内

切子玉、ガラス玉、ガラス小玉を検出した。いずれも土壙覆土中から出土したもので、原位置を留

めるものではないが、出土状況図を掲載した。平面的な出土位置は土壙底の溝の内側で西側に集中しているが、垂直分布の観察と併せ考えると出土状態は不自然である。

周溝内

覆土中からの遺物出土総量は少なく、また実測に耐え得るものも少なかった。坏、台付甕脚部等が出土したが、いずれも小片である。

出土遺物

主体部内

主体部内からは切子玉３個、ガラス玉２個、石製玉１個、ガラス小玉23個を検出した。

１～３は水晶製の切子玉でいずれも完形品である。横断面は六角形を呈し、中央に稜が巡る。穿孔は全て片側から行なわれている。

計測値は以下のとおりである。

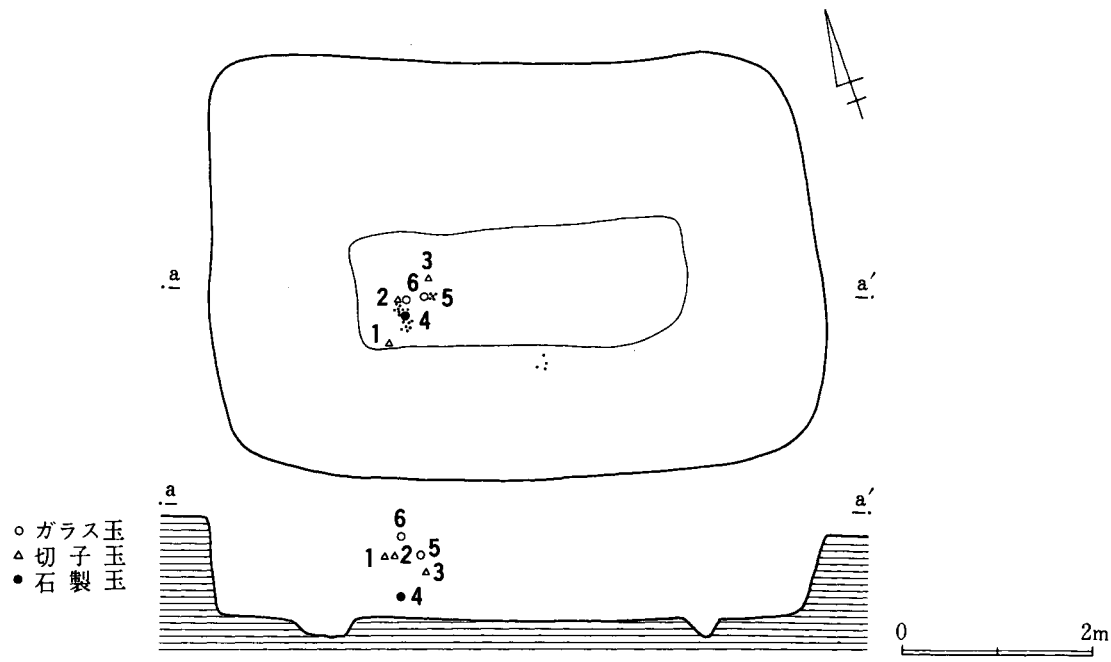
１．　長さ23mm、最大幅18mm。

２．　長さ19mm、最大幅15mm。

３．　長さ22mm、最大幅15mm。

４は石製の玉である。外径10mm、厚さ９ mm。

５・６はガラス玉で色調は共に藍色である。



第18図　３号墳主体部遺物出土状態（1/40）

５は偏平な形をしており上下面に平坦部をもつ。径７ mm、厚さ５ mm を測る。６は表面に気泡がみられざらついている。６も上下面は平坦面をもつ。外径７ mm、厚さ６ mm を測る。

ガラス小玉の計測値は表１のとおりである。

周溝内

表１　船尾町田３号墳ガラス小玉計測値一覧　（単位mm）

遺物番号	外径	厚	色調	遺物番号	外径	厚	色調	遺物番号	外径	厚	色調
0044	4.0	3.0	淡藍色	0046	3.8	3.0	淡青色	0069	4.1	3.0	淡藍色
〃	3.7	2.8	〃	〃	4.4	2.9	〃	〃	4.1	2.6	〃
〃	3.6	2.4	〃	〃	3.2	1.9	淡藍色	〃	3.8	2.2	〃
〃	4.4	3.2	〃	0068	4.0	2.6	〃	〃	3.9	2.6	〃
〃	4.4	2.9	〃	〃	3.4	1.8	〃	〃	3.6	1.9	〃
〃	3.6	2.9	淡緑色	〃	3.8	2.8	〃	〃	3.8	3.2	淡青色
〃	4.2	3.0	藍　色	〃	4.0	2.4	藍　色	〃	破損のため計測不可		〃
〃	2.9	1.5	青緑色	〃	4.2	3.5	灰緑色				

１．　甕。Ｓ字状口縁部小片。推定口径160mm。

口縁部は内外面共ヨコナデ。胴部外面は、櫛描による平行直線が巡る。内面はヘラナデを施す。

２．　坏。全体の1/2。器高50mm、口径130mm、底径50mm。内外面及び底部はナデが施される。外面の口縁部直下に接合痕が残る。

３．　坏。口縁部1/3。推定口径140mm。内全面及び外面口縁部はヨコナデ、体部の外面はヘラナデが施される。

４．　甕。底部完存。底径68mm。内面の一部に刷毛目を残すほか胴部内外面と底部はヘラナデを施す。

５．　台付甕。脚部完存。裾径80mm。内外面共ヘラナデを施す。

６．　高坏。脚部小片。内外面共ヘラナデを施すが、内面はヘラ痕を残す。

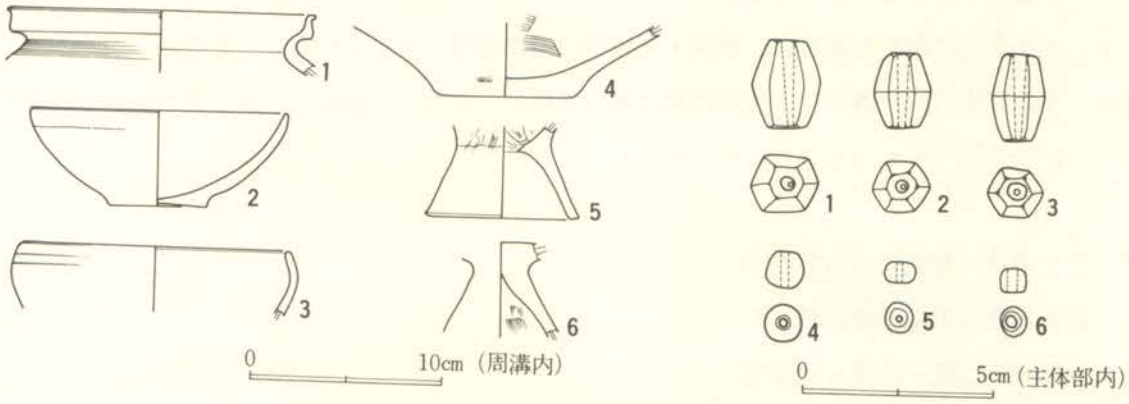
まとめ

１．　調査区の東端、台地の平坦部に所在する。

２．　径26m の円墳である。

３．　主体部は墳丘の中心から南へ９ m に位置し、土壙内に構築された箱式石棺であろう。

４．　主体部内から切子玉３個、ガラス玉２個、石製玉１個、ガラス小玉23個を検出した。



第19図　３号墳出土遺物実測図（1/2・1/4）

3章　住居跡の調査

船尾町田遺跡では調査の結果計27軒を検出した。調査区域外にかかるもの、あるいは他住居跡、古墳の周溝によって切られたもの等その全容を明らかにすることのできなかった住居跡も数軒あったが、多くは耕作等による削平、攪乱も少なく比較的良好な状態で遺存したと言えよう。

個々の住居跡は1号、2号……の番号を付したが、確認時の順に従ったもので調査の順を意味するものではない。

また、住居跡間の番号に欠番が生じているが、本遺跡では住居跡をはじめ他遺構をも含めて1号から通し番号を付した結果である。

凡例

I　実測図について

1．方位は全て座標比（GN）を用いた。

2．縮尺は$^{1}/_{80}$で統一した。

3．平面規模は住居跡中央付近で直交する十字線を想定し、長軸×短軸で表わした。単位はmである。

4．壁高は床面から掘込み確認面までの残存高で表わし、各壁の中央付近で測定した。測定値は平面図の上端線の外側に＋50のように明示した。単位はcmである。

5．柱穴及び小ピットの深さは、床面より底部までの比高で表わし、近接するか所に－50のように明示した。単位はcmである。

6．土層断面図中の数字は以下の土層名を表わす。

1．暗褐色土　2．褐色土　3．黄褐色土　4．黒色土

5．ローム粒　6．ロームブロック　7．焼土　8．炭化物

なお、混合土層の場所は、1（2）のように表示し、暗褐色土を主体とする土層中に褐色土が混合することを意味する。

7．出土遺物に付した番号は、挿図・図版中の遺物番号とすべて統一してある。

平面図中の同一番号は、復原作業において接合したものを表わし、接合資料の多い場合は、同一の記号をもってこれに代えた。

II　出土遺物一覧表について

内容覧は以下の順で記載した。

1．器高－口径－底径・遺存度

・法量の単位はmmで統一した。

・（　）を付したものは推定値である。

・遺存の少ないものは、測定か所を記して測定値を記載した。

２．成形・調整など。

３．出土層位

※印はその他の特記事項である。

なお、出土遺物一覧表の体裁は、住居跡以外の遺構も、これに準じた。

１号住居跡〔第20・21図・図版６－１〕

台地の南端平坦部に位置する。近接する住居跡は北東18m に８号住居跡が所在するほか、本住居跡周辺、台地の南側には住居跡の検出数は少なかった。

覆土

土層断面の観察からはいわゆるレンズ状の堆積がみられ、自然埋没したものと考える。

覆土の大半は暗褐色土が占めるが全体にローム粒の混入が認められた。床面で円形の落ち込みを検出し、覆土の堆積状況からは本跡に伴う施設と考えたが、調査所見からは本跡構築前に所在した土壙の残存と結論した。

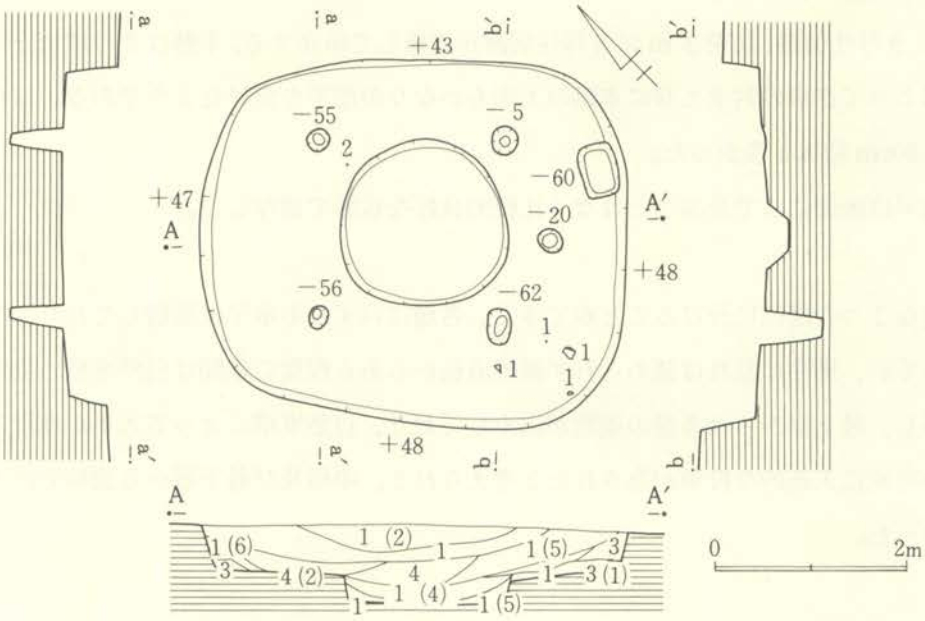
構造

平面規模は4.5m×3.7m を測る。

床面は全体に平坦で堅く踏み固められる。柱穴は住居跡対角線上に４か所、南東部に１か所、合計５か所検出した。

南東部の壁直下に50×40cm、深さ10cm の小ピットを検出したが、掘込みが浅く貯蔵穴と断定し難い。炉址の痕跡は検出できなかった。

床面中央の円形の掘込みは前述のとおり本跡に伴なう施設とは考え難く、土壙を本跡が切って構築

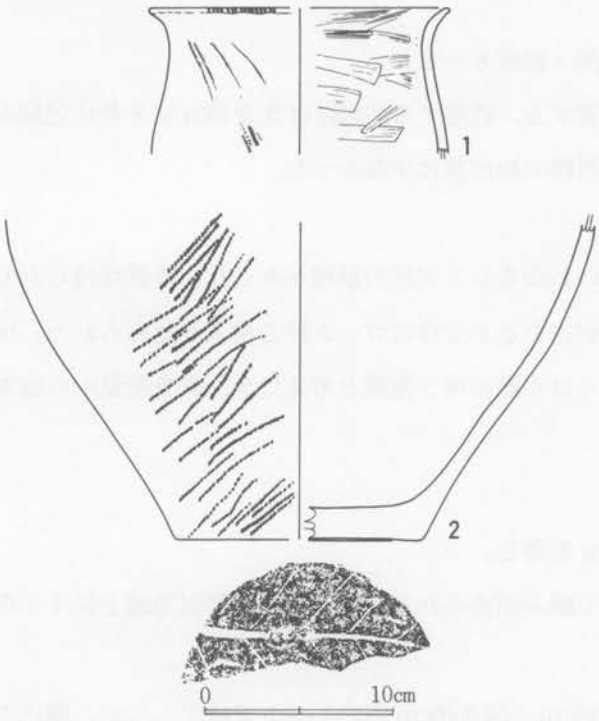


第20図　１号住居跡実測図（1/80）

され、その土壙底部の残存と考える。

遺物の出土状態

遺物の出土総量は少なく、土器片のみである。復原して実測できたものは甕口縁部と甕下半部の2個体があった。1の甕口縁部は南隅の床面から集中して出土した。2の甕胴部は中央から北寄りの地点で覆土中より出土した。両者の出土状況から1は本跡が廃絶直後に投棄されたものと考えたい。



第21図　1号住居跡出土遺物実測図（1/4）

7号住居跡〔第22・23図・図版6－2、31－1〕

台地の南端平坦部に位置する。

北西5 mに9号住居跡、北東3 mに8号住居跡が近接して所在する。本跡は2号墳墳丘下に所在するが、耕作によって古墳の封土と共に本跡の上面もかなりの削平を受けたようである。したがって残存する壁高は20cm前後と浅かった。

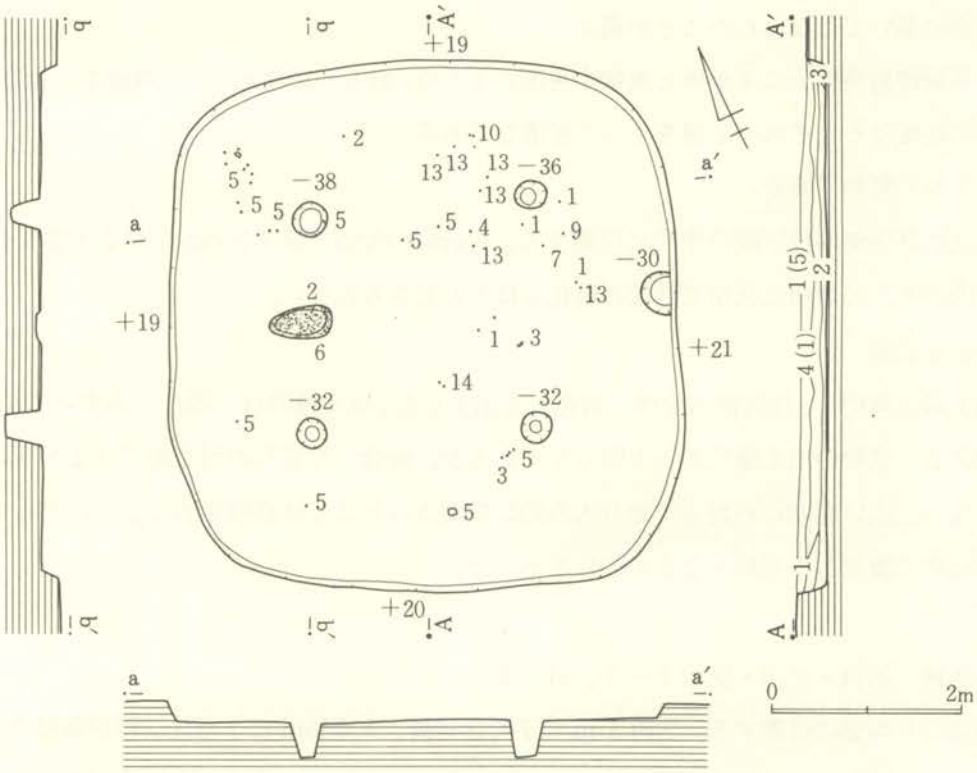
しかし、削平は床面にまで及ぶことはなく比較的良好な状態で遺存した。

覆土

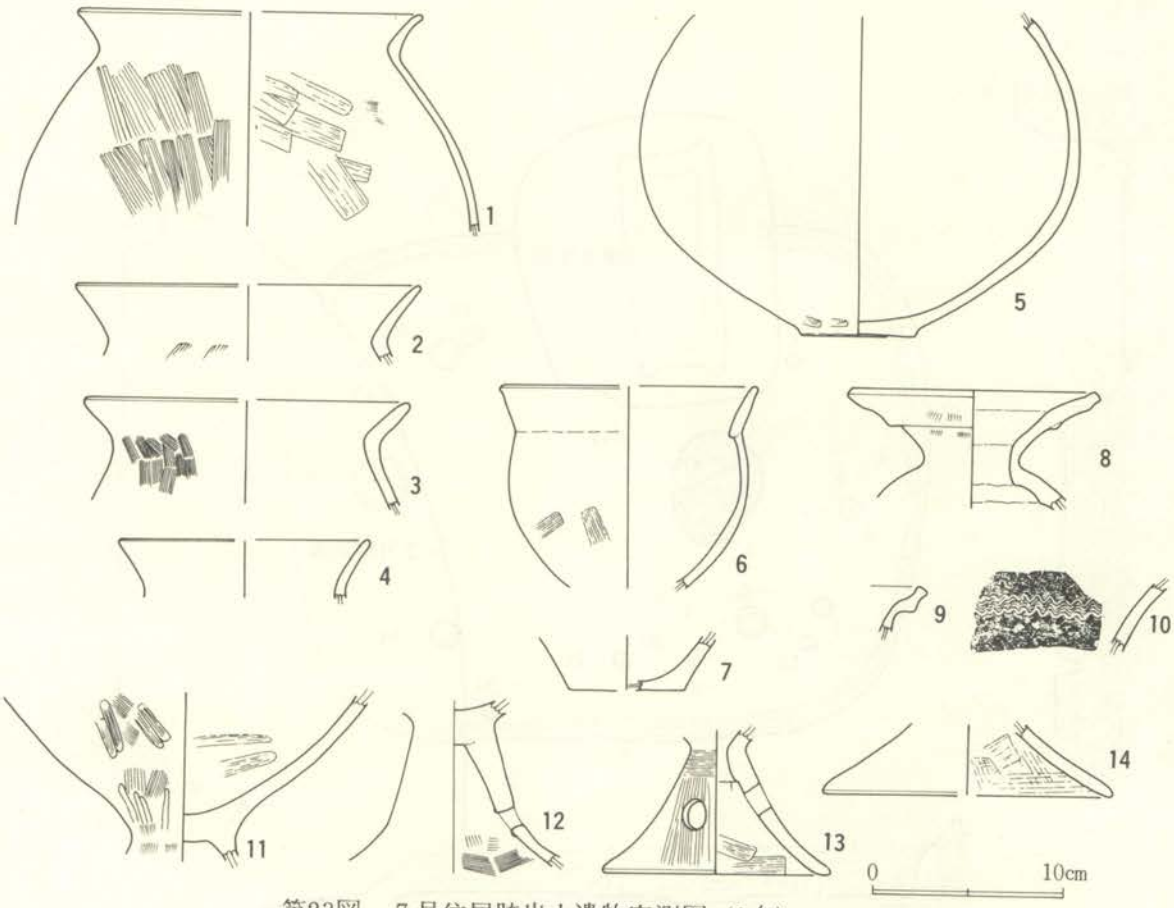
堆積は単純な3つの層位に分けることができた。各層はいずれも水平に堆積しており、やや不自然な堆積ではあるが、層序に乱れは認められず廃絶直後からある程度の期間は自然堆積と見做してよいだろう。しかし、最上層からは多量の遺物が出土しており、自然堆積によって大半が埋没し完全に埋没する直前の時期に人為的な投棄が為されたと考えられる。中層及び最下層から遺物の出土は極く微量に過ぎなかった。

構造

平面規模は5.5m×5.3mを測る。長軸と短軸にほとんど差がなく、柱穴の配置も整っており構築は



第22図　７号住居跡実測図（1/80）



第23図　７号住居跡出土遺物実測図（1/4）

周到な計画に基いて行なわれたことが窺える。

柱穴は住居跡対角線上に4か所と東壁中央部に1か所、計5か所検出した。隣接する相互間の距離、対角線上の距離はそれぞれ一定値をもって配置してある。

床面は平坦で堅緻である。

炉址は住居跡西側の柱穴間の中央に位置する。65cm×30cm、深さ5 cmを測る不整な長円形を呈す。炉址内の焼土の堆積は微量で底部の焼化もほとんどみられない。

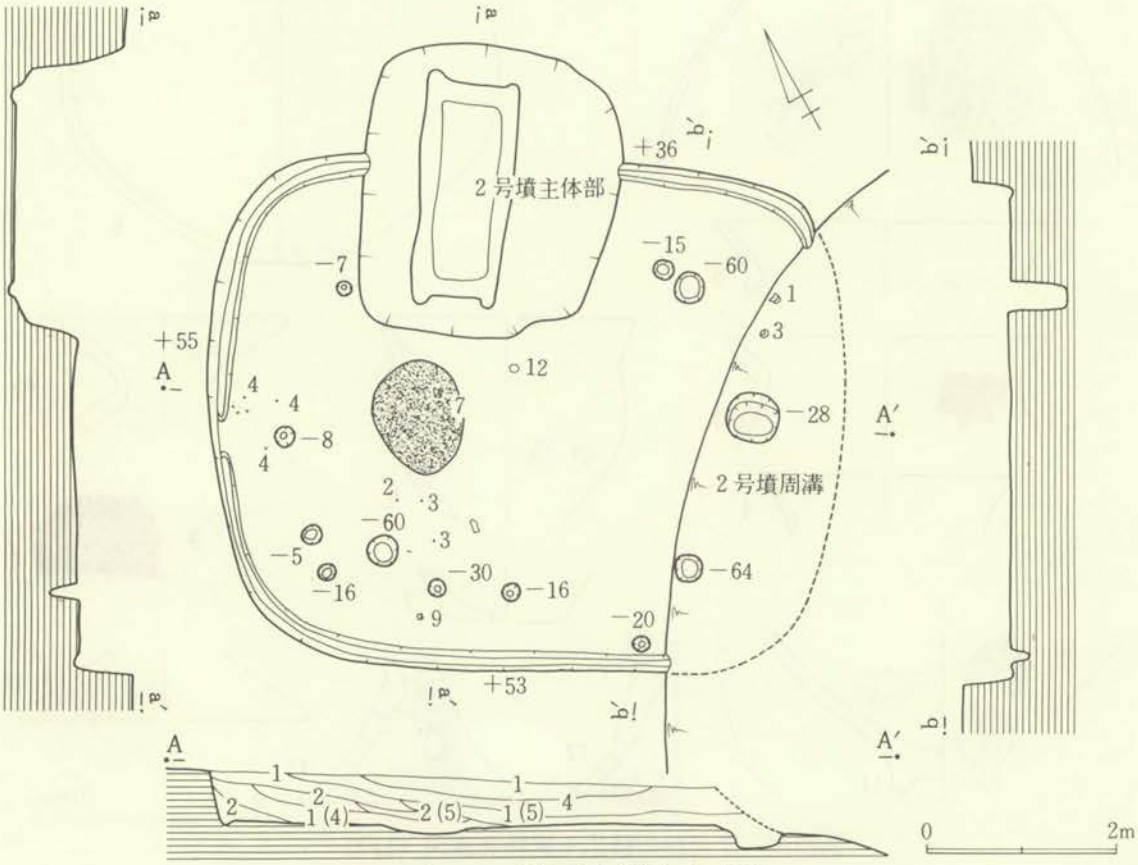
遺物の出土状態

覆土最上層に集中し、住居跡内全体に散在して出土した。出土遺物は土器片のみであるが総数は250余点を数える。遺物の出土層位からも明らかであるが、接合した資料の出土地点は1か所に集中した状態ではなく、広い範囲にわたっており人為的に投棄されたことは自明である。したがって、遺物の遺存状態は悪く復原して完形となるものはなかった。

8号住居跡〔第24・25図・図版7－1、31－2〕

台地南端の平坦部に位置する。北西3 mに7号住居跡、南東15mに1号住居跡が隣接する。本跡は2号墳墳丘下に所在し、南東部を周溝によって切られる。また、2号墳主体部は本跡を切って構築される。

覆土



第24図　8号住居跡実測図（1/80）

覆土は暗褐色土と褐色土を主体にレンズ状の自然堆積をなし、特記すべき点はない。

構造

東壁を２号墳周溝によって切られたが、北側壁の東隅部から復原して破線で平面形を図示した。これによって、平面規模は6.7m×5.2m を得られた。

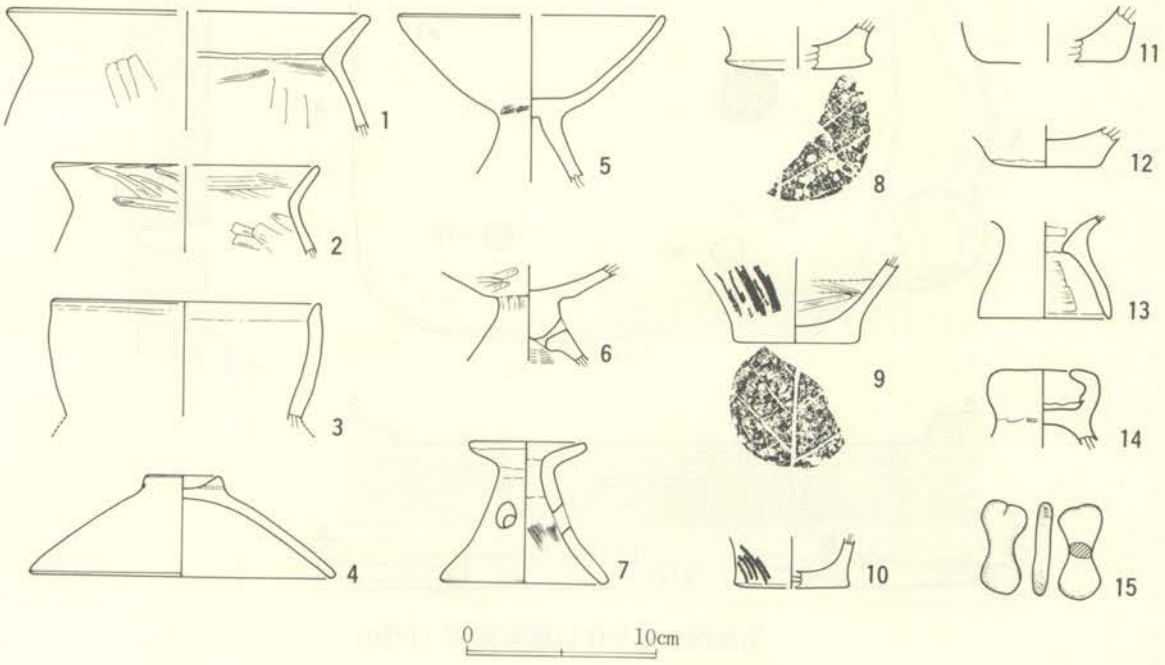
床面は全体の1/3程度を失っているが、全体に平坦で堅緻である。

壁溝は西壁の中央付近で一部消滅しているが、掘込みの幅・深さ共にほぼ一定しており構築時には全周したものと考えられる。幅20cm、深さ５～８ cm を測る。

柱穴は主柱穴と考えられるものを４か所検出したが、その配置から２号墳主体部の位置にもあったと思われる。他に支柱穴と考えられるものを計８か所検出したが、位置的に疑問の残るものもあった。炉址は床面の中央やや西寄りに設けられる。平面規模は120cm×90cm、深さ10cm を測る。炉底面のロームは焼化が著しく、覆土中にも焼土を多量に含んでいた。炉址内から遺物番号７の器台を検出した。

遺物の出土状態

住居跡西側の覆土上・中層に集中し、床面からの出土遺物は少なかった。床面あるいは床面直上からの出土遺物を本跡に共伴するものと考えるなら、４の蓋、７の器台、９～11の甕底部がこれに該当する。接合した資料は狭い範囲に集中したが、出土総量に比して接合するものが少なかった。



第25図　８号住居跡出土遺物実測図（1/4）

９号住居跡〔第26・27図・図版７－２〕

台地の南側縁辺部に位置し、２号墳周溝は本跡の覆土中に掘込まれている。幸い周溝による掘込みは床面まで達しておらず、北と南側の壁上部を削平されたに留まった。また西側壁は土壙状の掘込みによって消失しており不整な形状を呈しているが、住居跡の原形は北と南の隅部から推定規模を破線

で図示した。

覆土

一部に攪乱を受けているが、層序はレンズ状に堆積しており人為的な所産は認められない。覆土は暗褐色土と黒色土が大半を占めた。

構造

平面規模は図上で復原した結果5.7m×4.9mの値を得られた。

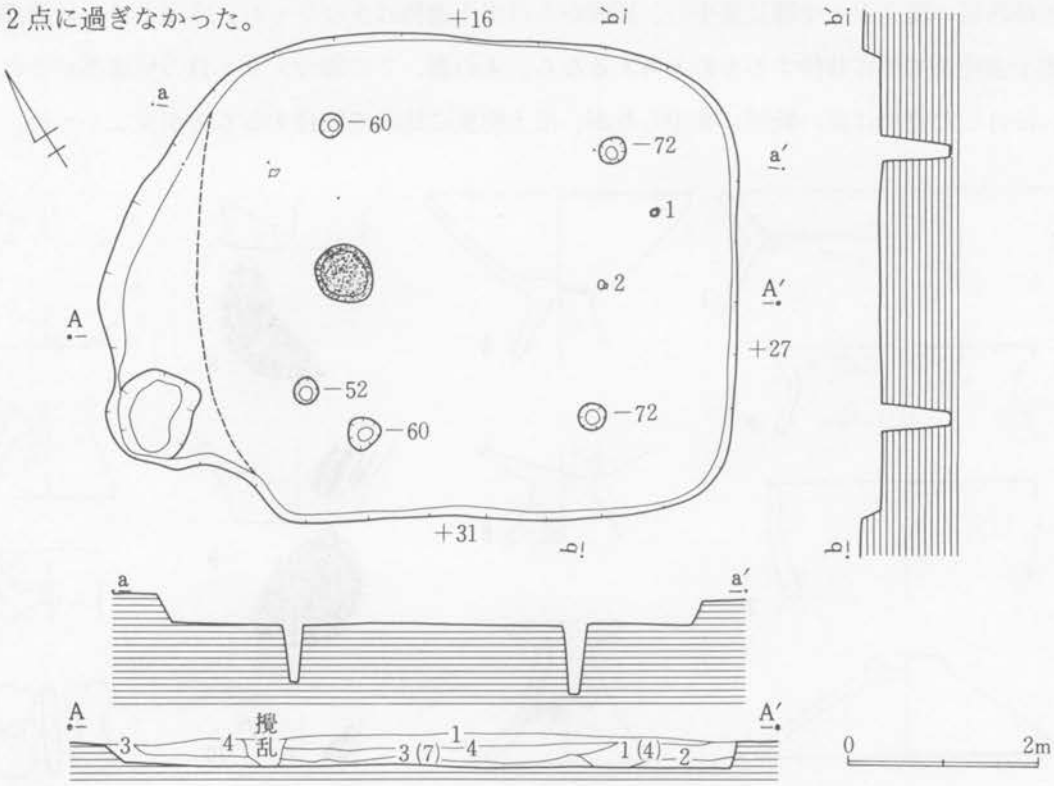
床面は全体に軟弱で緩るい起伏がある。

柱穴は住居跡対角線上に4か所と他に1か所計5か所検出した。南西部の2か所の内、炉址に近接する方がその位置から主柱穴であろう。いずれも深く垂直に掘込まれる。

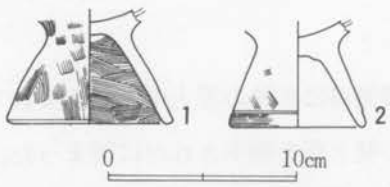
炉址は住居跡西側、柱穴間の中央に位置する。平面規模は64cm×56cm、掘込みは6 cmを測る。浅い掘込みであるが炉底は焼化が著しい。

遺物の出土状態

遺物の出土総量は少なく土器小片が多かった。いずれも覆土内より出土したもので実測に耐え得るものは2点に過ぎなかった。



第26図　9号住居跡実測図（1/80）



第27図　9号住居跡出土遺物実測図（1/4）

12号住居跡〔第28・29図・図版８－１、31－３〕

台地の南側平坦部に位置し、２号墳後円部の墳丘下で検出した。耕作による住居跡上部の削平は著しく覆土は大半を失っていた。

覆土

遺存が悪く土層断面の実測は行なわなかったが、暗褐色土を主体にローム粒の混入する覆土であった。

構造

平面規模は6.1m×6.0m を測る隅部の丸い正方形状である。

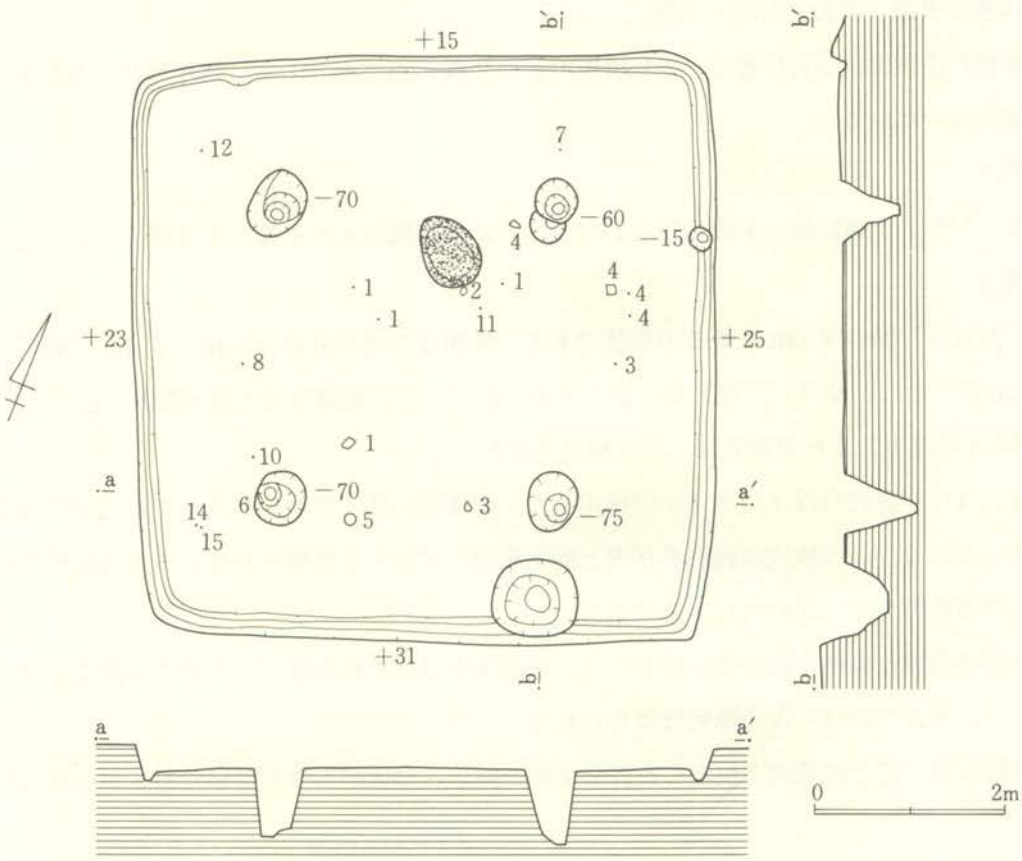
床面は平坦で、中央付近は堅く周縁は軟弱であった。壁溝は幅20cm、深さ10cm 前後で全周する。

柱穴は住居跡対角線上に４か所検出した。南東部の柱穴を除く３か所には掘込み形状に建て替えの痕跡がみられる。

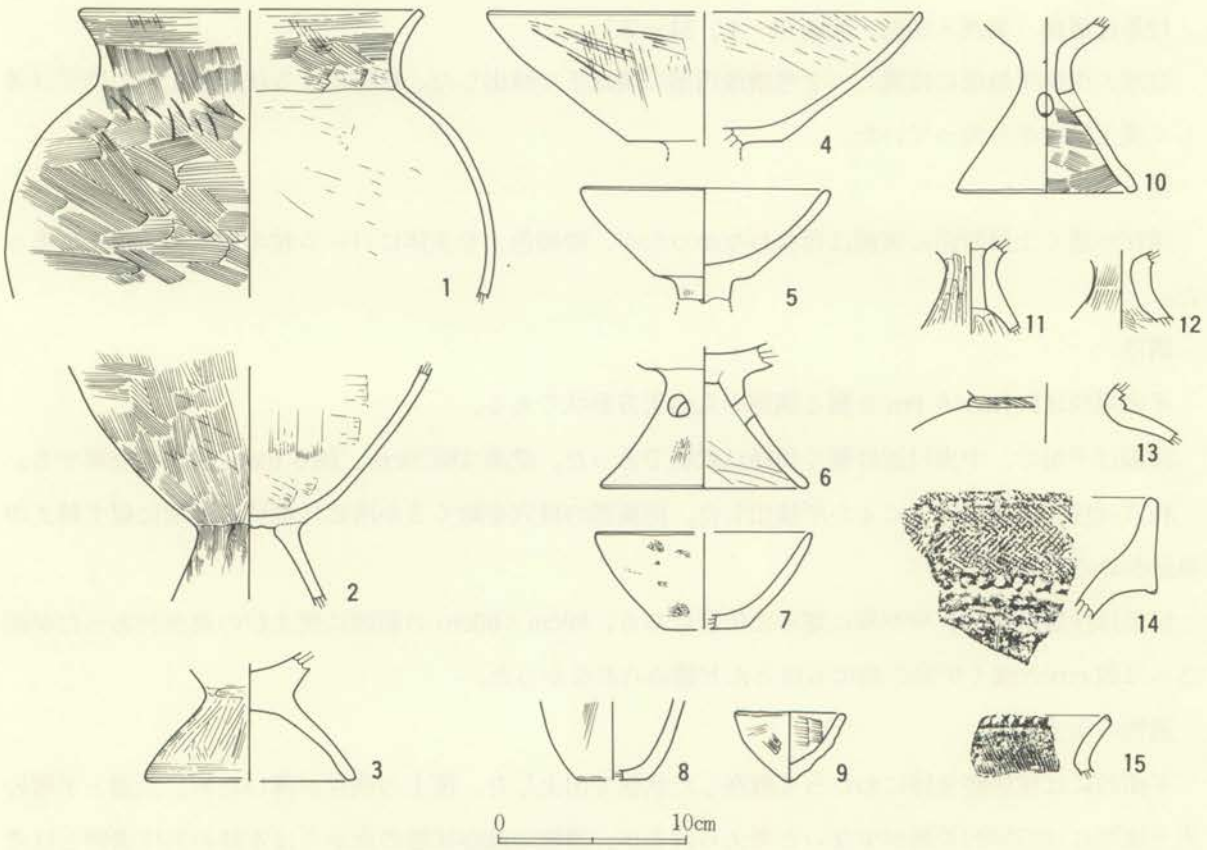
炉址は住居跡北側、やや東に寄った位置にある。80cm×60cm の範囲に焼土粒の点在があったが掘込みは数 cm と浅く炉底の焼化もほとんど認められなかった。

遺物の出土状態

平面的には住居跡全体にわたって散在した状態で出土した。覆土の残存が薄いため、上層と下層の出土遺物には時間的差異が少ないと考えられるが、遺物の遺存状態の点からは本跡の共伴遺物とは考えにくい。



第28図　12号住居跡実測図（1/80）



第29図　12号住居跡出土遺物実測図（1/4）

14号住居跡〔第30・31図・図版32－1〕

台地の西側縁辺部に位置し、2号墳後円部の北西2 mで検出した。耕作等による削平が著しく覆土の遺存は少なかった。

覆土

遺存が悪く土層断面の実測は行なわなかったが、暗褐色土を主体とする覆土であった。

構造

平面規模7.0m×6.6mを測る方形状である。床面は住居中央部の5.4m×5.4mの範囲が周縁部より数cm高くなり、全体に平坦で堅く踏み固められている。壁溝は北・西・南側に遺存し、幅20cm、深さ10cmを測る。また東側では一部を検出できた。

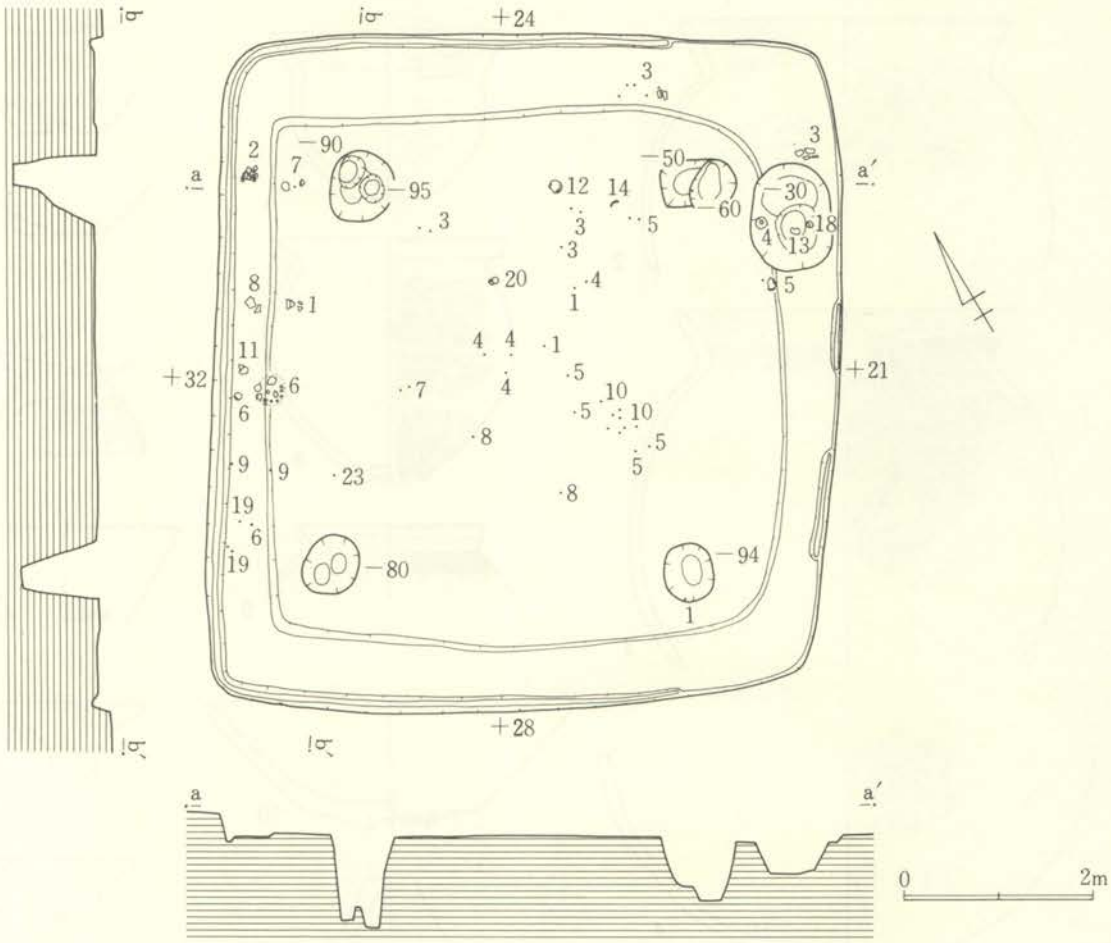
柱穴は住居跡対角線上に計4か所検出した。南東側の柱穴を除いてそれぞれ底部では2か所の柱穴をもっている。この柱穴の掘込み状況と前記床面の状況から推察すれば、本跡は拡張されたと考えられ、柱の建替えが行なわれたようである。

炉址は明瞭な痕跡を留めるか所がなく、床面中央のやや北西寄りで少量ではあるが焼土の堆積を検出した。床面でのロームの焼化は認められなかった。

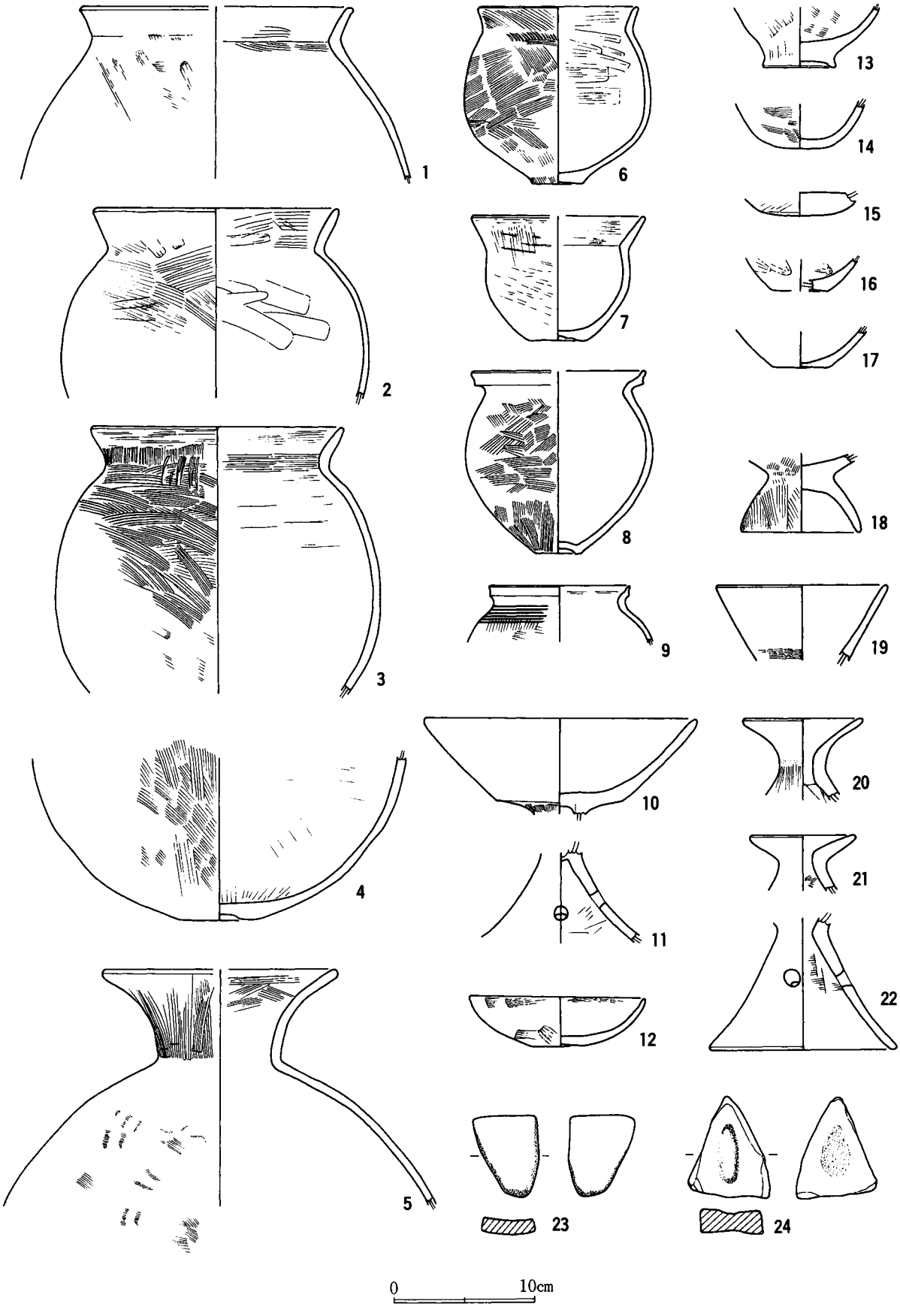
北東の隅付近で貯蔵穴を検出した。平面形と掘込み形状がやや不整形であるが貯蔵穴と考えてよいだろう。

遺物の出土状態

出土遺物は床面あるいは床面直上のものが大半を占める。平面的には住居跡全体に散在した状態で出土しており、接合した資料も狭い範囲に集中して出土した。完形で出土したものあるいは復原して完形となったものはなく、出土遺物の大半は投棄されたものであろう。



第30図　14号住居跡実測図（1/80）



第31図　14号住居跡出土遺物実測図(1/4)

16号住居跡〔第32・33図、図版８－２、32－２〕

台地の西側縁辺部に所在する。南側６ｍに14号住居跡、北東側６ｍに30号住居跡が位置し、本遺跡では最も斜面寄りで検出した住居跡である。

覆土

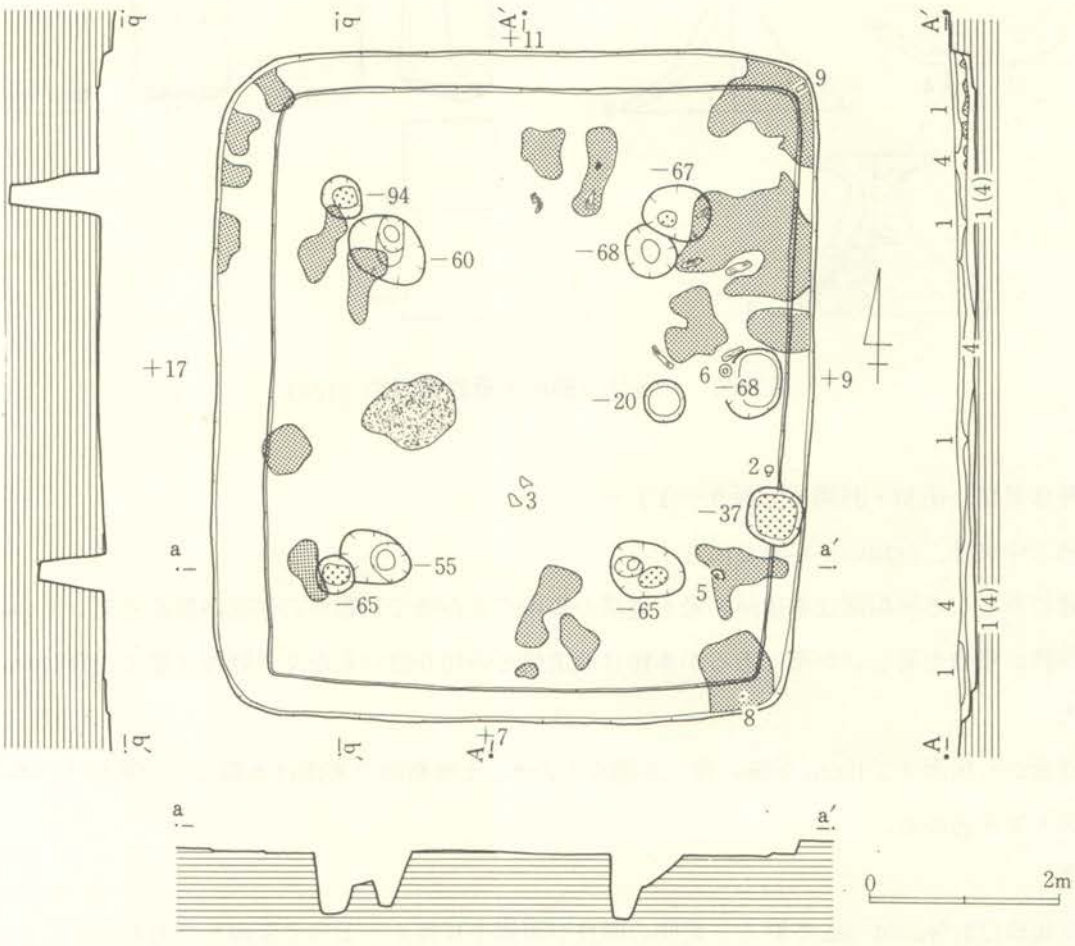
土層断面図から明らかなように、本跡は拡張・建替えが行なわれており、旧住居跡（16号Ｂ）は全面にわたって貼床が行なわれ新住居跡（16号Ａ）の床面としている。したがって、本跡の覆土は貼床上約10cmの厚さに堆積するものである。土層断面の観察から暗褐色土と黒色土が覆土の大半を占め堆積の様相は人為的な投棄によるものと考える。

構造

平面規模は6.9m×6.3mを測るやや南北に長い方形状である。

床面は16号Ｂの床全面に暗褐色土と黒色土の混在土で貼床し16号Ａの床面と同一レベルを保ち堅緻に踏み固められている。

柱穴及びピットは16号Ａのものに陰影を付けて明確にした。いうまでもなく16号Ｂの柱穴及びピットは貼床を除去した結果検出したものである。柱穴は16号Ａ・Ｂ共に住居跡の対角線上に配置され拡張後のものは拡張前の外側にそれぞれ掘込まれている。



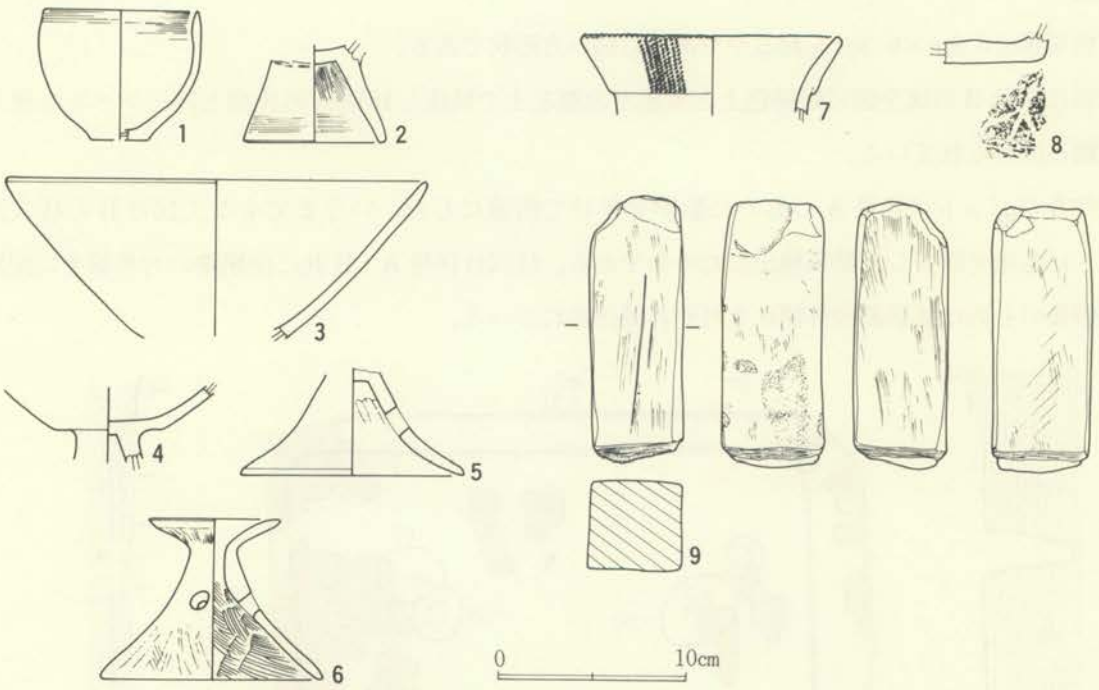
第32図　16号住居跡実測図（1/80）

16号A・B共に4本の柱をもつ住居と考えられ、16号Aの東側壁際のピット及び16号Bの東側に位置する2か所のピットはいずれも形態から察して柱穴ではないものと考える。

炉址は16号Aの床面で検出した。100cm×70cmの不整な形状で深さは5 cm程度であった。炉底部はロームの焼化が著しく長期の使用が窺える。

遺物の出土状態

遺物の出土総量は僅少である。土器類は16号A床面以下からの出土は皆無であり、大半は16号Aの覆土内からのものである土器以外に床面上から多量の焼土と若干量の炭化物を検出したが、いずれも後に投棄されたものと考えられ本跡の火災によるものではない。



第33図　16号住居跡出土遺物実測図（1/4）

17号住居跡〔第34・35図・図版9－1〕－

遺跡の中央部、台地の平坦部に所在する。

本跡の所在する平坦部は本遺跡の最も遺構の集中するか所で10数軒の住居跡群が密集している。また住居跡の重複も著しいか所であるが本跡は他遺構との切り合いもなく良好な状態で遺存した。

覆土

確認面から床面まで10cm前後の覆土が遺存したが、土層断面の実測は省略した。覆土の主体は暗褐色土が大半を占める。

構造

平面規模は4.9m×4.3mを測る。北側の壁長が南側より長く、よって歪曲した方形状を呈す。

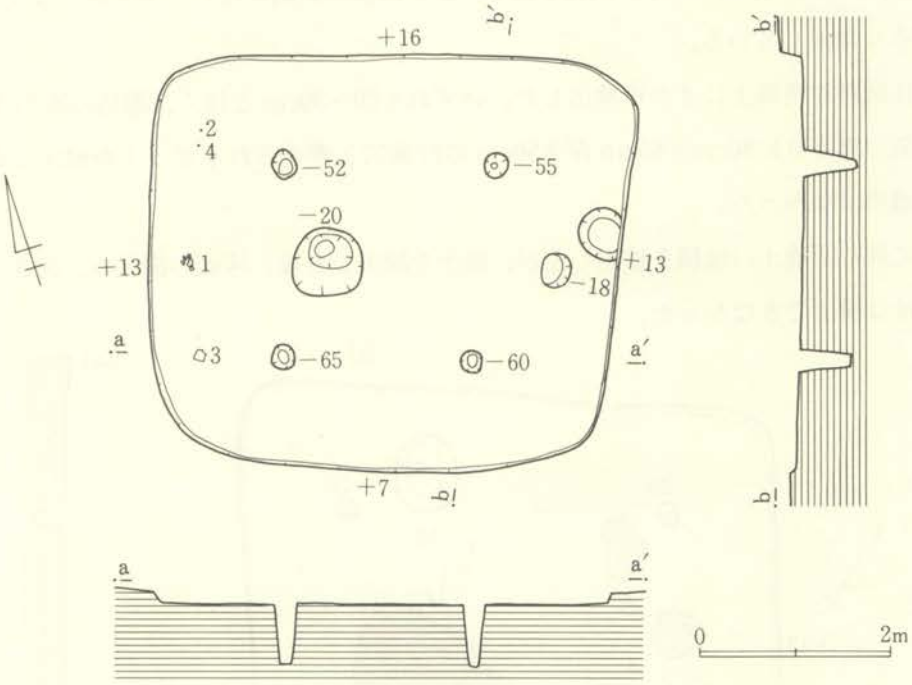
床面は緩るい起伏があり軟弱である。また東側に比して西側の床面が高く、西から東へ緩るく傾斜

をもつ。

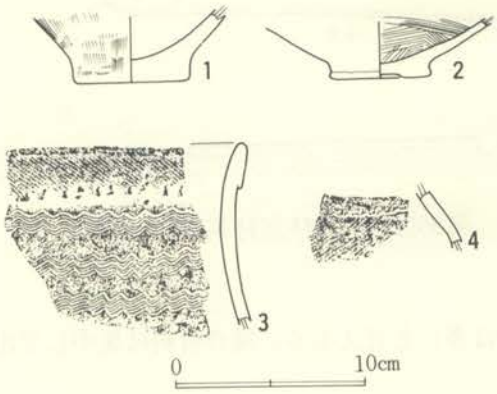
柱穴は住居跡対角線上に4か所と東壁寄りに1か所の計5か所検出した。柱穴の他に2か所のピットを検出した。中央からやや西寄りのピットは径20cm深さ20cmを測るが、覆土中の焼土、底部の焼化の痕跡が認められず炉址と考えるのは難かしい。性格は不明である。また東側の壁際で検出したピットも径50cm、深さ10cmで貯蔵穴とは考えられずこれも性格不明である。共に覆土中からの出土遺物はなかった。

遺物の出土状態

覆土の遺存が少なかったので覆土内の出土遺物は僅少である。西側の壁寄りから4点の土器小片を検出したが、他は実測に耐えうるものがなく全て覆土内の出土である。



第34図　17号住居跡実測図（1/80）



第35図　17号住居跡出土遺物実測図（1/4）

18号住居跡〔第36・37図・図版9－2、32－3〕

遺跡の中央部、台地の平坦部に所在する。

本跡は耕作による削平が著しく、残存する壁高は西側で13cm、他壁は10cm以下であった。

西側壁の一部は後世の遺構である39号址によって失なわれているが平面図は実線で図示した。

覆土

覆土の残存は数cmと薄く、土層断面の実測は省略した。残存部位では黄褐色土を主体に焼土粒の混在する覆土であった。

構造

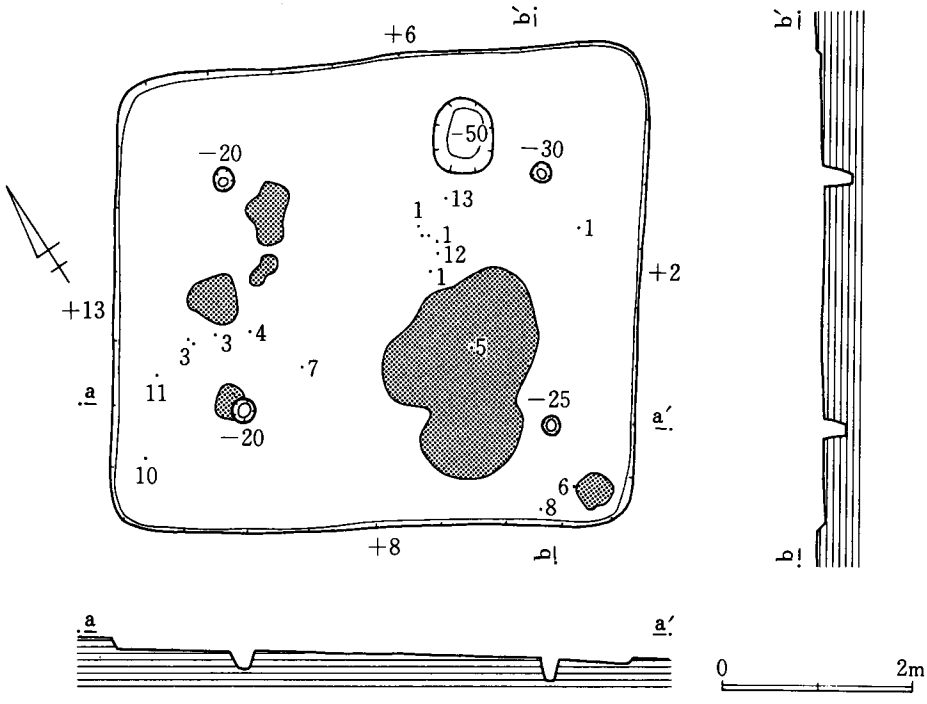
平面規模5.6m×4.8mを測る歪曲した方形状である。

床面は全体に小さな凹凸があり軟弱である。また西側が東側に比してやや高くなり、よって東側に向って緩るく傾斜している。

柱穴は住居跡対角線上に4か所検出した。いずれも20～30cmと浅く、掘込み面の径が小さい。

北側壁前の東寄りに80cm×65cm深さ50cmの貯蔵穴と考えられるピットを検出したが、覆土内からの出土遺物はなかった。

床面上に数か所焼土の堆積を検出したが、焼土を除去した後、床面の掘込み、床面の焼化したか所はなく炉址は検出できなかった。



第36図　18号住居跡実測図（1/80）

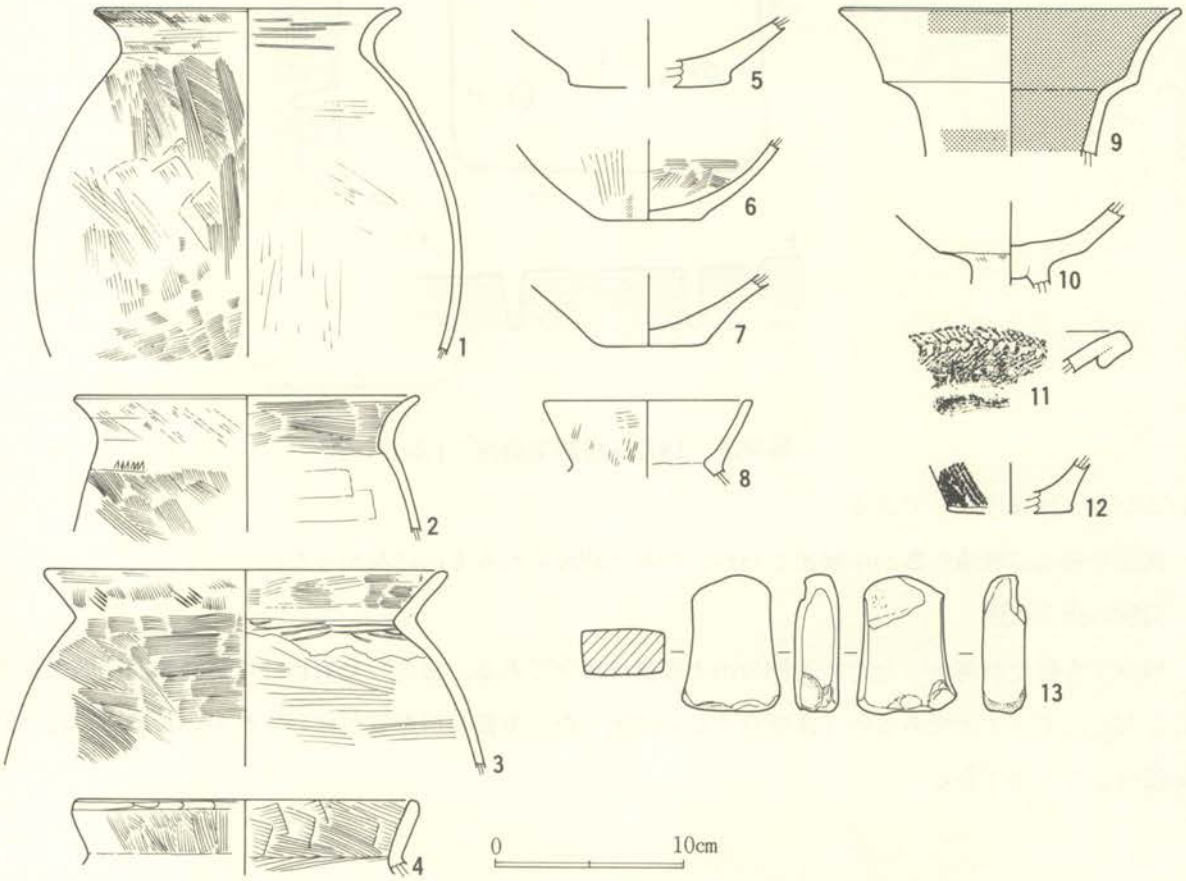
遺物の出土状態

覆土の残存に比して出土遺物は多いと言えよう。接合資料は集中して出土したが復原して完形になるものはなかった。

平面図に出土位置を明示したものは全て床面直上あるいは床面からの出土であるが、これらと遺構

確認作業中出土した遺物が接合する例があり、必ずしも本跡に共伴するものとは考え難い。

また床面近くから焼土の堆積を数か所検出したが、床面の焼化あるいは炭化物の出土等が認められなかった。したがって本跡の火災による所産とは考えられず出土遺物も投棄されたものと考えるのが妥当であろう。



第37図　18号住居跡出土遺物実測図（1/4）

19号住居跡〔第38・39図・図版11－１〕

遺跡中央部のやや南寄り、台地の平坦部に所在する。本跡は耕作による削平が著しく壁高の残存は数 cm に過ぎなかった。特に東側の壁は消滅しており平面図では床面の状態と柱穴の位置から復原して実線で明示した。

覆土

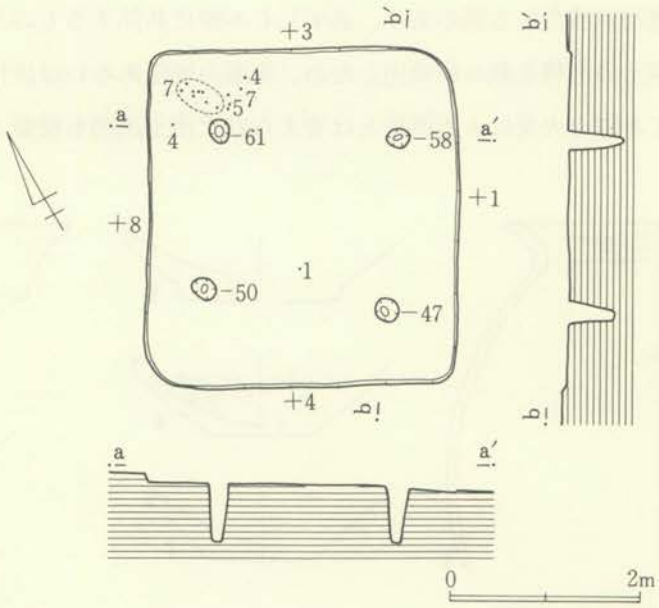
覆土の残存は数 cm と薄く土層断面の実測は省略した。確認面では暗褐色土と黄褐色土の混在土によって住居跡の範囲を視認できた。

構造

平面規模は3.5m×3.3m を測る方形状である。

床面は全面が堅緻であったので、壁の立上りが不明瞭なか所も床面の範囲を検出することによって住居跡規模を知ることができた。

柱穴は４か所検出した。内２か所は住居跡の対角線上に位置するが他はややずれた位置にあり、径



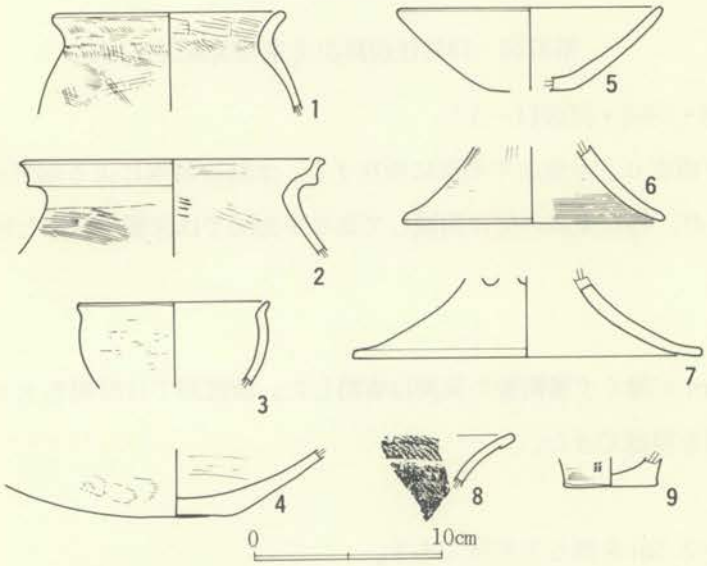
第38図　19号住居跡実測図（1/80）

および深さはほぼ同一である。

床面で焼土の堆積を数か所検出したが、炉址と認められるものはなかった。

遺物の出土状態

残存する覆土が薄かったため遺物の出土総量は僅少である。接合した資料は住居跡の北西隅に集中しており、すべて床面あるいは床面直上から出土した。実測し得た資料はいずれも小片あるいは小片の接合したものである。



第39図　19号住居跡出土遺物実測図（1/4）

23号住居跡〔第40・41図・図版11－２、33－１〕

遺跡の中央部、台地の平坦部に所在する。南東部で24号住居跡と重複しさらに溝によって北と南側の壁の一部を失っている。本跡も耕作による削平が著しく、覆土の残存は数 cm であった。なお遺構間の新旧関係は23号住居跡→24号住居跡→溝の順である。

覆土

確認面では暗褐色土とローム粒の混在する覆土であったが、前述のように覆土の残存が薄かったので土層断面の実測は省略した。

構造

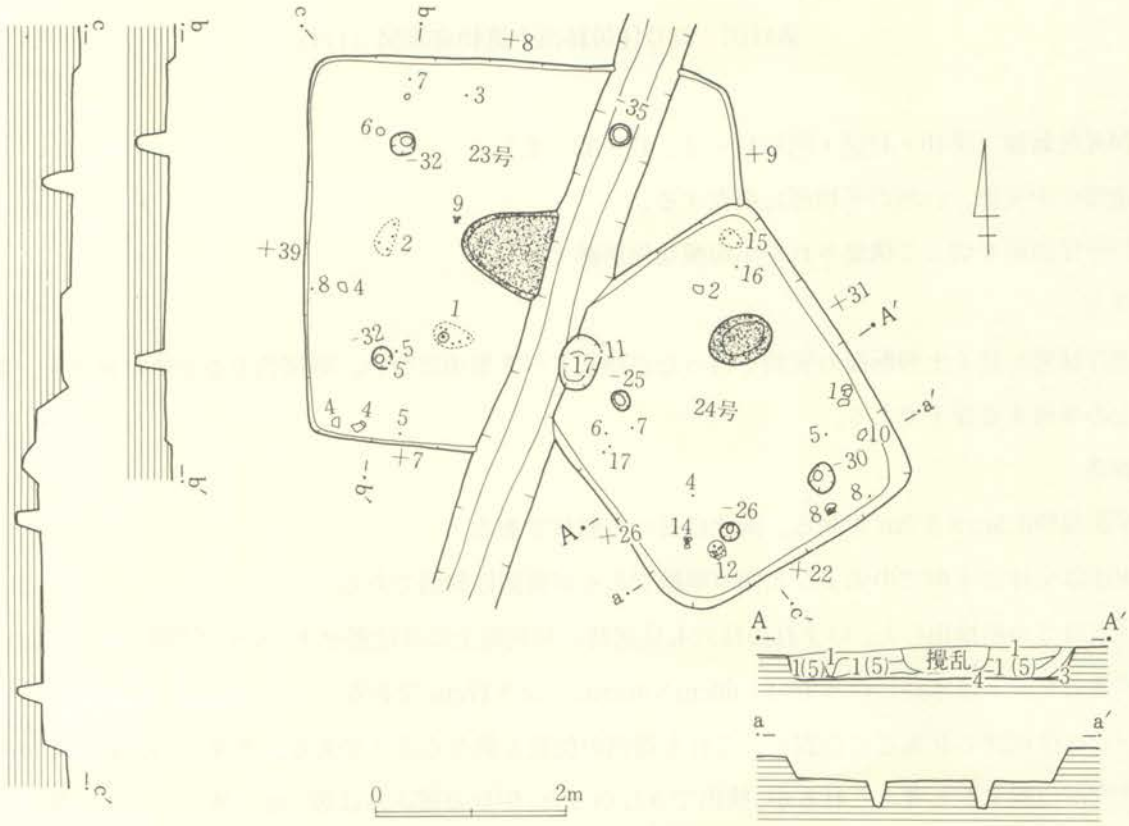
平面規模は4.5m×4.0m を測る、やや東西に長い方形状であろう。

床面は全体に平坦であるが北側が堅緻であるのに比し、南側は軟弱である。

柱穴は南東隅のものを除いて３か所検出した。

南東部の柱穴は24号住居跡の構築によって消滅したと思われるが、柱穴は４か所の住居跡であることは相違ないであろう。

炉址は住居跡中央部で検出した。東側の一部を溝によって削られていたが、広い範囲に焼土が堆積し、炉底部の焼化も著しい。



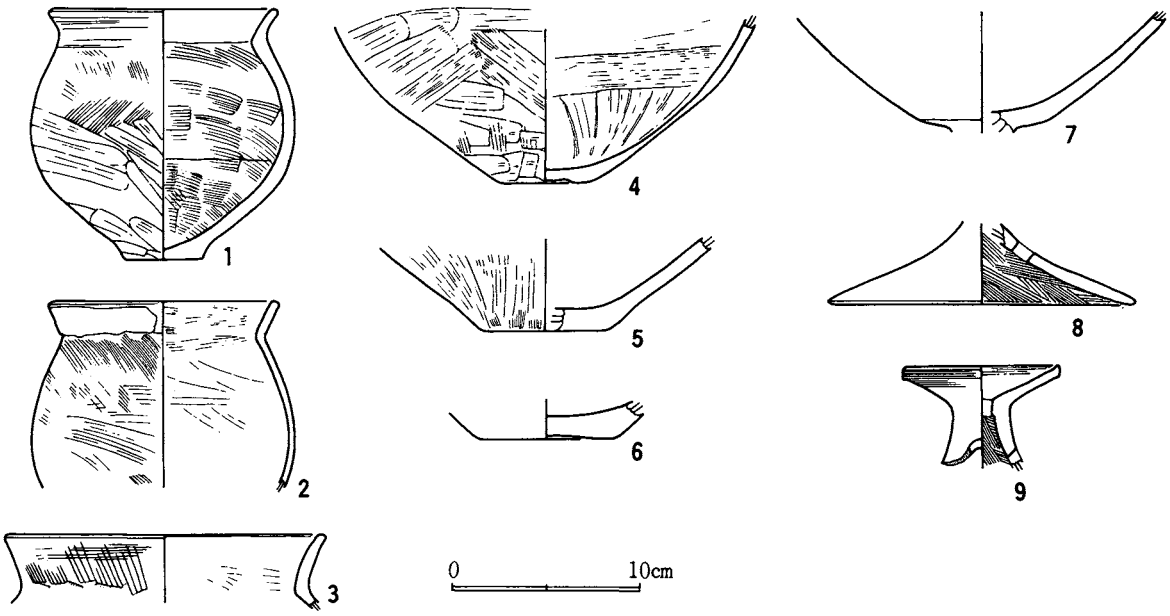
第40図　23・24号住居跡実測図（1/80）

遺物の出土状態

本跡の東側約1/2は24号住居跡と溝によって失なっているため遺物は溝から西側の範囲に散在して

出土した。接合した資料は1・2が1か所に集中して出土し、4・5は散在した状態であった。他はいずれも小片である。

すべての遺物は床面あるいは床面直上から出土したが、遺存状態と出土状況から考えて1は本住居跡の共伴遺物と考えたい。



第41図　23号住居跡出土遺物実測図（1/4）

24号住居跡〔第40・42図・図版11―2、12・33―2〕

遺跡の中央部、台地の平坦部に所在する。

23号住居跡を切って構築された小規模な住居跡である。

覆土

遺存状態が良く土層断面の実測を行ったが特記すべき事項はない。暗褐色土を主体に黒色土、黄褐色土の堆積する覆土である。

構造

平面規模3.5m×3.0mを測る、南北に長い方形状である。

床面は全体に平坦で中央より北側が堅緻であるが南側は軟弱である。

柱穴は3か所検出した。いずれの柱穴も住居跡の対角線上には位置せず、やや不規則に掘込まれる。北西隅のピットは本跡に伴うもので60cm×40cm、深さ17cmである。

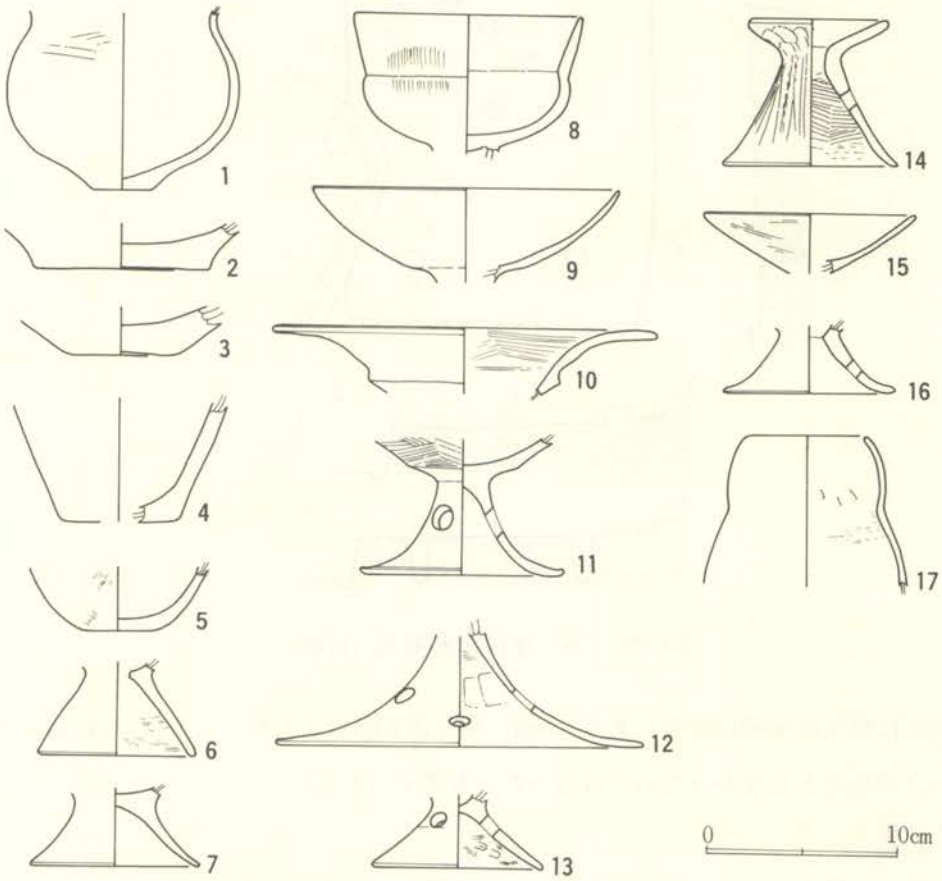
炉址は住居跡の北東部に位置し、これも通例の位置と異なるようである。本来この位置に4か所目の柱穴が位置すると考えられるが、検出できなかった。炉址の掘込みは数cmと浅くロームの焼化も少なかった。

遺物の出土状態

小規模な住居跡ではあるが遺物の出土総量は多かった。平面的には中央付近に少なく住居跡周縁部

に散在して出土した。覆土の残存が厚かったため覆土の上・中層に集中し、床面から出土した遺物は８・13・16の３点に過ぎなかった。

また11は北西隅のピット内から出土した。



第42図　24号住居跡出土遺物実測図（1/4）

25号住居跡〔第43図・44図・図版13－１、33－３〕

遺跡の中央部、台地の平坦部に所在する。東側の壁の約1/2は26号住居跡との重複によって失なわれる。耕作によって、壁の大半は削平され残存する壁高は９ cm 程度であった。

覆土

残存する覆土は僅かな量であったが、土層断面の実測を行なった。観測の結果、褐色土を主体とした覆土で、床面近くでは黒色土の混在が認められた。観察か所では自然堆積の所見を得た。

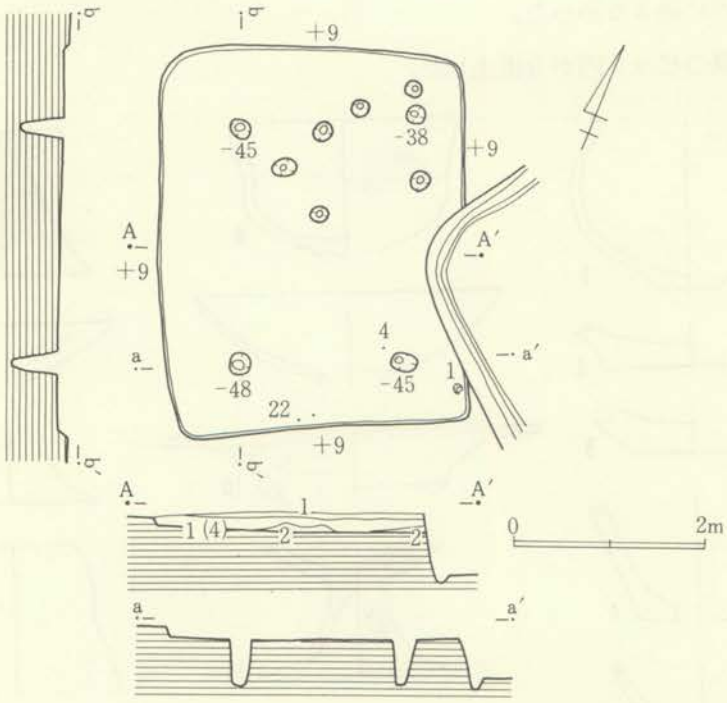
構造

平面規模は3.9m×3.2m を測る。南北に長く、東側と西側の壁長に若干差があるため、全体に歪曲した方形状である。

床面は全体に非常に軟弱で、検出時にはその断定に困窮した住居跡である。

柱穴は平面図中に深さを明記した４か所が、その位置と形態から妥当であろうと判断した。

他に６か所に小ピットを検出したがいずれも浅く、柱穴と断定し難い形態であった。これらの小ピット群の性格は不明である。



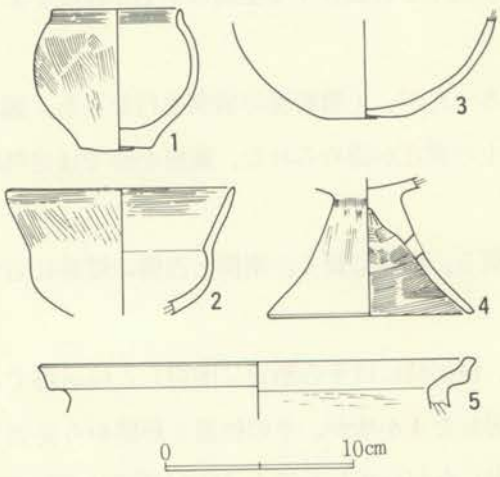
第43図　25号住居跡実測図（1/80）

本跡の床面には焼土の堆積は皆無であり、床面の焼化部も認められなかった。炉址は検出できなかったが、あるいは炉址をもたなかったのではないかとも考えられる。

遺物の出土状態

出土遺物の総量は僅少である。出土層位は残存した覆土の中位、すなわち床面直上であるが、床面に密着したものはなかった。平面的には南壁の際に集中した。

1の小形甕は復原して完形となり、出土層位も床面の直上であることから本跡に伴う遺物としてよいだろう。



第44図　25号住居跡出土遺物実測図（1/4）

26号住居跡〔第45～48図・図版13－２、14・34・35〕

台地の平坦部に所在し、25号住居跡を切って構築される。東西を走る溝によって覆土の一部と東・西側の壁上部の一部を失っているが、住居跡の掘込みは深く、良好な状態で遺存した。また、本跡の覆土内からは多量の遺物を検出し、当該時期の貴重な資料を得ることができた。

覆土

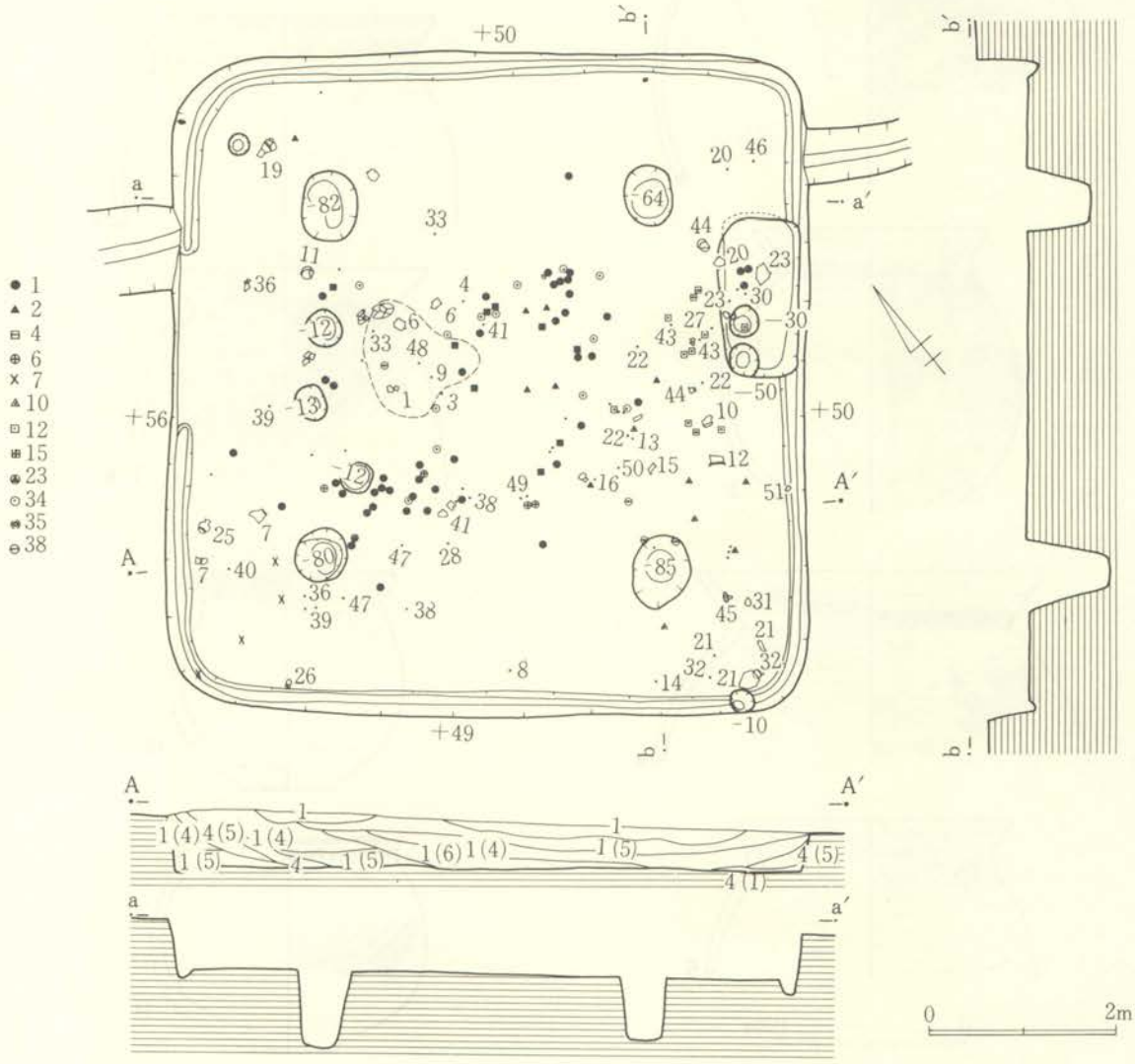
土層断面の観察ではいわゆるレンズ状の自然堆積とみてよいだろう。覆土は暗褐色土が大半を占め、ローム粒・ロームブロックの混在が目立った。また、堆積の様相は西側つまり谷津側からの土砂の混入が著しかったようである。

構造

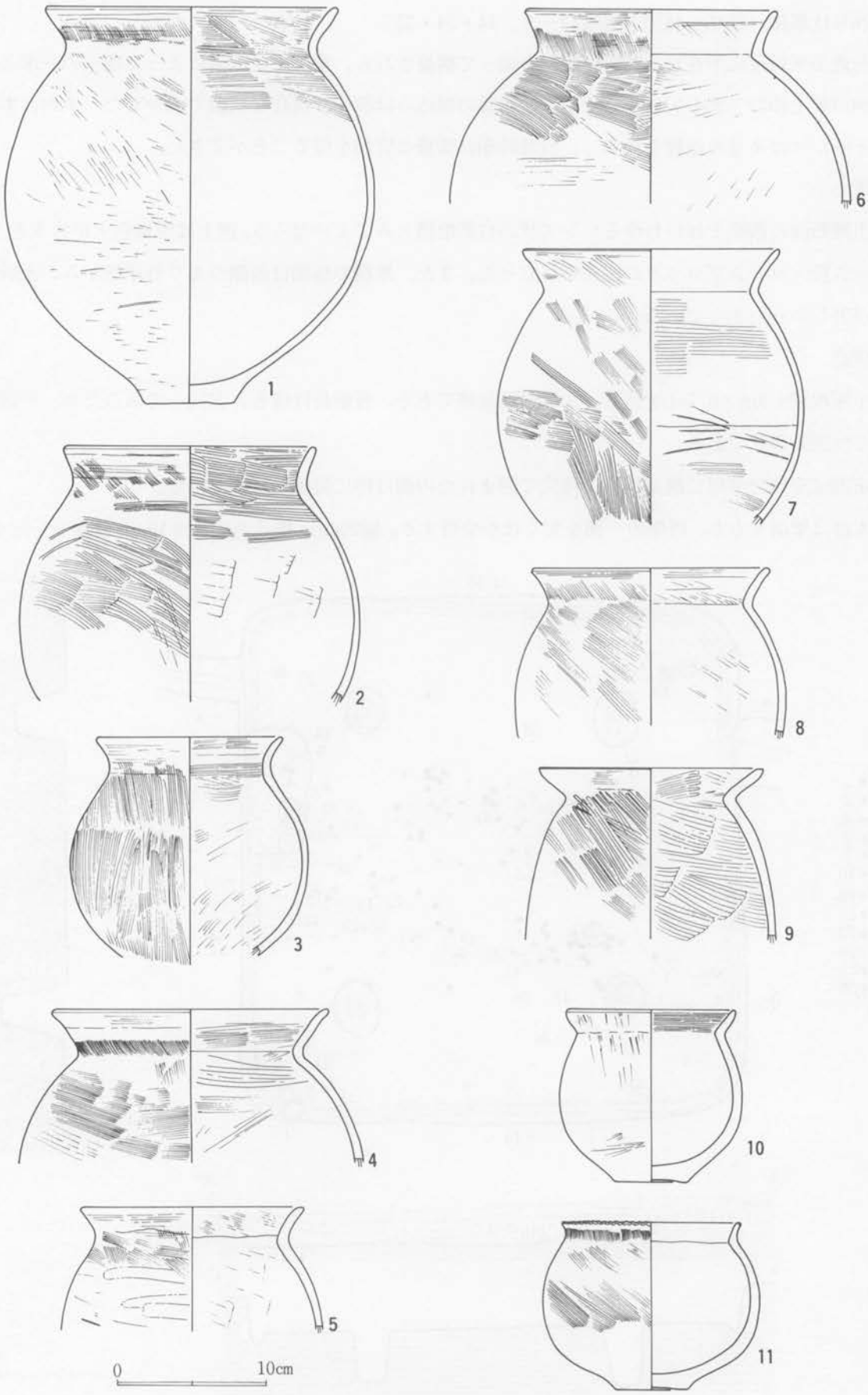
平面規模6.9m×6.7m を測る、大形の住居跡である。各壁長はほとんど同一であるため、平面形は整った正方形状である。

床面は全体に平坦に構築され、柱穴で囲まれた内側は特に堅緻な状態である。

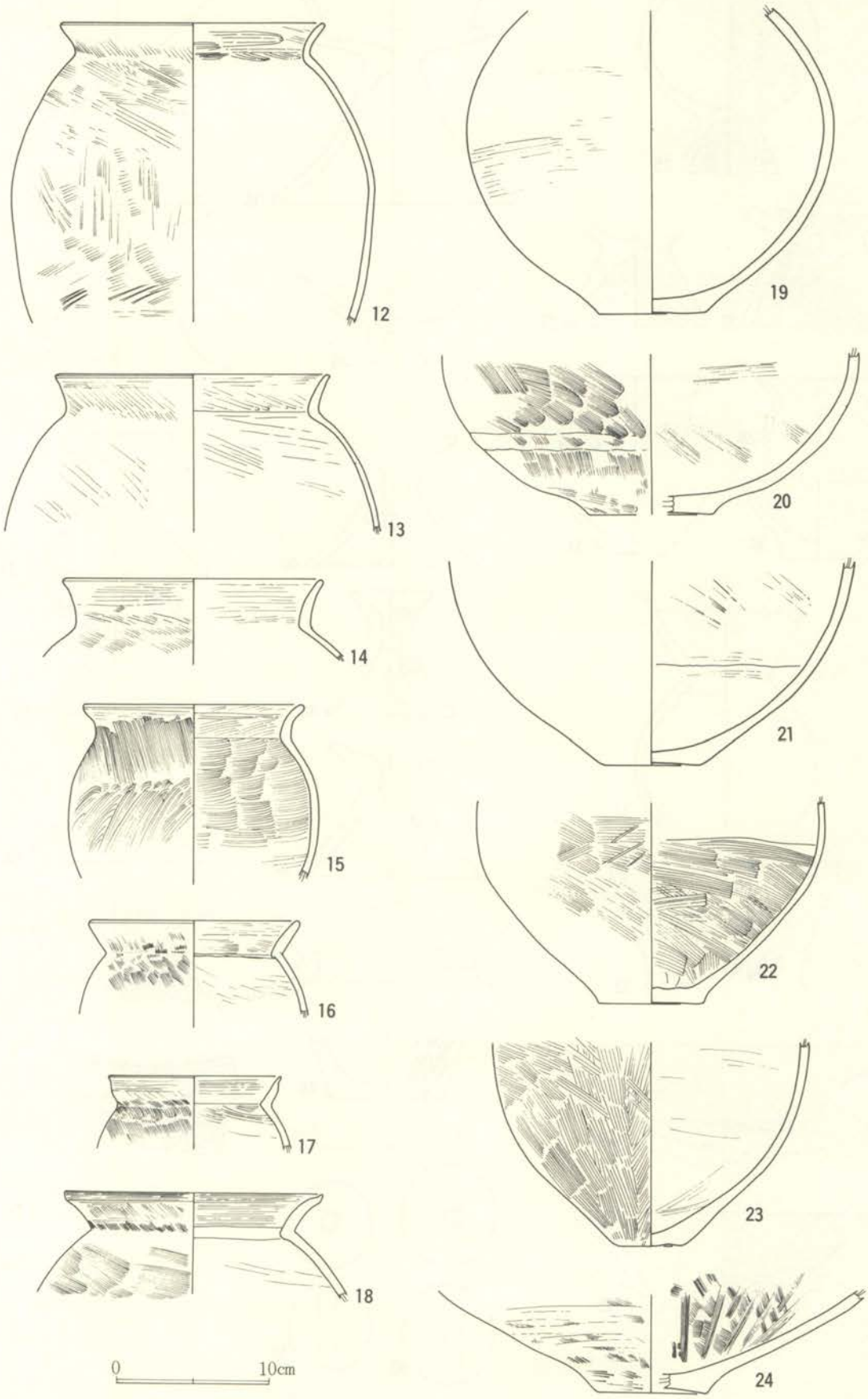
本跡は壁溝をもち、西側の一部を欠くほか全周する。幅20cm、掘込みの深さ10cm 前後で一定する。



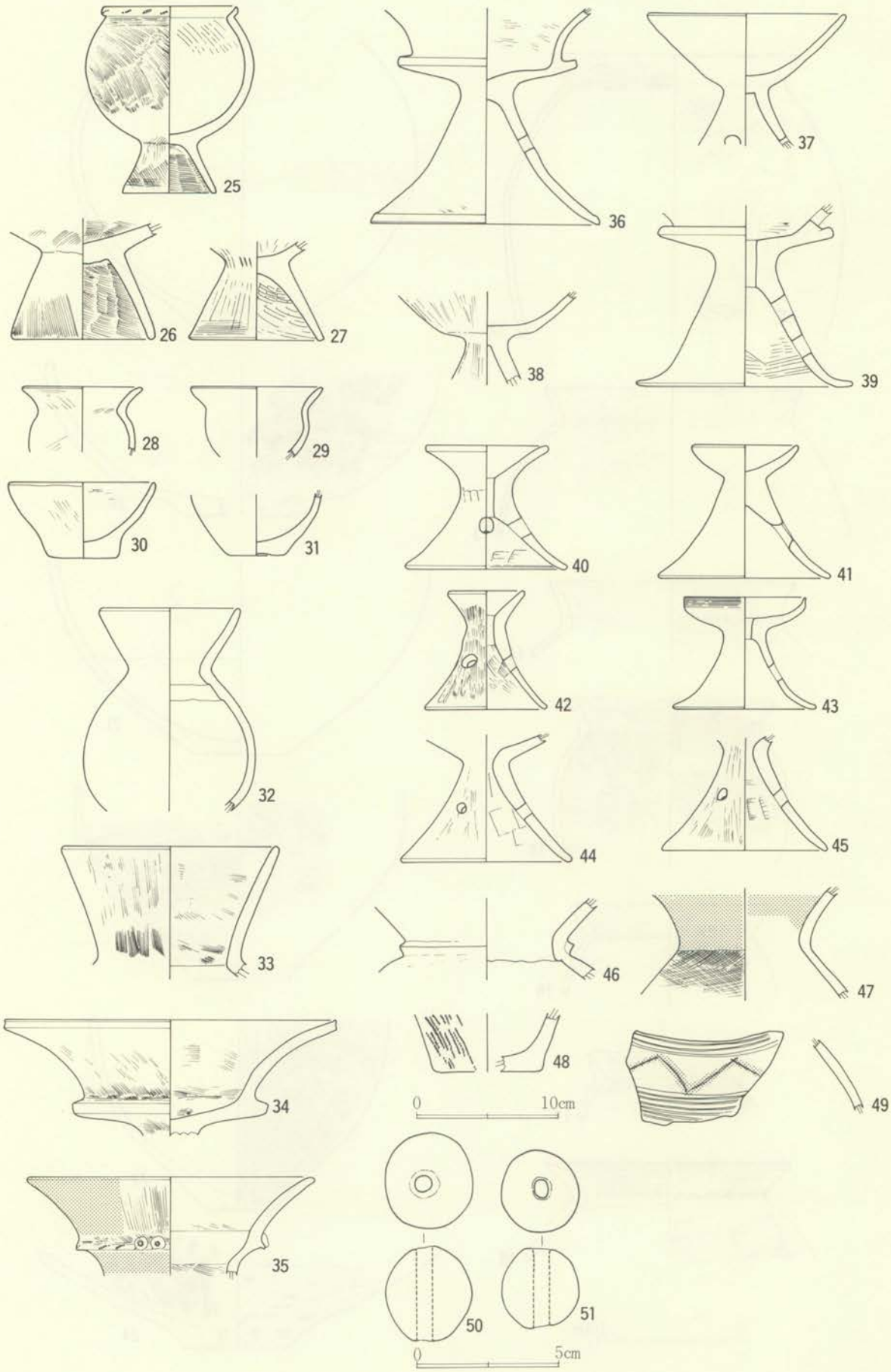
第45図　26号住居跡実測図（1/80）



第46図　26号住居跡出土遺物実測図（1/4）



第47図　26号住居跡出土遺物実測図（1/4）



第48図　26号住居跡出土遺物実測図（1/2・1/4）

柱穴は住居跡対角線上に４か所検出した。いずれも掘込みは深く、整った形態である。

他に炉址西側に３か所、北隅に１か所、南隅壁溝内に１か所、貯蔵穴内に２か所計７か所の小ピットを検出した。炉址西側の小ピットは12～13cmの深さで掘込みの形態は一定していない。それらの位置からは支柱穴とは考え難いが、炉址の近辺に位置することから、あるいは土器類を保持するためのピットとも考えられる。

いずれにしても確証はなく他のピット共々性格は判然としない。

東側壁の中央やや北寄り、壁際で貯蔵穴を検出した。165cm×80cmの長方形状に掘られ深さは35cm程度である。覆土内から23・30の遺物を検出した。

炉址は床面中央からやや西寄りに位置する。

焼土を除去した炉址は不整な形状を呈し深さは７cm前後と浅い。炉底部の焼化は著しく掘込みの周縁にまで及んでいる。平面図では本来陰影をつけて炉址の位置を明示するところであるが、本跡は遺物の出土が多く繁雑になるのを避けるため破線でその位置を示すに留めた。

遺物の出土状態

調査中、出土状況図に印した遺物は、500余点に達するほど多量であった。言うまでもなく覆土の上層から床面に出土したものまでの総量であるが、その比率は上層34％、中層37％、下層18％、床面（床面直上も含む。）11％であった。つまり、出土遺物の71％までが中層以上の覆土中の出土であり、本跡に共伴するものは極めて少ないものと言えよう。

平面的には住居跡全体に散在した状態で出土しており、接合した資料も広い範囲に散乱している。床面から出土し、かつ完存あるいは復原して完形となったものは10・11の甕と25の台付甕の３点に過ぎなかった。これらは本跡の共伴遺物と考えてよいだろう。

平面図中、同一個体は記号と番号によって出土地点を明記することとした。記号と遺物番号の対応は平面図に併記したので参照されたい。

28号住居跡〔第49図〕

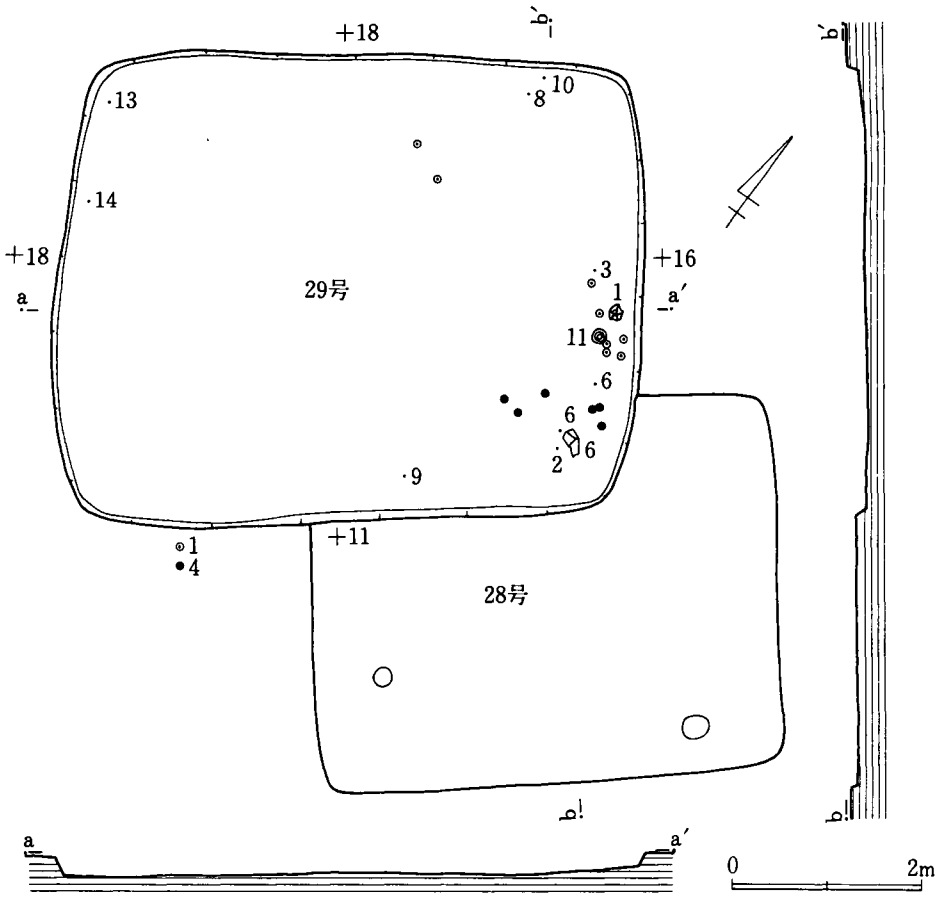
遺跡の中央部からやや東に寄った台地の平坦部に所在する。29号住居跡と重複し、北側壁の約2/3を失っている。また耕作による削平が著しく覆土の遺存は僅かで覆土内からの出土遺物は皆無であった。

本跡の確認面では、黄褐色土に暗褐色土の混在する覆土で所在を確認できたが、調査の結果、壁高の遺存は数cmに過ぎなかった。

平面規模は4.9m×3.9mを測る長方形状である。床面は全体に平坦であるが、軟弱な状態である。

南側で２か所の小ピットを検出したが、共に浅く掘込み径も小さく柱穴とは考え難い。炉址の痕跡も検出できなかった。

出土遺物は前述したように皆無で、本跡の時期を決定すべき資料は得られなかった。



第49図　28・29号住居跡実測図（1/80）

29号住居跡〔第49・50図・図版36〕

台地の平坦部に位置し、28号住居跡を切って構築される。本跡も耕作による削平が著しく、覆土の残存は20cm前後で、壁高の大半を失っている。

覆土

残存部位は僅かな厚さであったため土層断面の実測は省略して、所見を記するに留めた。

覆土の大半は暗褐色土が占め、黒色土、黄褐色土が混在し、床面近くで若干量の焼土粒がみられた。

構造

平面規模6.2m×4.9mを測る、東西方向に長い方形状である。

床面は全体に軟弱で、周縁部に比して中央部がやや凹んだ状態である。

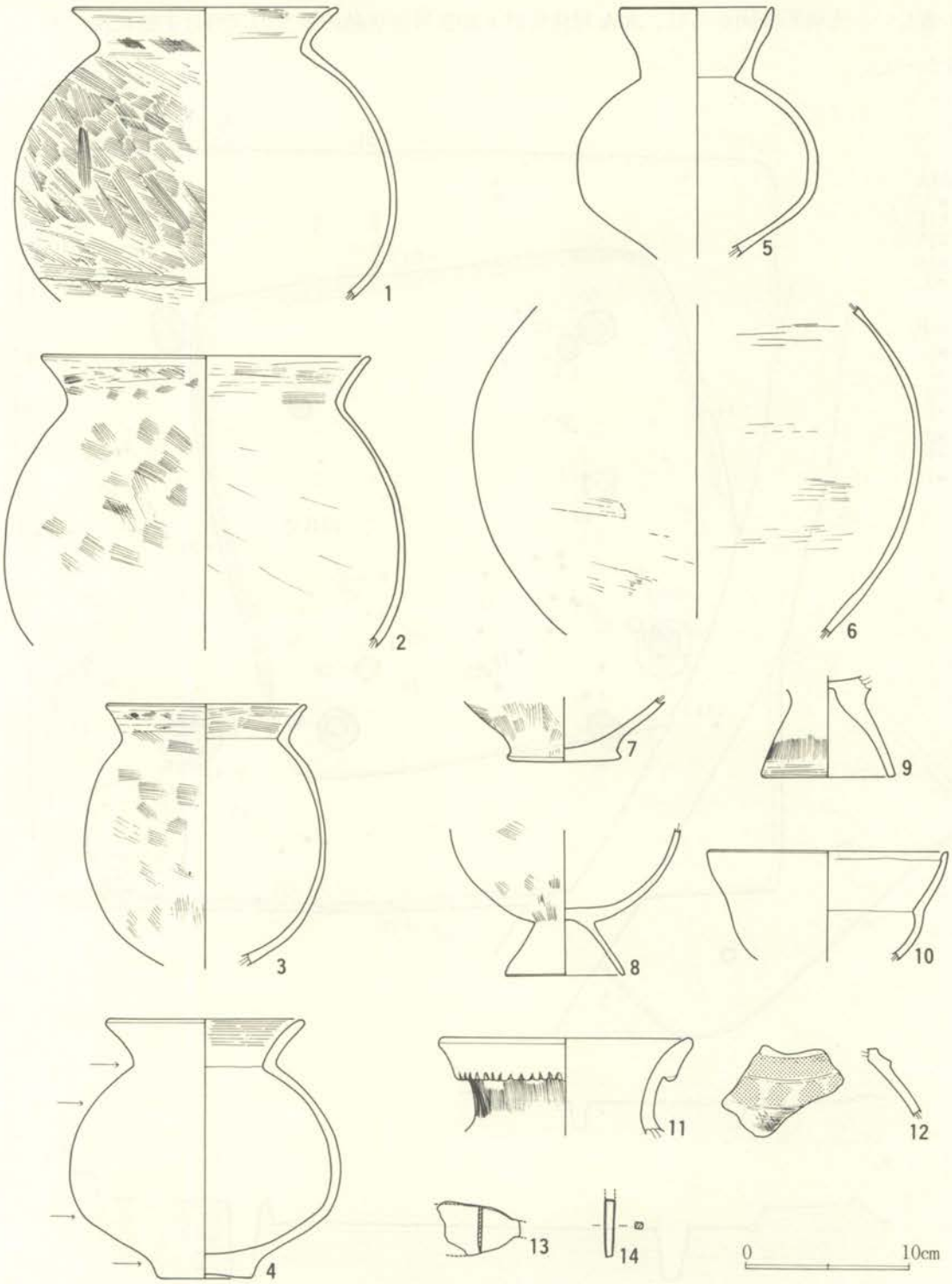
柱穴及び炉址は検出できなかった。

遺物の出土状態

出土総量は僅少である。平面的には住居跡東隅に多く、接合した資料は狭い範囲に集中している。

出土層位は、残存した層の中位のものが大半を占め、床面より出土された遺物の内、実測に耐え得るものはなかった。

復原して完形となった第50図4の壺も中位からの出土遺物である。



第50図　29号住居跡出土遺物実測図（1/4）

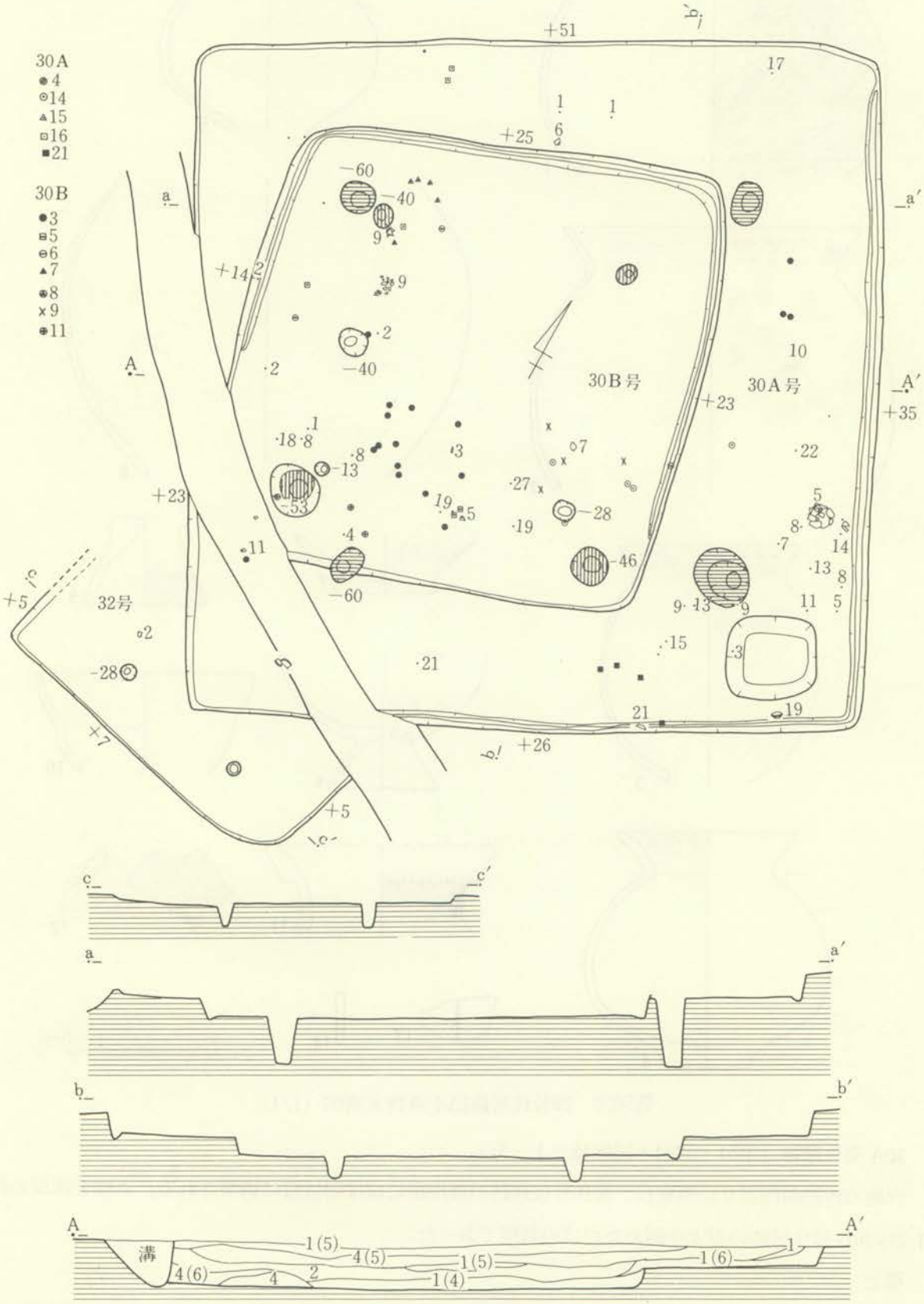
30A 号住居跡〔第51・52図・図版15－1、37〕

台地の西側斜面寄りに所在し、30B 号住居跡の埋没後にほぼ同位置に構築される。本跡の床面の約1/2は30B 号住居跡の覆土を固めただけの状態であった。

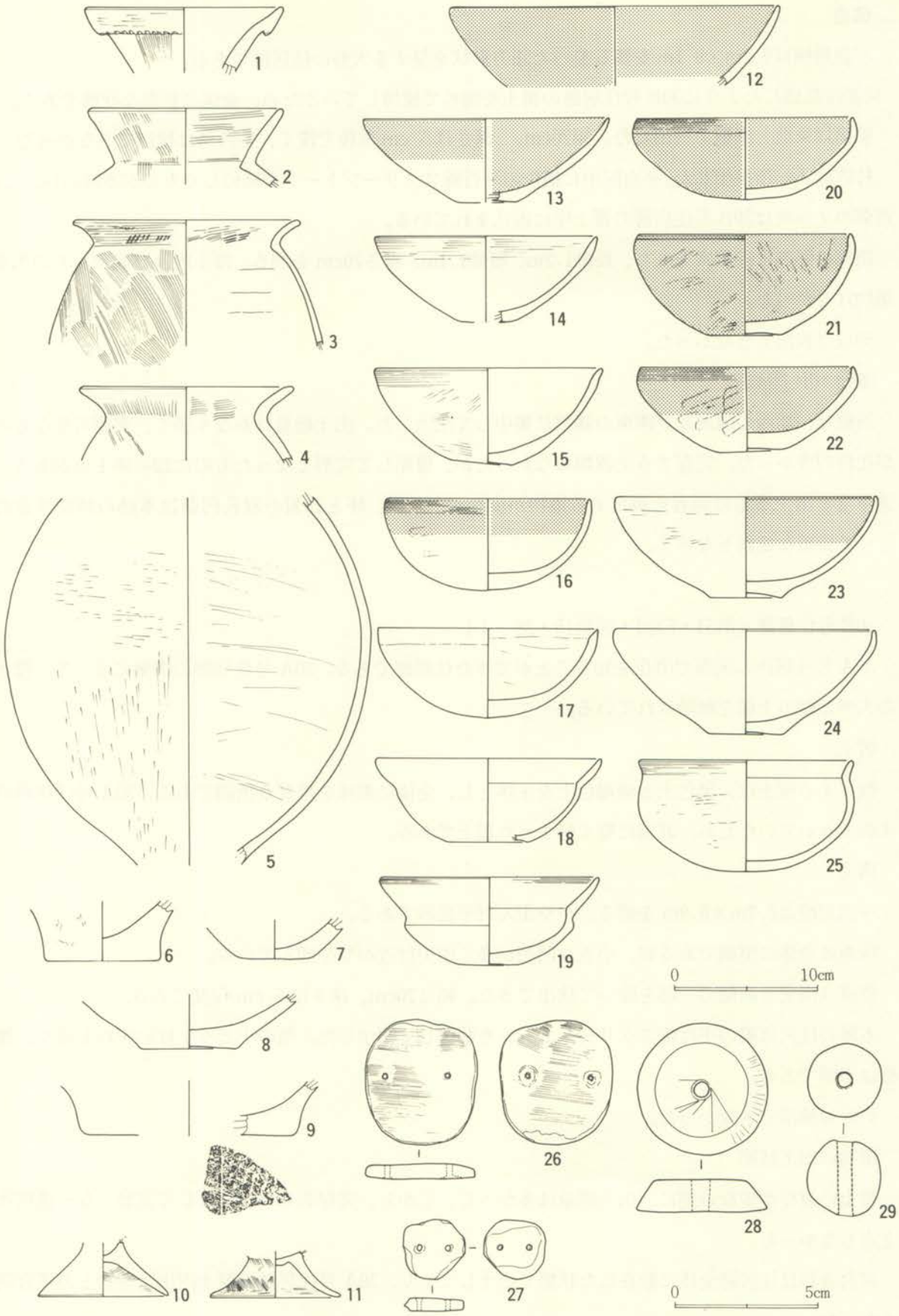
覆土

暗褐色土・褐色土・黒色土が充満し、自然堆積の様相を呈す。中層以上の各層位中にローム粒の混

在が著しい。土層断面図からは、30A 号住居跡と30B 号住居跡の覆土の区分は明瞭に画することはできなかった。



第51図　30A・B・32号住居跡実測図（1/80）



第52図　30Ａ号住居跡出土遺物実測図（1/2・1/4）

構造

平面規模は9.2m×9.1mを測る整った正方形状を呈する大形の住居跡である。

床面は前述したように30B号住居跡の覆土を固めて使用しているため、全体に軟弱な状態である。

壁溝は東壁と南壁で検出した。幅20cm、 深さは5 cm前後で浅く、他所には検出できなかった。

柱穴は4か所検出した。平面図中に横位の平行線スクリーントーンを貼付したものが本跡の柱穴で、西側の2か所は30B号住居跡の覆土中に掘込まれている。

南東の隅部に貯蔵穴をもち、長軸1.2m、短軸1.1m、深さ70cmを測る。覆土内及び底部からの出土遺物はなかった。

炉址は検出できなかった。

遺物の出土状態

遺物は、北西の隅部及び南東の隅部に集中して出土した。出土総量はかなり多く、実測可能なものが比較的多かった。完存する土器類はなかったが、復原して完形となったものに22の坏1点がある。遺存度と出土層位の両者を満足する遺物が少なかったが、坏と石製の双孔円盤は本跡の時期決定にとって貴重な資料となろう。

30B号住居跡〔第51・53図・図版15・38―1〕

30A号住居跡の床面で所在を知ることができた住居跡である。30A号住居跡の構築によって、覆土の大半と壁の上部を削除されている。

覆土

残存する覆土は、黒色土と暗褐色土を主体とし、全体に黒味を帯びる色調である。30A号住居跡の床面とされていたため、非常に堅く締まった覆土である。

構造

平面規模は6.2m×5.9mを測る、やや歪んだ平面形である。

床面は全体に堅緻であるが、小さな凹凸が多く中央付近がやや凹んでいる。

壁溝は南壁と西壁の一部を除いて検出できた。幅は20cm、深さは5 cm程度である。

本跡の柱穴は縦の平行線スクリーントーンを貼付して明示した。他の小ピットはいずれも浅く、性格は不明である。

炉址は検出できなかった。

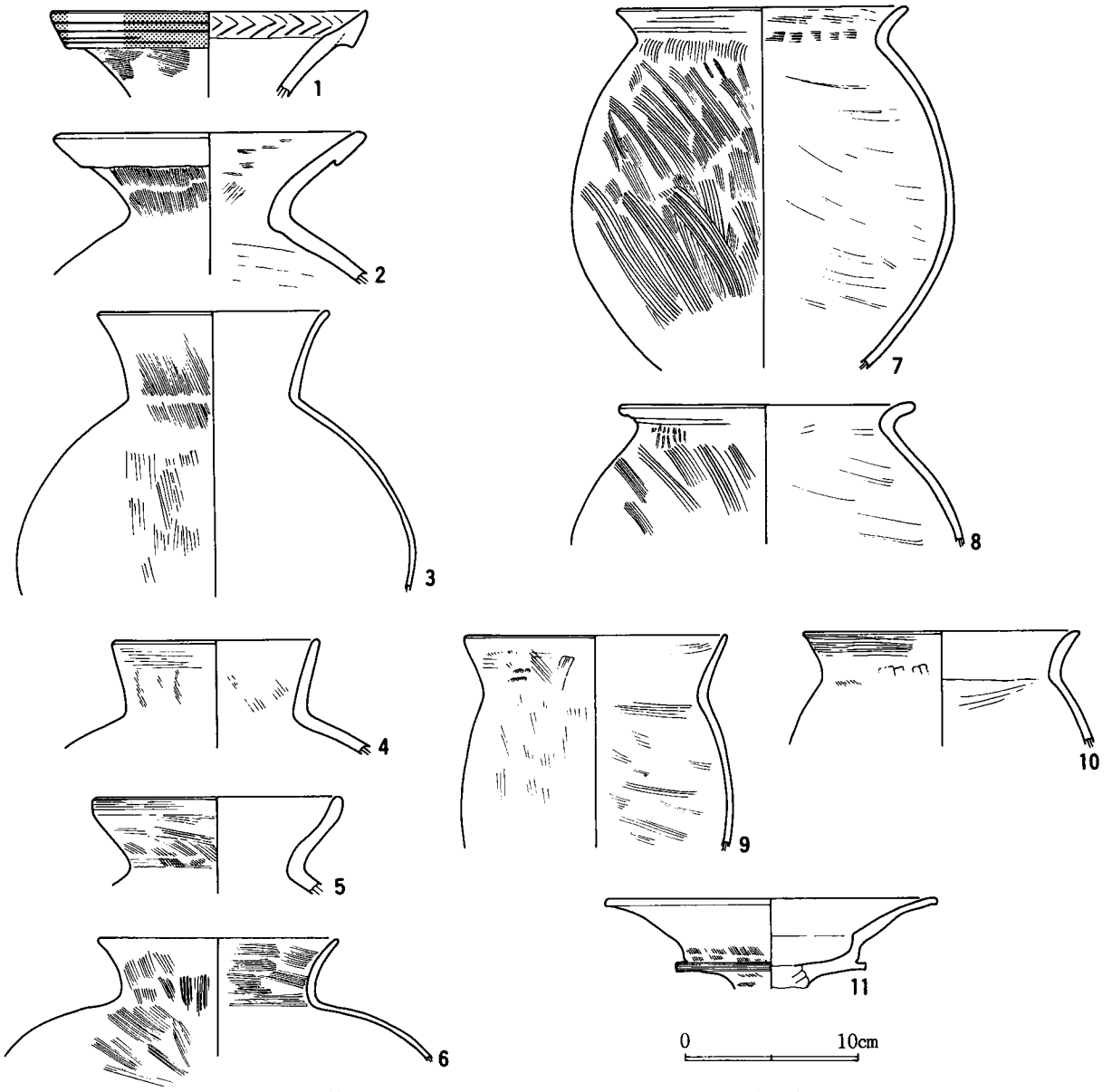
遺物の出土状態

覆土の遺存が少ない割に、出土総量は多かった。しかし、完存あるいは復原して完形となる遺物は1点もなかった。

接合資料は住居跡全体に散在した状態で出土しており、30A号住居跡の覆土内出土遺物との接合例もあった。

出土した遺物はいずれも床面上20cm以下のものであり、本跡に共伴する可能性の強いものである

と考える。



第53図　30Ｂ号住居跡出土遺物実測図（1/4）

32号住居跡〔第51・54図〕

30A 号住居跡が本跡と重複して構築されているため大半を失い、耕作時の削平と相挨って僅かに痕跡を留める程度である。

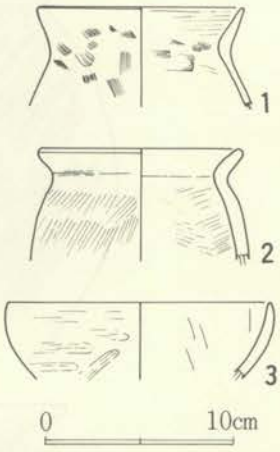
確認した面では周囲との土色にわずかな差が認められる程度の状態であった。

したがって、住居跡の範囲はこの土色の差を基に調査を行い、これをもって住居跡規模とした。覆土については解説を要する程遺存しなかったため省略した。

平面規模は明らかではないが、検出できた南壁で4.5m を測る。おそらく他の壁長もこれと大差ない規模の平面形であろう。検出した範囲では床面は軟弱であった。柱穴はやや近接して２か所に検出した。

出土遺物は全て確認面で検出したものである。

なお、3軒の住居跡の新旧関係は32号住居跡→30B号住居跡→30A号住居跡の順である。



第54図　32号住居跡出土遺物実測図（1/4）

33号住居跡〔第55～58図・図版16・38－2、39－1〕

遺跡の中央平坦部に所在し、他遺構との重複もなく遺存状態は良好である。

覆土

堆積の様相は自然堆積を思わせる層序であるが、中層より上からは多量の出土遺物があり、埋没完了以前に人為的投棄が行なわれている。覆土は褐色土、黒色土、暗褐色土の順に堆積し、暗褐色土が全体の約2/3を占める。

構造

平面規模は7.4m×5.5mを測る、小判形である。

床面は全体に平坦に構築され、柱穴で囲まれた内側の範囲は周縁部に比して堅緻な状態である。

壁溝は北側を除いて検出した。幅は10cm程度で掘込みの深さは5 cm前後と浅かった。

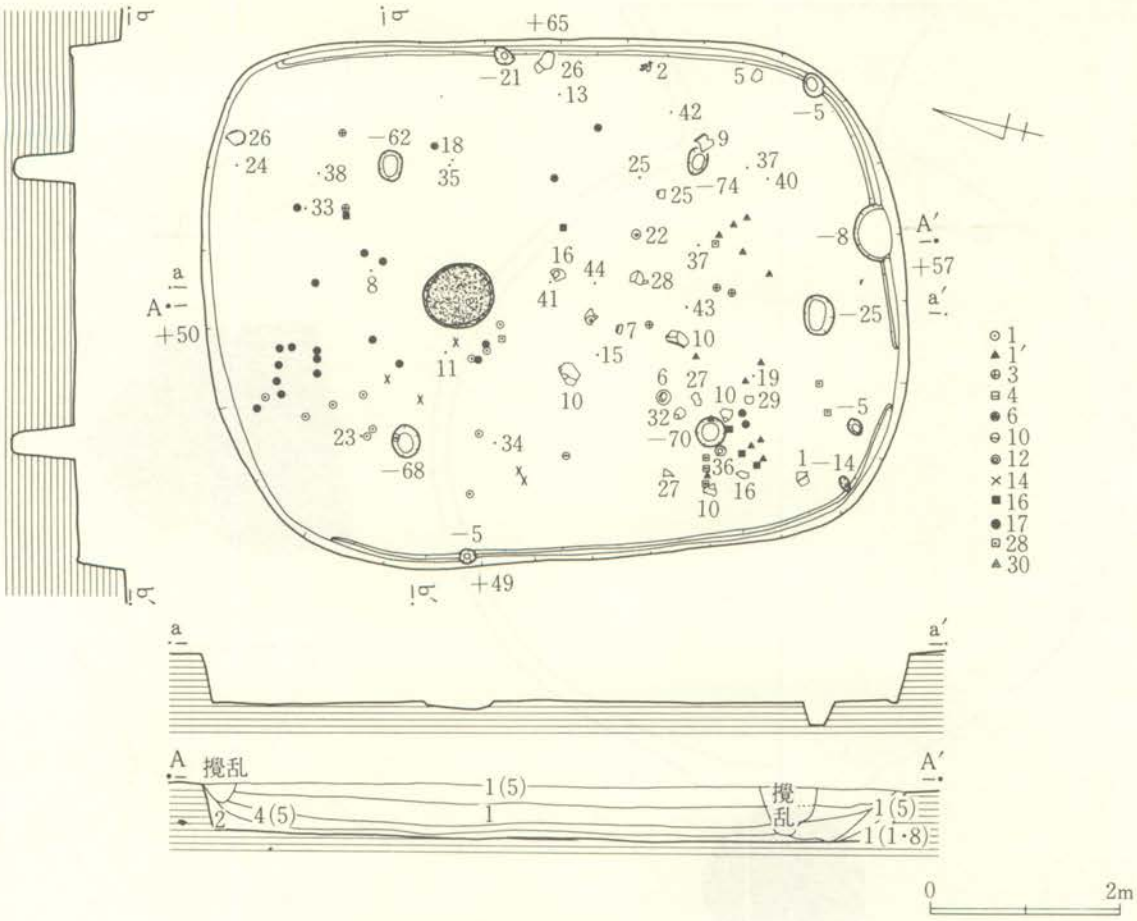
柱穴は主柱穴と考えられるものは5か所検出した。住居跡対角線上に位置する4か所はいずれも70cm前後の深さをもち、径もほぼ同じであるが南側の柱穴（－25）はやや位置的にずれており、主柱穴として扱うには疑問が残った。壁際で5か所の小ピットを検出したが、掘込みの深さは一定せず、位置的な面からもこれらを支柱穴と即断することはできない。したがって、ここでは壁際に小ピットを検出した事実を報告するに留めることとした。

炉址は、住居跡中央からやや北に寄った位置に検出した。焼土の堆積範囲は75cm×65cm、厚さは8 cm程度である。炉址底面は焼化が著しく長期間の使用が窺える。

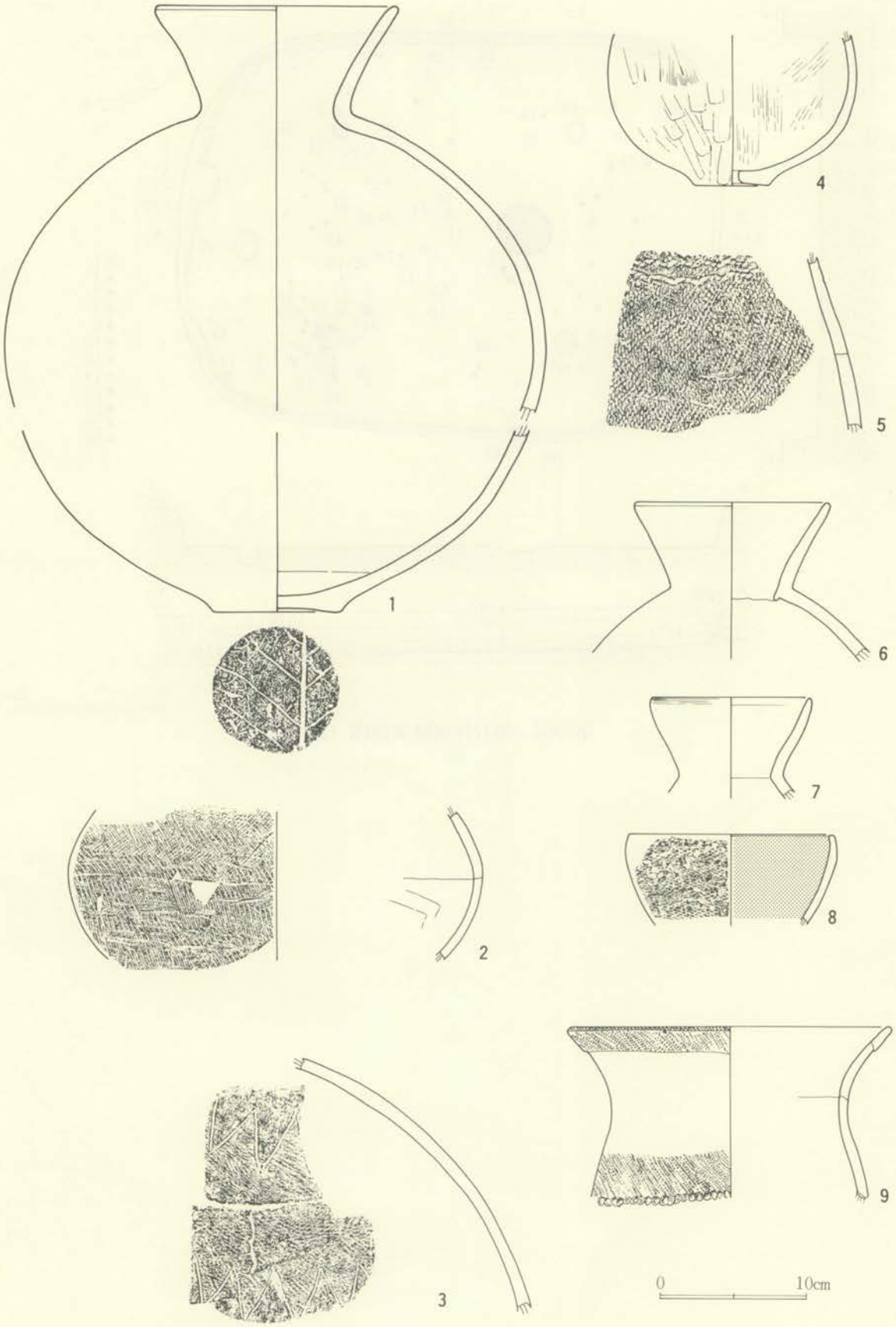
遺物の出土状態

本跡は多量の遺物を出土し、出土総量は450余点を数える。平面的には住居跡全面に散在した状態であるが、出土層位は上・中層のものが全体の80％を占めた。

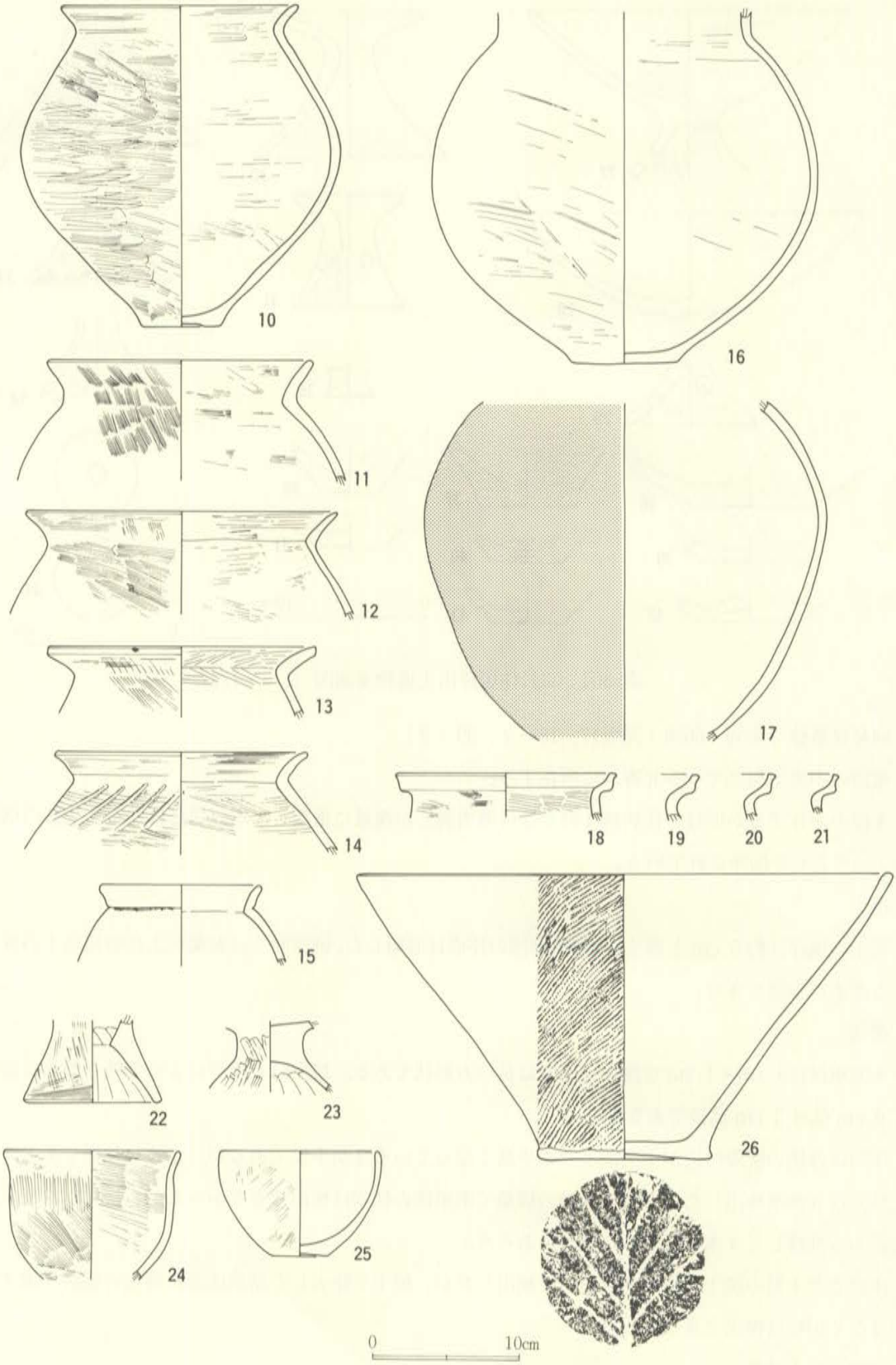
接合資料は広い範囲に散乱し、接合例も上・中層に集合している。接合して完形となるものはなく、実測し得た遺物も遺存は悪かった。



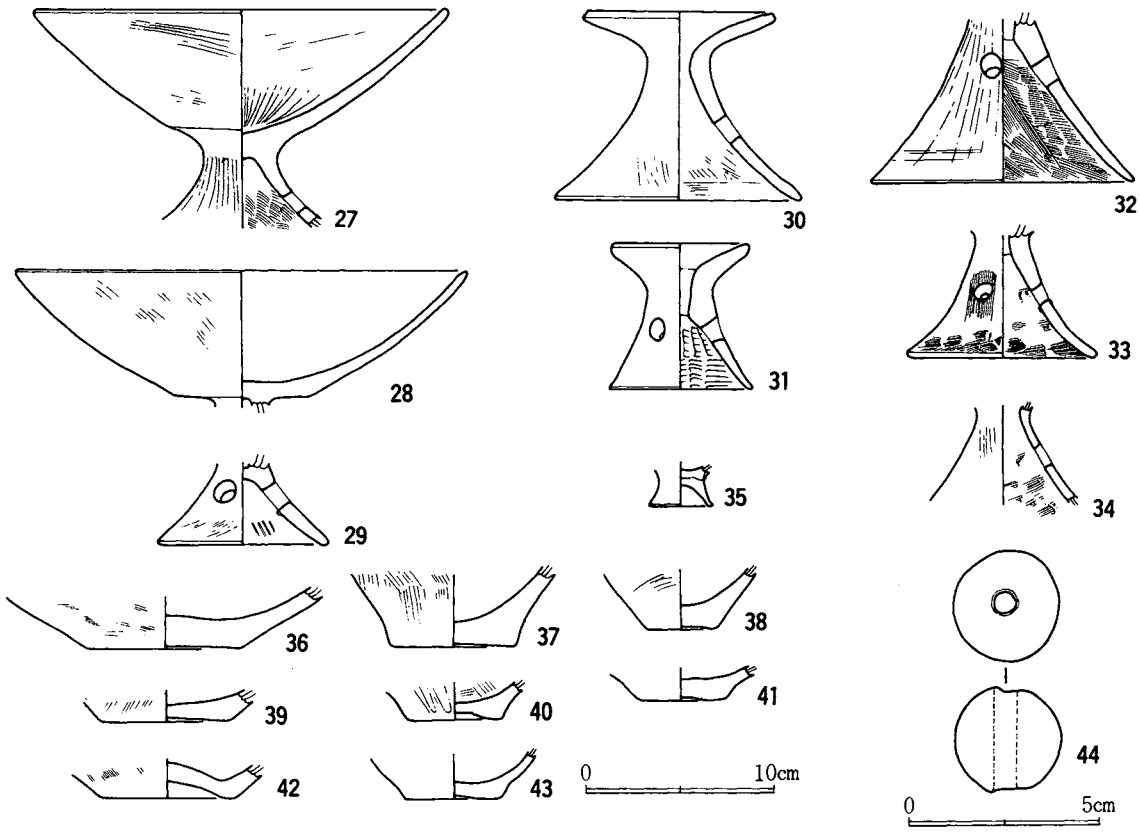
第55図　33号住居跡実測図（1/80）



第56図　33号住居跡出土遺物実測図（1/4）



第57図　33号住居跡出土遺物実測図（1/4）



第58図　33号住居跡出土遺物実測図（1/2・1/4）

34号住居跡〔第59・60図・図版17、18－2、39－2〕

遺跡の中央平坦部でやや北寄りに所在する。

本跡の所在するか所は、住居跡4軒と3号墳周溝とが複雑に重複し、本住居跡は35号住居跡の構築によって約¼を削除されている。

覆土

覆土の遺存は約5 cmと薄く、土層断面図の作成は省略した。確認面では黄褐色土に暗褐色土の混在する覆土が視認できた。

構造

平面規模は5.1m×4.2mを測る、南北に長い方形状である。耕作時の削平によって残存壁高は北側で9 cm他は5 cm前後である。

床面は西側の壁際付近が中央部よりやや高くなっているほか平坦であるが、全体に軟弱である。

柱穴は3か所検出した。35号住居跡の構築で南東側の柱穴は検出できなかったが、検出した柱穴の位置から推察して4本の柱をもつ住居であろう。

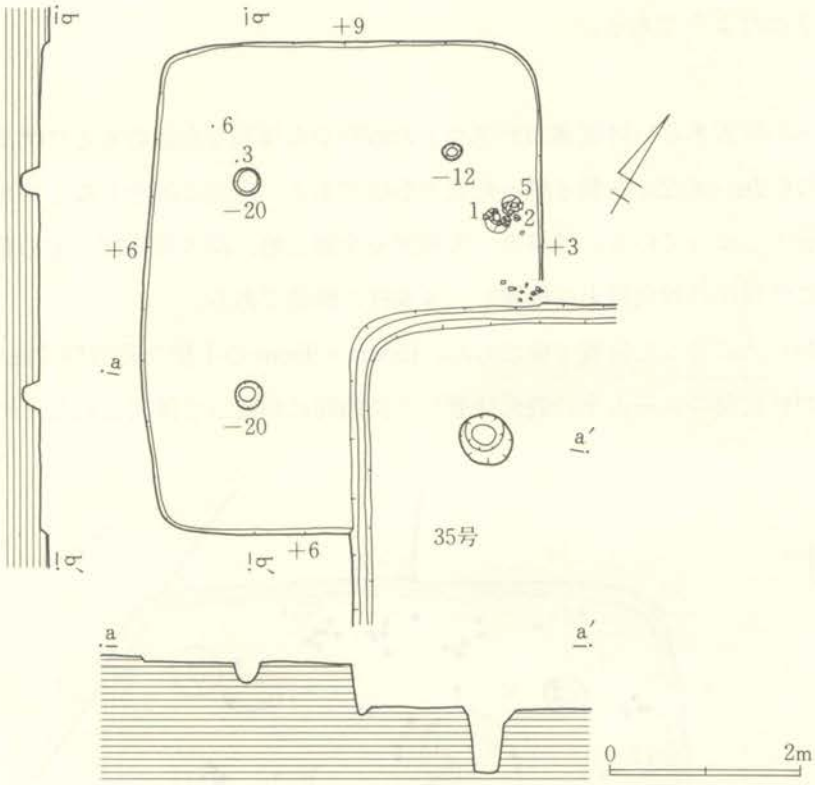
床面で若干量の焼土の堆積を数か所で検出したが、焼土を除去した結果床面に焼化の痕跡を遺すものはなく炉址は検出できなかった。

遺物の出土状態

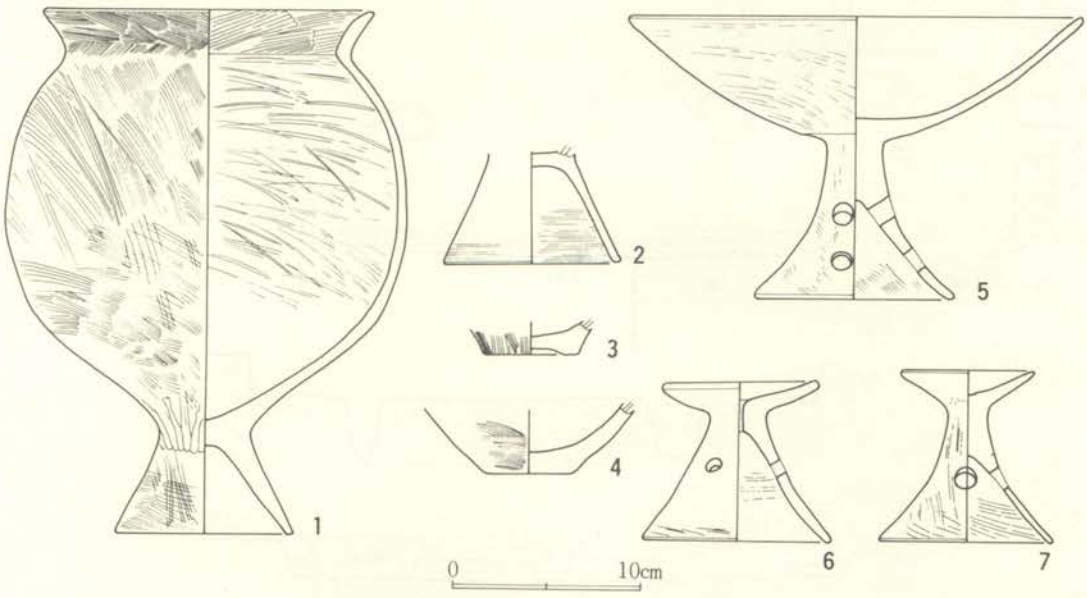
覆土の遺存が少なかったため、遺物の出土総量は少なかったが、比較的遺存度の良いものを検出で

きた。実測し得た遺物はすべて床面あるいは床面直上から検出したものである。

１の台付甕と５の高坏は東側の壁際で押し潰ぶされたような状態で出土した。出土状態と遺存度から本跡に共伴するものと考える。１の台付甕の下から７の器台が出土した。平面図中に記載できなかったので付記しておく。



第59図　34号住居跡実測図（1/80）



第60図　34号住居跡出土遺物実測図（1/4）

35号住居跡〔第61～63図・図版17・19・40〕

遺跡の中央平坦部に所在し、34号住居跡、36号住居跡、37号住居跡をそれぞれ切って構築している。

覆土

暗褐色土と褐色土が交互に堆積し、床面近くではローム粒の混在が認められる。

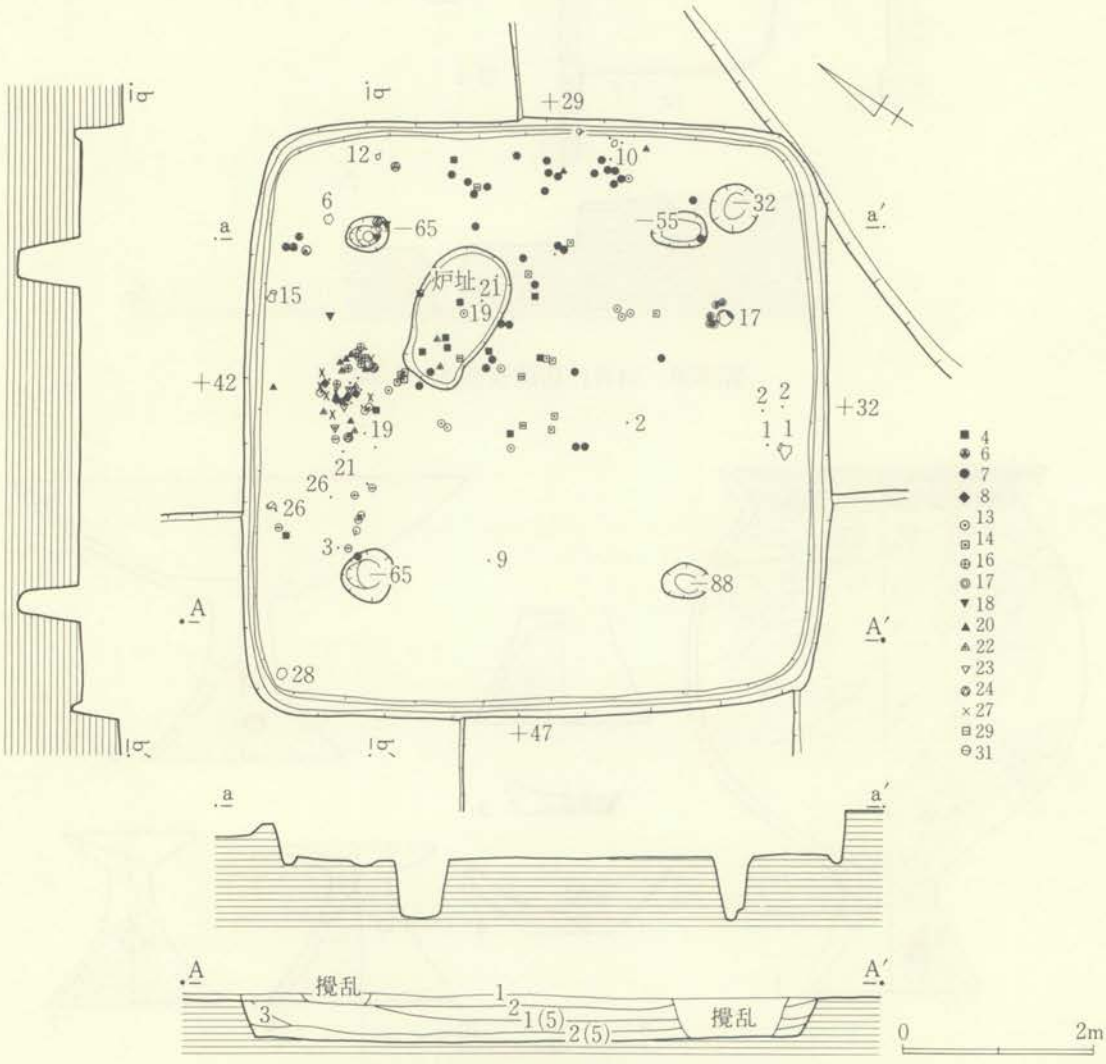
堆積の様相は自然堆積と考えられるが覆土の中・上層から遺物の出土が多く、埋没完了以前に人為的な投棄が為されたようである。

構造

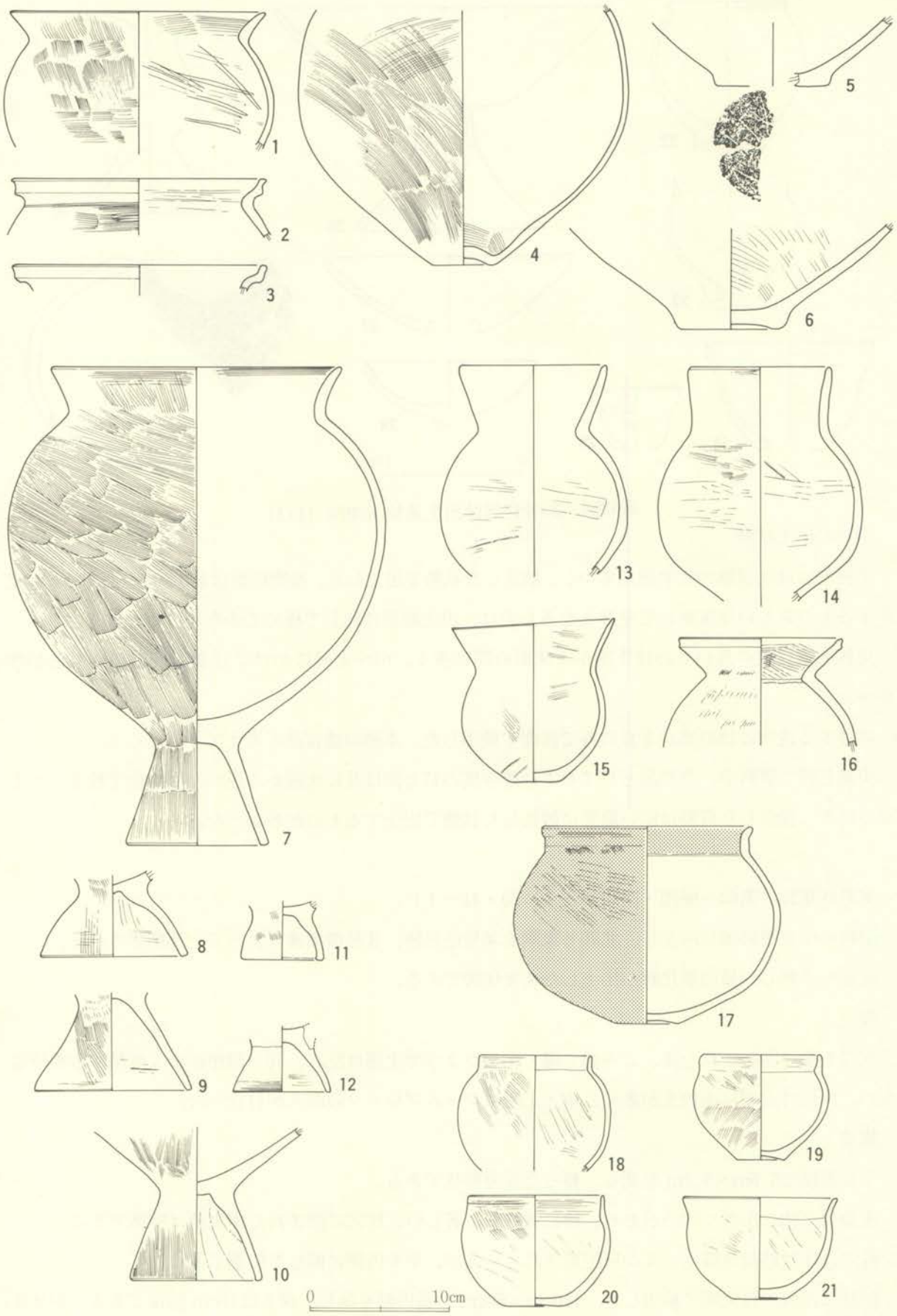
平面形、柱穴の位置あるいは壁溝の形態などの観察から周到な企画のもとに構築されたと考えられる。平面規模は6.2m×6.2m を測る整った正方形状である。床面は凹凸もなく平坦に踏み固められたようで全体に堅くしまっている。壁溝は、床周囲を全周し幅、深さ共ほぼ一定の数値を保つ。

柱穴は正確に住居跡の対角線上に位置し、4本柱の構造である。

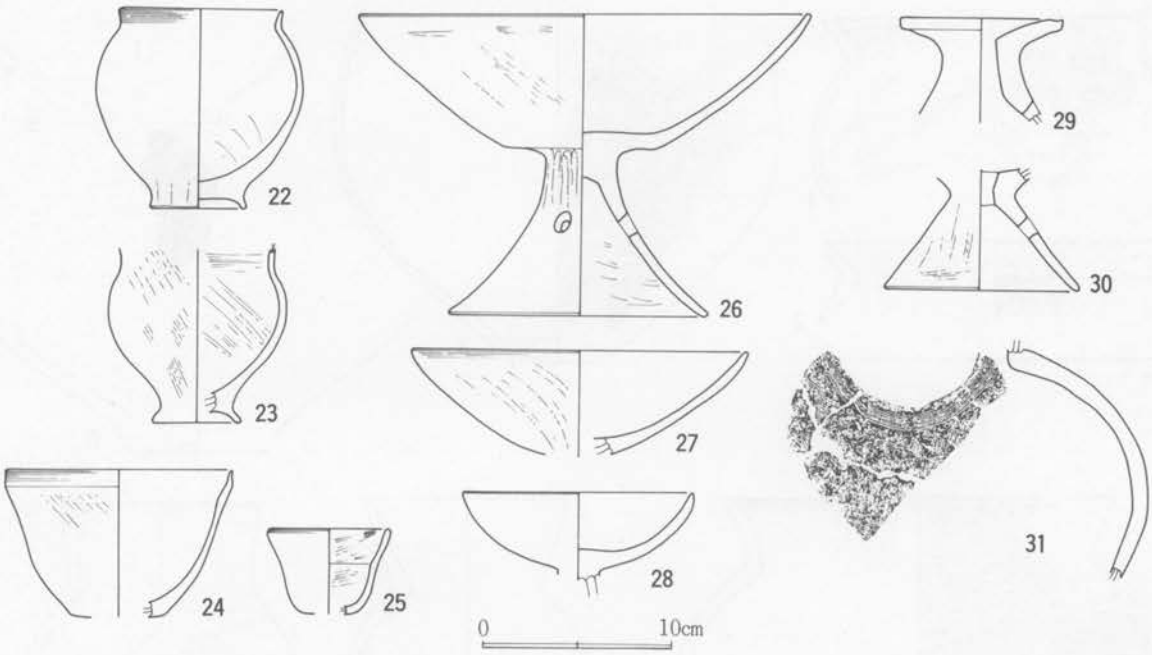
炉址は中央から北に寄った位置で検出した。150cm×90cm の不整な長円形で掘込みの深さは8 cm程度である。炉址底面のローム土の焼化は著しく長期間にわたって使用されたと考える。



第61図　35号住居跡実測図（1/80）



第62図　35号住居跡出土遺物実測図（1/4）



第63図　35号住居跡出土遺物実測図（1/4）

遺物の出土状態

平面的には住居跡の北半部に集中し、散乱した状態で出土した。遺物総数は400余点を数えるが、完存するものあるいは復原して完形となるものは、出土総量に比して極めて少なかったと言えよう。

比較的遺存度の良いものは下層から床面の間に多く、中～上層にかけては遺存度の悪いものが多かった。

完存する遺物は15の甕が１点のみで床面で検出した。本跡の遺留品と考えてよいだろう。

実測し得た資料中、完形品としてもよい遺存度の17と20は共に床面から浮いた層位中で検出したものである。接合した資料は広い範囲に散乱した状態で出土するものが多かった。

36号住居跡〔第64～66図・図版18－１、20・41－１〕

遺跡の中央平坦部に所在し、北隅と東隅を36号住居跡、３号墳周溝によって一部削除される。

床面から夥しい量の炭化材が出土した火災住居である。

覆土

火災を受け廃絶された後、ごみ捨て場と化したようで土層は乱れ、同一層序が広く堆積する部位はない。床面付近では黒色土が多く、中・上層にロームブロックの混入が目立った。

構造

平面規模は5.6m×5.2m を測る、整った正方形状である。

床面は全体に小さな凹凸があり、特に周縁部に著しい。柱穴に囲まれた中央部は堅緻である。

柱穴は住居跡対角線上に４か所配置されているが、やや内側に偏した位置である。

炉址は西側の柱穴間で検出した。110cm×60cm の長円形を呈し、深さは10cm 前後である。炉址床面の焼化はさほど著しい状態ではなかった。

南西隅の壁際で60cm×50cm、深さ40cmのピットを検出した。柱穴と考えるには位置的に不自然であり、やや小規模ではあるが、貯蔵穴であろうと考える。

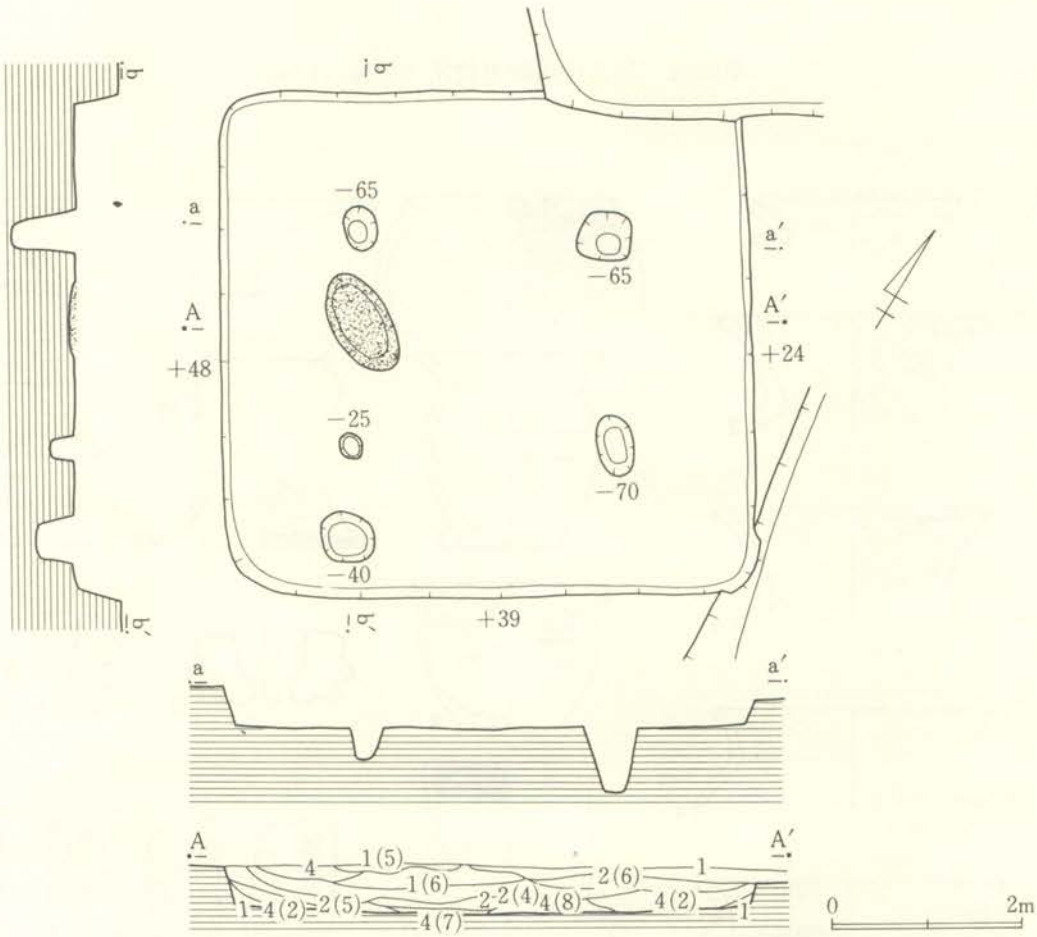
遺物の出土状態

床面から夥しい量の炭化材が出土し、火災を受けた後、廃絶されたことを物語る。

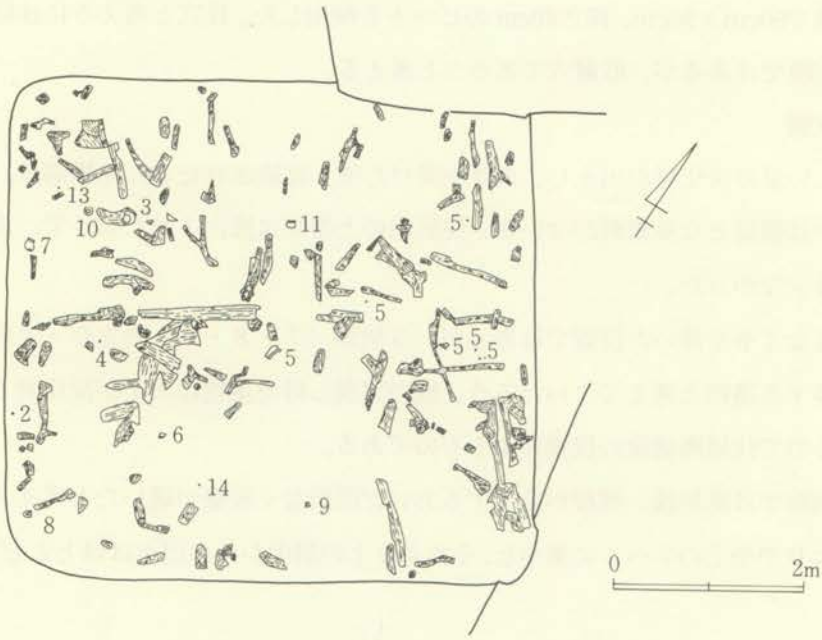
火災の前後かは確証となる資料がないが、住居内の土器類は搬出されたようで、炭化材の下部からの遺物の出土は少なかった。

床面からではなくやや浮いた位置ではあるが、３個体（７・８・10）の完存・完形品が出土しており、本跡に共伴する遺物と考えてよいだろう。他の実測し得た遺物は大半が炭化材と同じか上のレベルで検出したもので住居廃絶後の投棄によるものである。

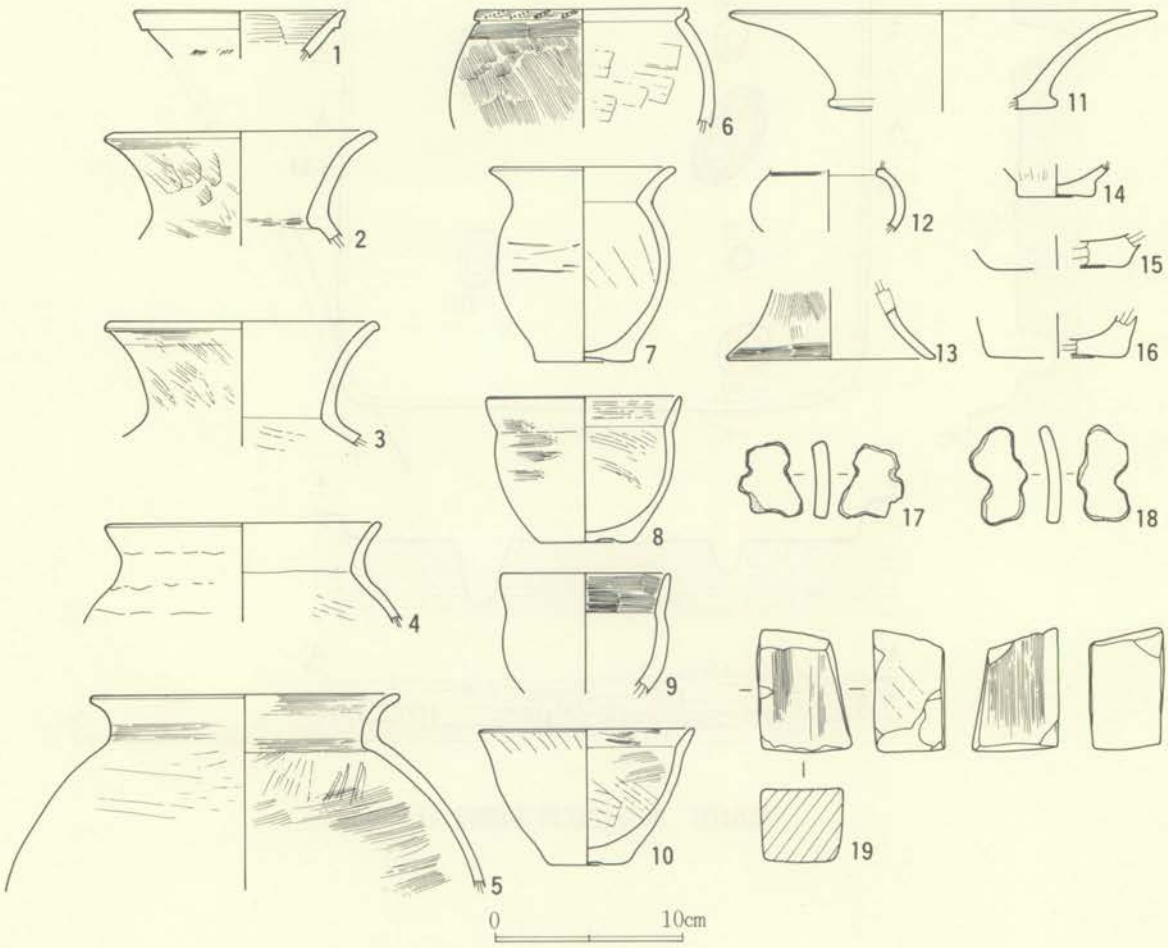
土層断面の観察では廃絶後、埋没が完了するあいだ間断なく投棄が続いたと考えられるが、遺物の出土は炭化材よりやや上のレベルに集中し、それより上の層中からの出土はほとんどみられなかった。



第64図　36号住居跡実測図（1/80）



第65図　36号住居跡遺物出土状態（1/80）



第66図　36号住居跡出土遺物実測図（1/4）

37号住居跡〔第67・68図・図版21・41－２〕

遺跡の中央平坦部に所在する。35号住居跡に一部を削除され、３号墳周溝は本跡の覆土中に構築され床面下にまで達している。さらに耕作時の削平と相挨って遺存状態は劣悪だったが、床面、柱穴内から遺存度の良い資料を得ることができた。

覆土

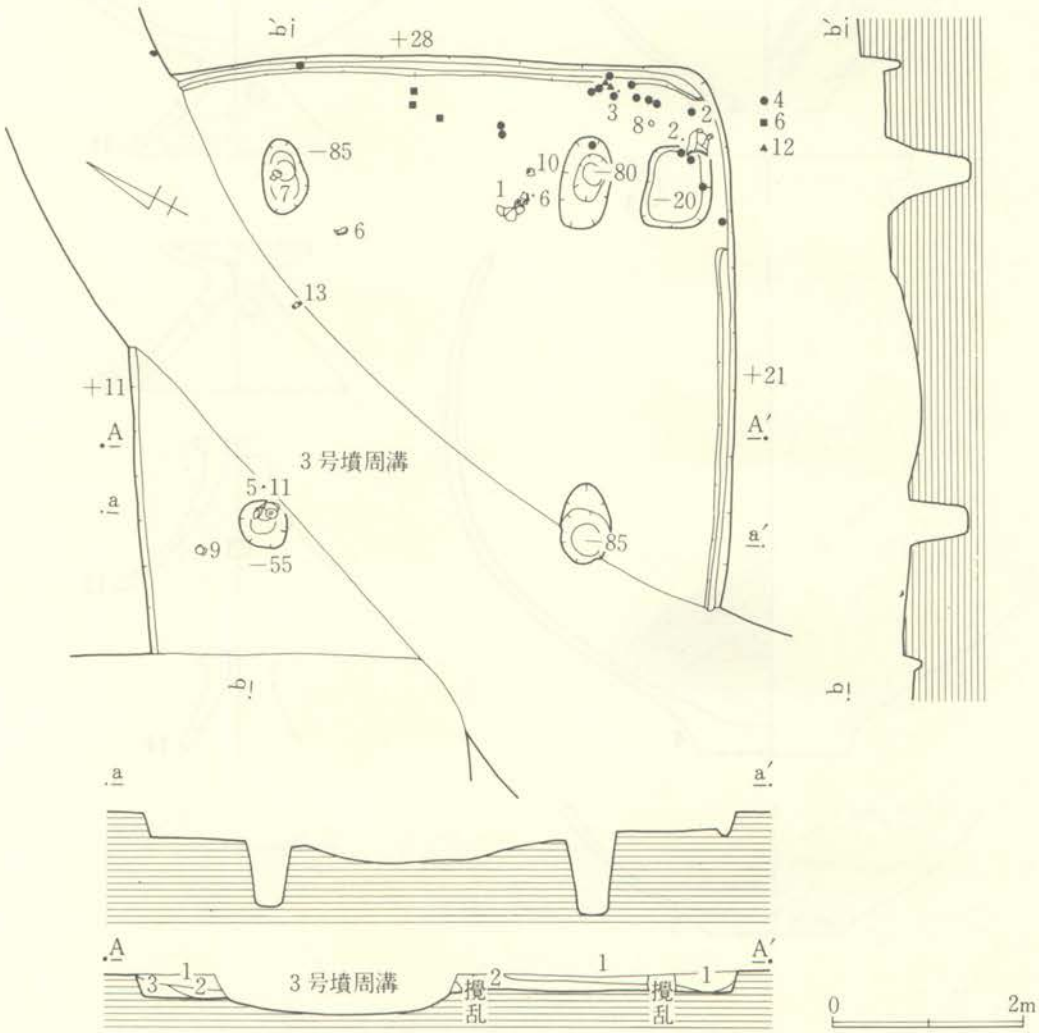
観察か所では約1/3の範囲を３号墳周溝によって削除され、覆土の遺存度は僅かである。遺存部位では暗褐色土、褐色土を主体とした覆土で堆積の様相について特記すべき事項はない。

構造

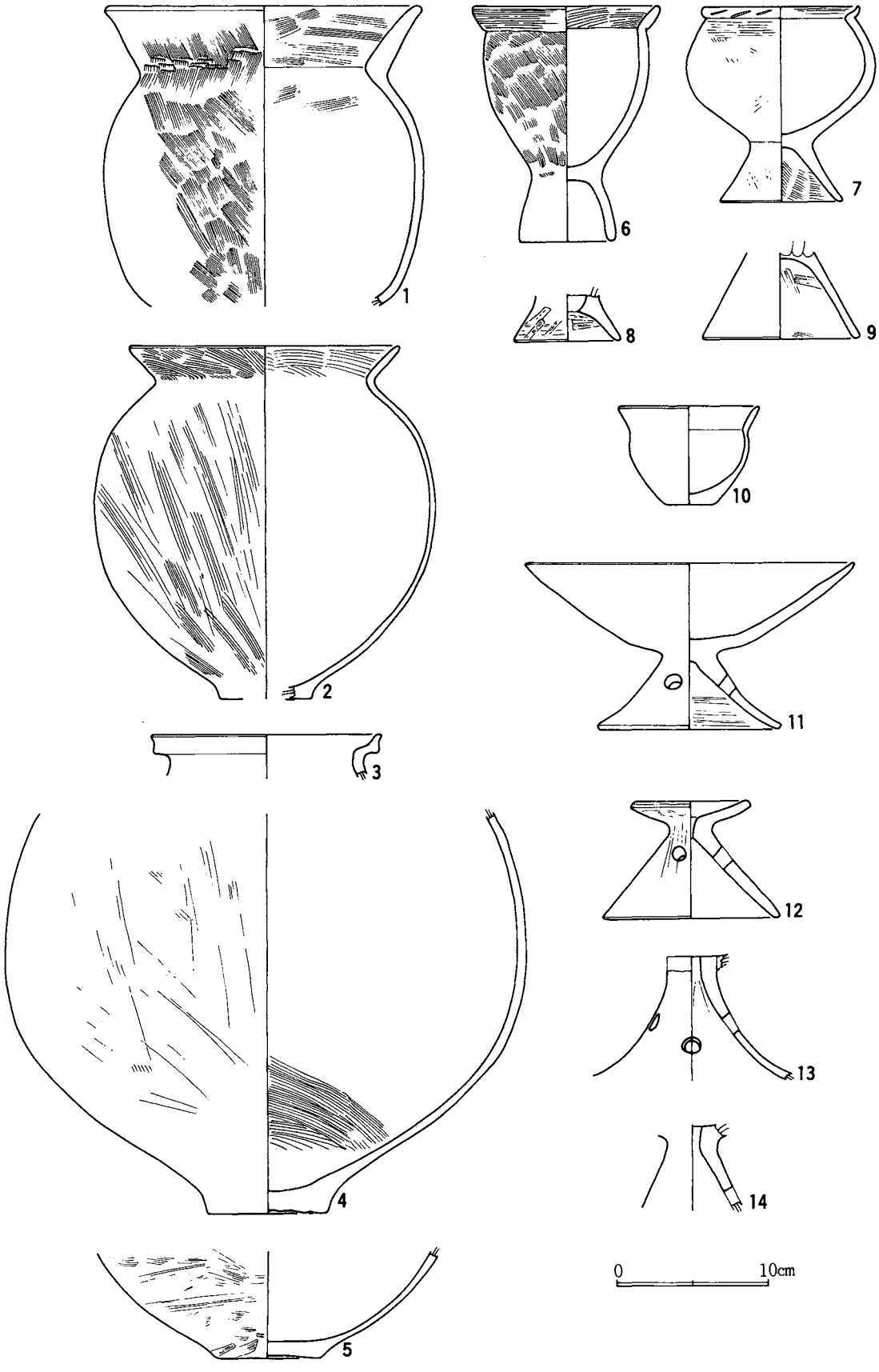
西側の壁が35号住居跡によって削除されているため全容は知り得ないが南と北の壁間で6.3m を測る。柱穴の配置から推察すれば、本跡は正方形に近い形状と考えられるので一辺6.3m 前後の平面規模として大差ないであろう。

床面は古墳の周溝によって削除された部位であるが、遺存部の観察では小さな凹凸の多い全体が軟弱な状態である。

柱穴は４か所検出した。北西に位置する柱穴がほぼ円形で深さ55cm に対し、他の柱穴は長円形状で



第67図　37号住居跡実測図（1/80）



第68図　37号住居跡出土遺物実測図（1/4）

80cmの深さに掘込まれている。位置は、住居跡対角線上からはずれておりやや不自然な配置である。

壁溝は東側と南側で検出できたが、北側には検出できなかった。幅20cm、深さは５cm前後である。

南西の隅部で85cm×70cm、深さ20cmのピットを検出した。ピット内の覆土を除去したところ掘込みは浅く、当初このピットを貯蔵穴とすることに抵抗をもった。しかし、床面で落込みを確認できたこと、覆土内の掘込みが床面に達したものではないことなど明らかに本跡の床面に掘込まれたものであることから貯蔵穴として扱った。

炉址は古墳の周溝によって削除されたらしく、遺存する床面には検出できなかった。

遺物の出土状態

遺物の出土総量は少ない住居跡である。平面的には南東隅部の床面から出土するものが多かった。北側に位置する柱穴の覆土内から遺物が出土しており、７の台付甕は柱穴底面で横位の状態で検出した。このような完存品が柱穴底面から出土した例は本跡のみである。

接合した資料は広い範囲に散乱した状態で出土しており、床面で検出した６の台付甕は復原して完形となったものの共伴遺物とは考え難い。

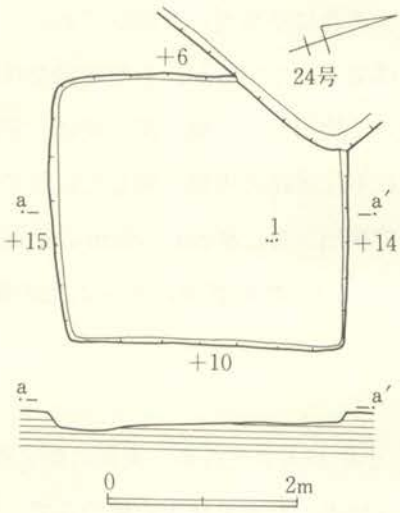
遺存度と出土状態からすれば７の台付甕は共伴遺物の可能性が強いものと考える。

40号住居跡〔第69・70図〕

遺跡の中央平坦部に所在し、24号住居跡の構築によって北東隅を削除されている。本跡は住居跡群の中に所在するが、遺構の確認段階ではその所在は確認できなかった。後の試掘によって所在を知った住居跡である。

覆土

住居跡外との区別が不明瞭な覆土である。黄褐色土の単一層であったため、確認面のローム土とほとんど差がなく、調査の経過に伴って、乾燥度の差が生じたことにより本跡の落込みに気づいた次第



第69図　40号住居跡実測図（1/80）

である。

構造

平面規模は3.2m×2.8mの小規模な方形状である。

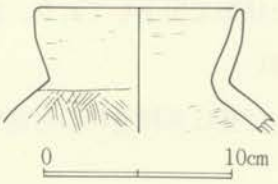
床面は東から西へ向って低くなり、全体に軟弱で平坦でない。また、柱穴・炉址等通例の住居跡にみられる施設は皆無である。

遺物の出土状態

出土遺物の総数は土器小片が数点に過ぎなかった。実測に絶え得る遺物は図示した壺の口・頸部小片1点だけである。

出土遺物

1．壺　口・頸部1/4・口径（110）。口・頸部は内外面共ヨコナデを施す。胴部は外面に刷毛目、内面はナデが施される。覆土内から出土した。



第70図　40号住居跡出土遺物実測図（1/4）

46号住居跡〔第71・72図・図版22―1、42―1〕

3号墳の墳丘下に所在し、調査区の東端で検出した。近世に構築された溝によって北壁と西壁の一部を削除されたが、遺存状態は良好である。

覆土

土層は細分されているが、主体は暗褐色土と褐色土で、それぞれに混在する土砂の差によって区分した。堆積はレンズ状の自然堆積とみてよいだろう。

構造

平面規模は5.7m×4.9mを測る、南北にやや長い方形状である。

床面は凹凸もなく全体に平坦に構築されているが、やや軟弱な状態である。

壁溝は北側の一部と南東隅を除いて検出した。幅、深さ共に一定に掘込まれる。

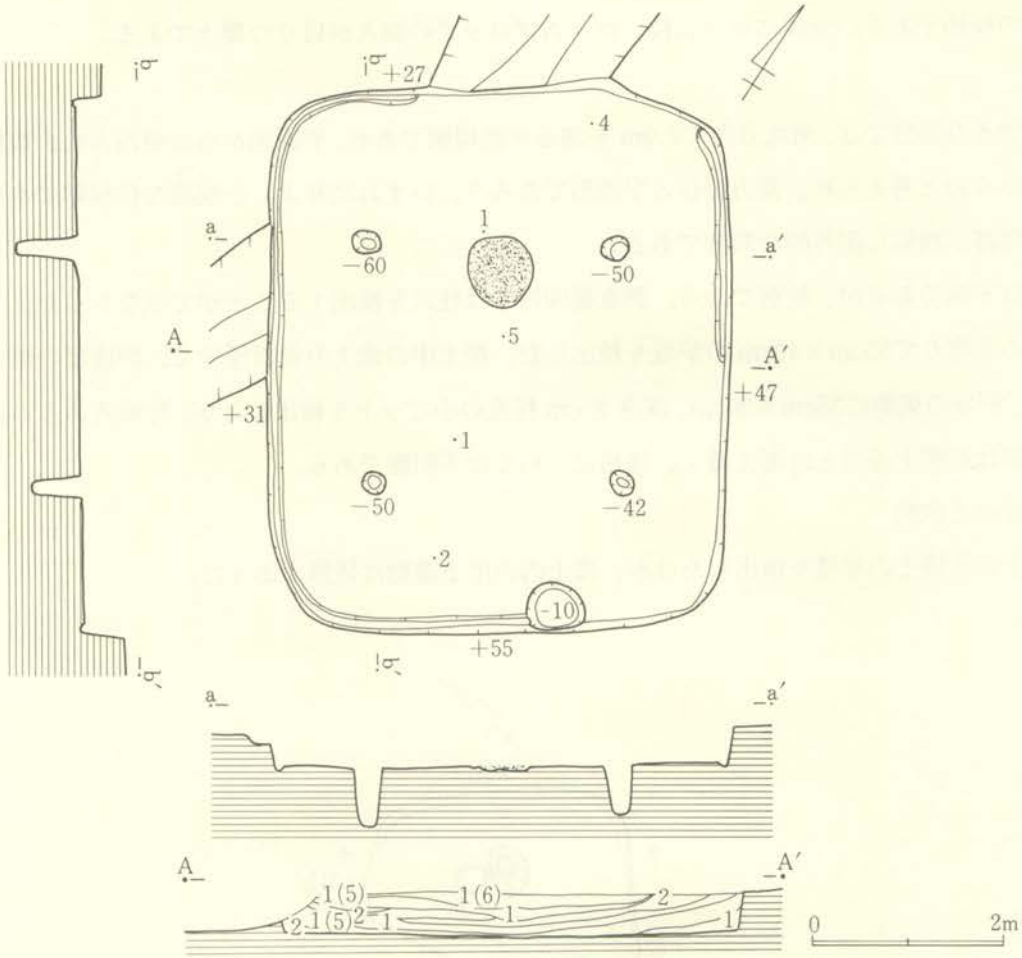
柱穴は4か所検出したが、いずれも住居跡の内側に偏した位置である。

炉址は住居跡の中央から北寄りで検出した。80cm×70cmの範囲で焼土の点在があり、覆土を除去したところ焼土量は少量であった。しかし、炉址底面のローム土の焼化は著しく長期間の使用が窺える。

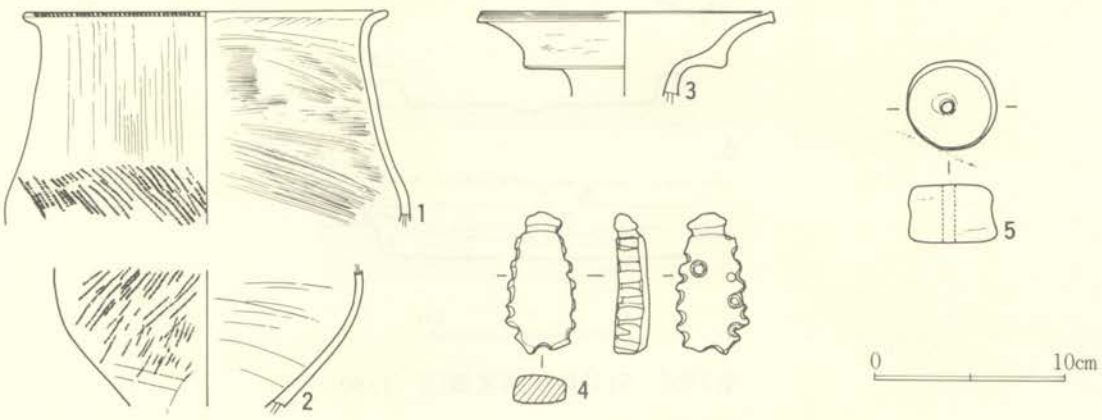
遺物の出土状態

出土総量は200余点を数えるが、小片が大半を占め、実測に耐え得る遺物は僅少である。

実測し得た遺物の内で、床面から検出したものは1の甕のみで、他はいずれも覆土内からのものである。



第71図　46号住居跡実測図（1/80）



第72図　46号住居跡出土遺物実測図（1/4）

51号住居跡　〔第73図〕

３号墳の北側に隣接し、調査区内で最北に位置する住居跡である。区域外に全体の約1/2がかかったため、全容を調査することはできなかった。

覆土

調査区の画する線上で土層断面の実測を行なった。覆土の主体は褐色土で、北側からの流入が著し

い堆積の様相である。全体にローム粒、ロームブロックの混入が目立つ覆土である。

構造

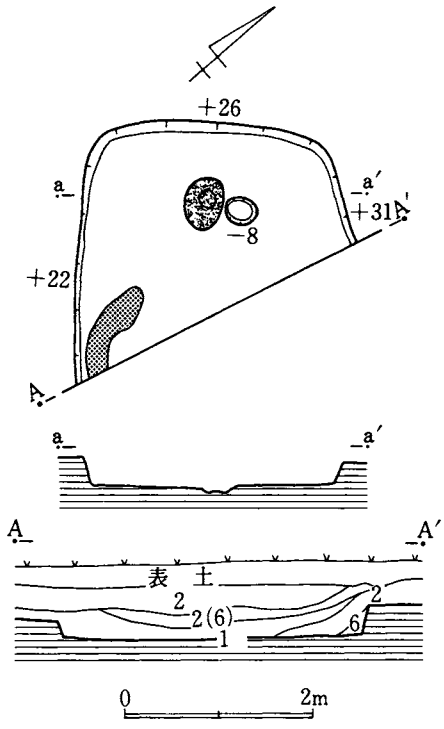
検出できた部位では、南北方向で2.9m を測る平面規模である。平面図からは東西方向の規模はこれより長いものと考えられ、長方形状の平面形であろう。いずれにせよ、小規模な住居跡で本遺跡の中では40号跡が類似し例外的な形態である。

床面は平坦であるが、軟弱である。調査範囲内では柱穴を検出することができなかった。

床面の北寄りで55cm×40cm の炉址を検出した。覆土中の焼土の量は僅少で、炉底面の焼化も少なかった。炉址の東側に35cm×30cm、深さ 8 cm 程度の小ピットを検出したが、貯蔵穴あるいは柱穴と考えるには形態上妥当とは考え難く、性格については不明瞭である。

遺物の出土状態

床面上から焼土の堆積を検出したほか、覆土内の出土遺物は皆無であった。



第73図　51号住居跡実測図（1/80）

４章　その他の遺構の調査

１．溝状遺構

本遺跡の調査において計12条の溝状遺構を検出した。各溝の形態、規模、方向等は不統一で、各々有機的な関連をもつものではなく、また、時期を決定する資料にも乏しく、いずれも性格的に不明瞭なものばかりである。

例外的に３号址のような柵列と考えられる遺構もあるが、この項に包括して報告することとした。

なお、溝状遺構については、個別に実測図あるいは写真図版を掲載しなかったので、全測図、航空写真等を参照されたい。

２号址

調査区の最南端に位置し、２号墳の前方部に隣接して、北西～南東に走る溝である。両端部では徐々に深さを減じてついには消滅している。確認面では幅80cm～100cm、深さは最深部で約50cm を測る。溝の断面はＵ字状を呈し、底面は平坦でない。覆土内からは土器小片数点が出土したが、実測に耐えるものではなかった。時期、性格共に不明である。

３号址〔第74図〕

調査区の南端に位置し、２号墳とほぼ並行して北東から南西方向に走る溝で、溝底には等間隔でピット状の掘込みが並ぶ。

本址も両端部に向って徐々に深さを減じ、ついには消滅している。

確認面での幅は約２ｍを測る。溝底のピット列は約２ｍの間隔で掘込まれ、深さは確認面から70～80cm である。

本址は位置的には台地の東側縁辺に沿う方向に向いており、台地東側は現地形では急角度の斜面で谷に落込んでいる。

本址の形態と位置から考えられることは、おそらく台地上で飼育する家畜類の落下、逃走を防止するために設けられた囲いのための柵列であろうと考える。

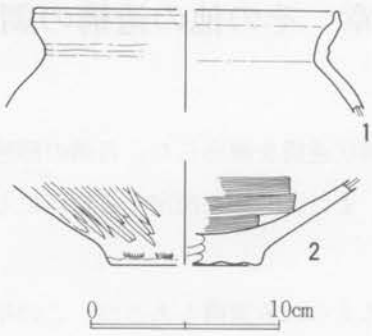
覆土内からの出土遺物は土器小片が数点あったのみで、実測し得たものは２点に過ぎなかった。

出土遺物

１．甕。底径は推定値で80mm。図示部の1/3が遺存。外面はヘラミガキされ、下端部に刷毛目を残す。内面は刷毛目。底面は、乾燥時の敷物の痕を留め、籾痕を４か所確認した。

２．甕。口径は推定値で160mm。図示部の1/5が遺存。口縁部の内外面共にヨコナデされ、胴部は内外面共にヘラナデされる。

１・２共に覆土内の出土遺物である。



第74図　3号址出土遺物実測図（1/4）

4号址

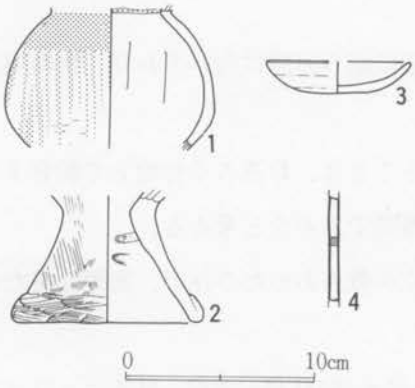
2号墳と3号址の間隙に位置し、南西から北東へ走る、僅かに遺存する溝である。構築当初から浅い溝と考えられ、耕作時の削平によって大半は消滅している。遺存部での最大幅1.8m、深さは10cm程度で、掘込みの形態等詳細は知る術もない。

11号址〔第75図〕

2号墳の後円部に接するように、北西から南東に走る直線的な溝である。南東端で3号址と交錯し、本址は3号址を切って堀込まれている。また、本址の方向は本遺跡の所在する台地を東西に縦断するような方向である。

最大幅は2.8m、深さは70～80cmを測る。断面は上部の開いたU字状を呈し、北側の立ち上りは緩るい傾斜であるのに対し南側は急角度である。

覆土内からの出土遺物は以下の通りである。



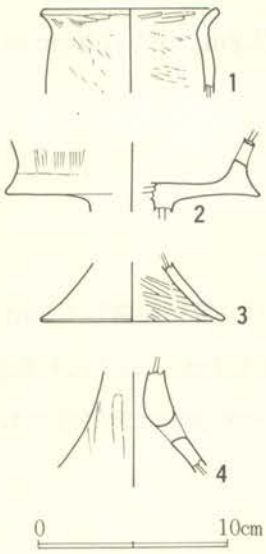
第75図　11号址出土遺物実測図（1/4）

15号址〔第76図〕

遺跡のほぼ中央部、23号住居跡の北で31号址と交錯する地点から北東へ6 mの付近で南東へ転じ、26号住居跡と重複して再び北東へ転じ6 m程で消滅している。あるいは31号址と一連の溝とも思われるが、その確証はなく別個に扱うこととした。

最大幅は１ｍを測る部位もあるが、平均すると80cm程度である。深さは40cm前後と浅く断面は上部の開くＵ字状である。

覆土内からの出土遺物は以下の通りである。



第76図　15号址出土遺物実測図（1/4）

27号址

調査区の東端で、南西から北東に向ってほぼ直線的に延びる溝である。北東端では３号墳の周溝を貫いて消滅し、南西端では徐々に浅くなってこれも消滅している。

最大幅は１ｍ前後、深さは10～20cmと浅い。断面の形状は底の平坦な鍋底形である。

覆土内からの出土遺物はなかった。

31号址

１号墳の周溝と交錯する地点から30号住居跡、23号住居跡、11号址と重複し、２号墳の後円部周溝を貫いて、12号住居跡をかすめた後消滅している。延長約50mに及ぶ不規則に屈折する溝である。確認面での幅は一定せず、最も広い部位で１ｍ、最狭部で50cm程度である。深さも同様で、10数cmから最も深い部位で50cmと一定していない。

覆土内からの出土遺物はなかった。

45号址

１号墳の周溝の内側に位置し、北端では周溝と交錯するところで消滅している。一見、墳丘下に構築されたようにもとれるが、周溝の遺存部から南側の周溝を復原してみると、本址は周溝の外側まで続いており、墳丘下にあったものではないことが明らかである。

確認面での幅は80cm～１ｍ、深さは30cm前後を測る。断面はＵ字状である。

覆土内から出土遺物はない。

47号址

3号墳の周溝の内側から北へ延び、46号住居跡と重複して周溝を貫き、48号址の覆土を削除して北西へ続いた後消滅する。幅は1mから2.8m、深さは30cmから50cmで、幅、深さ共不均一な溝である。断面は浅いU字状である。

覆土内からの出土遺物はない。

49号址

1号墳北側の周溝から約8m北に延び、東に屈曲して13m続いた後立上っている。

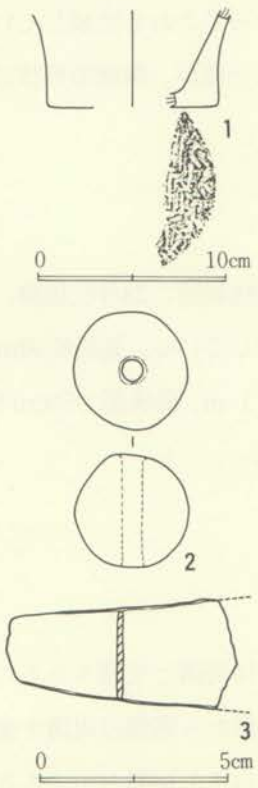
本址と重複して、大小のピットを検出したが、いずれも本址の覆土を掘込んだものである。幅は上端線で80～120cm、深さは約30cmを測り断面形は鍋底状である。

覆土内の出土遺物はなかった。

53号址〔第77図〕

調査区の北端部をほぼ東西に走る直線的な溝である。平坦部での幅は狭いが谷津に向うにつれて広がっている。平坦部では上端線の幅は60cm、調査区の西端部では1mを測る。

断面は底の平らなU字状である。



第77図　53号址出土遺物実測図（1/2・1/4）

覆土内からの出土遺物は以下の通りである。

１．甕の底部1/3。底径は推定で99mm。内外面共ヘラナデが施こされる。底面には平組みの網代目が残る。

２．土玉。完存。径30mm、中央に径５ mmの貫通孔を穿つ。

３．鉄製品。鎌の一部であろう。現存長62mm、厚さ２ mm。

54号址

調査区の北端部に位置し、孤状を呈する溝である。

本址の南端で53号址と重複しており、当初は一連の溝とも考えられたが、53号址が本址を切って構築されていることから別個の溝である。本址は確認段階でその形態から、あるいは古墳の周溝の可能性も考えられたが、調査区内の状況では確証となる資料は得られなかった。

上端線の幅は60～100cm、深さは最深部で30cmと浅く、幅・深さ共不均一な溝である。

覆土内からの出土遺物はなかった。

２．土壙

本遺跡の調査で計10基の土壙を検出した。

各土壙の規模・形態は各々異なり、42・44号址のように土壙として扱うにはやや抵抗があるものも含めたが、以下・各々について報告する。なお、いずれの土壙も覆土内からの出土遺物はなかった。

21号址〔第78図・図版22－２〕

２号墳の後円部東側、周溝の内側に所在する。

覆土は暗褐色土・褐色土・黒色土が充満し、自然堆積とみてよいだろう。

平面形は小判形を呈し、上端線で長軸230cm、短軸110cm、深さは最深部で40cmを測る。

長軸方向では土壙底は平坦にみえるが、短軸方向の観察では緩るく波打ち、断面は鍋底形である。壁の立上りは直線的で垂直に近い。

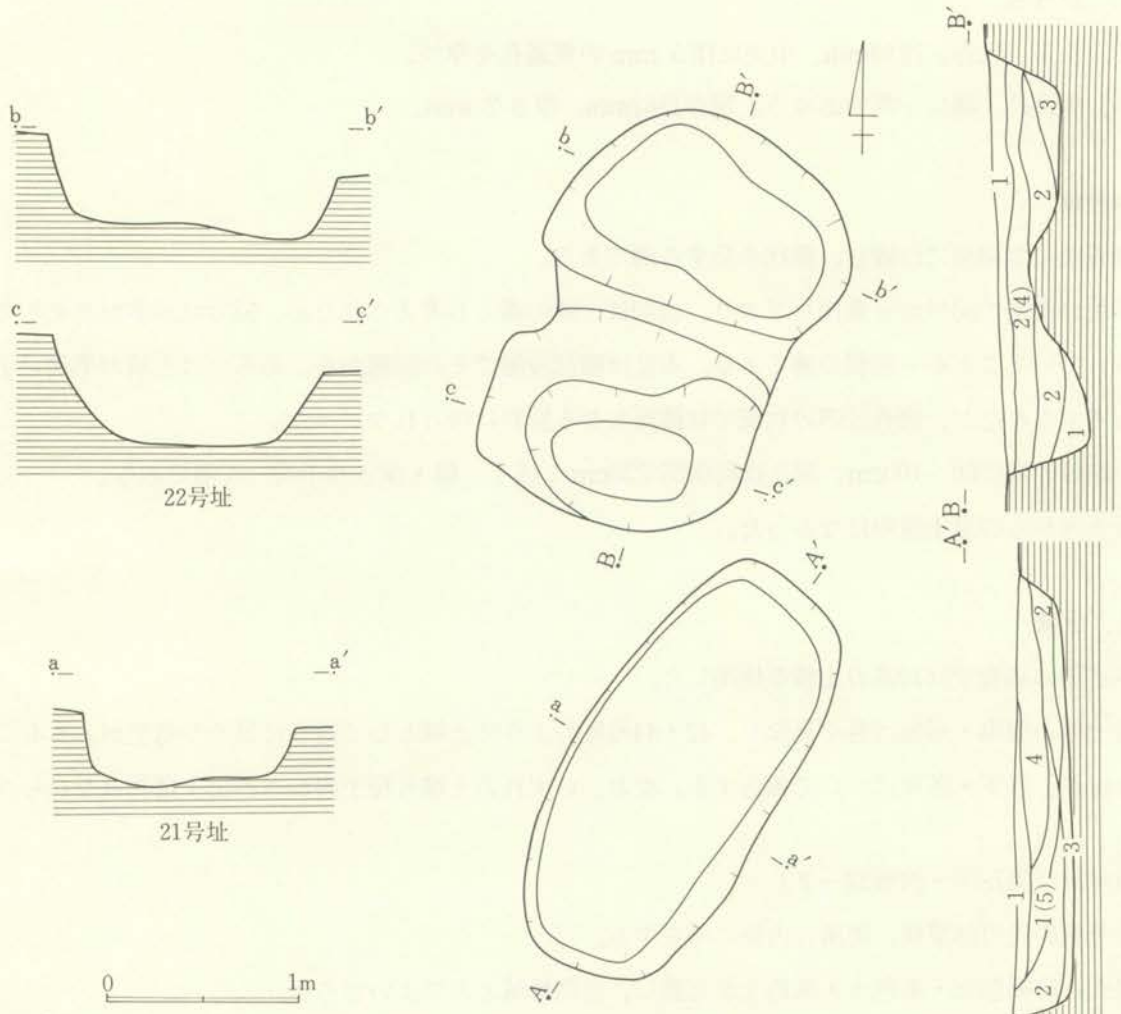
22号址〔第78図・図版22－２〕

２号墳の後円部東側、21号址の北側に隣接して所在する。形状からは２基の土壙とも考えられるが、ここでは１基の土壙として扱う。

覆土は暗褐色土・褐色土を主体とし、褐色土が大半を占める。堆積の様相は自然堆積とみてよいだろう。

平面形は長円形状の土壙が２基並列したような形状を呈している。上端線の長軸は220cm、短軸は北側で150cm、南側で140cmを測る。

土壙底の形態は、北側では中央付近がやや高くなり緩るく波打ち、南側は平坦である。壁の立上りは傾斜をもち、大きく上端部の開く断面形状である。



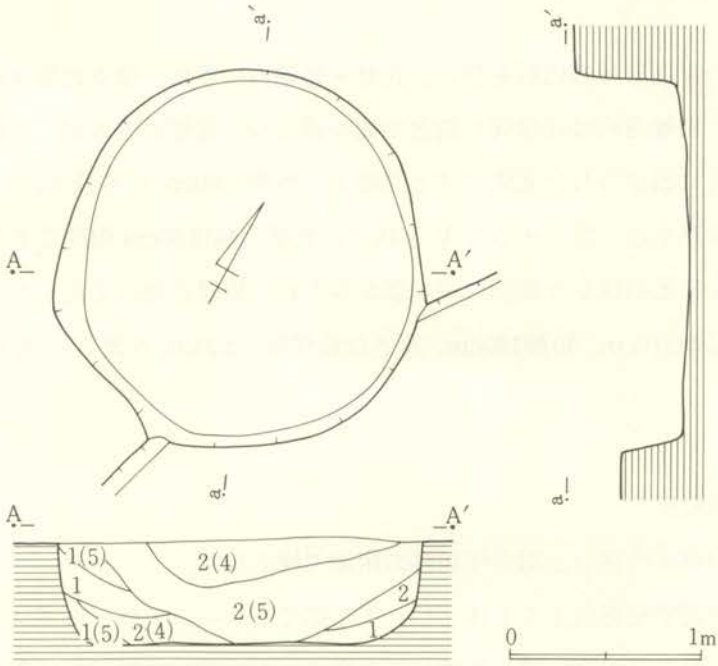
第78図　21・22号址実測図（1/40）

39号址〔第79図・図版23－1〕

台地平坦部に所在し、18号住居跡を切って構築される。

覆土は褐色土が主体で、自然埋没の様相を呈す。各土層中に黒色土、ローム粒の混入が目立つ覆土である。

平面形は、上端線で径190cm のほぼ円形を呈し、底面の形状も相似形に近い。底面は緩く波打ち、平坦ではない。壁の立上りは垂直に近く、深さは55cm を測る。

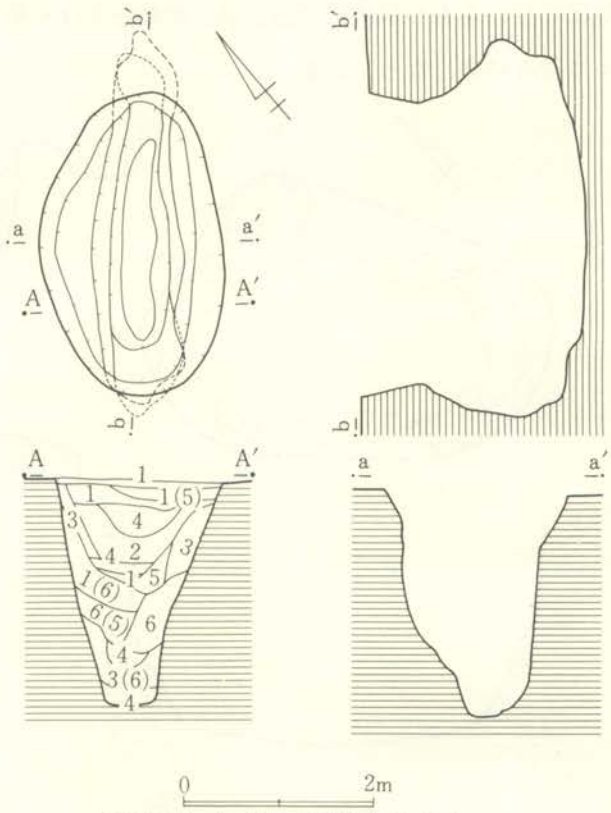


第79図　39号址実測図（1/40）

41号址〔第80図・図版23―2〕

台地平坦部に所在し、28号住居跡の床面で検出した。

覆土は中層以下にローム・ロームブロックが充満し、壁の検出が困難であった。中層以上は暗褐色土・黒色土が覆土の大半を占めた。土層は複雑に細分したが、堆積の様相から、自然堆積とみてよい



第80図　41号址実測図（1/80）

だろう。

上端線での平面形は長円形を呈し、長軸・短軸方向共に、徐々に幅を減じながら掘込まれる。中位付近からは、短軸方向はほぼ同じ割合で幅を減じつつ底部に至るが、長軸方向はフラスコ状に大きく張り出すように広げられ、北側では上端線より外側へ60cm にも及ぶ。

短軸方向の断面は、底の平らなＶ字状で、底部の幅は30cm 程度である。

土壙底は中央部の僅かな範囲に平坦部がみられ、周縁に向って高くなっている。

上端線で長軸310cm、短軸190cm、深さは最深部で230cm を測る。張り出し部の最大値は330cm である。

43号址〔第81図〕

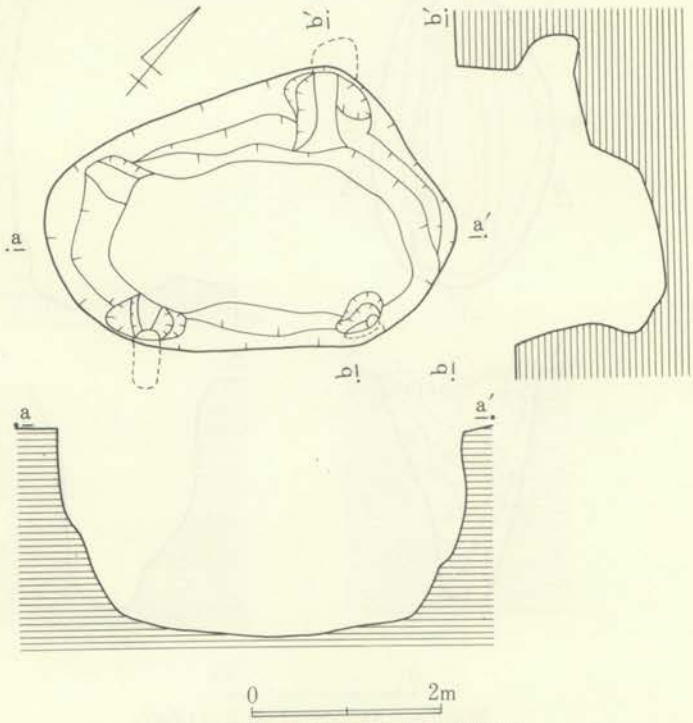
台地の平坦部に所在し、34号住居跡の床面で検出した。

覆土は上半部で暗褐色土を主体とし、下半部ではローム・ロームブロックが主体である。底部付近ではロームブロックの堅い層が堆積し、当初これを底部と錯覚したほどであった。

土層断面図は省略したが、土層の区分は複雑を極め、特に壁際では崩落のためか、小ブロックに細分せざるを得なかった。全体の印象では、底部付近は壁の崩落によるロームブロックが堆積した後、小規模な崩落と自然堆積が併行して埋没したと考えられる。

平面形は不正な長円形を呈し、上端線で長軸440cm、短軸270cm、深さは最深部で220cm を測る。本址は中位付近で、大小の横穴状の掘込みか所が３か所あり、特異な形状である。

長軸方向の断面は中位にくびれをもつ鍋底形であるが、短軸方向は不整形を呈する。土壙底は中央部が凹み、周縁部に向って徐々に高くなっている。



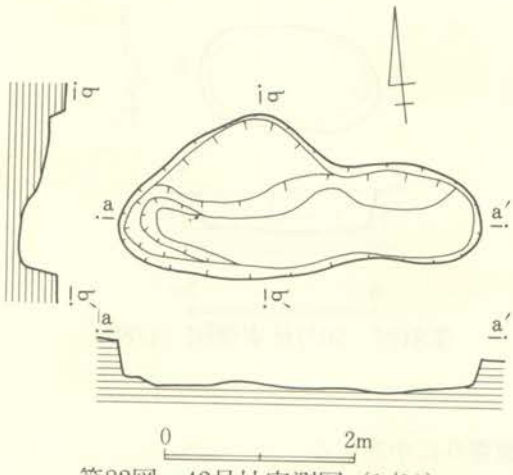
第81図　43号址実測図（1/80）

42号址〔第82図・図版24－１〕

台地の平坦部に所在し、本址の一部は19号住居跡の構築によって削除される。

覆土は褐色土を主体とする、自然堆積である。

平面形は不整な形状で、長軸380cm、短軸は100～170cm、深さは最深部で40cm 程度である。本址はほぼ東西方向に長軸をもち、北側の立上りが緩い傾斜であるのに対し、南側はほぼ垂直である。土壙底は平坦でなく小さく波打つような状態である。



第82図　42号址実測図（1/80）

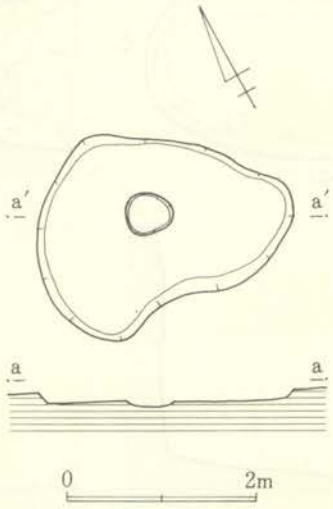
44号址〔第83図・図版24－２〕

台地の西斜面寄り、30号住居跡の西側３ｍの地点で検出した。

非常に掘込みが浅かったために、土層断面の実測は省略したが、確認面では暗褐色土の落込みであった。

平面形では不整な形状を呈し、長軸275cm、深さは10cm 前後を測る。ほぼ中央部に50×40cm、深さ数 cm の凹みがあり、少量の焼土を含む覆土が充満していた。しかし、底面の焼化は認められない。

本址はソフトローム中に構築されているため底部は軟弱である。



第83図　44号址実測図（1/80）

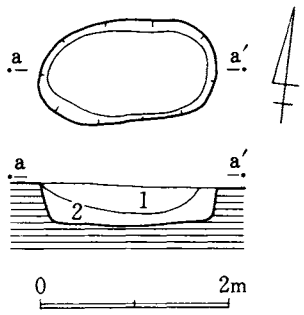
50号址〔第84図〕

台地の西斜面寄り、１号墳の北６ｍの地点に所在する。

覆土は単純に２つの層に分けられ、上層に暗褐色土、下層に褐色土が堆積する。

平面形は整った小判形を呈し、底部の形状も同様である。長軸190cm、短軸105cm、深さは40cmを測る。土壙底は中央部が最も深く、周縁部に向ってやや高くなっている。

本址もソフトローム中に構築されたため、壙底は軟弱である。



第84図　50号址実測図（1/80）

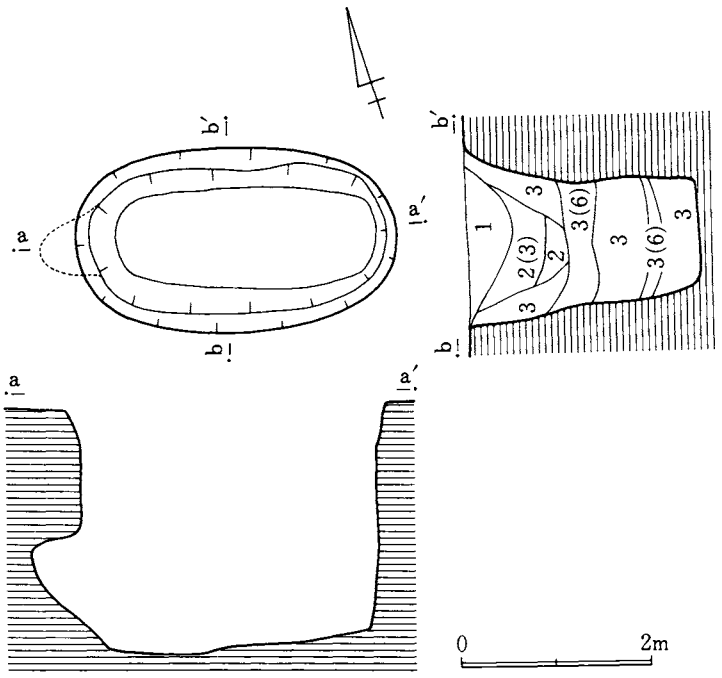
58号址〔第85図〕

調査区の最南端、東側の斜面寄りに所在する。

覆土は黄褐色土が大半を占め、中層以下にはロームブロックの混入が多い。堆積の様相は自然堆積とみてよいだろう。

平面形は整った小判形を呈し、底面も相似形である。平面規模は長軸170cm、短軸95cm、深さは120cmを測る。

長軸方向では、西側に張り出し部があり上端線から外側へ30cm掘込まれる。東側ではほぼ垂直に立



第85図　58号址実測図（1/80）

上っている。短軸方向での断面は底面の平坦なＶ字状である。

土壙底は西側は最も深く、東側が高くなる状態である。

59号址〔第86図〕

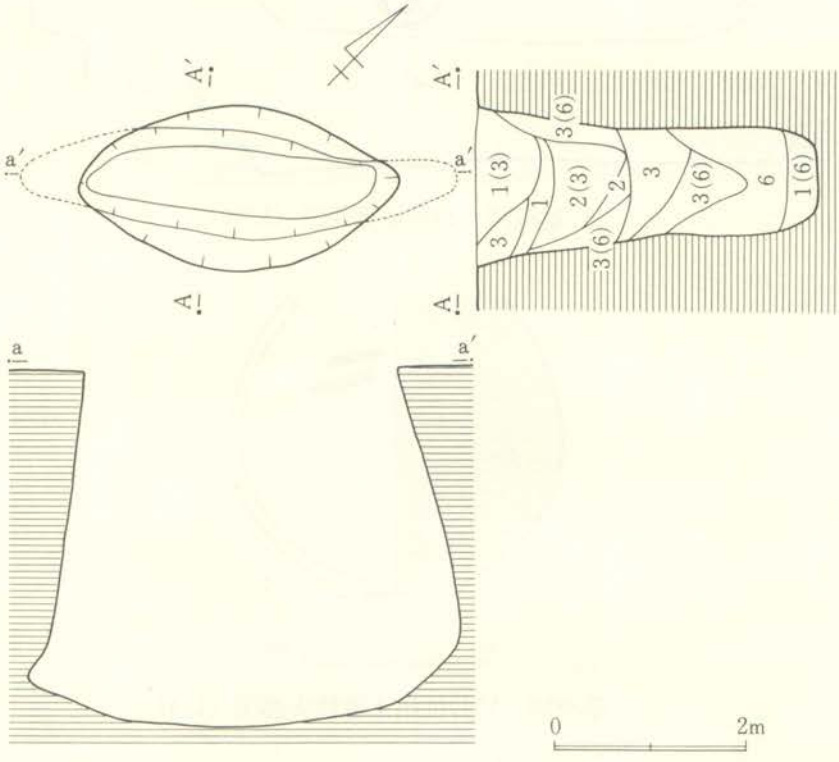
調査区の最南端、東側の斜面寄りに所在し、58号址の南３ｍにある。

覆土は下層がロームブロック、中層が黄褐色土、上層が暗褐色土をそれぞれ主体とし、全体にロームブロックの混入が目立った。

堆積の様相は自然堆積とみてよいだろう。

平面形は不正な長円形を呈し、長軸方向の断面はフラスコ状である。

平面規模は長軸170cm、短軸85cm、深さは185cmを測る。長軸方向の最大幅は215cmである。土壙底は中央付近が最も深く、周縁部が高くなり平坦ではない。



第86図　59号址実測図（1/80）

３．性格不明の遺構

これまで遺構の性格別に分けて述べてきたが、本項では前出のどの遺構の範疇にも属さないと判断した遺構を扱うこととした。

13号址〔第87・88図〕

台地の西側斜面寄り、14号住居跡の西５ｍに所在する、小竪穴状の遺構である。

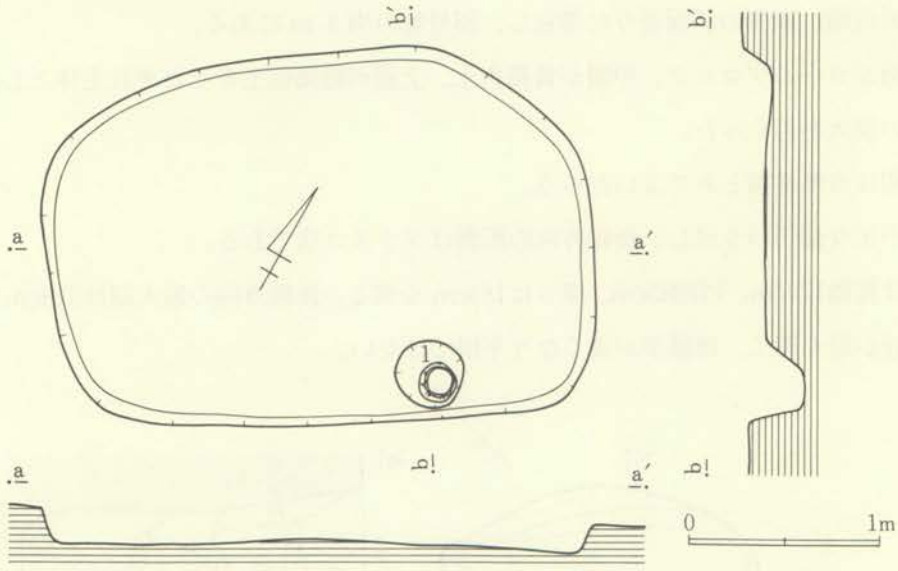
覆土は暗褐色土を主体とする単一層である。

平面規模は東西285cm、南北190cm、深さは15cm前後である。南側の壁際に径35cm、深さ20cmの

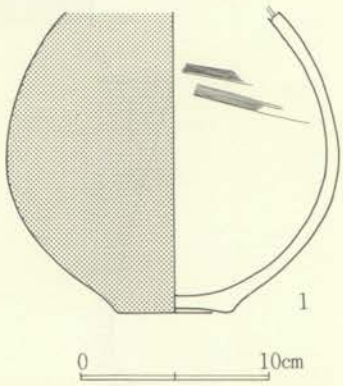
ピットをもち、ピット内からは口縁部を欠く甕を検出した。

底面は中央付近が堅緻で、周縁部よりやや高くなっている。

調査前には小規模な竪穴式住居跡を想定したが、平面形態・柱穴をもたないこと等住居跡とは認め難く、性格不明の遺構として本項で扱うこととした。



第87図　13号址実測図（1/40）



第88図　13号址出土遺物実測図（1/4）

48号址〔第89・90図・図版25－1〕

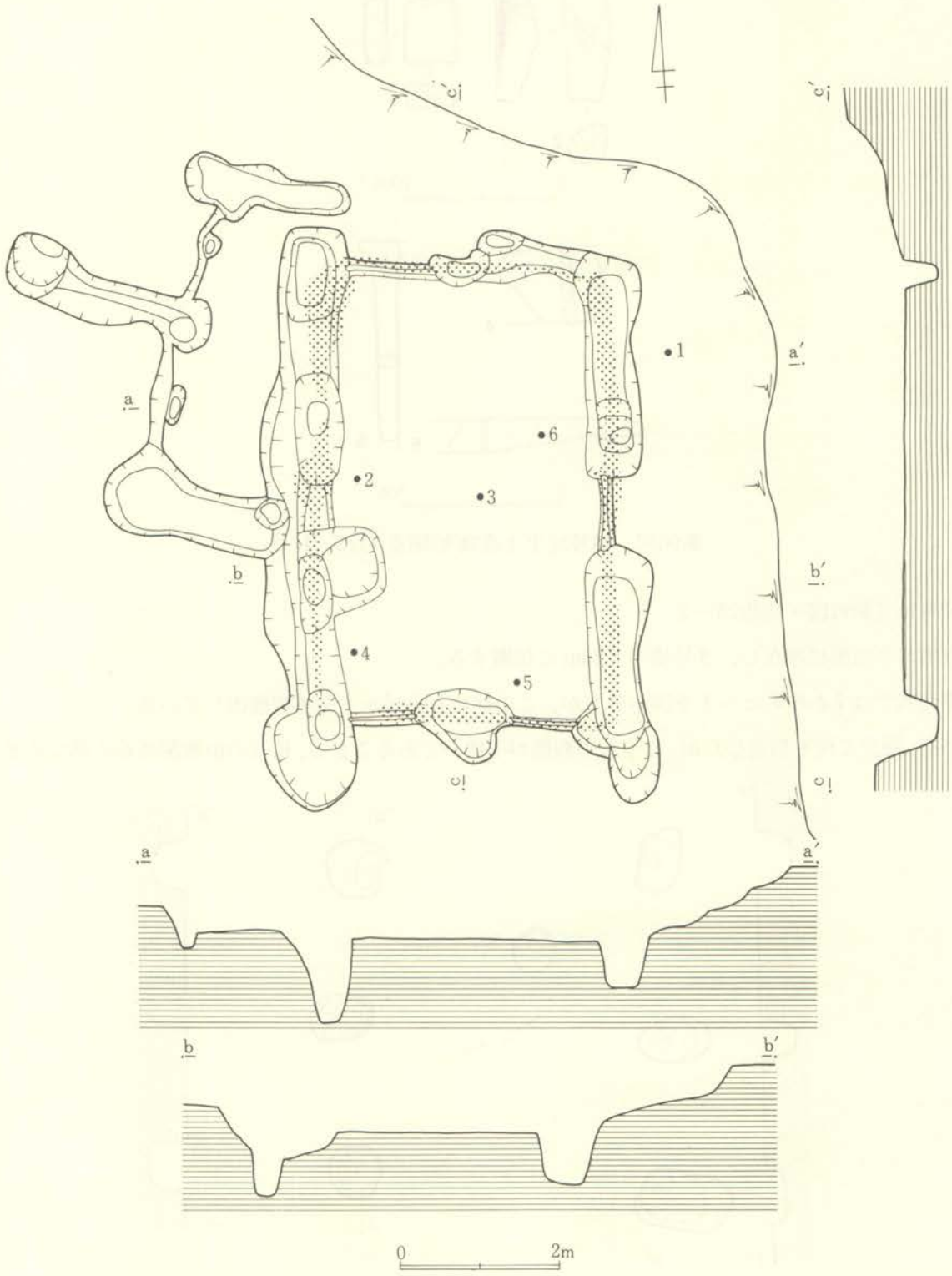
台地の平坦部に所在し、3号墳の周溝に隣接する。

平面形は土壙状遺構を連結したような特異な形態の遺構である。土壙状遺構の確認面には幅10～50cmの灰白色粘土が敷き詰められ、長辺5.7m、短辺4mで、長方形状に全周していた。灰白色粘土を除去した跡は、浅いU字状の溝となり、実測図にみられる幅狭い溝がその一部である。

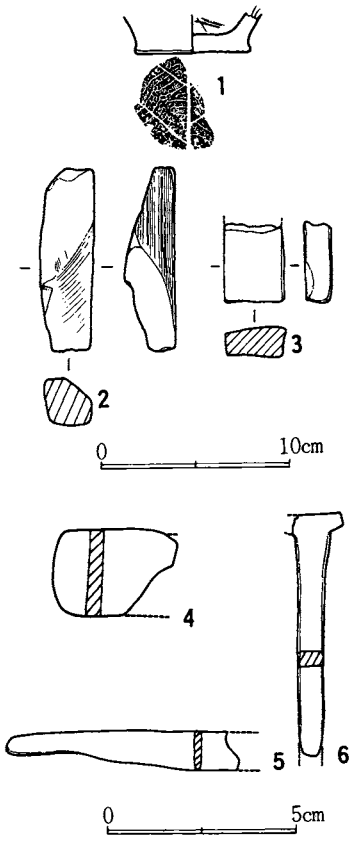
敷かれた粘土と、その下に掘られた土壙群との関連は判然としないが、仮にこの両者が一体を為すものと考えるならば、土壙群は人為的に埋められ、その後に粘土が敷かれたことになり、土壙群の掘られた意味がなく不可解である。

いずれにせよ、本址に関してはその性格を明確にする資料が得られなかったが、土壙群に囲まれた

平坦部からは実測した遺物のほかにキセルの吸い口、雁首、寛永通宝等近世の所産であることを示唆するような遺物の出土があったことを付記しておく。



第89図　48号址実測図（1/80）



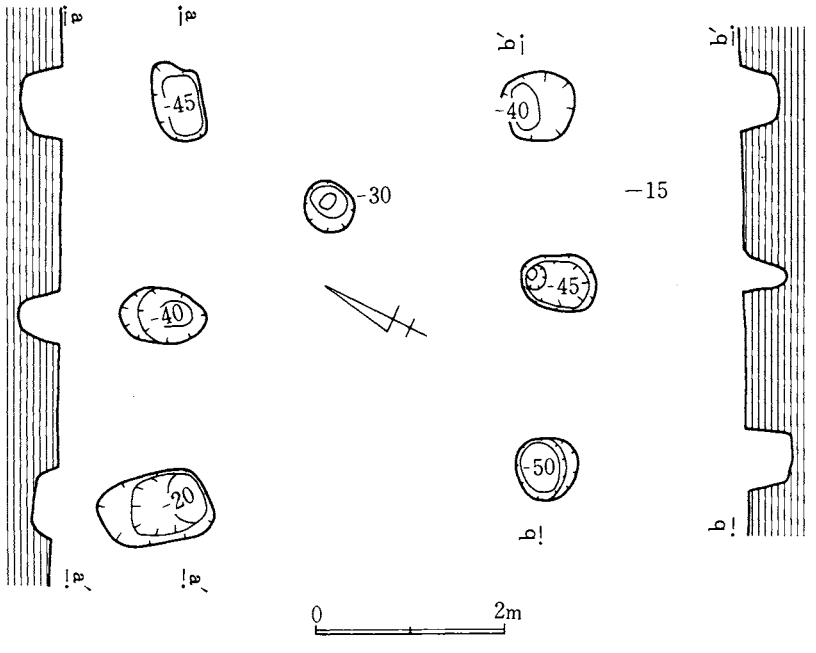
第90図　48号址出土遺物実測図（1/2・1/4）

52号址〔第91図・図版25―2〕

台地の平坦部に所在し、3号墳の北20mに位置する。

実測図では7か所のピットを図示したが、この他にも小ピットを多数検出している。

当初、掘立て柱を想定したが、ピットの形態が不統一であることと、相互の位置関係から単なるピッ



第91図　52号址実測図（1/80）

ト群に過ぎない遺構であった。

図示した以外のピットはいずれも径が小さく浅いものが多かったので省略した。図示したピット群は比較的径が大きく、深いものを抽出した結果である。

ピット内覆土からの出土遺物は皆無であった。

出土遺物一覧（住居跡）

１号住居跡

番　　号	器　種	内　　容
1（0006）	甕	1.口径155・図示した部分の⅕。 2.外面ー口唇部はヘラ状工具による刻み目を施し、後にヨコナデを施す。口縁部はヨコナデ。胴部は一部に付加状縄文を残すが全体に丁寧なヘラナデ。一部にヘラナデ調整の際の条痕が数条認められる。内面ー口縁部ヨコナデ。胴部はヘラナデされ、一部にヘラ痕を残す。 3.床面。
2（0007、0008、0009、0010）	甕	1.底径（130）・底部⅓、胴下部⅕。 2.外面ー全面に付加状縄文。内面ー全面ヘラナデ。器面の剝離が著しい。 3.覆土内。※底部に木葉痕が残る。

７号住居跡

番　　号	器　種	内　　容
1（0021、0039、0190、0196、0203、0204）	甕	1.口径（180）・口縁部⅙ 2.内外面共口縁部ヨコナデ。胴部外面刷毛目、内面ヘラナデ。 3.覆土内。
2（0001、0114、0138）	甕	1.口径（180）・口縁部⅓ 2.内外面共口縁部ヨコナデ。胴部内面ナデ、外面は一部に刷毛目を残す。 3.覆土内。
3（0001、0085）	甕	1.口径（160）・口縁部⅕ 2.内外面共口縁部ヨコナデ。胴部内面ナデ、外面刷毛目。 3.覆土内。
4（0001、0053、0069、0204）	甕	1.口径（130）・口縁部½ 2.内外面共口縁部ヨコナデ。 3.覆土内。
5（0001、0010～0012、0017、0100、0110、0118、0122～0124、0126～0128、0130、0131、0158、0168、0173、0174、0200、0203、0204）	甕	1.底径（60）・底部と胴部½ 2.胴部外面ヘラミガキ、内面ナデ。底部ヘラ削り。 3.覆土内。※外全面にスス付着。内面は斑点状の剝離が著しく底部は二次焼化によって黒変する。
6（0129、0139、0203、G65－0000、G66－0000）	小　形　甕	1.口径（130）・口縁部の一部と胴部⅓ 2.内外面共口縁部ヨコナデ。胴部外面ヘラミガキ。一部にヘラ削り痕を残す。内面は器面の剝離が著しく調整不明。 3.覆土内。※外面にスス付着。

7 (0032)	甕	1.底径 (60)・底部¼ 2.内外面共ヘラナデ。 3.覆土内。
8 (0001、G55−0009)	壺	1.口径 (128)・口・頚部と胴部片。 2.口・頚部外面ヨコナデ、内面ヘラナデ。胴部外面ナデ、内面は粗雑なヨコナデ。 3.覆土内。
9 (0037)	甕	・S字状口縁部片。
10 (0183)	甕	・胴部片。櫛描波状文を施す。
11 (0001、0204、G45−0000、G55−0011・0017)	高　　坏	1.脚部と口縁部を欠く。 2.坏部外面は刷毛目の後粗いヘラナデ。内面ヘラナデ。 3.覆土内。※内面は剝離が著しい。
12 (0001、G45−0000)	高　　坏	1.図示部の½ 2.外面一ヘラミガキ。内面一透孔より上部はヘラナデ、下部刷毛目。 3.覆土内。※透孔は1個確認。
13 (0022、0050、0052、0055、0057、0070、G55−0042)	器　　台	1.裾径120・脚部完存。 2.外面一上端部はヨコ方向、以下はタテ方向のヘラミガキ。内面一ヘラナデ。 3.覆土内。※透孔は3個。
14 (0001、0197、0198、G55−0001・0010・0028)	器　　台	1.裾径 (152)・脚部½。 2.外面一ヘラミガキ。内面一刷毛目後ヘラ削り。裾部はナデ。 3.覆土内。※透孔は確認できない。

8号住居跡

番　　号	器　種	内　　容
1 (0065)	甕	1.口径 (190)・口縁部¼ 2.口縁部内外面共ヨコナデ、胴部内外面共ヘラナデ。 3.覆土内。
2 (0009)	甕	1.口径 (140)・口縁部⅕ 2.外面一口縁部から胴部にかけて粗雑なヘラナデ。内面一口縁部ヘラナデ。胴部は粗雑なヘラナデ。 3.覆土内。
3 (0010、0014)	埦	1.口径 (140)・口縁部½。 2.内外面共ヘラミガキ。 3.覆土内。
4 (0032、0047〜0050、0077)	蓋	1.径 160・器高52・宝珠径36〜39・復原完形。 2.内外面共丁寧なヘラミガキ。 3.床面直上。※宝珠に穿孔がある。内外面共一部にスス付着。
5 (0022、0037)	高　　坏	1.口径 (140)・坏部½と脚部の一部。 2.坏部は内外面共ヘラミガキ。脚部の外面は剝離が著しく不明。内面はヘラナデ。坏部と脚部の接合部にヘラ痕が残る。 3.覆土内。※外面の一部にスス付着。
6 (0084)	高　　坏	1.坏と脚の一部。 2.坏部外面ヘラ削り、内面ヘラミガキ。脚部外面ヘラミガキ、内面刷毛目。坏部と脚部の接合部はヘラ削りされヘラ痕を残す。 3.覆土内。※透孔は4個であろう。
7 (0055)	器　　台	1.受部径60・器高72・裾径90・完形 2.受部外面はヨコ方向のヘラミガキ、内面はヘラミガキ。脚部外面タテ方向ヘラミガキ。内面は一部に刷毛目を残す他ナデ。 3.炉址内。※透孔は3個。
8 (0001)	甕	1.底径 (76)・底部½ 2.内外面共剝離のため調整不明。 3.覆土内。※底部に木葉痕。

9 (0021)	甕	1.底径66・底部⅔。 2.輪積成形。外面一付加状縄文、下端部はヘラミガキ。内面一ヘラナデ、２か所に輪積痕を残す。底部はヘラ削り後にヘラミガキされるが木葉痕を残す。 3.床面。
10 (0045、0083)	甕	1.底径（60）・底部⅓。 2.外面一付加状縄文。内面一ナデ。 3.床面。※底部に木葉痕を残す。
11 (0045)	甕	1.底部（70）・底部¼。 2.内外面共ナデ。 3.覆土内。※底部の周縁部は磨耗が著しい。
12 (0033)	甕	1.底径60・底部完存。 2.外面ヘラミガキ、内面ヘラナデ。 3.床面直上。
13 (0063)	台付甕？	1.最大径60・図示部完存。 2.内外面共ナデ。 3.覆土内。
14 (0035)	異形土器	1.口径（68）・図示部の⅓。 2.外面ヨコナデ。内面ヘラナデ。 3.覆土内。
15	石製品	・全長48・最大幅24・厚さ８、上下両端は磨耗し、一部にＶ字状の凹みがある。

9号住居跡

番号	器種	内容
1 (0015)	台付甕	1.裾径86・脚部⅔。 2.外面は刷毛目後部分的にナデ。内面は刷毛目。 3.覆土内。
2 (0017)	台付甕	1.裾径72・脚部完存。 2.外面ナデ、下端部ヨコナデ、裾近くに幅２mmの沈線状の凹みが全周する内面ヘラナデ。 3.覆土内。

12号住居跡

番号	器種	内容
1 (0001、0015、0019、0020、0026、0039、0057、0104)	甕	1.口径（176）・口縁部½、胴上半部⅓ 2.外面一口縁部上半ヨコナデ、下半下方への刷毛目。胴部は左上がりの刷毛目、上部に沈線状のヘラ痕が残る。内面一口縁部は上からヨコナデ、刷毛目、ヘラナデ。胴部はヘラナデ。 3.床面直上。※外全面にスス付着。
2 (0018、G55−0001・0007・0027)	台付甕	1.図示部の⅓ 2.胴部外面は下から上方向への刷毛目、内面は粗雑なヘラナデ。脚部外面は下方向への刷毛目、下端部はナデ、内面ナデ。
3 (0093、0095)	台付甕	1.裾径110・脚部½。 2.外面一下方への刷毛目を右から左回りの順で行う。裾部ヨコナデ。内面一ナデ。 3.覆土内。
4 (0001、0002、0012、0029、0030、0100)	高坏	1.口径226・坏部⅔。 2.内外面共ヘラミガキ。外面口縁部はヨコナデ。内外面共ヘラ痕を残す。 3.覆土内。

5 (0060)	高　　坏	1.口径128・坏部のみ完存。 2.内外面共剝離が著しいがヘラミガキ痕を残す。 3.覆土内。
6 (0065)	高　　坏	1.裾径 (110)・脚部½。 2.外面ヘラミガキ。内面ナデ、裾部に刷毛目を残す。 3.床面、透孔は2個確認できるが、その位置から3個もつ形態であろう。
7 (0006、0020)	坏	1.50—110—42。図示部の¼。 2.内外面共ヘラミガキ。内面の底部は剝離。 3.床面直上。
8 (0086)	小形甕？	1.底径36・図示部の⅓。 2.外面ナデ、内面ヘラナデ。 3.覆土内。
9 (0001、0002)	小形土器	1.口径60・器高35・図示部の½。 2.手捏ね成形であろう。外面は粗雑なヘラナデ、内面ヘラナデ。 3.覆土内。
10 (0001、0065、0076)	器　　台	1.裾径96・受部を欠く⅔。 2.外面及び受部はヘラミガキ。脚部内面は刷毛目、一部ナデ。 3.床面。
11 (0016)	器　　台	1.脚部小片。 2.外面ヘラミガキ、内面ヘラナデ。 3.覆土内。
12 (0043)	器　　台	1.脚部小片。 2.内外面共刷毛目。 3.覆土内。
13 (G55—0001・0033)	壺	1.頚部小片。 2.内外面共ナデ。 3.覆土内。※肩部と頚部の境界に刻み目のある突帯が巡る。
14 (0069)	壺	・口縁部小片。 ・羽状縄文と指頭による刻み目を付す。 ・覆土内。
15 (0070)	甕	・口縁部小片。 ・口唇部に刻み目を付し以下は付加状縄文。 ・覆土内。

14号住居跡

番　　号	器　種	内　　容
1 (0002、0089、0121、0129、0149、G40—0000)	甕	1.口径 (180)・図示した部分の⅕ 2.外面一口縁部・胴部共にヘラナデ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部は入念なヘラナデでヘラ痕を残さない。 3.床面。
2 (0086、0088、012—0004・0011・0104)	甕	1.口径170・口縁部⅔、胴上半部⅓。 2.外面一口縁部ヨコナデ、胴部刷毛目。内面一口縁部刷毛目、一部にヘラナデ、胴部ヘラナデ。 3.床面。※12号住居跡出土遺物と接合した。
3 (0002、0004、0008～0010、0014、0015、0076、0077、0114、0116、0117、0140～0142)	甕	1.口径176・口縁部⅘と胴部の一部。 2.外面一口縁部上半部ヨコナデ、下半部タテ方向の刷毛目。胴部刷毛目。下端ヘラナデ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部との境に刷毛目を残す。胴部ヘラナデ。 3.床面。※内外面共剝離が著しい。

4（0002、0044、0116、0129、0131、0132、0135、0146、G40−0000）	甕	1.底径30・胴下半と底部。 2.外面一刷毛目。内面一ヘラナデ。 3.床面。※底部から胴下部にかけて二次焼成によると思われる器面の赤色化と剝離が著しい。
5（0002、0018、0019、0025、0037、0042、0114、0116、0118、0126、0144、0153、0154）	甕	1.口径（160）・口縁部から頸部にかけて⅓と胴部の一部。 2.外面一頸部は頸部から口縁部方向への刷毛目。部分的にヘラミガキ。胴部は刷毛目後ヘラナデ。内面一口縁部から頸部ヘラナデ後ナデ。胴部はナデ。 3.床面。※胴部は内外面共剝離が著しい。
6（0004、0093、0094、0105、0152）	小形甕	1.(120〜125)−(110)−34・図示部の¼ 2.外面一口縁部刷毛目後ヨコナデ、胴部は刷毛目。内面一口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。 3.床面。
7（0068、0069、0084〜0087）	小形甕	1.86−120−40・図示部の¾。 2.外面一口唇部ヨコナデ、口縁部から胴部にかけて粗雑なヘラナデ、胴部はヘラナデ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。 3.床面。
8（0059、0063、0091、0115）	小形甕	1.125−122−32・図示部の½ 2.外面一口縁部ヨコナデ、胴部刷毛目。内面一口縁部ヨコナデ。胴部ナデ。底部から胴下半にかけては全面剝離。 3.覆土内。
9（0002、0093、0097、0099）	小形甕	1.口径100・口縁部¾。 2.外面一口縁部ヨコナデ、胴部刷毛目。胴上部に刷毛用具によると思われる同心円状の沈線が巡る。内面一口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。 3.床面。
10（0002、0034、0045〜0049、0051、0058、0127、G40−0000）	高坏	1.口径190・坏のみ完存。 2.外面一坏部ヘラミガキ、胴部上端は刷毛目。内面一ヘラミガキ。 3.床面。※内面は斑点状に剝離。
11（0092）	高坏	1.坏部と裾部を欠く。 2.外面一ヘラミガキ。内面一ヘラナデ。 3.覆土内。※透孔は３個。
12（0012）	坏	1.31〜35−125−32〜36・口縁部⅓を欠く他完存。 2.外面一粗雑なヘラナデ。内面一ヘラミガキ。 3.床面。※器形が歪曲している。
13（0147）	小形甕	1.底径48〜52・図示部完存。 2.内外面共ヘラナデ。底部は造り出しの高台が付く。 3.貯蔵穴内。※底部は歪曲し粗雑な手捏ねであろう。
14（0017）	小形甕	1.底径34・底部½ 2.外面一刷毛目。内面一ナデ。 3.覆土内。
15（0092）	甕	1.底径54・底部完存。 2.内外面共ヘラナデ。 3.覆土内。※底部は丸味を帯びすわりが悪い。
16（0003）	小形甕	1.底径38・底部⅓。 2.内外面共ヘラナデ。 3.床面直上。
17（0002、0063、0152）	小形甕	1.底径38・底部完存。 2.内外面共ヘラナデ。 3.床面。
18（0148）	台付甕	1.裾径80・図示部完存。 2.外面一胴部と脚部共刷毛目。内面一胴部はヘラナデ、脚部はナデ。 3.貯蔵穴内。

19 (0106、0108、0109)	坩	1.口径 (120)・口・頸部⅓。 2.外面ーヘラミガキ、裾部ヨコナデ。内面ーナデ。 3.床面。
20 (0020)	器　台	1.受部径80・受部½。 2.外面ーヘラミガキ。内面ー受部ヘラミガキ、脚部はヘラナデ。 3.覆土内。※透孔は3個確認できた。
21 (0001、0002)	器　台	1.受部径74・受部½。 2.外面ー受部ヨコ方向のヘラミガキ、脚部はタテ方向のヘラミガキ。内面ーヘラミガキ。 3.覆土内。※透孔は1個確認できた。
22 (0154)	器　台	1.裾径 (130)・脚部¼。 2.外面ーヘラミガキ。内面ー透孔より上部はヘラナデ、下部はヨコナデ。 3.床面。※透孔は3個。
23 (0103)	不　明	・長さ55・最大幅45・厚さ9。土器片を再利用したもので、左右と下部の周縁が磨耗して丸味を帯びる。研磨材として使用したものであろう。 ・覆土内。
24 (0114)	砥　石	・長さ69・最大幅57・厚さ16。表裏面と一側面に使用痕を認める。表裏面の中央部に長円形で深さ2～3mmの凹みがある。 ・覆土内。

16号住居跡

番　号	器　種	内　容
1 (0001)	埦	1.(65)－(80)－(30)・図示部の¼。 2.内外面共口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。 3.覆土内。
2 (0030)	台付甕	1.裾径73～76・脚部⅔。 2.外面ーナデ、裾部ヨコナデ。内面ー刷毛目、裾部ヨコナデ。 3.覆土内。
3 (0005～0008)	高　坏	1.口径 (220)・坏部⅓。 2.内外面共ヘラミガキ。 3.覆土内。
4 (0001)	高　坏	1.坏部と脚部の小片。 2.外面はヘラミガキ、内面は剝離のため不明。 3.覆土内。
5 (0021)	高　坏	1.裾径116・脚部½。 2.外面ーヘラミガキ。内面ー透孔より上部はヘラナデ、下部はナデ。 3.覆土内。※透孔は3個もつ。
6 (0031)	器　台	1.86ー受部径68ー裾径114・完形。 2.外面ー受部口縁ヨコナデ、受部ヘラナデ、脚部ヘラミガキ。内面ー受部ヘラミガキ、脚部刷毛目。 3.床面。※胎土中に微砂粒が多くヘラミガキの際の擦痕が著しい。
7 (0086)	甕	1.口径140・口縁部⅕。 2.外面ー横位の付加状縄文。内面ーヨコナデ。 3.覆土内。
8 (0060)	甕	・底部小片。 ・木葉痕を残す。覆土内。
9 (0081)	砥　石	・長さ135、4面全面に使用痕が認められる。左側に図示した面には、深い溝状の擦痕が2本と細かい擦痕が無数に認められる。他の3面はいずれも中央部がやや凹んでおり、使用面は平滑であるが擦痕を残す。下端部は4面からくさび状に削り取った後、折られたような痕跡を残す。上・下面には使用痕はなかった。

17号住居跡

番　　号	器　種	内　　容
1（0006）	甕	1.底径60・底部と胴部小片。 2.外面ー胴部刷毛目、底部ナデ。内面ーナデ。 3.覆土内。
2（0001、0010）	甕	1.底径52・底部と胴部小片。 2.外全面ナデ。内面ー刷毛目。 3.覆土内。
3（0005）	甕	・口縁部小片。 ・複合口縁で複合帯外面は付加状縄文を付し、下端に指頭による刻目を巡らす。胴上部に３条の波状櫛目文を付す。
4（0009）	壺	・胴部小片。Ｓ字状結節文を伴う付加状縄文を施す。

18号住居跡

番　　号	器　種	内　　容
1（0001、0002、0056、0058、0060、0076、0078、0079、0096）	甕	1.口径（160）・口縁部⅓、胴部½。 2.外面ー口縁部刷毛目後ヨコナデ、胴部は中位を除いて刷毛目。胴部中位は刷毛目後部分的にヘラナデ。内面ー口縁部はヨコナデが施されるが、一部に刷毛目を残す。胴上部はヨコ方向、中位は左上方向、下部は下から上方向のヘラナデ。 3.床面直上。※胎土中の微砂粒によってヘラナデ時の擦痕が著しい。
2（0001）	甕	1.口径（180）・口縁部⅕ 2.外面ー口縁部刷毛目後ヨコナデ。胴部刷毛目。内面ー口縁部刷毛目、胴部ヘラナデ。 3.覆土内。
3（0022、0024、0026）	甕	1.口径（205）・口縁部⅓。 2.外面ー口縁部、刷毛目後ヨコナデされるが刷毛目を残す。胴部は入念な刷毛目。内面ー口縁部、刷毛目後部分的にヨコナデ。口縁部直下の胴部は粗い刷毛目。以下はヘラナデ。 3.床面直上。※内面の口縁部直下には接合時の補強粘土のナデつけ痕が残る。
4（0037）	甕	1.口径（170）・口縁部⅕。 2.外面ー口唇部ヘラナデ、口縁部刷毛目。内面ー口縁部刷毛目。 3.床面直上。
5（0053）	甕	1.底径（84）・底部⅓。 2.外面ーヘラナデ。内面ーナデ。 3.床面。
6（0050、0099、0100）	甕	1.底径52・底部完存。 2.外面ー胴部粗雑なヘラミガキ、底部ヘラナデ。内面ー雑な刷毛目。 3.床面直上・床面。
7（0002、0035）	甕	1.底径56・底部完存。 2.内外面共ナデ。 3.床面直上。
8（0047）	壺	1.口径（110）・口縁部¼。 2.外面ーヨコナデ。内面ーヘラミガキ。 3.床面直上。
9（0065）	壺	1.口径（180）・口縁部から頸部の小片。 2.外面ー口縁部タテ方向ヘラミガキ、頸部タテ方向ヘラミガキ。内面ーヘラミガキ。 3.床面直上。※内全面及び外面の一部に赤彩。

10 (0003)	高　　坏	1.坏部小片。 2.外面一一坏部ヘラミガキ、脚部ヘラナデ。内面一ヘラミガキ。 3.床面直上。
11 (0021)	壺	1.口縁部小片。 2.複合口縁をもち、口唇部と複合帯に付加状縄文を施し、口唇部の外縁に刻み目をつける。 3.床面直上。
12 (0097)	甕	1.底径 (65)・底部小片。 2.外面一胴部に付加状縄文、底部に木葉痕。内面一ナデ。 3.床面。
13 (0066)	砥　　石	・4面に使用痕が認められる。4面共擦痕はなく平滑である。

19号住居跡

番　　号	器　種	内　　容
1 (0026)	甕	1.口径122・口縁部½ 2.外面一口縁部は刷毛目後ヨコナデ、胴部は刷毛目。内面一口唇部ヨコナデ、口縁部中位はヘラナデ。 3.床面直上。※外全面にスス付着。
2 (B81−0000)	甕	1.口径 (160)・口縁部小片。 2.外面一口縁部と胴部への移行部はヨコナデ、胴部は刷毛目。内面一口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。口縁部、胴部共ヘラ痕を残す。 3.床面直上。
3 (0036)	埦	1.口径 (100)・図示部⅕。 2.外面一口縁部ヨコナデ、胴部は雑なヘラナデ。内面一ナデ。 3.床面直上。
4 (0031〜0033)	甕	1.底径60・底部完存。 2.外全面ヘラナデ。内全面ヘラナデ。 3.床面直上。※器形が歪曲している。底部から胴部への開きが大きいため底部との区別が不明確な曲面を呈する。
5 (0001、0004、0005、B91−0001)	坏	1.口径 (136)・口縁部⅕と底部⅓。 2.外面一ナデ。内面一ヘラミガキ。 3.床面直上。
6 (0033、0036、B91−0001)	器　　台	1.裾径 (140)・脚部¼。 2.外面一上半タテ方向ヘラミガキ、下半ヨコ方向ヘラミガキ。内面一ヨコナデ。 3.床面。
7 (0002、0006、0008、0011〜0017、0034)	器　　台	1.裾径184・図示部の⅔。 2.外面一ヘラミガキ。内面一ナデ。 3.床面直上。※透孔は2個一対で3対6個確認。
8 (0033)	壺	・口縁部小片。複合口縁をもち、複合帯と口唇部に付加状縄文を付す。
9 (0033)	甕	・底径 (50)・底部完存。 ・外面一ナデ、一部に付加状縄文。内面一ナデ。

23号住居跡

番　　号	器　種	内　　容
1 (0001、0023、0029〜0031、0033、0090)	甕	1.128−120−40・口縁部⅓欠、胴部¼欠。 2.外面一口縁部ヨコナデ、胴上部は刷毛目後ナデ、胴下部は粗いヘラナデがなされヘラ痕を残す。底部はヘラナデ。内面一口縁部ヨコナデ。胴部口縁部直下は刷毛目。上半部はナデに近い刷毛目、下半部から底部にかけては刷毛目。※内面の中位やや下方に粘土の接合痕を残す。 3.床面。

2（0018、0020、0021、0093）	甕	1.口径（120）・図示部の⅓。 2.外面ー口縁部ヨコナデ、補強のための粘土の貼付痕を残す。胴部上半は刷毛目後雑なナデ。下半部も刷毛目ナデが行われるが、上半部より入念。外面は全体に刷毛目が残る。内面ー口縁部と胴部全面ヘラナデ。胎土中の砂粒による擦痕が著しい。※口唇部は丸味を帯びず平坦に整形される。 3.床面。内外面共、二次焼化によると思われる器面の剝離が著しく全体に赤色化する。
3（0105、H16−0000）	甕	1.口径（166）・口縁部⅕。 2.外面ー刷毛目後ヨコナデ、刷毛目は下から上。内面ーヨコナデ。 3.床面直上。
4（0003、0005、0010）	甕	1.底径45〜48・底部と胴下部¼。 2.外面ーヘラナデ。内面ーヘラナデ。※胎土中の砂粒が多く、内外面共ヘラナデ時の擦痕が著しい。胴下端のヘラナデによって外面底部の形状は円形でない。 3.床面直上。
5（0046、0048、0051）	甕	1.底径68・底部½。 2.外面ーヘラナデ。内面ー入念なナデ。 3.床面直上。
6（0055）	甕	1.底径74・底部完存。 2.外面ー全面ヘラミガキ。内面は器面の剝離で不明。 3.床面。※底部の周縁が磨耗している。
7（0060、0063）	高　　坏	・坏部¼。 ・内外面共ヘラミガキ。 ・床面直上。
8（0008、0010）	器　　台	1.裾径（160）・脚部½。 2.外面ー入念なヘラミガキ。内面ー刷毛目、一部にナデを施す。 3.床面直上。※透孔は3個。
9（0032）	器　　台	1.受部径（80）・受部⅔と脚部の一部。 2.外面ー受部口縁部と口縁部直下はヨコナデ。受部の下部はヘラミガキ。脚部ヘラミガキ。内面ー受部ヘラミガキ。脚部刷毛目。 3.床面直上。※透孔は3個。

24号住居跡

番　　号	器　種	内　　容
1（0016）	甕	1.底径30・口縁部を欠くほか完存。 2.外面ーヘラナデ。胴部中位は器面の剝離が著しい。内面は全面にわたって器面が剝離しているため整形は不明。 3.床面。
2（0024）	甕	1.底径92・底部完存。 2.外面ー胴部、底部共にヘラナデ。内面ーヘラナデ。 3.覆土内。
3（0001）	甕	1.底径54・底部完存。 2.内外面共ヘラナデ。 3.覆土内。
4（0008）	甕	1.底径（60）底部½。 2.内外面共ヘラナデ。整形は雑な器面に凹凸がある。 3.覆土内。
5（0017）	甕	1.底径40・底部完存。 2.内外面共ヘラナデ。 3.覆土内。

6 (0046)	台付甕	1.裾径 (80)・脚部½。 2.内外面共ヘラナデ。 3.覆土内。
7 (0051)	台付甕	1.裾径 (88)・脚部½。 2.内外面共ヘラミガキ。 3.覆土内。
8 (0011、0014、0035)	高坏	1.口径120～126・坏部完存。 2.外面一全面ヘラミガキ。内面一全面ヘラミガキ。くびれ部より下部は剝離が著しい。 3.床面。
9 (0043、0046、0083)	高坏	1.口径162・坏部½。 2.内外面共入念なヘラナデ。 3.覆土内。※器肉が非常に薄く、特に口縁部は2～3mmに成形される。
10 (0001、0002、0035、0066)	高坏	1.口径 (200)・坏¼。 2.外面一ヨコナデ。内面一ヘラミガキ。 3.覆土内。
11 (0084)	高坏	1.裾径108・脚部と坏部の一部。 2.外面一坏部は稜を境に上部は刷毛目後ヘラミガキ、下端部はヘラミガキ。脚部はヘラミガキ。内面一坏部は剝離が著しいが一部にヘラミガキを留める。脚部はヘラナデ、裾部は刷毛目後ヘラミガキ。 3.ピット内。
12 (0004)	高坏	1.裾径192・脚部⅔。 2.外面一透孔より上はタテ方向のヘラミガキ、同下はヨコ方向のヘラミガキ。内面一透孔より上はヘラナデ、同下はヨコナデ。ヨコナデの擦痕は同心円状に残り、ロクロを使用したと考えられる。 3.覆土内。※透孔は6個あり、上方からみると正三角形の各頂点と3辺の中間にあけられる。
13 (0011)	器台	1.裾径90・脚部完存。 2.外面一ヘラミガキ。内面一ヘラナデ。 3.床面。※透孔は3個。
14 (0035)	器台	1.受部径74、裾径 (90)・受部完存、脚部¼。 2.外面一受部ヘラナデ、脚部ヘラミガキ。内面一受部ヘラミガキ、脚部刷毛目。 3.覆土内。※透孔は3個。
15 (0077～0079、0082)	器台	1.受部径110・受部½。 2.外面一ヘラナデ。内面一ミガキに近いヘラナデ。 3.覆土内。
16 (0076)	器台	1.裾径 (90)・脚部⅕。 2.外面一ヘラミガキ。内面一ヘラナデ。 3.覆土内。※透孔は3個。
17 (0047、0050、0082)	坩	・口径 (60)・図示部⅙。 ・内外面共ヘラナデ。内面にはヘラ痕が残る。 ・覆土内。

25号住居跡

番号	器種	内容
1 (0033)	小形甕	1.71－66～73－36～39・復原完形。 2.外面一口縁部ヨコナデ。胴部は上部から中位にかけて刷毛目後ナデ、下端部はナデ。底部ヘラナデ。内面一口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。 3.床面直上。※口縁部に歪みがあるため口径は一定しない。底部は中央が盛り上っているため座りが悪く歪曲する。

2（0001、0020、0021）	高　　坏	1.口径110・図示部完存。 2.外面ー口縁部ヨコナデ。くびれ部を境に上部は刷毛目後ナデ、下部はヘラミガキ。内面ーくびれ部より上部はヨコナデ、以下は器面の剝離が著しく不明。 3.床面直上。
3（0001）	甕	1.底径44・図示部の½。 2.外面ーナデ。内面は器面の剝離により不明。 3.覆土内。
4（0018、026−0043）	高　　坏	1.裾径（110）・脚部⅓。 2.外面ーヘラミガキ。内面ーヘラナデ。 3.覆土内。
5（0001）	甕	・口径（230）・S字状口縁部小片。 ・外面ーヨコナデ。内面ー口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。 ・覆土内。

26号住居跡

番　　号	器　種	内　　容
1（0001〜0003、0006、0008、0009、0012〜0015、0033、0049、0052、0083）	甕	1.262−196−28〜30・胴部を¼欠くほか復原。 2.外面ー口縁部上半はヨコナデ、下半は下から上方向の刷毛目が行われ後ヨコナデされる。胴部は全面粗雑なヘラナデが行われるが、胎土中の砂粒による擦痕が残る。底部もヘラナデされるが整形が雑なため平坦でなく座りが悪い。内面ー口縁部及び胴上半部は刷毛目が行われた後ナデ。胴部はヘラナデ。 3.覆土内・床面直上。
2（0009、0027）	甕	1.口径168・口縁部全周、胴部¼。 2.外面ー口縁部は下から上方向の刷毛目後ヨコナデ。胴部は刷毛目、一部ナデ。内面ー口縁部から胴上端部にかけて刷毛目。以下はヘラナデ。 3.覆土内。
3（0001〜0003、0005、0010、0013〜0015、0080、0083）	甕	1.口径132・図示部の⅔。 2.外面ー口縁部ヨコナデ。胴部刷毛目。内面ー口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。 3.覆土内。※外面胴部の一部にスス付着。
4（0001、0002、0017、0020、0022、0023、0025、0028、0029、0078、0079）	甕	1.口径（180）・口縁部¼と胴部の一部。 2.外面ー口縁部上半ヨコナデ、下端は刷毛目、胴部は刷毛目と一部ヘラナデ。内面ー口縁部上端ヨコナデ、下端ヘラナデ。胴部はヘラナデ。 3.覆土内。
5（0002、0020、0023、0079）	甕	1.口径150・口縁部½と胴部の一部。 2.外面ー口縁部ヨコナデ。胴部上端の一部に刷毛目を施すほかヘラナデ。内面ー口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。※口縁部下端に接ぎ目を残す。 3.覆土内。
6（0021、0039、0059、0060、0166、0168、0502）	甕	1.口径（170）・図示部の⅓。 2.外面ー口縁部上半ヨコナデ、下端刷毛目。胴上部刷毛目、中位はヘラナデ。内面ー口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。※口縁部と胴部の境に陵をもつ。 3.覆土内。
7（0391、0415〜0417、0419、0470、0489）	甕	1.口径172・口縁部½、胴部⅓。 2.外面ー口縁部ヨコナデ。胴部は全面刷毛目が施されるが上半部は器面の磨耗により不明瞭である。内面ー口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。※内面に粘土帯積み上げ痕が認められる。 3.床面。

8 (0201、0420)	甕	1.口径 (160)・口縁部⅕と胴部の一部。 2.外面ー口縁部上半ヨコナデ、下半は下から上方向の刷毛目。胴部は刷毛目。内面ー口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。※口縁部と胴部の境に稜をもつ。 3.覆土内。
9 (0370、0420)	甕	1.口径 (150)・口縁部⅕と胴部の一部。 2.外面ー口縁部ヨコナデ。胴部刷毛目。内面ー口縁部ヘラナデ後ヨコナデ。胴部ヘラナデ。 3.覆土内。※外面の胴部と口縁部の一部にスス付着。
10 (0192、0256、0258、0267、0315、0318、0419、0456)	甕	1.113ー114ー48・胴部の一部を欠くほか復原完形。 2.外面ー口縁部は雑なヘラナデ。胴部全面ヘラナデ。底部ヘラナデ。内面ー口縁部は雑なヘラナデ、胴部全面ナデ。※胴部内外面の中位以下は剝離が著しい。 3.床面直上。※口縁部の一部と胴部外面の全面にスス付着。
11 (0398)	甕	1.110ー120ー48・口縁部⅔、胴部¾。 2.外面ー口縁部刷毛目後ヨコナデ。胴部刷毛目後ナデ。口唇部に刻み目、内面ー口縁部ヘラナデ、胴部ヘラナデ。※口縁部と胴部の境に陵をもつ。 3.床面。※器肉が厚いため大きさのわりに重量感がある。
12 (0005、0006、0122、0123、0125、0126、0129、0132、0134、0135、0144)	甕	1.口径172・図示部の⅔。 2.外面ー口縁部刷毛目後ヨコナデ。胴部刷毛目後粗雑なヘラナデ。内面ー口縁部ヘラナデ、胴部ナデ。 3.覆土内。※器面が波打ち、雑な成形である。
13 (0003、0005、0006、0140、0146)	甕	1.口径 (175～180)・図示部の¼。 2.外面ー口縁部は上端から口唇部にかけてヨコナデ、以上雑なヘラナデ。胴部ヘラナデ。内面ー口縁部ヘラナデ。胴部ヘラナデ。 3.覆土内。
14 (0191、C87ー0000)	甕	1.口径 (170)・口縁部½。 2.外面ー口縁部ヨコナデ。胴部刷毛目。内面ー口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。 3.覆土内。※口縁部外面の一部にスス付着。
15 (0005、0006、0276、0278、0304、0360、0365、0420、0433、0435、0446、0478、0481、0502)	甕	1.口径144・口縁部¾、胴部⅔。 2.外面ー口縁部ヨコナデ。胴部刷毛目。内面ー口縁部刷毛目後ヨコナデ。胴部刷毛目、下部はヘラナデ。 3.床面直上。
16 (0006、0148、0302)	甕	1.口径 (140)・口縁部½。 2.外面ー口縁部刷毛目後ヨコナデ。胴部刷毛目。内面ー口縁部ヘラナデ。胴部は雑なヘラナデ。※口縁部と胴部の境に稜をもち、口縁部下端に粘土帯の接ぎ目が残る。 3.覆土内。
17 (C87ー0000)	甕	1.口径 (110)・図示部の⅕。 2.外面ー口縁部ヨコナデ。胴部刷毛目。内面ー口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。※口縁部と胴部の境に稜をもつ。 3.覆土内。
18 (0002、0174)	甕	1.口径 (170)・口縁部¼と胴部の一部。 2.外面ー口縁部ヨコナデ、下端部に刷毛目。胴部は上端部にナデが施され、以下刷毛目。下面ー口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。 3.覆土内。
19 (0401、0420、0421)	甕	1.底径70・図示部の⅓。 2.内外面共入念なヘラナデ。ヘラ痕はほとんど残さない。 3.床面。※胴部外面の中位より上にスス付着。胴部内面の中位以下は器面の剝離が著しい。

20（0001、0002、0006、0111、0116、0121）	甕	1.底径（80）・図示部の⅓。 2.外面一刷毛目、下端部はヘラナデ。内面一剝離が著しいがヘラナデ痕が認められる。外面に２か所粘土帯の接ぎ目が残る。 3.覆土内。
21（0185、0326、0329）	甕	1.底径64・図示部の⅔。 2.外面一胴部は入念なヘラミガキ、底部はヘラナデ。内面一ヘラナデ。※内面に粘土帯の接ぎ目が残る。 3.床面直上。
22（0006、0232、0233、0261、0266、0268、0420）	甕	1.底径68・底部½、胴下部¼。 2.外面一胴中位は刷毛目後一部にナデ、下部はナデ。底部は粗雑なヘラナデ。内面一接ぎ目より上はヘラナデ、下は刷毛目。内面は底部に至るまで入念な刷毛目が施される。このことから成形時には、胴部下半と上半を別個に成形調整して接合したものと考える。接ぎ目は分割された位置であろう。 3.覆土内。
23（0248、0492、0497、0498）	甕	1.底径44・図示部の½。 2.外面一胴部刷毛目、底部ヘラナデ。内面一ヘラナデ。 3.貯蔵穴。覆土内。※胴部外面の一部にスス付着。
24（0062、033－0380、C86－0001）	甕	1.底径72・底部⅓。 2.外面一胴部刷毛目後ヘラナデ、下端部はヘラナデ。底部ヘラナデ。※刷毛目は右下から左上方向へ、ヘラナデは右から左へ施される。内面一刷毛目。 3.覆土内。
25（0403）	台付甕	1.129－91～103－64・口唇部の一部を欠くほか完形。 2.外面一口縁部はヨコナデレ、櫛歯烈点文を施す。胴部は右下から左上方向の刷毛目、下部はナデ。脚部は刷毛目。内面一口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。脚部刷毛目。 3.床面。※脚部を除いて全体の⅓にスス付着。胴部内面は班点状に剝離する。
26（0220）	台付甕	1.裾径100・脚部完存。 2.外面一胴部は刷毛目後ヘラナデ。脚部は下半部に刷毛目、上半部は、ナデにより刷毛目を消去。内面一胴部刷毛目。脚部刷毛目。 3.覆土内。
27（0250）	台付甕	1.裾径94・脚部完存。 2.外面一刷毛目後ナデ。内面一胴部・脚部共ヘラナデ。 3.覆土内。
28（0004、0211）	小形甕	1.口径84・図示部の½。 2.外面一口縁部ヘラナデ後ヨコナデ。胴部ヘラナデ。内面一口縁部ヨコナデ。胴部ナデ。 3.覆土内。
29（0463、0502）	小形甕	1.口径（90）・図示部の½。 2.内外面共全面ナデ。 3.床面。
30（0245～0247、0419）	埦	1.50－100－47・口縁部⅓を欠くほか完存。 2.外面一胴部は刷毛目後ナデにより消去、下端部はヘラナデ、底部ヘラナデ。内面一ヘラナデ。 3.貯蔵穴覆土内。
31（0187）	小形甕	1.底径38・図示部完存。 2.外面一胴部ヘラミガキ。底部ヘラナデ。内面一ヘラナデ。 3.覆土内。

32 (0188、0458)	壺	1.口径92・図示部の⅓。 2.外面一口・頸部タテ方向のヘラミガキ。胴部はヨコ方向のヘラミガキ。内面一口・頸部ヘラミガキ。胴部ナデ。※胴部上端に2か所の接ぎ目を残す。 3.覆土内。
33 (0004、0020、0058、0070、0420)	壺	1.口径 (150)・口・頸部¼。 2.外面一刷毛目後ヨコナデ。内面一刷毛目後ヘラミガキ。 3.覆土内。
34 (0003、0097、0265、0292、0303、0366、0376、0379、0387、0420、0427、0438、0444、0474、0483、0502、023－0128、024－0082、H10－0000)	高　　坏	1.口径226・口縁部を⅓欠くほか図示部完存。 2.外面一口縁部ヨコナデ。体部は刷毛目後ヘラミガキ。張り出し部はヨコナデ。体下部は刷毛目後ヘラミガキ。内面一底部中央に一部刷毛目が残るほかヘラミガキ。※内外面共ヘラミガキが施されるが粗雑なため刷毛目を残す。 3.床面・床面直上・覆土内。
35 (0372、0381、0390、0395、0396、0420、0473、0502)	高　　坏	1.口径198・図示部の¾。 2.外面一張り出し部はヨコナデ、他は全面ヘラミガキ。張り出し部に櫛歯烈点文を付し、さらに円形浮文を2個を1対として貼付している。円形浮文は2個遺存するが他に2個の痕跡を残す。相対的な位置から3対貼付されたものと考えられる。内面一ヘラミガキ。下端部の一部に刷毛目が残る。※中位に稜をもつ。 3.床面。※外全面に赤彩を施す。
36 (0399、0414)	高　　坏	1.裾径 (160)・図示部の⅓。 2.外面一坏部ヘラミガキ、張り出し部ヘラナデ。脚部ヘラミガキ、裾部ヘラナデ。内面一坏部刷毛目後ナデ、底部ヘラナデ、脚部ヘラナデ。 3.床面。※透孔は4個。
37 (0319、0320、0322、0338、0340、0374、0419)	高　　坏	1.口径138・図示部の½。 2.外面一坏部・脚部共に全面ヘラミガキ。内面一坏部は剝離が著しく、一部にヘラミガキ痕が認められる。脚部はヘラナデ。 3.覆土内。※透孔は3個。
38 (0381、0394、0408、0420、0486)	高　　坏	・図示部の⅓。 ・外面一坏部・脚部共全面ヘラミガキ。内面一坏部ヘラミガキ、脚部ヘラナデ。 ・床面。
39 (0412)	器　　台	1.裾径 (150)・図示部の⅓。 2.外面一受部下部から脚部全面ヘラミガキ。内面一受部ヘラミガキ。脚部刷毛目後ヘラナデ。裾部ヨコナデ。 3.床面。※透孔は受部に4個確認。脚部の透孔は縦に2個を1対とし3対6個を確認した。
40 (0418、0419)	器　　台	1.器高84－受部径86－裾径114・図示部の⅓。 2.外面一全面ヘラナデ後ヘラミガキ。一部にヘラ痕を残す。内面一受部ヘラミガキ。脚部ヘラナデ、裾部ヨコナデ。 3.床面。※透孔は4個。
41 (0461、0462)	器　　台	1.器高90－受部径74－裾径 (120)・図示部の⅓。 2.受部、脚部共全面ヘラナデ。 3.覆土内。透孔は3個。
42 (0359、0420、0484)	器　　台	1.器高81－受部径52－裾径86・裾部¼を欠くほか完存。 2.外面一受部口縁部ヨコナデ、他はヘラナデされるが擦痕が著しい。内面一受部ヘラミガキ。脚部刷毛目、裾部ヨコナデ。※成形・調整共粗雑である。 3.覆土内。※透孔は3個。

43 (0124、0128、0171)	器　　台	1.器高76－受部径84－裾径（100）・受部⅔と脚部⅕。 2.外面－受部ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ、脚部ヘラミガキ。内面－受部ヘラミガキ。脚部ヘラナデ、裾部ヨコナデ。 3.覆土内。透孔は３個。
44 (0172、0243)	器　　台	1.裾径120・受部の一部と脚部完存。 2.外面－受部ヘラミガキ。脚部ヘラミガキ。内面－受部ヘラミガキ。脚部ヘラナデ、裾部ヨコナデ。 3.覆土内。透孔は３個。
45 (0325)	器　　台	1.裾径116・脚部完存。 2.外面－ヘラミガキ、一部に刷毛目痕を残す。内面－ヘラナデ、裾部はヨコナデ。 3.覆土内。透孔は３個。
46 (0113)	壺	・頚部から胴部にかかる小片。 ・外面－全面ヨコナデされ、頚部と胴部の境に隆帯が巡る。内面－頚部ヨコナデ。胴部はナデ。 ・覆土内。
47 (0215、0404)	壺	・図示部の½。 ・外面－頚部はタテ方向のヘラミガキ。胴部斜格子目文。内面－頚部ヨコ方向ヘラミガキ。胴部ヘラナデ。※頚部の外面全面と内面の一部に赤彩。 ・覆土内。
48 (0368)	甕	1.底径70・底部½。 2.外面－付加状縄文。底部は木葉痕を一部に残すがナデにより大半は消去している。内面－ナデ。 3.覆土内。
49 (0167、0169)	壺？	・胴部小片 ・平行直線文で区画された間に鋸歯状のヘラ描沈線が巡る。ヘラ描沈線に沿って幅８～10㎜の赤彩が施される。 ・覆土内。
50・51 (0270、0273)	土　　玉	・共に完形。50は床面直上、51は覆土内の出土である。

29号住居跡

番　　号	器　種	内　　容
1 (0003、0005、0006、0012、0016、0022、0023、0025、0026、0028、0030～0035、0046、0104～0107、0158、0163、0214、0224、0227、0263、0264、0289、0294、0307、0308、0348、0359、0362、0374、0381～0383、0385、0420、0428、0429、0432、0436、0443、0466、0480、0485、025－0502)	甕	1.口径160・口縁部½と胴部¾。 2.外面－口縁部ヨコナデ、下端部に一部刷毛目を残す。胴部は全面刷毛目、右下から左上方向。胴下端部に粘土の貼付痕を残す。内面－口縁部ヨコナデ。胴部ナデ。※胴部は中位から下端部にかけて二次焼化によると思われる剥離が著しい。 3.覆土内。床面直上。
2 (0081、0259、0272、0285、0287、0301、0302、0420)	甕	1.口径（200）・図示部の¼。 2.外面－口縁部刷毛目後ヨコナデ。胴部刷毛目後ナデ。内面－口縁部刷毛目後ヨコナデ。胴部ヘラナデ。 3.覆土内。※口縁部の外面にスス付着。

3 (0004、0005、0233)	甕	1.口径122・口縁部と胴部½。 2.外面ー口縁部刷毛目後ヨコナデ、胴部は刷毛目後ナデ。内面ー口縁部刷毛目後ヨコナデ。※胴部は剝離が著しいが一部にナデがみられる。 3.覆土内。
4 (0001、0003、0006、0117、0118、0133)	壺	1.154ー120ー58・胴部の一部を欠くが復原完形。 2.外面ー口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。底部ナデ。※外面の矢印部は粘土帯の接ぎ目が一周する。下から2番目の矢印部には補強のための粧土の貼付痕が残る。内面ー口縁部ヨコナデ。胴部ナデ。口縁部ヨコナデ痕は同心円状である。口縁部と胴部の境に稜をもつ。胴部中位以下は剝離が著しい。口縁部の内外面の一部にスス付着。 3.覆土内。※口縁部の内外面の一部にスス付着。
5 (0420、0502)	壺	1.口径92・図示部完存。 2.外面ー口・頸部タテ方向ヘラミガキ。胴部ヨコ方向ヘラミガキ。内面ー口・頸部ヨコ方向ヘラミガキ、胴部ヘラナデ。※ヘラミガキは入念に施される。口・頸部と胴部の境に稜をもつ。 3.覆土内。※胴部の外面の一部にスス付着。
6 (0001、0002、0016、0026、0028、0078、0081)	甕	・胴部最大径 (270)・図示部⅓。 ・内外面共ヘラナデ。 ・覆土内。
7 (0001)	甕	1.底径 (70)・底部¼。 2.外面ー胴部刷毛目。底部ヘラナデ。内面ーナデ。 3.覆土内。※底部に籾痕を残す。
8 (0002、0045、0083)	台付甕	1.裾径70・図示部の⅓。 2.外面ー胴部刷毛目後ナデ。脚部ナデ。内面ー胴部は剝離が著しく不明。脚部はナデ。 3.覆土内。
9 (0033)	台付甕	1.裾径82・脚部完存。 2.外面ー上半ヨコナデ、下半刷毛目後ヨコナデ、裾部ヨコナデ。内面ーナデ。 3.覆土内。
10 (0042、0083)	高坏	1.口径 (140)・図示部の⅕。 2.内外面共ナデ。※坏部の中位に稜が巡る。内面は剝離が著しい。 3.床面直上。
11 (0011)	壺	1.口径154・図示部完存。 2.外面ー口径部ヨコナデ、複合帯の下端部はヘラ様工具による刻み目。頸部は刷毛目。内面ー口唇部にナデを施すほか全面剝離のため不明。 3.覆土内。
12 (0001)	壺	・隆帯が巡り、隆帯を境に上は帯状、下は班点状に赤彩される。
13 (0077)	鉄製品	・鎌の破片であろう。
14(0076)	鉄製品	・鉄鏃の破片であろう。

30A号住居跡

番号	器種	内容
1 (0312、0316、0334)	壺	1.口径 (140)・口・頸部⅓。 2.外面ー複合帯はヨコナデ、下端部に刻み目を施す。頸部ヘラミガキ。内面ーヘラミガキ。 3.覆土内。
2 (0173)	壺	1.口径 (130)・口・頸部⅕。 2.外面ー口・頸部刷毛目後ヨコナデ。胴部ナデ。内面ー口・頸部刷毛目後ヨコナデ。 3.覆土内。

3（B－0530・0692・0707）	甕	1.口径152～158・図示部復原。 2.外面－口縁部ヨコナデ、下端部にヨコナデ後に粗い刷毛目痕を残す。内面－口縁部ヘラナデ、粗い刷毛目を残す。胴部ヘラナデ。内面に３か所粘土帯の接ぎ目を残す。 3.覆土内。※口縁部内外面の一部にスス付着。
4（0230、0247、0254）	甕	1.口径（150）・口縁部¼。 2.外面－口縁部刷毛目後ヨコナデ。胴部ヘラナデ。内面－口縁部刷毛目後ヨコナデ。胴部ヘラナデ。 3.覆土内。
5（0016、0505）	甕	・胴部最大径254・図示部復原。 ・外面－上半部ヨコ方向（左→右）ヘラナデ、下半分タテ方向（上→下）ヘラナデ。内面は全面ヘラナデ。※胎土中の砂粒によって擦痕が著しい。 ・覆土内。
6（0306）	甕	・底径80・底部½。 ・内外面共ヘラナデ。 ・覆土内。
7（0048）	甕	・底径（50）・底部⅓。 ・内外面共ヘラナデ。※外面のヘラナデは胴部から底部にかけて連続して施され、底部周縁は丸味を帯びる。内面はミガキに近い入念なヘラナデが施される。 ・覆土内。
8（0047、0708～0710）	甕	・底径70・底部完存。 ・内外面共ヘラナデ。 ・床面。※内外面共剝離が著しい。
9（0059、0066）	甕	・底径（140）・底部⅕。 ・外面－ヘラナデ、底部に木葉痕。内面は剝離のため不明。 ・覆土内。
10（0236）	台付甕	・裾径（90）・脚部⅓。 ・外面－ヘラナデ。内面－刷毛目、裾部ヘラナデ。 ・覆土内。
11（0711）	台付甕	・裾径（90）・脚部⅓。 ・外面－刷毛目、裾部ヨコナデ。内面－ナデ、裾部ヘラナデ。 ・床面。
12（0457、0533、B－0701、031－0001）	坏	・口径（230）・口縁部⅕。 ・内外面共ヘラミガキ。※内外全面に赤彩を施す。 ・覆土内。
13（0065、0121、0749）	坏	1.57－(170)－40・図示部の¼。 2.内外全面ミガキに近いヘラナデ。※内全面と外面の上半に赤彩が残る。 3.覆土内。
14（0003、0034～0036、0534）	坏	1.59－156－(38)・図示部の½。 2.口縁部内外面共ヨコナデ。体部内外面共ヘラナデ。底部外面ヘラナデ。 3.覆土内
15（0002、0082～0084、0751）	坏	1.63～67－158－42・口縁部½を欠くほか完存。 2.外面－口縁部ヨコナデ。体部と底部はヘラナデ。内面－ヘラミガキ。※内面は中位から底部にかけて剝離が著しい。 3.床面・覆土内。※器形が歪んでいる。
16（0461、0555）	坏	1.63－140－X・口縁部½を欠くほか完存。 2.外面－口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデ。内全面ナデ。 3.床面直上。覆土内。※内外面共赤彩が施されるが、口縁部から体部に向って退色し底部では認められない。
17（0003、0333、0344、0349、0350、0510、0747）	坏	1.61－154－X・図示部の½。 2.内外面共に口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデ。※内面の口唇部直下に稜をもつ。 3.覆土内。

18 (B－0671)	坏	1.57－(156)－56・図示部の¼。 2.内外面共ヘラミガキ。※内面の周縁部下に稜をもつ。 3.床面直上。
19 (0451、0534、B－0587・0706)	坏	1.60－(150)－42・体部¼と口縁部の一部。 2.外面一口唇部にヨコナデされるほか体部・底部共にヘラミガキ。※中位に稜をもつ。内面一口唇部ヨコナデ他は全面ヘラミガキ。 3.覆土内。
20 (0001、0287、0708)	坏	1.(55)－(150)－X・図示部の½。 2.外面一口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデ。内全面ナデ。 3.床面。※内外面に赤彩を施す。
21 (0115、0120、0154、0538、0542、0716)	坏	1.69－146－50・口縁部½を欠くほか完存。 2.外面一口唇部ヨコナデ。体部ヘラナデ。底部ヘラナデ。内面一ヘラナデ。※内外面共擦痕が著しい。 3.床面・床面直上。※内外面に赤彩を施す。
22 (0004)	坏	1.56～60－148－38・復原完形。 2.外面一口縁部ヨコナデ。体部と底部はヘラナデ。内面一口縁部ヨコナデ。体部ヘラミガキ。※器形が歪んでおり、部位により器高差がある。 3.覆土内。※内外面共赤彩が施されるが外面の体下部は消滅している。
23 (0749)	坏	1.68－(180)－48・口縁部⅕と体部⅓。 2.外面一体部・底部共ヘラナデ。内面一ヘラナデ、中位以下は剝離のため不明。 3.覆土内。※内面の中位から上半に赤彩が残る。
24 (0337、0338、0355、0363、0553、0747、B－0707、032－0001)	坏	1.72－(180)－52・図示部の⅓。 2.外面一体部・底部ヘラナデ。内面一全体の⅔は剝離のため不明、遺存部はナデ。 3.覆土内。
25 (0002、0147、0191、0192、0194、0199、0205)	坏	1.76－(150)－35・図示部の⅓。 2.外面一口縁部ヨコナデ。体部・底部はヘラナデ。内面一全面ヘラミガキ※口縁部直下に稜をもつ。 3.覆土内。※外面の体部下部にスス付着。
26 (0453)	双孔円盤	・長径43、短径39、厚さ5、完形。 ・貫通孔の径は 1.5で両側から穿孔している。両面および側面に成形時の研磨痕とみられる擦痕が残る。 ・覆土内。
27 (0452)	双孔円盤	・径21、厚さ5・周縁部を欠損する。 ・貫通孔の径は 1.8で片側から穿孔される。 ・覆土内。
28 (0041)	紡錘車	・長径45・短径32・厚さ11・完形。 ・中央の穿孔は径7。周縁部には成形時の研磨痕が放射状に残る。また上の穿孔周辺にも放射状の擦痕が認められる。石製。 ・覆土内。
29 (0749)	土玉	・径25の球形で径5の孔を貫通している。完形。 ・覆土内。

30B号住居跡

番号	器種	内容
1 (0411、031－0001)	壺	1.口径 (180)・口・頚部小片。 2.外面一複合帯はヘラミガキされ、平行沈線が3本巡る。複合帯と頚部の境はナデ。頚部はナデ。頚部は刷毛目が施され、一部にナデ。 ※複合帯には3.5cm程度の間隔で赤彩が施される。内面一口縁部はヨコナデされ、羽状のヘラ描き沈線が巡らされる。頚部はヘラナデ。 3.覆土内。

2（0474、0684、A－0375、0534）	壺	1.口径（180）・図示部の⅕。 2.外面一複合体はヨコナデ。頚部刷毛目。胴部ヘラナデ。内面一口・頚部ヘラミガキ。胴部ヘラナデ。 3.覆土内。
3（0599、0637、0639、0642、0651、0658、0661、0663、0664、0683、0706、0707、0738、0741、0742）	壺	1.口径134・口縁部⅔と胴上半部⅓。 2.外面一口・頚部刷毛目後ヨコナデ。胴部刷毛目後ヘラナデ。内面一口・頚部・胴部共にナデ。 3.床面直上・覆土内。
4（0002、0426、H10－0000、H36－0001）	壺	1.口径（120）・図示部の¼。 2.外面一口・頚部ヘラナデ。胴部は剝離のため不明。 3.覆土内。
5（0593、0594、0595）	壺	1.口径142・口縁部½。 2.外面一口唇部ヨコナデ、頚部刷毛目後ヘラナデ、口・頚部下端ヨコナデ。内面一口・頚部ヘラミガキ。胴部ヘラナデ。 3.覆土内。
6（0623、0624、0626、0627、0678、0706）	壺	1.口径（136）・図示部⅕。 2.外面一口・頚部・胴部共に刷毛目。内面一口・頚部刷毛目。胴部ナデ。 3.床面直上・床面。
7（0573、0625、0692、0693、0694、0707、A－0359）	甕	1.口径168・口縁部⅘と胴部¼。 2.外面一口縁部刷毛目後ヨコナデ。胴部は刷毛目。※胴部上半は左から右下へ、下半は上から下への刷毛目が行われた後右下から左上へ行われる。内面一口縁部刷毛目後ヘラナデ。胴部ヘラナデ。 3.床面直上・覆土内。
8（0650、0660、0706、A－0446）	甕	1.口径（170)図示部の⅕。 2.外面一口縁部ヨコナデ。胴部刷毛目。内面一口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。 3.覆土内。
9（0534、0570、0577、0578、0579、0706、0707）	甕	1.口径152・口縁部½と胴上半部½。 2.外面一口縁部ヘラナデ。胴部ヘラナデ。※粗雑な整形のため器面は凹凸が著しい。内面一口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。 3.覆土内。
10（0667、0670、0706、A－0002）	甕	1.口径（160）・図示部⅓。 2.外面一口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。内面一口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。※口縁部と胴部の境に稜をもつ。 3.床面・床面直上。
11（0700、0702、A－0398、0419、0423）	高　　坏	1.口径（190）・坏部⅓。 2.外面一張出し部はヨコナデ、他は全面ヘラミガキ。一部に刷毛目を残す。内面一全面ヘラミガキ。 3.覆土内。

32号住居跡

番　　号	器　種	内　　容
1（0001）	甕	1.口径（110）・図示部⅕。 2.外面一口縁部ヨコナデ。胴部刷毛目後ヘラナデ。内面一口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。 3.床面。
2（0003）	甕	1.口径（110）・図示部⅕。 2.外面一口縁部と胴部上端ヨコナデ。胴部刷毛目後ナデ。内面一口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。 3.床面。
3（0001）	坏	1.口径140・図示部の⅓。 2.外面一口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデ。内面一全面ヘラナデ。 3.床面。※内外面共僅かながら赤彩を留めるが磨耗が著しく、実測図には陰影を付さなかった。

33号住居跡

番　　号	器　種	内　　容
1 (0001、0003、0226、0243、0251、0254、0256、0260、0265、0269、0270、0275、0311、0346、0347、0353、0364、0426、0427、0438)	壺	1.口径（160）・口・頸部¼と胴上半部⅓。 2.外面ー口・頸部ヘラミガキ。胴部ヘラミガキ。内面ー口・頸部ヘラミガキ。胴部ナデ。※剥離が著しい。 3.覆土内。1′と同一個体であるが接合しない。
1′(0003、0219、0224、0227、0228、0240、0243、0260、0348、0412、0416、0423、0427、0435、0439、0440、0450)	壺	1.底径86・胴下半部⅔。 2.底部に木葉痕を残すほか内外面共1と同じ。 3.覆土内。
2 (0406)	壺	・胴部最大径（280）・図示部の¼。 ・外面ー最大径部より上部は左下りの上に右下りの付加状縄文、以下は右下りの付加状縄文を付す。上端部にS字状結節文を巡らす。内面ー全面ヘラナデされる。最大径部に接合痕を残す。 ・覆土内。
3 (0001、0040、0041、0083、0177、0179、0186、0338、0426)	壺	・胴部破片。 ・外面ー鋸歯状のヘラ描き沈線で区画された内側は斜格子目文でうめつくす。ヘラ描き沈線の外側は上部、下部共にヘラミガキされた後、赤彩を施す。内面ーナデ。 ・覆土内。
4 (0238、0241、0427、0441、0450、H29－1、H03－3)	壺	1.底径（50）・底部と胴部⅓。 2.内外面共ヘラナデ。※底部中央に焼成後の穿孔（径9㎜）がある。 3.床面。
5 (0145)	壺	・胴部小片。 ・外面ー上端に2条のS字状結節文を巡らし、その間はナデにより付加状縄文を消去している。以下は左下りの付加状縄文でうめつくす。 内面ーヘラナデ。※接合痕を残す。 ・床面直上。
6 (0001、0196、0216、0217)	壺	1.口径134・口・頸部完存、胴部は図示部の½。 2.外面ー口・頸部上半ヨコナデ、下半ヘラナデ。胴部ヘラナデ。 3.覆土内。
7 (0187)	壺	1.口径（110）・口・頸部½。 2.内外面共口唇部はヨコナデ、口・頸部ヘラミガキ。 3.覆土内。※外面の一部にスス付着。
8 (0038、H02－0000)	壺	1.口径（140）・口・頸部⅓。 2.外面ー斜格子目文。内面ーヘラミガキ。※内全面に赤彩される。 3.覆土内。
9 (0146)	甕	1.口径（220）・図示部⅓。 2.外面ー複合口縁帯・口唇部・胴部中位に付加状縄文。遺存部の下端には竹管様具による刺突文が巡る。口縁部下のくびれ部はナデが施される。内面ー全面にわたり入念なナデが施される。複合帯の直下とくびれ部に接合痕が認められる。 3.床面。
10 (0001、0002、0183、0193、0214、0239、0246、H3－0000、H24－0001)	甕	1.214－160－52・口縁部½と胴部¾。 2.外面ー口縁部ヨコナデ。胴上部は刷毛目後一部にヘラナデ、中位は雑なヘラナデ、下部はヘラナデと一部に刷毛目を残す。内面ー口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。 3.覆土内。

11（0001、0002、0003、0263、0426）	甕	1.口径（180）・図示部の½。 2.外面ー口縁部は下から上への刷毛目後一部ヨコナデ。胴部刷毛目。内面ー口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。 3.覆土内。
12（0003、0056、0103、0426）	甕	1.口径（210）・口縁部⅓。 2.外面ー口縁部ヨコナデ。胴部刷毛目。内面ー口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。 3.覆土内。
13（0001、0003、0094、0426）	甕	1.口径（180）・口縁部⅓。 2.外面ー口縁部は下から上への刷毛目後ヨコナデ。胴部刷毛目。内面ー口縁部は刷毛目後ヨコナデ。胴部は刷毛目。※口縁部直下に稜をもつ。 3.覆土内。
14（0003、0198、0248、0249、0264、0276、0345、0426、0427）	甕	1.口径（170）・図示部⅓。 2.外面ー口縁部ヨコナデ。胴部は刷毛目が施され、さらに棒用具による太めの沈線が左下り方向に施される。内面ー口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。 3.覆土内。
15（0190）	甕	1.口径（110）・図示部の⅙。 2.口縁部内外共ヨコナデ。胴部内外面共ヘラナデ。胴部外面の上端に刷毛目が残る。 3.覆土内。
16（0002、0040、0106、0212、0218、0221、0223、0237、0396、0426）	甕	1.底径70・底部（完存）と胴部⅓。 2.外面ー上半部は入念なヘラナデが施されるが下半部は粗雑である。内面は全面入念なヘラナデ。 3.覆土内。
17（0001、0003、0035、0039、0090、0304、0306、0308、0309、0314、0326、0328、0330、0331、0338、0339、0348、0363、0379、0381、0399、0426、0427）	甕	・胴部最大径270・図示部の⅓。 ・外全面ヘラミガキ。※外全面に赤彩される。内全面ヘラナデ。 ・覆土内。
18（0389）	甕	1.口径（150）・口縁部⅕。 2.外面ー口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。内面ー口縁部ヨコナデ。胴部刷毛目。 3.覆土内。
19～21（0002、0003、0229）	甕	・Ｓ字状口縁部片。
22（0124）	台付甕	1.裾径94・脚部完存。 2.外面ー裾部に刷毛目を残すほかヘラナデ。内面ーヘラナデ。 3.覆土内。
23（0271）	台付甕	・脚部上端の小片。 ・外面はヘラナデ、内面はナデ。 ・覆土内。
24（0003、0009、0090、0427、0451）	小形甕	1.口径（120）・図示部の½。 2.外面ー中位より上は口縁部に至るまで刷毛目、以下はヘラナデ。 3.床面。
25（0002、0128、0130）	坏	1.69ー(104)ー36・底部（完存）と体部¼。 2.外面ー口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデ。内面ー全面ヘラナデ。 3.覆土内。
26（0382、0405）	鉢	1.188ー(362)ー116・底部（完存）と体部¼。 2.外面ー全面付加状縄文。底部に木葉痕。内面ー全面ナデ。 3.床面。

27 (0001、0193、0201、0243)	高　　坏	1.口径116・坏部½と脚上端部。 2.坏部は内外面共ヘラミガキ。脚部は外面にヘラミガキ。内面に刷毛目を施す。 3.覆土内。
28 (0003、0116、0172、0188、0217、0234、0349、0407、0426)	高　　坏	1.口径234・口縁部⅕を欠くほか図示部完存。 2.内外面共入念なヘラミガキ。 3.覆土内。
29 (0231)	高　　坏	1.裾径88・脚部½。 2.内外面共ヘラナデ。 3.床面直上。
30 (0119、0120、0157、0158、0410、0411、0427)	器　　台	1.99－受部径100－裾径130・受部½と脚部½。 2.外面－全面ヘラミガキ。内面－受部ヘラミガキ。脚部ヘラナデ。 3.床面直上。※透孔は3個もつ。
31 (0397)	器　　台	1.75－受部径74－裾径76・受部⅓と脚部（完存） 2.外面－全面ヘラナデ。内面－受部ヘラミガキ。脚部刷毛目。 3.覆土内。
32 (0199)	器　　台	1.裾径140・裾部½を欠くほか脚部完存。 2.外面－ヘラミガキ。裾部はヨコナデ後ヘラミガキされる。内面－刷毛目。 3.覆土内。※透孔は3個もつ。
33 (0046、0383、C92－1)	器　　台	1.裾径（100）・脚部⅓。 2.外面－ヘラナデ。裾部に刷毛目を残す。内面－刷毛目後一部にヘラナデ。※透孔は3個もつ。透孔の穿孔か所はタテ方向に刷毛目を1～2度施し、その後に孔を開けられている。 3.床面直上。
34 (0255)	器　　台	・脚部小片。 ・内外面共ヘラナデ。 ・覆土内。
35 (0388)	台付甕？	・裾径34・裾部⅓を欠くほか完存。 ・内外面共ナデ。 ・覆土内。
36 (0001、0210)	甕	1.底径180・底部完存。 2.内外面共ヘラナデ。※底部に木葉痕を残す。 3.覆土内。
37 (0114、0152)	甕	1.底径64・底部½。 2.外面－下端部にヘラナデを施すほかは刷毛目。内面－ヘラナデ。 3.覆土内。
38 (0017)	甕	1.底径36・底部完存。 2.内外面共ヘラナデ。 3.覆土内。
39 (0427、0450)	甕	1.底径68・底部½。 2.外面－刷毛目。底部はヘラナデ。内面－ヘラナデ。 3.覆土内。
40 (0155)	甕	1.底径50・底部完存。 2.内外面共ヘラナデ。 3.覆土内。
41 (0394)	甕	1.底径50・底部完存。 2.内外面共ヘラナデ。 3.覆土内。
42 (0141)	甕	1.底径70・底部完存。 2.内外面共ヘラナデ。 3.覆土内。

43 (0180)	甕	1.底径50・底部完存。 2.内外面共ヘラナデ。 3.覆土内。
44 (0408)	土　　玉	・径28・完形・覆土内。

34号住居跡

番　　号	器　種	内　　容
1 (0001、0002、0003、026−0002、0115)	台　付　甕	1.269−172−92・口縁部⅔、胴部は一部を欠くほか復原。脚部½。 2.外面ー口縁部刷毛目、胴部は上半部右下り、下半部左上りの刷毛目。脚部から胴下端にかけて下から上方向のヘラナデ。脚部は刷毛目。内面ー口縁部刷毛目。胴部は底部から⅓にナデが施されるほかヘラナデ。脚部ナデ。※口縁部直下に稜をもつ。 3.床面、床面直上。
2 (0002)	台　付　甕	1.裾径92・脚部完存。 2.外面ーナデ、裾部ヨコナデ。内面ーヘラナデ、中位から裾部まではヨコナデ。 3.床面。
3 (0008)	甕	1.底径50・底部完存。 2.外面ー脚部刷毛目。底部ヘラナデ。内面ーヘラナデ。 3.床面直上。
4 (0011)	甕	1.底径48・図示部の½。 2.外面ー胴部・底部ヘラナデ。内面ーナデ。 3.覆土内。
5 (0002、0003)	高　　坏	1.144−238−裾径104・坏部は口縁部と体部をそれぞれ一部欠くほか完存。 2.外面ー坏部ヘラナデ。脚部ヘラミガキ。内面ー坏部ヘラミガキ。脚部ヘラナデ。※透孔は縦位に2個を一対として3対6個もつ。 3.床面。
6 (0006)	器　　台	1.80〜83ー受部径82ー裾径98・復原完形。 2.外面ー受部ヨコナデ。脚部ヘラミガキ。内面ー受部ヘラナデ。脚部ヘラナデ。 3.床面。※透孔は3個もつ。
7 (0003)	器　　台	1.88ー受部径70ー裾径90・受部口縁の⅓欠くほか復原。 2.外面ー受部ヘラナデ。脚部刷毛目後ヘラナデ。内面ー受部ヘラミガキ。脚部ヘラナデ。 3.床面。※透孔は3個もつ。

35号住居跡

番　　号	器　種	内　　容
1 (0226、0227)	甕	1.口径（180）・図示部½。 2.外面ー口縁部刷毛目。胴部は上部に刷毛目、下部はヘラナデ。内面ー口縁部刷毛目。胴部ヘラナデ。 3.覆土内。
2 (0003、0021、0056、0224、0225)	甕	1.口径（180）・口縁部½。 2.口縁部は内外面共ヨコナデ。胴部は外面刷毛目。内面ヘラナデ。 3.覆土内。
3 (0002、0004、0120)	甕	・口径（180）・口縁部½。 ・内外面共ヨコナデ。 ・覆土内。
4 (0004、0033、0055、0064、0074、0080、0081、0082、0090、0121、0165、0250、0293、0317、0334)	甕	1.底径44・底部（完存）と胴部は図示部の⅓。 2.外面ー刷毛目。※底部は大きくえぐられている。内面ーヘラナデ。 3.床面、床面直上。

5 (0234)	甕	・底径80・底部½。 ・内外面共ヘラナデ。※底部に木葉痕を残す。 ・覆土内。
6 (0073、0147、0148、0260、0271)	甕	・底径76・底部（完存）と胴部の一部。 ・内外面共ヘラナデ。※外面のヘラナデは入念でヘラ痕を残さない。 ・覆土内。
7 (0004、0005、0006、0016、0023、0024、0046、0054、0056、0058、0062、0069、0070、0075、0088、0158、0159、0160、0162、0164、0242、0247、0310、0317、0343、0344、0345、0349、0354、0359、0362、0363、0365、0378、0380)	台付甕	1.333－(206)－裾径98～104・口縁部1/16、胴部½、脚部¾。 2.外面－口縁部刷毛目。口唇部ヨコナデ。胴部は全面刷毛目（左上り）。脚部刷毛目。内面－口唇部ヨコナデ。口縁部ヘラナデ。胴部ヘラナデ。脚部ヘラナデ。 3.覆土内、床面直上。
8 (0208、0286、0289、0317、0323)	台付甕	・裾径（104）・脚部⅓。 ・外面－刷毛目後ナデ。内面－ヘラナデ。 ・床面直上。
9 (0002、0004、0106、0283、0305)	台付甕	・裾径（90）・脚部⅓。 ・外面－刷毛目、裾部はヨコナデ。内面－ヘラナデ。 ・床面直上。
10 (0214、0215、0216、0355、0364)	台付甕	1.裾径92・脚部（完存）と胴部の一部。 2.外面－胴部刷毛目。胴部下端から脚部上端にかけてヘラナデ。脚部は刷毛目。内面－胴部ヘラナデ。脚部ヘラナデ。 3.覆土内。
11 (0004、0203、0204、0273、0317)	台付甕	・裾径58・脚部⅘。 ・外面－ヘラナデ。内面－ナデ。 ・覆土内。
12 (0324)	台付甕	・裾径68・脚部完存。 ・外面－ナデ。内面－ヘラナデ。 ・床面。
13 (0004、0012、0013、0032、0076、0079、0096、0097、0113、0211、0171、0177、0241、0292)	壺	1.口径104・口・頸部⅔、胴部⅔。 2.外面－口・頸部ヨコナデ後タテ方向のヘラミガキ。胴部ヨコ方向のヘラミガキ。内面－口・頸部タテ方向のヘラミガキ。胴部ヘラナデ。 3.床面、床面直上。
14 (0004、0011、0027、0028、0055、0060、0167、0168、0261、0262、0311、0312、0317、0401)	壺	1.口径（100）・口・頸部⅕と胴部½。 2.外面－口唇部ヨコナデ。口・頸部タテ方向ヘラミガキ。胴部ヘラミガキ。※胴上端部に刷毛目を残す。胴部のヘラミガキは粗雑である。内面－口・頸部ヨコ方向ヘラミガキ。胴部ヘラナデ。 3.床面、床面直上。
15 (0145)	甕	1.106～113－109～113－34。完存。 2.内外面共ヘラナデ。※器形に歪みがある。 3.床面。
16 (0004、0192、0194、0195、0201、0202、0274、0275)	甕	1.口径116・口縁部は復原して完形。胴部は図示部の⅔。 2.外面－口唇部、口縁部共ヨコナデ。胴部は刷毛目後ヘラナデ。内面－口縁部は刷毛目後口唇部にヨコナデ。胴部ヘラナデ。 3.覆土内。

17（0382、0383、0385、0386、0384、0397）	甕	1.137－148－46・胴部の一部を欠くほか復原完形。 2.外面－口縁部ヨコナデ。胴部ヘラミガキ、胴上端部に刷毛目を残す。 内面－口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。※外全面と内面口縁部に赤彩を施す。 3.覆土内。※外面の赤彩は全体に班点状の剝離がある。外面の口縁部から胴上部にかけてほぼ全周にススが付着する。底部付近の胎土は赤色化しており、二次焼化が認められる。内面も全面にわたって器面の剝離が著しい。
18（0004、0252、0256、0257、0339）	甕	1.口径80・図示部の½。 2.外面－口縁部ヨコナデ。胴部は上半部刷毛目、下半部ヘラナデ。 内面－口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。 3.床面直上。
19（0004、0077、0175、0185、0317）	甕	1.73－(82)－34。図示部の⅔。 2.外面－口縁部ヨコナデ。胴部は最大径付近にヘラナデされるほか刷毛目。 内面－口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。※口縁部直下に稜をもつ。 3.床面直上。
20（0004、0139、0179、0182、0193、0200、0219、0276、0317、0350）	甕	1.77－94－46・口縁部⅕を欠くほか復原完形。 2.外面－口縁部ヨコナデ。胴部は上部に刷毛目、下部はヘラナデ。 内面－口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。 3.覆土内。
21（0004、0088、0206、0299、0317、0335、0399）	甕	1.70－(106)－36・口縁部の一部と胴部⅔。 2.口縁部内外面共ヨコナデ。胴部内外面共ヘラナデ。 3.床面、床面直上。
22（0004、0083、0087、0180、0184、0196、0199、0212）	甕	1.104－(84)－50・口縁部の一部と胴部½。 2.外面－口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。胴下端部から底部にかけてヘラナデされヘラ痕を残す。内面－口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。 3.床面、床面直上。
23（0004、0183、0294、0317、0325、0401）	甕	1.底径46・胴部½と底部⅓。 2.外面－ヘラナデ。内面－口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。 3.床面、床面直上。
24（0004、0142、0153、0189、0297）	埦	1.75－(116)－(48)・図示部の¼。 2.外面－口縁部ヨコナデ。体部は剝離が著しく一部にヘラナデを残す。 3.覆土内。
25（0004、0186、0284、0291、0317）	埦	1.44－60－(28)・底部⅔を欠くほか復原。 2.外面の口唇部にヨコナデされるほか内外面共ヘラナデ。内面には擦痕が残る。 3.覆土内。
26（0004、0128、0317、0327、0368）	高　　坏	1.155～158－236－裾径138・坏部½と脚部⅔。 2.外面－坏部、脚部共ヘラミガキ。内面－坏部ヘラミガキ。脚部ヘラナデ。※外面のヘラミガキは粗雑なための擦痕が残る。 3.床面直上。※坏部がやや傾いておりために器高が一定しない。透孔は3個もつ。
27（0004、0181、0187、0191、0193、0207、0209、0281、0282、0284、0317）	高　　坏	・口径178・坏部⅔。 ・外面－口唇部にヨコナデを施すほかヘラナデ。内面－ヘラミガキ。 ・床面直上。
28（0329）	高　　坏	・口径120・坏部完存。 ・内外面共ヘラミガキ。 ・床面。※内全面に班点状の剝離が著しい。
29（0004、0034、0084、0161、0270、0337）	器　　台	・受部径86・図示部の⅔。 ・外面－受部ヨコナデ。脚部ヘラミガキ。内面－受部は口縁部がヨコナデされるほか、脚部ヘラミガキ。脚部ヘラナデ。 ・床面、床面直上。

30 (0131、0188、0174、0317)	器　台	・裾径102・脚部½。 ・外面ーヘラミガキ。内面ーヘラナデ。 ・覆土内。
31 (0004、0117、0124、0301、0303、0306、0318、0319)	壺	・肩部小片。 ・口・頸部直下に平行直線文を巡らし、その下には波状櫛摘文を施す。遺存部の下端にも平行直線文が一部残る。 ・覆土内。

36号住居跡

番　号	器　種	内　容
1 (0001、0002)	壺	・口径 (110)・口・頸部⅓。 ・外面ー口縁部ヨコナデ。頸部ヨコナデ。遺存部の最下端に一部刷毛目を残す。内面ー刷毛目。 ・覆土内。
2 (0015)	壺	・口径 (140)・口・頸部¼。 ・外面ー口縁部ヨコナデ。頸部ヘラナデ。内面ーヨコナデ。頸部下端はヘラナデ。 ・覆土内。
3 (0009)	壺	・口径144・口・頸部¾。 ・外面ー口縁部ヨコナデ。頸部ヘラナデ。内面ー口・頸部ヘラナデ。胴部上端にヘラナデ。 ・覆土内。
4 (0003、0013)	甕	・口径144・口縁部½。 ・外面ー口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。※口縁部直下に稜をもつ。 ・覆土内。
5 (0004、0018、0035、0039、0042、0043、0045、0046)	甕	・口径160・口縁部一周と胴上部の一部。 ・外面ー口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。内面ー口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。※口縁部下に接合痕を残す。 ・覆土内、床面直上。
6 (0016)	台付甕	・口径 (110)・図示部の¼。 ・外面ー口縁部はヨコナデした後、櫛歯列点文をめぐらす。胴部は上端にヨコ方向の刷毛目、以下は左上りの刷毛目。内面ー口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。 ・覆土内。
7 (0007)	甕	1.100－98－52・完存。 2.口縁部内外面共ヨコナデ。胴部内外面共ヘラナデ。※内面の口縁部直下に稜をもつ。 3.床面直上。
8 (0005)	甕	1.75－104－48・復原完形。 2.口縁部内外面共ヨコナデ。胴部内外面共ヘラナデ。※内面の口縁部直下に稜をもつ。 3.床面直上。
9 (0024)	甕	1.口径 (88)・図示部の¼。 2.外全面ナデ。内面は口縁部刷毛目、胴部ヘラナデ。 3.床面直上。
10 (0008)	埦	1.70－116－38・完存。 2.口縁部内外面共ヨコナデ。体部内外面共ヘラナデ。 3.床面直上。
11 (0030)	高　坏	・口径 (224)・図示部の⅙。 ・内外面共ヘラミガキ。 ・覆土内。

12 (0001)	甕	・胴部最大径（80）・図示部の1/20。 ・外面上端部にヨコナデを施すほか内外面共ヘラナデ。 ・覆土内。
13 (0011)	高　　坏	・裾径（110）・脚部1/3。 ・外面一刷毛目。内面一ヘラナデ。 ・覆土内。
14 (0026)	甕	・底径40・図示部完存。 ・内外面共ヘラナデ。 ・覆土内。
15 (0003)	甕	底径（68）・底部1/3。 ・内外面共ヘラナデ。 ・覆土内。
16 (0002)	甕	・底径（70）・底部1/4。 ・内外面共ヘラナデ。 ・覆土内。
17 (0177)	土器片錘？	・土器片再加工品。 ・周縁部は磨耗し丸味を帯びる。 ・中央よりやや上のくびれた部分は西側から意図的に加工したようである。
18 (0002)	土器片錘？	・土器片再加工品。 ・17にみられる企画性はなく、周縁部は磨耗して丸味を帯びている。
19 (0027)	砥　　石	・４面に使用痕を残す。 ・２面には細い条痕がみられるが他の２面は平滑である。

37号住居跡

番　　号	器　種	内　　容
1 (0001、0040)	甕	1.口径208・口縁部全周と胴部1/3。 2.外面一口縁部は中位から口唇部にかけてヨコナデ。下半は下から上への刷毛目を行った後上から下へ胴上端まで及ぶ刷毛目を施す。胴部は右下りの刷毛目。内面一口縁部刷毛目。胴部ヘラナデ。※口縁部直下に稜をもつ。 3.覆土内。
2 (0004)	甕	1.227－176－60・口縁部1/3と底部2/3を欠くほか復原。 2.外面一口縁部刷毛目。胴部は右下りのヘラナデ、下端部は左上りのヘラナデ。※ヘラナデは粗雑で擦痕が著しい。内面一口縁部刷毛目後弱いヨコナデ。胴部ヘラナデ。 3.床面。
3 (0055、0068)	甕	・口径（150）・口縁部1/5。 ・内外面共ヨコナデ。 ・床面。
4 (0001、0002、0004、0011、0013、0014、0015、0016、0017、0018、0019、0022、0023、0027、0036、0055、0057、0065、0067、0069、0071、0072、0074)	甕	1.底径78・底部（完存）と胴部1/3。 2.外面一ヘラナデ。内面一ヘラナデ。底部付近に刷毛様具によるナデ痕を残す。 3.床面。
5 (0054)	甕	・底部68・図示部の1/3。 ・外面一粗雑なヘラナデ。擦痕が著しい。内面一ヘラナデ。 ・柱穴内。
6 (0001、0004、0024、0025、0026、0032、0041、0055)	台　付　甕	1.153－124－62・口縁部と胴部とそれぞれ一部を欠くほか復原。 2.外面一口縁部ヨコナデ。胴部は左上りの刷毛目。脚部ヘラナデ。 内面一口縁部刷毛目。胴部、脚部共ヘラナデ。 3.床面。

7 (0056)	台付甕	1.127－100－80・口唇部の大半を欠くほか完存。 2.外面－口縁部はヨコナデ後、櫛歯列点文をめぐらす。胴部は下部⅓がタテ方向（下から上へ）のヘラミガキ、他はヨコ方向のヘラミガキ。 上端部の一部に刷毛目を残す。脚部は上から下へのヘラミガキ。 内面－口縁部ヨコナデ。胴部は入念なヘラミガキ。脚部は刷毛目。 3.柱穴内。
8 (0003)	台付甕	・裾径70・脚部完存。 ・外面の裾部にヨコナデを施すほか内外面共ヘラナデ。 ・床面。
9 (0050)	台付甕	・裾径104～108・脚部完存。 ・内外面共ヘラナデ。 ・覆土内。
10 (0009)	甕	1.73－(92)－32・口縁部¼と胴部⅔。 2.内外面共ヘラナデ。 3.覆土内。
11 (0054)	高坏	1.108－(216)－裾径120・坏部⅓、脚部½。 2.坏部内外面共ヘラミガキ。脚部外面ヘラミガキ、内面は裾部にヨコナデを施すほかヘラナデ。 3.柱穴内。※透孔は3個もつ。
12 (0010、0055、0066)	器台	1.75－受部径78－裾径116・受部½、脚部¼。 2.外面－受部は口唇部にヨコナデを施すほかヘラナデ。脚部ヘラミガキ。 内面－受部ヘラミガキ。脚部ヘラナデ。 3.床面。※透孔は3個もつ。
13 (0001、0002、0051)	器台	・脚部⅓。 ・外面－ヘラミガキ。内面－ヘラナデ。 ・覆土内。※透孔は6個もつ。
14 (0035)	器台	・脚部片。 ・外面－ヘラミガキ。内面－ヘラナデ。 ・覆土内。※透孔は3個もつ。

40号住居跡

番号	器種	内容
1 (0151、0181)	甕	・口径（190）・図示部の¼。 ・外面－口唇部と胴部最大径付近は付加状縄文。他はヘラナデ。内面－ヘラナデ。※擦痕が著しい。 ・床面。
2 (0003)	甕	・図示部⅓。 ・外面－付加状縄文、下端部はヘラナデ。内面－ヘラナデ。 ・覆土内。
3 (0002)	高坏	・口径152・口縁部½を欠くほか図示部完存。 ・外面－ヘラナデ。内面－ヘラミガキ。 ・覆土内。
4 (0001)	浮子？	・軽石製の加工品である。現存長71mm、最大幅36mmを測る。上端部にくびれが一周し、周囲は約1cm間隔で半円状に加工される。片面には3か所円形の凹みがある。浮き具の一種とも考えられるが、使途不明品としておく。 ・覆土内。
5 (0157)	紡錘車	・径47mm、厚さ30mm。粘土塊を手捏ねで成形し、乾燥前に孔を貫通している。二次焼化の痕跡を残す。 ・覆土内。

出土遺物一覧（その他の遺構）

11号址

番　号	器　種	内　容
1 (0002)	甕	胴部最大径（130）・胴部¼。 ・外面ー下部に一部ヘラケズリ痕を残すほか全面ヘラミガキ。内面ー上端部にヨコナデを施すほかヘラナデ。※外全面に赤彩されるが下部は剥離が著しい。外面はヘラケズリの後、ヘラミガキされるが、ミガキが粗雑なためヘラケズリ痕が多く残る。内面の上端部にも一部赤彩が残る。
2 (0001)	器　台	・裾径（90）・図示部の⅓。 ・外面ー裾部に複合帯が巡り、ヨコ方向の刷毛目が施される。脚部はタテ方向の刷毛目。内面ーナデ。
3 (0003)	陶器小皿	・16ー72ー32・全体の½。 ・右回転のロクロ成形。外面は下端部と底部に回転ヘラ削りを行い、ほかは回転ナデ。内面はナデ。※胎土は明灰色で固く焼き締る。回転ヘラけずりされた部分を除いて内外面共褐色の釉をかけている。
4 (0004)	鉄　鏃	・現存52、断面は４×５。箆被の一部であろう。

15号址

番　号	器　種	内　容
1 (0002)	甕	・口径（90）・図示部¼。 ・外面ーヘラナデ。内面ー口縁部に粗雑なヘラミガキを施すほかヘラナデ。※外面の一部にスス付着。
2 (0004)	高　坏	・図示部¼。 ・外面ー張り出し部はヨコ方向、ほかはタテ方向のヘラミガキ。内面ーヘラミガキ。※坏部の透孔は４個確認できる。
3 (0002)	器　台	・裾径（98）・脚部¼。 ・外面ー粗雑なヘラミガキ。内面ー刷毛目。
4 (0002)	器　台	・図示部の¼。 ・外面ーヘラミガキ。内面ーナデ。※脚部の透孔は１個確認。

48号址

番　号	器　種	内　容
1 (0001)	甕	・底径（60）・底部⅓。 ・内外面共ヘラナデ。※底部に木葉痕を残す。
2 (0014)	砥　石	・破損品を再利用したものであろう。 ・２面に使用痕が認められ、使用面は平滑でなく反っている。
3 (0053)	砥　石	・破損した小片である。 ・２面に使用痕が認められ、各面共平滑である。
4 (0010)	不　明	・鉄製品の小片。断面は23×４。
5 (0049)	刀子？	・刀身の一部であろう。砥ぎ減りが著しい。断面は10×２。
6 (0032)	釘	・頭頂部の一部と下半部を欠く。断面は７×４。

5章　遺構外出土の遺物

これまで、遺構とその遺物について解説してきたが、本章では、表土除去作業・遺構確認作業等において検出した遺物で、所属する遺構の明らかでないものに関して解説することとした。

出土位置については、検出したグリッド名を用いて明確にするよう努めたので、第5図船尾町田遺跡グリッド配置図および、第4図グリッド呼称例を併せて参照されたい。

1．弥生時代以降の遺物

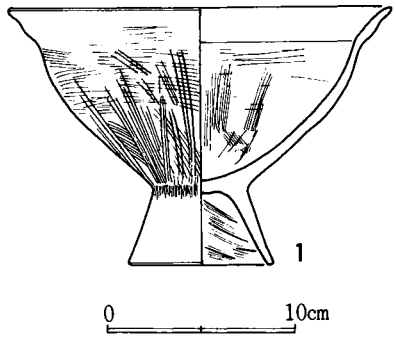
一覧表の内容は以下の通りである。

1．器高ー口径あるいは受部径ー底径あるいは裾径・遺存度。

2．成形・調整など。

3．出土グリッド名　※その他特記事項。

なお、法量の項で（　）を付したものは推測値である。単位はすべてmmを用いた。



第92図　Aグリッド出土遺物実測図（1/4）

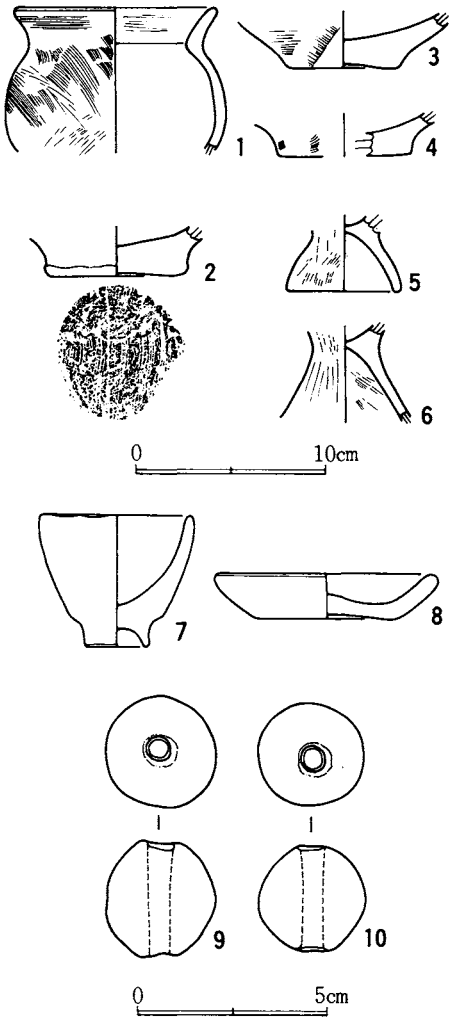
Aグリッド（第92図・図版42）出土遺物一覧（遺構外）

番　号	器　種	内　容
1（A90−0001）	台付鉢	1.132−191〜202−76・復原完形。 2.外面ー口縁部ヨコナデ。胴部は上半部が右から左へヨコ方向の刷毛目、下端部は下から上への削毛目。脚部はナデ。内面ー口縁部ヨコナデ。胴部へラナデ。脚部へラナデ。 3.A90※口縁部は歪曲しているため口径は一定しない。完形品が圧し潰ぶされた状態で出土した。

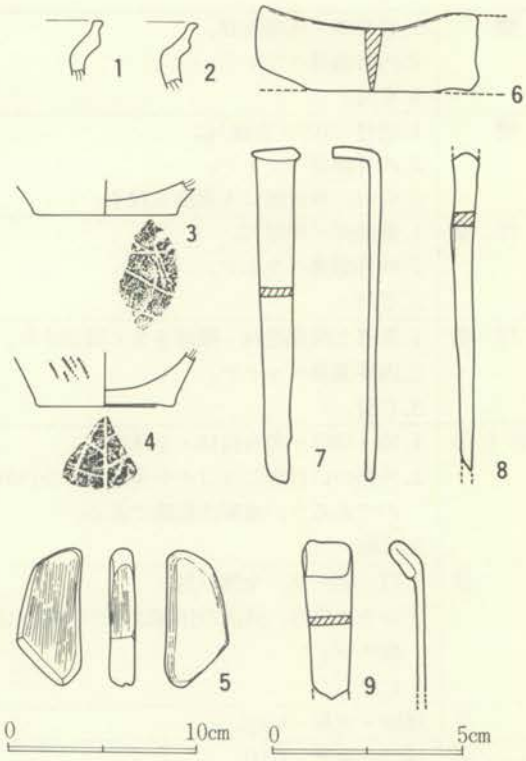
Cグリッド（第93図・図版42）

番　号	器　種	内　容
1（C51−0001、0019、0061）	甕	1.口径（100）・口縁部の一部と胴上部⅔。 2.外面ー口縁部ヨコナデ。胴部刷毛目。内面ー口縁部ヨコナデ。胴部へラナデ。 3.C51。
2（C00−0000）	甕	1.底径ー70・底部完存。 2.内外面共へラナデ。 3.C00。底部に木葉痕を残す。

3（C51－0002、0010）	甕	1.底径58・底部完存。 2.内外面共ヘラナデ。 3.C51。
4（C51－0047）	甕	1.底径（70）・底部½。 2.内外面共ヘラナデ。 3.C51。※底部に木葉痕を残す。
5（C51－0060）	台付甕	1.裾径60・脚部⅔。 2.内外面共ヘラナデ。 3.C51。
6（C51－0005）	台付甕	1.脚部上端部径34・裾部を欠く脚部小片。 2.内外面共ヘラナデ。 3.C51。
7（C86－0000）	小形土器	1.33－(40)－高台径18・全体の⅔。 2.外面の口唇部にヨコナデを施すほか内外面共ナデ。手捏ね成形によるものであろう。成形は粗雑である。 3.C86。
8（C81－0000）	小皿	1.11－58－38、全体の⅔。 2.ロクロ成形。外面の体部はナデ、底部は回転糸切り痕を残す。内面は回転ナデ。 3.C81。
9（C00－0000）	土玉	径28・完形・C00。
10（C00－0000）	土玉	径28・完形・C00。



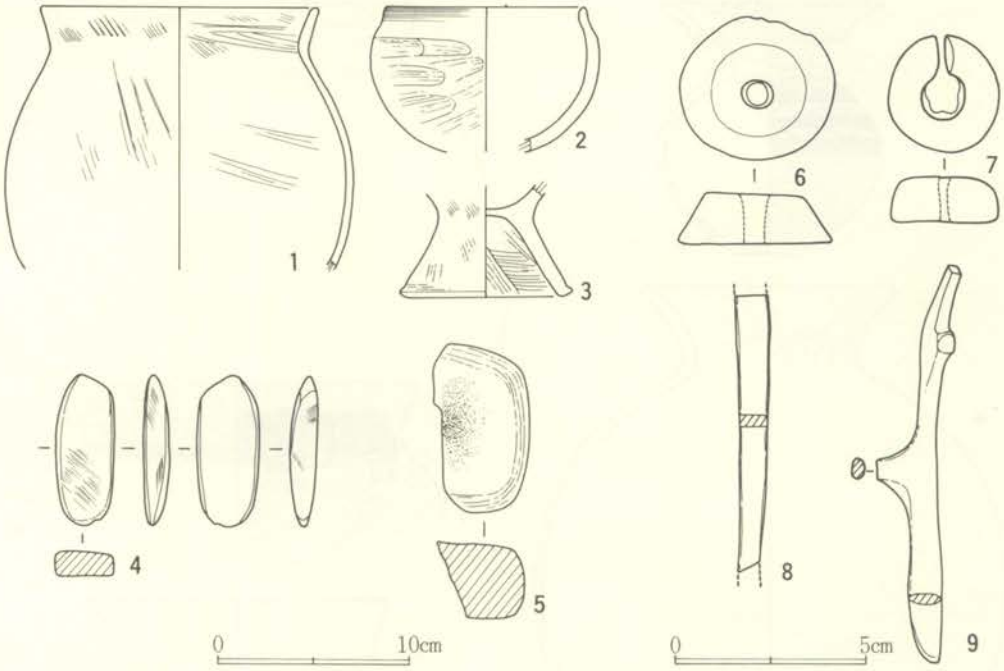
第93図　Ｃグリッド出土遺物実測図（1/2・1/4）



第94図　Dグリッド出土遺物実測図（1/2・1/4）

Dグリッド（第94図・図版42）

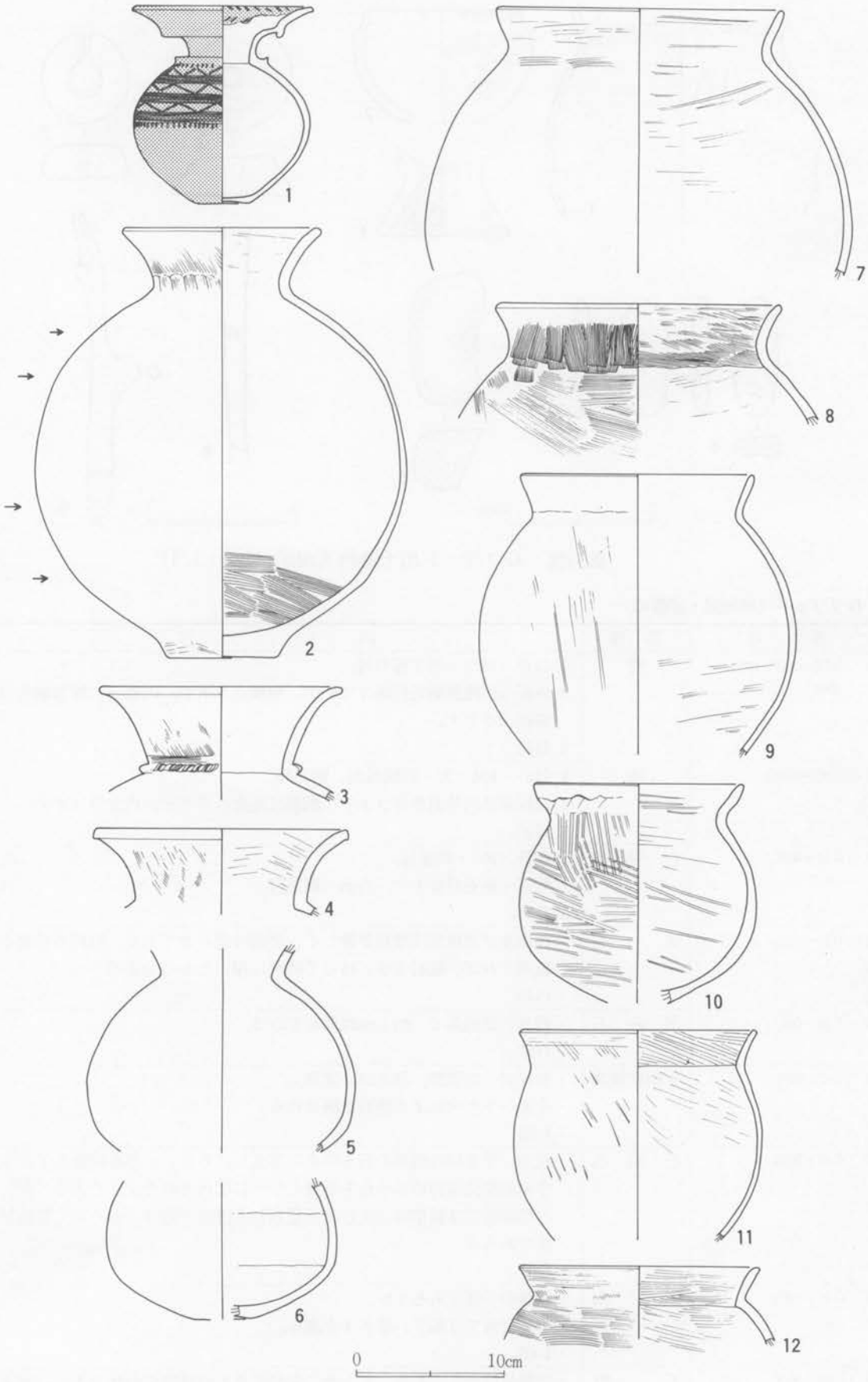
番　　号	器　種	内　　容
1（D43−0001）	甕	・S字状口縁部小片。
2（D45−0001）	甕	・S字状口縁部小片。
3（D75−0001）	甕	1.底径（74）・底部⅓。 2.内外面共ナデ。 3.D75。※底部に木葉痕を残す。
4（D24−0002）	甕	1.底径（70）・底部¼。 2.外面ー付加状縄文。内面ーナデ。 3.D24。底部に木葉痕を残す。
5（D75−0001）	砥　　石	・両面と周縁部に使用痕を残す。片面と周縁部の一部に細かい擦痕が認められる。 ・D75。
6（D22−0001）	刀　子　？	・断面の形状から刀子の刀身片であろう。 ・D22。
7（D76−0000）	釘　　？	・頭頂部を折り曲げただけの単純な造りである。下端部を欠損する。 ・幅6～10、厚さ2。 ・D76。
8（D32−0003）	不　　明	・鉄鏃の一部と思われる。上部では長方形の断面であるが、下部では円形となる。 ・上端で幅5、厚さ2。 ・D32。
9（D78−0000）	不　　明	・上端部は折り返しされた後、約30°程の角度に曲げられている。幅11、厚さ2。 ・D78。



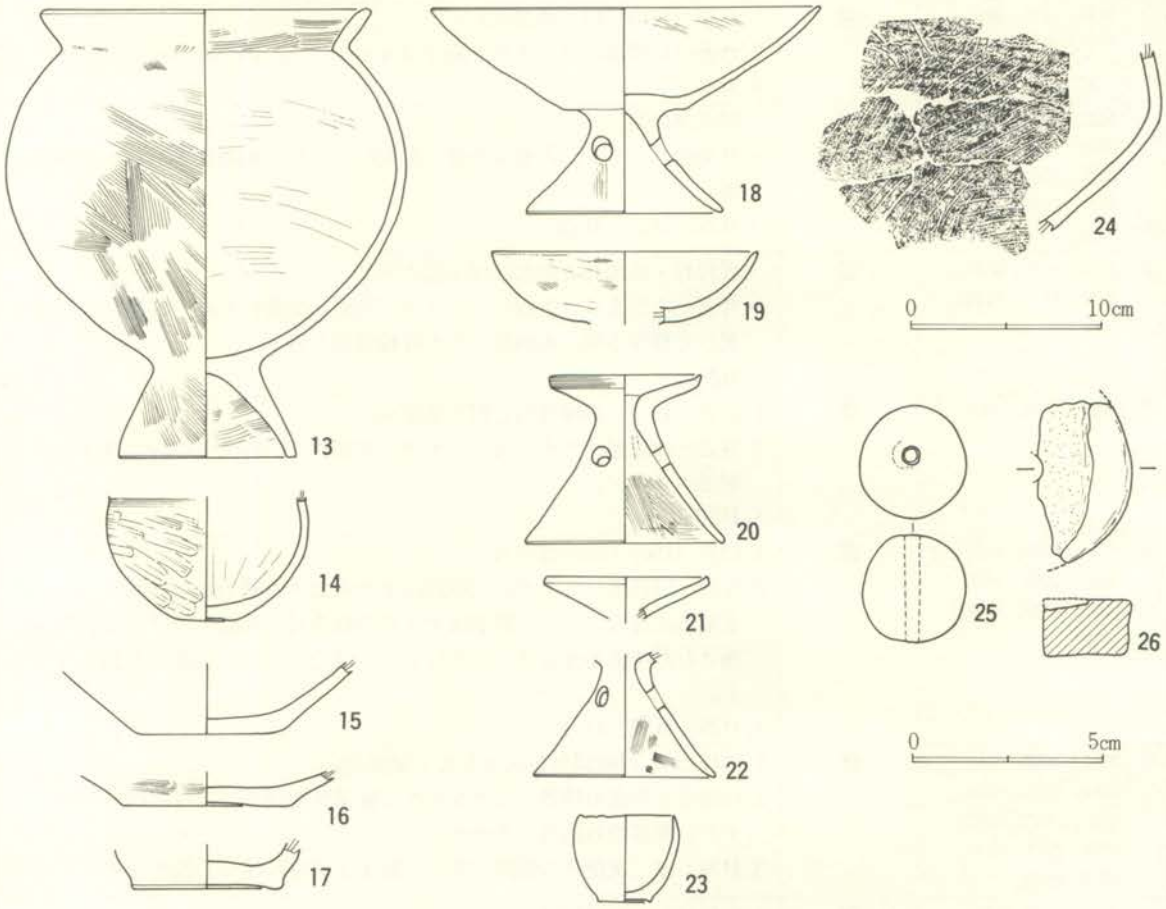
第95図　Ｇグリッド出土遺物実測図（1/2・1/4）

Ｇグリッド（第95図・図版43）

番　号	器　種	内　容
1（G72－0000、0001、0002）	甕	1.口径（142）・図示部の½。 2.外面－口縁部刷毛目後ヨコナデ。胴部ヘラナデ。内面－口縁部刷毛目。胴部ヘラナデ。 3.Ｇ72。
2（G95－0000）	埦	1.(75)－104－Ｘ・口縁部⅘、胴部½。 2.口縁部は内外面共ヨコナデ。胴部は外面ヘラナデ。内面ヨコナデ。 3.Ｇ95。
3（G31－0000）	台付甕	1.裾径（90）・脚部⅓。 2.外面－刷毛目後ナデ。内面－刷毛目。 3.Ｇ31。
4（G19－0000）	砥　石	・両面及び周縁部は磨耗が著しく、表面は滑らかである。磨耗の状態から推測すれば、砥石を手に持って研磨に用いたものであろう。 ・Ｇ19。
5（G67－0001）	凹み石	・約½の破損品で、約１mm程凹んでいる。 ・Ｇ67。
6（G83－0001）	土製紡錘車	・長径40、短径25、厚さ13。完形。 ・全面ヘラナデによる整形が施される。 ・Ｇ83。
7（G61－0001）	石製品	・径29、厚さ12の円形の石を中央に穿孔し、さらに一部を切断している。中央の穿孔は初めに小孔を貫通し徐々に広げられたようである。穿孔部と切断面には製作時に生じたと思われる擦痕が残る。おそらく装飾具の類であろう。 ・Ｇ61。
8（G05－0001）	不　明	・鉄鏃の一部であろうか。 ・中央付近では幅７、厚さ３を測る。 ・Ｇ05。
9（G00－0000）	不　明	・鉄製品の小片である。２か所に突起部をもつ特異な形状である。使途は不明である。 ・Ｇ00。



第96図　Hグリッド出土遺物実測図（1/4）



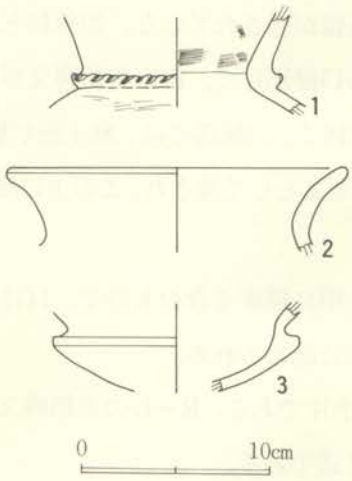
第97図　Ｈグリッド出土遺物実測図（1/2・1/4）

Ｈグリッド（第96・97図・図版43）

番　号	器　種	内　容
1（H31－0034、0108、0110、0123）	壺	1.130－120－36・口縁部½を欠くほか復原。 2.外面－口縁部と頸部は共にヨコナデ。胴上端部と胴中部にヘラによる刺突文を巡らす。その間はヘラ描きによる山形文と平行直線文を各３段巡らせている。胴中部から底部にかけては入念なヘラミガキ。底部はヘラナデ。内面－口縁部に「ハ」の字状に櫛歯列点文を巡らす。以下は剝離が著しく、整形は不明。 3.H31。※外面の全面と内面の口縁部に赤彩される。
2（H31－0046、0050、0066、0071、0100、0103、0114）	壺	1.280－132－72・胴部の一部を欠くほか復原。 2.実測図の矢印部には復原時の接合痕が一周していることから成形は輪積によるものであろう。胴部内面の下部にはヒビ割れが⅔周しており、内面の底部に入念な刷毛目を残す。また、同一か所の外面には粘土の盛り上がりが一周しており、このことから胴下部を成形した後、輪積されたようである。外面－口唇部ヨコナデ。口縁部は下から上へヘラナデ。胴部は全面、ミガキに近い入念なヘラナデが行われ、下部はヨコ方向、ほかはタテ方向である。口・頸部直下にヘラ痕を残す。内面－口・頸部ヘラナデ。頸部の下端から胴下部に至る範囲はヘラナデ。下部は刷毛目が施される。 3.H31。※外面の胴中部は近には、ほぼ全周にわたってススの付着がみられる。
3（H45－0001、H54－0001、0030、0038、0039、0040、0097、0098、0099）	壺	1.口径（160）・図示部の⅓。 2.外面－頸部と胴部の境界に隆帯が巡り、刻目が施される。口・頸部はヘラナデ。頸部の下端に一部ヨコナデが施される。胴上端部はヘラナデ。内面－口・頸部ヘラナデ。胴部ナデ。 3.H45、H54。

4（H31−0034、0053、0105、0121、0137）	壺	1.口径（170）・口・頚部¾。 2.外面一口唇部にヨコナデを施すほかヘラナデ。内面一ヘラナデ。 3.H31。
5（H21−0001、H31−0040、0056、0069、0074、0100、0105、0122、0132、H32−0001）	壺	・図示部の½。 ・外全面ヘラナデ。内面は全体に黒変しており、剝離が著しいため整形不明。 ・H21、H31、H32。
6（H31−0009、0034、0104、0115、0118）	壺	・底径42・底部⅓と胴部は図示部の⅔。 ・外面一入念なヨコ方向のヘラナデ。内面一全面にわたり班点状の剝離が著しく整形不明。※内面に2か所輪積痕を残す。 ・H31。
7（H20−0014、0015）	甕	1.口径（190）・口縁部⅓と胴上半部¼。 2.外面一口縁部ヘラナデ後ヨコナデ。胴部ナデ。内面一口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。 3.H20。
8（H45−0001、H53−0034、0043、0083、0087、0090、H54−0023）	甕	1.口径（190）・図示部の¼。 2.外面一口唇部ヨコナデ。口縁部は下から上への刷毛目が施され一部は胴上端部に及んでいる。胴部は右下りの刷毛目。内面一口縁部は刷毛目が施された後上半部はヨコナデによって消去される。胴部は入念なヘラナデ。 3.H45、H53、H54。
9（H31−0008、0012、0014、0018、0019、0020、0025、0037、0053、0077、0100、0119、0135）	甕	1.口径156・口縁部½と底部を欠く胴部⅓。 2.口縁部と胴部の境界のほか5か所に輪積痕が残る。口縁部内外面共ヨコナデ。胴部内外面共ヘラナデ。 3.H31。※二次焼化の痕跡があり、胎土は非常に脆く、器面が荒れている。
10（H31−0032、0045、0065、0067、0131、0165）	甕	1.口径140、図示部の½。 2.外面一口縁部は下半部の全周が剝離するが、上半部はヨコナデ。胴部は目の荒い櫛様具によるナデ。内面一口縁部ヨコナデ。胴部は粗雑なナデ。 3.H31。※外面の口縁部と胴部にはそれぞれ一部にスス付着。内面は班点状の剝離が著しく、底部付近は胎土の黒変がみられる。
11（H54−0027、0045、0048、0049、0053、0057、0058、0059、0062、0064、0070、0101）	甕	1.口径（160）・口縁部¼と底部を欠く胴部⅕。 2.外面一口唇部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。内面一口縁部は刷毛目後ヨコナデ。胴部ヘラナデ。※口縁部と胴部の境に稜をもつ。 3.H54。
12（H31−0126）	甕	1.口径（160）・口縁部¼。 2.外面一口縁部ヨコナデ。胴部刷毛目。内面一口縁部刷毛目後ヨコナデ。胴部ヘラナデ。※口縁部と胴部の境に稜をもつ。 3.H31。
13（H31−0029、0053、0061、0069、0071、0100、0124、0127、0142、0164、0165）	台付甕	1.231−(172)−92・口縁部⅕、胴部完存。 2.外面一口縁部ヨコナデ。胴部は左上りの刷毛目、一部にナデが施され刷毛目を消去している。脚部は刷毛目。内面一口縁部は刷毛目後、上半部にヨコナデ。胴部ヘラナデ。脚部刷毛目。※口縁部と胴部の境に稜をもつ。 3.H31。
14（H31−0089、0100）	甕	1.底径28、図示部の⅓。 2.外面一口縁部の下端にヨコナデ。胴部ヘラナデ。内面一ヘラナデ。 3.H31。
15（H07−0000）	甕	・底径74・底部½。 ・内外面共ヘラナデ。 ・H07。

16（H68－0010）	甕	・底径88・底部完存。 ・外面一胴部は刷毛目。底部ヘラナデ。内面は剝離のため不明。 ・H68。
17（H31－0099）	甕	・底径76・底部完存。 ・外面一胴部ナデ。底部ヘラナデ。内面一ヘラナデ。 ・H31。
18（H54－0051、0056、0057、0066、0071、0072、0073、0075、0077、0078、0081、0096）	高　　坏	1.107－204－104・坏部⅓、脚部は裾部の一部を欠くほか完存。 2.坏部・脚部共に内外面は入念なナデが施される。※透孔は３個もつ。 3.H54。
19（H23－0006、0011）	高　　坏	・口径（140）・坏部½。 ・外面一口唇部ヨコナデ。体部は刷毛目後ヘラナデ。内面一口縁部ヨコナデ。体部は入念なヘラナデ。 ・H23。
20（H31－0070）	器　　台	1.86－80－104・受部⅓を欠くほか完存。 2.外面一受部口縁部ヨコナデ。受部ナデ。脚部ヘラナデ。内面一受部ナデ。脚部刷毛目後ナデ。※透孔は３個もつ。 3.H31。
21（H07－0003）	器　　台	・受部径84・受部完存。 ・外面の口縁部にヨコナデが施されるほか内外面共ヘラナデ。 ・H07。
22（H66－0000）	器　　台	・裾部径（86）・脚部½。
23（H31－0039）	小形土器	・内外面共ヘラナデ。内面の一部にヘラ痕を残す。 ・H66。 1.44－45～50－28・口唇部の大半を欠損するほか完存。 2.内外面共全面ナデ。 3.H31。
24（H38－0000）	壺	・胴部小片。 ・上端部にＳ字状結節文が一条巡り、以下は空白部をもった付加条縄文を施す。 ・H38。
25（H32－0008）	土　　玉	・径27・完形。 ・H32。
26（H05－0000）	土製紡錘車	・径（50）、厚さ14・全体の約¼。 ・成形は粗雑で、粘土塊から円盤状に手造りした後、表面はナデられる。



第98図　Ｉグリッド出土遺物実測図（1/4）

Ｉグリッド（第98図）

番　　号	器　種	内　　容
1（Ｉ36－0001）	壺	・図示部の⅓。 ・頸部と胴部の境に隆帯が巡り、刻目を施す。頸部は外面ヨコナデ、内面刷毛目。胴部は内外面共ナデ。 ・Ｉ36。
2（Ｉ36－0001、0002）	甕	・口径（180）・口縁部⅓。 ・内外面共ヨコナデ。 ・Ｉ36。
3（Ｉ18－0001）	高　　坏	・坏部の小片。 ・外面一張り出し部より上はヨコナデ、下はヘラナデ。内面一ヘラミガキ。 ・Ｉ18。

2．縄文時代の遺物

（Ｉ）縄文土器〔第99～101図、 図版44～46〕

今回の調査では、縄文時代に属する遺構は認められなかったが、破片は若干ではあるが出土している。これらの土器片は、復原する事ができたものは１点も無かった。

第99図１．２は、波状口縁を呈する深鉢で、同一個体のものである。器面全体には、撚糸文が地文として施され、口縁部および胴部中程のくびれ部には、半載竹管の内側による連続爪形文が各一列横走している。波状口縁の山部と谷部には、半載竹管による刺突文が垂下され、胴上半部文様帯には、平行沈線による山形文が施されている。諸磯ａ式である。

３は、波状口縁を呈する深鉢で、山部には、突起が剝落した痕跡が認められる。口縁部には、刺突による波状文と、沈線が施され、沈線間には、刻みが密に施されている。また、沈線文の下端には渦巻文的隆帯が貼付されており、胴部文様帯はＬ－Ｒの単節縄文が密である。胎土中には雲母および白色砂粒が多量に含まれている。いわゆる中峠式と称されるものである。

４は、深鉢の底部に近い胴部片である。Ｌ－Ｒの単節縄文を地文として、磨消しの懸垂文が施されている。加曽利ＥＩＩ式である。

５は、底部から、緩やかに内弯ぎみに外反する大形の深鉢である。口縁にそって、沈線が一条横走し、胴部には、刷毛状工具による条線が施されている。加曽利ＥＩＩ式並行のものである。

６は、胴上半部が内傾する深鉢の口縁部片で、Ｒの無節縄文が施されている。

７は、胴上半部にくびれを持つ深鉢で、口縁部には、粘土紐が貼付され、押捺が密になされている。胴部には、粗いＲ－Ｌの単節縄文が地文として施され、この上に密に沈線が斜方向に認められる。加曽利Ｂ式である。

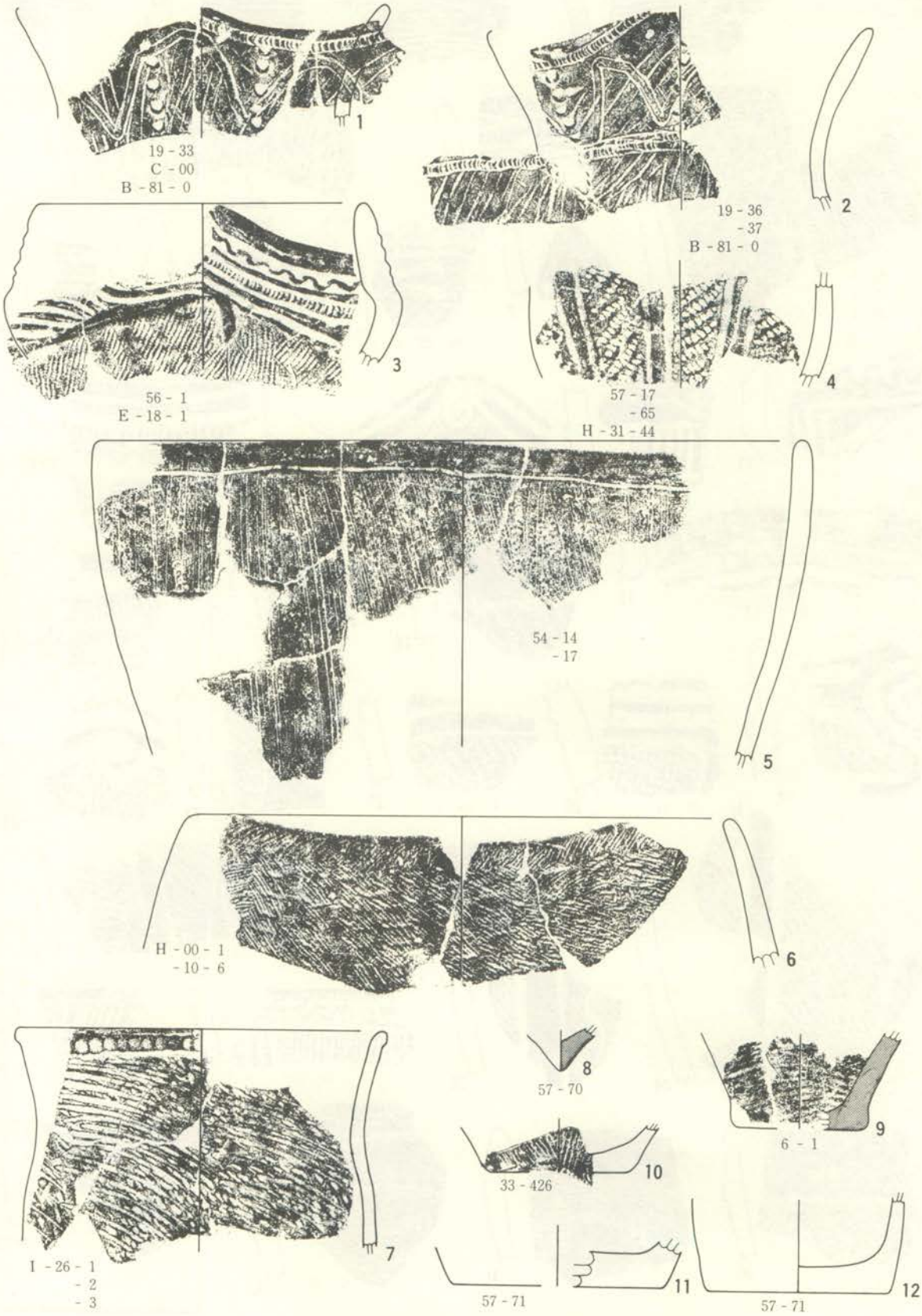
８～12は底部片で、８、９は胎土中に繊維を含むもので、11は貝殻条痕文が施されている。

９は、櫛歯状工具による条線が密に認められる。

第100図１は、外反した口縁部の小片である。Ｒ－Ｌの単節縄文が口唇部の表裏には斜方向に、胴部には横方向に施されている。井草Ｉ式である。

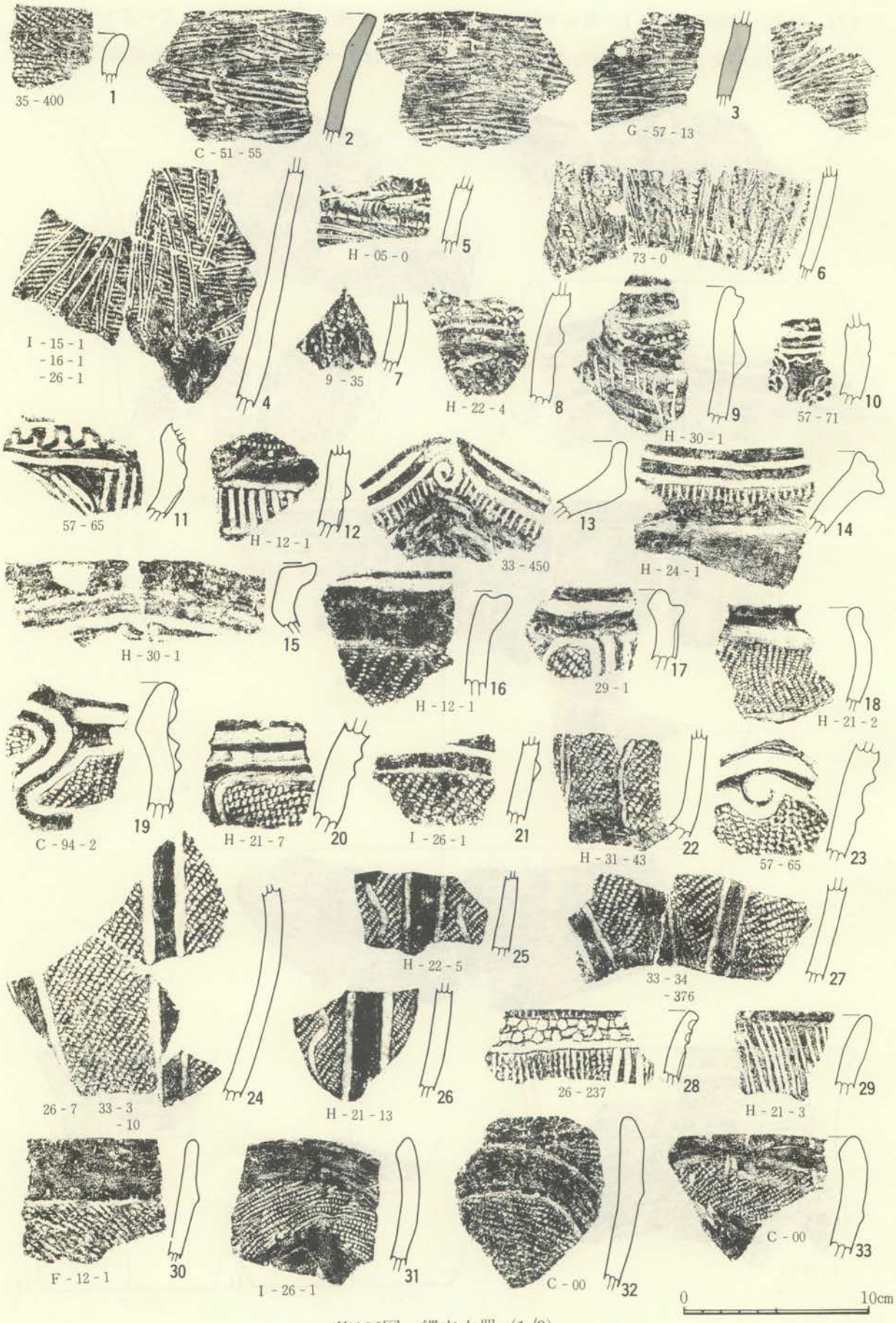
２、３は、胎土中に繊維を含むもので、表裏とも貝殻条痕文が施されている。茅山式である。

４は、深鉢の大形片で細いＬ－Ｒの単節縄文を地文として、細い半載竹管を施しているものである。５は、連続爪形文と沈線を横方向に施したもの、６、７はアナダラ属の腹縁による連続貝殻文のも

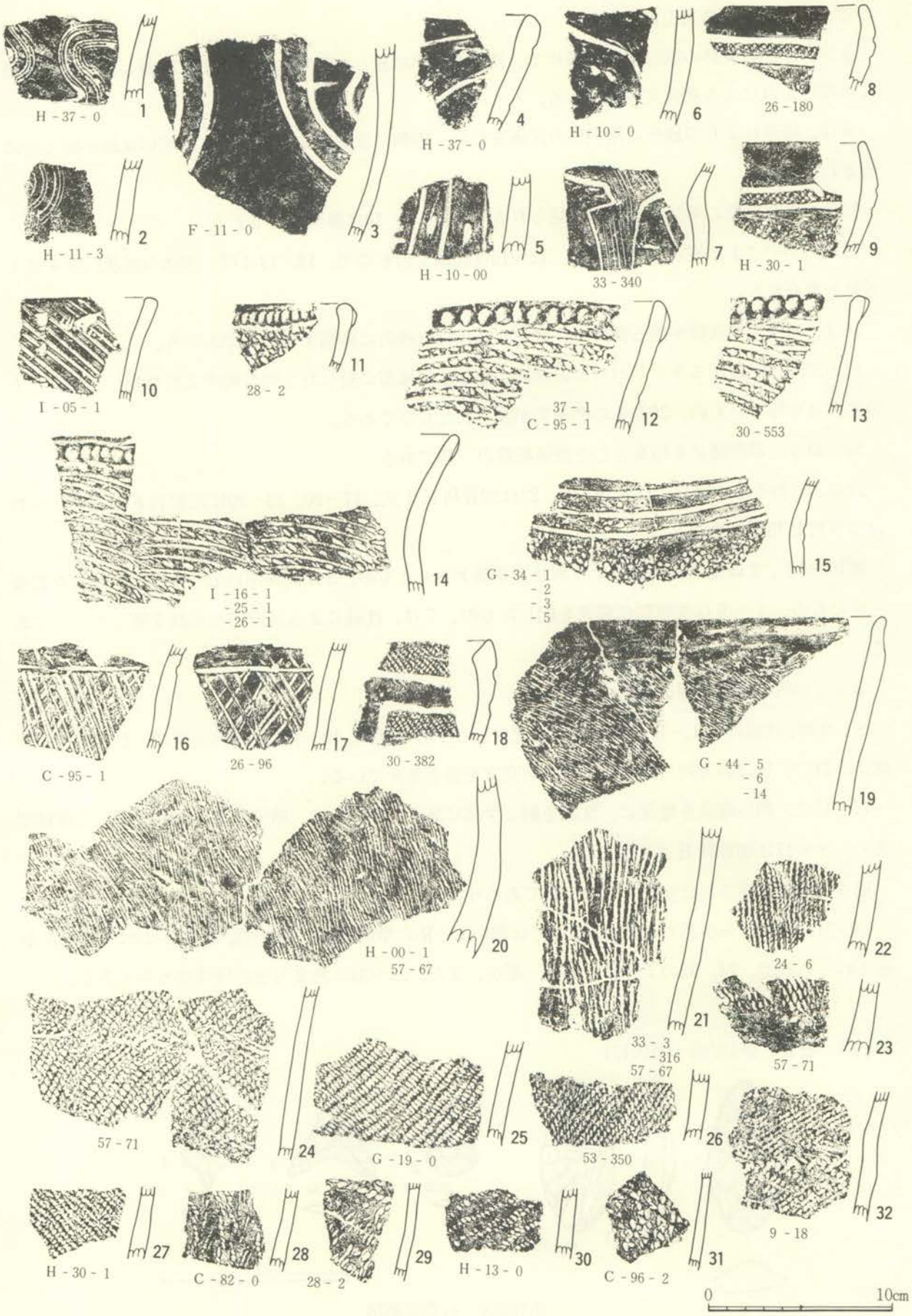


第99図　縄文土器（1/3）

0　10cm



第100図　縄文土器（1/3）



第101図　縄文土器（1/3）

ので、いずれも浮島式土器である。

8は、小形の深鉢の胴部中程の破片で、沈線を頂部に施した隆帯により上下に区画し、上部文様帯には細い工具による刺突文が見られる。

9は、隆帯により口縁部に楕円形の区画を行い、内側には刺突文が、外側には短い沈線が縦方向に施されている。

10は、半截竹管の刺突文と沈線が見られるもので、8、10は勝坂3式である。

11は、刺突による波状文と沈線が、12～15は沈線文のもので、13、14は同一個体の波状口縁を呈する鉢と思われる。

16は、口唇部に沈線が廻る深鉢で、底部からほぼ直線的に外傾するものであろう。

17～27は、いわゆるキャリパー形の深鉢、28は、口縁部に沿った2列の刺突文列を配し、地文に *l* の撚糸文を施したもの、29も *l* の撚糸文が施されたものである。

30～33は、単節縄文を地文とした微隆起線の一群である。

11は、いわゆる中峠式、12～16、21、22は加曽利E I式、17～20、23～29は加曽利E II式、30～33は加曽利E III式である。

第101図1、2は櫛歯状工具による波状文を垂下させたもの、3は沈線間にL－Rの単節縄文を充填させたもの、4～6は沈線間に刺突を配したもの、7は、沈線による区画内を条線を施したものである。

3～7は称名寺式土器の深鉢である。

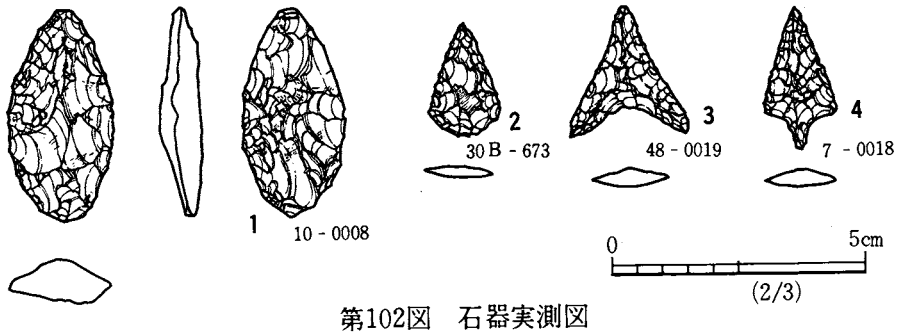
8、9は、沈線間にL－Rの単節条文を充填した小形の深鉢、10～15は、胴部上半にくびれを持つ深鉢の一群で、10は斜方向に施した沈線に刺突文を垂下させている。

11～15は、粗い縄文を地文に、沈線を胴上半部に施し、16、17は、格子目状に沈線を配した深鉢である。8～17は加曽利B式である。

18は帯縄文の施された安行I式の深鉢であろう。

19～31は縄文のみが認められる。破片では細いL－Rの単節縄文、20は付加条、21～23は *l* の撚糸が施されている他、24、32のように原体の一部が、また、28～31の施文方法が特殊なものもある。

（2） 石器〔第102図・図版47〕



第102図　石器実測図

当遺跡からは、20点あまりの出土にとどまり、また遺構に伴うものもなかった。図示した４点は、そのうち完形の尖頭器と石鏃である。

１は小形の木葉形尖頭器で、黒曜石製である。両面から粗く整形の後、細部調整を片面主体に行っている。形状からみて、おそらく先土器時代末から縄文時代草創期にかけてのものと思われる。

２～４はチャート製の石鏃である。２は円基鏃で片面の稜の一部が磨かれている。３は無茎の凹基鏃、４は有茎鏃である。これらの石鏃については時期の決め手はない。

6章　小　　結

1．古墳について

今回調査した3基の古墳の内、調査前からその所在が明らかであったのは、1号墳のみであった。したがって、2号・3号墳については、集落跡の調査に伴ってその所在が判明したところから、古墳の調査法として適切さを欠いた部分が多々あったと思われる。しかし、調査中に古墳であることを知り得た時点で適宜対処したつもりである。

本項では、発掘・整理段階において留意した諸点を抽出してまとめとしたい。

墳形

前方後円墳と円墳によって構成される古墳群である。

前述したように、2号・3号墳は、調査前にはその所在を知らなかったため、周溝の復原に際しては、古墳の調査を前提とした適切な対応を欠いていた。ために、周溝の形態の忠実な復原という点では、誤認か所が多かったと思う。特に周溝の外側の範囲の検出に誤認が多かった。この点も、古墳の所在を知り得ていたなら、あるいは未然に防ぐことができたと思われるが、今後の反省点としたい。幸いにも、周溝の内側上端線は忠実な復原を為し得たと考えている。

今回調査した3基の古墳は、周溝の内側上端線を基に墳形を復原した場合、いずれも非常に整備された形状である事から、構築前から周到な企画に基づいて計画されたことが窺える。また、こうした企画性は、各々の古墳の形状だけに留まらず、古墳群全体を構成する際にも及んだことと推測される。調査区内では3基の古墳の所在を知ることができたが、本遺跡の所在する狭い舌状台地上には他にも数基の古墳が築造されたに相違ないものと考えられる。

調査した古墳は、いずれも開墾時の削平によって盛土を失っているため、墳丘の構築法に関しては全く資料が得られなかった。ただ、2号墳にみられるブリッジから、盛土の採取場所あるいはその搬入方向等が想定される程度である。

主体部

3基の古墳は、いずれも方形の土壙内に板状の石材で組んだ箱式石棺であろうと考える。

しかし、各古墳の項で述べたように、原形を留めるものはなく、諸状況からの判断では、盗掘によって破壊されたか、あるいは開墾時の削平で露呈したため搬出されたなどが考えられる。

1号墳では、石棺の構築に用いた石材が遺存しており、これらの石材の形状と量、加えて土壙内に検出した方形に巡る溝の痕跡などから想定して、主体部は板状の石材を立てて側壁とし、石の蓋を置いて封じた箱式石棺であろうと結論した次第である。

2号・3号墳においても、少量ではあるが、石材を検出した。また、土壙底には1号墳例にみた方形に巡る溝がここでも検出することができたことから、2号・3号墳も1号墳と同形態であろうこと

が想定されよう。

石棺の構築は入念な裏込め作業と並行して行われたことが、石材の形状から推測される。それは、何らの支点もない板状の石材は、浅い溝の中に立られたとしてもそれ自体で安定しているとは考えられないからである。

したがって、側壁の構築が完了した時点では、ある程度の高さまで裏込めも行われていたと考えたい。しかる後に、被葬者を納め上蓋を置いて封じたのだろう。裏込めがどの程度の高さまで為されていたかは、推測の域を出ないが、石棺の構造からは入念な裏込めが行われたことは想像に難くない。

石棺に用いられた石材は、板状であるが人工的に均一な厚さに加工されたものではなく、自然石に僅かな加工を施こした程度で、ほとんどの石材は自然面を残している。

主体部の位置と方向について

調査例が少ないことから、具体的な結論を呈示することはできないが、1号・3号墳について両者に共通すると思われる諸点を抽出してみた。

まず主体部の位置であるが、両古墳共に墳丘の中心から南の方向に位置し、周溝の内側上端線から3～4mの範囲内に構築されている。また、土壙の長軸は1号墳ではN—70°—E、3号墳ではN—78°—Eを指し、これも8°の差異はあるもののほぼ同一方向と見做してよいだろう。

この2例をもって、当台地上に構成された古墳群の共通性とすることは、あまりに性急と思われるが、主体部にみた共通性あるいは前述の墳形の企画性などを加味した場合、主体部の位置と方向についても前掲の共通性は否定し去る諸点ではないものと考えたい。

副葬品

直刀・鉄鏃・鈴・玉類などを検出した。各古墳の項でも触れたように、全ての副葬品は原位置を留めるものではなかったが、全体的な印象としては、終末期古墳に通例の傾向下にあると言えよう。7世紀中葉から7世紀後半の遺存した少数例の副葬品をもって、本古墳群の傾向を明確にすることは至難であろうが、検出した遺物によって一応の検討を試みてみたい。

1号墳例では、鉄製品を主体とする。長三角形式の鉄鏃に比較的遺存のよいものがあるほかは全て破損品である。遺存部位・断面形状等からの推測では、直刀・刀子・鉄鏃等が想起される。なかでも箆被の長い鉄鏃が量的に多いようである。

2号・3号墳例では、玉類を主体とし鉄製品の出土はなかった。

以上の副葬品から一つの概略的な傾向として、鉄製品を主体とするものと玉類を主体とするものとに大別できるようである。

2．住居跡について

今回の調査において検出した竪穴住居跡は計27軒である。すべての住居跡群が同一時期の所産でないことは、遺構の形態、重複の状態、出土遺物の特徴等によって明らかである。

出土土器•住居跡の形態をもって該当時期を検討した結果、本遺跡の住居跡群は、弥生時代終末期、古墳時代前期・中期に大別できた。古墳時代前期（五領期）はさらに古期と新期に細分が可能であった。

検出したすべての住居跡が特徴的な遺物を共伴するわけではなく、また決定した時期以外の特徴をもつ遺物が同一住居跡から出土する例等多々みられるが、出土する器種のセット関係あるいは出土状況等多角的な検討を行って時期決定の要因とした。

以下に各時期の住居跡、出土土器についてまとめてみた。

（Ⅰ）弥生時代終末期

この時期に含めた住居跡は、1・8・9・33・46号住居跡の5軒である。9号住居跡には、時期を決定する資料は得られなかったが、住居跡の平面形態からこの時期と判断した。

台地上の所在位置は、33・46号住居跡が台地中央の平坦部に占地するほか、1・8・9号住居跡は南側の縁辺部に沿って占地している。こうした所在位置による同時性については、出土土器・平面形態からの共通点を見い出せる手掛りは得られなかった。

平面形態は各住居跡共に四隅に丸味をもつが、四壁にふくらみをもつもの、長軸方向の壁が直線に近く他壁にふくらみをもつもの、四壁共直線に近いもの等類型化されたものではなく、平面規模も、33号住居跡を最大として以下8号→9・46号→1号住居跡の順である。

炉址は1号住居跡を除くすべての住居跡で検出できた。炉址の位置は、いずれも床面中央からいずれかの方向へ偏った位置にあるが、床面に円形の掘込みをもつ9・33号住居跡、単に床面上に焼化の痕跡を留める8・46号住居跡など形態上の差異が認められる。

貯蔵穴は1・33・46号住居跡に検出した。いずれも南壁の中央からやや西寄りに掘込まれているが、深さは10cm前後と浅く、形態も一定しない。

壁溝は全周を検出できた例はなかったが、8・33・46号住居跡に認められ、他の2軒はこれをもたぬ住居跡である。

長軸の方向は5軒共に北から西に偏っており、その割合は33号住居跡の17°が最も北に寄り9号住居跡の59°が最も西に寄る。長軸の方向のばらつきは、所在位置に起因すると考えられるが、8・9号住居跡の例にみられる長軸の方向の共通性と両住居跡所在位置を考慮した場合、この2軒の住居跡が同時存在した可能性は強いものと考える。

この時期に含めた5軒の住居跡に限って出土土器をみた場合、当該時期を決定するにたる資料は極めて少ないのが実情である。古墳時代前期の土器と共伴する例、あるいは異系統の土器と共伴する例等、当該時期の住居跡群の出土土器に通例する傾向が本遺跡でも認められた。

したがって、厳密な時期の決定はでき得ないが、当該時期に比定される資料の様相としては、久ケ原期～五領古期にかけての広範に及ぶようである。また、系統的には南関東系として把握されるものが圧倒的に多く、次いで北関東系、さらに少量ではあるが東海地方からの搬入品と考えられる東海系

土器も混在し、様相は多岐にわたっている。

現段階では、周辺地域における当該時期の調査例が少ないことから、一つの傾向を抽出し得る資料の集積は少なく未知の部分も多いと思われる。

こうした現状の中で、この時期の出土例の少ない本遺跡の資料をもとに当該時期の様相について触れることには、資料として乏しく、また時期尚早とも思えるのである。

以後の調査例の集積が為された時の資料の一助となれば幸いである。

（２）古墳時代

この時期に含めた住居跡群は、前項で扱った５軒と時期不明の51号住居跡を除く21軒が包括されるわけであるが、出土土器の特徴によってさらに３時期に細分することができた。つまり、五領古期・五領新期・和泉期の３時期である。ただし、五領期に含めた住居跡では古・新期共にいわゆる移行期に当るとも考えられる特徴をもつ土器も含まれていることから、五領古～中期・五領中～新期のように時間的な幅をもたせて表記することとした。

ａ．五領古～中期

この時期に含めた住居跡群は、７・12・14・16・17・18・19・23・25・28・34・36・37・40号住居跡の14軒である。

台地上の所在位置は、７号住居跡が南側の縁辺部に占地するほか台地の平坦部に所在し、ほぼ遺跡全域に及んでいる。

住居跡の平面形態は、四隅に丸味をもつ共通性はあるが、全体にふくらみをもった方形状・正方形状・長方形状等類型化されていない。

平面規模は、長軸の長さをみると14号住居跡の7.0m を最長とし、40号住居跡の3.2m が最も短い。また、長軸と短軸の差をみると、28号住居跡では100cm で最も長方形状を呈し、12・37号住居跡では10cm で正方形に近い形状を呈している。

平面規模の分布を長軸の長さを基準としてみた場合、３ｍ台３軒、４ｍ台３軒、５ｍ台４軒、６ｍ以上４軒であった。この結果から台地上の所在位置をみると長軸５ｍ以上の比較的大形の住居跡が台地の全域に点在するが、４ｍ以下の小規模住居跡は狭い範囲に密集して占地する傾向にあった。

柱穴は７・17号住居跡の５カ所は例外で大半の住居跡で４カ所が普遍的なようである。

炉址は、床面を掘込んで所在の明らかなものは７・12・23・36号住居跡の４軒に過ぎなかった。床面上に焼土の堆積を検出し、炉址の所在を窺わせる住居跡は数軒認められたが、その内焼土の除去後、床面に焼化の痕跡を留めたのは16号住居跡１軒だけであった。

貯蔵穴は12・14・16・17・18・36・37号住居跡で検出した。住居跡内の貯蔵穴の位置・形態は類型化されたものではなく、東・南・北側の壁際あるいは隅部等に位置するものがある。

壁溝は、12・14・37号住居跡に検出できた。12号住居跡は全周したが、他２軒では部分的に消滅す

るか所があった。

住居跡の長軸方向は北から西に偏るものと東に偏るものに分かれた。前者の方が多かったが後者側に14・19・23・28・36・40号住居跡が該当する。

出土土器

この時期に含めた土器群は、甕・壺・台付甕・高坏・器台などで構成されるようである。

甕形土器は口縁部が直線的に立上るものと外反しながら立上るものに大別される。

前者は胴部から屈曲する角度、器肉の厚さ、口唇部の形状等でさらに細分も可能であると思われる。口縁部から胴部にかけての調整は、口縁部に明瞭な刷毛目を残すもの、刷毛目の痕跡を留めるもの、丁寧にヨコナデされるもの等多様である。また胴部も口縁部と同様の様相がみられる。

口縁部が外反するものも、その形状は一様ではないが、口縁部に刷毛目の痕跡を留める例は多くみられるようである。また胴部の調整も刷毛目を残すものが大半を占めた。

甕形土器では、他にS字状口縁部片が出土している。

出土例は7・14・19・25・37号住居跡にある。S字状の屈曲のし方あるいは口唇部の形状に差違が認められるが、口唇部の形状によって大別すると、つまみ上げられた形状のもの、やや丸味をもつもの、平坦なもの等に分けられる。他遺構から検出したものも総合すると本遺跡では、口唇部に平坦面をもつものが量的に多かった。

台付甕は出土例が少なかったが、34・37号住居跡に遺存の良いものが出土した。特に37号住居跡出土の7は完存品である。この時期に含めた住居跡から出土する台付甕は古期・新期の特徴を具備するものが共伴しており、時期決定の指標にはなり得ない例もあるが、当時期の様相を窺い知る資料になろうかと考える。

高坏は遺存の良いものが少なくほぼ完形となったものは34号住居跡の1例に過ぎなかった。

形態は定形化されており、坏部下端の外面に稜を有し直線的に立上がる。器面の調整はいずれも粗密の差はあるものの、内外面共ヘラミガキが施こされる。

器台は34号住居跡の出土例のように貫通孔のないものは例外的であるが形態上の類型化は認められず多様性がみられる。 脚部の透孔は、 確認できたものすべてが3個である。

壺形土器は出土例が少なく、この時期に含めた住居跡群からは、5点に過ぎなかった。12号住居跡からは小片ではあるが頸部と胴部の境に突帯をもつ、 当該時期に特徴的な形態の出土例がみられる。

各住居跡から検出した土器群について、共伴の可能性が強く、かつ遺存度の良いものに着目して、その構成をみてみたい。この時期に含めた住居跡群は14軒であるが、土器群の構成を知るうえで多くの資料を得られたのは14・34・36・37号住居跡の4軒であった。14号住居跡は甕・小形甕・高坏、34号住居跡は台付甕・高坏・器台、36号住居跡は甕・小形甕、37号住居跡は甕・小形甕・台付甕・高坏・器台の構成である。

概して、遺存の良いものが少なく土器群の構成をみた場合、資料的に乏しい状況であるが、当該時期の様相を知る手掛りになろうと思われる。

ｂ．五領中～新期

この時期に含めた住居跡群は、24・26・29・30B・32・35号住居跡の６軒である。

台地上の所在位置は、遺跡の中央、台地の平坦部に集中している。

住居跡の平面状態は、24・29号住居跡が長方形状であるのに対し、26・30B・35号住居跡は隅丸の正方形状を呈し、形態・規模共に類型化がみられる。32号住居跡は他遺構との重複で全容を知ることができなかった。

平面規模は26号住居跡が最も大きく、30B・35号住居跡もほぼ同規模であるのに対し24号住居跡は極端に規模の小さい住居跡である。

柱穴は４か所が基本になるようだが、30B号住居跡は５か所にあり、29号住居跡では柱穴の確認はできなかった。

炉址は、24・26・35号住居跡に認められたが、他３軒にはその痕跡も検出できなかった。炉址の位置は住居跡の平面形態が類型化しているものの、その位置は一定していない。また、炉址そのものの形態も一様ではなかった。

貯蔵穴は24・26号住居跡に認められる。なかでも、26号住居跡の貯蔵穴はその形態から明らかに意図的な所産であることが窺えるものである。

五領期に含めた住居跡群を概観した場合、貯蔵穴をもつと判断した住居跡は多々あったが、26号住居跡例にみられるような貯蔵穴の形態は他に類例がなく、他住居跡においては、あるいは誤認か所もあろうかと思われる。

壁溝は26・30B・35号住居跡で検出できた。35号住居跡は一定の幅・深さを保ち全周し、26号住居跡は一部を除いてこれも全周する。

長軸の方向は、29・30B号住居跡が北から東に偏しており他例は北から西を指向し、24号住居跡と35号住居跡は北から西へ31°の指向が共通であった。

出土土器

この時期に含めた土器群は壺・甕・小形甕・台付甕・高坏・器台などで構成される。個々の土器群が当該時期の特徴をもつものばかりではなく、五領古期の特徴をもつものとの共伴が全般にわたって認められた。

甕形土器は、口縁部の形状・胴部の形状等多様性をもち、当該時期の特徴を抽出することは難しい。概略的には、胴部のふくらみが減じる傾向が強く、胴部の調整も刷毛目からヘラナデが多くみられるようである。

壺形土器は、当時期に特徴的な形態のものを26号と29号住居跡で検出した。

26号住居跡の32、29号住居跡の４・５が掲げられる。29号住居跡の４・５は五領新期から和泉期にかけての特徴を具備しており、本遺跡の様相を知るうえで一つの指標となろう。

そのほかこの時期の指標となるものに高坏がある。26号住居跡、30B号住居跡に出土例がみられた。

表2　船尾町田遺跡住居跡一覧

住居跡	平面規模(m)	炉址	貯蔵穴(位置)	壁溝	長軸の方向	時　　期
1	4.5×3.7		○（南壁西寄り）		N－42°－W	弥生終末期
7	5.5×5.3	○			N－63°－W	五領古～中
8	6.7×5.2	○		○	N－56°－W	弥生終末期
9	5.7×4.9	○			N－59°－W	弥生終末期
12	6.1×6.0	○	○（南壁東寄り）	○	N－20°－W	五領古～中
14	7.0×6.6		○（東壁北寄り）	○	N－31°－E	五領古～中
16A	6.9×6.3	○	○（東壁南寄り）		N－0°	五領古～中
16B	6.2×5.4	○			N－0°	五領古～中
17	4.9×4.3		○（東壁中央）		N－70°－W	五領古～中
18	5.6×4.8		○（北壁東寄り）		N－57°－W	五領古～中
19	3.5×3.3				N－29°－E	五領古～中
23	4.5×4.0	○			N－94°－E	五領古～中
24	3.5×3.0	○	○（北西隅）		N－31°－W	五領中～新
25	3.9×3.2				N－24°－W	五領古～中
26	6.9×6.7	○	○（東壁北寄り）	○	N－53°－W	五領中～新
28	4.9×3.9				N－52°－E	五領古～中？
29	6.2×4.9				N－56°－E	五領中～新
30A	9.2×9.1		○（南東隅）	○	N－29°－W	和泉期
30B	6.2×5.9			○	N－72°－E	五領中～新
32	4.6×？				？	五領中～新
33	7.4×5.5	○	○（南壁西寄り）	○	N－17°－W	弥生終末期
34	5.1×4.2				N－30°－W	五領古～中
35	6.2×6.2	○		○	N－31°－W	五領中～新
36	5.6×5.2	○	○（南壁西寄り）		N－58°－E	五領古～中
37	6.3×6.2		○（南東隅）	○	N－28°－W	五領古～中
40	3.2×2.8				N－20°－E	五領古～中
46	5.7×4.9	○	○（南壁西寄り）	○	N－34°－W	弥生終末期
51	2.9×？	○			N－46°－W	不　明

いずれも坏部の下部に張り出しをもつ器形である。

以上のように当時期の特徴を具備する土器は壺形土器と高坏にみられる程度であったが、こうした状況があるいは当時期の様相といえるのかも知れない。

ｃ．和泉期

この時期に含めた住居跡は30A 号１軒である。遺跡の中央、台地平坦部に位置し、本遺跡で検出した住居跡群中、最大規模である。平面形は四隅が角張り、整った正方形状を呈する。柱穴は、住居跡対角線上に４か所配置され、南東隅部に貯蔵穴をもつ。平面規模は9.2m×9.1m の大形住居跡である。

出土土器

坏形土器の特徴をもって、本跡を和泉期とした。

器形は、丸底で体部が球形を呈するもの２点を除いて平底である。平底のものはさらに、口唇部が内弯するもの、底径が小さく体部は大きく開いて僅かに内弯するもの、体部にくびれをもつもの、球形の体部で口唇部が外反するもの等器形は多様である。

この時期とした住居跡例が１軒だけであるため、土器群の構成については資料が乏しく詳細は不明である。

なお、以上の住居跡について、その要点のみを表２にまとめたので参照されたい。

３．その他の遺構について

(1) 溝

調査した12条の溝は、いずれも時期を決定する資料を欠いているが、他遺構との重複状態・形態・覆土の状態等から近世以降の所産であることは明らかである。

例外的に３号址のように性格の推測が可能な溝を除いて、他の溝については推測の域を出ることはできない。ただ、本県における遺跡調査―特に畑地の調査―ではこうした性格不明の溝は極く普遍的にみられ、地元民から幸いにしてその溝について知見を得ることがある。その大半は地境か、耕作地に侵入する山林の根を断つための根切溝であることが多い。

本遺跡も調査前は畑地であったことから、これらの溝も例外ではないと考える。

(2) 土壙

前出の溝同様、本項で扱った土壙の具体的な性格、年代は明確でない。また、その形態からもこれらの土壙の性格が多岐にわたることも推測されよう。

土壙墓・貯蔵穴・陥し穴等々の人為的な所産、あるいは木根等の自然の所産によるものなどが挙げられるが、いずれも確証を欠いている。

調査例の増加に伴い、本項で扱ったような土壙に関する報告は日々増大しつつある今日である。

いずれ集大成されることが急務と考えるが、本項で扱った土壙例がその一助となれば幸いである。

第3篇　谷田木曽地遺跡

(CN411)

１章　調査の概要

本遺跡の調査は、第１篇１章で述べたように、昭和53年度から昭和57年度にかけて実施しており、又諸般の事情により年度毎の調査範囲を、虫食い状に設定せざるを得なかった。そのため、各年度毎にやや違った調査方法をとってきた面もある。しかし、基本的には、南北方向あるいは東西方向に幅２ｍのトレンチを設定し、遺構の有無や濃密あるいは土層の堆積状態を把握した後、重機による表土除去を範囲内全面に行なった。

調査区の設定は、基準点測量によって得られた基本杭を基準とした。基本杭は、一辺20mの方眼に設定し、この方眼杭で遺跡全体を覆うようにした。またこの一辺20mの方眼４升、つまり一辺40mの方眼を１単位とし、これを大グリッドと呼称した。さらに、大グリッドを一辺４ｍの方眼に区切り、この方眼単位を小グリッドと呼称した。大グリッドは、北東端を基点とし、東から西へ１～13の数字を付し、北から南へはＡ～Ｇの記号を付した。そして、この数字と記号の組み合わせにより、各大グリッドを１Ａ～13Ｇと呼称した。また小グリッドは、00～99の番号とした。各グリッドの配列及び呼称は、付図２のとおりである。

先土器時代の調査は、小グリッドの一辺４ｍ方眼単位に行った場合と、小グリッドをさらに４分割した一辺２ｍの方眼単位で行った場合とがある。しかし、出土した遺物の取り上げは、小グリッド単位とし、取り上げた順に0001～の通し番号とした。

遺構の調査は、重機による表土除去後行った。いずれも土層観察用のベルトを残して掘り進め、図面と写真による記録を行った。遺構番号は、調査に着手した順に001～の通し番号とし、遺構の性格毎や年度毎に番号を付すことは避けた。出土した遺物は、遺構毎に0001～の通し番号とし、原則として１点毎に番号を付し、明らかに同一個体と思われる破片のみ、まとめて番号を付した。

なお、表土除去やトレンチ調査、あるいは遺構等の検出作業中に採集した遺物は、小グリッド単位に番号を付した。

1. 谷田木曽地遺跡（CN411）
2. 谷田神楽場遺跡（CN504）
3. 清戸遺跡（CN410）
4. 小室遺跡（CN301～303）
5. 白井先A遺跡（CN305）
6. 池谷津遺跡（CN304）
7. 復山谷遺跡（CN204）
8. 一本桜遺跡（CN401～403）

▲主要遺跡

第103図　谷田木曽地遺跡・谷田神楽場遺跡及び周辺遺跡の位置

第104図　谷田木曽地遺跡及び谷田神楽場遺跡周辺地形図

昭和53年度調査区　昭和55年度調査区　昭和57年度調査区
昭和54年度調査区　昭和56年度調査区

２章　先土器時代の調査

本遺跡の場合は、全面積の約20％について確認調査を実施し、遺物が出土したグリッドについては拡張を行った。したがって、最終的には、全面積の約30％を調査したことになる。また、調査した面積の約80％は、武蔵野ローム上面まで掘り下げた。その結果、遺物の集中して出土したか所、つまりユニットとして把えることができたものは、6D区と10E区の２か所で、共に約60点余りの石器や剝片を採集した。さらに８Ｅ区では、攪乱層中とはいえ、焼けた礫片約1000点と石器類を採集した。また、単独出土の遺物も多く、20数か所のグリッドから採集した。

１　層序

本遺跡は、調査区のほぼ全域にわたって攪乱が著しく、ハードローム層まで及んでいる場合も多かった。そのため、千葉ニュータウン内の他の遺跡と比較・検討しつつ層順の認定を進めた。また、土壌分析等も行わなかったため、標準土層図の作製は省略した。したがって、以下各層の特長のみ簡単に述べておきたい。

第Ⅰ層　表土攪乱層。黒褐色土を主体とし、ロームブロックを適量に含むことが多い。

第Ⅱ層　暗褐色土層。縄文時代遺物包含層であるが、大半は耕作や整地により削平されており、８Ｅ区のごく一部に認められる程度であった。

第Ⅲ層　黄褐色軟質ローム層。いわゆるソフトローム層である。耕作により攪乱をうけている場合が多く、８Ｅの西半部を中心とした地区で出土した焼礫片群も、本来は第Ⅲ層に含まれるものと考えられる。

第Ⅳ層　黄褐色硬質ローム層。クラックの発達が著しく、長時間放置すると剝落しやすくなる。本遺跡では、第Ⅰ層下に認められる事が多い。

第Ⅴ層　本遺跡においては、第Ⅳ層と区別することができない。立川ローム層第Ⅰ黒色帯に相当する。

第Ⅵ層　黄褐色硬質ローム層。第Ⅳ層よりやや明るく、姶良丹沢パミスを含有していると思われ、若干白色を帯びている。

第Ⅶ層　暗褐色ローム層。立川ローム第Ⅱ暗色帯に相当する。色調を詳細に観察すると、上部と下部ではやや色合いが異なり、下部堆積層が黒味が強い。また９Ｄ区付近では、その上部にさらに黒っぽい層が認められた。このため、色調の異なる暗色帯については、上よりⅦａ・Ⅶｂ・Ⅶｃ層として区分した。これを黒っぽい順に並べると、Ⅶｃ・Ⅶａ・Ⅶｂとなる。

第Ⅷ層　黄褐色ローム層。立川ローム層最下部に相当する。この層も場所によって上部と下部で色彩に相違があり、下部がやや暗い感じであった。そのため上部をⅧａ、下部をⅧｂとして区分した。

第Ⅸ層　褐色ローム層。武蔵野ローム層最上部に相当する。本遺跡では、ほとんどこの上面までの調査を実施した。

以上が各層の特徴であるが、本遺跡の西端部付近（12F 区）に、ローム層とは全く異質の層が認められた。この層は、第VI層と第VII層の間に堆積しており、西側寄りのグリッドほど厚くなり、最大では50cm ほどの厚さで堆積していた。色調は黒っぽい灰色を呈し、強度の粘質を帯びており、多量の砂粒を含んでいた。鉱物分析等を行っていないため、性格等については不明である。なお、土層断面図中でスクリーントーンで表現したものが、この層に相当する。

2．53～55年度調査分〔第105・106・120～123図、図版51～53・55—3、56・57—1〕

(1)VII層（第II暗色帯）出土の石器。

単独出土（1・16）

確実に第VII層中から出土した石器は2点で、共に単独で出土した。

1は局部磨製石器で、石材に安山岩を使用している。偏平な原石を素材にしており、未加工の自然面は裏面に多い。しかし風化も進んでおり、研磨した面と自然面との区別は不明瞭である。加工は、比較的大きな剥離で周囲を整形しており、粗雑な感を呈する。刃部については、非常に緻密に研磨を施し、鋭い刃を形成する。16はチャートで、表面に自然面を多く残す。周囲に調整痕が認められ、主剥離面にも剥離痕が認められるところから、スクレイパーとして使用された可能性が強い。

(2)IV～VI層出土の石器

ユニット出土（20・21・24～27・29・30・32・33）

本ユニット出土の石器及び剥片は、総数で約60点である。そのうち、20・32を除いたすべてがメノウの石材であった。なお、20はチャート、32は安山岩であった。

図示した石器は10点であるが、スクレイパー類が卓越している。出土層位は、第105図に示したように、ハードローム層の上部となり、6D—53、6D—64の2か所に集中しているが、全体を1個のユニットとして把えるべきであろう。石器には、スクレイパー・敲石があり、剥片には、スポール状のものもある。

スクレイパー　24～26の3点があり、26は欠損品。24は先端部を中心にして加工を施しているが、25は右側縁だけに認められる。

敲石　32は上端部を欠損しているが、使用の際に失われたものであろう。出土時にはすでに割れており、若干の剥離痕も認められるところから、破砕した後も敲石として使用していたらしい。

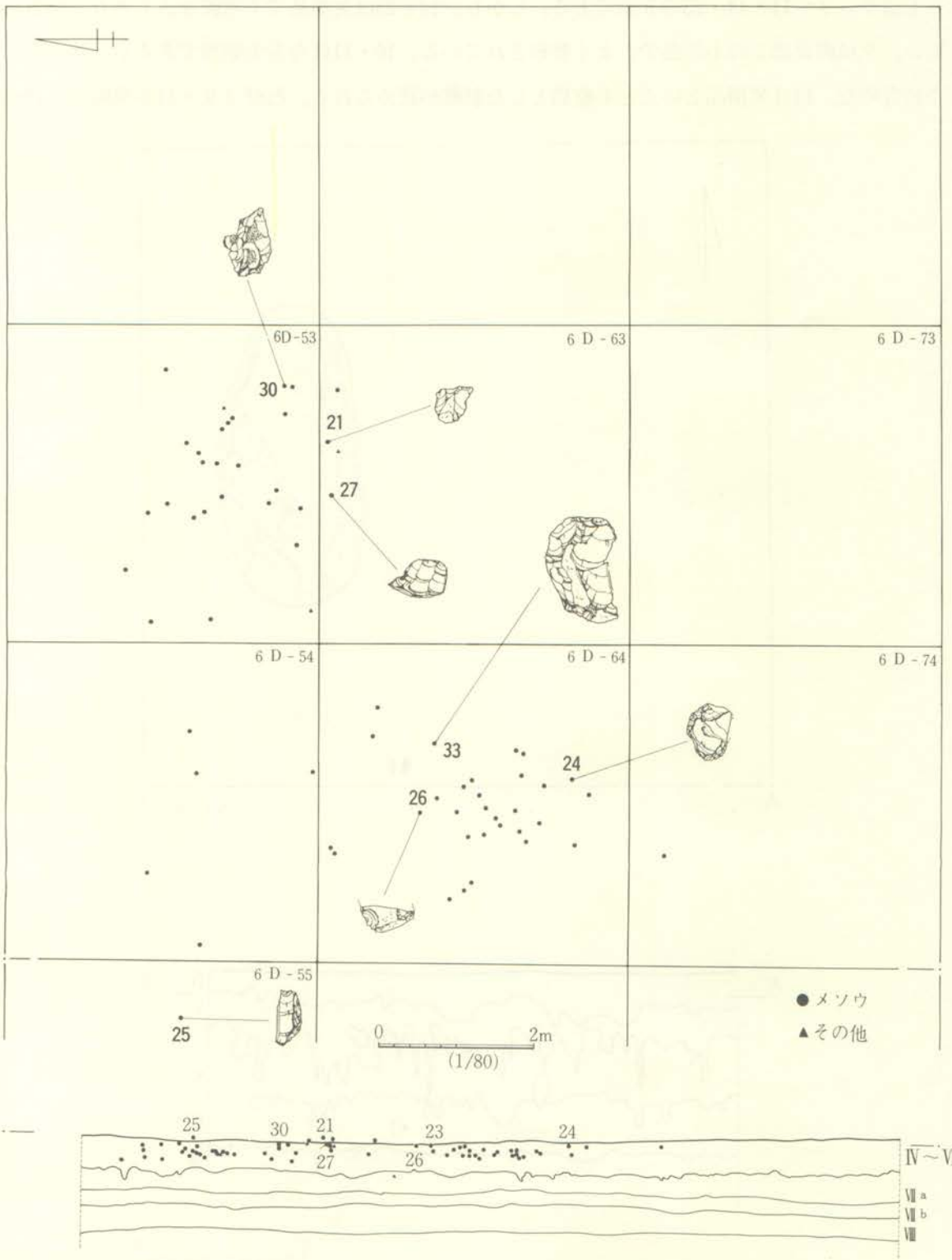
剥片　上記以外はすべて剥片となるが、29はスポールとしてよい。33は大形の剥片で、石器の素材として充分となろうが、特に加工は認められない。

単独出土（2～15・17～19・22・23・28・31・34～37）

すべて単独出土の石器で、定形石器・石核を中心に図示した。

ナイフ形石器　2～8がナイフ形石器で、7点出土した。2は2片が接合したものである。破砕面の右側に、数回の剥離痕が認められる。再利用のための加工であろう。素材には、縦長剥片を用

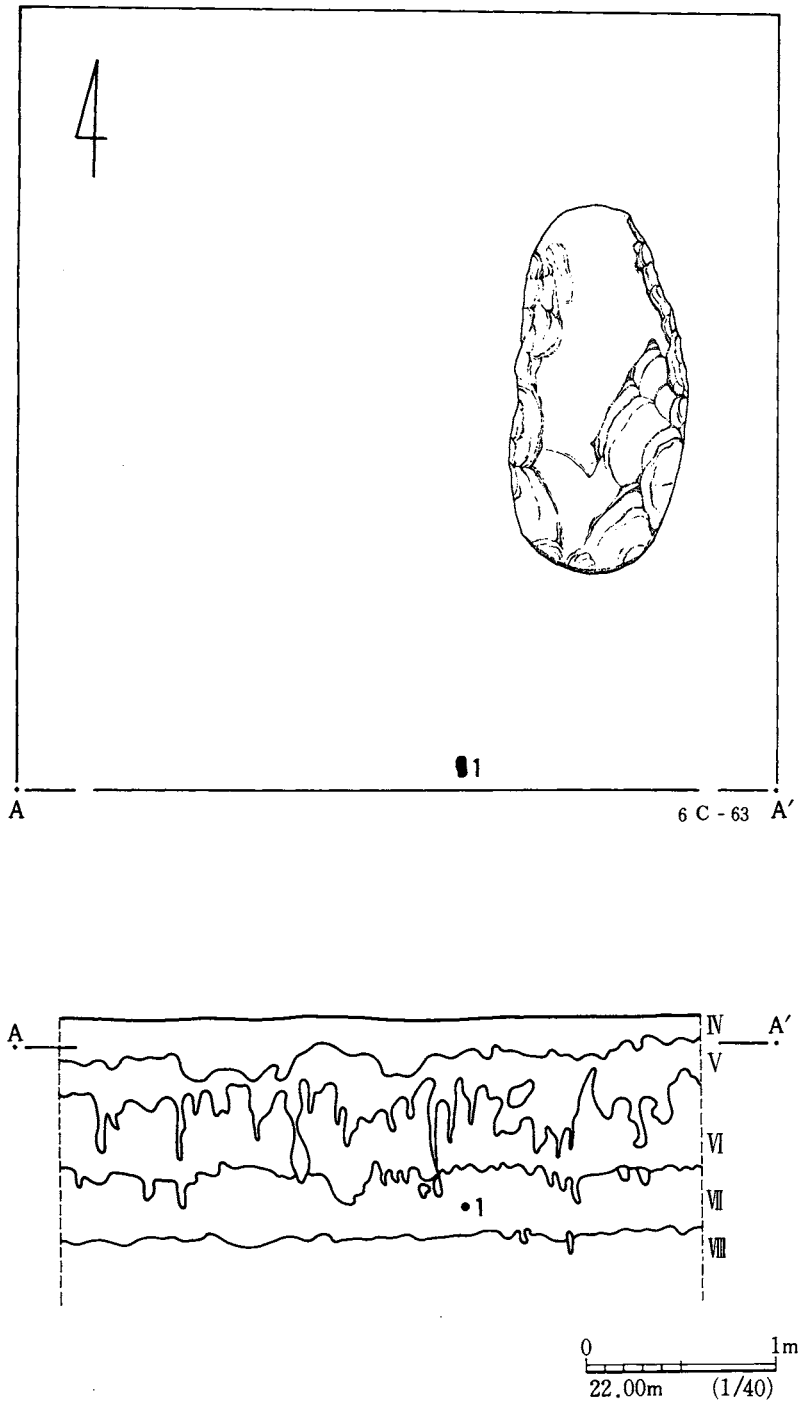
いているが、バルブは認められない。10cm前後の石刃状剝片が素材となっているものと思われる。３は左側縁にきれいな刃潰し加工が認められる。５は風化が著しく、加工痕が不明瞭な部分もあるが、ナイフ形石器としていいだろう。刃部は右側にとっている。６は小形品で、横長剝片を素材とし、背面の



第105図　先土器時代遺物出土状態実測図（6Ｄ－53、54、55、63、64、73、74）

加工も念入りである。7は粗雑なつくりで、打面を残す。8も横長剝片を素材とし、両端を加工してナイフ形石器としている。石材と出土地点から考えると、ユニット構成の石器群と関連をもつと思われる。5と7はハードローム層の下部、いわゆる第Ⅲ層から出土し、他は上部から出土している。石材は2～4が頁岩、5が泥岩、6・7が黒曜石、8がメノウとなっている。

尖頭器　9～11・14・23の5点である。しかし、14と23は欠損品で不明瞭な点もあり、断定しがたい。9は両面加工の小形品で、よく整形されている。10・11は有舌尖頭器であるが、便宜的にここに含めた。11は欠損品といえども整然とした剝離が認められる。石材は9・11が黒曜石、10が凝



第106図　先土器時代遺物出土状態実測図（6 C - 53）

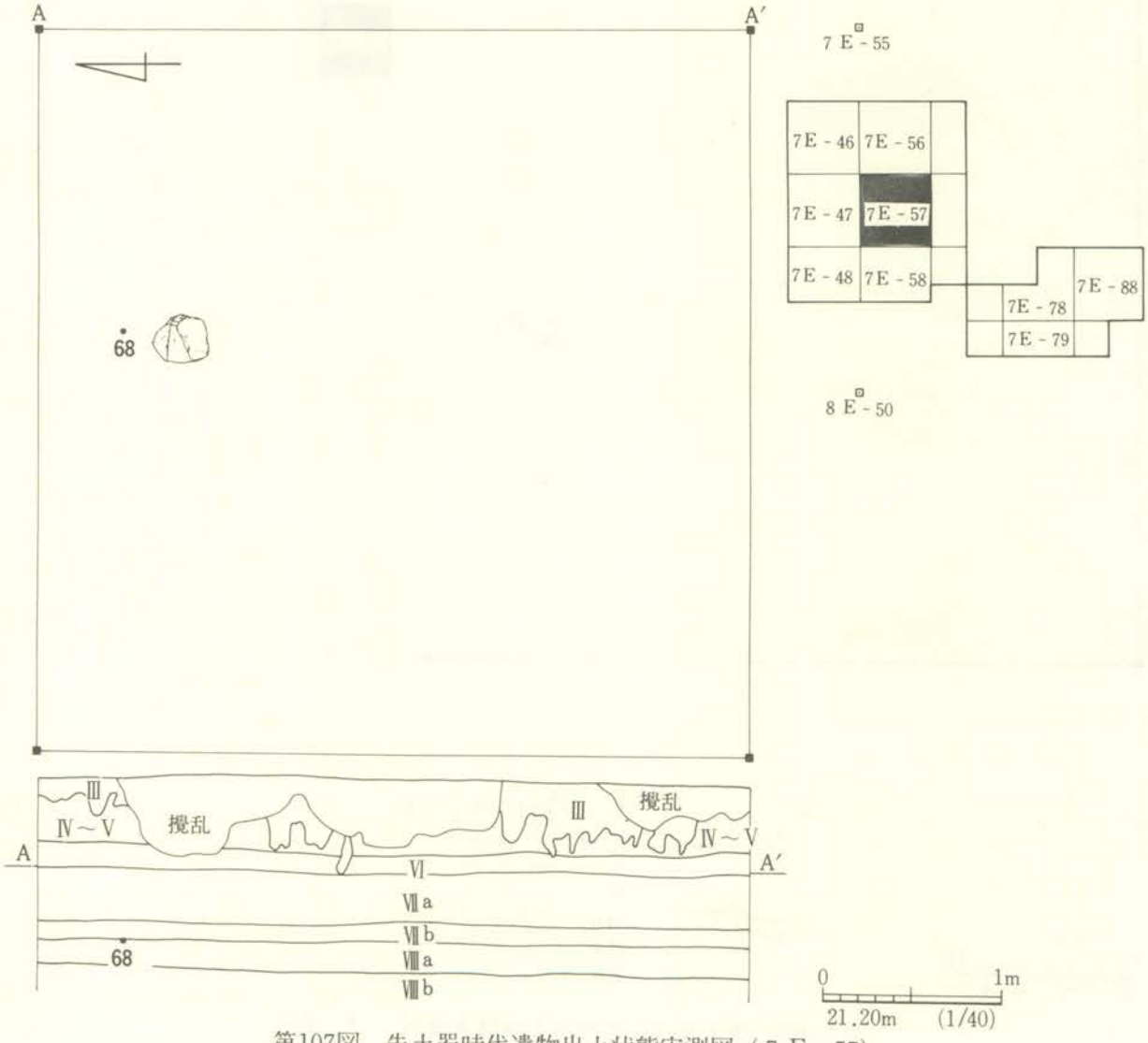
灰岩、14はメノウ質、23はチャートである。

スクレイパー　13・15・31の３点である。13は分厚い剝片を素材とし、かなり頑強な感を呈する。15は自然面を残し、両面に加工が施される。31は分厚い横長剝片を素材とし、左端部を加工してスクレイパーとする。石材は13・31がメノウ、15は安山岩である。

石核　調整剝片まで含めると、34～37の４点となる。35は第Ⅵ層から第Ⅶ層にかけて出土した。34・35は調整剝片で、34には使用痕も認められる。37は３方向から剝離しているが、自然面も認められるところから、母岩は小さかったものと思われる。石材は34・35・37が頁岩、36が黒曜石である。

剝片　上記以外はすべて剝片であり、17・18・22のように使用痕、調整痕等が認められるものもある。18は第Ⅵ層から出土しており、他は第Ⅳ層上部からの出土である。剝片については他にも若干出土しているが、大形剝片と使用痕のある剝片に限って図示した。石材は17・28がメノウ、19・20がチャート、他は頁岩である。

３．56・57年度調査分〔第107～119・124～129図、図版54・55―１・２、57―２、58～61〕



第107図　先土器時代遺物出土状態実測図（７Ｅ－57）

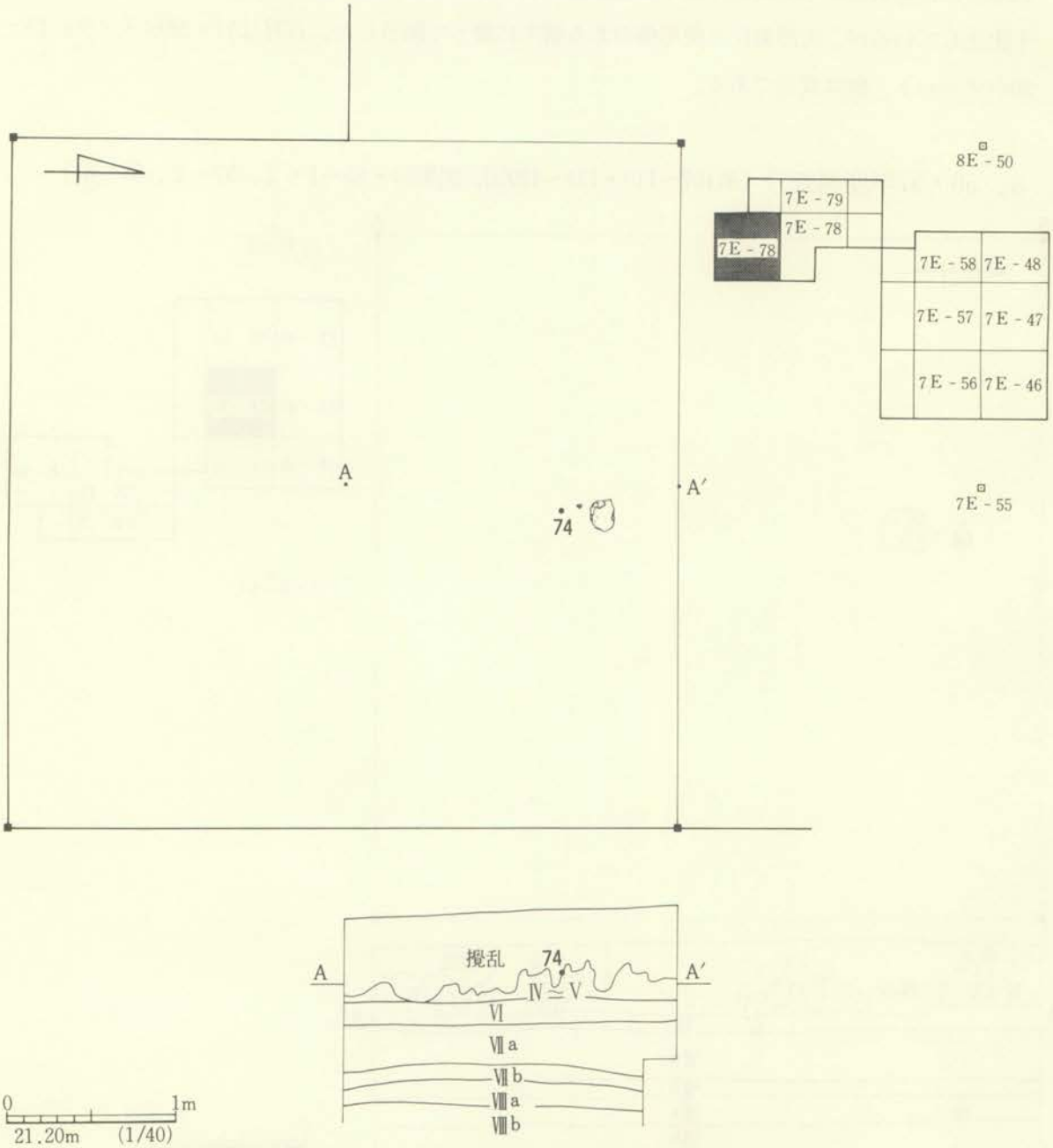
(1)Ⅶ層（第Ⅱ暗色帯）出土の石器

ユニット出土（38～67）

10E13・23・24で径10mほどの範囲に約60点が出土している。その内、石器は1点のみで、残りはすべて剝片である。

ナイフ形石器　38の1点のみで、厚手（1.2cm）の素材を利用し、粗く急角度に打欠いてプランティングをしている。石材は頁岩である。

剝片　39～67の29点を図示した。39～42は単片のもので、石材はいずれも頁岩である。41は特に大形で礫面を半分残し、上部には大きな剝離が加えられ、側縁には使用痕が認められる。43～46は同一母岩からなる玄武岩の礫片で、46は上部を欠くが、下半部が45と接合するものである。47～67は、こ

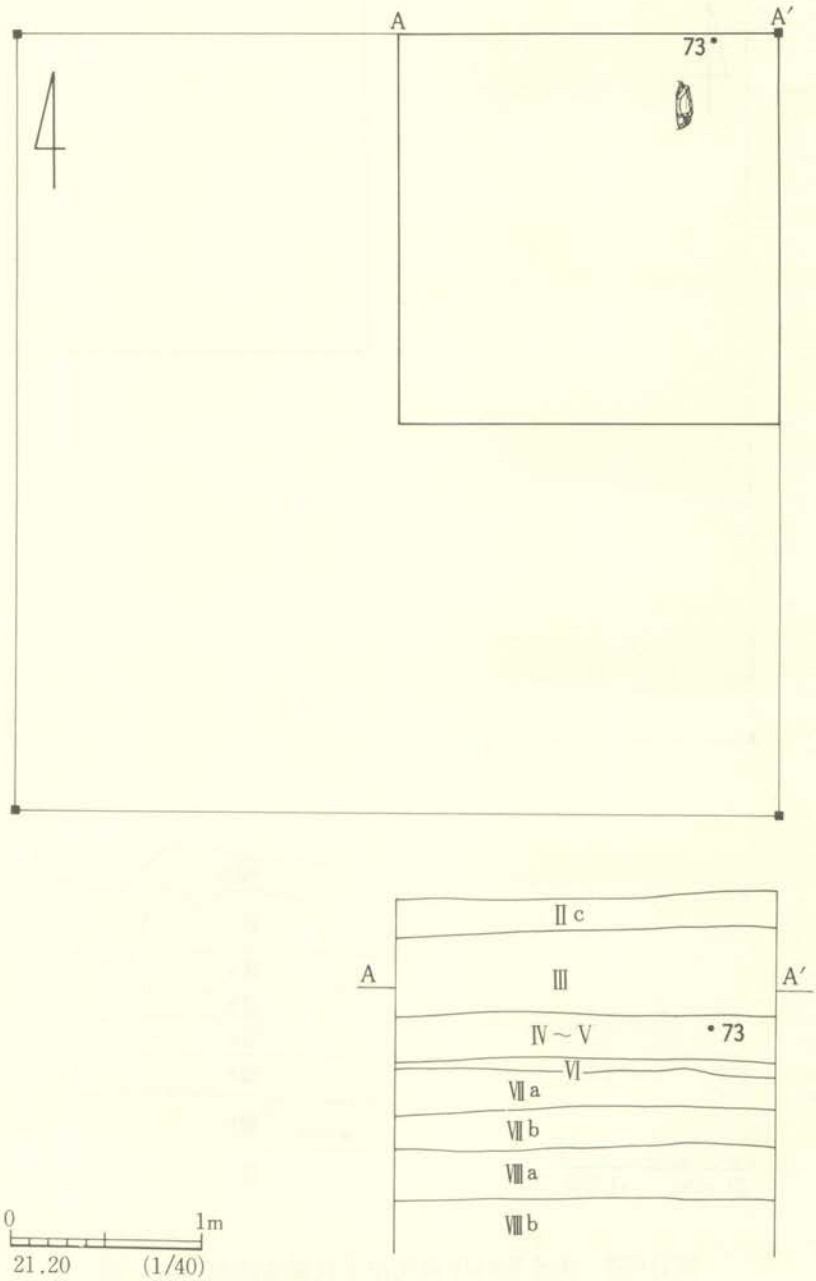


第108図　先土器時代遺物出土状態実測図（7E－88）

のユニットの主体をなす黒色頁岩の剝片で、全て同一の母岩から剝離されている。47～52の６点は接合資料である。47～49は縦長の不定形剝片で、47・48の小片を剝離後、大形の49が剝離されたことがわかる。50・51は49のバルブ部に接合するもので、これらにはさらに52が接合し、49を剝いだ石核の一部を構成している。50は51・52を剝ぐ打面を作るために剝離されたスポールであり、51・52は47～50と角度を90度変えて、その打面から剝離されている。53～55は礫表皮近くの薄い小形剝片で、同一方向から剝離され、53が54に、54が55に接合する。54・55は打面も共通である。56・57は小剝片の接合したもので、上部には細かい頭部調整がみられる。58～67は単片のもので58以外は小剝片である。

単独出土の石器（68～72）

68･69は剝片である。70は一面が磨かれており、砥石片であろう。石材は68が頁岩、69は黒曜石、



第109図　先土器時代遺物出土状態実測図（８Ｅ－13）

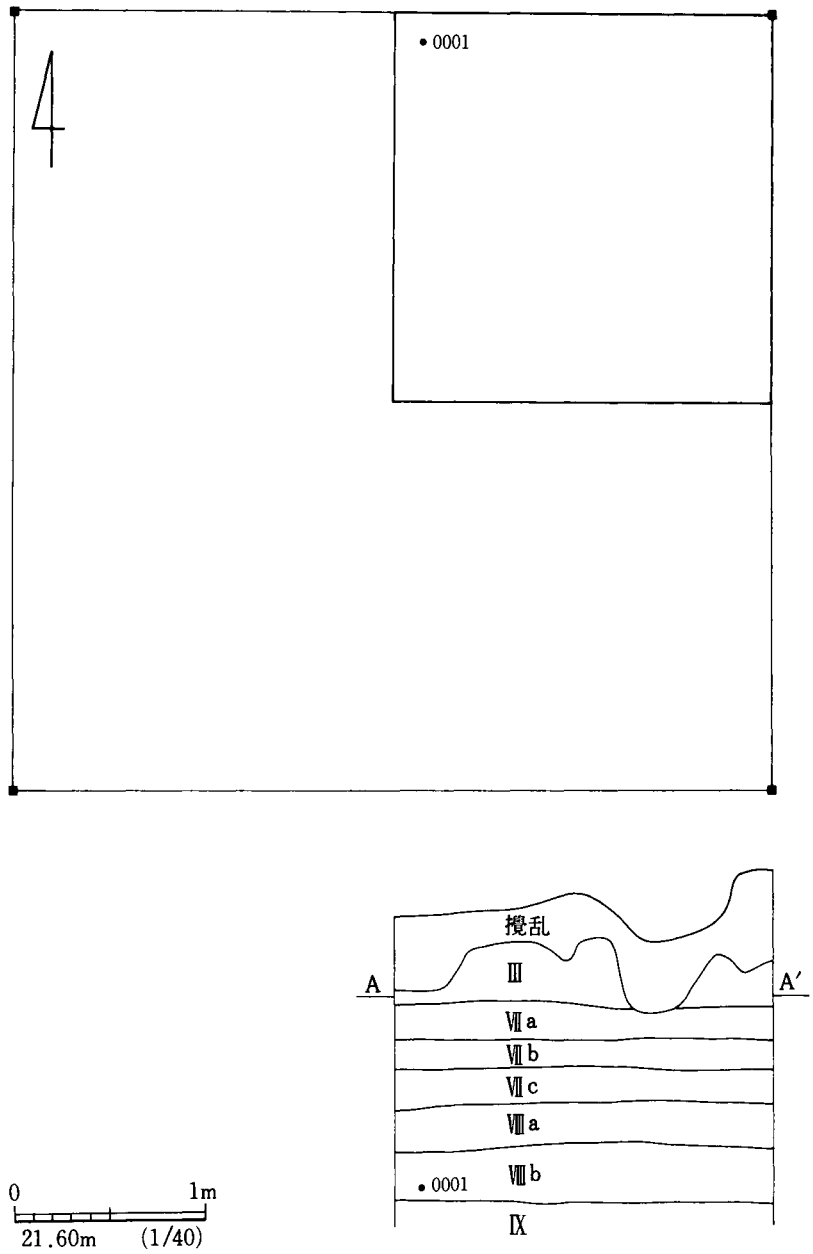
70は砂岩である。71・72は流紋岩の焼けた礫である。

(2)VI～V層出土の石器（73～75）

この層からの出土量は少なく、3点だけである。73は黒曜石のスクレイパーの破片であり、74は頁岩の小剝片で、周縁には二次調整がみられる。また75は一端が打ち欠かれた玄武岩の礫である。

(3)I～III層出土の石器（76～99）

第III層からの出土は、79の1点しかなかった。しかし、8Eの西半部をを中心とした地区では、天地返しによる攪乱がIII層まで及んでおり、その攪乱された層から焼礫片約1000点と、石器類が出



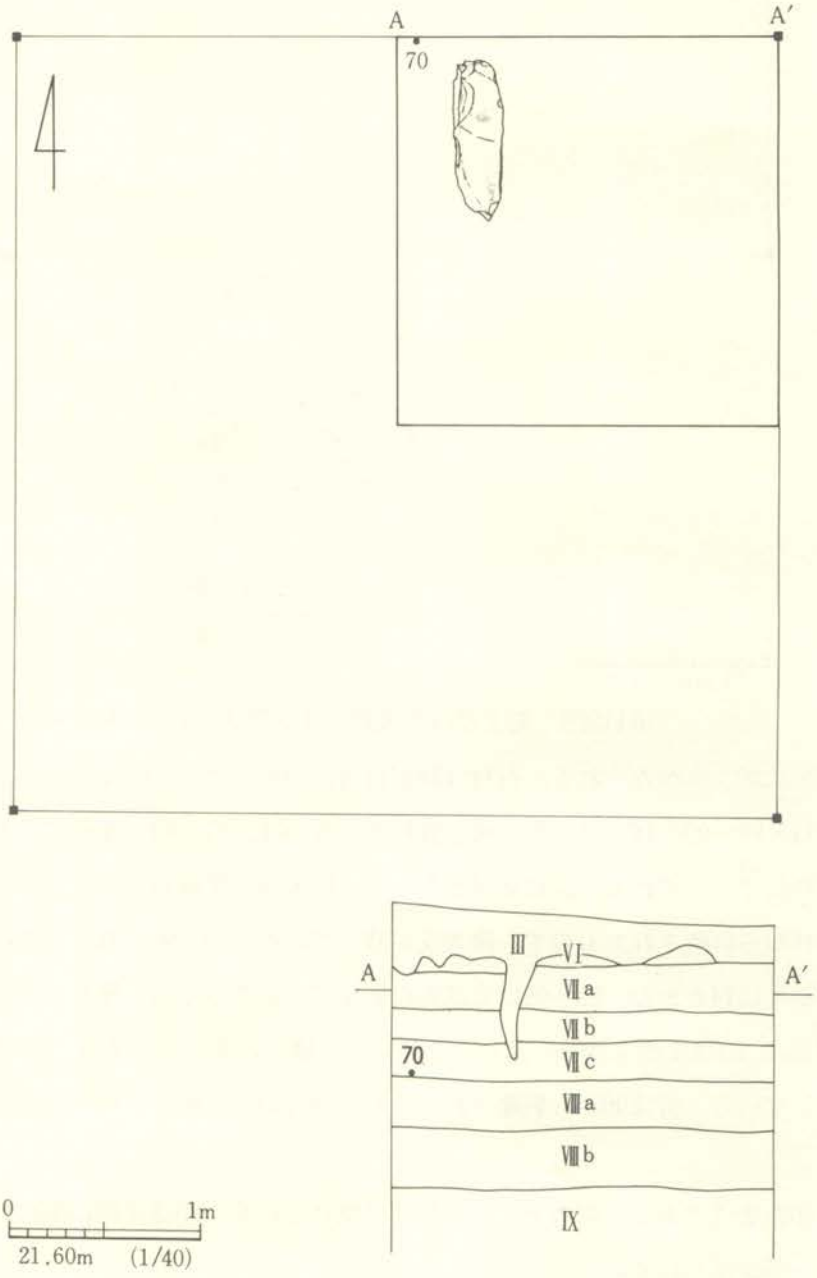
第110図　先土器時代遺物出土状態実測図（9D－55）

土した。これらは土器を伴出しないこと、性格や石材等からみて、先土器時代のもので、本来はⅢ層中に包含されていたと思われる。

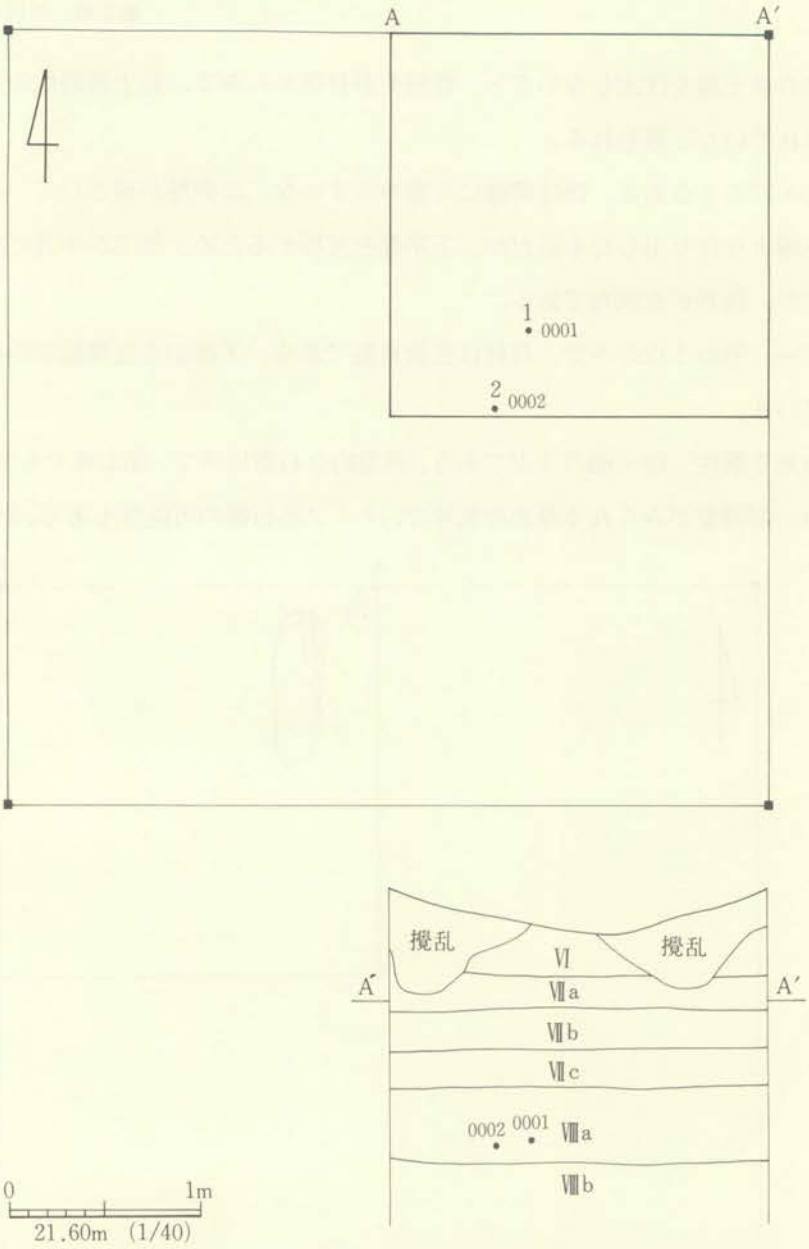
尖頭器　76・77の２点ある。76は周縁に片面の大まかな二次調整が施されている。77は細かい二次調整で、先端より作り出したものだが、下半部を欠損するため、加工が中途となっている。石材は前者がメノウ、後者が玄武岩である。

スクレイパー　93の１点のみで、石材は玄武岩製である。下部から左側縁にかけて加工し、刃部を作り出している。

二次調整のある剝片　78～80の３点である。典型的な石器以外で、加工痕をもつものをまとめた。78は両側縁の一部調整がみられる厚めの剝片で、ナイフ形石器の可能性もある。79は周縁と先端に、



第111図　先土器時代遺物出土状態実測図（9Ｄ－71）



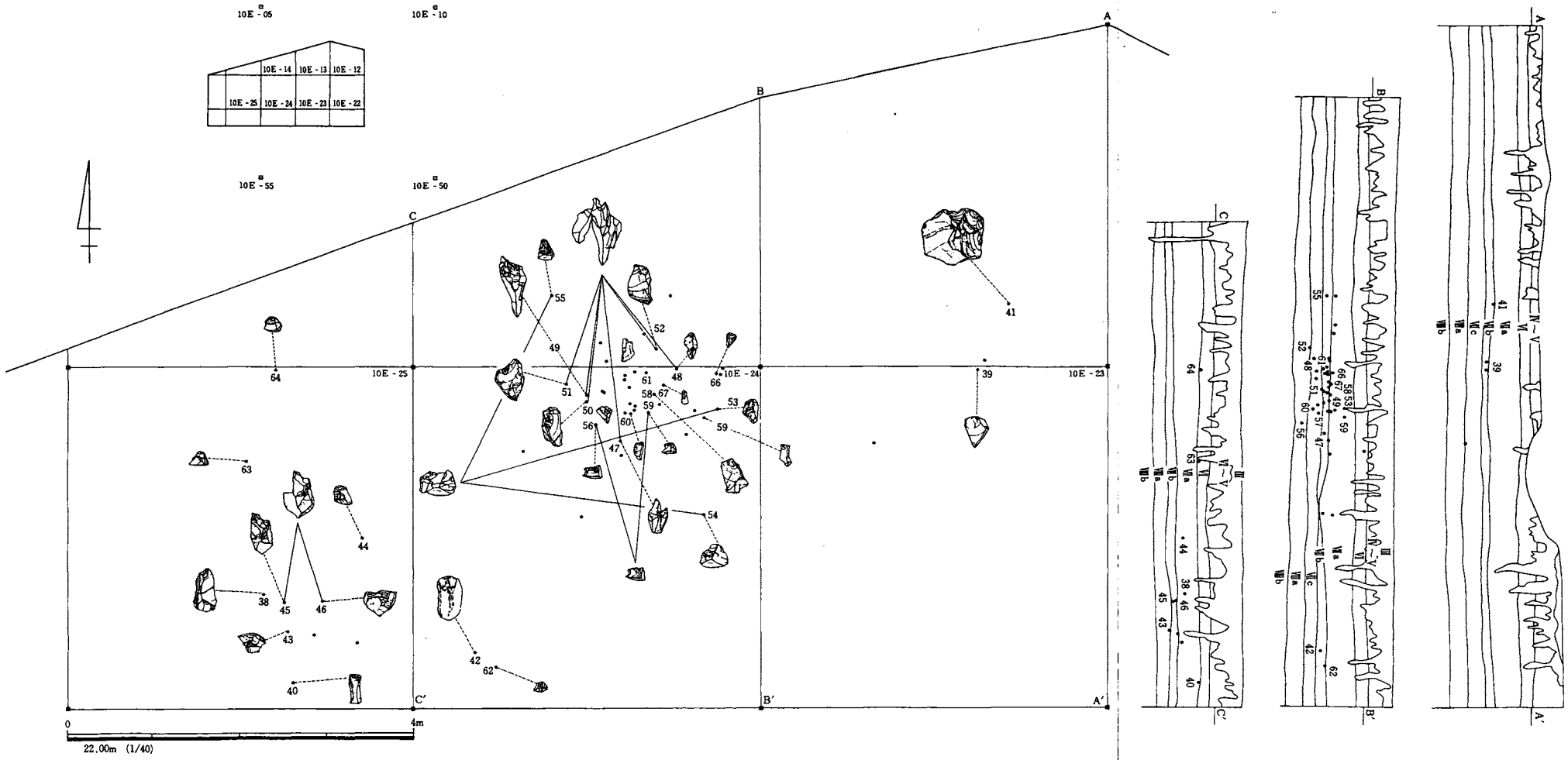
第112図　先土器時代遺物出土状態実測図（9D－73）

80は下部の両面に加工痕がみられる。石材は78が頁岩、79がメノウ、80はチャートである。

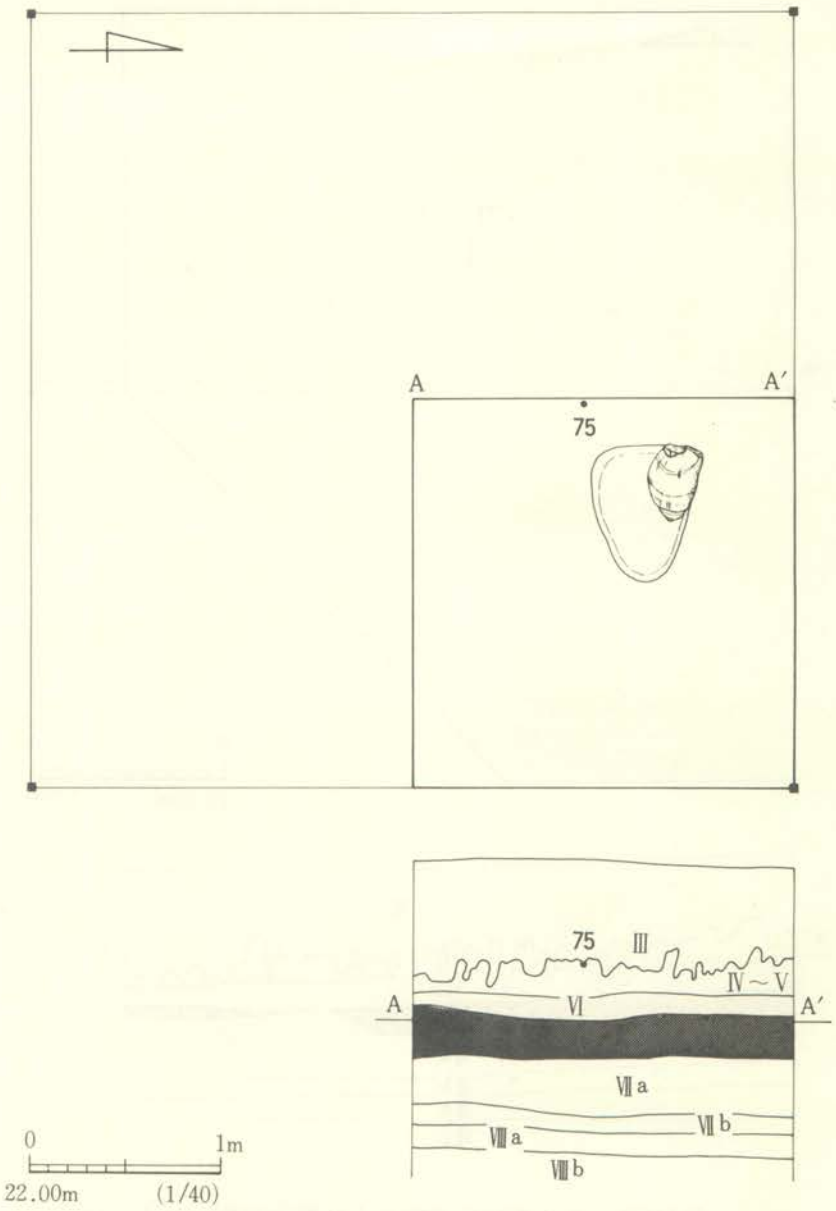
剥片　81～84・88～99の16点である。接合資料外のものは、81～84の４点である。81は頁岩、82はメノウの小形品で、いずれも一辺に使用痕をもつ。83・84は黒曜石で半欠品である。88～92は同じメノウの石材から剥離されたもので、礫表皮が残っている。89と90、91と92が接合する。図示した他にメノウ剥片は14点ある。93～99は玄武岩の剥片で、おそらく同じ礫から剥離されたものだろう。93・94は単品で、93は皮面を残し一辺にスクレイパー様の二次加工がある。また95は96に、97～99は３点が接合している。97は99から剥離されており、98は99から剥いだ残りの石から剥離されたものである。

礫器　85・86の２点である。両者とも火を受けて焼けている。85は先端に敲打痕がある。86は凹凸のある礫の一部が擦られている。

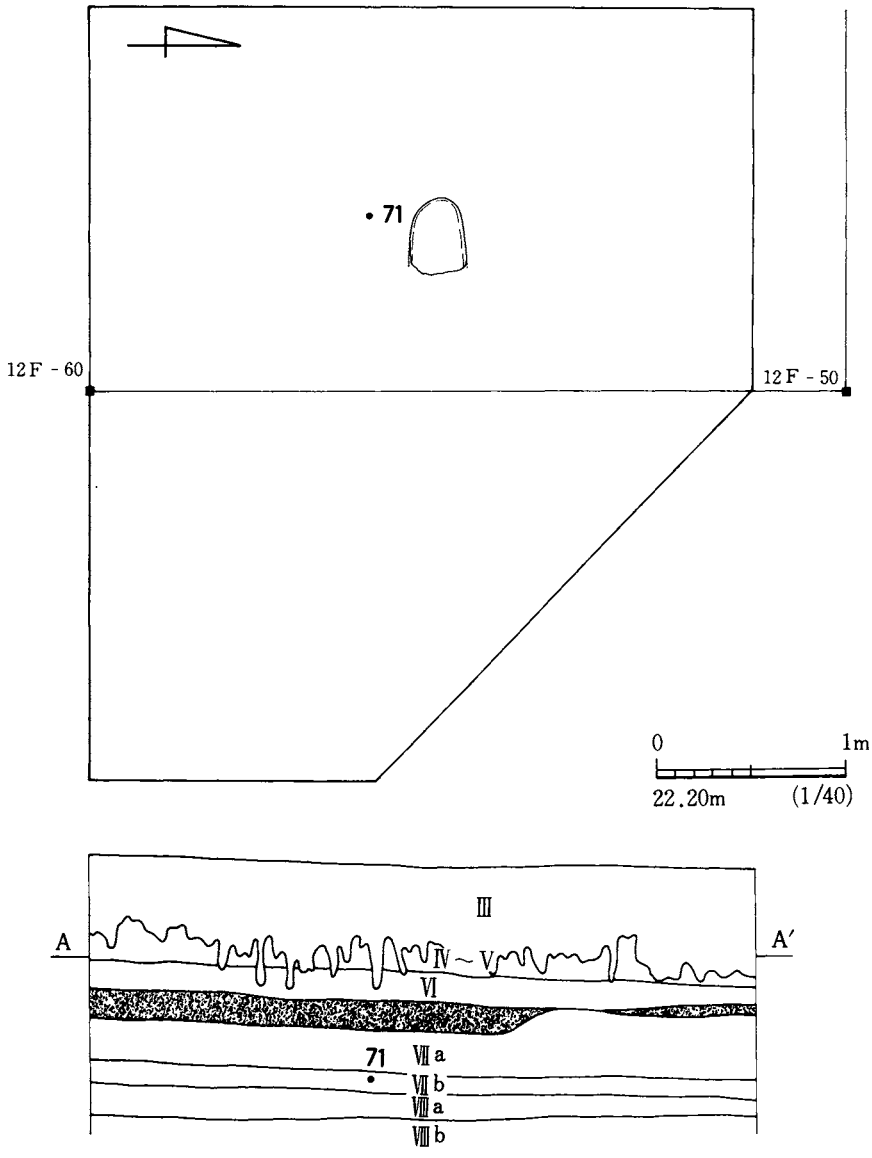
石核　87の１点である。石材はメノウで、打面の縁を廻って剥離がなされている。



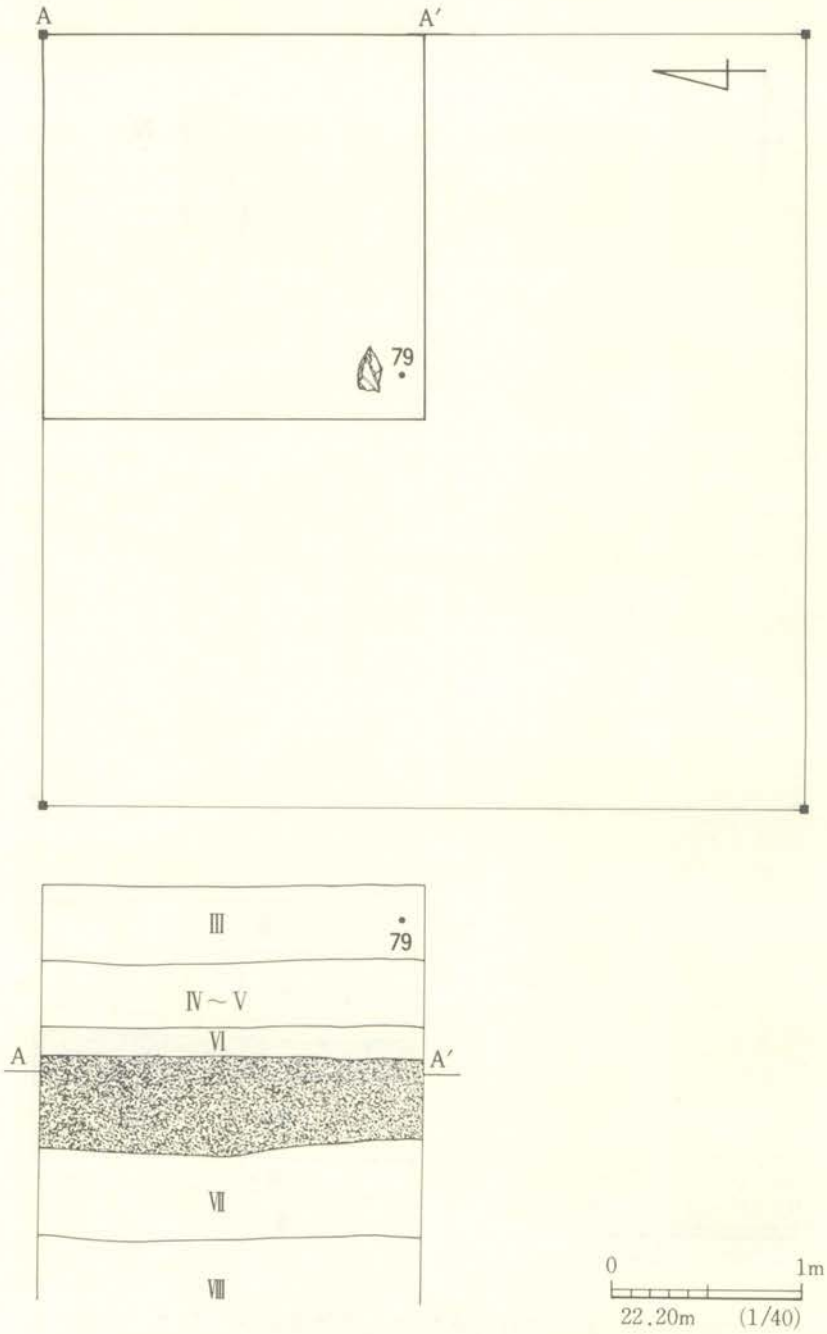
第113図　先土器時代遺物出土状態実測図（10E－13．14．23．24．25）



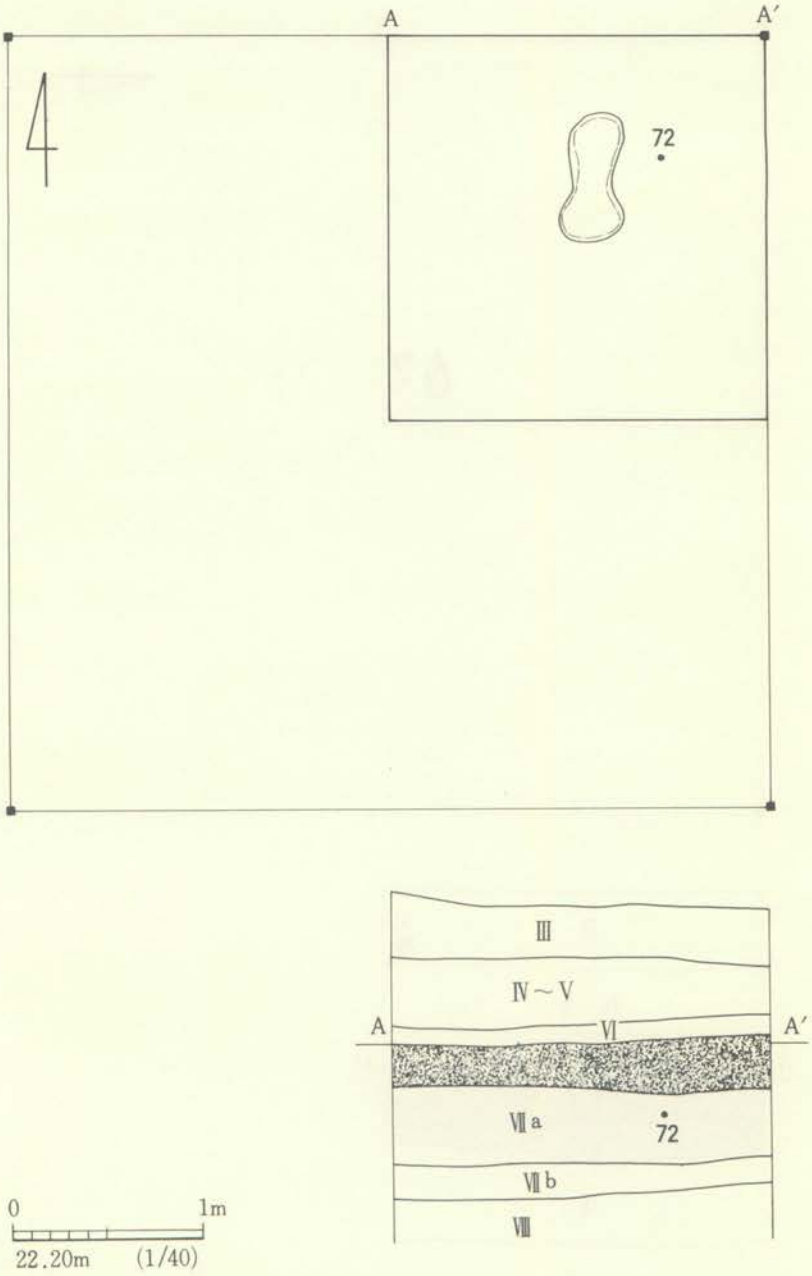
第114図　先土器時代遺物出土状態実測図（12Ｆ－13）



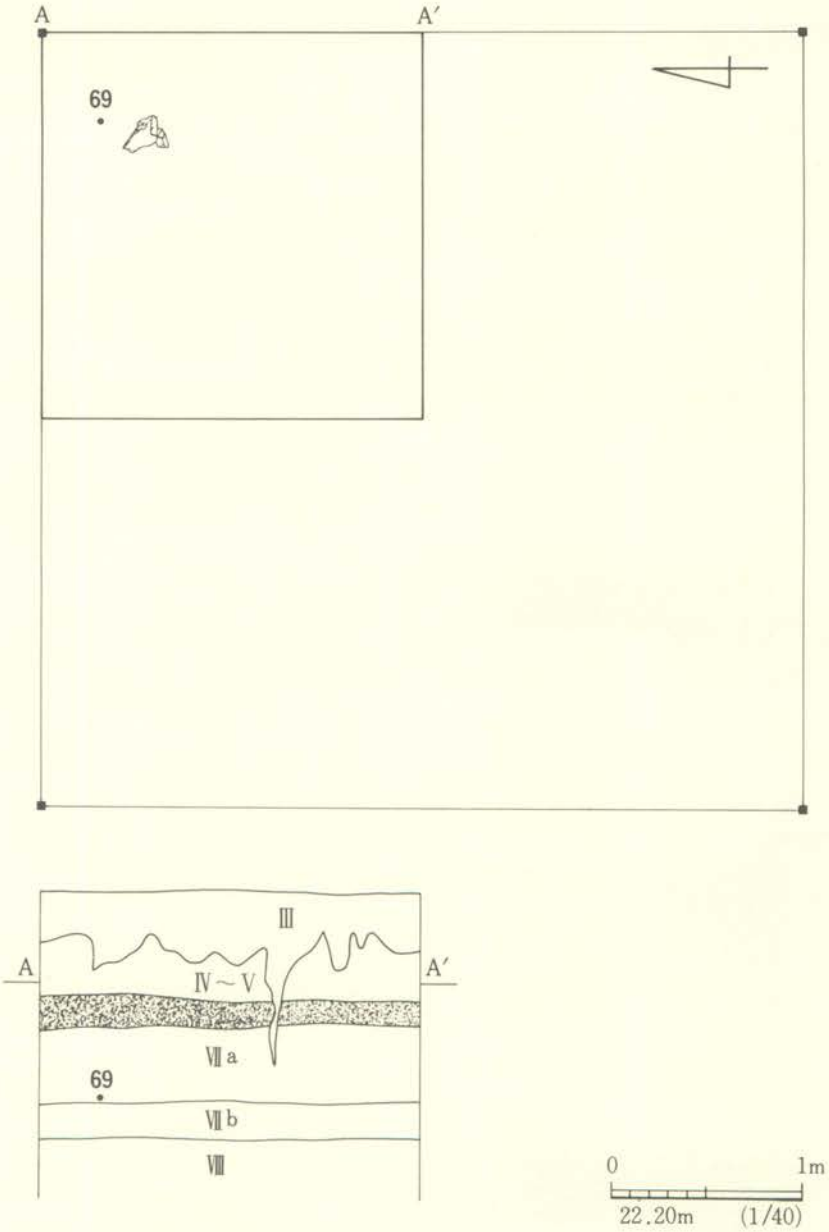
第115図　先土器時代遺物出土状態実測図（12F - 50）



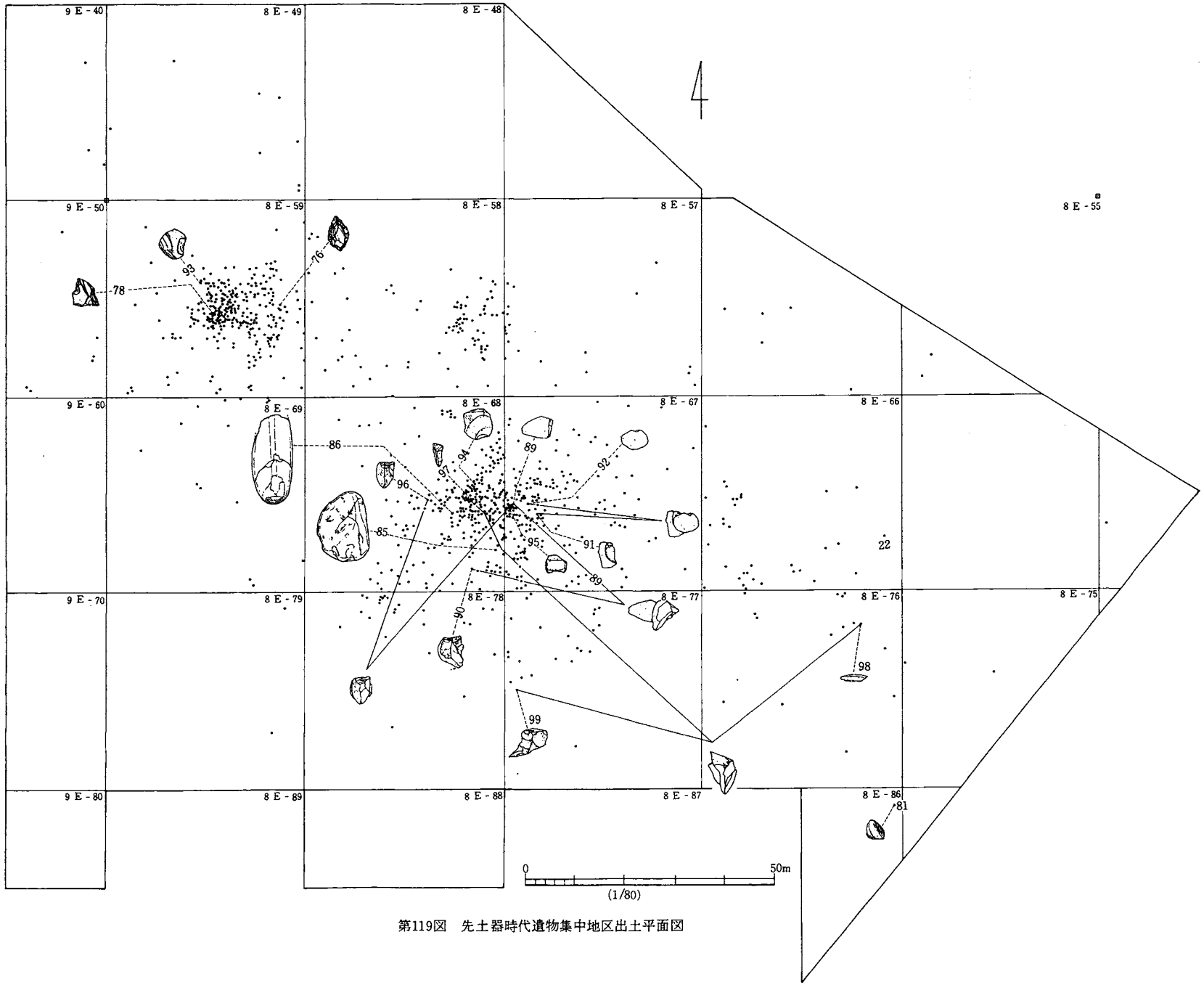
第116図　先土器時代遺物出土状態実測図（12Ｆ－55）



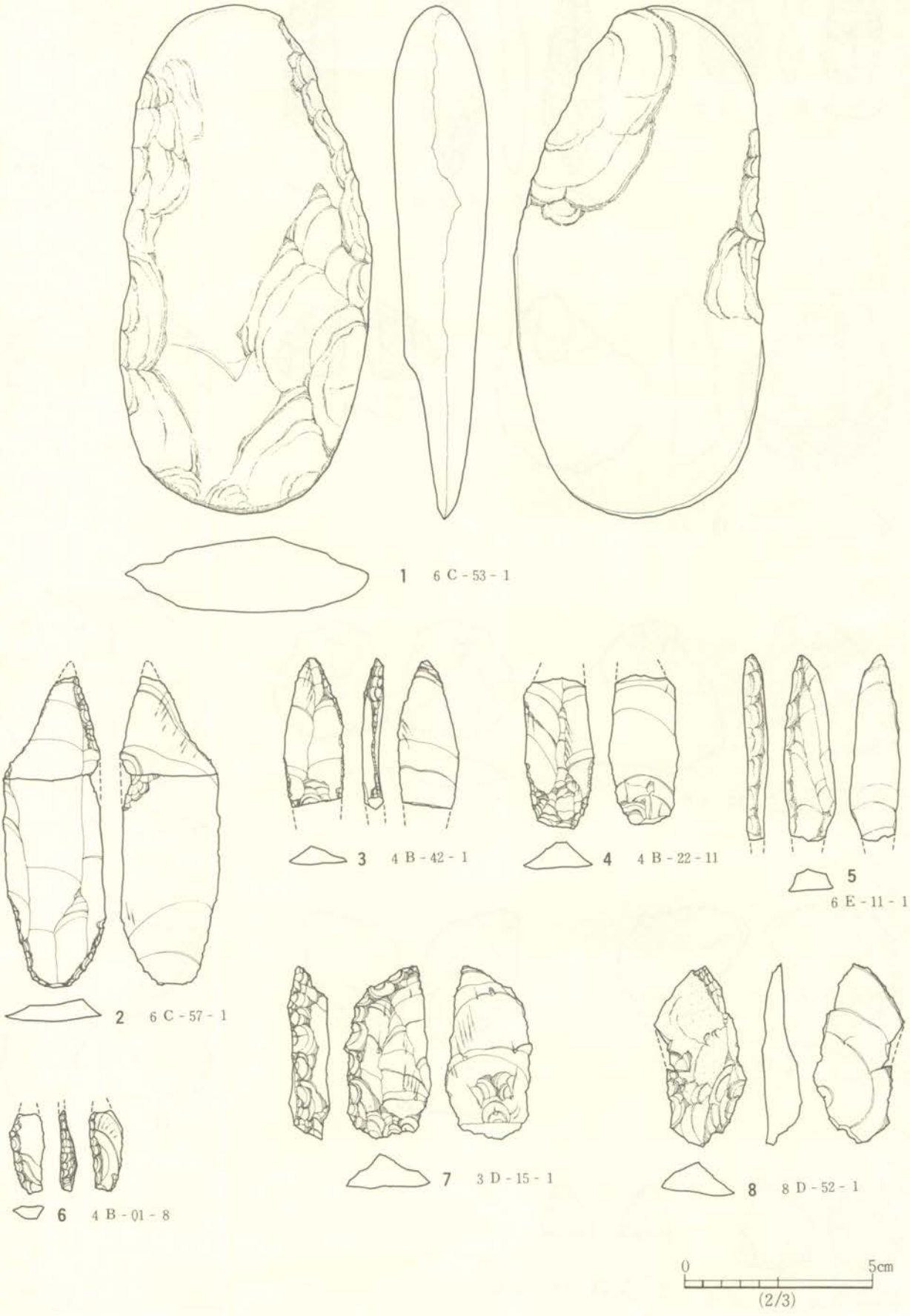
第117図　先土器時代遺物出土状態実測図（12Ｆ－62）



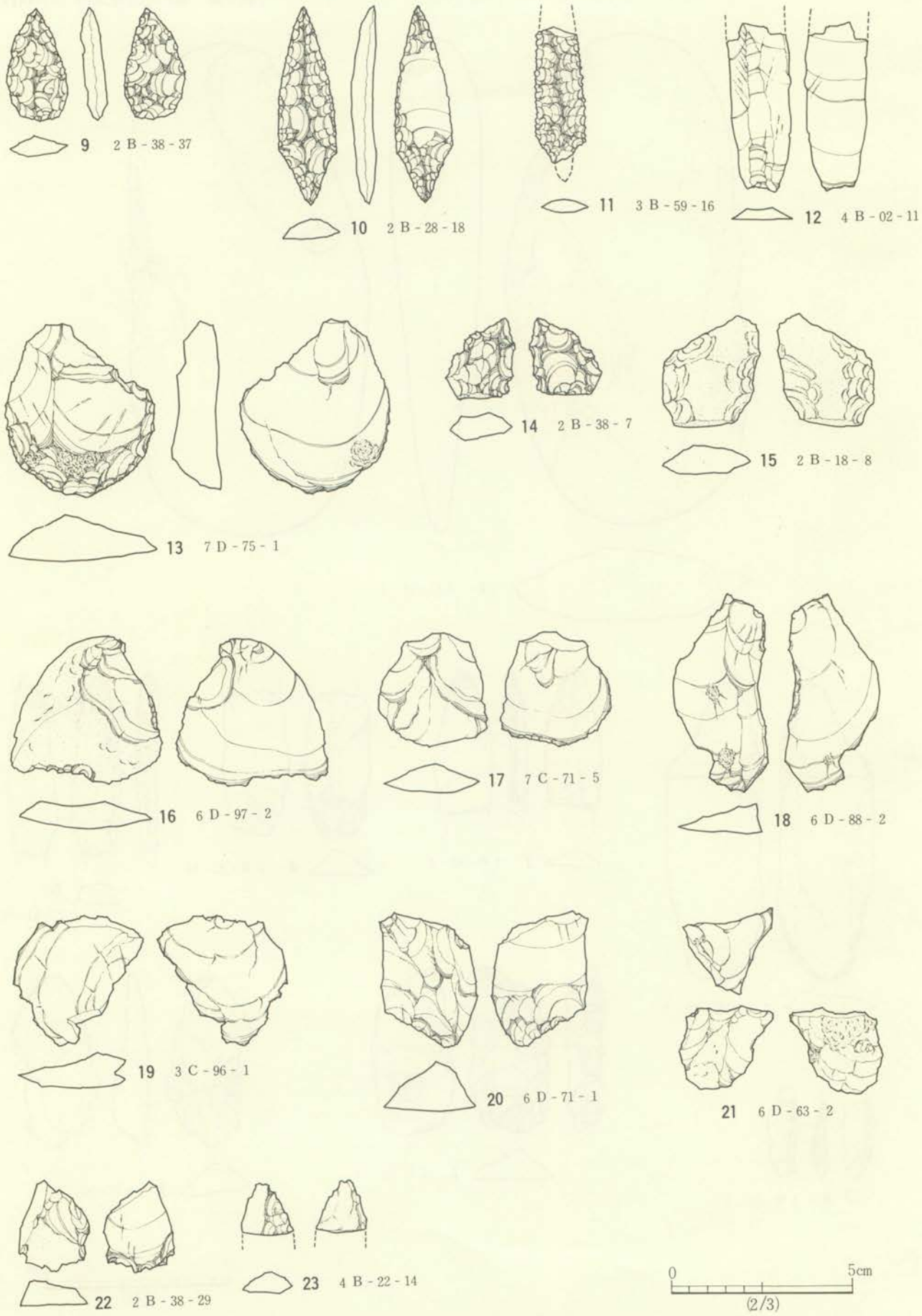
第118図　先土器時代遺物出土状態実測図（12Ｆ－80）



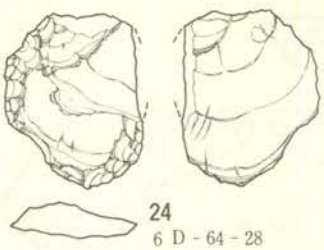
第119図　先土器時代遺物集中地区出土平面図



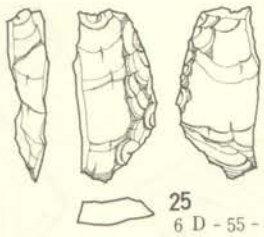
第120図　先土器時代石器実測図　(1)



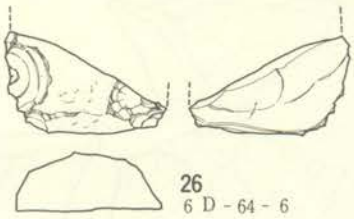
第121図　先土器時代石器実測図　(2)



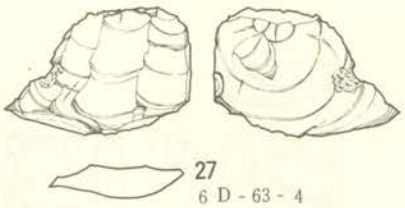
24
6 D - 64 - 28



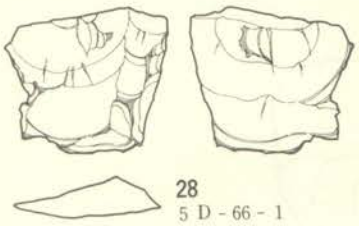
25
6 D - 55 - 1



26
6 D - 64 - 6

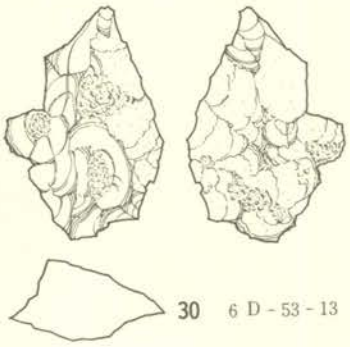


27
6 D - 63 - 4

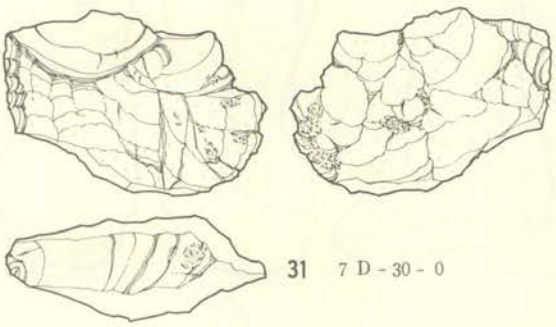


28
5 D - 66 - 1

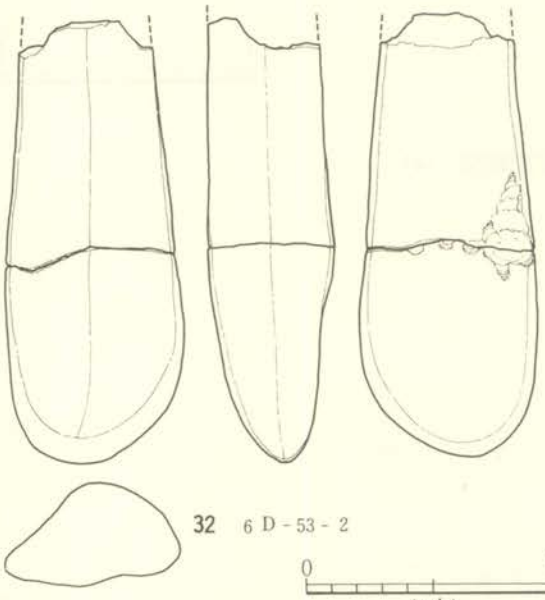
29
6 D - 62 - 2



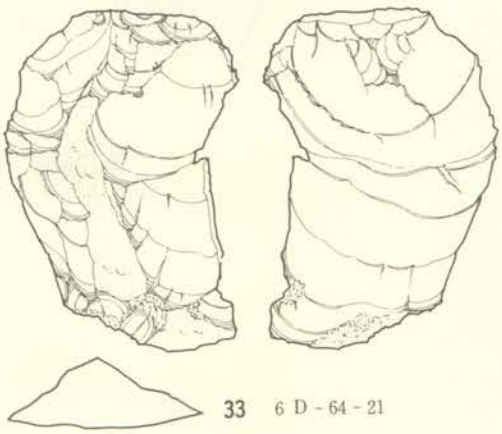
30　6 D - 53 - 13



31　7 D - 30 - 0



32　6 D - 53 - 2

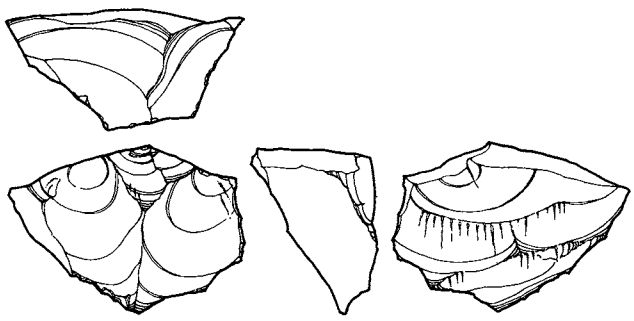


33　6 D - 64 - 21

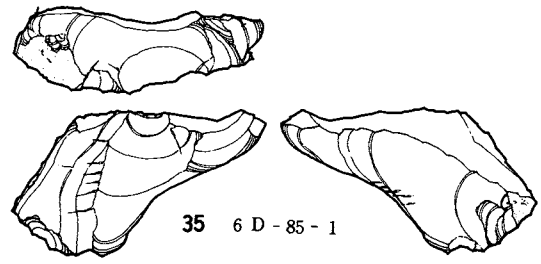
0　10cm
(2/3)

0　5cm
(2/3)

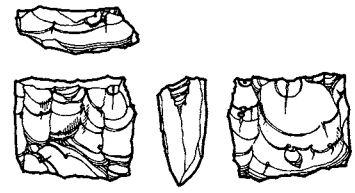
第122図　先土器時代石器実測図　(3)



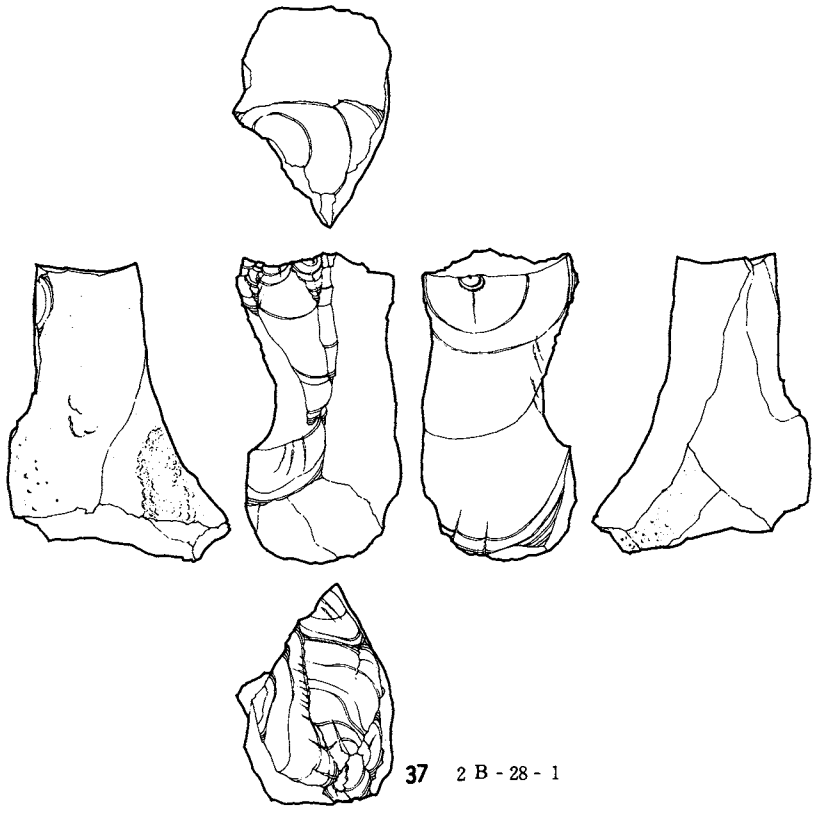
34 2 B - 35 - 5



35 6 D - 85 - 1



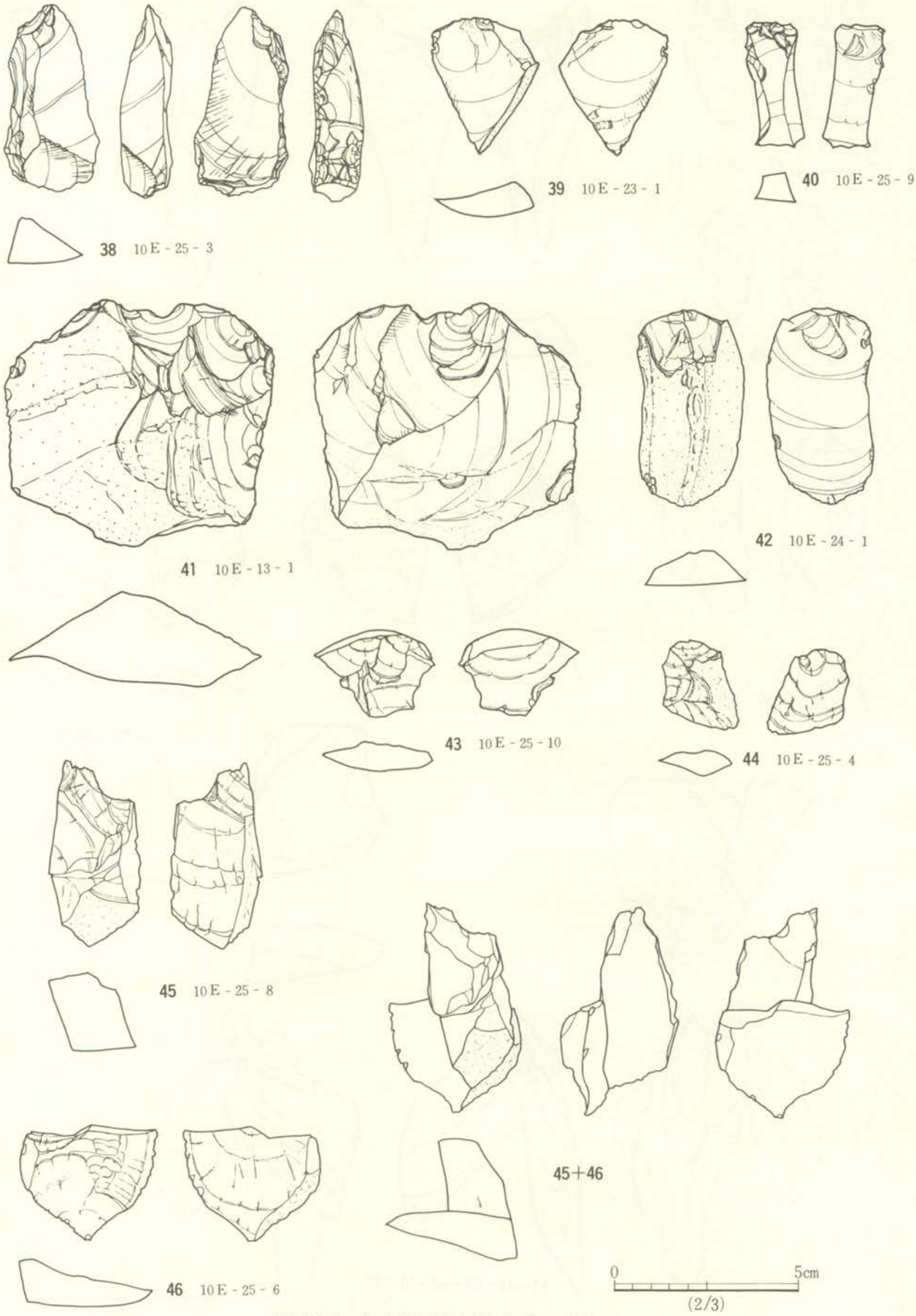
36 5 D - 73 - 1



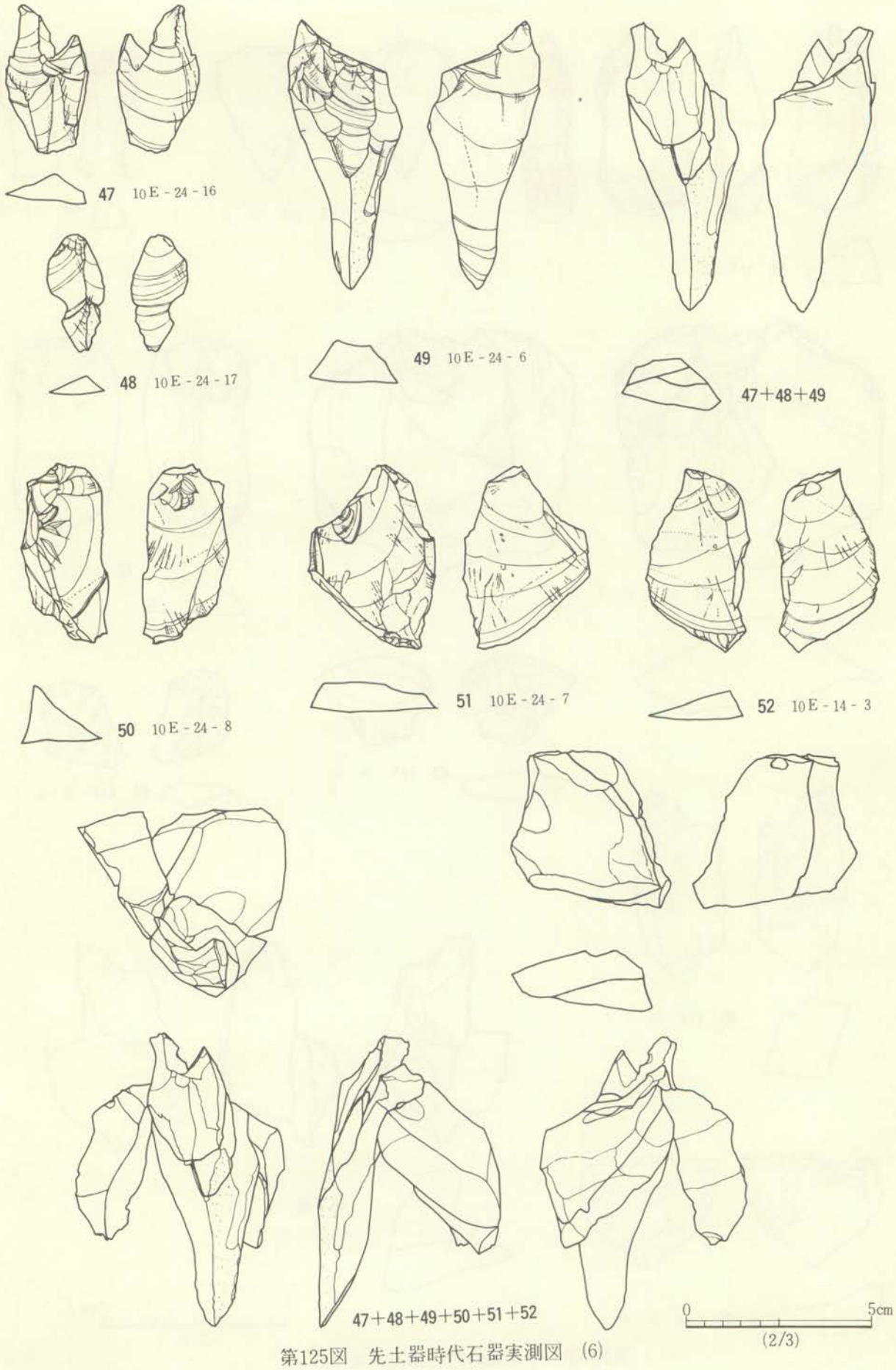
37 2 B - 28 - 1

0 5cm
(2/3)

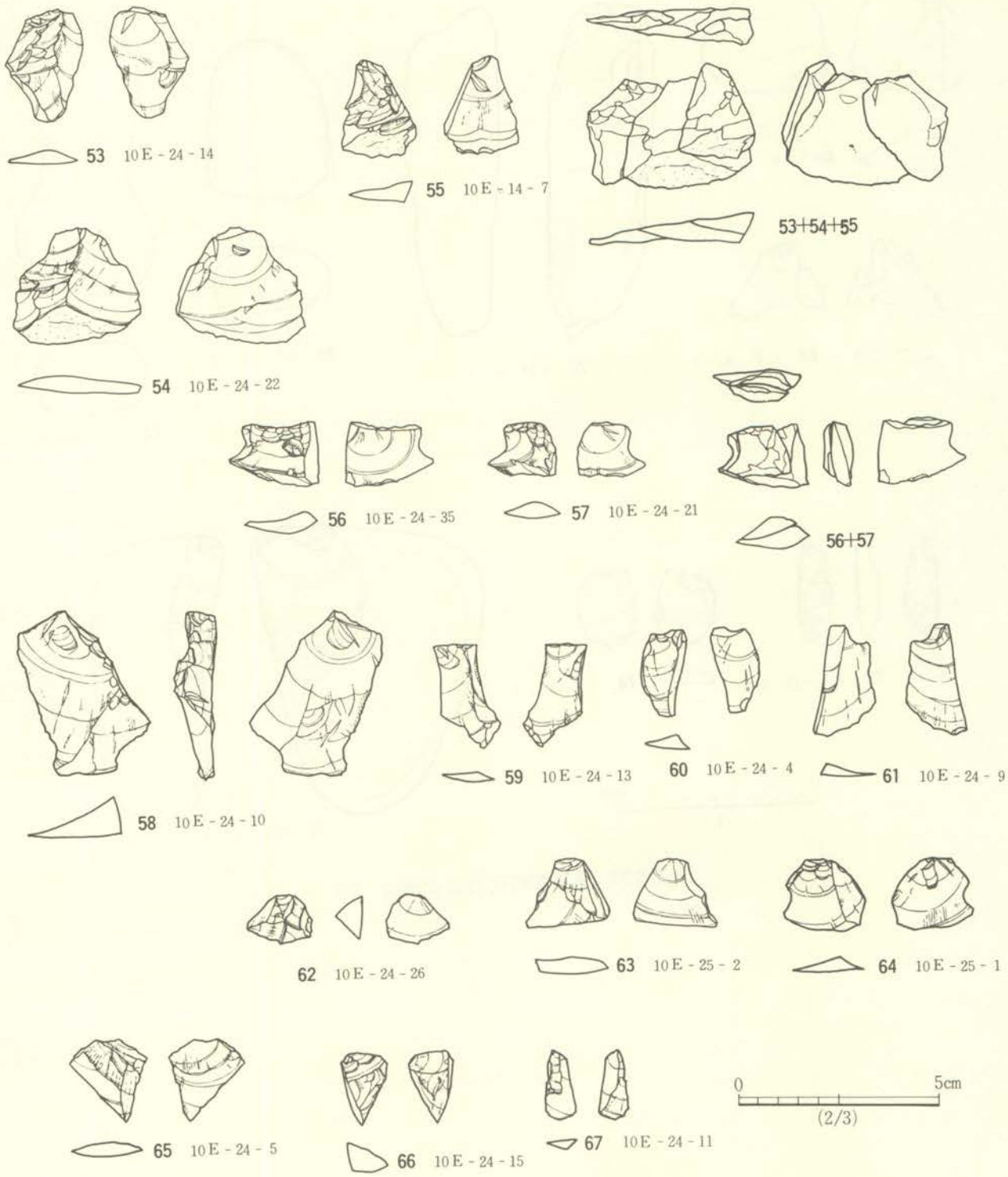
第123図　先土器時代石器実測図 (4)



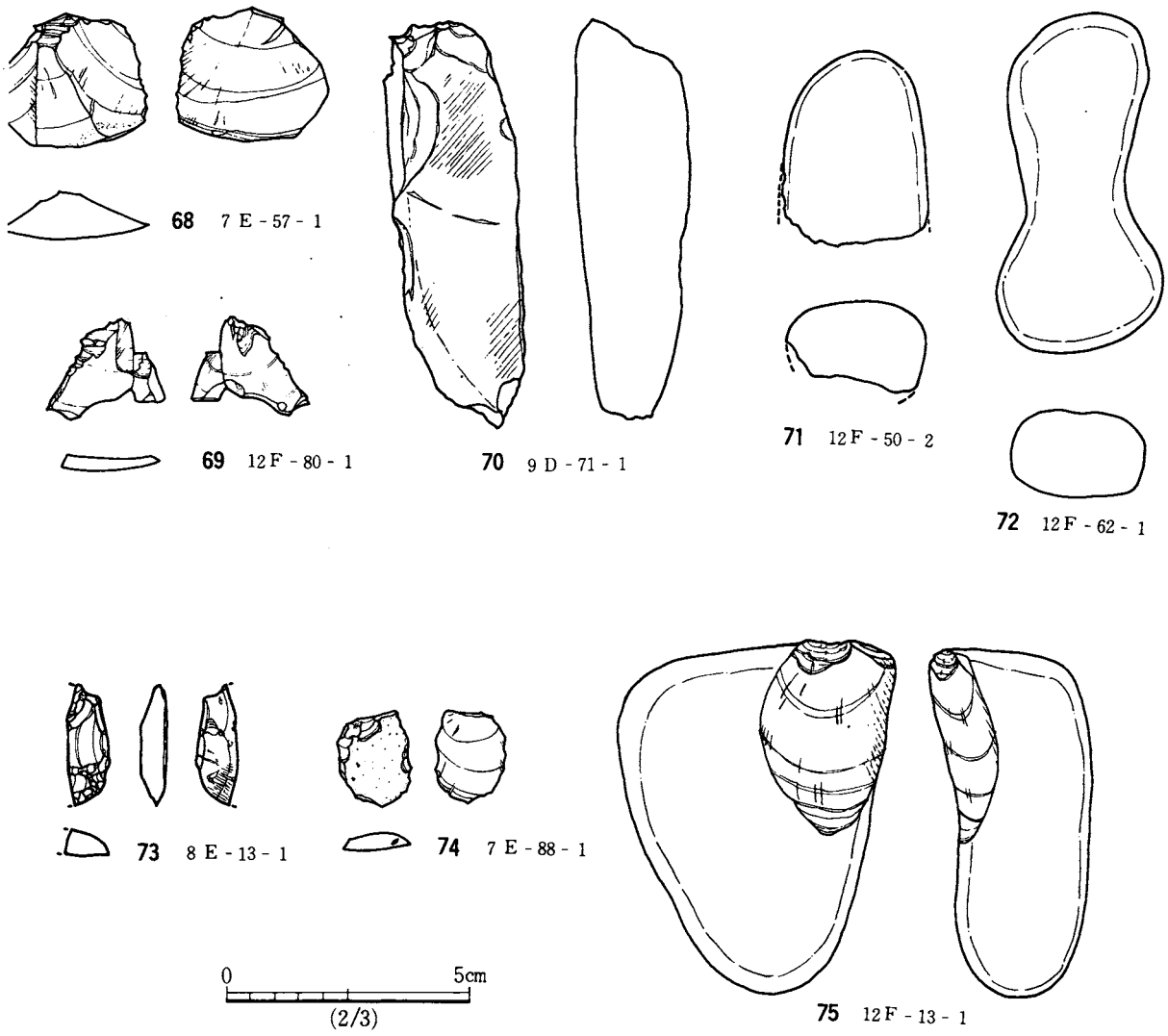
第124図　先土器時代石器実測図　(5)



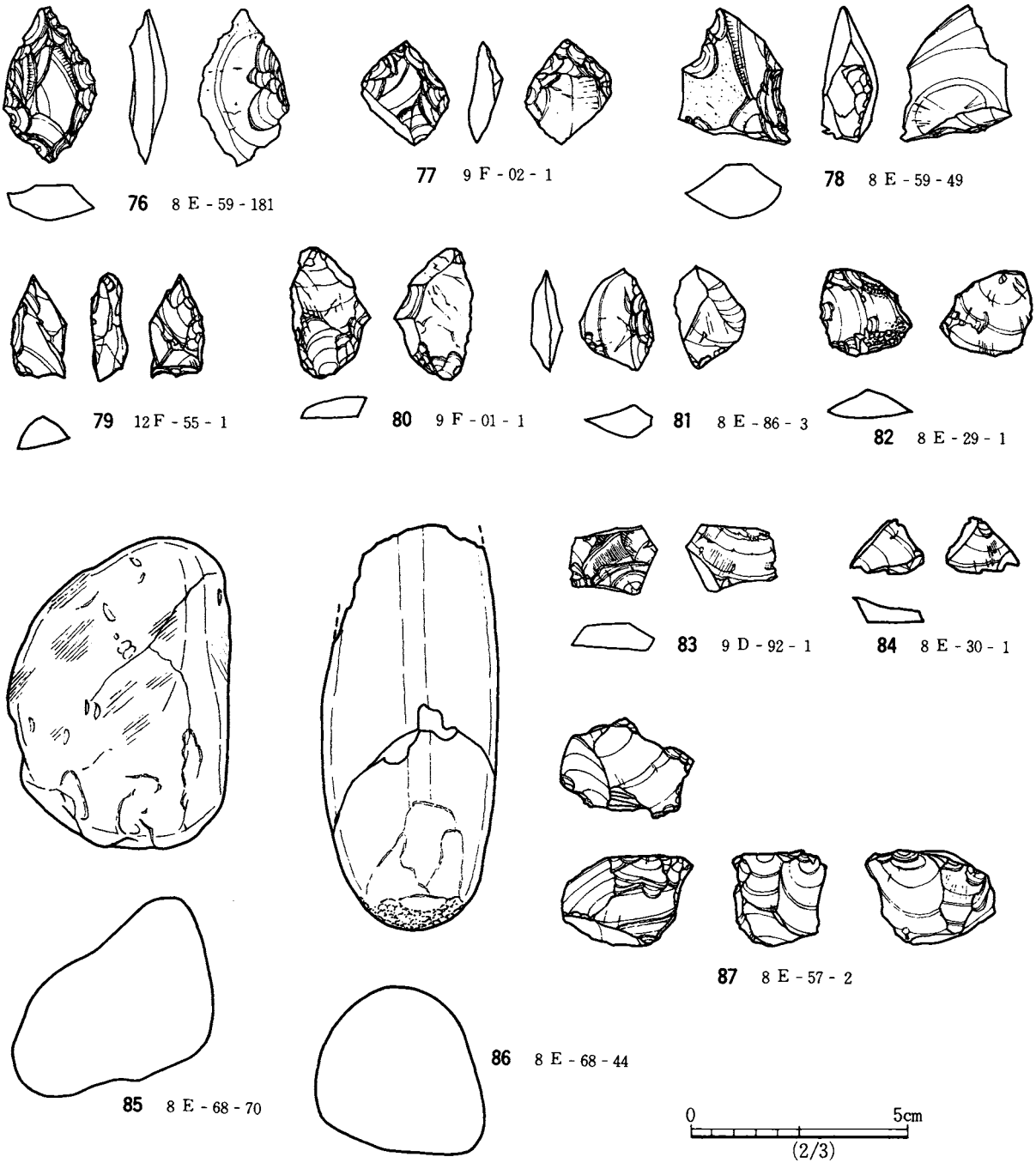
第125図　先土器時代石器実測図　(6)



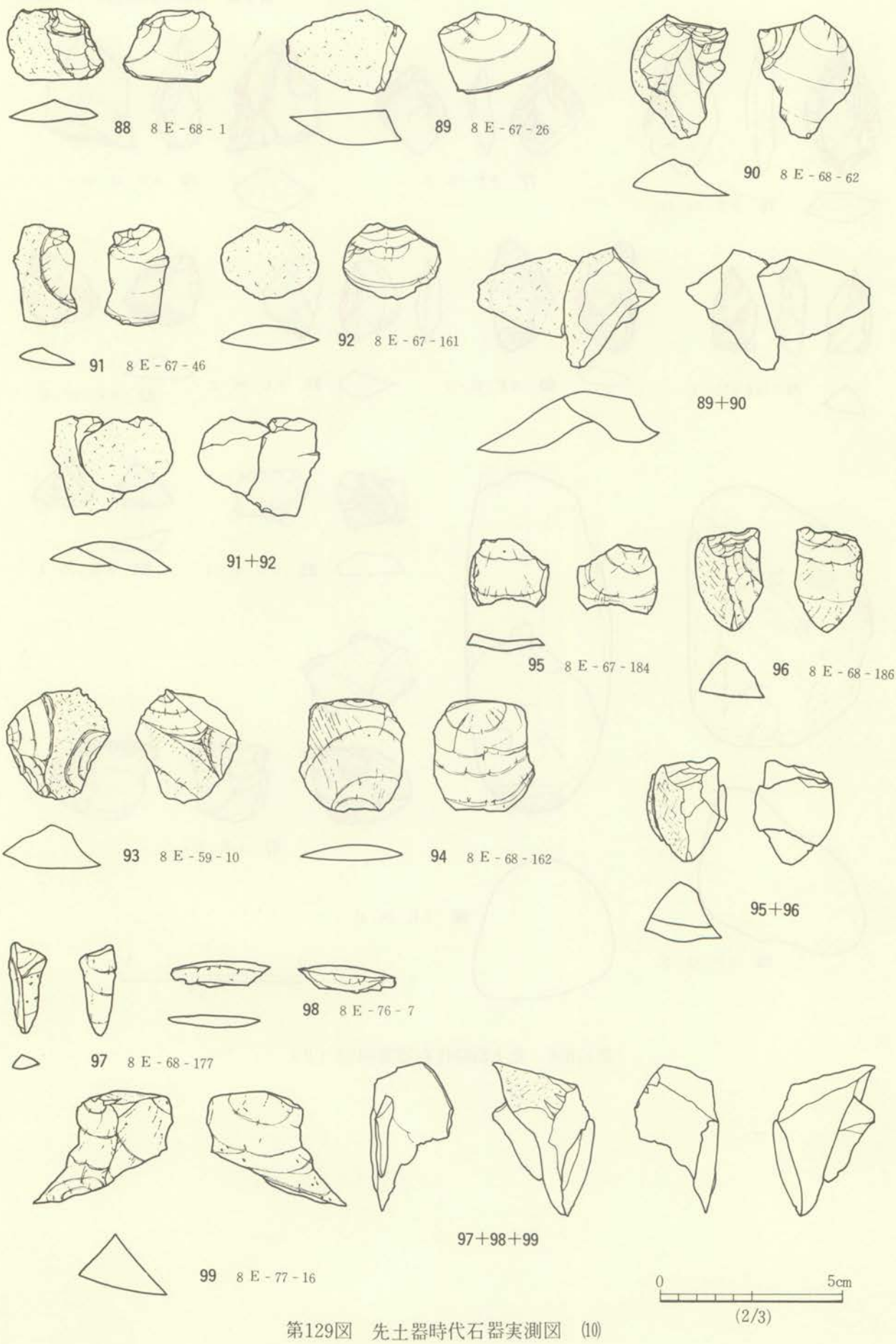
第126図　先土器時代石器実測図（7）



第127図　先土器時代石器実測図　(8)



第128図　先土器時代石器実測図（９）



第129図　先土器時代石器実測図 (10)

３章　住居跡の調査

本遺跡において検出した住居跡は、総数で13軒である。各住居跡は、本遺跡の中央付近から北東側にかけて発見されており、いずれも53年度から55年度にかけて調査したものである。各住居跡を時代別に分けると、縄文時代１軒、弥生時代９軒、古墳時代３軒となる。

以下、時代別に各住居跡の特徴等を述べてみたい。

１　縄文時代

当該期の住居跡は、021号住居跡１軒のみであった。

021号住居跡〔第130・131図、図版62－１～３〕

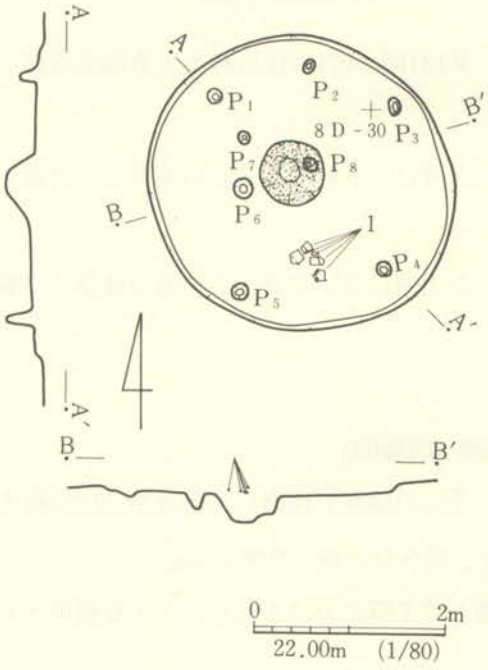
遺跡の中央付近北寄りに位置する。プランを検出した段階では、土壙状の遺構と考えていたが、精査の結果住居跡と判明した。

覆土は、ローム粒・ローム小ブロック及び炭化粒を含む暗褐色土の単一層で、短期間に堆積した状態を呈していた。

平面形は、直径約3.2mの円形を呈する。

壁は、掘り込みが浅く、最深部でも15cm程度である。おそらく上部が削平されたものと考える。立ち上がりは、やや傾斜をもつ。

床面は、踏み固められて堅くしまっており、比較的平坦であるが、全体に大小の浅い窪みがみられる。



第130図　021号住居跡実測図

ピットは、壁沿いに5か所（P 1～P 5）、炉址の西側に2か所（P 6・P 7）、炉址内に1か所(P 8）検出した。P 1～P 5は、位置関係がやや不規則であり、掘り込みも10cm～20cmと浅い。柱穴であろうか。P 6・P 7は、掘り込みが10cm程度で、P 8は炉底より約5 cm窪む程度である。攪乱壙の可能性が高い。

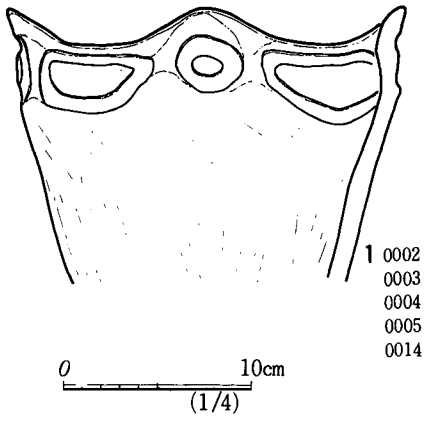
壁溝は検出しなかった。

炉址は、中央付近やや西寄りに位置する。平面形は、直径約70cmの円形を呈し、住居跡の規模の割りには大きく、掘り込みも深い。炉址内には焼土が充満していた。

遺物は概して少なく、炉址の南側から南壁付近に集中していた。いずれも床面あるいはやや浮いた状態で出土し、土圧によりつぶれた状態を呈していた。大半が同一個体である。

出土遺物〔第130図、図版62－3〕

土器片としては約15点程採集したが、いずれも同一個体であった。そのうち5点が接合した。深鉢で、口縁部には円形、楕円形が凹線で描かれ、円形文の部分4か所は、口縁部が山形に突出している。加曽利E III式土器である。



第131図　021号住居跡出土遺物実測図

2．弥生時代

本遺跡において検出した住居跡は、9軒である。いずれも、遺跡の中央付近から東側にかけて分布している。

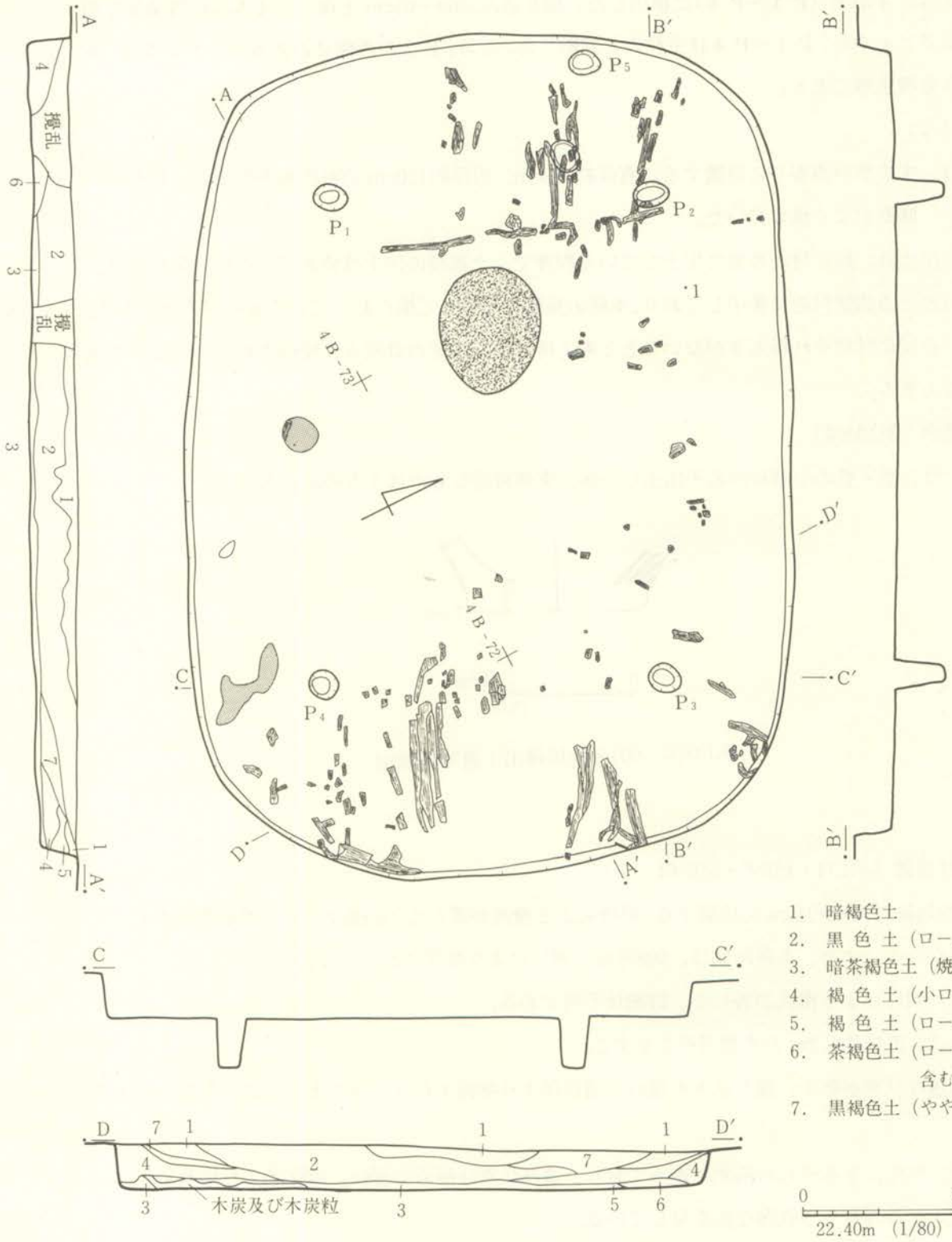
なお、各住居跡から出土した土器については、この項の最後で一覧表にまとめたので参照されたい。

001号住居跡〔第132・133図・図版63〕

遺跡の北東寄りに位置し、今回の調査で検出した当該期の住居跡中最大規模である。覆土中より炭化材が多量に出土しており、焼失住居跡と判断した。

覆土は、いずれも自然堆積土で7層に分けられた。3・6層中より炭化材及び焼土粒を多量に検出した。

平面形は、直径約10.9m、短径約8.0mの隅丸長方形を呈する。



1. 暗褐色土
2. 黒 色 土（ローム粒を含む）
3. 暗茶褐色土（焼土粒を含む）
4. 褐 色 土（小ロームブロックを含む）
5. 褐 色 土（ローム粒を含む）
6. 茶褐色土（ローム粒、焼土粒を多く含む）
7. 黒褐色土（やや軟質）

第132図　001号住居跡実測図

壁は、耕作による攪乱が覆土中に及んでいるわりに、遺存状態が良好である。掘り込みは40cm程で、床面は、全体にほぼ平坦で、比較的よくしまっている。

立ち上がりは垂直に近い。

ピットは、4か所（P 1～P 4）に検出した。掘り込みが60～65cmと深く、4本の位置関係に規則性があることから、P 1～P 4は主柱穴と判断した。なお、P 2の西側にみえるピット2本は、木根等による攪乱壙である。

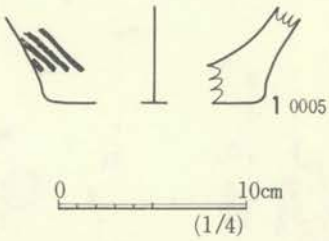
壁溝はない。

炉址は、中央やや西寄りに位置する。直径約160cm、短径約130cmの長円形を呈する。掘り込みは浅いが、底面がよく焼けていた。

遺物の出土は、炭化材が多量に出土している程度で、土器類の出土は極めて少ない。炭化材は、東側壁付近と西側壁付近に集中しており、本跡の長軸に平行して横たわっているものが大半である。これは、各炭化材がそれ程太さがないことと考え併せて、上屋の骨組みに使用されていたことを示すものであろう。

出土遺物〔第133図〕

土器片は、壺・甕の小破片が若干出土したが、実測可能なものは1点のみであった。



第133図　001号住居跡出土遺物実測図

010号住居跡〔第134・135図・図版64－1〕

001号住居跡の南西約40mに位置する。耕作による攪乱が著しく、正確なプラン等を把握することができなかった。また、本跡南側は、008号址（溝）により削平されている。

覆土は、耕作による攪乱が著しく、詳細は不明である。

平面形は、直径約6.2mの不整円形を呈する。

壁は、遺存状態が悪く、掘り込みも浅い。遺存部より推測すれば、立ち上がりは傾斜をもつようである。

床面は、耕作によるうねが南北に走っており、遺存状態は極めて悪い。遺存部より推測すれば、小さな起伏がみられやや軟弱な面を呈している。

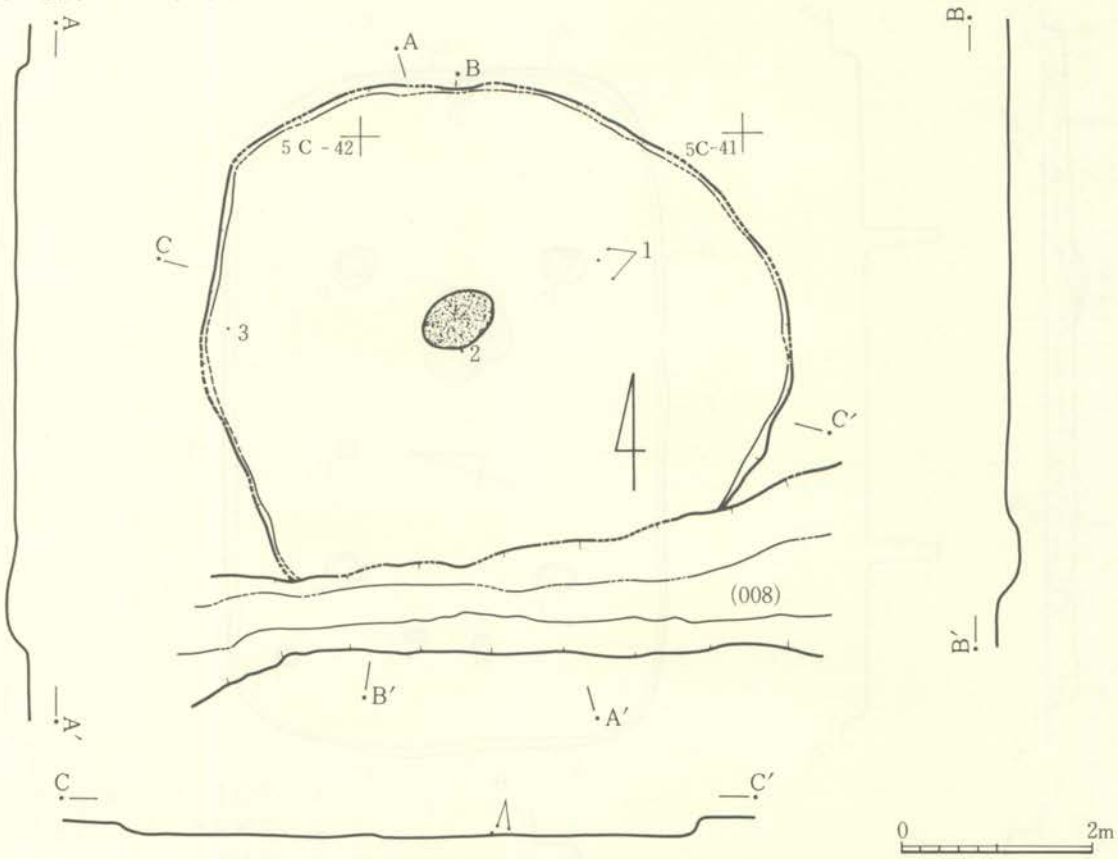
ピット及び壁溝は、検出しなかった。

炉址は中央やや北寄りに位置する。長径約80cm、短径約60cmの長円形を呈する。掘り込みが浅く、底面はそれ程焼けていない。

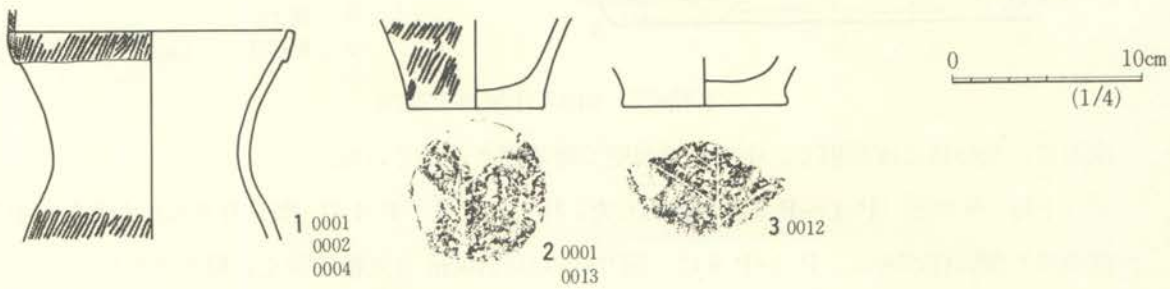
遺物の出土は、炉址の東側にまとまって出土（1）した以外は、全体にまばらであった。いずれも床面よりやや浮いた状態を呈していた。

出土遺物〔第135図〕

壺の破片が主で、木葉痕のみられるものもあつた。



第134図　010号住居跡実測図



第135図　010号住居跡出土遺物実測図

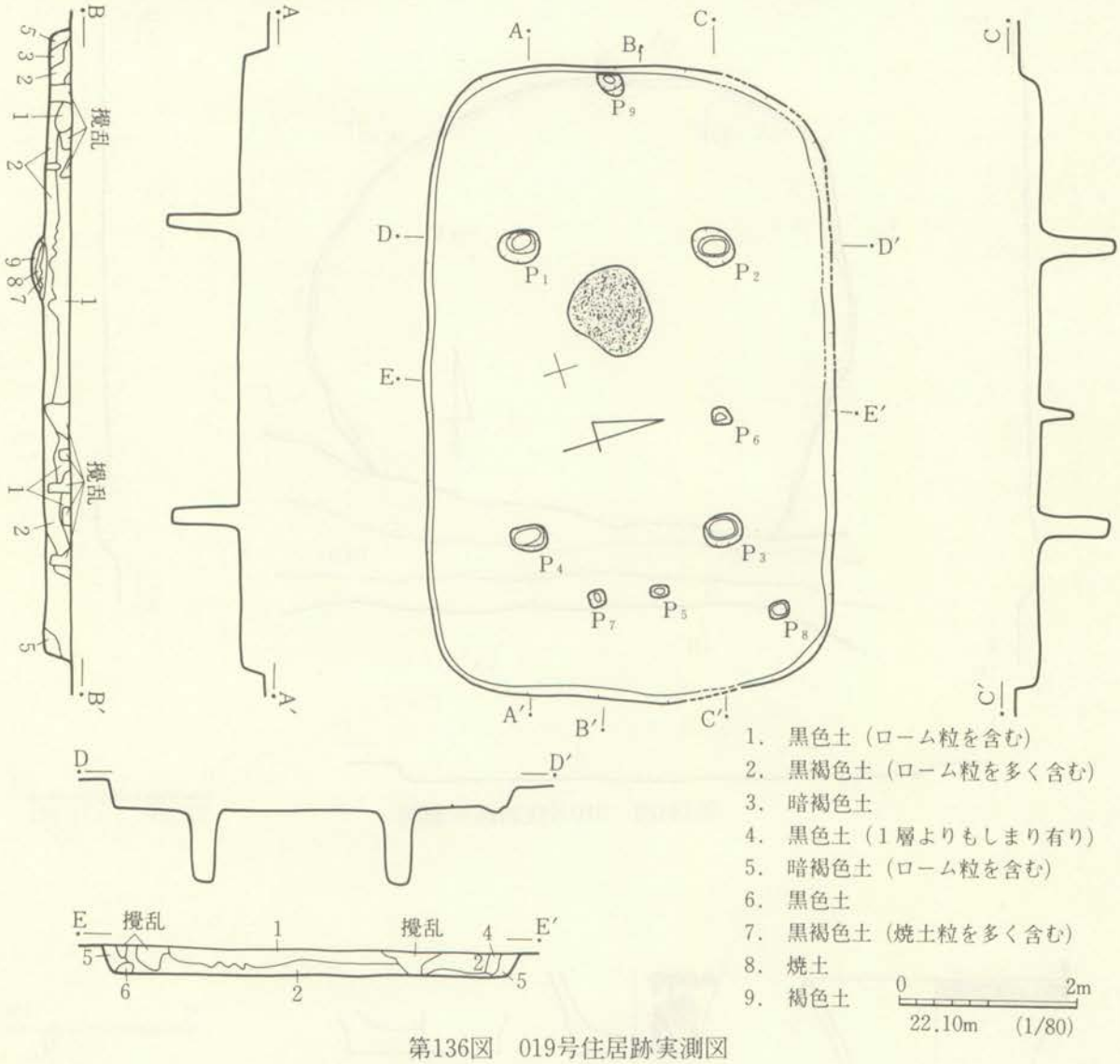
019号住居跡〔第136・137図・図版64－２〕

010号住居跡の西方約30m に位置する。

覆土は、いずれも自然堆積土で６層に分けられた。黒色土を主体とし、ローム粒を含む層が目立った。

平面形は、長径約7.0m、短径約4.7m の隅丸長方形を呈する。

壁の遺存状態は、北側壁が部分的に攪乱を受けているが、全体に良好といえる。掘り込みは約25cmで、垂直に近い立ち上がりを呈する。



第136図　019号住居跡実測図

床面は、全体にほぼ平坦で、中央付近が堅く踏み固められている。

ピットは、9か所（P 1～P 9）に検出した。柱穴はP 1～P 4で、掘り方もしっかりしており、位置関係も規則性がある。P 5・P 6は、掘り込みが約40cmと比較的深く、掘り方もしっかりしている。本跡に伴うピットであろうか。P 7～P 9は、掘り込みが浅く、底面も不規則である。おそらく木根等による攪乱壙と考える。

壁溝は検出しなかった。

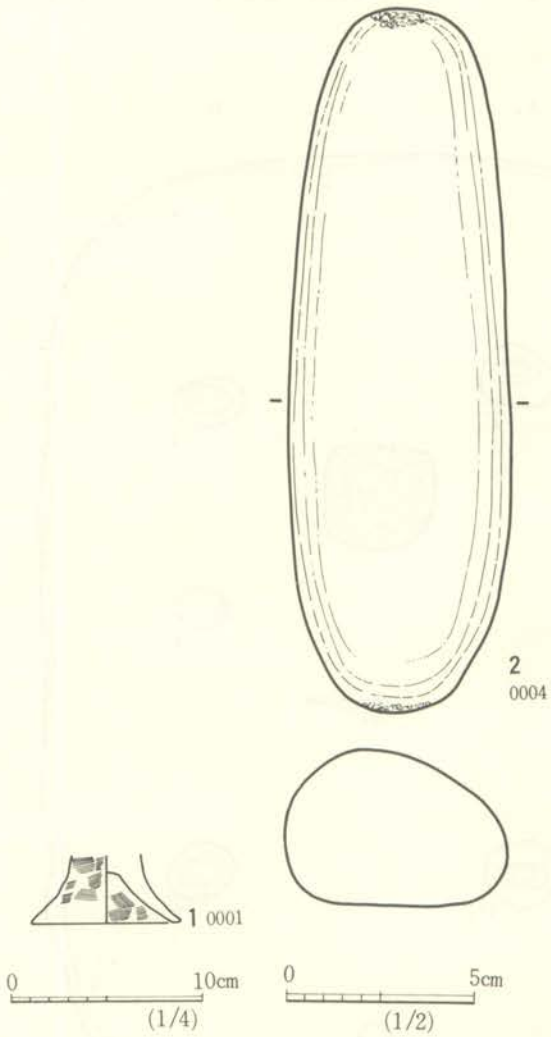
炉址は、中央やや西寄りに位置する。長径約100cm、短径約80cmのやや不整な長円形を呈する。底面に暗褐色土を貼って火床としており、よく焼けていた。

遺物の出土は、約15点と少なく、大半は床面より出土している。

出土遺物〔第137図〕

土器片では、甕や壺が主であったが、いずれも小破片であり、実測可能なものは高坏1点のみで

ある。２は敲石である。両端に打痕をよく遺している。石材は砂岩。縄文時代の所産と思われる。おそらく再利用したものであろう。



第137図　019号住居跡出土遺物実測図

022号住居跡〔第138図・図版65―１〕

010号住居跡の南方約34m に位置する。

覆土は、暗褐色土の単一層である。

平面形は、長径約10.0m、短径約6.5m の隅丸長方形を呈する。

壁は、北側壁が一部攪乱を受けている以外は、比較的良好な遺存状態を呈する。掘り込みは約40cm で、立ち上がりは垂直に近い。

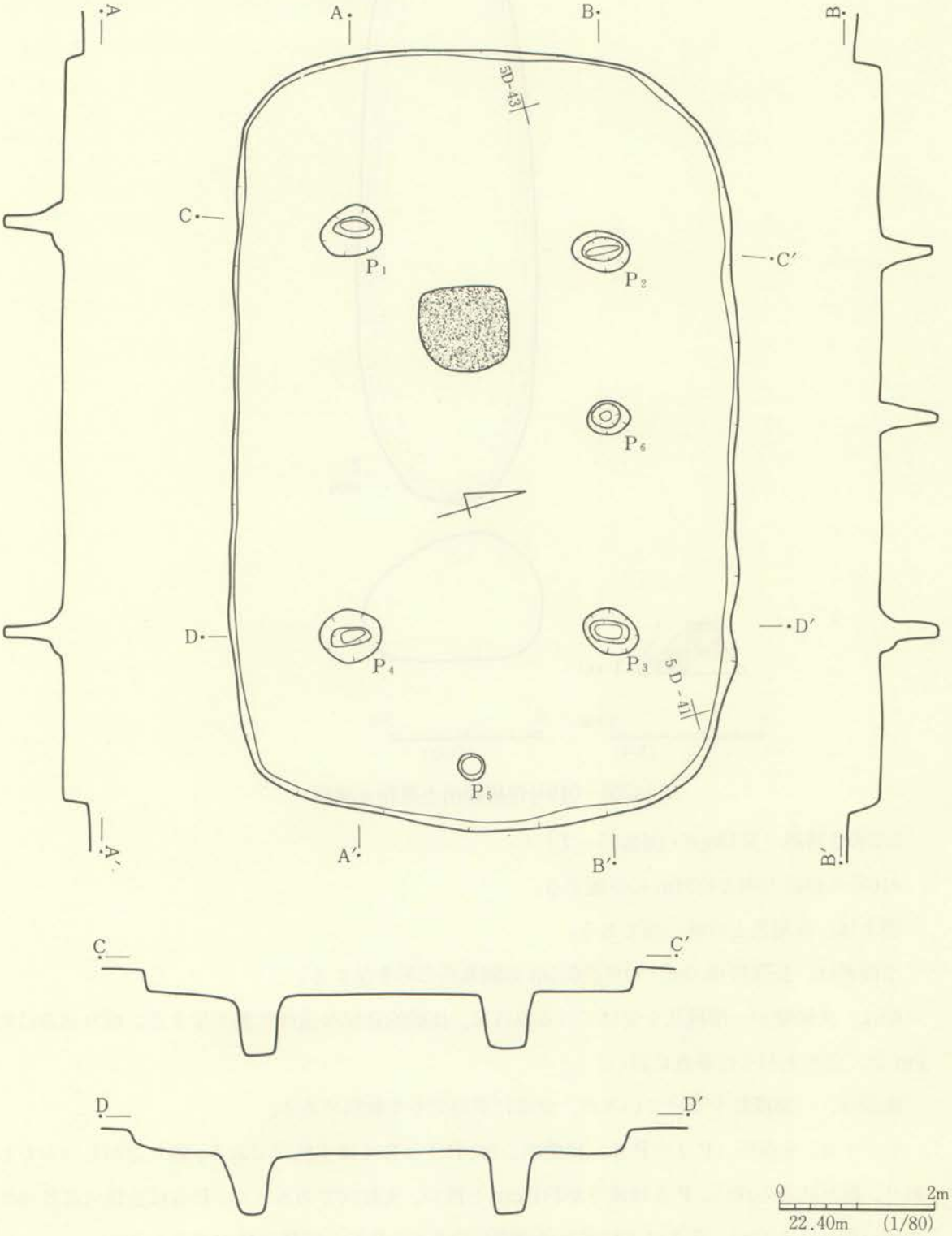
床面は、一部攪乱を受けているが、全体に平坦でやや軟弱である。

ピットは、６か所（Ｐ１～Ｐ６）に検出した。Ｐ１～Ｐ４は主柱穴である。掘り方がしっかりしており、掘り込みも深い。Ｐ５は深さが約15cm と浅い。支柱穴であろうか。Ｐ６は主柱穴に比べてやや細い掘り込みだが、深さは主柱穴とほぼ同じである。Ｐ５と同様支柱穴であろうか。

壁溝はない。

炉址は、中央やや西寄りに位置する。南北径約120cm、東西径約100cm で、やや不整形だが方形を呈する。掘り込みは約15cm と浅く、焼土粒もそれ程多くなかったが、底面はよく焼けていた。

遺物は、本跡の南側付近より出土しているが、約15点と少ない。大半は床面或いは床面よりやや浮いた状態を呈していた。



第138図　022号住居跡実測図

026号住居跡〔第139・140図・図版65―２〕

019号住居跡の南西約18m に位置する。

覆土は、６層に分けられた。暗褐色土を主体とする覆土で、第２・３層中には焼土粒が含まれる。いずれも自然堆積土と考える。

平面形は、長径約5.5m、短径約4.5m の隅丸長方形を呈する。

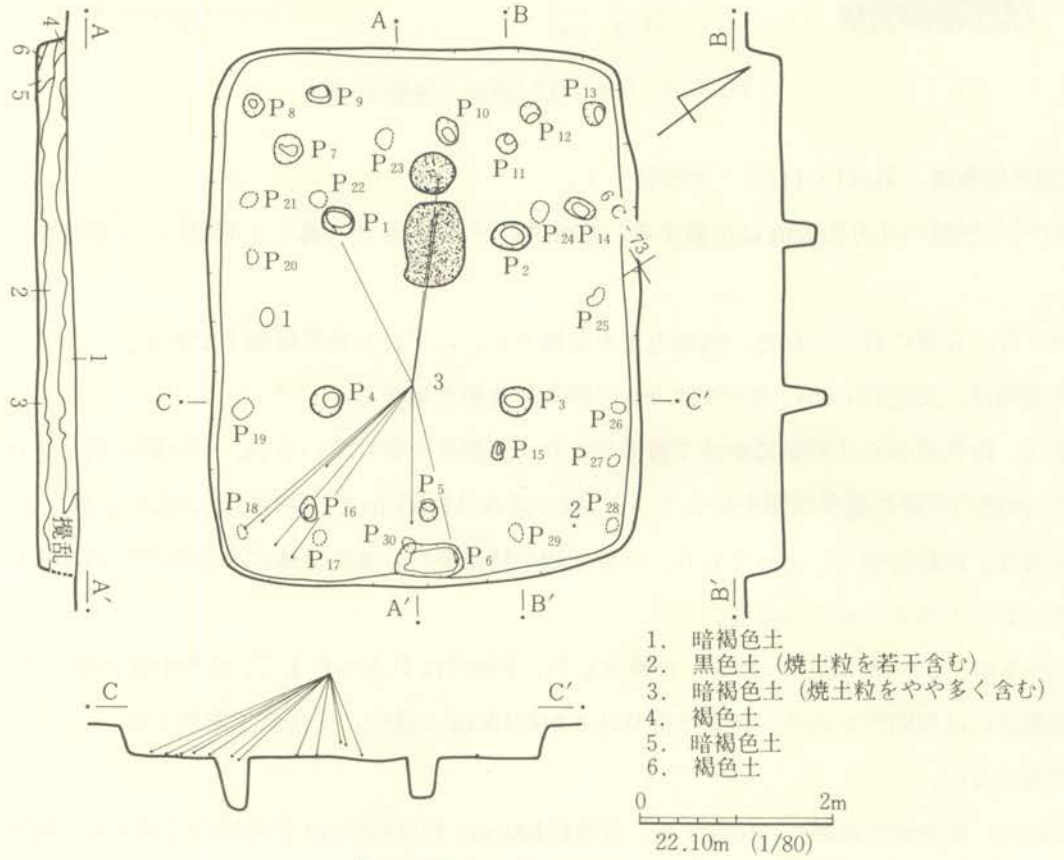
壁は、南側壁が一部攪乱を受けている他は比較的良好な遺存状態を呈し、掘り込みも30～40cm と深い。立ち上がりは垂直に近い。

床面は、全体に堅くしまっているが、凹凸が著しい。

ピットは、30か所（Ｐ１～P30）に検出した。主柱穴は、Ｐ１～Ｐ４である。掘り込みは30～40cm とさほど深くなく、やや雑な掘り方を呈する。Ｐ５は、壁側から本住居跡の中央方向へ斜めに掘り込まれており、掘り込みは約20cm である。位置及び形状により、出入口に関連した施設の可能性が考えられる。Ｐ６は、浅い窪み程度の掘り込みであるが、東側壁中央に接していることや形状より、貯蔵穴と考えるのが妥当であろう。Ｐ７～P30は、掘り込みが10～30cm と比較的浅く、径も15～20cm と小さい。各々の位置関係にやや不規則な面もあるが、比較的各壁沿いに並んだ状態を呈しており、壁柱穴の可能性が高い。なお、P17～P30は、床面を10cm 程掘り下げた段階で確認できたものである。

壁溝は、一部（北側壁付近）それらしき痕跡を検出したが、明確に確認することはできなかった。

炉址は、中央寄りに大・小２か所検出したが新旧関係を確認することはできなかった。大きい方



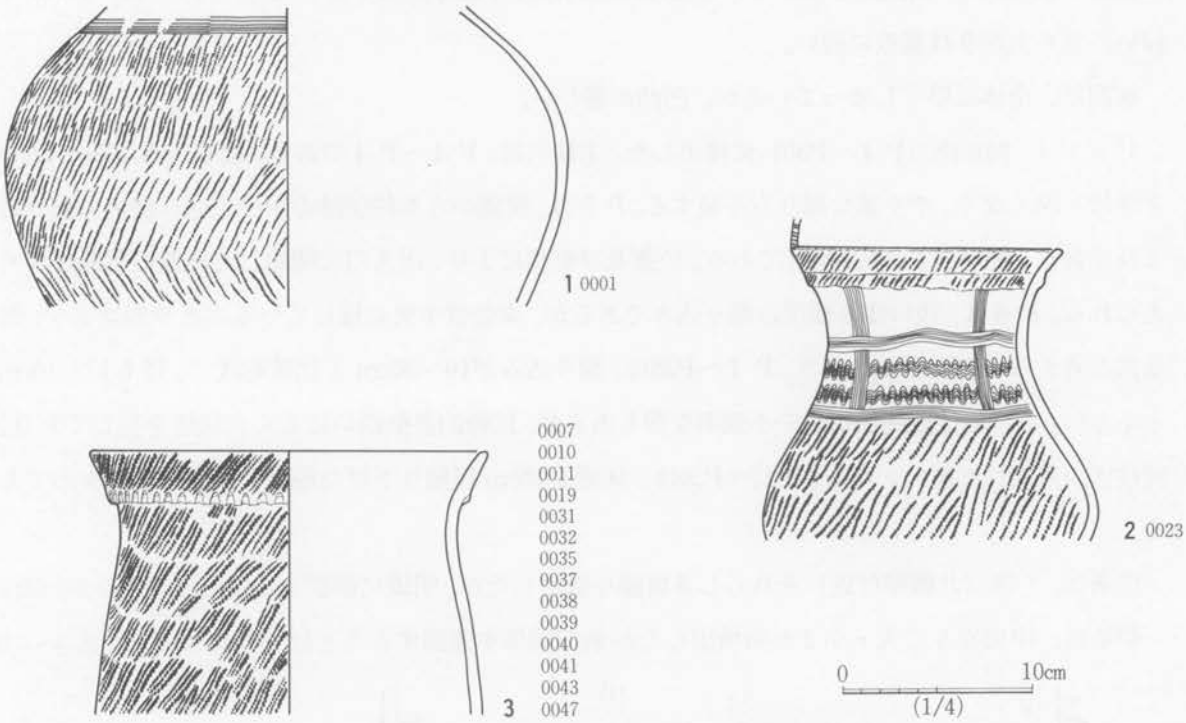
第139図　026号住居跡実測図

は、長径約80cm、短径約60cmのやや丸みをもつ長方形を呈する。小さい方は、直径約40cmの円形を呈する。共に焼土の堆積はほとんどなく、掘り込みも約5cmと浅い。底面はよく焼けている。

遺物は、ほぼ全体から出土しており、大半は第2層中に含まれていた。

出土遺物〔第140図、図版67－3〕

壺・甕の破片が多く出土し、3は約15点が接合した。



第140図　026号住居跡出土遺物実測図

028号住居跡〔第141・142図・図版66－1〕

010号住居跡の北方約22mに位置する。北西付近が、029号址（溝）と重複し、一部削平されている。

覆土は、6層に分けられた。暗褐色土を主体とし、いずれも自然堆積土である。

平面形は、長径約6.8m、短径約4.9mの隅丸長方形を呈する。

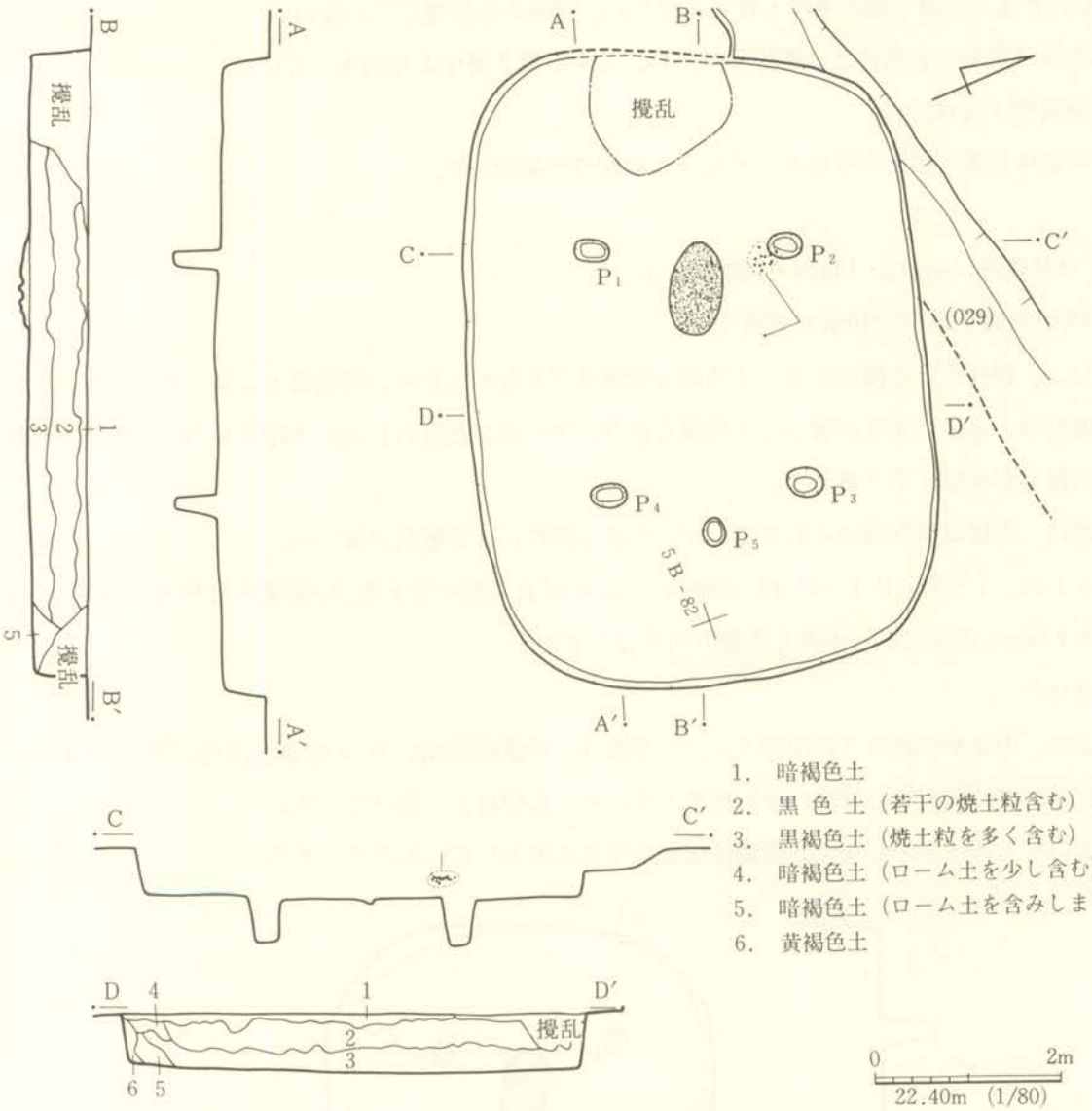
壁は、西側壁から北側壁にかけて溝等により一部攪乱を受けているが、幸い溝の掘り込みが浅いため、比較的良好な遺存状態を呈している。掘り込みは約50cmで、垂直に近い立ち上がりを呈する。

床面は、比較的堅くしまっており、炉址周辺が特に堅い。また全体に小さな凹凸がみられ、壁周辺部に若干の高まりがみられる。

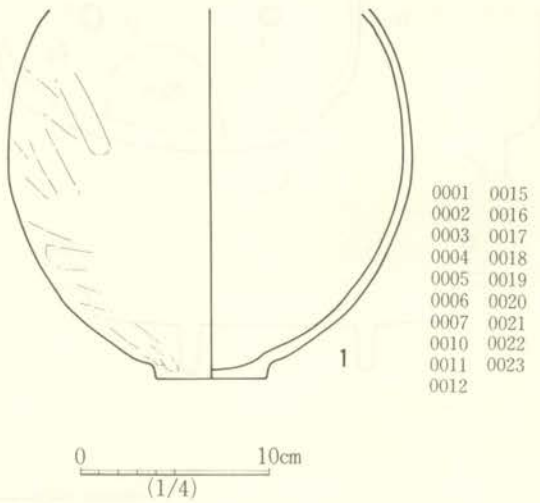
ピットは、5か所（P 1～P 5）に検出した。主柱穴はP 1～P 4で、やや中央に偏しているが、位置関係には規則性がある。P 5は掘り込みが約10cmと浅い。支柱穴であろうか。

壁溝はない。

炉址は、中央やや西寄りに位置する。長径約100cm、短径約60cmの長円形を呈する。掘り込みは



第141図　028号住居跡実測図



第142図　028号住居跡出土遺物実測図

約10cm と浅く、焼土粒の堆積もほとんどない。底面も余り焼けていない。

遺物は、炉址の北側付近に集中しており、大半が第２層中より出土している。

出土遺物〔第142図〕

壺の破片が多く出土しており、そのうち約20点が接合した。

031号住居跡〔第143・144図・図版66―２〕

001号住居跡の北側約10m に位置する。

覆土は、耕作による攪乱が著しく正確な観察はできなかったが、暗褐色土の単一層であろう。

平面形は、全体に攪乱が著しく不明瞭な部分が多いが、長径約4.7m、短径約4.0m のやや不整形な隅丸長方形を呈すると考える。

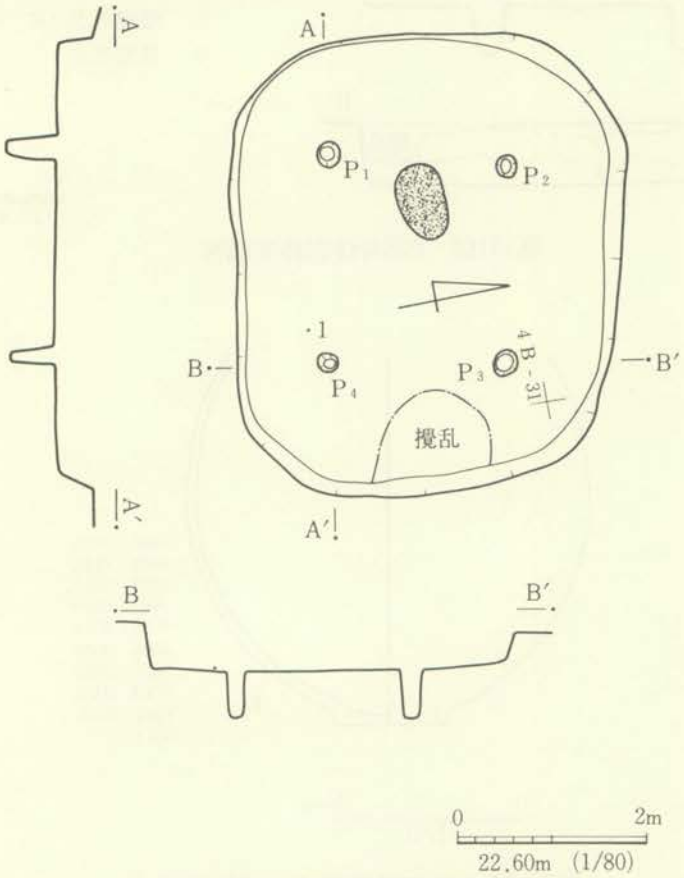
床面は、全体に踏み固められて堅いが、やはり耕作による攪乱が著しい。

ピットは、４か所（Ｐ１～Ｐ４）に検出した。いずれも柱穴である。位置関係に規則性があり、掘り込みも50cm 前後でしっかりした掘り方を呈している。

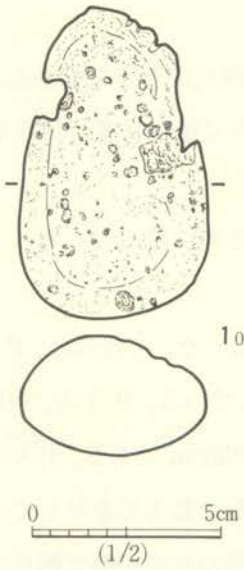
壁溝はない。

炉址は、中央やや西寄りに位置する。平面形は、長径約80cm、短径約50cm の長円形を呈する。掘り込みが浅く焼土粒の堆積はそれ程多くないが、底面はよく焼けている。

遺物の出土はほとんどなく、東側の床面より３点出土しているだけである。



第143図　031号住居跡実測図

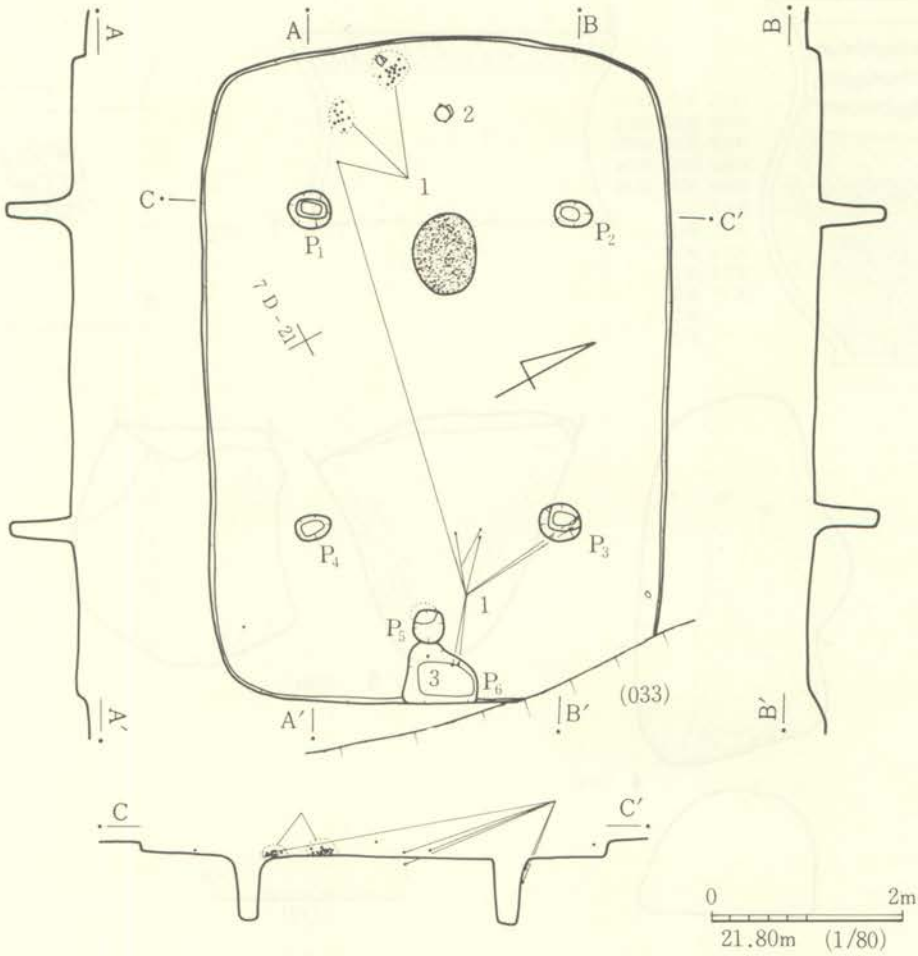


第144図　031号住居跡出土遺物実測図

035号住居跡〔第145・146図・図版67－１〕

026号住居跡の南西約30m に位置し、東側が033号址（溝）に一部切られている。

覆土は、耕作による攪乱が著しく、さらに本跡の掘り込みが浅いこともあって明確に把握するこ



第145図　035号住居跡実測図

とはできなかった。

平面形は長径約6.8m、短径約4.9mの隅丸長方形を呈する。

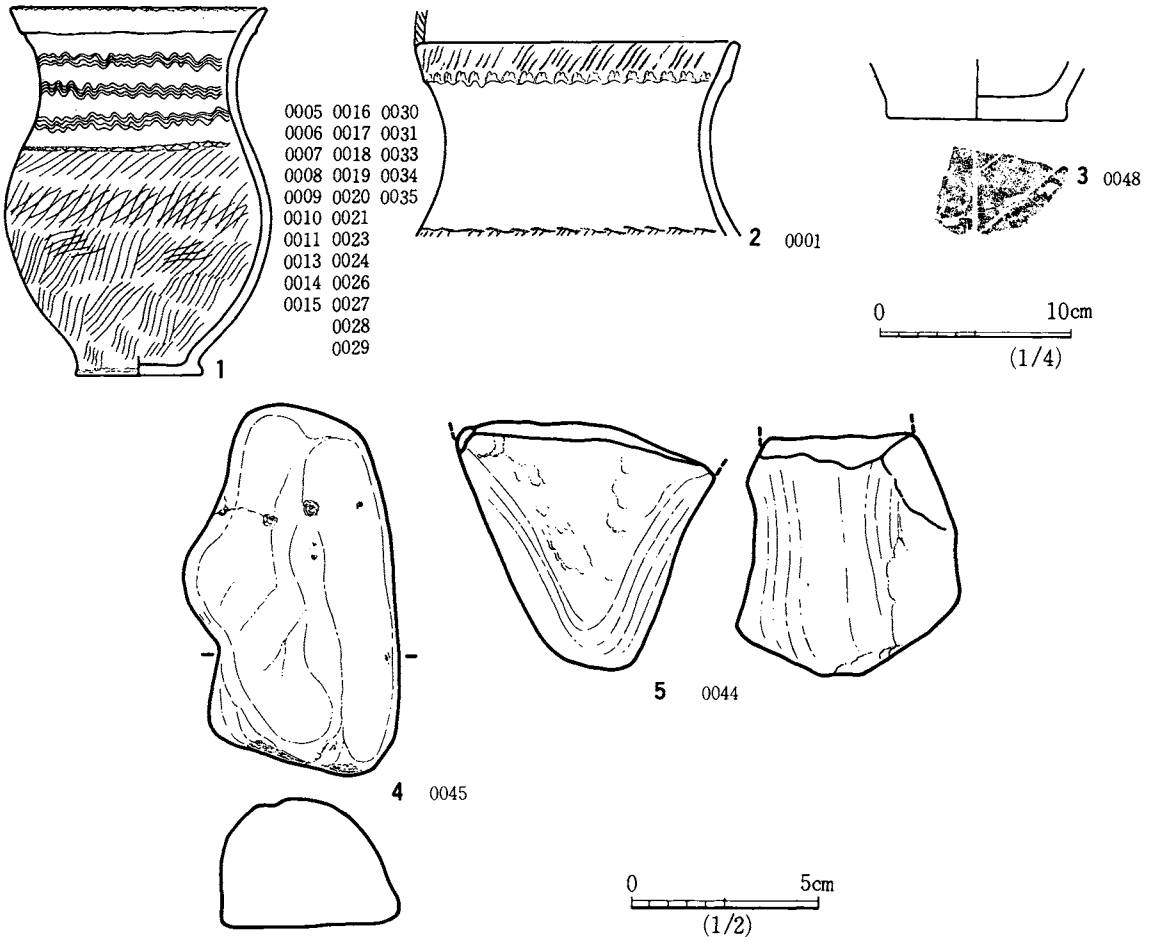
壁は、耕作による攪乱が及んでいるわりに遺存状態が良好である。掘り込みは約15cmと浅い。立ち上がりは、ほぼ垂直である。

床面は、耕作による攪乱が多くみられるが、踏み固められて堅くしまっている部分が多く遺存しており、全体に堅緻であったと考える。

ピットは、6か所（P 1～P 6）に検出した。主柱穴は、P 1～P 4である。掘り込みは、いずれも60cm前後と深く、掘り方もしっかりしている。P 5は、東側壁寄りに位置しており、壁側から中央方向斜めに掘り込まれている。深さは約50cmである。出入口に関連した施設であろうか。P 6は、東側壁に接して掘り込まれており、不整形な長方形を呈している。掘り込みは浅く、内より若干の土器片とともに炭化材が出土した。平面形がやや不整で掘り込みも浅いが、その位置から貯蔵穴と考えるのが妥当であろう。

壁溝はない。

炉址は、中央やや西寄りに位置する。長径約80cm、短径約70cmのやや不整な円形を呈する。掘り込みは約15cmと浅い。



第146図　035号住居跡出土遺物実測図

遺物は、他の住居跡に比して多く、西側壁寄りと東側壁寄りの２か所に集中しており、大半が床面あるいはやや浮いた状態で出土している。

出土遺物〔第146図、図版67－４〕

壺の破片が多量に出土し、うち３個体が実測復原できた。土器以外では、石器が２点出土している。共に縄文時代のもので、再利用品である。４は敲石であるが、打痕はほとんど認められない。石材は砂岩。５は石皿を再利用した砥石である。側面はよく研摩されている。石材は砂岩。

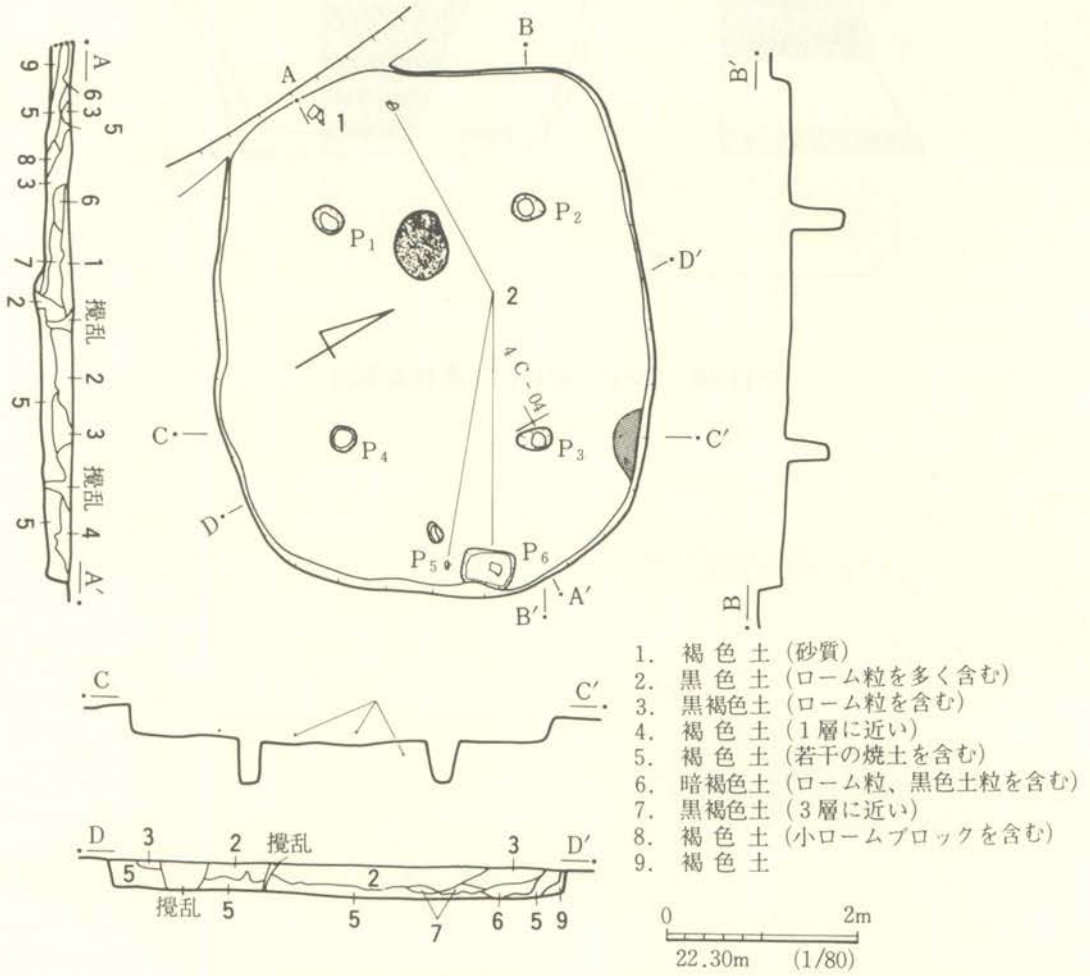
038号住居跡〔第147・148図・図版67－２〕

001号住居跡の南側約10m に位置する。覆土は、全体に耕作による攪乱が及んでおり、明瞭な堆積状態を把握することができなかったが、９層に分けることができた。上層はやや不自然な堆積状態を呈しているが、いずれも自然堆積土と考える。

平面形は、長径約5.5m、短径約4.5m の隅丸長方形を呈する。

壁は、南側壁が部分的に攪乱を受け遺存状態がよくないが、全体には比較的良好な遺存状態といえる。掘り込みは30～40cm あり、立ち上がりは垂直に近い。

床面は、部分的に堅いか所もあるが、全体にやや軟弱で、凹凸が著しい。



第147図　038号住居跡実測図

ピットは、6か所（P 1～P 6）に検出した。主柱穴はP 1～P 4である。掘り方はやや不整形を呈するが、掘り込みは50～60cmと深い。P 5は、東側壁中央寄りに位置しており、支柱穴と考えられるが、平面形や掘り方が不整形で掘り込みも約10cmと浅い。P 6は、東側壁中央やや北寄りに接して掘り込まれており、その位置と形状から貯蔵穴と考える。平面形は、長径約55cm、短径約35cmの長方形を呈する。底面はほぼ平坦で、深さは約20cmである。

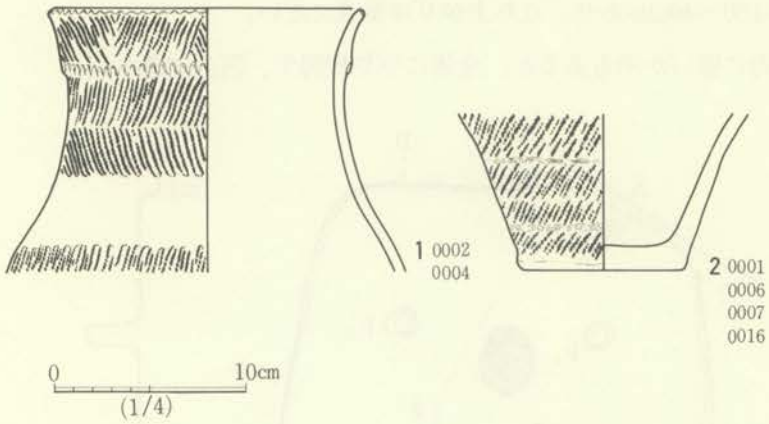
壁溝はない。

炉址は、中央やや西寄りに位置する。平面形は、長径約70cm、短径約50cmの長円形を呈する。掘り込みは約10cmと浅い。

遺物は、P 6内やその周辺に大半が集中しており、一部西側壁中央寄りから出土している。ほとんどが床面より浮いた状態を呈していた。

出土遺物〔第148図〕

壺と甕の破片が出土しており、うち2個体を図示した。



第148図　038号住居跡出土遺物実測図

土器一覧表

番　　号	器　種	内　　容
001号住居跡		
1	壺	底部の一部のみ遺存。斜縄文が施されている。
010号住居跡		
1	壺	口縁部約¼、頸部約⅓遺存。折り返し口縁に単節斜縄文、肩部にも単節斜縄文。
2	壺	底部付近⅘遺存、木葉痕が明瞭。
3	壺	底部約⅓遺存、木葉痕が明瞭。
019号住居跡		
1	高　　坏	脚部のみ遺存。
026号住居跡		
1	壺	胴部のみ約¼遺存。肩部に平行櫛目文、胴部に付加条。
2	壺	口縁部から肩部にかけ約⅘遺存。口縁部に輪積み痕残し斜縄文を施す。頸部に平行櫛目文を格子状に、波状櫛目文を2条廻らす。肩部から下には斜縄文。
3	甕	折り返し口縁の下端に刻み目。器面全面に付加条。外面にススの付着が著しい。
028号住居跡		
1	壺	胴部から底部約⅓遺存。外面赤褐色、丁寧なヘラ磨き。
035号住居跡		
1	壺	口縁部約⅔、胴部約¼欠損。折り返し口縁の口唇部に刻み目。頸部に3条の波状櫛目文が廻る。肩部に絡状体の圧痕を廻らし、胴部には、平行櫛目文を斜状に施す。底部には木葉痕が残る。
2	壺	口縁部を若干欠損。折り返し口縁に、口唇部から無節縄文を、下端に刻み目を施す。肩部には絡条体の圧痕が廻る。
3	壺（？）	底部約⅓遺存。木葉痕を残す。
038号住居跡		
1	壺	口縁部から肩まで約¼遺存。折り返し口縁に斜縄文。口唇部と口縁部下端に刻み目。頸部に一部無文帯を残し、ほぼ全面に羽状縄文か？
2	甕	胴下半部から底部まで約¼遺存。付加条を全面に施す。

遺構出土の土器片〔第149・150図・図版68・69〕

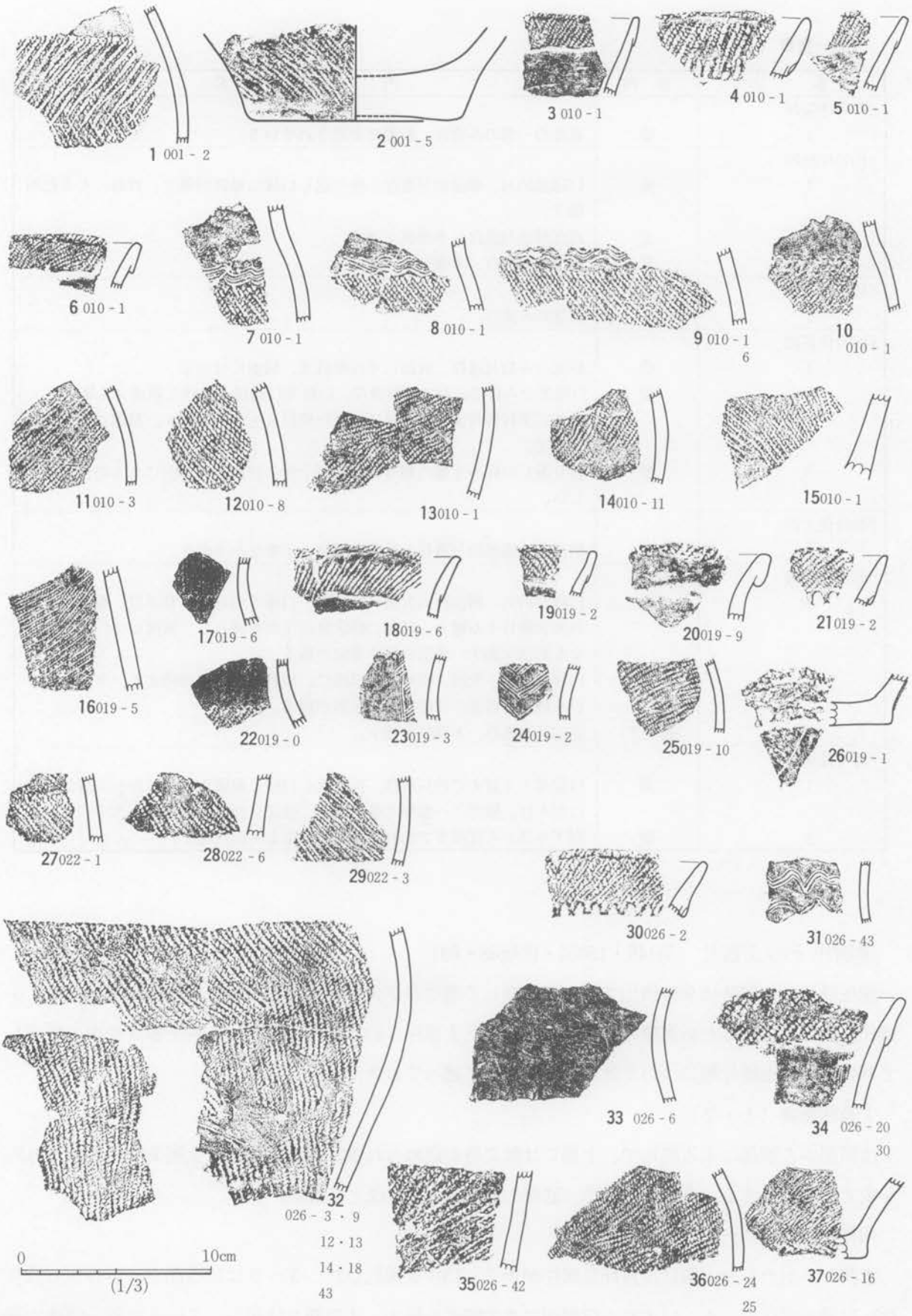
弥生時代の住居跡は9軒検出されたが、概して遺物量が少なかった。しかし、採択に関しては、小破片を除外しているため実際の出土量は図示した土器片の約3倍となろう。一括土器は表中で記述しておいたが、土器片類についてはここでまとめて述べておきたい。

1号住居跡（1・2）

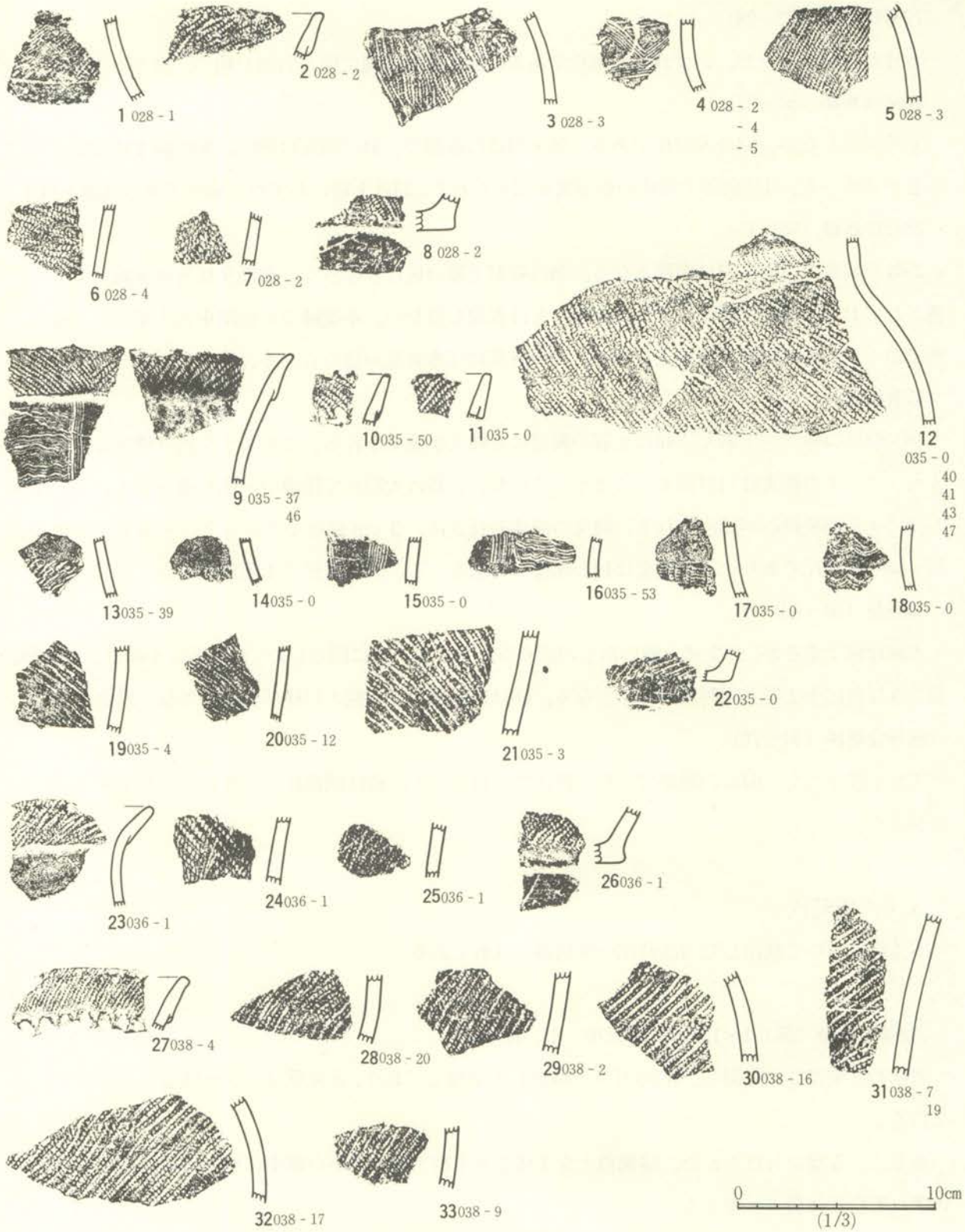
1は頸部から胴部に至る破片で、上部には無文帯が認められる。縄文は2回以上施文しており、方向を変えて羽状とする。2は底部片で、底部の器厚は2 cmほどである。

10号住居跡（3～15）

本跡から出土した土器には良好な破片が多く、13片を採択した。3～6は口縁部で、いわゆる折り返し口縁の形状をとる。いずれも口唇部にまで縄文を施す。4の縄文は粗い。7～9は同一個体で無文帯の下端に櫛描文をもつ。15は底部に近い破片となろう。



第149図　弥生土器拓影図 (1)



第150図　弥生土器拓影図　(2)

19号住居跡（16～26）

18～21は口縁部で、21の折り返し部には明確な刻目を持つ。17・22～24は頸部であり、23・24には山形の櫛目文が描かれている。26は底部であり、わずかに木葉痕が認められる。

22号住居跡（27～29）

3片だけ図示したが、いずれも胴部片である。28の施文は縄文間の間隔が粗く、撚りもゆるい。

26号住居跡（30～37）

8片図示したが、32は大形片である。30・34は口縁部で、34の縄文は粗い。30の縄文には撚りもどしをかけている。31は頸部で波状の櫛描文が認められる。33は下端にわずかの櫛状工具の痕跡を残す。

28号住居跡（38～45）

39は口縁部で、38と41は頸部となる。38は壺形土器の破片となろう。頸部文様帯は沈線によって区画されており、縄文は磨滅によりはっきりとは表現し得ない。本遺跡での南関東系土器の出土唯一の例である。41には山形の櫛描文をもつ。45の底部には木葉痕が認められる。

35号住居跡（46～59）

46～48は口縁部片であり、46は土器の裏面にも縄文が施文される。このような例は僅少となろう。また、ここでの縄文は口唇部までには至っていない。49は大形片で頸部の一端も遺存しており、櫛状工具による連続押圧が認められる。縄文の原体の長さは、3 cm前後で下から上へと施文している。50～55も頸部片であり、54の施文は49と同様な方法をとる。59は底部で木葉痕をもつ。

36号址（60～63）

本跡は塚であるが、弥生式土器の出土が認められたためここに図示した。わずかに4片ではあるが、他の住居跡出土土器と同時期のものとなる。60は口縁部片で、他の口縁部よりも外反の度合が強い。

38号住居跡（64～70）

7片を図示した。64は口縁部で円形の押圧文が目につく。他は胴部片でとりたてて説明することもなかろう。

3．古墳時代

本遺跡において検出した当該時期の住居跡は3軒である。

002号住居跡〔第151・152図、図版70－1、73－1〕

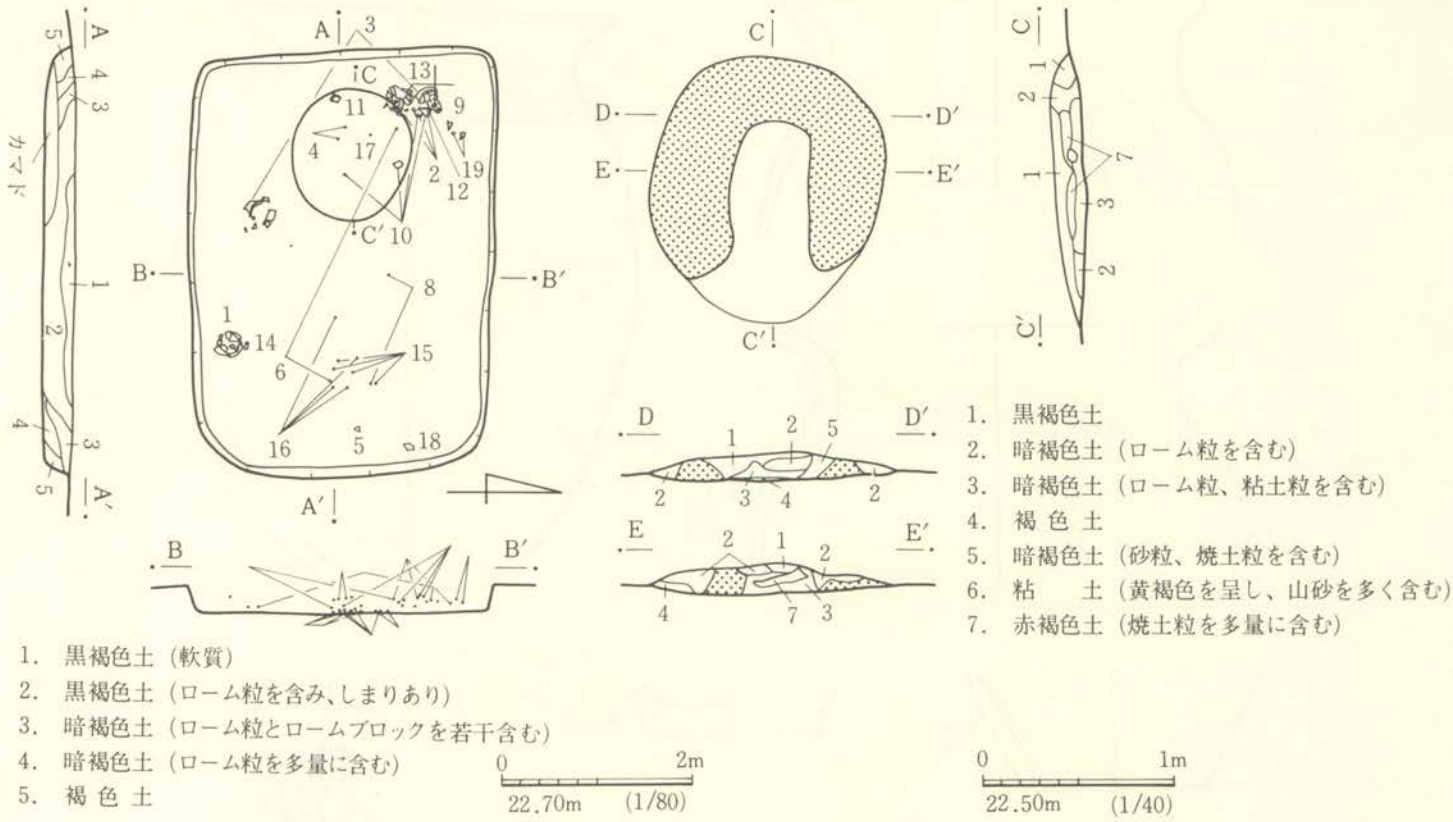
遺跡の北東寄りに位置し、013号址（土壙群）と重複しており、北東壁コーナー付近を一部削平されている。

覆土は、5層に分けられた。暗褐色土を主体とする覆土で、大半の層中にローム粒を含んでいる。いずれも自然体積土と考える。

平面形は、長径約4.5m、短径約3.2mの不整形な長方形を呈する。特に東側壁の両隅は、丸味をもっている。

壁は、部分的に攪乱を受けているが、比較的良好な遺存状態を呈する。掘り込みは約30cmで、立ち上りは垂直に近い。

床面は、カマドの前面付近が踏み固められて堅くしまっており、その他の部分も比較的堅くしまっ



第151図　002号住居跡実測図

ている。全体に平坦な面を呈している。

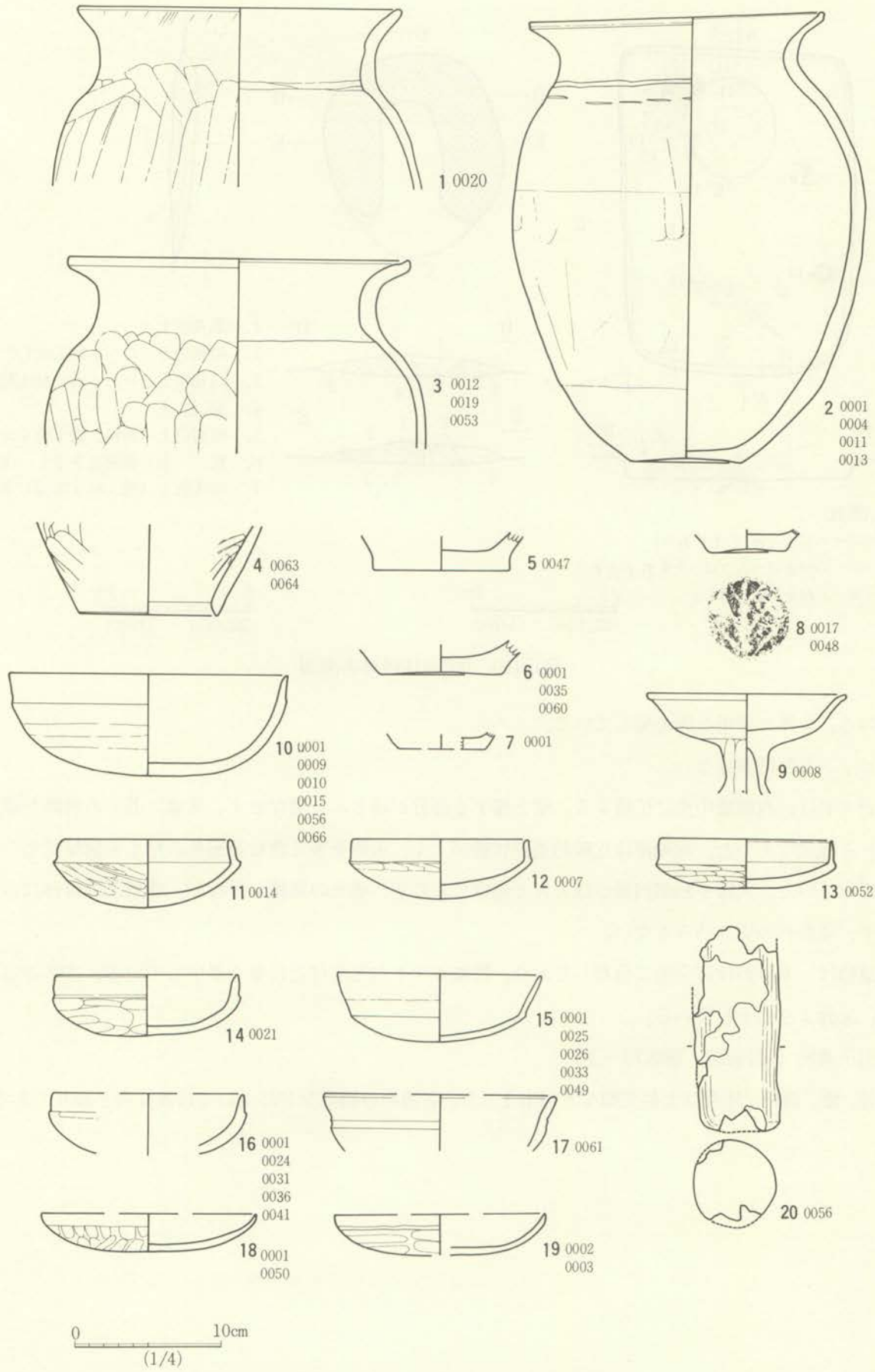
ピット及び壁溝はない。

カマドは、西側壁中央に位置する。壁と接する部分がほとんど遺存せず、床面に若干の痕跡が認められる程度であつた。両袖部は比較的遺存状態がよく、山砂を多く含む黄褐色の粘土を構築材として使用していた。火床や袖部内面はほとんど焼けておらず、焼土の堆積も少ない。煙道部の痕跡はみられず、壁外への切り込みもない。

遺物は、本跡のほぼ全面に分布しており、特にカマド右袖部付近に多く集中している。大半の遺物は、床面より出土している。

出土遺物〔第152図、図版73－１〕

甕、甑、高坏、坏及び土製支脚などが出土した。各遺物の特徴などについては表３のとおりである。



第152図　002号住居跡出土遺物実測図

表３　002号住居跡出土遺物一覧

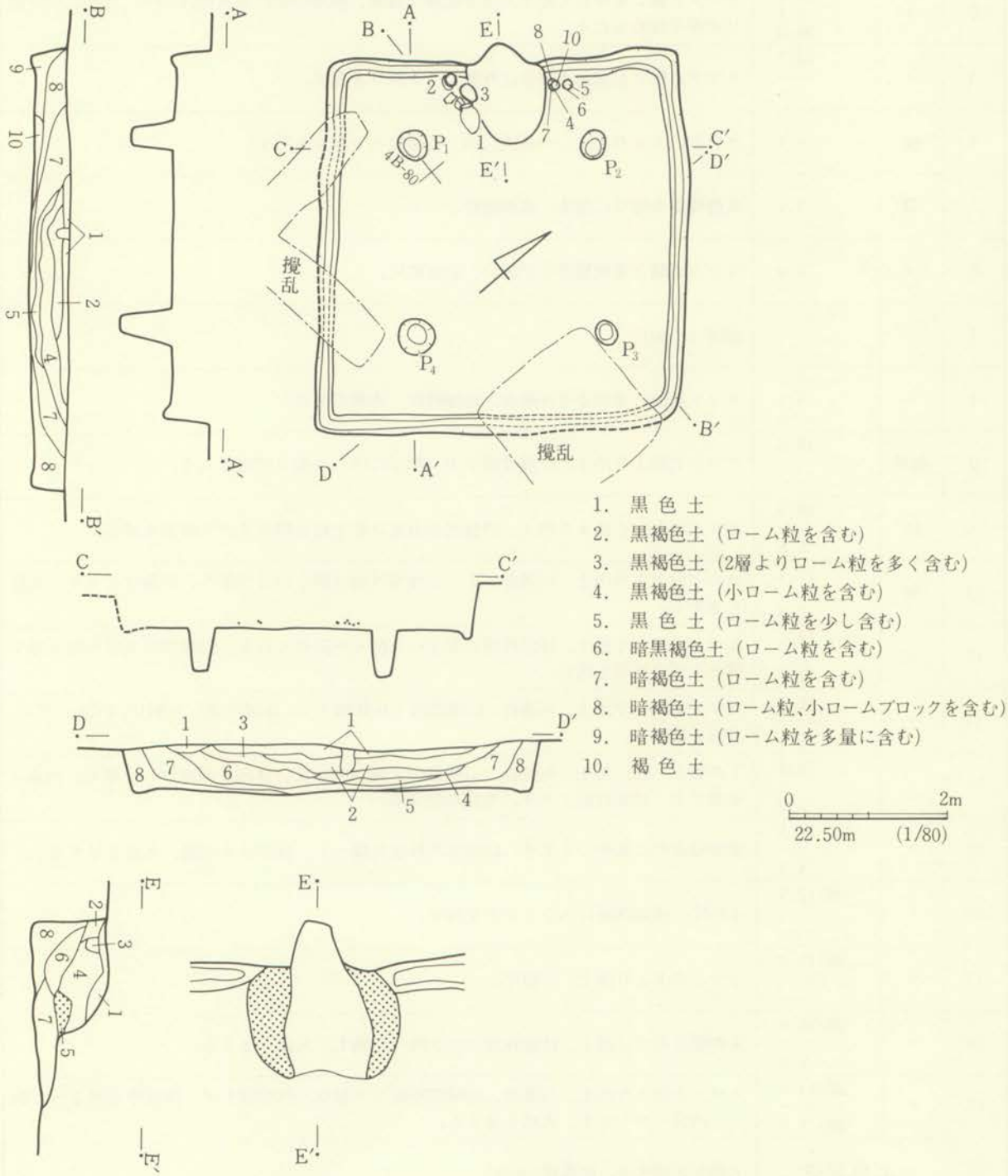
番号	器種	法量 cm	備考
1	甕	口 21.9 底 —— 高 ——	南側壁東寄りに集中して出土、外面に縦方向のヘラ削りを施す。
2	〃	20.2 7.1 30.0	カマド右脇に集中して出土、ほぼ完形に復原、胴部中位に最大径24.0cm、外面にヘラ削りが若干認められる。
3	〃	23.2 —— ——	カマド右脇と左前面が接合、外面にヘラ削りを施す。
4	甑	—— 9.4 ——	カマドの上より出土、一孔式、内・外面にヘラ削りを施す。
5	甕	—— 9.4 ——	東側壁中央寄りに出土、底部破片。
6	〃	—— 8.4 ——	カマド右脇と東側壁寄りが接合、底部破片。
7	〃	—— —— ——	底部の小破片
8	〃	—— 5.1 ——	カマド前面と東側寄りが接合、底部破片、木葉痕あり。
9	高坏	13.6 —— ——	カマド右脇より出土、坏部は横ナデ、脚部にはヘラ削りが施される。
10	鉢	18.9 —— 6.8	カマドの上と右脇より出土、円盤状の丸底に粘土紐を積み上げて体部を成形。
11	坏	11.4 —— 4.6	カマドの上より出土、口縁部はナデ、体部外面は細かいヘラ削り、内面はミガキ、丸底を呈する。
12	〃	12.1 —— 4.0	カマド右脇より出土、体部外面に若干ヘラ削りが認められる。円盤状の丸底に粘土紐を積み上げて体部を成形。
13	〃	11.8 —— 3.3	カマド右脇より出土、½遺存、口縁部内・外共横ナデ、体部外面ヘラ削り、内面ミガキ、丸底を呈する。
14	〃	12.4 —— 3.9	１の甕と一緒に出土、½遺存、口縁部内・外共横ナデ、体部外面粗いヘラ削り、内面上半部ナデ、底部付近ミガキ、丸底を呈する。
15	〃	14.1 —— 4.5	東側壁寄りに集中して出土、口縁部内外面共横ナデ、体部は不明瞭、丸底を呈する。
16	〃	(推)12.9 —— ——	小砂片、体部内面にヘラミガキを施す。
17	〃	(推)15.8 —— ——	カマドの上より出土、小破片。
18	〃	(推)14.6 —— 2.5	東側壁北寄りに出土、体部外面にヘラ削りを施す。丸底を呈する。
19	〃	(推)14.6 —— (推) 2.7	カマド右側より出土、¼遺存、口縁部外面ヘラ削り、内面横ナデ、体部外面雑なヘラ削り、内面ヘラミガキ、丸底を呈する。
20	土製支脚		上部を欠損する、断面径5.6cm

004号住居跡〔第153・154図、図版70－2、71・73－2〕

002号住居跡の南側約18m に位置する。

覆土は、10層に分けられた。いずれも自然堆積土で、レンズ状の堆積状態を呈する。

平面形は、一辺約4.5m の比較的整った方形を呈する。



第153図　004号住居跡実測図

壁は、数か所土壙状の落ち込みにより攪乱を受けているが、全体に良好な遺存状態を呈している。掘り込みは約60cm と深く、立ち上りは垂直に近い。

床面は、カマドの前面付近が比較的堅いが、それ以外の部分はやや軟弱である。全体に平坦である。

ピットは、４か所（Ｐ１～Ｐ４）に検出した。いずれも柱穴である。掘り込みは、50～60cm あり、整った掘り方を呈している。

壁溝は、カマド下を除き各壁沿いを巡っている。幅は約15cm、深さは10cm 弱でほぼ均一な掘り方である。

カマドは、北西側壁の中央に位置する。両袖部は若干遺存する程度で、火を受けた痕跡はほとんど認められない。壁外への切り込みは50cm 程である。

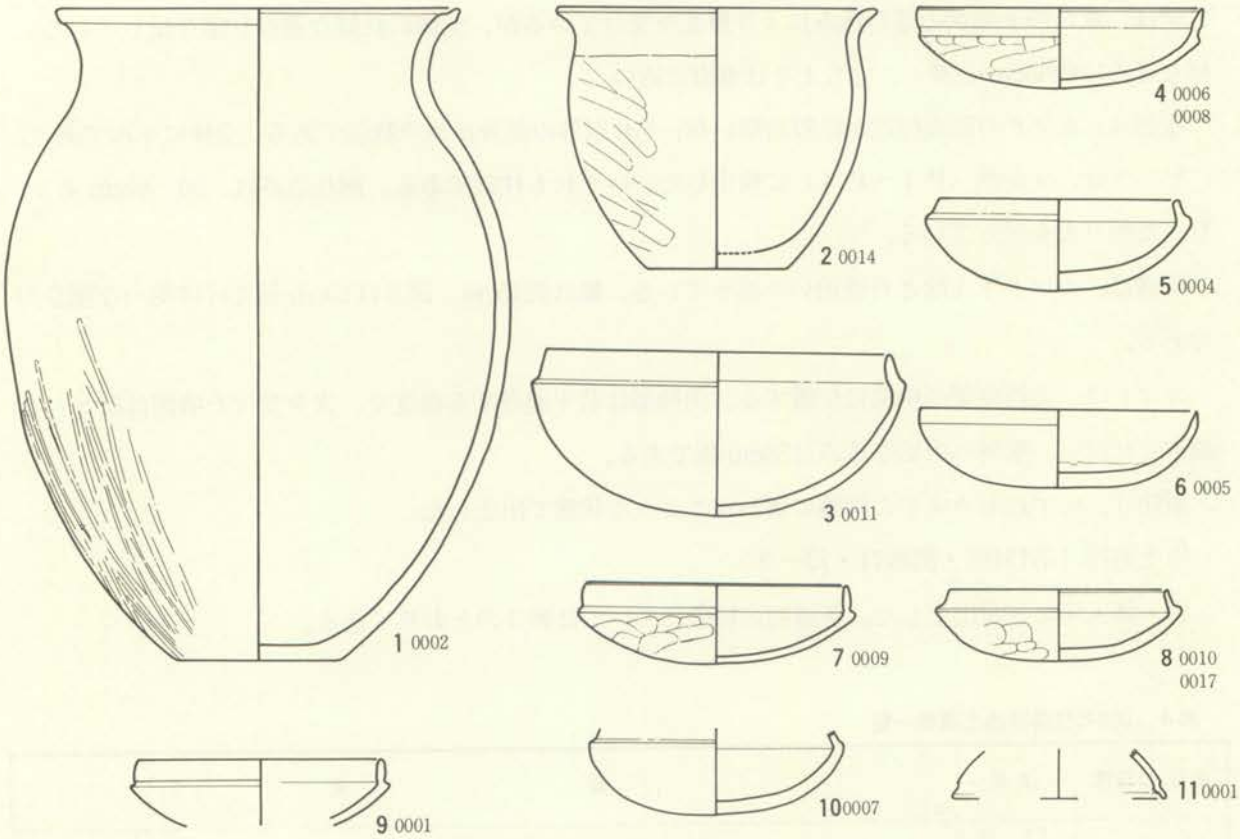
遺物は、いずれもカマドの両脇に置かれたような状態で出土した。

出土遺物〔第154図・図版71・73―２〕

甕・鉢・坏などが出土した。各遺物の特徴については表４のとおりである。

表４　004号住居跡出土遺物一覧

番号	器種	法量 cm	備考
1	甕	口 20.8 底 8.4 高 33.6	カマド左脇より出土、完形、胴部外面に細かいヘラ削りを施す。最大径銅部中位26.3cm
2	〃	16.9 7.4 13.8	カマド左脇より出土、口縁部と胴部を一部欠損、胴部外面にヘラ削りを施す。小形の甕。
3	鉢	18.1 ― 8.4	カマド左脇より出土、完形、口縁部内・外面共横ナデ、体部外面に不明瞭だがヘラ削りを施す。丸底を呈する。
4	坏	14.9 ― 4.2	カマド右脇より出土、一部欠損、口縁部内外面横ナデ、体部外面にヘラ削りを施す。丸底を呈する。
5	〃	12.6 ― 4.7	カマド右脇より出土、ほぼ完形、底部外面が全面剝落磨滅している。丸底を呈する。
6	〃	14.5 ― 4.0	カマド右脇より出土、完形、口縁部内面にスス付着、口縁部内面ハケナデ、平底に近い丸味を呈する。
7	〃	13.8 ― 4.0	カマド右脇より出土、一部欠損、体部外面にヘラナデを施す。丸底を呈する。
8	〃	11.4 ― 3.6	カマド右脇より出土、ほぼ完形、体部外面にヘラナデを施す。丸底を呈する。
9	〃	12.7 ― ―	口縁部の一部及び底部を欠損する。口縁部内・外面共横ナデ、体部外面若干ヘラ削りが認められる。
10	〃	― ― ―	カマド右脇より出土、口縁部を欠損、丸底を呈する。
11	蓋	(推)12.7 ― ―	坏受け部の痕跡あり、極少破片、須恵器。



第154図　004号住居跡出土遺物実測図

0　10cm
(1/4)

023号住居跡〔第155・156図、図版72・73—3〕

004号住居跡の南西約45mに位置する。東側コーナー付近が道路下になっていたため、その部分のみ掘り残し、次年度調査時に道路部分を拡張して完掘した。

覆土は、8層に分けられた。上層部分は、耕作等による攪乱が著しく、やや不明瞭なか所もあるが、各層とも自然堆積土と考える。

平面形は、一辺約8mの整った方形を呈する。

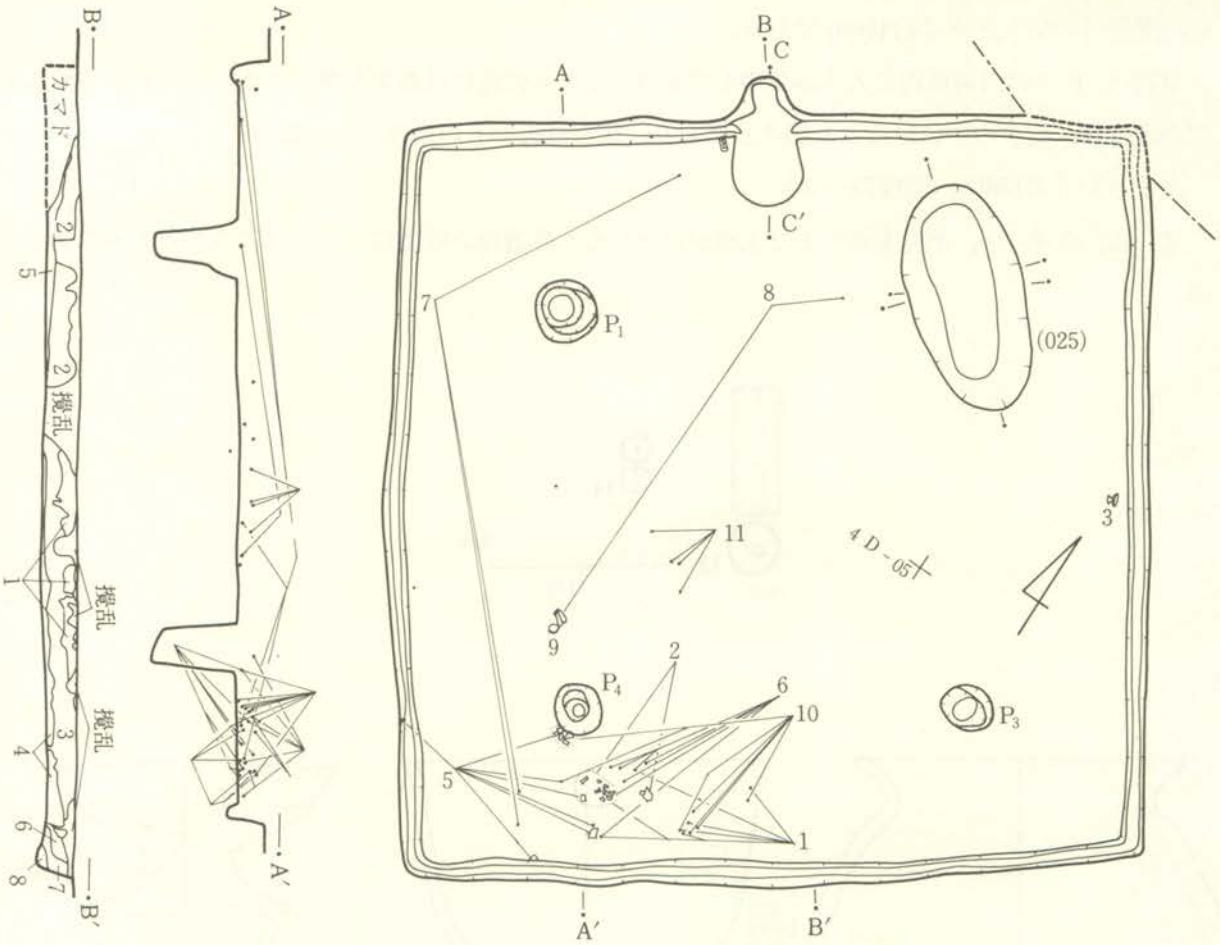
壁は、良好な遺存状態を呈し、掘り込みは約30cmである。立ち上がりは垂直に近い。

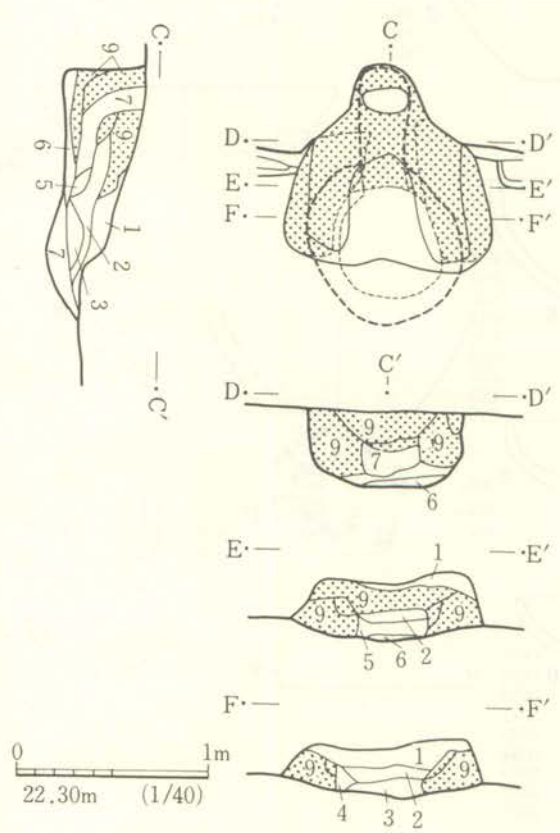
床面は、全体に平坦で、それ程堅くしまっていない。025号址（土壙）と重複している部分は、10～15cmの厚さに暗褐色土を貼って床としていた。

ピットは、4か所（P 1～P 4）に検出した。いずれも柱穴である。P 2は、025号址の覆土を掘り込んでいた。したがって、本図中では表現しなかった。各柱穴は、いずれも掘り込みが約90cmと深く、掘り方も整っている。

壁溝は、カマド下を除き各壁沿いを巡っている。幅は約15cm、深さは10cm弱でほぼ均一な掘り方である。

カマドは北西側壁の中央付近に位置する。全体に良好な遺存状態を呈し、両袖部や煙道部などの構築材が、旧状に近い状態で遺存していた。構築材には、黄色の山砂を含んだ粘土を使用している。火床は平坦で、よく焼けている。煙道部は、壁面に粘土を貼って構築しており、立ち上がりは垂直に近





1. 黒 色 土（ローム粒を含む）
2. 暗褐色土（粘土、山砂を含む）
3. 暗褐色土（若干の焼土粒を含む）
4. 褐 色 土（小ロームブロックを含む）
5. 褐 色 土（粘土、山砂を含む）
6. 褐 色 土（ロームブロックを多く含む）
7. 暗褐色土
8. 黄褐色土

0　2m
22.40m　(1/80)

1. 暗褐色土（粘土粒を含む）
2. 褐 色 土（粘土、焼土を含む）
3. 褐 色 土（焼土を多く含む）
4. 焼　　土
5. 褐 色 土（粘土、焼土を多く含む）
6. 暗褐色土（ローム塊を含む）
7. 黒 色 土（焼土を若干含む）
8. 焼　　土（ロームの赤変）
9. 粘　　土（黄色山砂を含む）

0　1m
22.30m　(1/40)

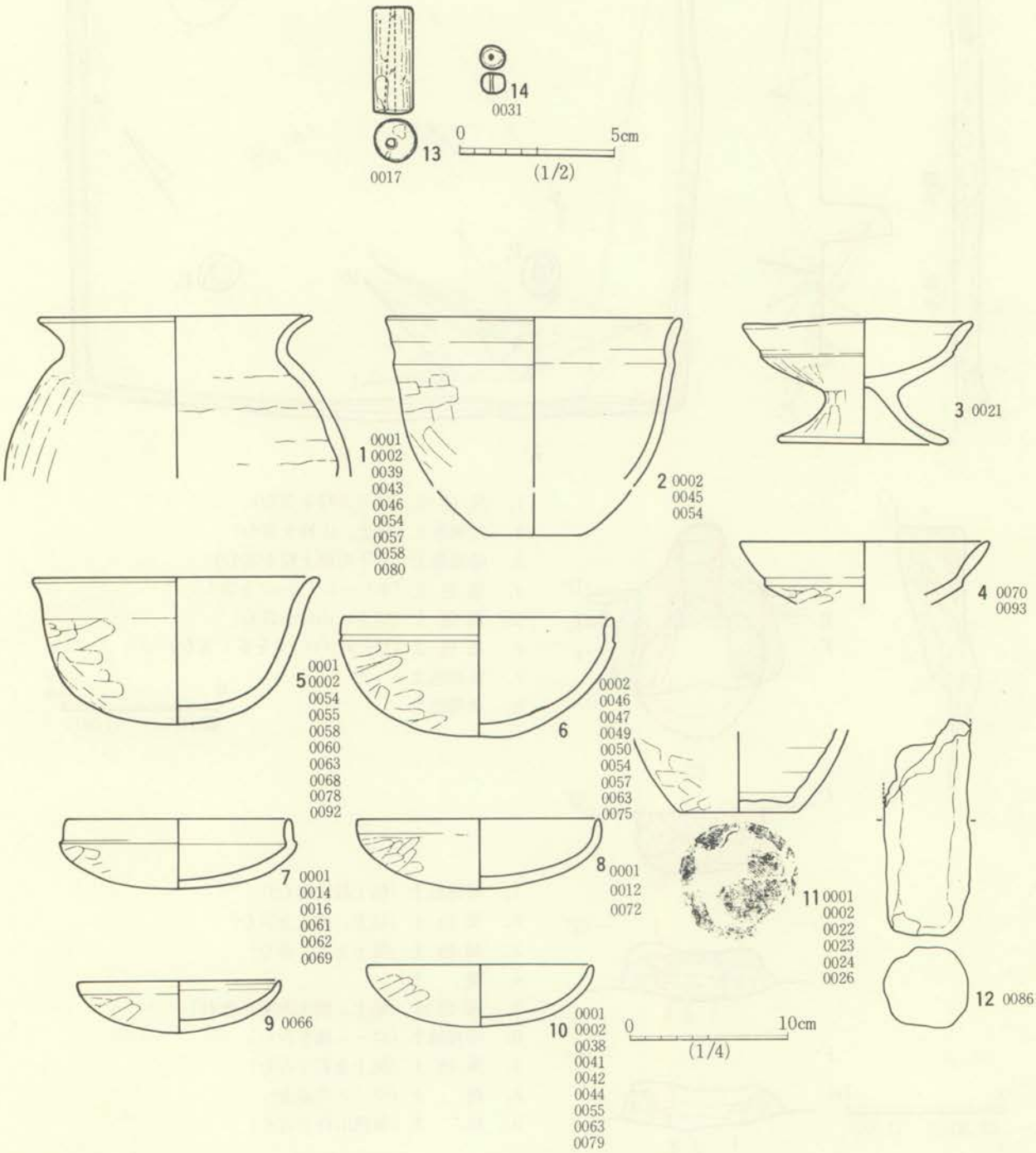
第155図　023号住居跡実測図

い。壁外への切り込みは約45cm である。

遺物は、P 4の南側周辺に大半が集中しており、カマド付近にはあまり多くなかった。また、ほとんどの遺物は、覆土の中位付近より出土しており、床面に近いものはほとんどない。

出土遺物〔第156図、図版73－3〕

甕、鉢、高坏、坏、土製支脚および玉類が出土した。各遺物の特徴については表5のとおりである。



第156図　023号住居跡出土遺物実測図

表５　023号住居跡出土遺物一覧

番号	器種	法量 cm	備考
1	甕	口 17.1 底 —— 高 ——	Ｐ４の東側付近に点散、胴部外面に不明瞭だがヘラ削りが認められる。胴部内面に接合痕が明瞭に認められる。
2	〃	18.6 6.0 ——	Ｐ４の東側より出土、底部破片は接合しなかったが、同一固体と判断した。胴部外面にヘラ削りが施される。
3	高坏	14.3 10.1 7.8	北東側壁中央寄りに出土、完形、坏部の体部外面から脚部にヘラ削りが施される。坏部はいびつ。
4	〃	14.7 —— ——	南西側壁中央寄りに出土、坏部のみ遺存、体部外面に若干ヘラ削りが認められる。
5	鉢	17.7 —— 9.2	南側コーナー付近に集中して出土、⅔遺存、体部外面にヘラ削りが施される。丸底を呈する。
6	〃	17.1 —— 7.4	Ｐ４の東側付近に集中して出土、体部外面にヘラ削りを施す。平底に近い丸底を呈する。
7	坏	13.9 —— 4.3	カマド左脇と南側コーナー付近が接合、体部外面に若干ヘラ削りが認められる。丸底を呈する。
8	〃	15.4 —— 4.4	カマド前面とＰ４の北西側とが接合、体部外面にヘラ削りを施す。丸底を呈する。
9	〃	12.7 —— 3.2	Ｐ４の北西側より出土、体部外面に若干ヘラ削りが認められる。丸底を呈する。
10	〃	14.2 —— 3.9	Ｐ４から南東側壁にかけて散乱して出土、体部外面に若干ヘラ削りが認められる。丸底を呈する。
11	〃	—— 7.4 ——	Ｐ４の北側より出土、底部に回転糸切り痕が認められる。
12	土製支脚		カマド左脇より出土、上部を欠損する。断面径5.4cm
13	管玉		覆土中より出土、一方向から穿孔、孔が中心よりずれる。石材は凝灰質頁岩、長さ3.3cm、径1.3cm、口径0.2～0.3cm。
14	土玉		覆土中より出土、極めて小形、両方向より穿孔、径0.8cm、厚さ0.6cm、口径0.1cm、焼成前穿孔。

4章　その他の遺構の調査

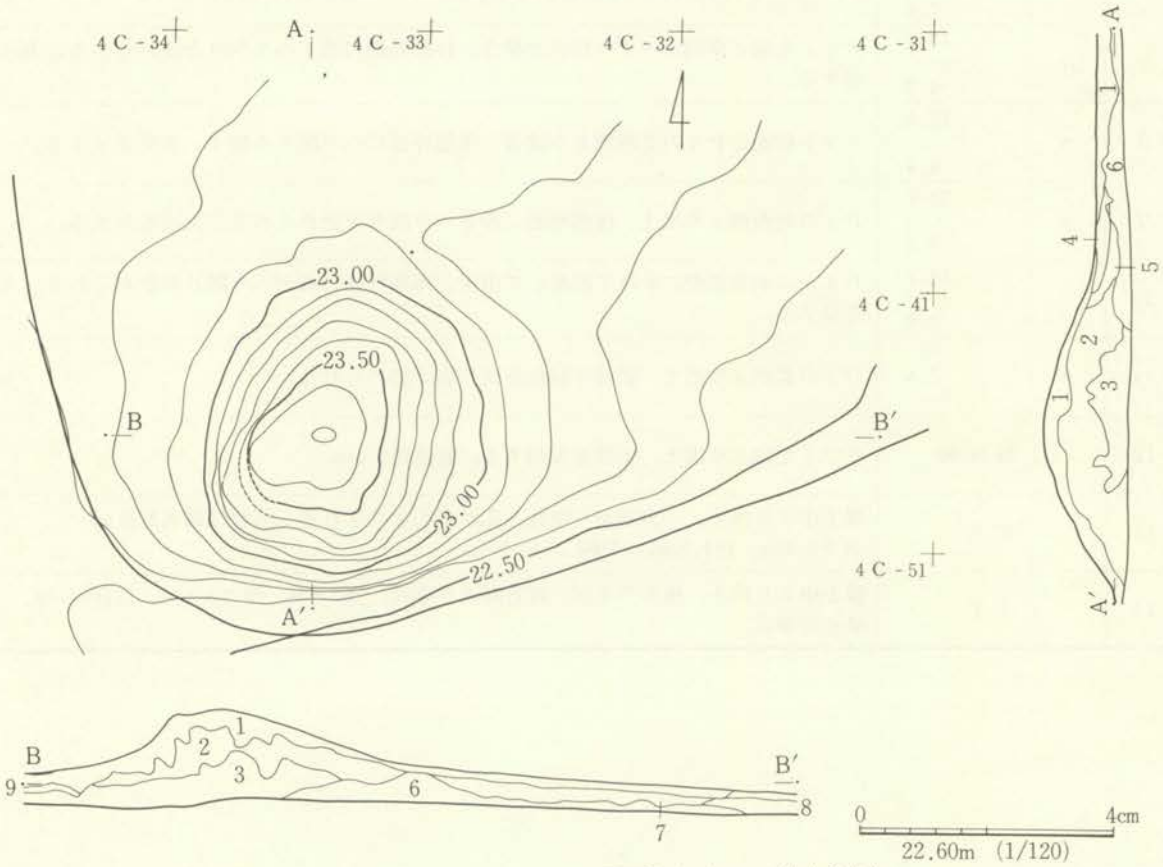
1．塚の調査

本遺跡において調査した塚は、1基である。

036号址〔第157・158図・図版74〕

本遺跡の東側寄り、038号住居跡の南側約13m に位置する。10cm 単位の等高線による地形測量の成果では、最頂部の標高23.78m、平坦部との比高差約0.8m を計測した。全体に削平等による攪乱が及んでおり、現況より旧状を推定することは不可能である。

土層観察の結果、第2・3層及び第9層が盛土と考えられる。第6層は旧表土層の可能性が高い。



1．表土
2．暗褐色土（軟質）
3．暗褐色土（ローム粒を含む）
4．暗褐色土（焼土・灰を含む）
5．暗褐色土（焼土粒を含む）
6．黒褐色土（ローム粒を含む）
7．褐色土（やや軟質）
8．褐色土（ややしまりあり）
9．暗褐色土

第157図　036号址実測図

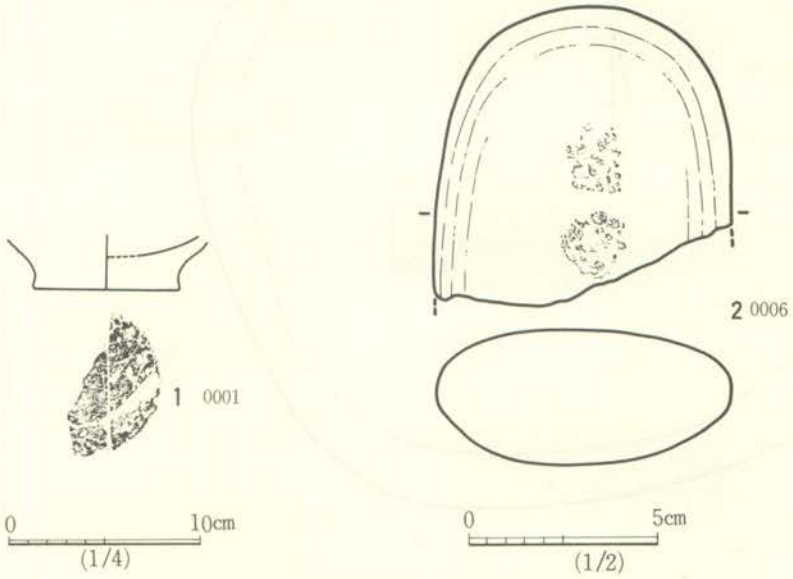
また、第４・５層は攪乱、第７・８層は盛土の流失土と考えられる。

なお、この塚は037号址（溝）と重複関係にあり、037号址の上に盛土をしていることから、本址が新しいと判断した。

遺物は、本址に伴うと思われるものは１点もなく、盛土中より土器片が若干と石器が１点出土している。

出土遺物〔第158図〕

１は底部に木葉痕がみられる。おそらく弥生時代所産になる壺の底部破片と思われる。底部径7.5cmを測る。２は磨石の破片で、石材は安山岩である。



第158図　036号址出土遺物実測図

２．土壙

本遺跡において調査した土壙は、土壙群を含めて９基である。各土壙とも、伴出する遺物がほとんどなく、遺物より土壙の時期を判定することはほとんど不可能といってよい。したがって、各土壙の形態より時期や性格を想定することになる。そこで、ここではあえて時期毎に分類せず、一括して土壙として扱い調査順に列記した。そして時期等が判別できたものは、各項中でその旨を記載することとした。

003号址〔第159図、図版75―１〕

本址は、遺跡の北東端部近くに位置し、本遺跡において最も北側に位置した遺構である。遺構確認面では、住居跡と思われる落ち込みを呈していたが、精査の結果、柱穴や炉址等住居跡に伴う施設がなく、土壙と判断した。

覆土は、３層に分けられた。何れも自然堆積土である。

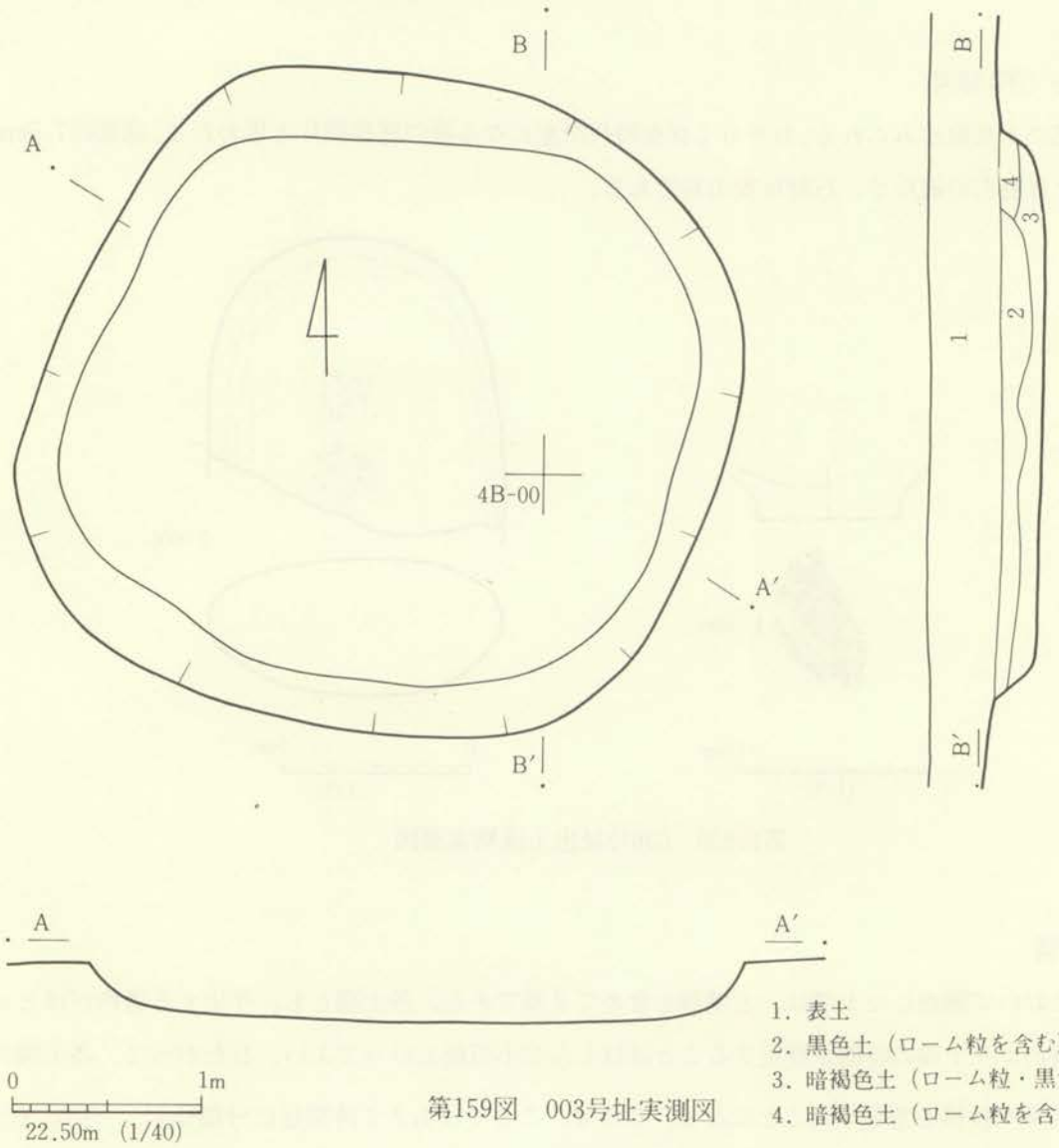
平面形は、一辺約3.5mの隅丸方形を呈し、各辺はいずれもやや丸味をもつ。

側面の立ち上りは傾斜をもっており、掘り込みは約25cmである。

底面は、全体にほぼ平坦で、軟弱である。

ピット等の掘り込みはない。

遺物は、土器の極少破片が数点出土したのみである。



第159図　003号址実測図

005号址〔第160・161図・図版73—4、75—2〕

本址は、010号住居跡の北西約5mに位置する。

覆土は、5層に分けられた。いずれも自然堆積土である。

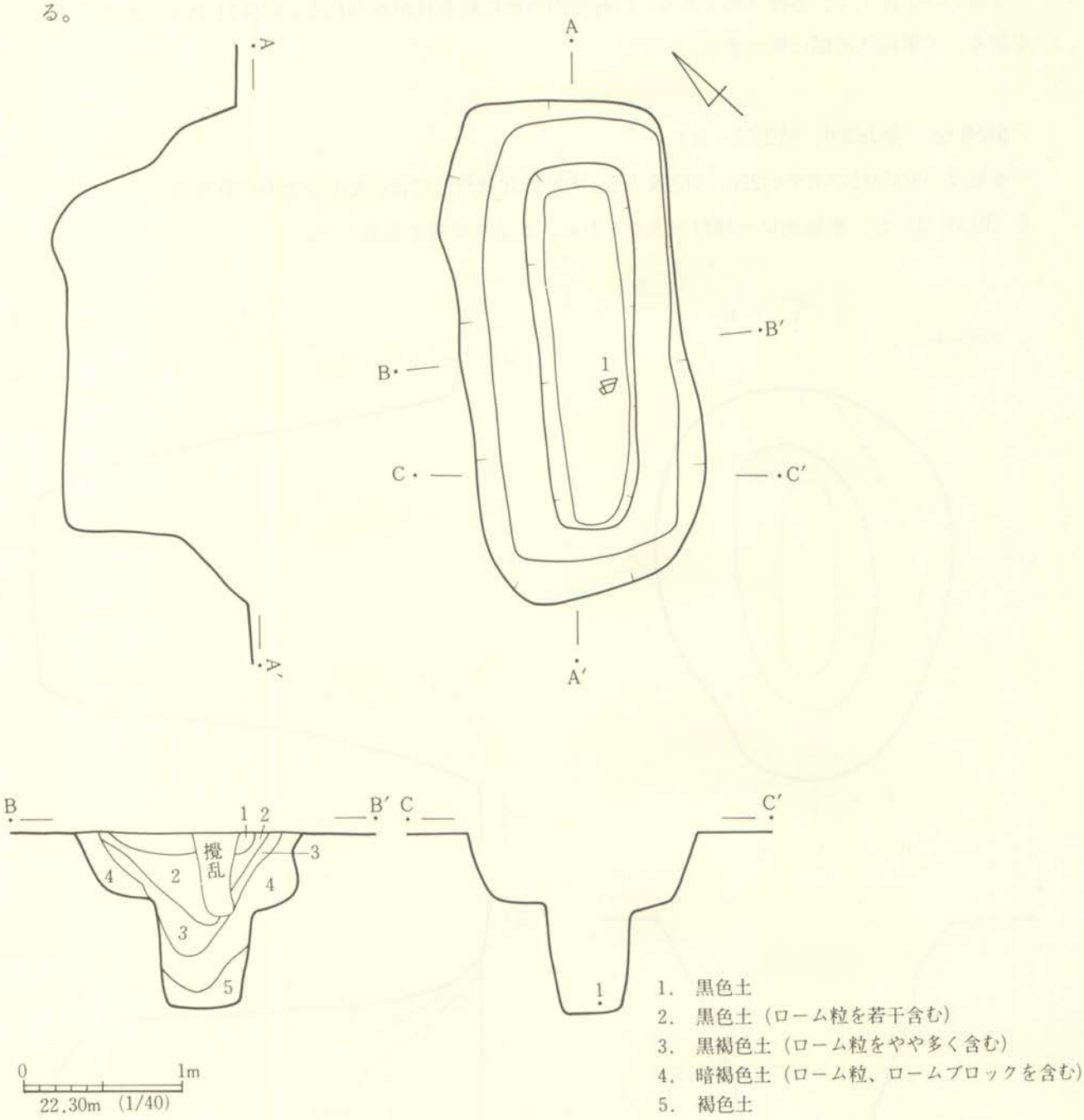
平面形は、長径約3.0m、短径約1.4mの長方形を呈する。

掘り込みは、中段までが約40cm、中段から底面までが約50cmである。底面からの立ち上りはほぼ垂直で、中段からの立ち上りはやや傾斜をもつ。

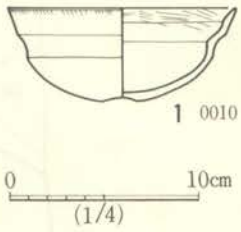
底面は、ほぼ平坦で堅い。

遺物は、底面よりやや浮いた状態で土器が1点出土した。

この土器が本址に伴うと考えれば、本址は、古墳時代の所産と考えられる。なお、性格は不明である。



第160図　005号址実測図



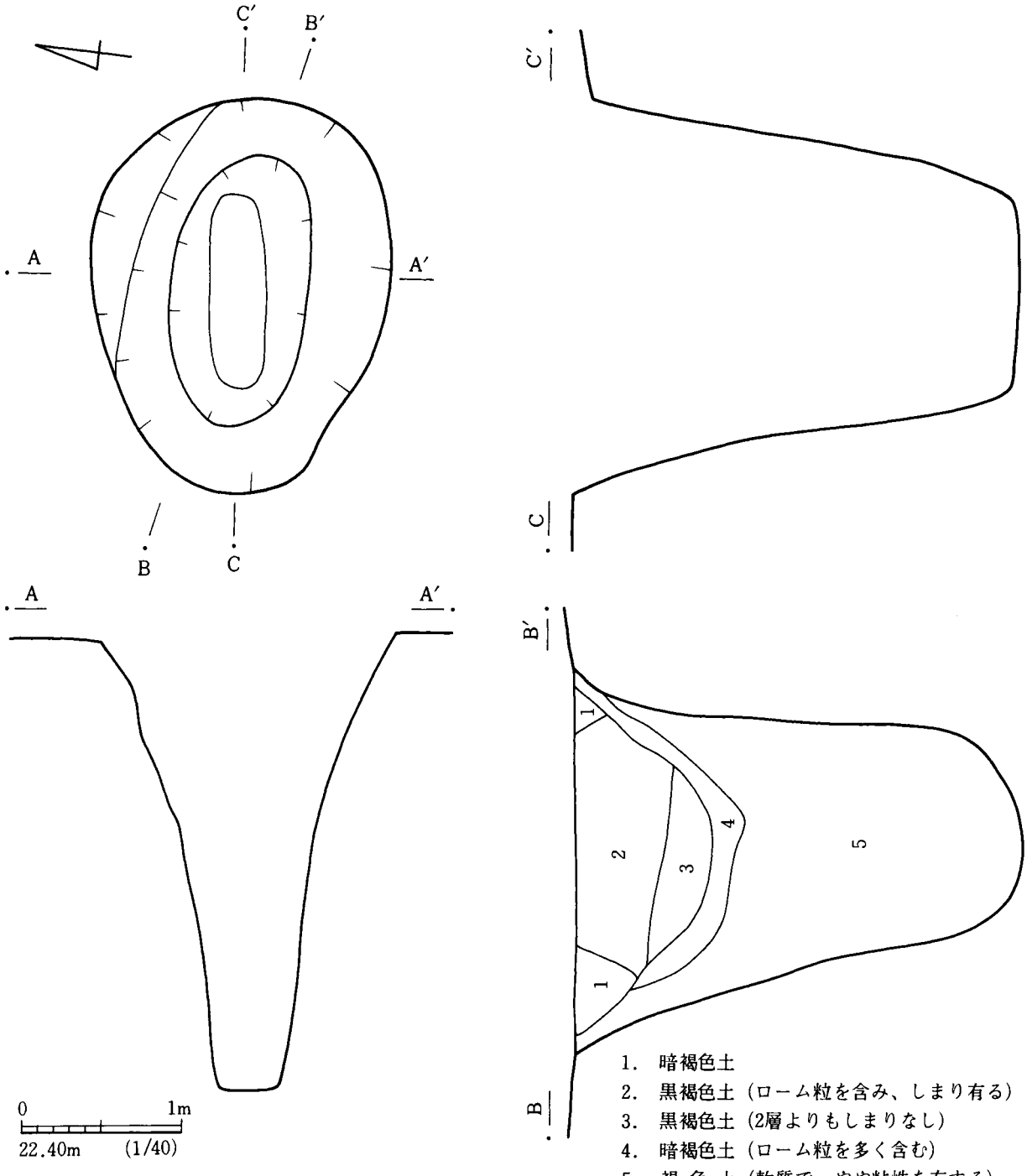
第161図　005号址出土遺物実測図

出土遺物 〔第161図、図版73－4〕

1点のみの出土で、器種は坏である。口縁部内外面に刷毛目がみられる。口径11.9cm、器高4.8cmを測る。古墳時代前期に相当する。

012号址 〔第162図、図版75－3〕

本址は、003号址の南東約22mに位置する。本址の北側付近には、大小の土壙が群を構成してしている（013号址）が、形態的に土壙群と異なるため、本址を単独で掲載した。



第162図 012号址実測図

覆土は、５層に分けられた。このうち、第１層は攪乱の可能性が高いが、他の４層は自然堆積土と考える。

平面形は、長径約2.4m、短径約1.8mの長円形を呈する。

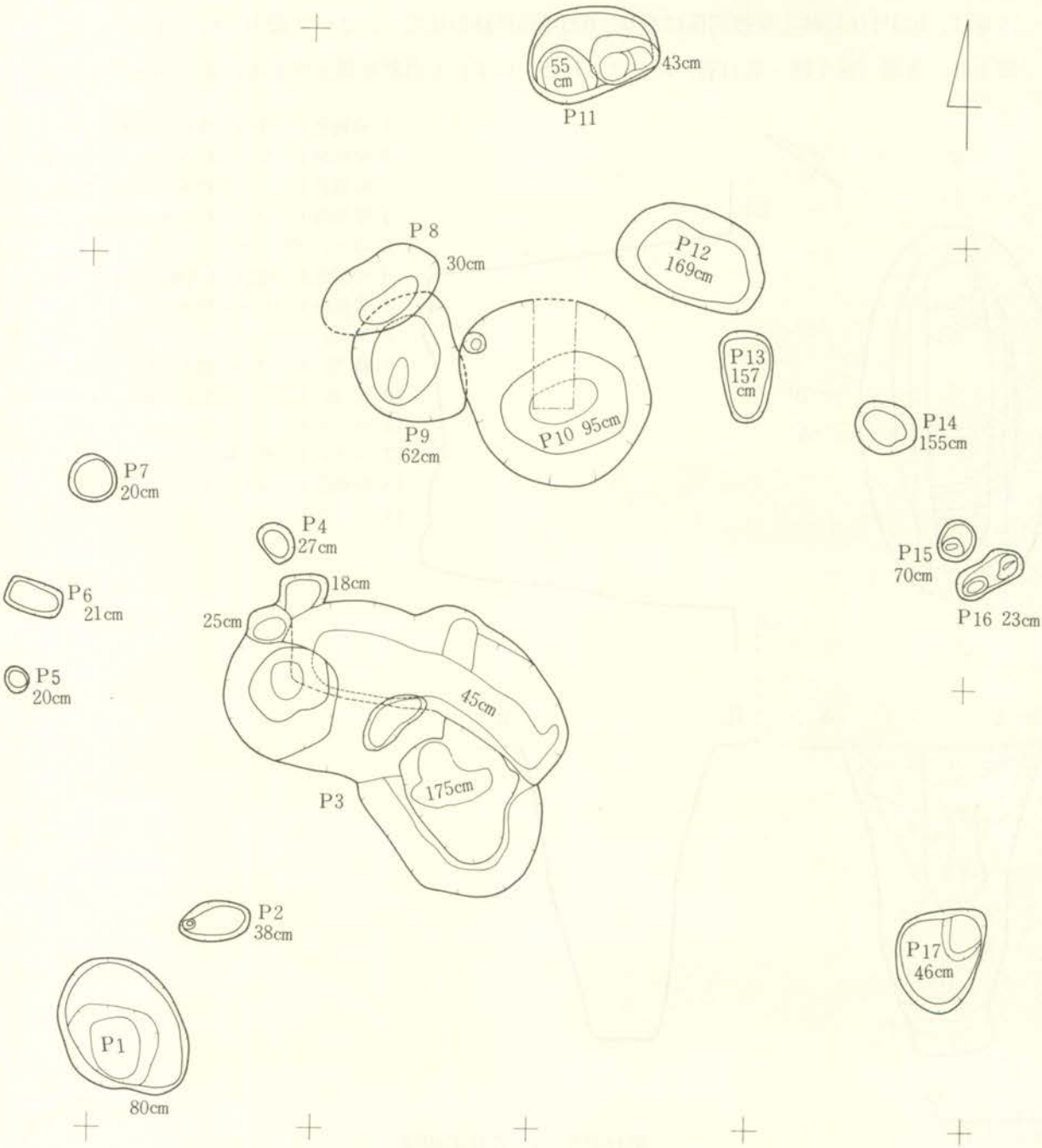
掘り込みは、約2.7mと深い。長軸断面では、やや傾斜をもちながら直線的に立ち上り、短軸断面では、中位から傾斜が緩やかになって立ち上る。

底面は、長径約1.2m、短径約0.4mのやや丸味をもつ長方形を呈し、平坦で堅い。

遺物出土はない。

本址の形状から、おそらく縄文時代の陥し穴であろう。

013号址〔第163図、図版76－１〕



第163図　013号址実測図

本址は、大小17基の土壙で構成する土壙群で、012号址の北側周辺に点散する。

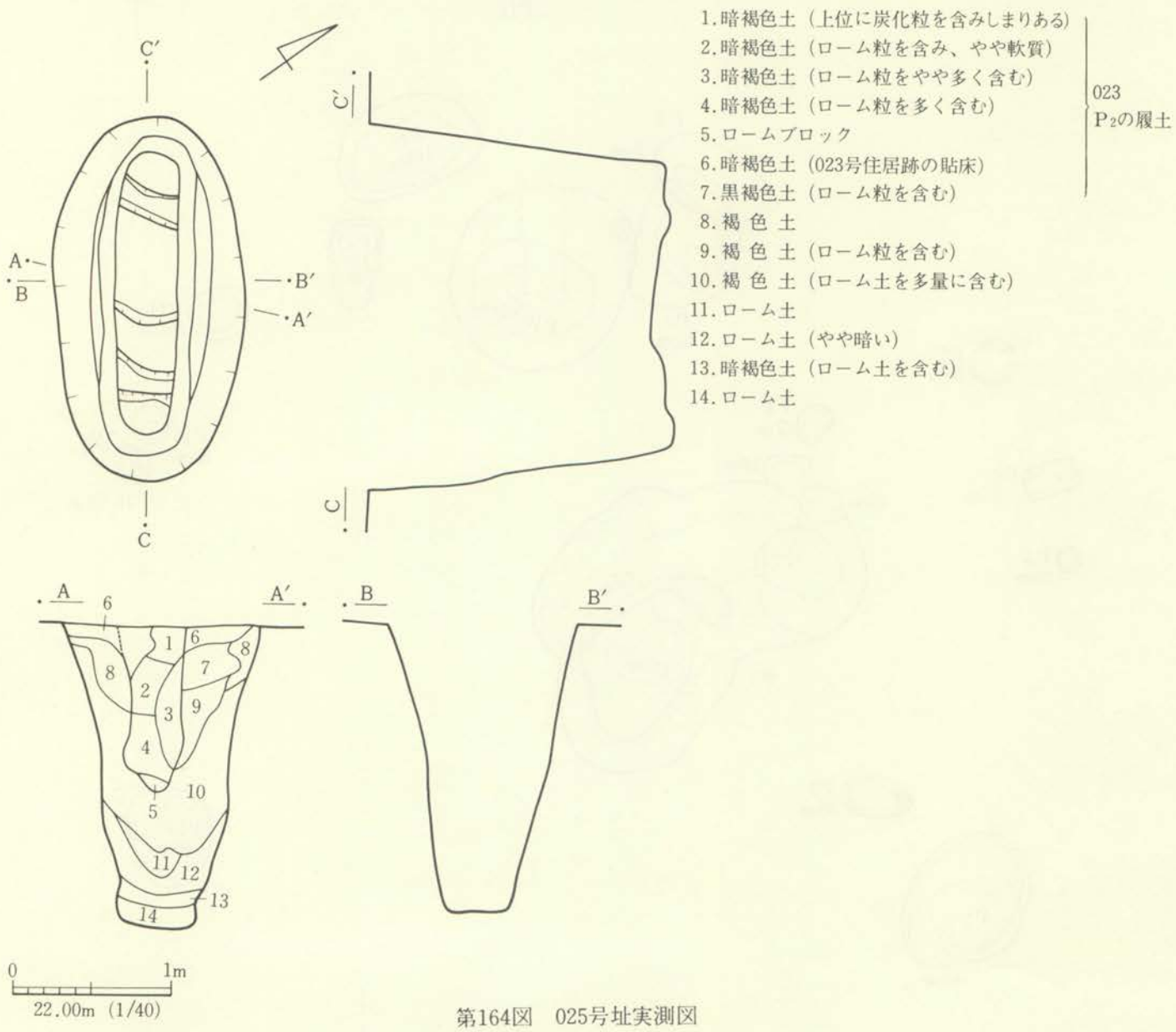
これらの土壙は、平面形や掘り込みの深さに共通性がなく、また各土壙の位置関係にも規則性がない。このことから、この土壙群全体で一つの遺構とは考えられない。比較的形態的に共通しているのは、直径90cm 前後、深さ20cm 前後のＰ２・Ｐ４～Ｐ７及びＰ３の北東に接する２基だが、これらも位置に規則性がみられない。

以上のことから、これらの土壙は、各々が単独の遺構と考えるのが妥当であろう。また、各土壙共、時期及び性格は不明といわざるをえない。

025号址〔第164図、図版76―２〕

本址は、023号住居跡と重複関係にあり、023号住居跡の柱穴（Ｐ２）に覆土を切られている。

覆土は、８層（第７層～第14層）に分けられた。いずれも自然堆積土である。第１層～第５層は、



第164図　025号址実測図

023号住居跡の柱穴の覆土で、第６層は023号住居跡の貼床である。

平面形は、長径約2.1m、短径約1.2mの長円形を呈する。

掘り込みは、約1.8mと深い。長軸断面では、若干の傾斜をもって直線的に立ち上り、短軸断面では、中位からやや緩やかな傾斜となって立ち上る。

底面は、長径約1.9m、短径約0.4mの丸味をもった長方形を呈し、中央から長軸方向へ段をもって下がっている。

遺物の出土はない。

本址の形状より、おそらく縄文時代の陥し穴であろう。

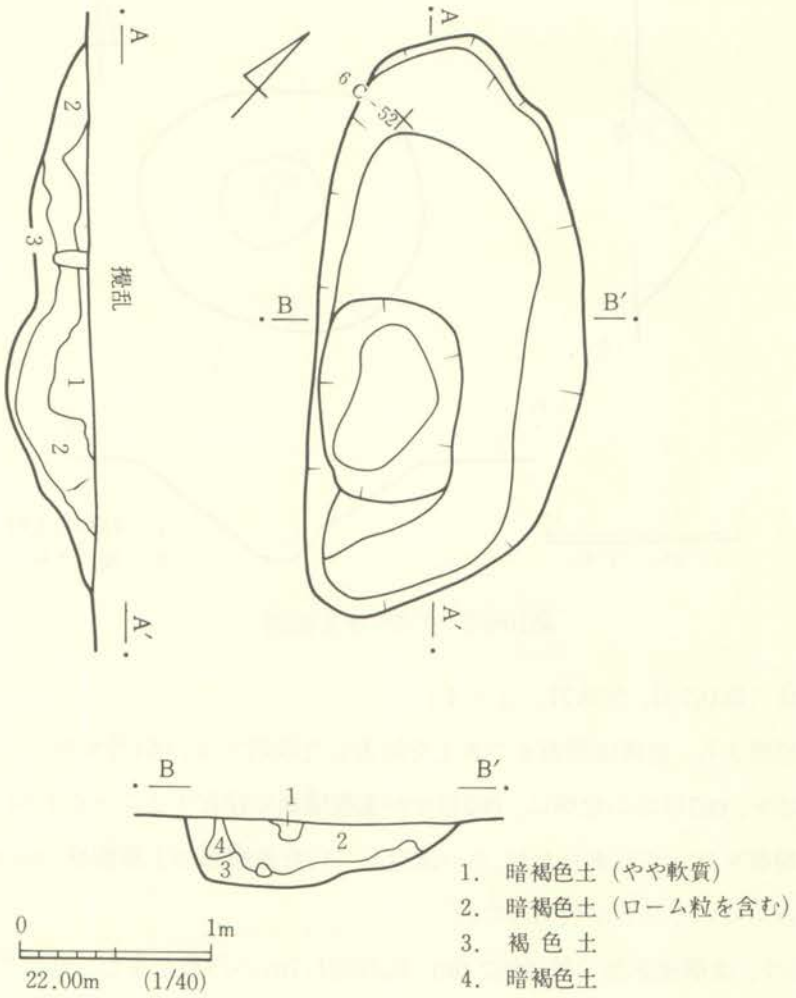
027号址〔第165図、図版76－３〕

本址は、019号住居跡と026号住居跡の中間地点に位置する。

覆土は、４層に分けられた。いずれも自然堆積土と考える。第２・3層は、比較的しまっている。

平面形は、長径約2.8m、短径約1.4mの不整形な長円形を呈する。

掘り込みは、最深部で約0.4mである。底面及び立ち上り共凹凸が著しく、全体に不整形な掘り方



第165図　027号址実測図

を呈している。

覆土のしまり具合から、比較的古い時期の所産かと思われるが、正確な時期及び性格は不明である。遺物の出土はない。

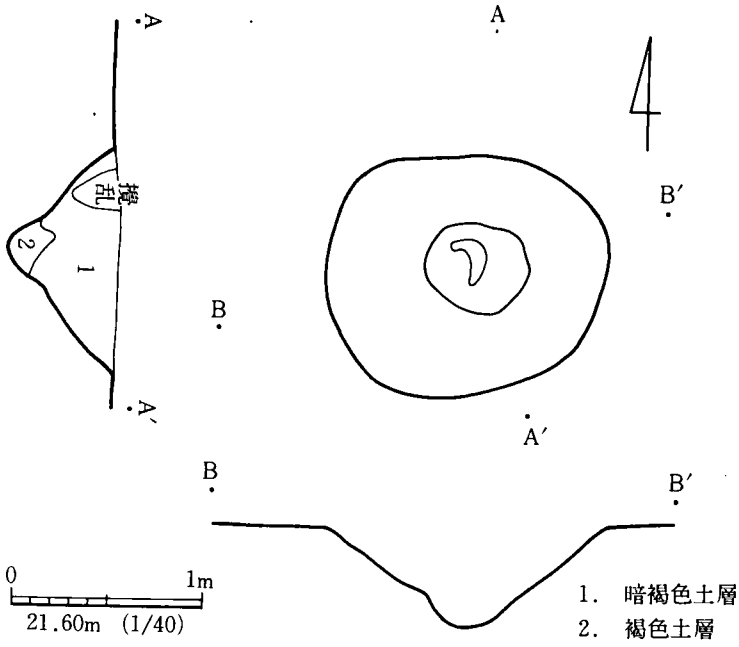
052号址〔第166図、図版77－1〕

遺跡の中央やや西寄りに位置する。この付近は、長期間午蒡や長芋の畑として利用されていたため攪乱が著しく、遺構の検出は困難を極めた。

遺構の形状は、攪乱の影響で正確に把握できなかったので、比較的遺存状態の良好な底部付近の立ち上り傾斜より推定した。その結果、長径約1.5m、短径約1.2mの不整円形を呈するすり鉢状の掘り込みとなった。確認面より最深部までの深さは、約0.5mを測る。

覆土は、2層に分けられた。共にローム粒を若干含む自然堆積土である。

遺物は、覆土上面で土器片が約30点出土したが、いずれも本址に伴う遺物とは考え難い。また、いずれも小破片で実測復原できるものはない。



第166図　052号址実測図

061号址・062号址〔第167図、図版77－2～4〕

遺跡の西寄りに位置する。遺構確認面まで表土を除去した段階では、061号址だけの単独遺構と考えていたが、精査の結果、061号址の北側に、062号址が重複関係で存在することが判明した。そのため、両址を通した土層観察を怠ってしまったが、幸い遺存していた重複部の土層観察の結果、062号址が061号址を切って掘り込んでいることが判明した。

061号址―平面形は、遺構確認面で長径約2.0m、短径約1.7mの円形を呈し、底面では長径約1.1m、短径約0.7mの長方形を呈する。底面は、ほぼ平坦である。掘り方は、上半部が若干傾斜をもつが、下

半部が垂直に近い。遺構確認面よりの深さは、約1.6mを測る。

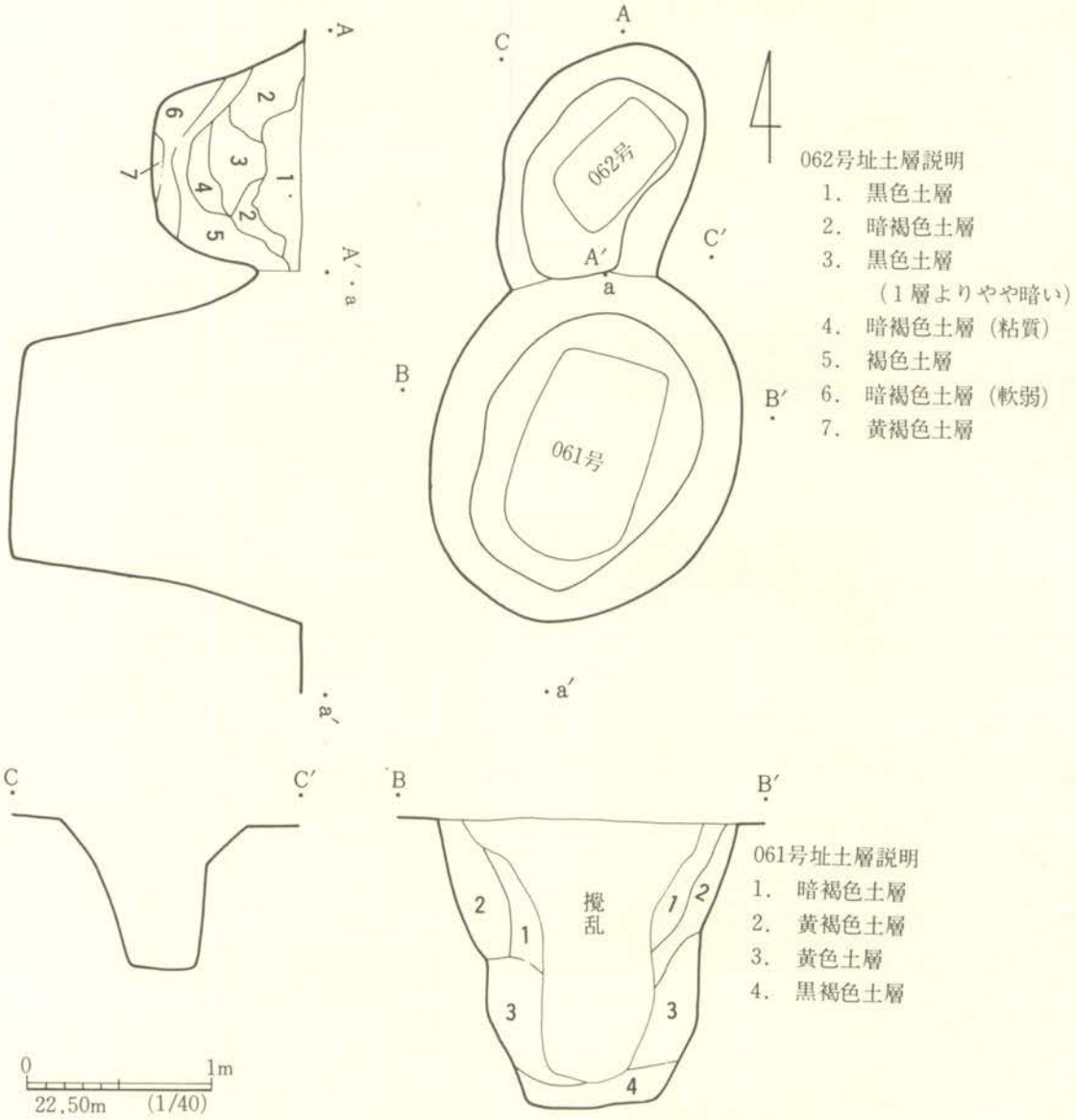
覆土は、攪乱部を除いて4層に分けられた。3・4層は、ローム粒・ロームブロックを多量に含んでおり、壁面の崩落による短期間の堆積土と考える。

遺物は、1点も出土していない。

062号址―平面形は、遺構確認面で長径約1.5m、短径約1.0mの楕円形を呈し、底面では長径約0.7m、短径約0.4mの長方形を呈する。底面は、ほぼ平坦である。掘り方は、やや傾斜をもって立ち上り、遺構確認面よりの深さは、約0.9mを測る。

覆土は、7層に分けられた。いずれも自然体積土と考える。

遺物は、1点も出土していない。



第167図　061号址・062号址実測図

3．溝状遺構〔図版78〕

本遺跡において検出した溝状遺構は、20数条である。

これらの遺構は、幅・深さ共に規則性がなく、所々に土壙状の落ち込みを伴う場合が多い。また明らかに伴うと考えられる出土遺物もなく、時期・性格を把握できる遺構は皆無である。

強いて挙げるならば、037号址が、036号址（塚）より古いということと、074号址の底面が踏み固められていることから、道であった可能性があるということぐらいである。

したがって、各遺構毎の挿図等の掲載は省略し、全測図（付図２）中にその配置を図示した。

５章　遺構外出土の遺物

１．縄文土器〔第168～183図、図版62－４、79～93〕

53年度から57年度までの調査で、この時期に属する住居跡などの遺構は加曽利ＥⅢ式を出土する021号住居跡の１軒、そして012号址、025号址の時期の詳細は不明の土壙と極めて少なかった。しかし、前期初頭から後期後半までの多くの型式の土器が出土し、特に前期初頭などの一部の時期については、量的にも非常に多く、比較的良好な資料を得ることができた。

これらの縄文土器を下記のとおり分類し、これに沿って説明していくこととする。

Ⅰ群土器

胎土中に繊維を含むものであり、文様により、次の５類に分類した。これらのほとんどが、花積下層式土器であると考えられる。

１類土器

土器表面に、貝殻条痕文が施されているもので、内面にも認められるものをａ種、内面には認められないものをｂ種とした。全出土量の約2/3は、3Aグリッドの西側から残りは2Bグリッドの北西部から出土している。

２類土器

土器表面に、各種の縄文が施されているもので、内面に貝殻条痕文が施されているものをａ種、施されていないものをｂ種とした。ａ種は、出土量が極めて少ないため、その分布範囲は明確ではないが、2Bグリッドの西側に中心が認められ、ｂ種は、2Bグリッドの西側に全体の約70％が集中し、他は、2Cグリッドの東側、3Aグリッドの西側に散布している。

３類土器

無文土器である。2Bグリッドの西側に分布の中心が認められる。

４類土器

貝殻による文様が施されているもので、アナダラ属の背圧痕による文様が施されているものをａ種、腹縁による文様が施されているものをｂ種とした。分布の中心は3Aグリッドの西側に約2/3が集中しており、他に、2Aグリッドの西側、5Cグリッドの北東部からも出土している。

５類土器

撚糸圧痕文の施されているもので、蕨手状文、渦巻文が形づくられているものもある。圧痕文の周囲には、山形などの沈線文や刺突文が施されている。

Ⅱ群土器

胎土中に雲母を含み、結節沈線、爪形、断面三角形の隆帯などにより文様が構成されているもので、突起や把手が顕著である。阿玉台Ⅰｂ式土器を主体とした一群である。分布は、3Bグリッドの西側に

集中している。

III群土器

上記したもの以外の土器で、中期後半から後期後半までの土器を一括した。土器の出土量は全体的に少なく、調査区域全体から、分散して出土している。

以上が、今回の調査で得られた縄文土器の分類であるが、次に、これらの土器についての記述を行う。なお、169図～181図までが53年度から56年度までの調査で出土したもの、182図、183図は57年度の調査のものである。

I群土器

1類土器〔第169図1～21、図版79〕

貝殻条痕文の土器である。内面にも条痕の認められるa種(1～16)と内面には認められないb種(17～21)とに細分している。いずれも非常にもろい土器である。

2類土器〔第169図22～37、170図、171図、172図1～25、174図5、図版79～82・84〕

表面に縄文が施されているもので、内面に条痕の認められるa種（第169図22～32）と認められないb種（第169図33～37、170図、171図、172図1～25、174図5）とに細分している。

a種はすべて、羽状を呈しており、26は付加状が施されているものである。

b種も、羽状縄文が施されているものが多く、また、第169図34～37のように、底部にまで縄文が施されているものもある。

3類土器〔第172図26～31、図版82〕

無文土器である。26は口縁部で、やや内弯ぎみの器形を呈しているもの、32は、尖底土器の底部近くと思われる。

4類土器〔第172図33～38、173図、図版82・83〕

貝殻背圧痕文の施されているa種（第172図33～38、第173図1～8、11～13、16～19、21～25、27～30）と貝殻腹縁文の施されたb種（第173図9・10・14・15・20・26）とに細分している。

a種は、いずれも縄文を擬して施されている、また、5・12・18・19・28のように、内面に条痕の認められるものもある。

b種は、a種に比べると量的には少ない。

9は貝殻条痕の後に腹縁文が、10は貝殻条痕及び平行沈線の後に腹縁文が、26は縄文と腹縁文とを併用して施されているもので、14・15・20は腹縁文のみが認められるものである。また、15以外は、アナダラ属を施文工具としている。

第172図38は、円筒状の土製品であるが上部、下部とも欠損しており、原形を推定することはできない。

5類土器〔第174図1～3、6～50、図版84〕

撚糸圧痕による蕨手状文、渦巻状文と、ヘラ状工具による山形沈線文、刺突文などが顕著な一群で50以外は深鉢である。

１～24までは口縁部の破片であるが、二重口縁のもの（１・２・８・11～13・17～19・23・24）も多く、これ以外に、隆帯が貼付され、二重口縁的に見えるものもある。

１は、二重口縁の部分に山形の沈線を施し、これをはさむように上下端に２条の撚糸圧痕を廻らし、さらに刻みを加えている。胴部には、３条の、撚の方向の異なる撚糸圧痕文を交互に施し、刻みを周囲に加えている。

２は、器形、文様が１と類似しているものであるが、やや小形であることと、口縁部文様帯に施された撚糸圧痕が１条であることが異なっている。

７は、口縁部文様帯には沈線ではなく、撚糸圧痕により山形が形づくられている。

13と17は同一個体で、口縁部文様帯には撚糸圧痕文を廻らしている。

15は、円形の小突起を持つもので、他に比べて、胎土中に繊維が多く、粒子も緻密であり、内外面とも赤褐色を呈している。16は15と同一個体である。

25～49は胴部片であり、いずれも３条を単位とした撚糸圧痕を施している。また25～33は隆帯が廻るものである。

50は板状の土製品であるが、両端を欠損しているため原形を知ることはできない。撚糸圧痕により山形を形づくり、刺突を加えたもので、両側面には刻みが見られる。

II群土器〔第175図～179図、図版85～89〕

胎土中に雲母を含み、結節沈線、爪形、断面三角形の隆帯などによる文様が施されているものを一括した。すべて深鉢であり、主として、阿玉台Ｉｂ式土器である。

これらは、3Bグリッドの北西部を中心に集中しており、若干2Bグリッドの北西部から出土している。

第175図１～３は無文の土器である。４～10は粘土の積み上げ痕を残した突起を有するものである。７は山形の小突起が、口縁から立ち上っているもので、８、10は口縁部の４単位と思われる楕円形の区画文に結節沈線を施しているもの、９は、口唇部に沿って、爪形文を廻らしているものである。11・12は、小突起により４単位の区画文を隆帯とこれに沿った沈線により配しているものである。14・15は同一個体であり、隆帯と結節沈線の楕円形を区画した小突起の頂部には、粘土紐による渦巻文が施され、この脇には、口縁から山形の把手が立ち上っている。

175図のうち、４～10は、阿玉台Ｉａ式土器である。

第176図は大形の深鉢の破片で、５・６は、渦巻状に貼付した隆帯に沿って、先端の細い工具で結節沈線を施しているもので、一見撚糸圧痕的に見ることができる。12・13は、隆帯を垂下させ、爪形文を横方向に配している胴部片である。

１～15までいずれも、金雲母と白色の砂粒を多量に含み、やや赤味を帯びた褐色を呈している。

177図は非常に大形の深鉢で、3と5～7以外は同一個体と思われる。

1は、朝顔状に開いた大形の把手を残す破片であり、4も把手の一部である。この個体は、比較的低い隆帯と細い結節沈線により楕円形の区画文を口縁部文様帯とし、胴部には、同様の区画文に加えて、輪積みの一部に爪形文を配したものである。3・5～7は同一個体と思われ、3は把手の一部であり、6・7は5に見られる粘土紐による渦巻状の突起である。この個体もやはり大形のものである。9は把手である。

両方の個体とも、金雲母が多量に含まれる。

178図1～9は、結節沈線による山形文などが口縁部に施されているもので、11は、同様の文様が頸部に施されているものである。12～21は爪形文の施されているもの、22・23は隆帯による楕円形区画文が形づくられ、内側に結節沈線による渦巻文が施されている同一個体で勝坂式である。

24・25は土器片錘である。

179図は同一個体と思われる大形の深鉢である。口縁部は積み上げ痕の残る小突起を境に、4単位の区画文を、隆帯と結節沈線により形づくっている。胴部には垂下させた隆帯、粘土紐の波状文、アナダラ属の貝による腹縁文、波状沈線などが配されている。また、底部の周縁には、網代痕が残る。胎土中には、白色の砂粒が多く含まれている。

III群土器〔第168図、180図～183図、図版62―4、90～93〕

第168図は、復原可能であった数少ないものである。

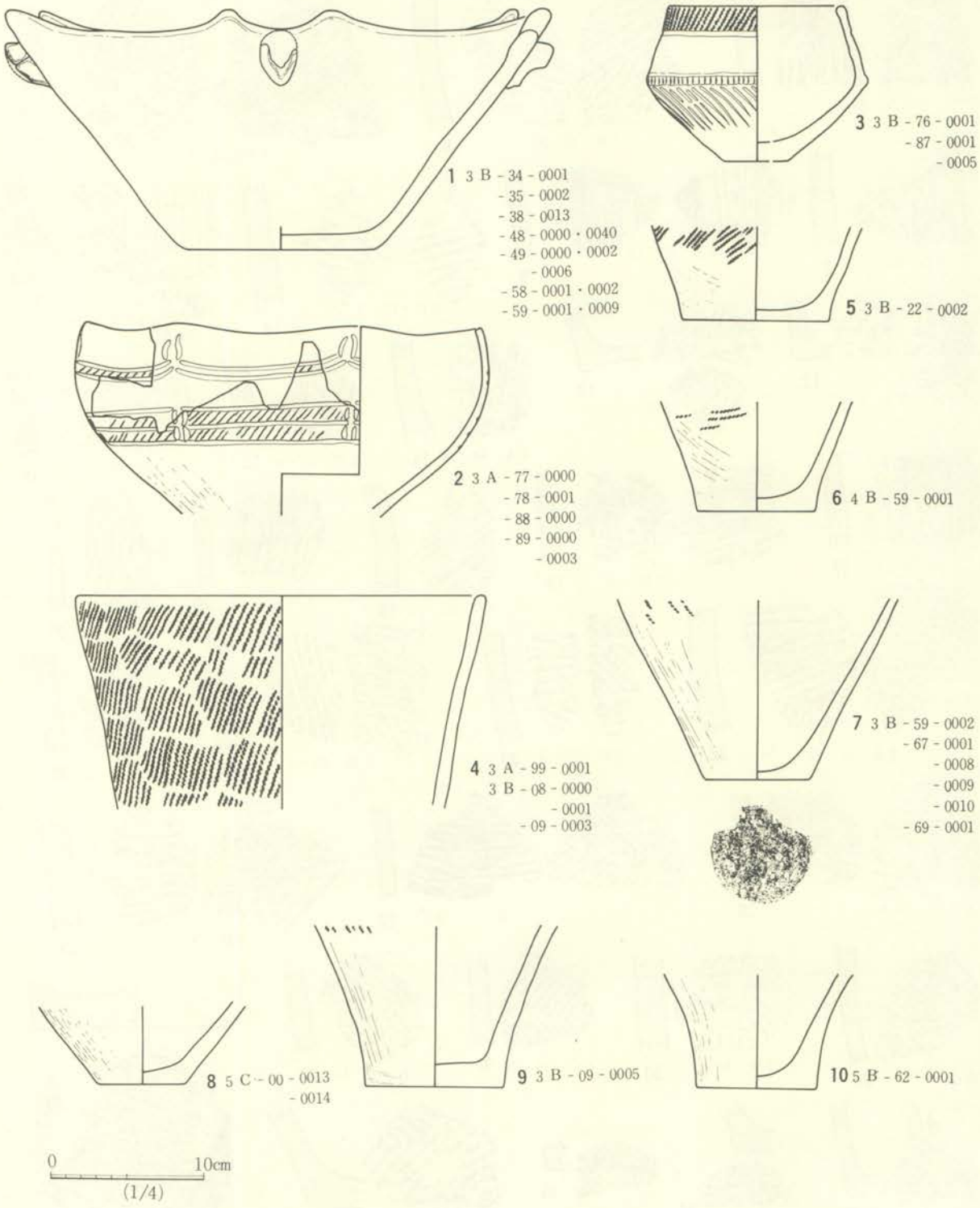
1は無文の鉢で、2は沈線で区画された内側に、単節斜縄文を充塡したもので加曽利BII式、4は口縁部に縄文帯を持ち、胴部に刻みを持った隆帯が廻り、胴下半部には条線が施された鉢で、安行I式土器である。

第180図1～9は、口縁部に渦巻文を持ち、磨り消しの懸垂文を胴部に施したもので、加曽利EIII式土器の深鉢である。10・11・21は、沈線による区画内に刺突を加えた称名寺式土器、12～14・19は沈線の区画内に縄文を充塡したもの、16～18・20は円形の粘土紐を貼付したものである。12～20は、堀之内I式土器である。

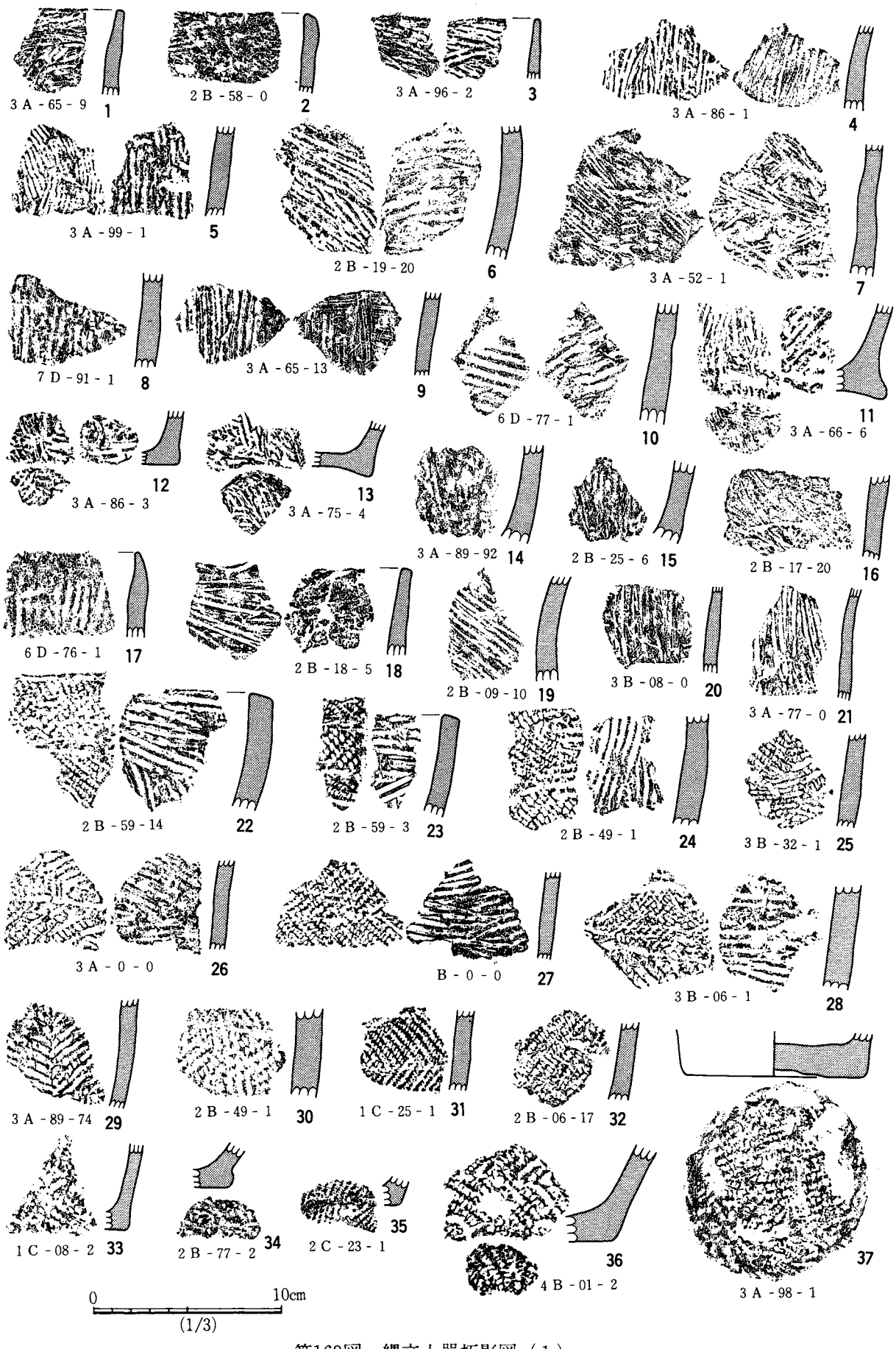
第181図は加曽利B式土器を一括している。いずれも深鉢であるが、16～24は粗製土器である。

第182、183図は57年度の調査によるものである。1・2・4～11は、各種の縄文、撚糸文が施されたもの、13～15は磨り消しの懸垂文が施されているもの、16～18は微隆起線により縄文を区画しているもので、19は沈線により縄文を区画しているもので、12～19はこれまでの調査で出土したものから見ると、加曽利EIII式土器であると考えられる。22～27は櫛歯状工具によるもの、28～30は沈線の区画内に刺突が加えられたもので、28～30は称名寺式土器である。

第183図は2が堀之内I式土器である他、加曽利B式土器であり、1は鉢の口縁部であるが、表面には粘土紐と押捺で8字状文を施し、内面にも木の葉状に沈線で描いている。1・10～14が鉢である他は深鉢であろう。

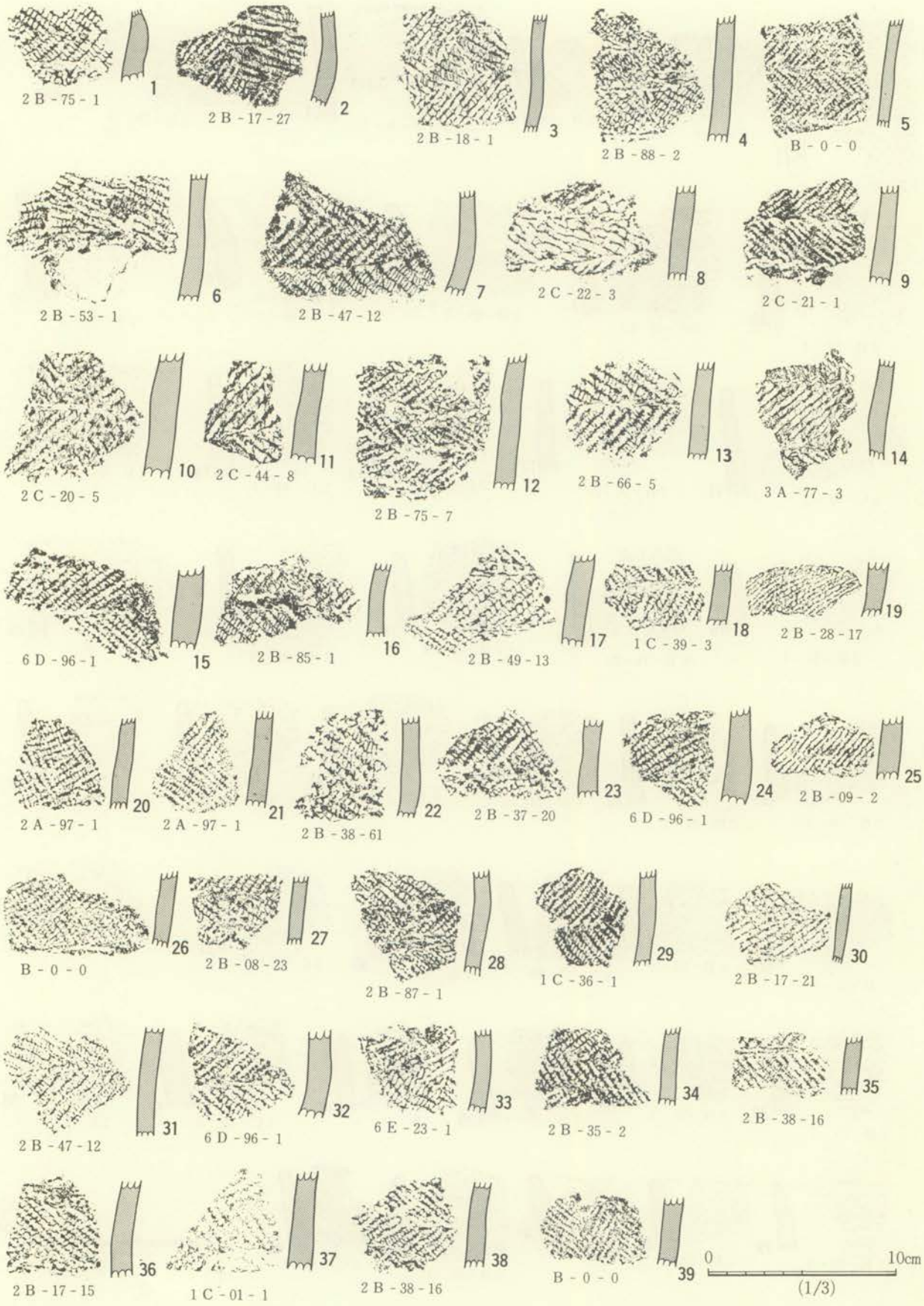


第168図　グリッド出土遺物実測図

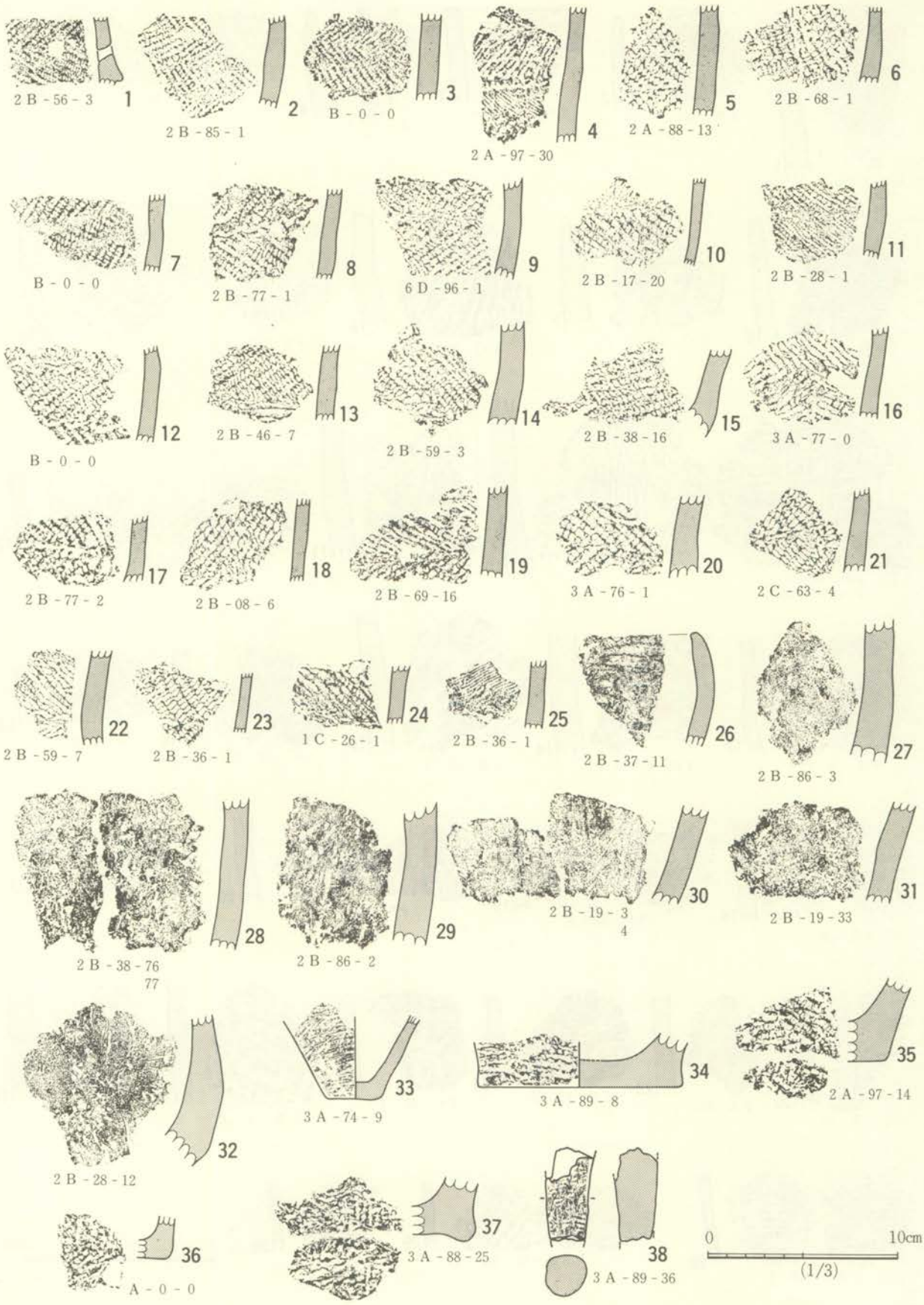


第169図　縄文土器拓影図（1）

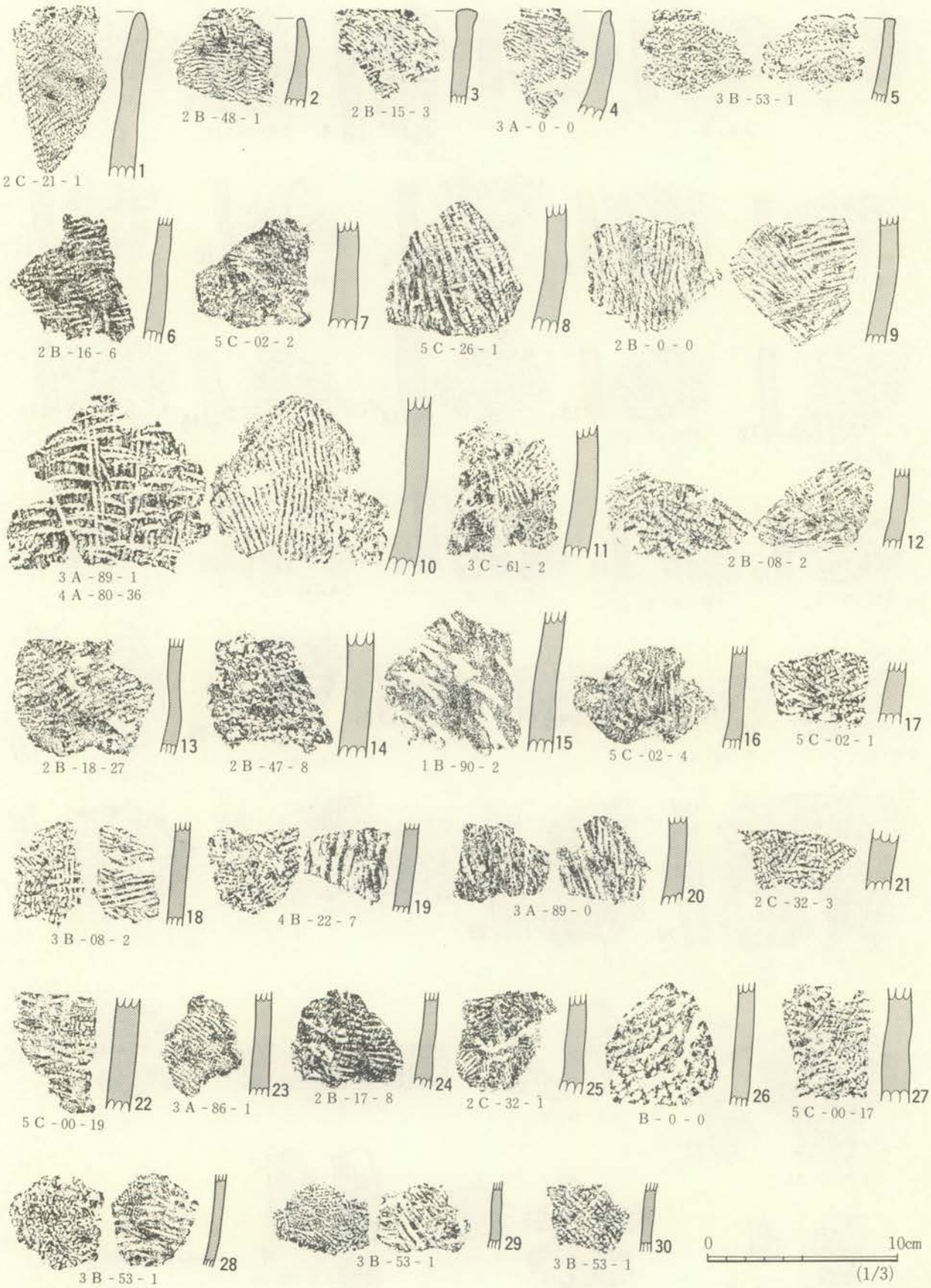
第170図　縄文土器拓影図（２）



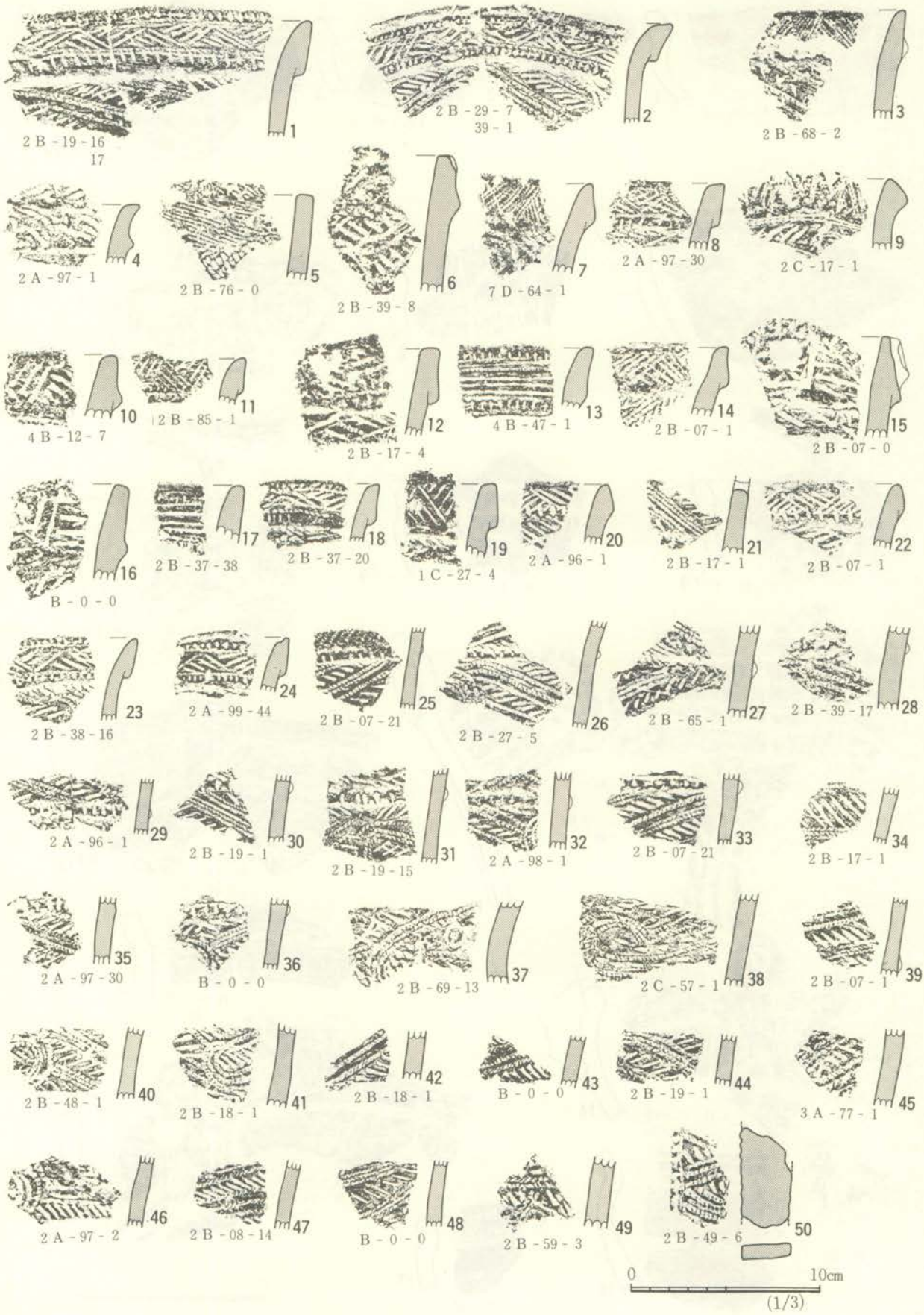
第171図　縄文土器拓影図（3）



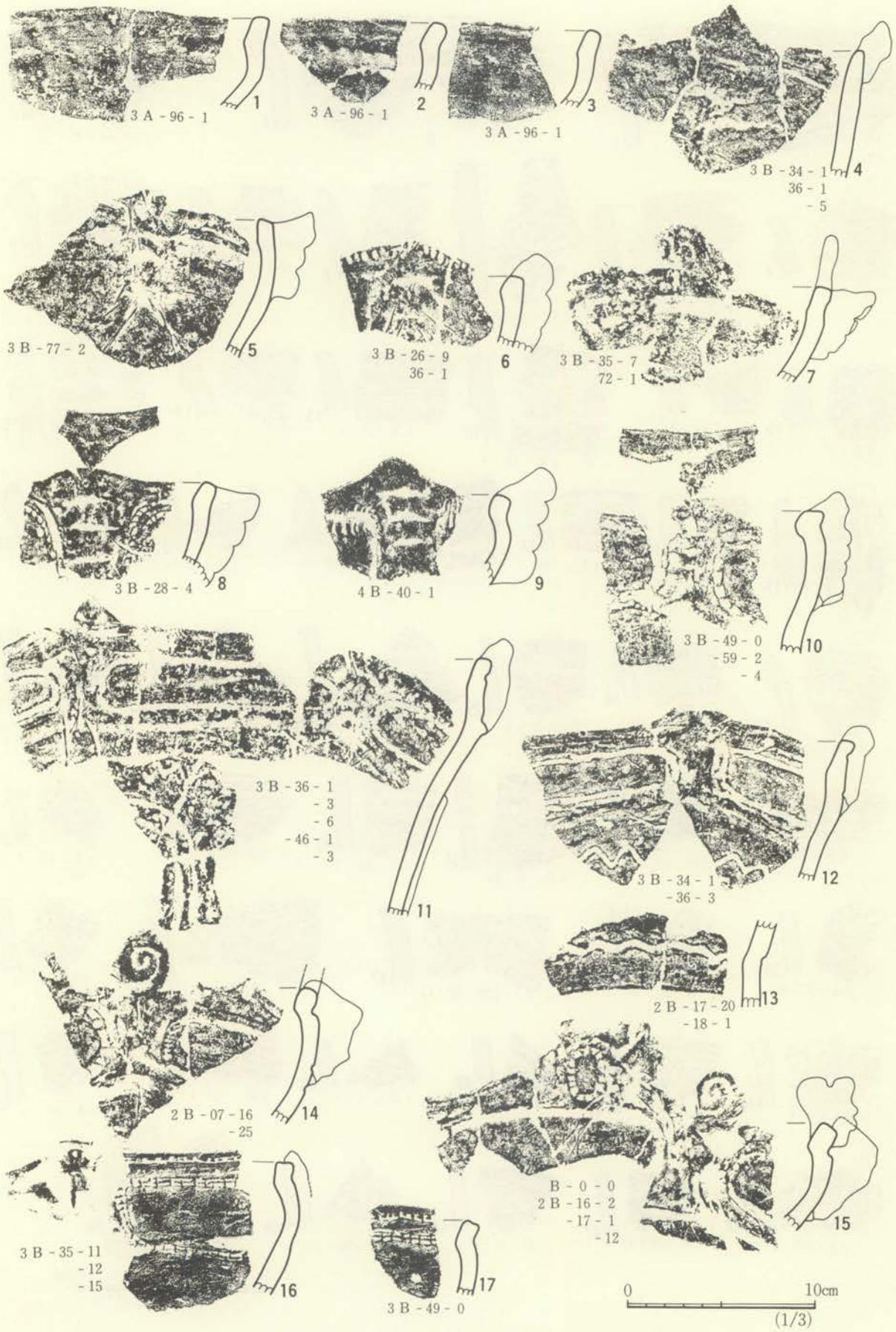
第172図　縄文土器拓影図（４）



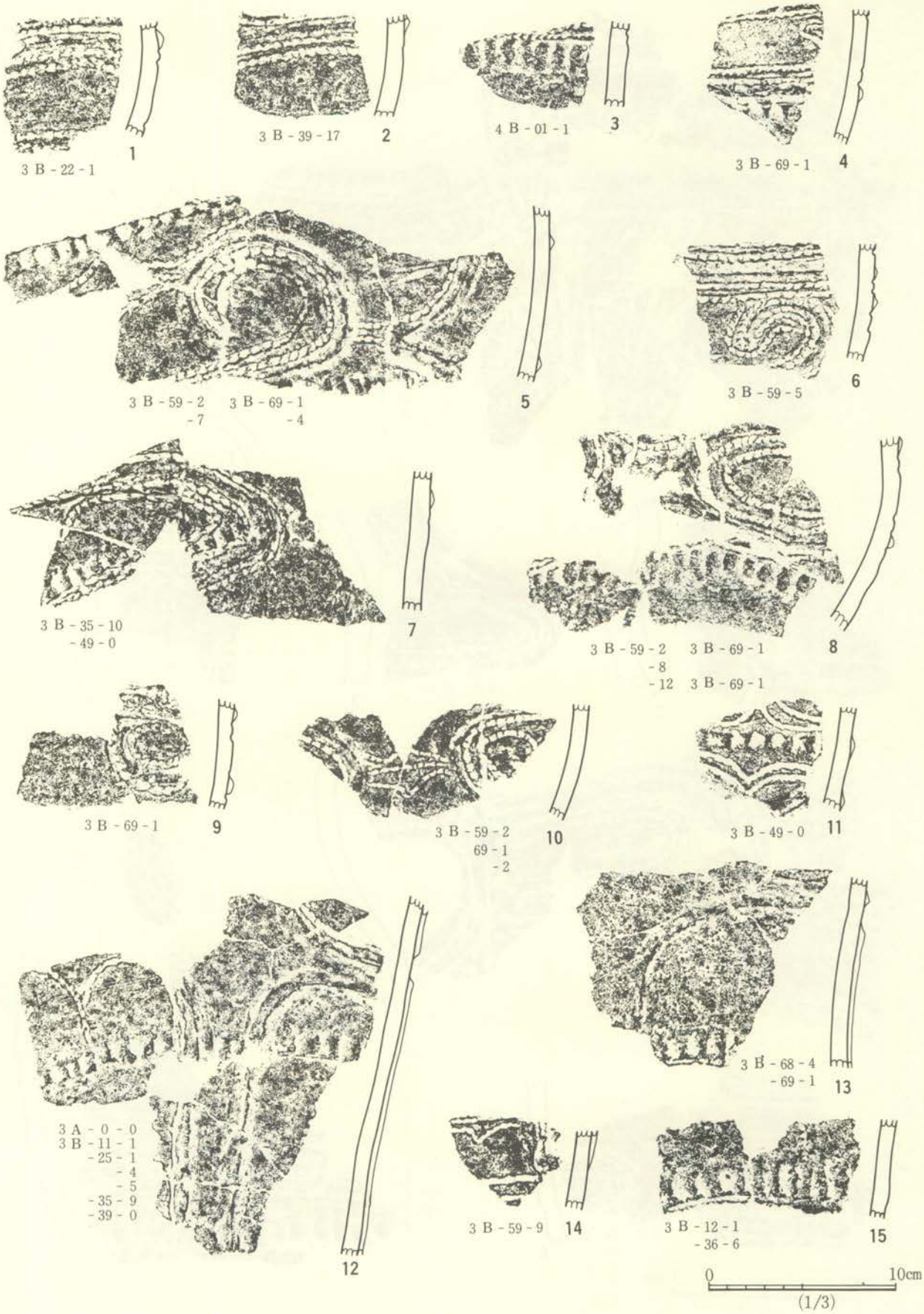
第173図　縄文土器拓影図（5）



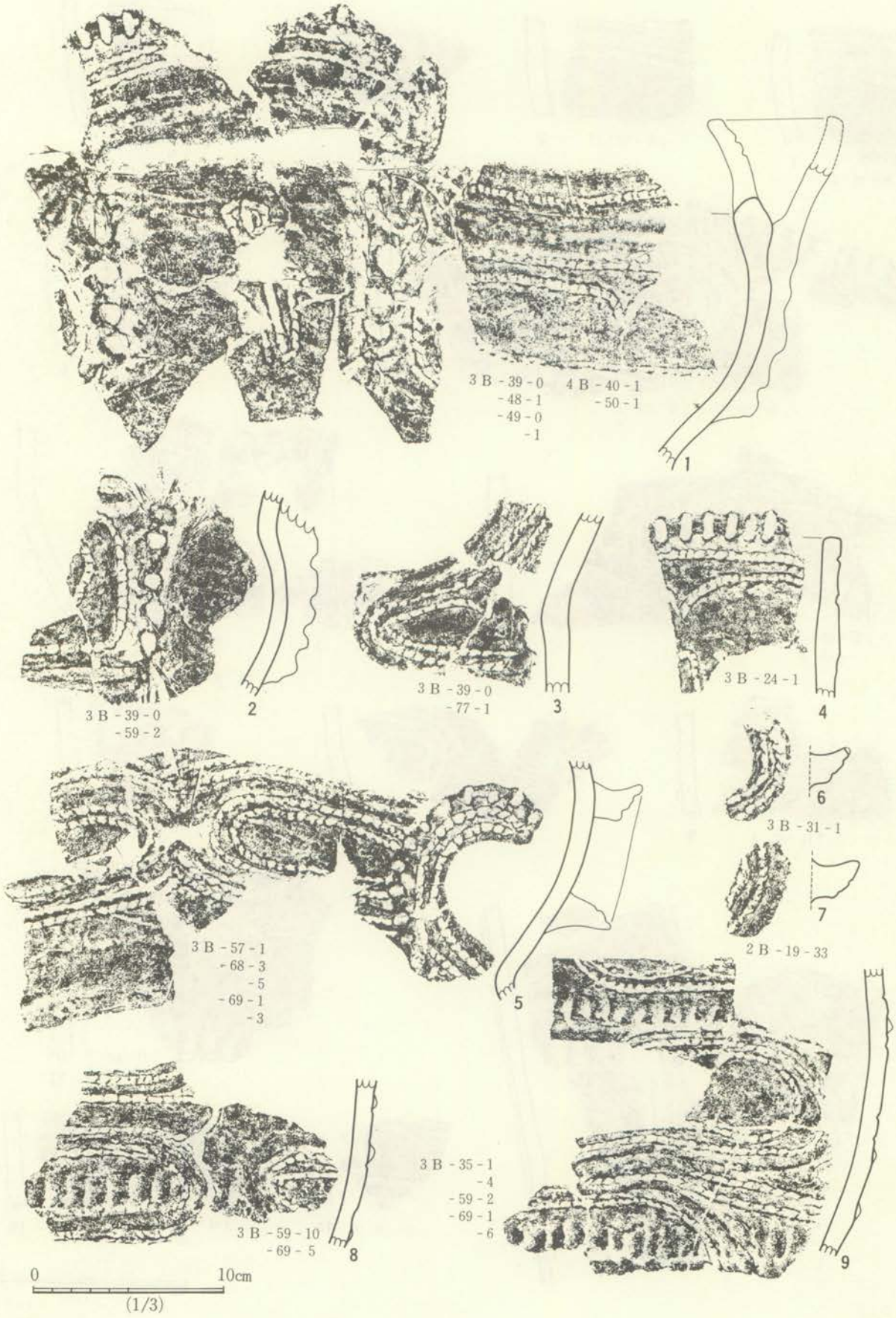
第174図　縄文土器拓影図（６）



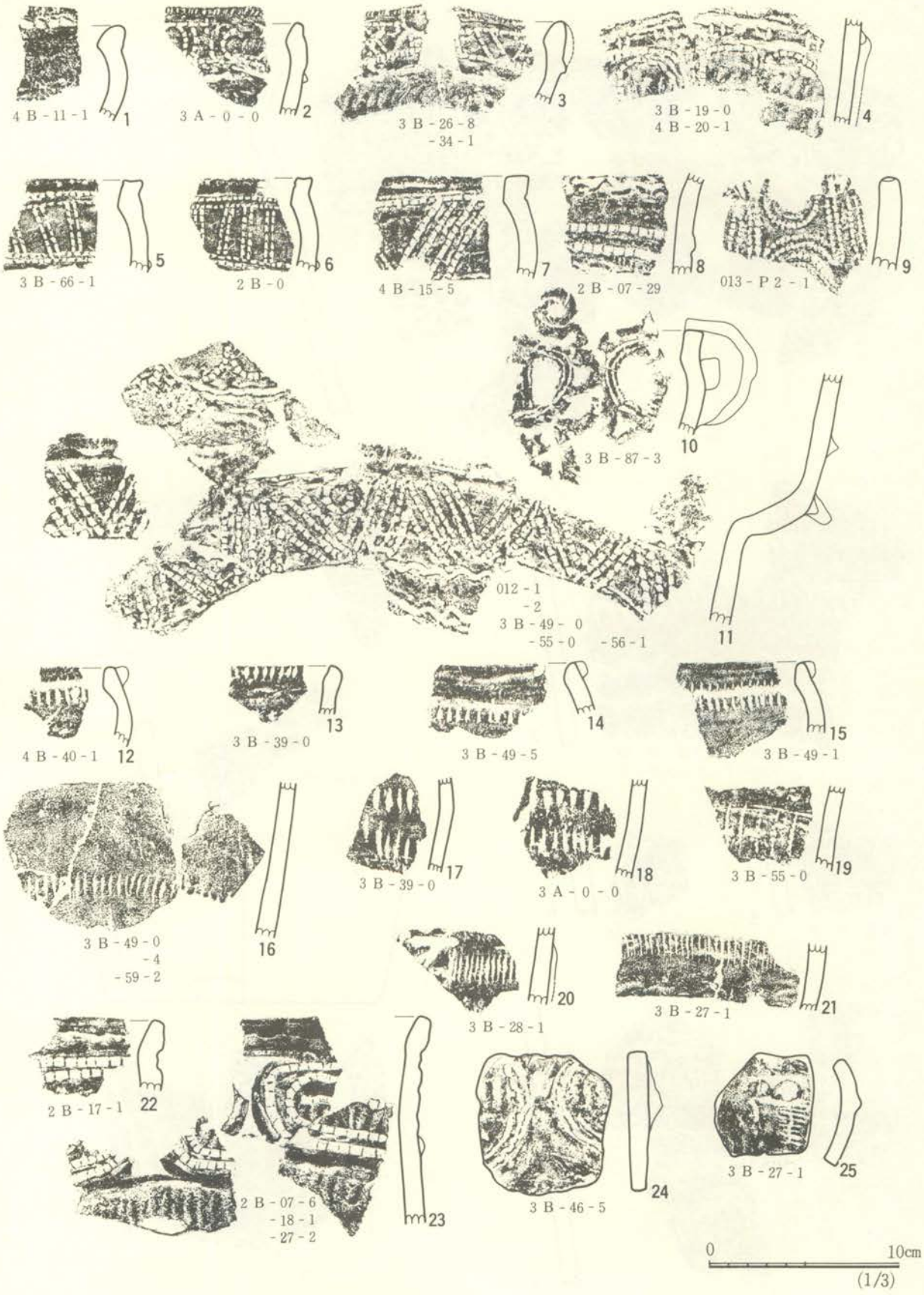
第175図　縄文土器拓影図（7）



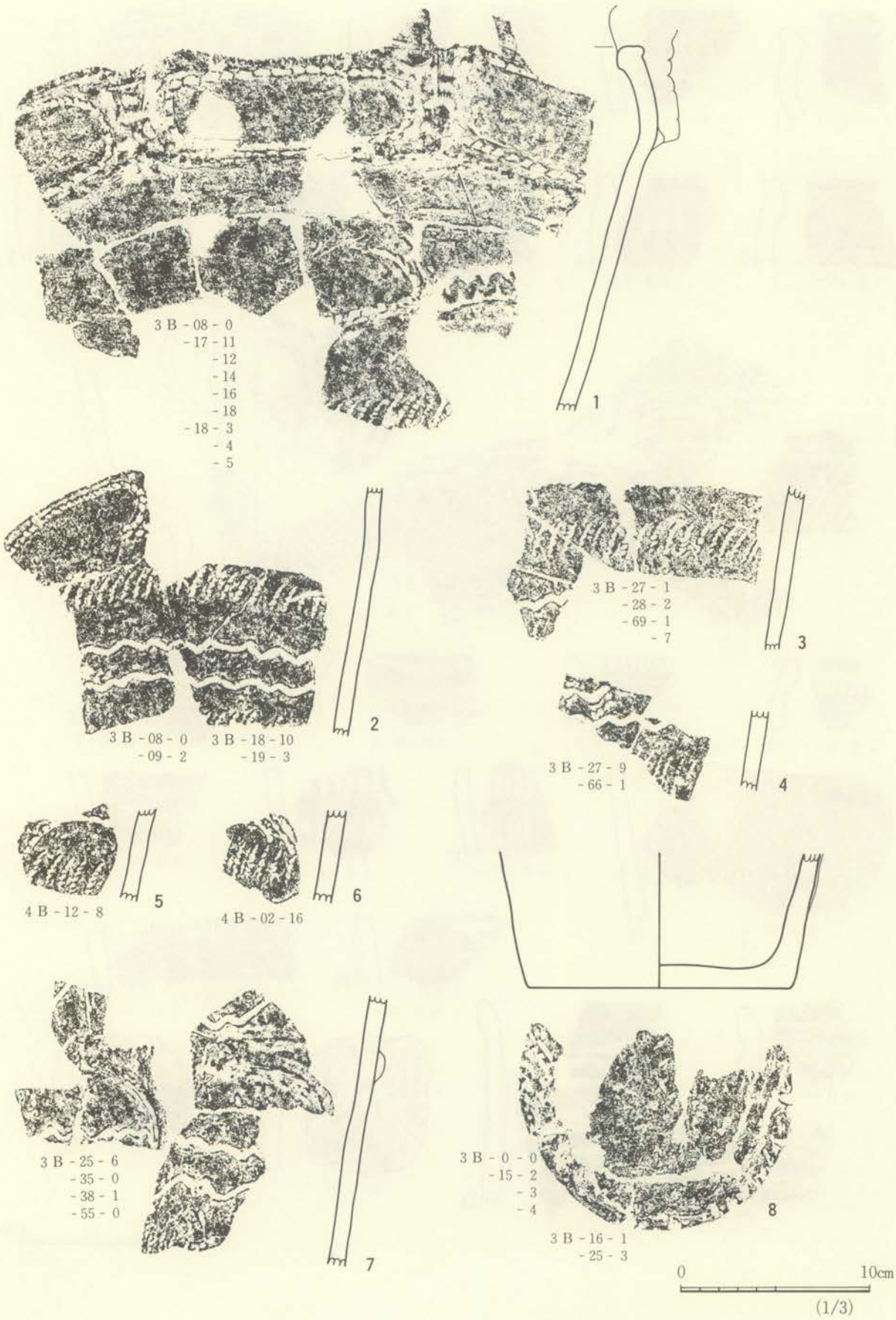
第176図　縄文土器拓影図（８）



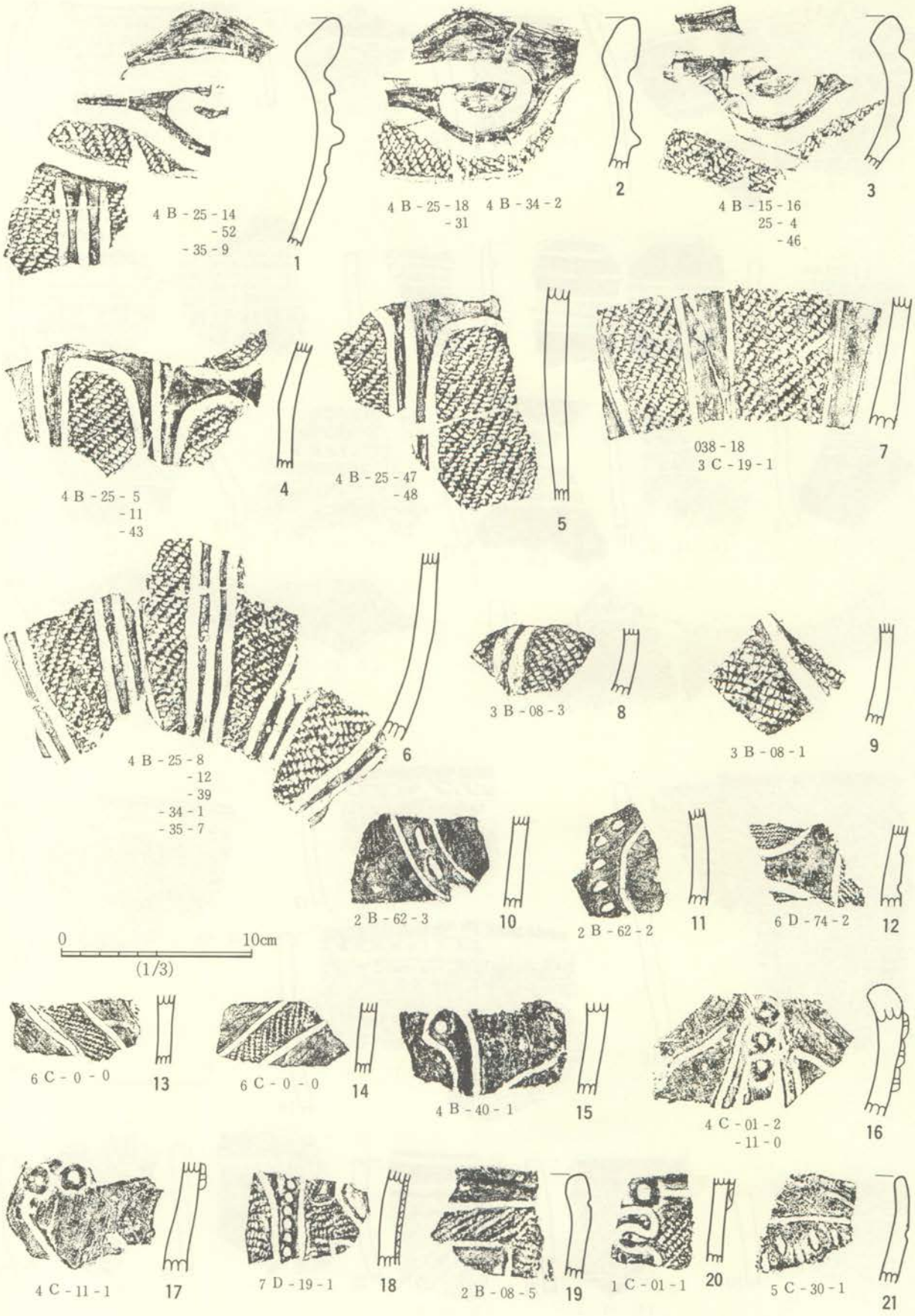
第177図　縄文土器拓影図 (9)



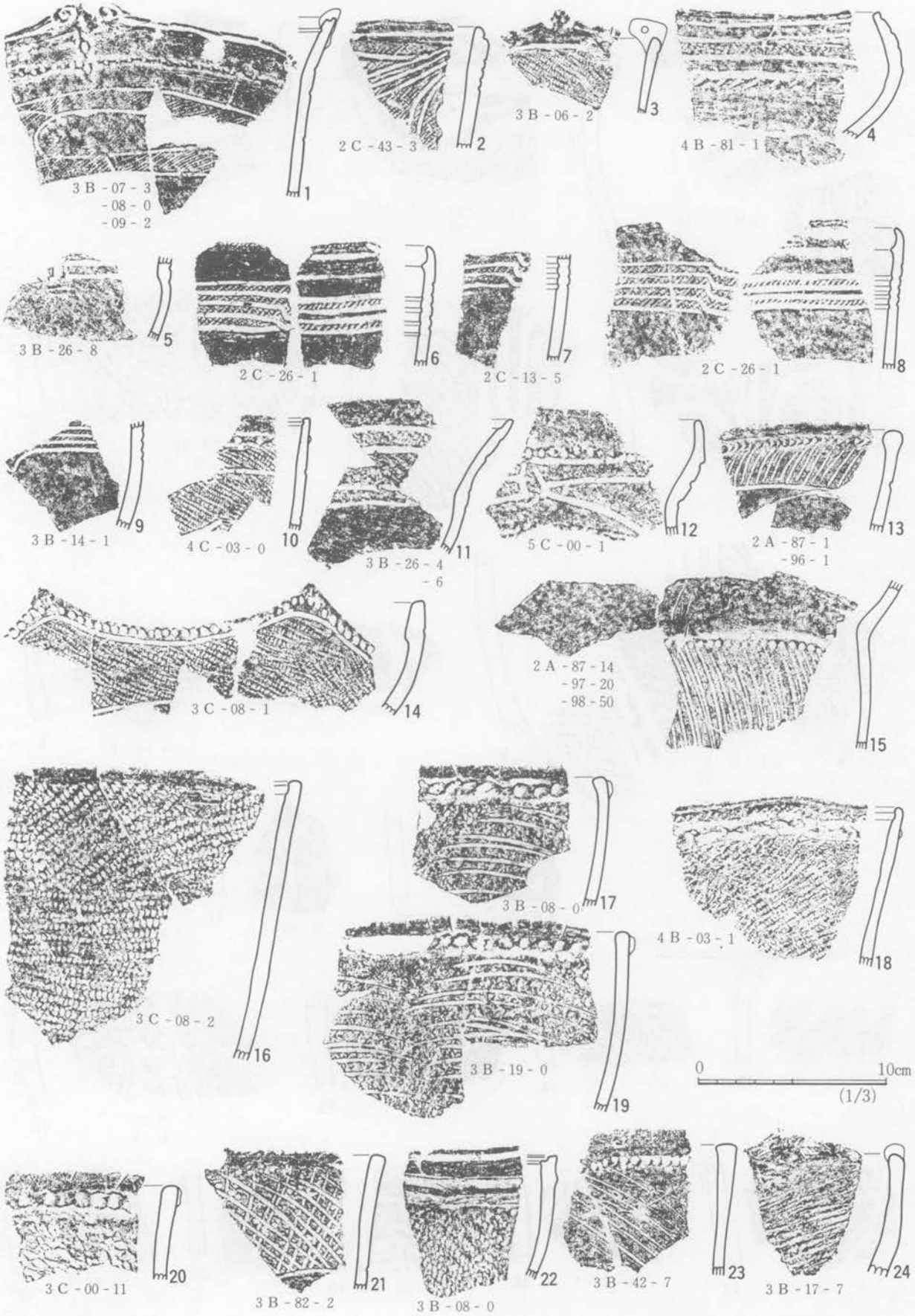
第178図　縄文土器拓影図 (10)



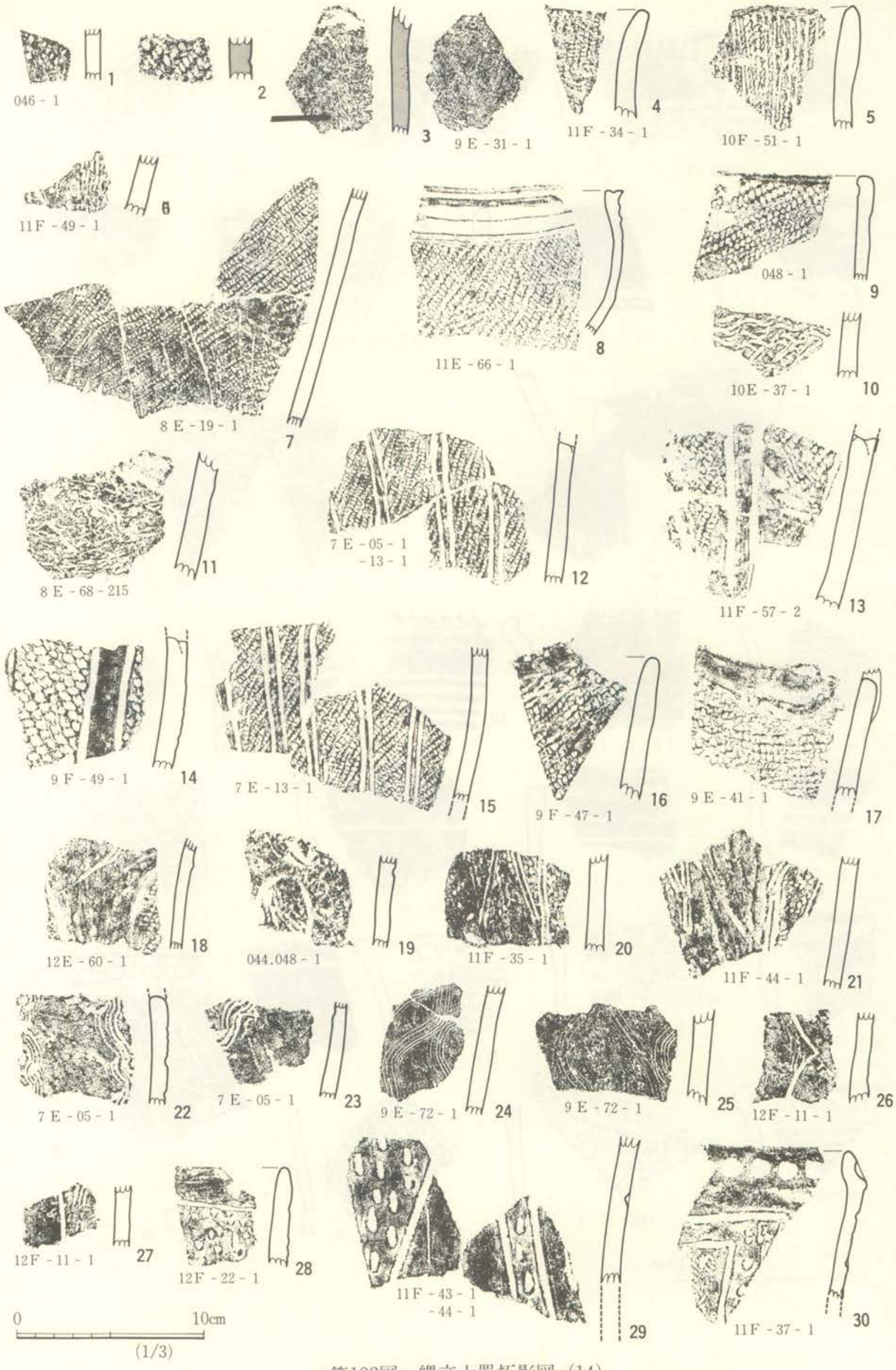
第179図　縄文土器拓影図（11）



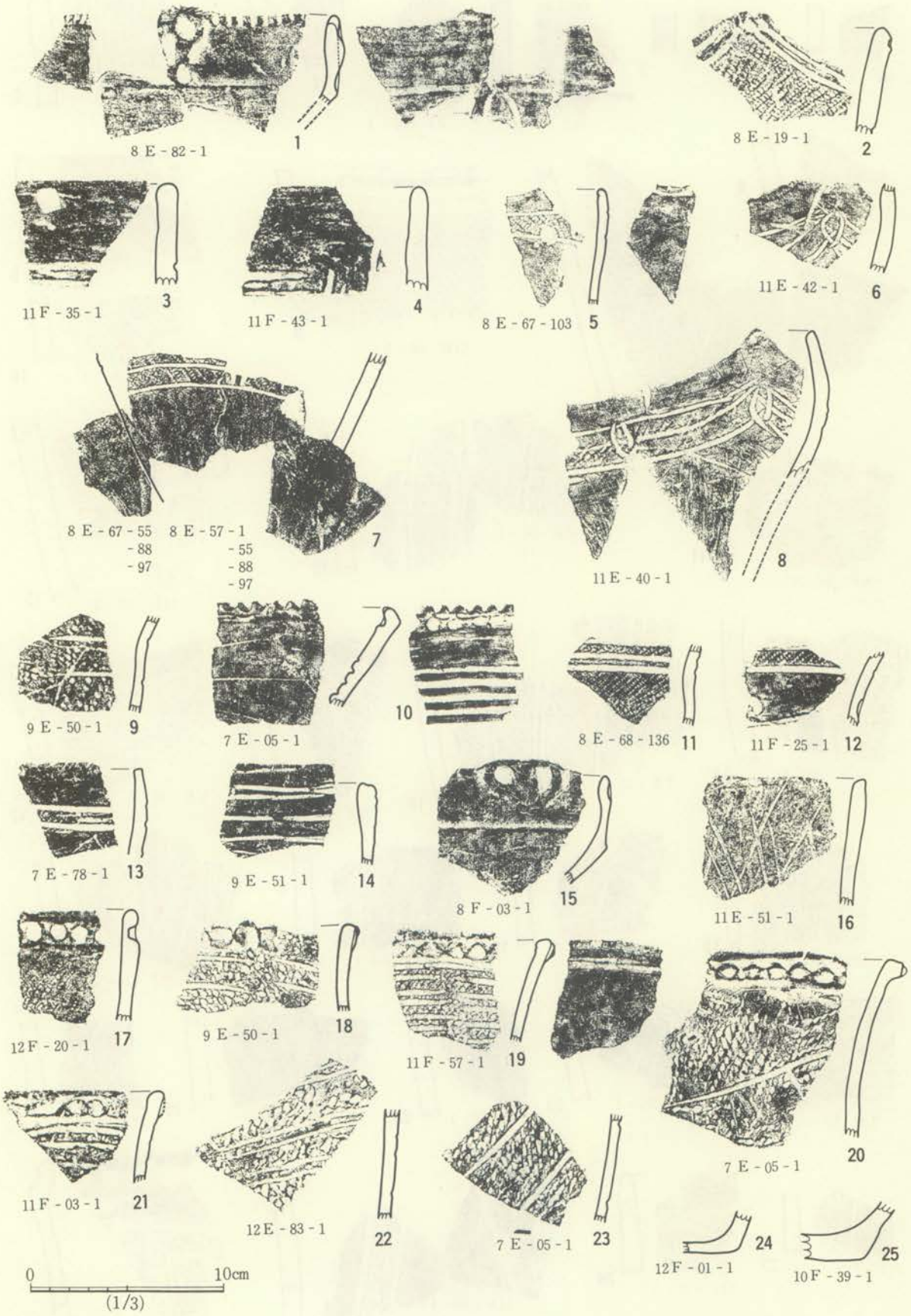
第180図　縄文土器拓影図 (12)



第181図　縄文土器拓影図（13）



第182図　縄文土器拓影図（14）



第183図　縄文土器拓影図 (15)

２．石器

本遺跡から出土した石器には、石鏃・磨製石斧・打製石斧・敲石・磨石・玦状耳飾などがある。いずれも縄文時代の所産となろうが、それ以降の人々によって再利用されていたものも少なくない。再利用の石器は、敲石・磨石に限られているようである。これらの出土層位は、包含層が存在していないところから、表土層のものが多く、縄文土器との関連は把握しにくい。

石鏃〔第184・185図、図版94・95（１～71）〕

71点を採集したが、欠損品も多い。縄文時代でも、前期から後期に至るまでの長期間の石鏃であり、タイプは様々となる。１・２は有茎鏃で、特に２は入念な調整が施されている。３以降は無茎鏃で、そのうち45～49は一次剥離面や、自然面を残しているところから未製品と思われる。石材は、１～49がチャート、50～65が黒曜石、66～69が頁岩、70が玄武岩、71が細粒砂岩となっている。

錐〔第185図、図版95（72）〕

１点のみ出土した。欠損品であるが、形状は把握できる。先端部の断面は菱形となり、縄文時代の錐の特徴をよく表わしている。石材はチャートである。

掻器〔第185図、図版95（73）〕

１点の出土で、しかも約半分が欠損している。表裏両面ともに一次剥離面を残し、周囲をていねいに調整している。形状より爪形掻器と考えられる。石材は黒曜石である。

玦状耳飾〔第185図、図版95（74）〕

グリッドから１点出土した。欠損品ではあるが形状は把握できる。ていねいな作りとなっているが、石質が粗悪で、砕面を見ると気泡が認められる。おそらく縄文時代前期のものであろう。石材は滑岩。

磨製石斧〔第185図（75～80）〕

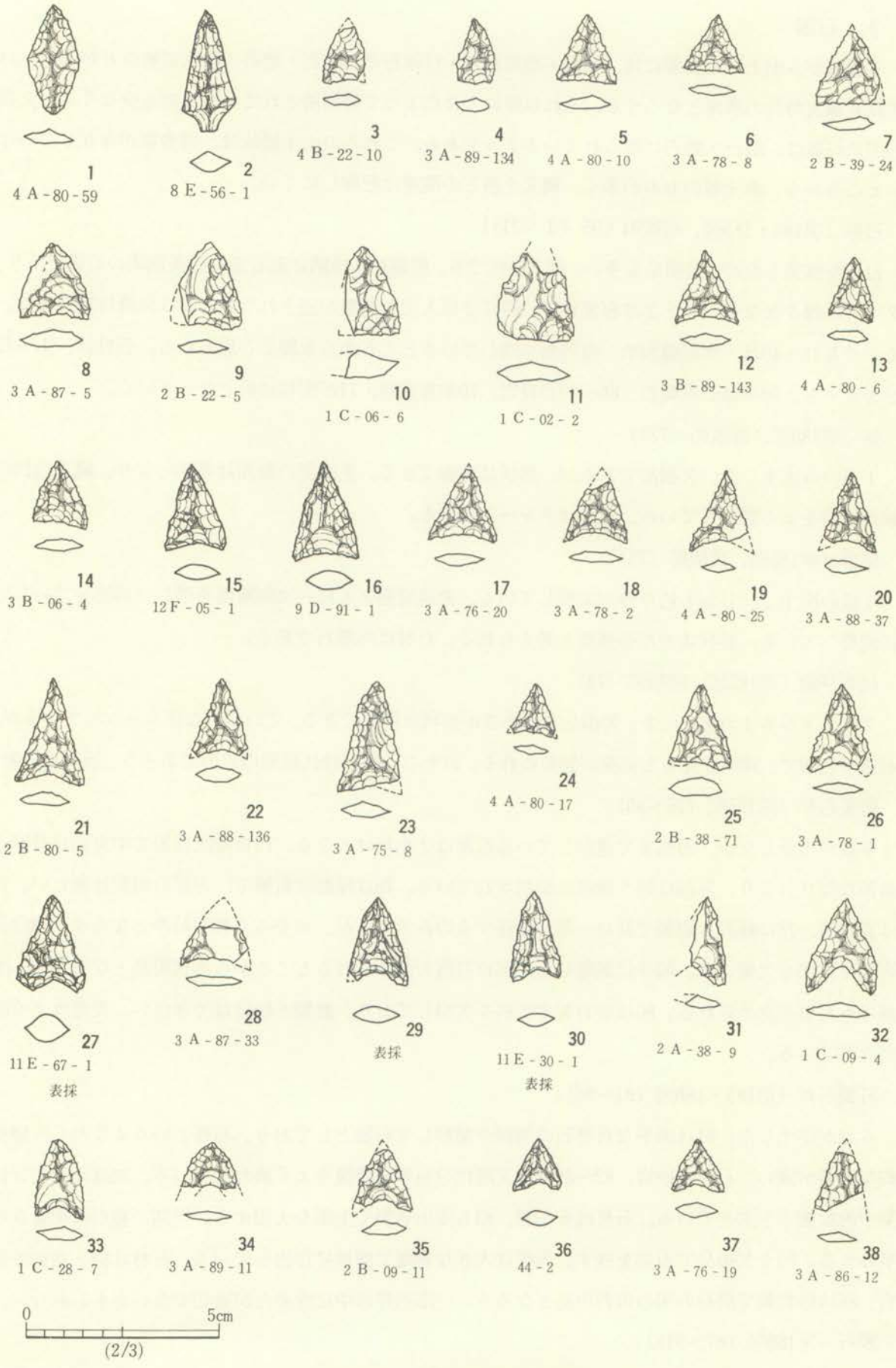
６点が出土したが、刃部まで遺存している石斧は２点だけとなる。75は凝灰岩製で中央部が分厚く頑強な作りとなり、刃部は鋭く緻密に研磨されている。76は緑泥片岩製で、刃部の研磨は著しい。77は頁岩製、78は緑泥片岩製で共に一部が遺存するのみであるが、おそらく磨製石斧となろう。79は砂岩製で刃部を欠損する。偏平に剥離した刃部は打痕の認められるところから再利用品となろうか。頭部にも打痕が認められる。80は砂岩製で両端を欠損しており、磨製と断定はできない。表面はよく研磨されている。

打製石斧〔第185・186図（81～86）〕

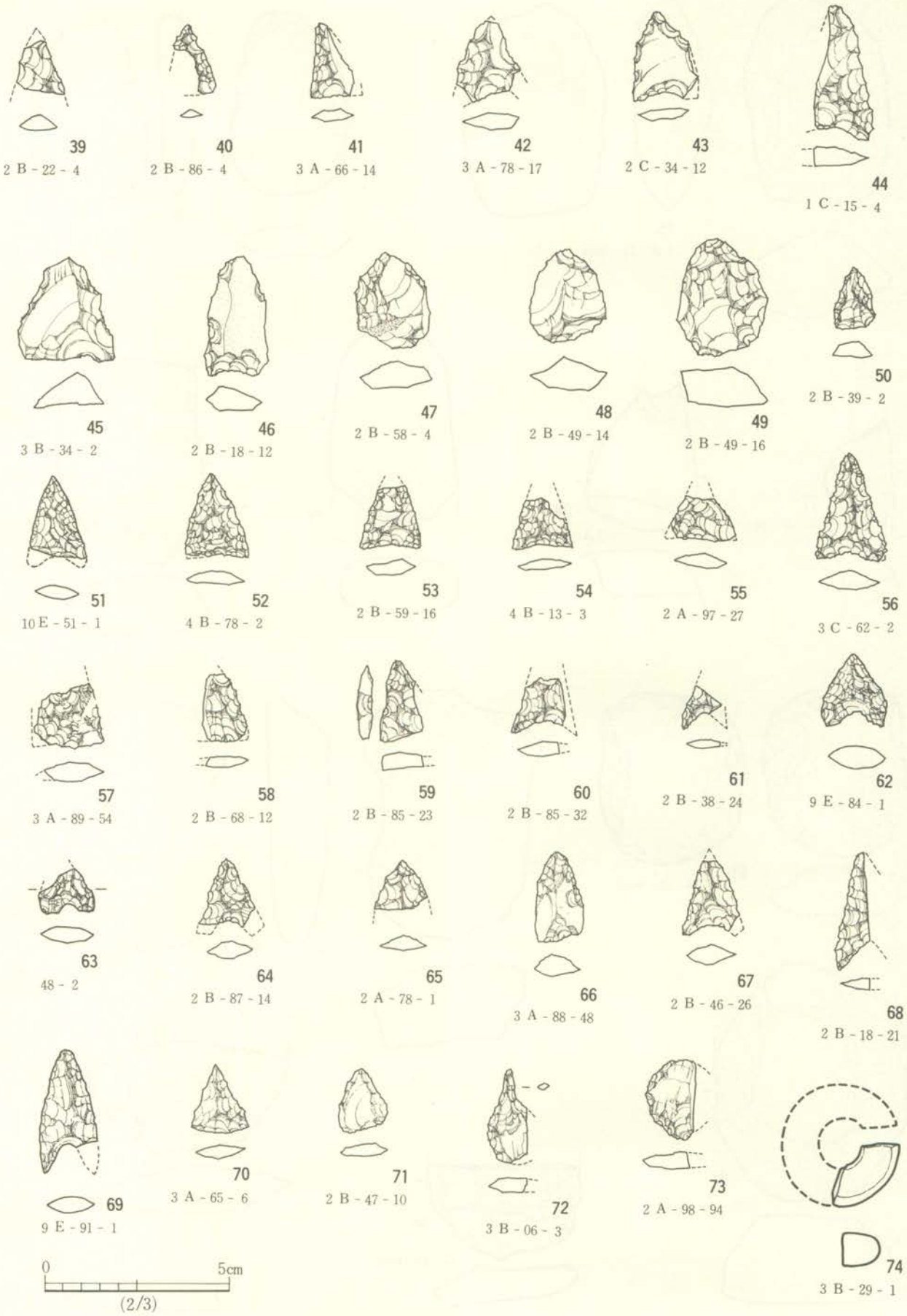
６点が出土した。81は偏平な自然石の周囲を整形して石器としており、石斧というよりむしろ掻器的な要素が強い。石材は砂岩。82～86は縄文時代の石斧の特徴をよく表わしている。82は片面だけに集中的な加工を加えている。石材は安山岩。83も安山岩製で上部を欠損する。周囲の整形は粗雑さが窺われる。85も欠損品で刃部を残す。刃部は大きな剥離で簡単に作出している。石材は84と共に玄武岩。86は砂岩製で磨石の類の再利用品となろう。一応石斧の中に含めたが適切でないかもしれない。

敲石〔第186図（87～91）〕

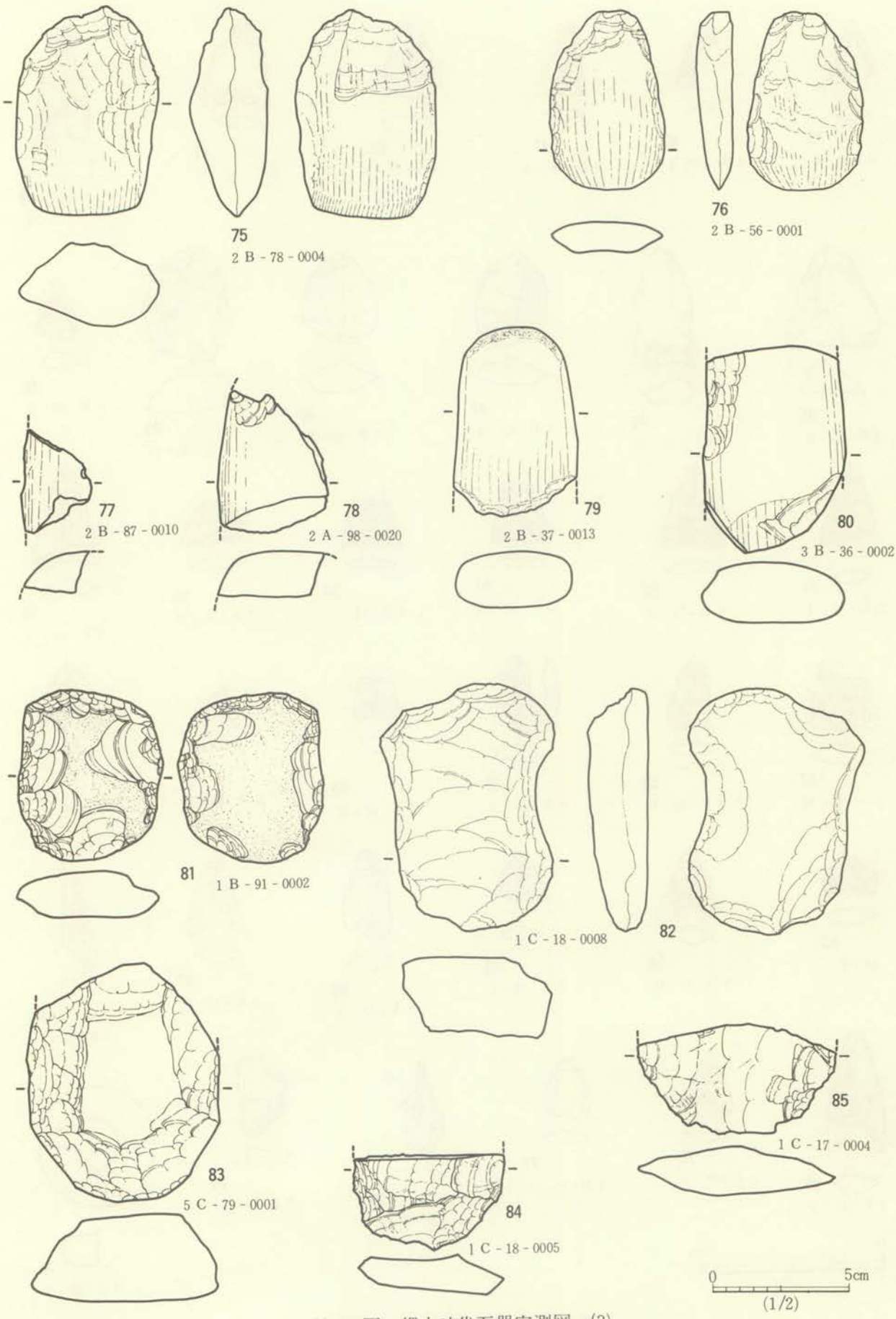
５点出土したが、完形品は１点と少ない。91は剥離面を利用しており、チョッパーとしてもよい。



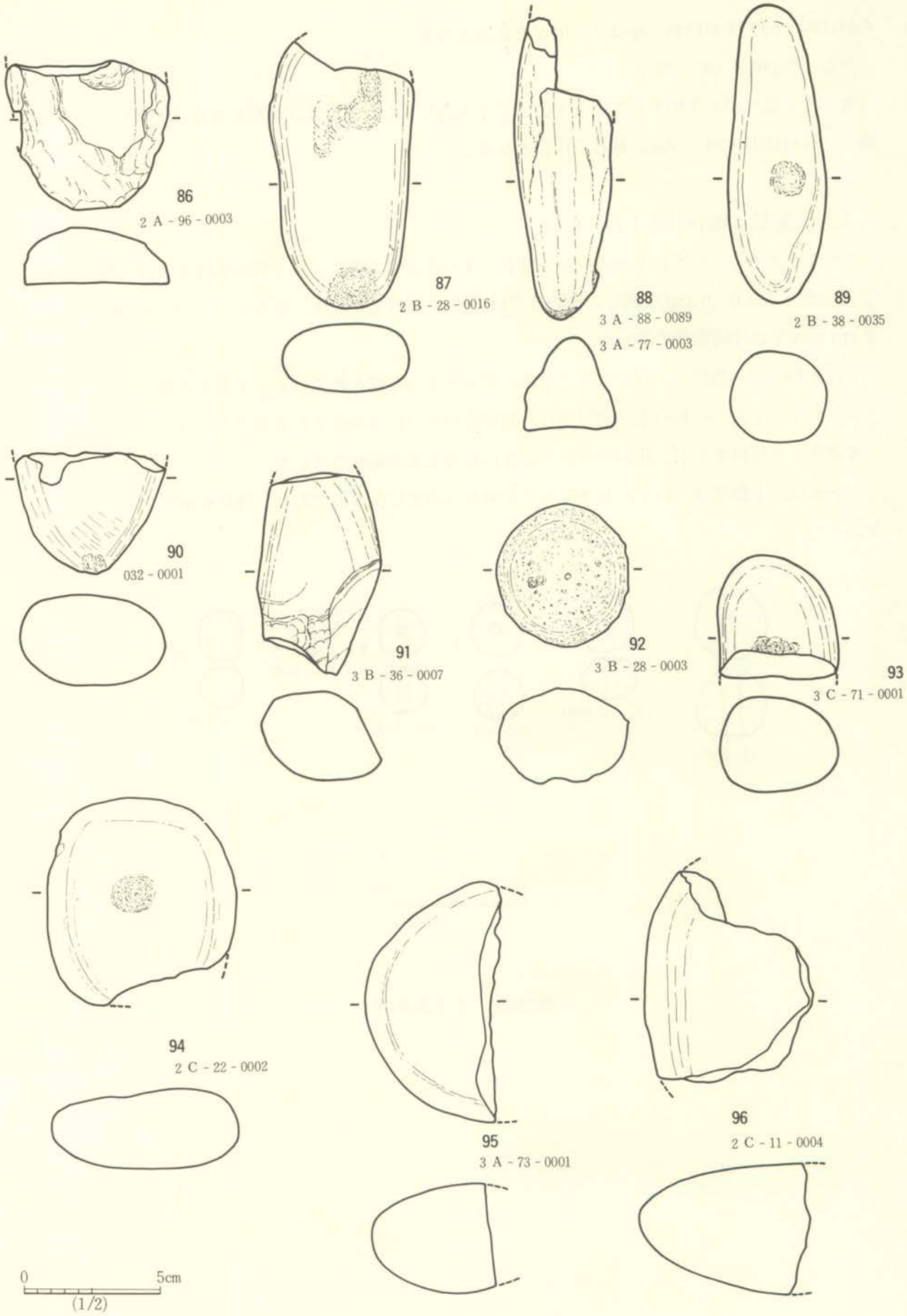
第184図　縄文時代石器実測図　(1)



第185図　縄文時代石器実測図　(2)



第186図　縄文時代石器実測図　(3)



第187図　縄文時代石器実測図　(4)

石材は87・89・90が砂岩。88は？　91が玄武岩となる。

磨石〔第186図（92～96）〕

他にも小破片が若干出土しているが、図示は5点とした。92はほぼ球形となる。他はいずれも欠損品で、石材は93・94が砂岩。他は安山岩となる。

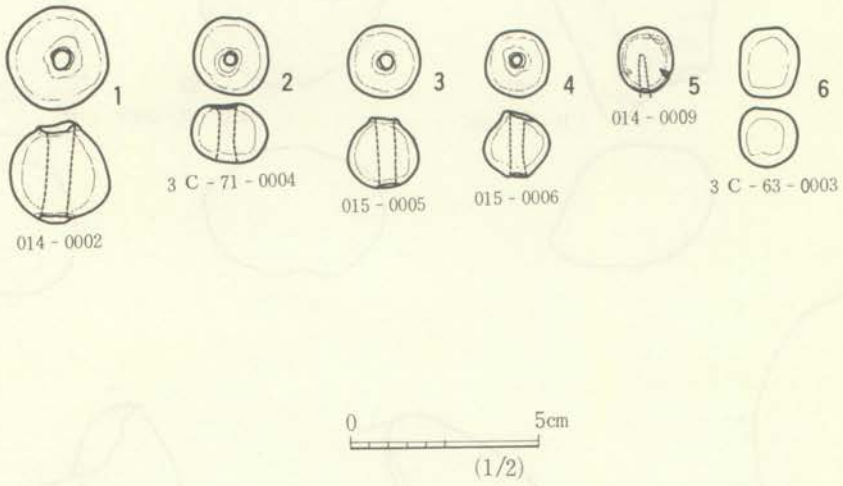
3．土製品〔第187図（1～6）〕

1～4が土玉で、いずれも一方向から穿孔しているようである。1が最も大きく、径・厚さともに2．7 cm、孔径0．6 cmを測る。他の3点は、径が1．8 cm前後、厚さ1．5～1．8 cm、孔径0．4 cm前後とほぼ同規模であった。

5は人形の首の部分で、目や口などが浅い窪みとなって描かれている。下面から穿かれている細い穴が、おそらく人形の胴の上へ飛び出した竹串状のものにはめ込まれるのであろう。

6は土玉と類似するが、孔が穿かれていないため土玉の範から外した。

以上6点の土製品は、いずれもグリッドや溝から出土したものであり、時期を確定することはできなかった。



第188図　土玉実測図

6章　小　　結

1．先土器時代の遺物について〔第189図〕

各年度の調査を通じて、本遺跡では、密度は薄いものの、調査区のほぼ全域で先土器時代の石器が出土しており、また包含層はⅢ層からⅣ層までの間に計4層認められた。

その最も古い時期は、Ⅶ層（第Ⅱ黒色帯）中位の層である。10E北側では、黒色頁岩のフレイク主体のユニットが検出されたが、他は単独での出土で、強いて言えば、調査区中央の6C・D・E区に集約される傾向がある。10Eユニットでは、石核本体の出土はなかったが、接合資料には、原材を回転させて打面を転移しながら剝ぐ技法がみられる。またユニット中には、他にナイフ形石器(38)、砥石（70）等がある。単独出土では、6C区で楕円形で礫面を多く残す局部磨製石器（1）がある。この石器は近年各地で出土例が知られてきたもので、先の剝片剝離技法と同様に、Ⅶ層出土の石器群を特徴づけるものといえる。

次の包含層はⅦ層上面からⅥ層にかけての層で、ナイフ形石器3点、スクレイパー等が散発的に出土した程度で、量的には少ない。しかし大形の石刃を利用したナイフ形石器(2)や、大形のスクレイパー（13）など、定形化された良品が得られている。

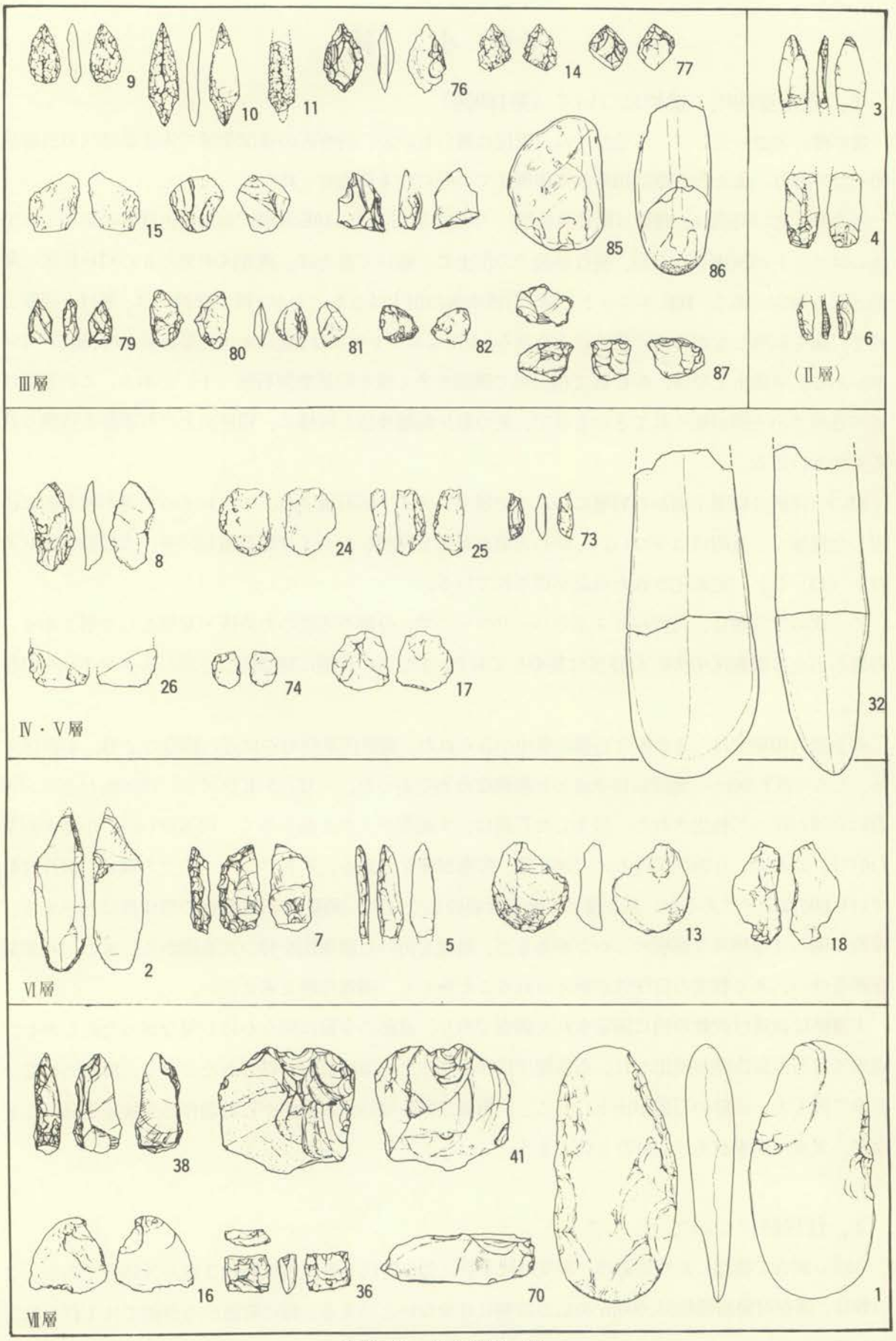
その次の包含層は、丹沢パミス上のハードロームで、分離不可能のためⅣ・Ⅴ層とした層である。石器の出土は調査区中央の6D区に集中しており、またこの時期に特徴的な小形のスクレイパーが目立つ。

最上部のⅢ層では、3か所に石器の集中がみられた。調査区東側の谷に近い部分の2B、4B区では、ともに径約20mの範囲に10点ほどと散漫な分布であった。一方、8E区では、径20mほどに、礫群に石器が伴って検出された。出土した石器は、尖頭器が7点と最も多く、円基形(9)、小瀬ケ沢型（10・11）のもの、片面加工のもの（76）等、形態が種々である。8Eユニット出土の礫は、破片総数では1,000点ほどであるが、熱を受けて多くは破砕しており、実際には100点余の個体数にとどまる。礫群に関しては種々な解釈のしかたがあるが、焼礫を用いた調理法を持つ民族例から、また、石器製作跡を伴い、ある程度の定住性が認められることからも、調理の跡と考えたい。

本遺跡は鉄道付設敷地内に限定された調査であり、遺跡の全容は明らかにし得なかった。しかし、Ⅶ層では石器製作跡が検出され、石器製作技法を知る上での好資料が得られたことや、磨製としては日本で最も古い段階の石器が出土したこと、Ⅲ層で礫を用いた調理跡や石器製作跡が検出されたことなど、大きな成果があげられたといえよう。

2．住居跡について

今回の調査で確認した住居跡は、縄文時代1軒、弥生時代9軒、古墳時代3軒の計13軒である。この数は、調査対象面積約35,000m²の広さの割には少ないといえる。特に町道から西側では1軒も検出されていない。



第189図　出土石器一覧

これらのことから、本遺跡は、各時期の集落跡の南限付近に相当し、主となる部分は、この北側付近にあるのではないかと考える。

（１）縄文時代の住居跡

わずか１軒のみであり、出土した遺物の量も多くないため多くを語ることはできないが、伴出した土器より、縄文時代中期後半に相当する住居跡と判断した。

住居跡の規模が小さい割には炉址が大きく、また長期間使用されていることから、日常生活の場として利用したのではなく、何か炉を活用するために建てられた遺構と考えることもできる。

（２）弥生時代の住居跡

本遺跡で最も多く検出した住居跡で９軒を数えるが、概して遺物の量は少ない。また小破片の割合が多く、実測可能な土器は、１軒当り１～３点であった。

住居跡は、その形状より分類すると、４隅が丸味をもつ長方形のもの（001・019・022・026・028・035）６軒、４隅が丸味をもち方形に近いもの（031・038）２軒、不整形のもの（010）１軒となる。また長方形のものは、大規模のもの（001・022）と、そうでないもの（019・026・028・035）に分けることができる。

これらの位置関係をみると、長方形で小規模の住居跡は、本遺跡の北西付近に一列に並んでおり、方形に近い住居跡は北側に寄って位置し、001号住居跡を挟んでいる。このように両者が比較的まとまった位置関係にあるのに対し、長方形で大規模な住居跡は、北と南へ約80m離れて位置しており、不整形な住居跡は、各住居跡の中心付近に位置している。

以上のように、住居跡の形状と分布に、少なからぬ関係があると思われるが、これが時期的な差あるいは集団との差とは一概にいえないようである。なぜなら、各住居跡から出土した土器にそれ程の時間差が見出せないことと、相互にある程度の距離を置いて構築しているからである。このことは、各住居がほぼ同一の時期に存在し、相互に構築場所を考慮していると考えられる。したがって、形状の相違や配置は、一集団の中における構成上等の違いによるものと思われる。

しかしながら、これらを正確に把握するには資料が少な過ぎるようである。今後周辺の調査が実施されれば、より多くの資料が発見されるであろうし、またそれを期待したい。

なお出土土器は、その数が少なく、良好な資料がないため、各住居跡におけるセット関係等を把握することができなかったが、大まかにみて、壺が多く甕や鉢などの器種は少ない。また、北関東系の土器が大半を占め、南関東系が少ない傾向にある。これは、この集落を知る上で大きな特徴といえよう。時期的には、弥生時代後期末葉に相当する。

（３）古墳時代の住居跡

当該期の住居跡は３軒で、北東から南西へほぼ一直線上に並ぶ。このことが、当該期の集落の構成

を考える上でどのような意味をもつのか不明であるが、弥生時代の住居跡も似たような配列であった。このような状況になっているのを、単なる偶然とも考えられるが、もし何らかの原因によるものと考えると、最も可能性が高いのは地形によるものであろう。現在の地形は、畑地のため平坦となっているが、その当時は、北東から南西に延びる起伏があったのではないだろうか。そのため、時代の違う住居跡が、似たような配列になったと考えたい。

このように考えると、当該期の住居跡は、本遺跡の南側へ延びる可能性は少なく、北側に広がる可能性が出てくる。しかも、西側への広がりはほとんどないといえよう。

次に3軒の住居跡の特徴をまとめてみたい。平面形は、002号住居跡がやや不整形な長方形を呈し、他の2軒（004・023）が整った方形を呈するが、規模では大形（023）と小形（004）の違いがみられる。このように、平面形と規模を比較すると、3者3様の特徴を有しているが、カマドの位置は、西側か北西側とほぼ類似している。これは、地形に左右されるもので、前述した住居跡の配列とも関係するものと思われる。

出土遺物は、土器を中心として比較的多く、遺存度も良い。土器の基本的な組合わせは、甕・甑・鉢・高坏・坏で、中でも坏が半数以上を占める。また、時間的な差もほとんど認められず、いずれも古墳時代後期後半に相当する。

土器以外では、023号住居跡より出土した管玉と土製の玉に注目したい。従来この手の遺物は古墳に伴うことが多く、生活の場から出土することは少ない。また、当該住居跡が大形であることと考え併せると、本跡が当該時期の中心的存在であった可能性が高い。しかし、わずか3軒の資料しかないため、断定はできない。今後周辺の調査が進めば、より確かな実証例を発見できるかもしれない。

3．その他の遺構について

住居跡以外の遺構としては、塚1基、土壙9基（1群を含む）、溝20数条がある。

各遺構とも、伴出する遺物が皆無で、正確な時期を把握することはできなかった。また、土壙や溝は、他の遺跡でもそうであるように、その性格を把握することさえできなかった。ただ、012号址と025号址が、その形態より縄文時代の陥し穴と推定したが、確たる根拠はない。

4．Ⅰ群土器について

Ⅰ群土器については、大体花積下層式であることは先に触れたとおりである。

1類土器の条痕文のみが施文されているものについては若干の疑問も残るが、含まれる可能性も有り得るので一括した。

本県で、花積下層式土器を出土している遺跡は、新田野貝塚（註1）幸田貝塚（註2）の他、まだ多いとは言えず、しかも、資料的には本型式の全容を明らかにしているものはなく、いずれも一面を知るに過ぎない。

最近、本型式の3区分が述べられている（註3）が、これによると後半に属するとされる。しかし分

布に若干の相違が認められるものの、２類土器のように、裏面に貝殻条痕を残す比較的古い部類に属するものと５類土器の蕨手状の撚糸圧痕のものとが、ほぼ同地点から出土している。このことと、貝殻文の一群のあり方と合せて、関東地方南東部に位置する千葉県における花積下層式の細分の意味を考える必要がある。

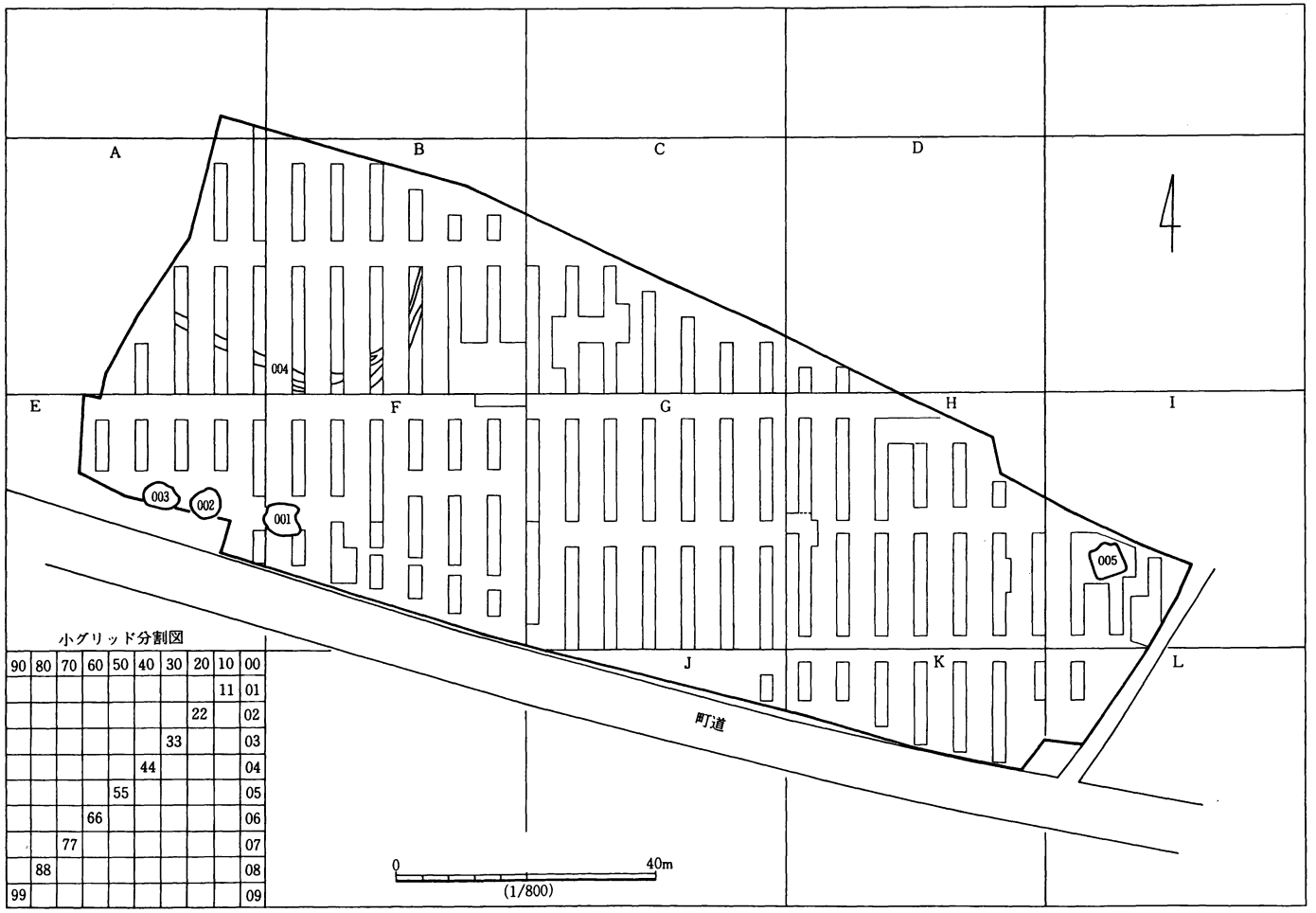
註１　武井則道他「新田野貝塚」 立教大学考古学研究会　1975

註２　関根孝夫他「幸田貝塚―第２次（昭和46年度）調査概報―」松戸市教育委員会　1972

註３　小出輝雄「花積下層式土器の成立と展開」 『研究紀要２』 富士見市教育委員会　1982

第4篇　谷田神楽場遺跡

(CN504)



第190図　遺構及びトレンチ配置図

１章　調査の概要

本遺跡の調査は、まず幅２ｍのトレンチを南北方向に設定し、遺構の分布を把握した後、遺構を検出した部分を拡張する方法をとった。

調査区は、基準点測量によって得られた基本杭をもとに、遺跡全体を１辺40mの方眼に区切った。この１辺40mの方眼単位を大グリッドと呼称し、大グリッドをさらに１辺２ｍの方眼に区切った単位を小グリッドとした。大グリッドには、A～Lの記号を付し、小グリッドは00～99の番号を付した。各々の記号及び番号の配列は、第190図のとおりである。

遺構番号は、調査を着手した順に001～の通し番号とし、遺構の性格毎に番号を付すことは避けた。

遺物の取り上げは、小グリッド単位（遺構内出土の遺物は遺構毎）とし、取り上げた順に0001～の通し番号を付した。

2章　遺構の調査

1．塚

本遺跡において調査した塚は、総数で3基である。いずれも遺跡西端部の町道沿いに位置し、東西に並んで構築されていた。遺構番号は、調査着手順に東より001～003とした。

調査は、十文字に直交するベルトを残して掘り下げる方法をとった。したがって、各塚の盛土等の堆積状態は、このベルト断面の土層観察を行うことにより把握した。また、各塚で類似する層は同一番号を付したので、各塚の土層説明をここでまとめて記しておきたい。第1層は表土及び攪乱層。第2層は暗褐色土層（やや軟質）。第3層は暗褐色土層（褐色土を含む）。第4層・第5層は黒褐色土層で、後者がややしまっている。第6層は褐色土層。第7層は暗褐色土層(若干褐色土を含む)。第8層は黒褐色土層（しまっている）。第9層は暗褐色土層（第7層より褐色土を多く含む）。第10層は褐色土層。第11層は暗褐色土層(やや黒味を帯びる)。第12層は褐色土層。第13層は黒褐色土層で、旧表土層と考えられる。第14層は褐色土層(やや軟質)。第15層・第16層は暗褐色土層で、後者がより多く褐色土ブロックを含む。第17層は黒褐色土層(やや軟質)。以上が、各塚で観察した盛土等の観察結果である。

なお、土層観察により得られた成果等については、以下の各塚毎の調査成果の項で述べてみたい。

001号址〔第191図、図版97〕

3基の塚のうち東端に位置し、最も規模の大きい塚である。25cm単位の等高線による地形測量の成果では、最頂部の標高24.178m、平坦面との比高差約1.7mを計測した。東側の等高線が大きく流れており、この部分の盛土の崩れを示している。そのため塚の端部を正確に把握することは困難であるが、平面形は、東西径約5.3m、南北径約4.6mの方形を呈していたと推測する。

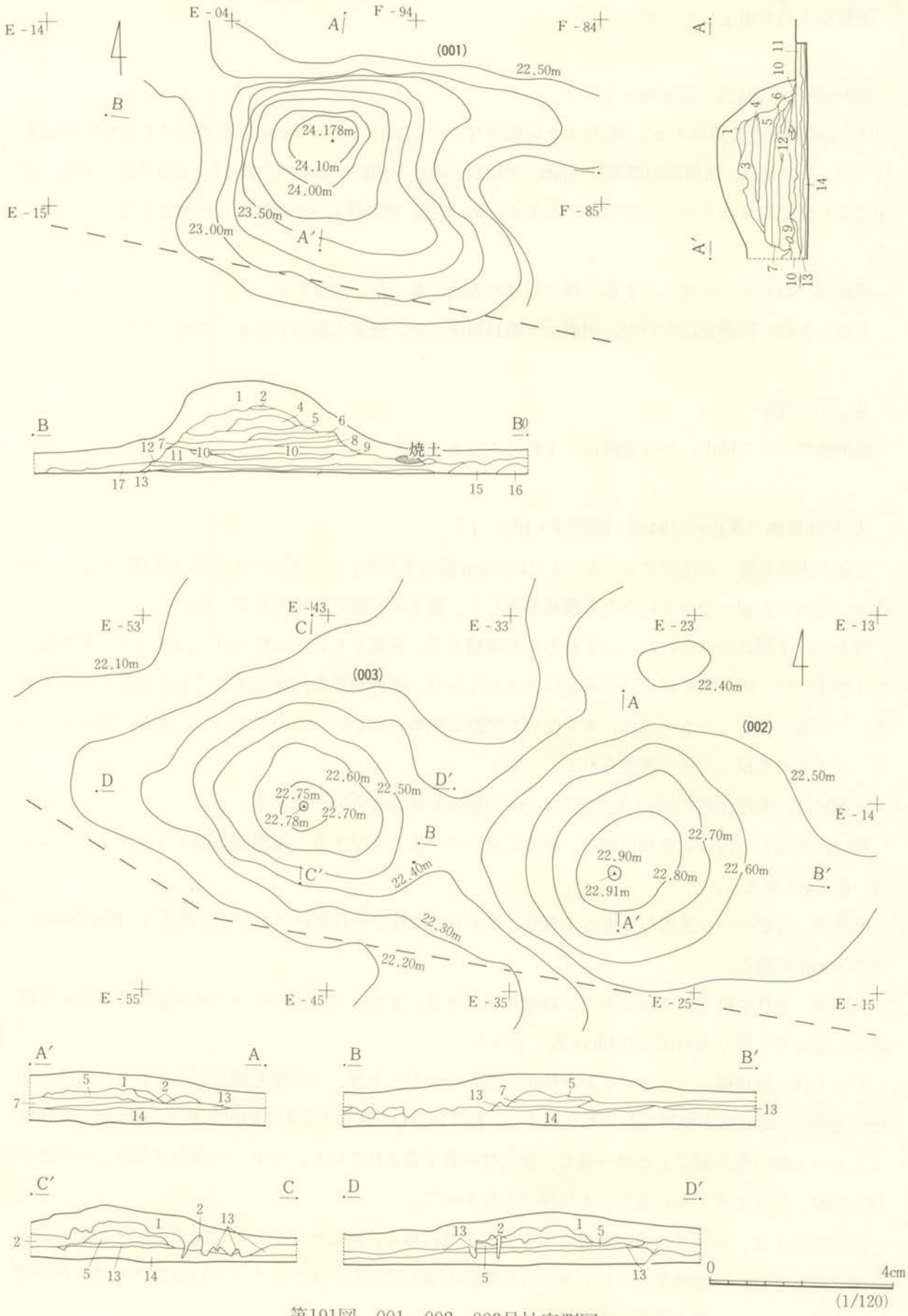
土層観察の結果、構築方法は、旧表土層（第13層）上面をほぼ平坦に整地した後、暗褐色土を主体とする基盤（第11層・第12層）を築き、その上へ盛土（第2層～第10層）をほぼ水平に積み上げていることが判明した。

遺物は、1点も出土していない。

002号址〔第191図、図版98－1・2〕

001号址の西方約8mに位置する。マウンドの盛り上りが低かったため、10cm単位の等高線による地形測量を行った。その結果、最頂部の標高22.91m、平坦部との比高差約0.5mを計測した。おそらく盛土の大半を削平されたため、このように低いマウンドを呈すると考える。したがって、現況より旧状を推定することは困難であるが、平面形は、東西径5m前後、南北径4.5m前後の方形を呈していたと考える。

土層観察も、遺存状態がよくないため満足な成果を得られなかったが、001号址に準じた構築方法であったと推測する。



第191図　001・002・003号址実測図

遺物は１点も出土していない。

003号址〔第191図、図版98－１・３〕

002号址の西方に隣接する。002号址と同様マウンドが低いため、10cmの等高線による地形測量を行った。その結果、最頂部の標高22.78m、平坦面との比高差約0.4mを計測した。002号址と同様の理由により推定ではあるが、平面形は、東西径4.5m前後、南北径4.5m前後の方形を呈していたと考える。

構築は、おそらく前述した２基の塚と同様な方法であったと推測する。

本址と直接の関連性はないが、旧表土下第14層中より、縄文土器がまとまって出土した。

２．住居跡

本遺跡において検出した住居跡は、１軒のみである。

005号住居跡〔第192～194図、図版99・100－１〕

遺跡の東端北寄りに位置する。表土より約40cm掘り下げた、ソフトローム上面で確認した。この周辺は、以前午蒡畑となっていたため攪乱が著しく、覆土の上部にまで及んでいた。

覆土は、７層に分けられた。いずれも自然堆積土で、各層ともローム粒やロームブロックを含む。第４層中には、焼土粒や炭化材が多量に含まれており、本跡が焼失住居であることを示している。また、この層と接している床面は、火を受けた痕跡が認められない。このことから、本跡が焼失したのは、第４層が堆積した後と考えられる。

平面形は、東西径約4.3m、南北径約4.2mの整ったほぼ正方形を呈する。

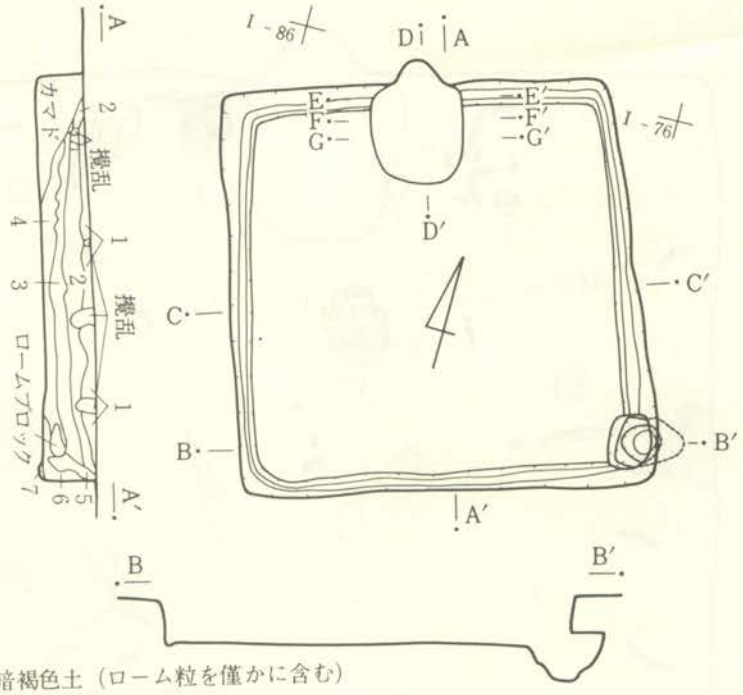
壁は、各辺とも遺存状態が良好で、垂直に近い立ち上りを呈する。遺構確認面より床面までの深さは、約55cmである。

壁溝は、各壁沿いに連続して巡っており、カマドの両端でそれぞれ立ち上る。規模は、幅約10cm、深さ５cmを測る。

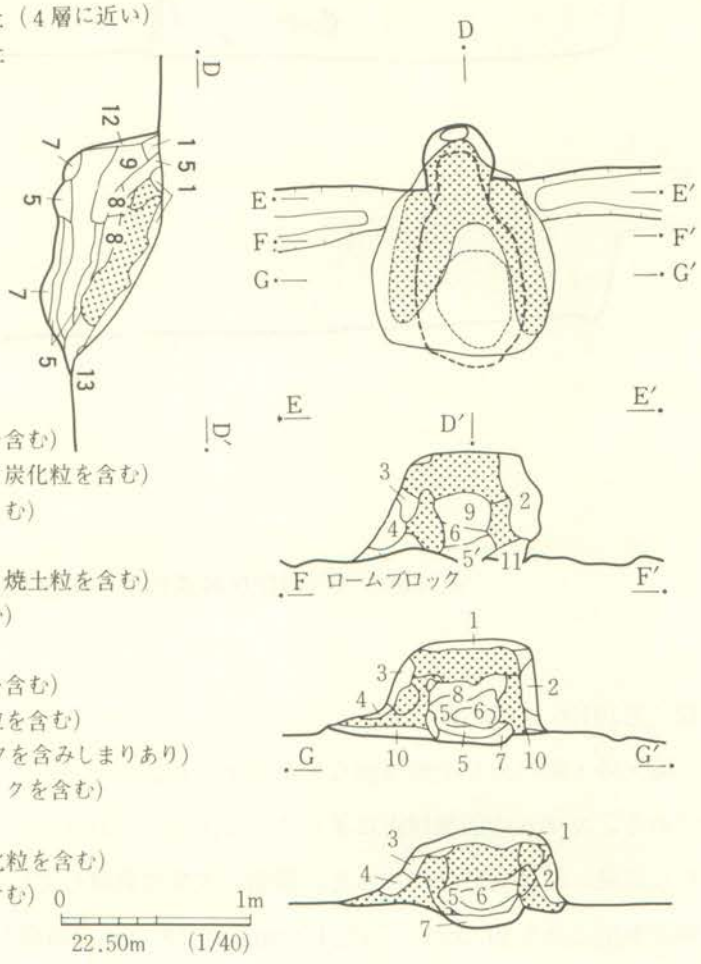
床面は、全体に堅くしまっており、ほぼ平坦である。また、ロームブロックを全面に敷き詰めて貼床としており、掘り方の深さは10cm程であった。

ピットは、南東壁コーナーに１か所検出した。このピットは、一部壁を掘り込んでおり、長径約80cm、短径約50cmの不整形な長方形を呈する。掘り込みは、床面から約45cmを測る。覆土は、茶褐色土とローム粒の混土層による単一層で、炭化材が若干含まれていた。なお、床面及び貼床下の精査を行ったが、柱穴と考えられるピットは検出しなかった。

遺物の出土は、カマドの周辺が最も多く、大半を占める。特にカマド右袖付近では、坏の完形品が５個体検出され、口縁部を上にして重なった状態を呈していた。また、カマド付近以外では、中央付近と東壁南寄りに、若干集中か所があった。

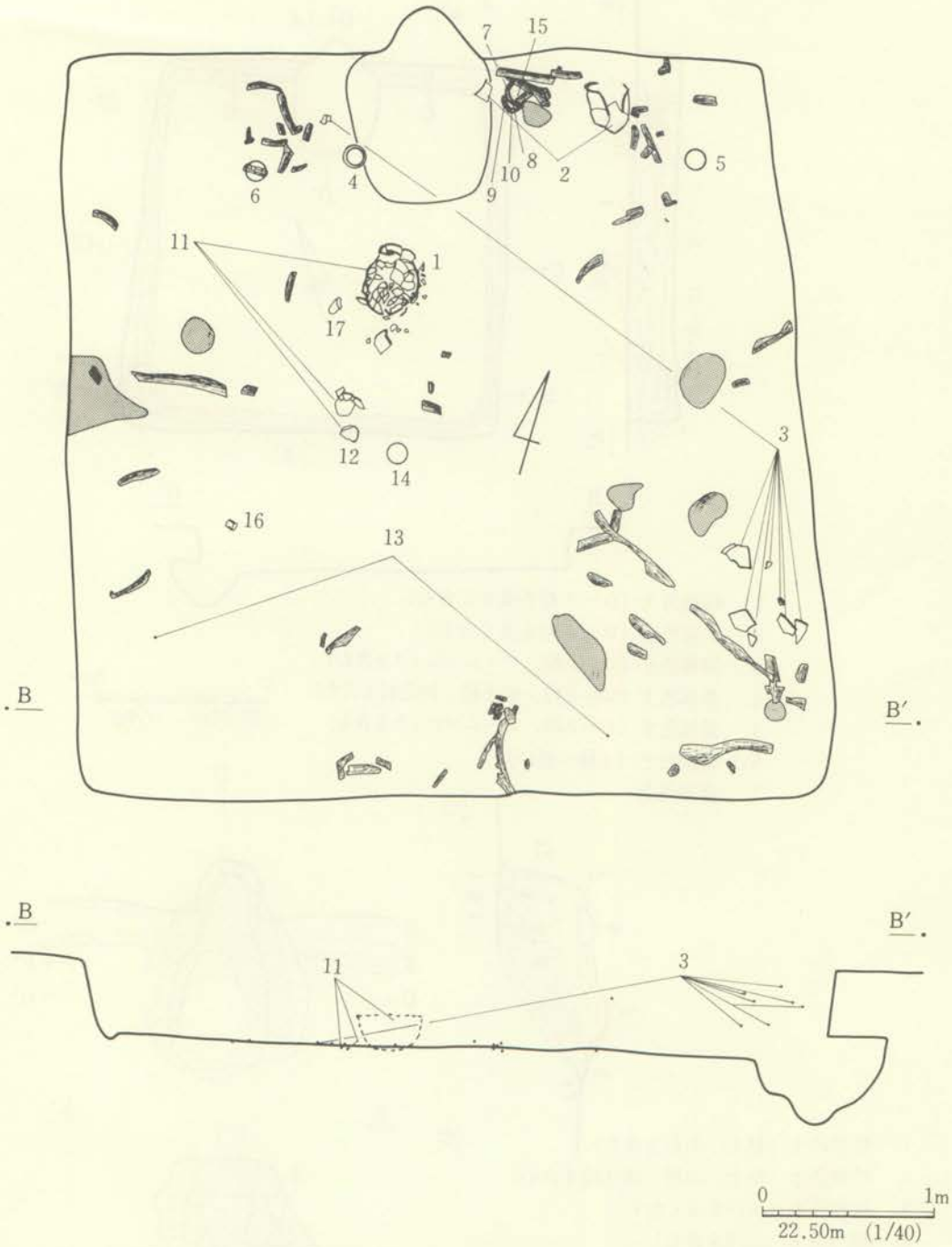


1. 暗褐色土（ローム粒を僅かに含む）
2. 黒褐色土（ローム粒を多く含む）
3. 黒褐色土（ローム粒、ロームブロックを含む）
4. 茶褐色土（ローム粒、焼土粒、炭化粒を含む）
5. 茶褐色土（ローム粒、ロームブロックを含む）
6. 茶褐色土（４層に近い）
7. 黄褐色土



1. 暗褐色土（粘土、山砂を含む）
2. 暗褐色土（粘土、山砂、炭化粒を含む）
3. 暗褐色土（山砂を多く含む）
4. 暗褐色土（山砂を含む）
5. 黒褐色土（粘土、山砂、焼土粒を含む）
6. 黒褐色土（焼土塊を含む）
7. 焼　　土
8. 褐 色 土（山砂、粘土を含む）
9. 暗褐色土（僅かに炭化粒を含む）
10. 褐 色 土（ロームブロックを含みしまりあり）
11. 暗褐色土（ロームブロックを含む）
12. 褐 色 土
13. 黒褐色土（焼土粒、炭化粒を含む）
14. 粘　　土（黄色山砂を含む）

第192図　005号住居跡実測図



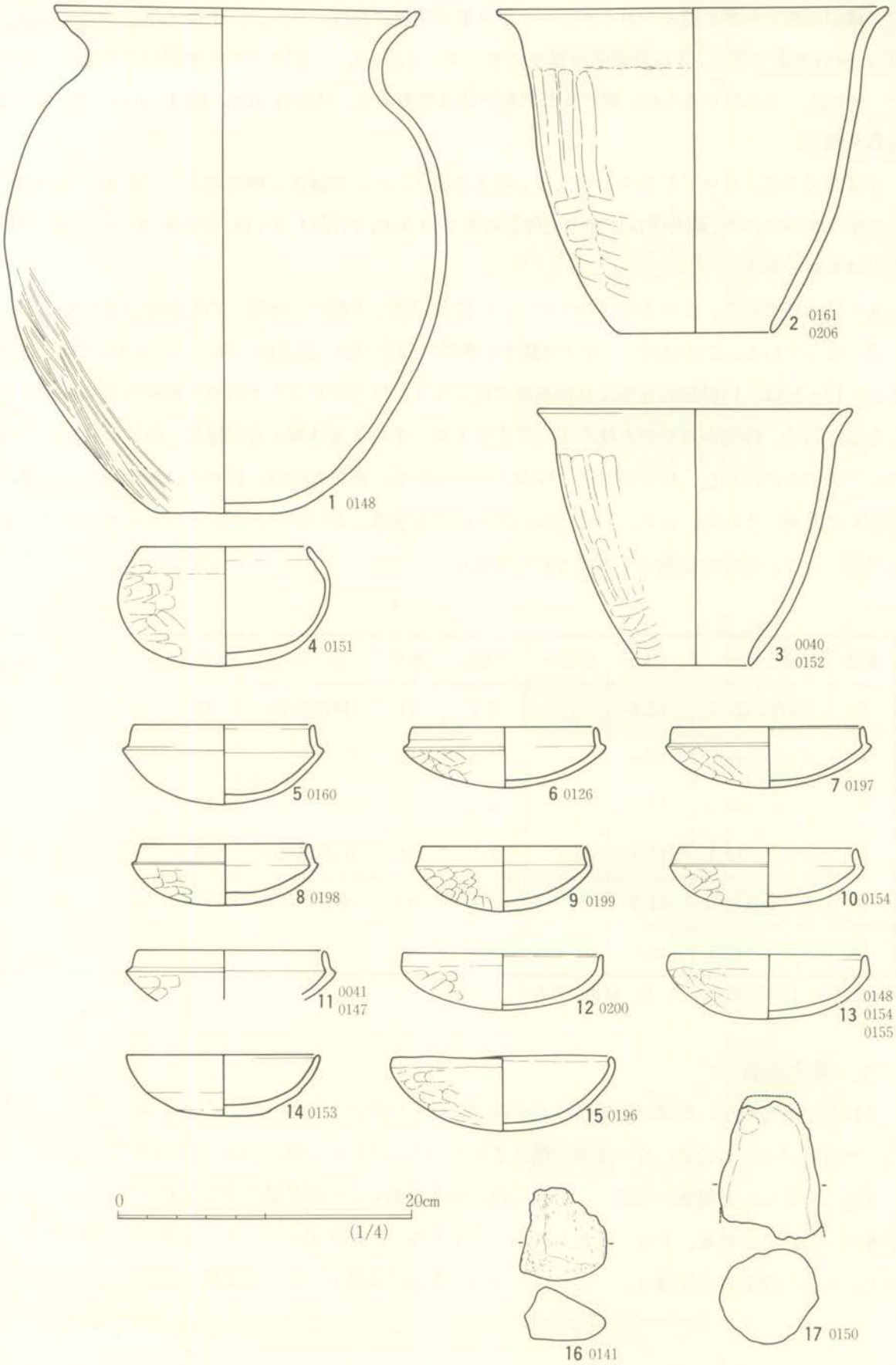
第193図　005号住居跡遺物出土状態実測図

出土遺物〔第194図、図版100－1〕

甕・甑・埦・坏・軽石及び土製支脚などが出土した。

1は甕である。カマドの前面付近にまとまって出土しており、土圧によりつぶれた状態を呈していた。復原した結果、ほぼ完形品になった。器面の大半は剝離しているが、遺存部に赤彩がみられる。最大径は胴部中位にあり30.2cm、口径24.8cm、底径8.2cm、器高34.0cmを各々測る。

2・3は甑である。2はカマド右袖部付近から出土している。復原した結果、全体の⅔程が接合でき



第194図　005号住居跡出土遺物実測図

た。器面に若干剝離が認められるが、ヘラ削り痕が明瞭に観察できた。口径26.6cm、底径5.3cm、器高21.9cm を各々測る。3 は東側壁南寄りにまとまって出土し、一部カマド左袖部付近の破片と接合した。2 と比して小形であるが、器形及び調整方法は類似する。口径21.4cm、底径7.6cm、器高17.0cm を各々測る。

4 は椀である。カマド左袖部より完形品のまま出土した。口縁部に横方向のナデを施し、体部にはヘラ削りがみられる。最大径は体部中位付近にあり14.8cm、口径11.4 cm、器高 8.0 cm を各々測る。底部は丸底である。

5 ～15は坏である。5 ～ 8 及び10・11は、口縁部が強く内傾し、体部との接合部の張り出しが大きく段になっている。これに対し、9 は内傾する角度は同じだが、接合部の張り出しが弱く稜線になる。また、12・13は、口縁部の立ち上りが垂直に近くなり、接合部もやや不明瞭な稜線が認められるだけとなる。14は、体部からやや丸味をもって立ち上り、そのまま外傾する口縁部へ続く。15は、口縁部付近でわずかに内屈し、接合部に弱い稜線が認められる。調整方法は、何れも口縁部横ナデ、体部ヘラ削りで共通している。また、14はどちらかというと平底に近い形をしているが、それ以外はいずれも丸底である。各坏の法量は下表のとおりである。

ーは計測不可を示す。

番号	最大径cm	口径cm	底径cm	器高cm	番号	最大径cm	口径cm	底径cm	器高cm
5	(接合部)13.7	12.1	ー	5.4	11	(接合部)14.2	12.6	ー	ー
6	(〃)13.9	12.6	ー	4.0	12	(〃)13.8	13.6	ー	3.8
7	(〃)14.0	13.0	ー	4.1	13	(〃)13.9	13.2	ー	4.6
8	(〃)12.7	11.4	ー	4.1	14	(口縁部)13.0	13.0	5.7	4.1
9	(〃)12.0	11.2	ー	4.4	15	(接合部)15.4	15.0	ー	5.0
10	(〃)13.2	12.0	ー	3.9					

16は軽石、17は土製支脚で、共に破損品である。

3．溝状遺構

今回の調査で検出した溝は、遺跡の北東隅付近に 1 か所だけであった。この溝は、トレンチ調査によって確認できたもので、2 ～ 3 条で構成されている。これらの溝は、まとめて004号址とした。

本址は、トレンチ調査の段階で、近世以降の所産であることが予想できたため、各トレンチ毎に精査を行った。その結果、やはり近世以降のものであることが判明したため、完掘せずに調査を終了させた。なお、図面等の記録は、一応作成したが、本書に掲載することは省略した。

３章　遺構外出土の遺物

本遺跡は、前章で述べたように、最初トレンチ調査を行った後、遺構検出か所の周囲を拡張する方法をとった。したがって、トレンチ調査の際、遺構に伴わない遺物を多く採集した。そこで、以下これらの遺物のうち、実測復原可能なものや特徴のあるもの等、土器と石器に分けて列記してみたい。

１．縄文土器〔第195図・196図、図版100－２、101〕

第195図１は、胴部がくの字状に張り出す深鉢で、口縁部文様帯には弧状の沈線を配し、Ｒ－Ｌの単節縄文を区画内に充填している。また、胴部には条線を施した文様帯を配している。

２は、波状口縁の深鉢で、口唇部に刻みを施し、口縁部文様帯に斜状の沈線を、胴部にはＬ－Ｒの単節縄文を充填した弧状の沈線による区画文を配している。胴下半部には条線が施されている。１、２は曽谷式土器である。３はＲ－Ｌの単節縄文を器面全体に施した鉢である。

４は、口唇部と胴部上部に押捺を加えた隆帯を廻らした深鉢で、器面にはＲ－Ｌの単節縄文が施されている。加曽利Ｂ式土器である。

５は、胴上半部にＲ－Ｌの単節縄文を粗く施した深鉢で、下半部は縦方向のヘラ磨きが行われている。

６は、Ｒ－Ｌの単節縄文が施された深鉢で、口縁部に一条の沈線が廻る。加曽利ＥⅣ式土器である。

７は、深鉢の底部である。

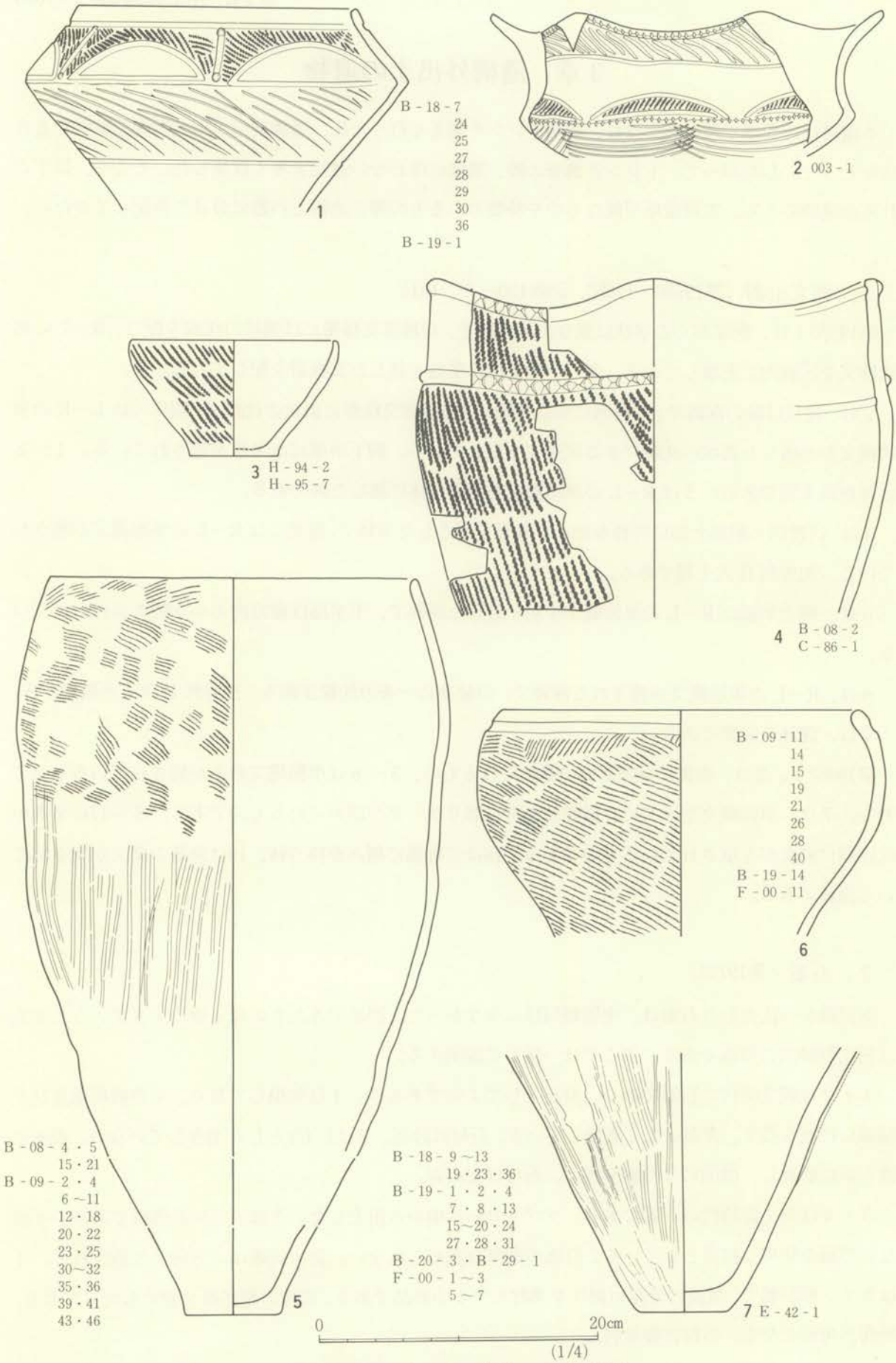
第196図１、２は、表裏に貝殻条痕の認められるもの、３～６は単節縄文のみが施されているものである。７は、単節縄文を地文に、微隆起を持つ磨り消し文が認められるものである。８～17は２条の沈線間に縄文が充填されているものである。18は口唇部に刻みを持つ鉢、19は無節の縄文が施されている深鉢である。

２．石器〔第197図〕

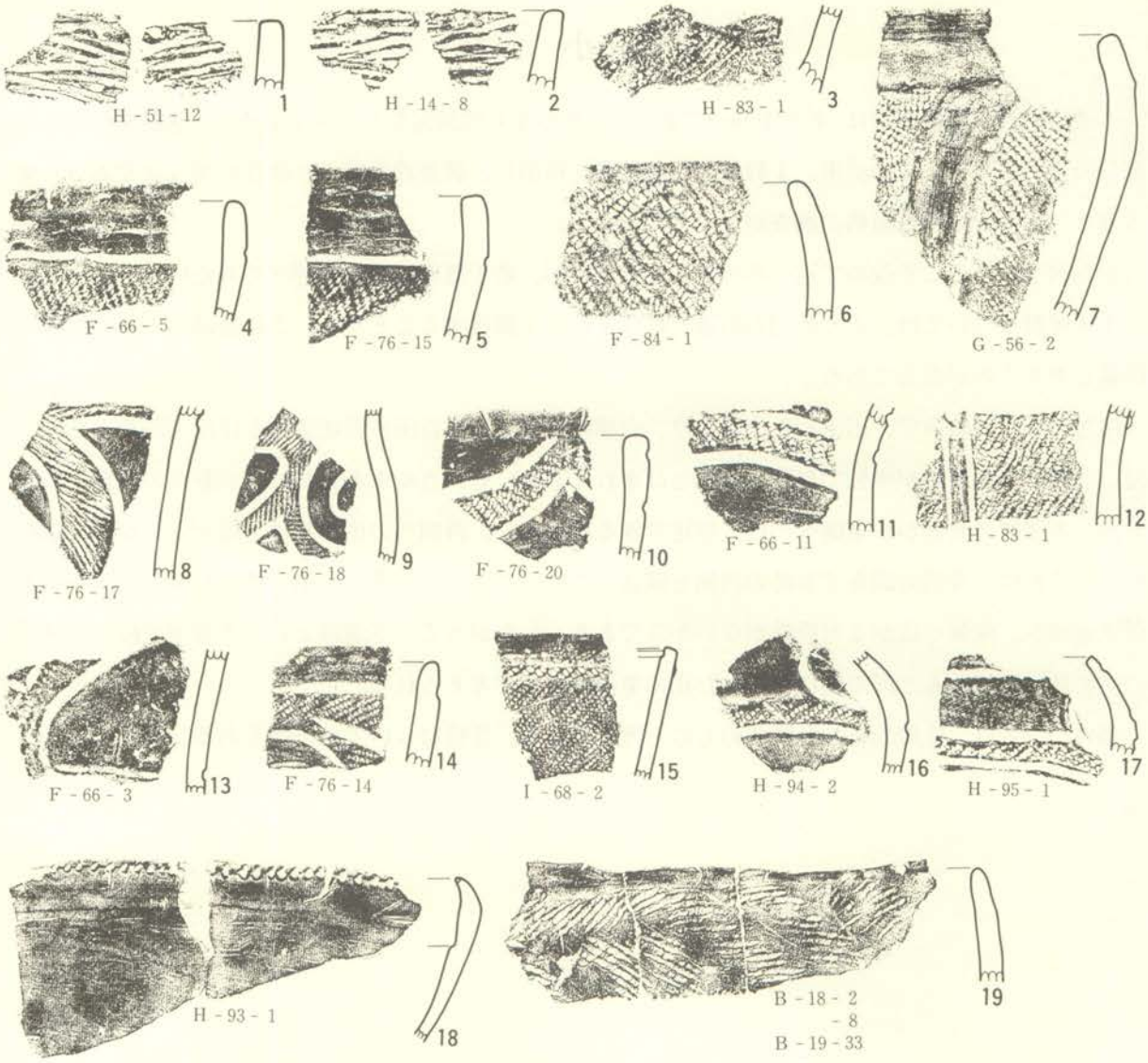
本遺跡から出土した石器は、土器類同様に少なかった。図示できたものは４点にすぎず、うち２点は先土器時代の石器である。ここでは一括して説明する。

１・２は縄文時代の石器であり、磨石としてよいであろう。１は欠損しており、その破損部及び下端部に打痕を残す。表面はよく磨耗している。石材は砂岩。２は1/4ほどしか遺存していない。表面は滑らかに磨耗し、側面には打痕を残す。石材は安山岩。

３・４は先土器時代の石器であり、ソフトローム中から出土した。３はメノウの残核であり、平面な自然面を利用し打面としている。打面の調整は認められない。剥片剥離は二方向から施される。４はナイフ形石器で、横長の分厚い剥片を素材とする小形品である。周囲の整形は全面にわたっており、断面三角形となる。石材は凝灰岩?。

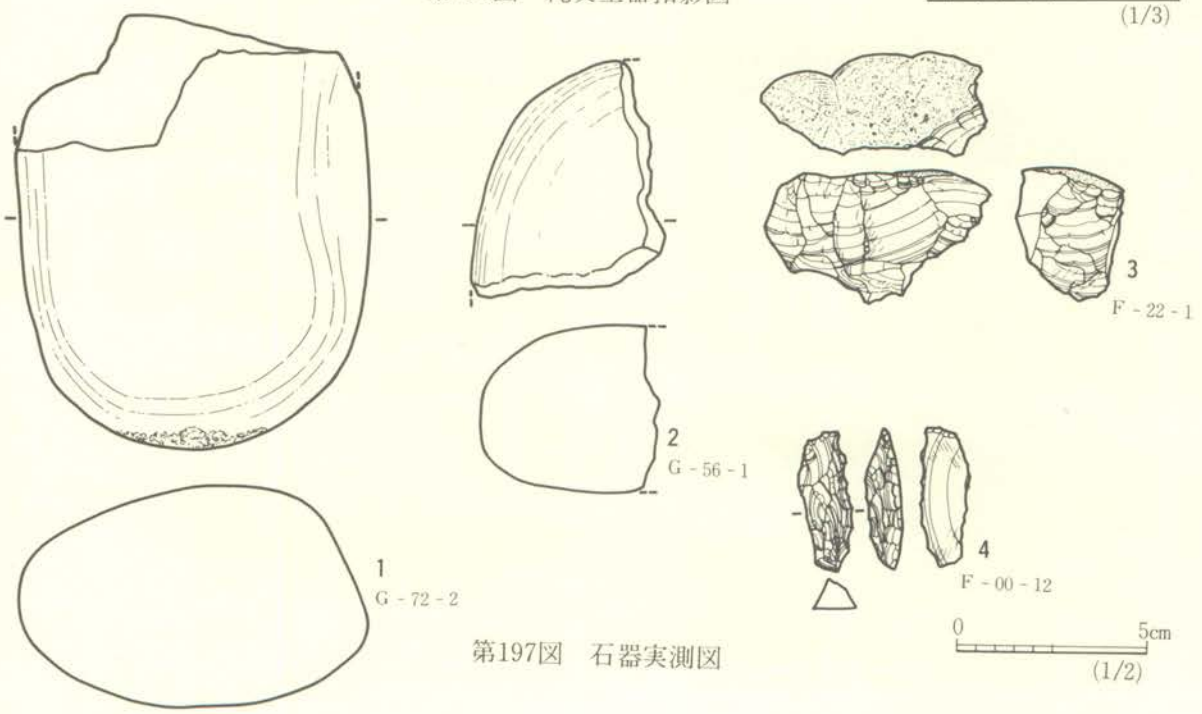


第195図住跡外の出土遺物実測図（縄文）



第196図　縄文土器拓影図

0　10cm
(1/3)



第197図　石器実測図

0　5cm
(1/2)

4章　小　　結

本遺跡の調査対象面積は、約8,100m²であった。そのうち約30%をトレンチ調査し、遺構を検出した部分のみ拡張した。その結果、1軒の住居跡と溝を検出し、調査着手時より所在が明らかであった塚3基と、都合5か所の遺構の調査がすべてであった。

したがって、ここで改めて述べるべきこともないが、若干気付いた点を述べてみたい。

まず塚群については、その配列が町道とほぼ平行して隣接することから、この道路ができた以降の所産と考えるのが妥当であろう。

住居跡は1軒のみで、出土した土器より、古墳時代後期で、谷田木曽地遺跡とほぼ同時期と判断した。当該期の住居跡が単独で存在することはまれであり、その点から考えれば、当該期の集落の広がりが、本遺跡の北側から東側へかけて想定できる。しかし、西側への広がりは、ほとんどないと思われる。それは、今回の調査で本跡の西側を確認していることと、前篇の小結で述べたように、谷田木曽地遺跡が、南側へ広がる可能性がないからである。したがって、本遺跡と谷田木曽地遺跡の当該期の住居跡は、ほとんど同時期に存在した別の集落の一部と考えられる。

溝については、比較的新しい時代のものと考えている。性格については不明である。

第5篇　結　　語

結　語

千葉ニュータウン造成整備事業に係る埋蔵文化財調査も、昭和55年以来13年が経過し、これまで、先土器時代から近世に至るまでの多くの貴重な資料が得られてきた。

今回報告する船尾町田、谷田木曽地、谷田神楽場の3遺跡は、印旛沼の西端部に位置し、いずれも現在の神崎川に南面し地理的条件にも恵まれた台地上に所在しており、やはり良好な資料を得ることができた。これらの成果のうち、主なものについて若干触れておきたい。

先土器時代の調査は谷田木曽地遺跡で行われ、Ⅲ層からⅦ層に至る各層から遺物が出土しているが、量は相対的に少ない。しかし、局部磨製石器の出土は、報告されているものが、現在では三里塚No.14（註1）臼井南（註2）などと希少であり、特筆されるものである。

縄文時代では、谷田木曽地遺跡において、加曽利EⅢ式土器を出土した1軒の住居跡と若干の土壙が遺構のすべてである。しかし、遺物については、先述したように、谷田木曽地遺跡において、前期初頭、花積下層式土器の、比較的良好な資料が得られている。千葉県における縄文時代の中で、まだ明らかとされていないものの一つに、この時期の土器群の実態がある。今回出土した資料が、これまでの空白部分を幾らかでも埋めることは間違いないと思われる。

弥生時代では、船尾町田遺跡で5軒、谷田木曽地遺跡で9軒の住居跡が検出されている。また、古墳時代前期の住居跡も船尾町田で20軒検出されている。

船尾町田では弥生終末期から古墳時代初頭にかけて集落が営まれており、このことは、同じ神崎川の上流約4 kmに所在する復山谷遺跡（註3）と共通する。これらの遺跡では南関東系の土器が主体であり、北関東系の土器を主体とする谷田木曽地遺跡に、やや遅れて出現した集落である。

古墳時代の集落のほか、今回船尾町田遺跡で3基の古墳を調査した。千葉ニュータウンに関連して調査された古墳としてはこれが初めてであり、この地域の古墳を知る上での大きな手掛かりとなるだろう。これらは、古墳群を構成する一部と考えられる。今回調査したのは前方後円墳1基、円墳2基であるが、いずれも盗掘削平を受け、遺物の出土状況は悪かったが、これらは7世紀中葉から7世紀後半に属するものであろう。

また前方後円墳の2号墳、前方部東側周溝底面付近より、金銅製金具を取りつけた直刀1点、そして、やはり金銅製の鈴2点が出土していることは特筆すべきことである。

谷田神楽場遺跡では、道に沿った塚3基が調査された。塚は、各種の信仰の対象として築かれてきており、これまでに、千葉ニュータウンに関連して、多くの塚の調査が実施された。しかし、伝承などが残るものは少なく、今回もやはり、どのような目的で築かれたのかを知ることはできなかった。

註1　古内茂他「No.55遺跡」『三里塚』 千葉県北総公社 1971
註2　小田静夫他「石神第1地点」『臼井南』 1975
註3　古内茂他「復山谷遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅵ』（財）千葉県文化財センター 1974
　　古内茂他「復山谷遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅶ』（財）千葉県文化財センター 1982

Investigations of Archaeological Sites in "Chiba New Town"

Housing Lot No. VIII

The Hunao-Machida Site (CN 709)

The Yata-Kisoji Site (CN 411)

The Yata-Kaguraba Site (CN 504)

Chiba Enterprises Agency

The Chiba Foundation for Cultural Assets

Introduction

This is the report of investigations of three archaeological sites, Hunao-Machida, Yata-Kisoji, and Yata-Kaguraba, in "Chiba New Town" housing lot.

1. Environment

These sites are located on the north of Shimousa Tableland dissected by the Kanzaki River system flowing into Lake Inba. The height where the sites are located is on the left bank of the main stream of the Kanzaki River. There are many other archaeological sites around them. Nos. I – VII of this series give a full account of the surrounding sites.

2. The Hunao-Machida Site

This site is near No. 128, Hunao-Machida, Inzai Town, Inba District. The Investigative area covered an area of 9,041 square meters. The term is seven months: from July 1, 1981 through January 31, 1982.

We excavated three burial mounds, 27 pit-dwellings, 12 ditches and 10 pits.

One of the burial mounds (No. 2) was key-shaped in plan: the others (No. 1 and No. 3) were round. Only Burial Mound No. 1 had the original form. Each mound had only one stone-cist in a square pit. The artifacts accompanying with these mounds were swords, iron arrow-heads and bells of gilt bronze and stone beads, Mound No. 1 had mainly iron artifacts: No. 2 and No. 3 had stone beads. The bells of gilt bronze, found in the ditch surrounding Mound No. 2, must be paid attention to. The number is two; the bigger one is complete. It is seldom that these artifacts accompany the burial mounds in our prefecture. Moreover, Mound No. 2 was key-shaped in plan. Judging from the form and the accompany artifacts, th buried person was the chief of people who made the mounds, which are also found out of the investigative area.

Considering the forms and the accompanying potteries, the pit-dwellings were not occupied at the same time. Five dwellings (Nos. 1, 8, 9, 33, 46) belong to the end of the Late Phase of

the Yayoi Period. Twenty dwellings (Nos. 7, 12, 14, 16, 17, 18, 19, 23, 25, 28, 34, 36, 37, 40, 24, 26, 29, 30B, 32, 35) belong to the Early Phase of the Burial Mound Period; one (No. 30A) to the Middle Phase of the Burial Mound Period. One (No. 51) is uncertain. Judging from the minute attributes of potteries, the dwellings of the Early Phase of the Burial Mound Period can be subdivided into two sub-phases. Six dwellings (Nos. 24, 26, 29, 30B, 32, 35) are later than the remaining fourteen ones. According to the numbers of the dwellings, this village was established at the end of the Yayoi Period, and florished in the Early Phase of the Burial Mound Period. But from the later sub-phase of the Early Phase this village was in a bad way and vanished in the Middle Phase.

The main potteries of the Yayoi Period consist of those of the South Kanto tradition. Only a part belongs to the North Kanto tradition. A small quartity of the Tokai tradition coexisted with them. This kind of coexistences are common to the surrounding sites of the Yayoi Period. Concering to the potteries of the Early Phase of the Burial Mound Period the general characters of this area occur in this site as well. In the earlier sub-phase they consist of pots, jars, jars with a pedestal, small one-legged table and pedestals. In the later sub-phase small jars were added.

3. The Yata-Kisoji Site

The site is near No. 827, Yata-Kisoji, Shiroi Town, Inba District. The investigative area was 30,260 square meters in area. The term was 34 months: from September 1, 1978 through August 20, 1982.

We found two artifacts-concentrations of the Pre-pottery Period, 13 pit-dwellings, 1 mound, 9 pits and 20 ditches. The artifacts-concentrations were found in Layer VII and Layer IV–VI respectively. In the former about 60 artifacts were found. One is a knife-shaped artifact: others are flakes which can be binded. In the latter 3 scrapers and 1 hammer-stone were found; others are flakes.

In terms of the pit-dwellings, one (No. 21) belongs to the later half of the Middle Phase of the Jomon Period: Nine (Nos. 1, 10, 19, 22, 26, 28, 31, 35, 38) belong to the later half of the Late Phase of the Yayoi Period; three (Nos. 2, 4, 23) to the Late Phase of the Burial Mound Period. Judging from these periods, this site was occupied sporadically. The potteries of each phase are not so different from those of the surrounding sites. The Yayoi potteries, however, mainly consist of those of the North Kanto tradition. And part of them are those of the South Kanto tradition: this a striking contrast to the Hunao-Machida site.

We could also find a quite number of potteries of the Hanazumi Lower Layer Type dated from the beginning of the Early Phase of the Jomon Period. This is a rare case in our prefecture. Regret to say, however, they did not accompany any features.

4. The Yata-Kaguraba Site

This site is near No. 791, Yata-Kaguraba, Shiroi Town, Inba District. The investigative are was 8,100 square meters in area. The term is four months: from Feburary 1, 1980 through March 31, 1981.

We found one pit-dwelling (No. 5), three mounds (Nos. 1 – 3), one ditch (No. 4).

The pit-dwelling belongs to the Late Phase of the Burial Mound Period. The mounds and the ditch are later than the medieval ages.

Contents

Colour Plate: Sword and Bells from the Hunao-Machida Site
Preface
Legend

Contents

Chapter 1. Research strategy and environment
1. Research organization and strategy
2. The site-locations and their environment
Chapter 2. The Hunao-Machida Site
1. Outline of investigations
2. Investigations of burial mounds
3. Investigations of pit-dwellings
4. Investigations of other features
1. Ditches
2. Pits
3. Features of unknown characters
5. Artifacts out of features
1. Artifacts later than the Yayoi Period
2. Artifacts of the Jomon Period
6. Summary
1. Burial mounds
2. Pit-dwellings
3. Other features
Chapter 3. The Yata-Kisoji Site
1. Outline of investigations
2. Investigations of the Pre-pottery Period
1. Stratigraphy
2. Investigations in 1978/80
3. Investigations in 1981/82
3. Investigations of pit-dwelling
1. Jomon Period
2. Yayoi Period
3. Burial Mound Period

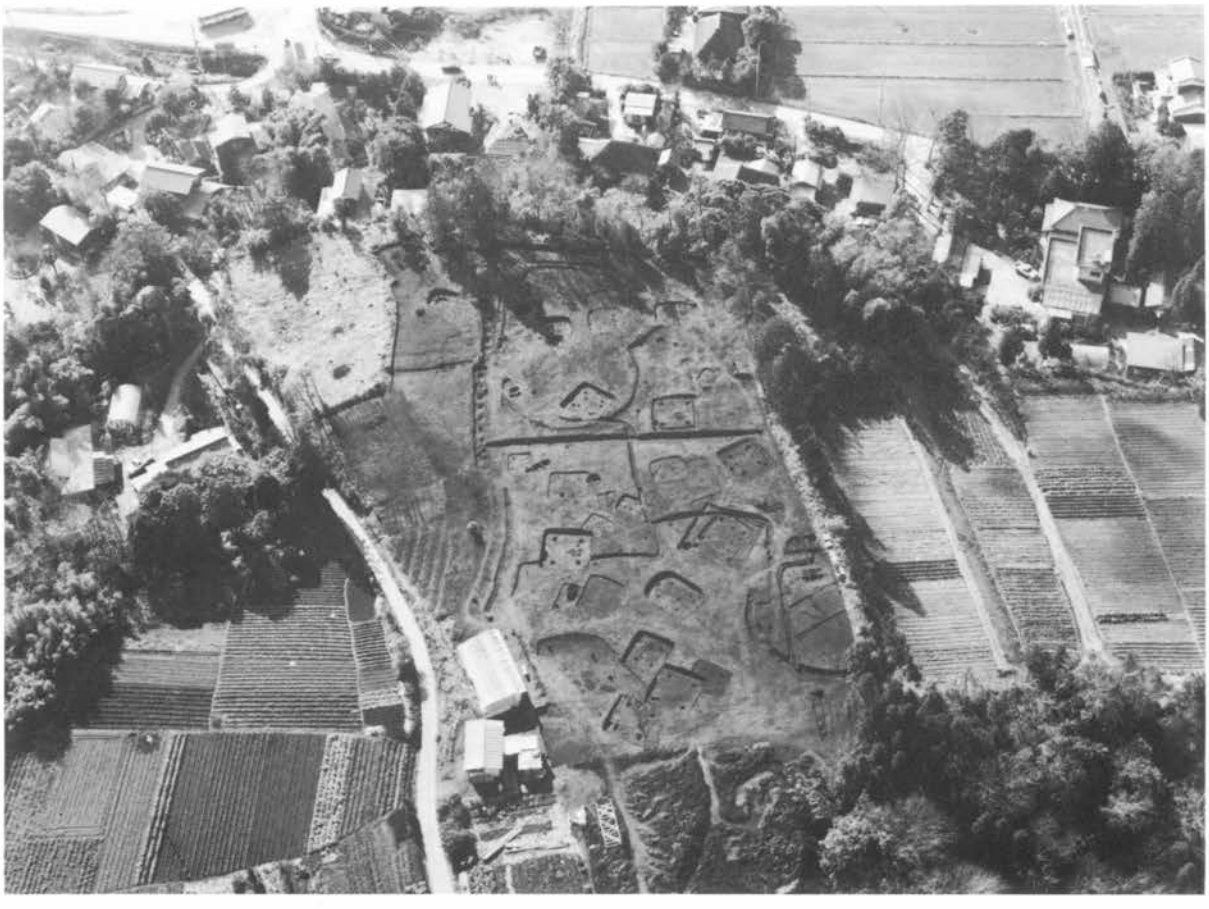
4. Investigations of other features
    1. Mounds
    2. Pits
    3. Ditches
5. Artifacts out of features
    1. Jomon potteries
    2. Stone artifacts
    3. Clay artifacts
6. Summary
    1. On the artifacts of the Pre-Pottery Period
    2. On the pit-dwellings
    3. On the other features
    4. On Type I potteries

Chapter 4. The Yata-Kaguraba Site
1. Out line of investigations
2. Investigations of features
    1. Mounds
    2. Pit-dwelling
    3. Ditches
3. Artifacts out of features
    1. Potteries
    2. Stone artifacts
4. Summary

Chapter 5. Conclusions

写　真　図　版

1.　航空写真（東から）



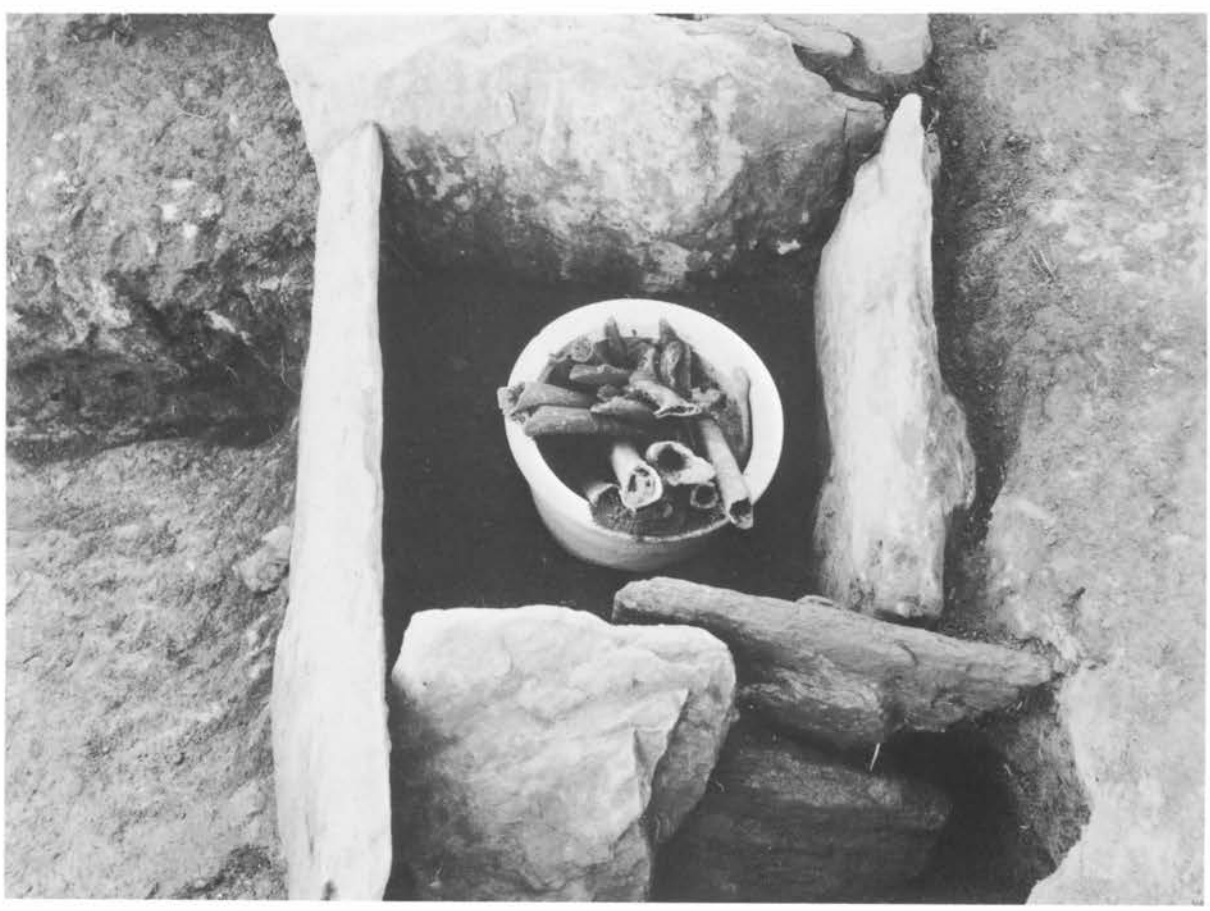
2.　同上（北から）

図版　2

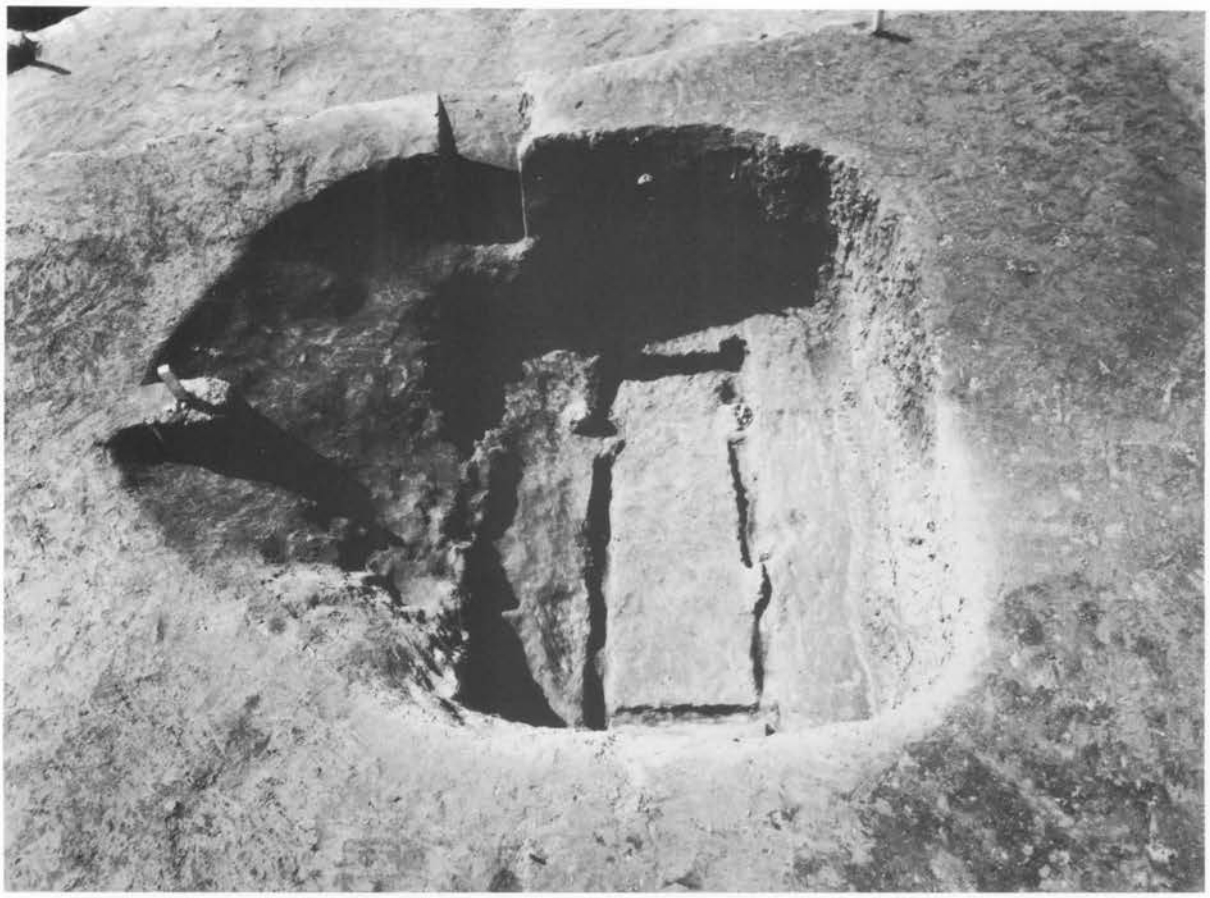
1.　遺跡遠景（南から）

2.　同上（南西から）

1.　1号墳現況（参考資料）

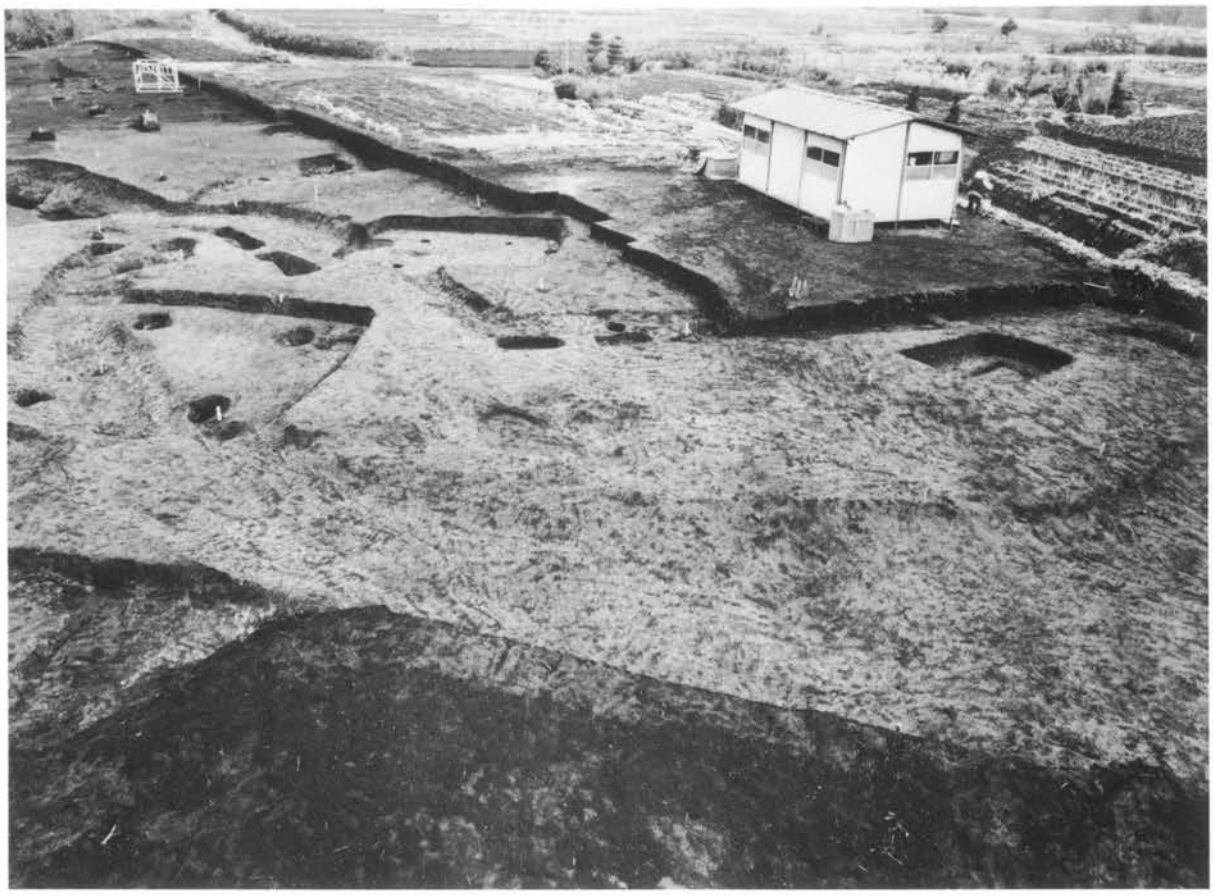


2.　同上（参考資料）

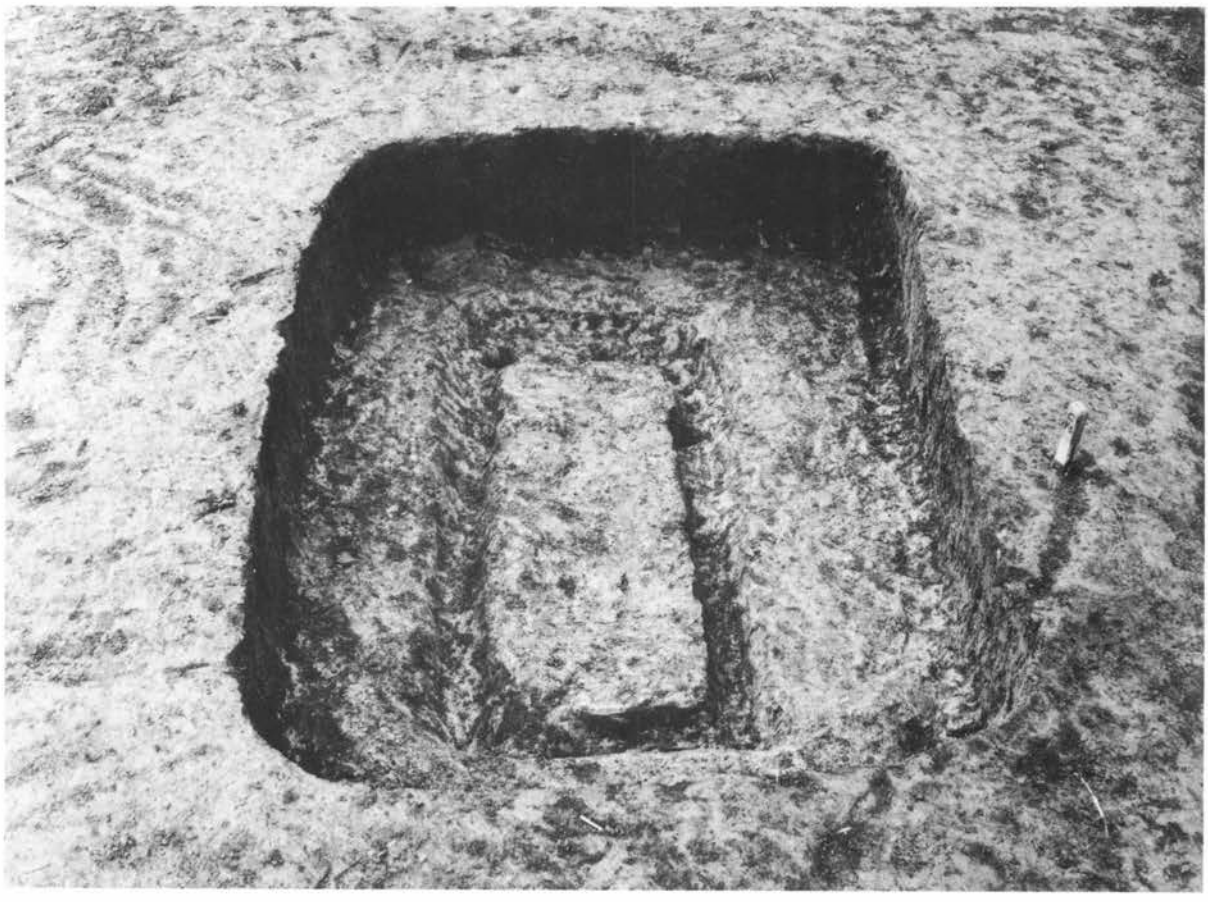


1.　２号墳主体部

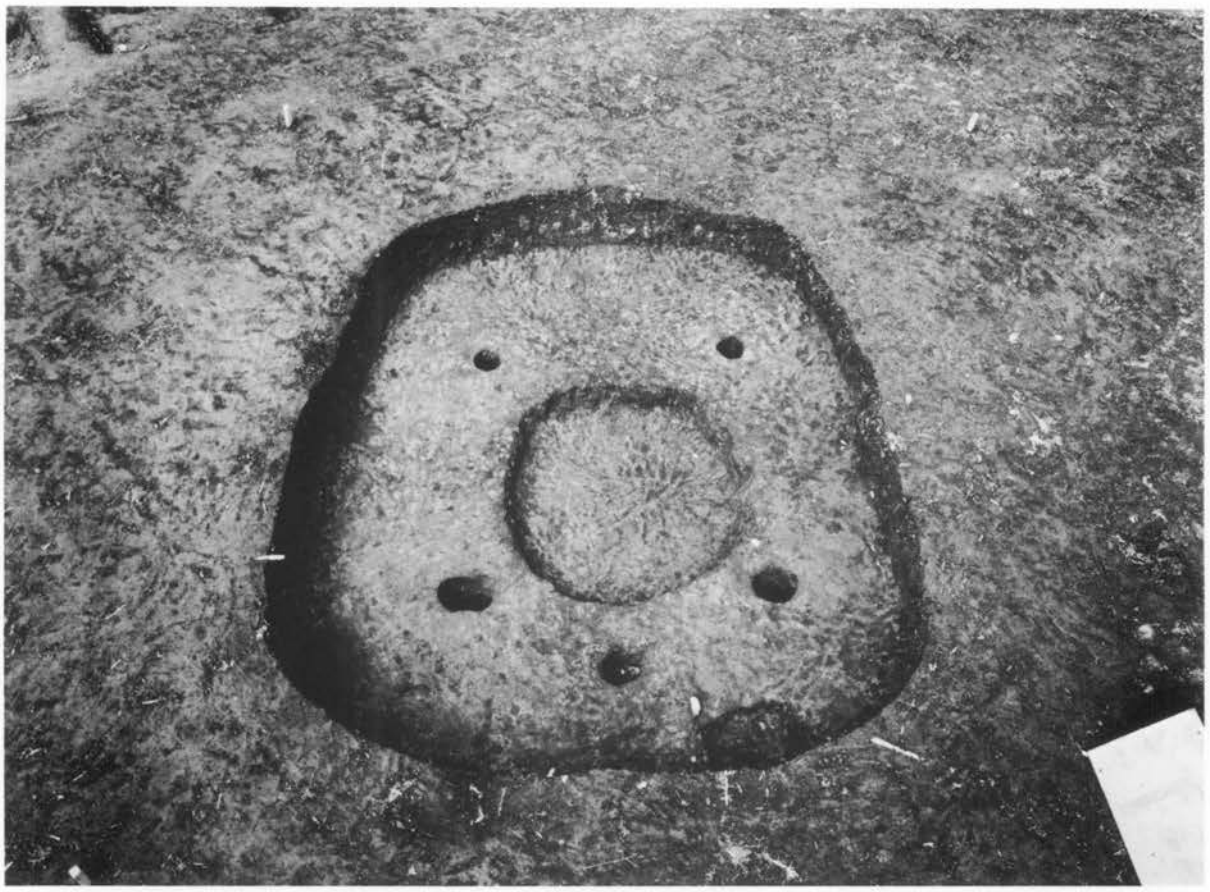
2.　２号墳周溝内遺物出土状態



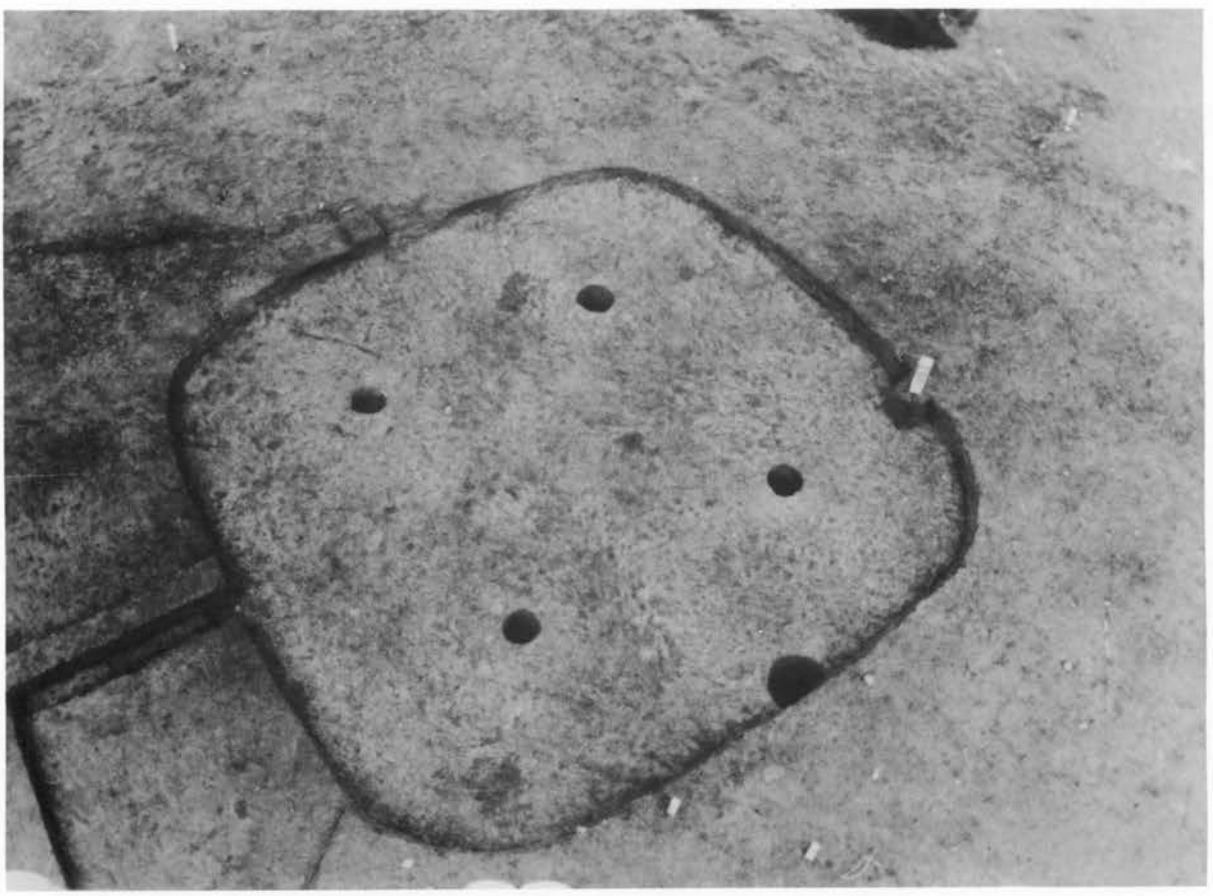
1.　3号墳全景（南から）



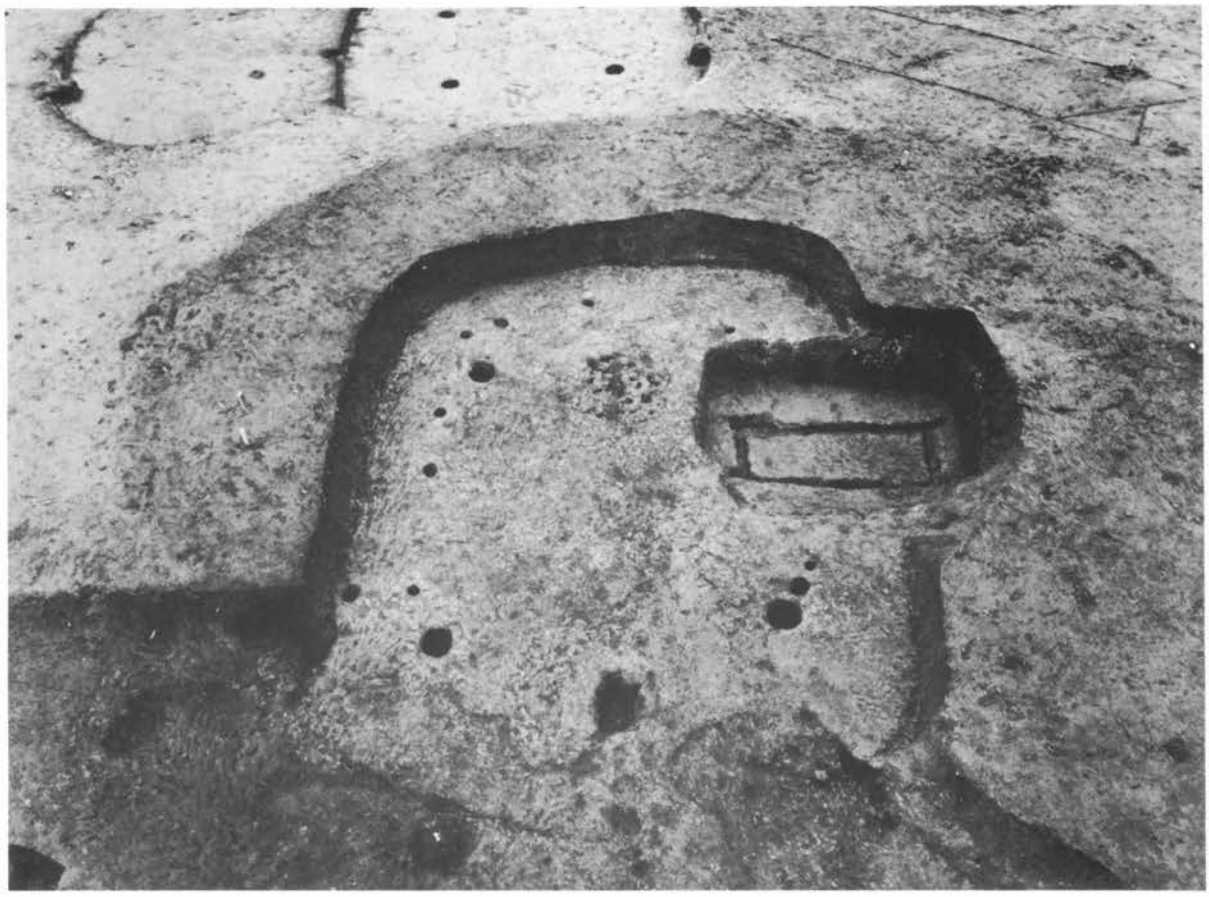
2.　3号墳主体部



1.　1号住居跡全景



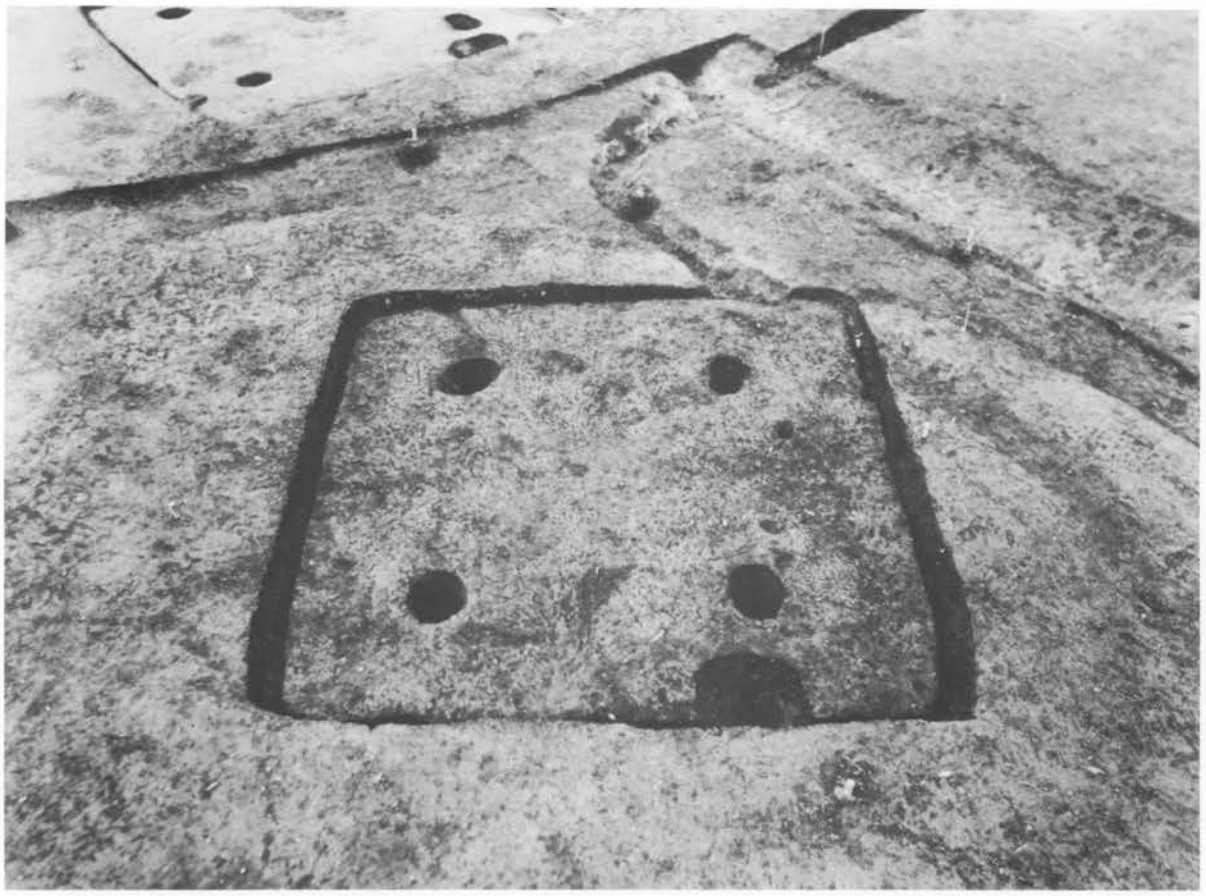
2.　7号住居跡全景



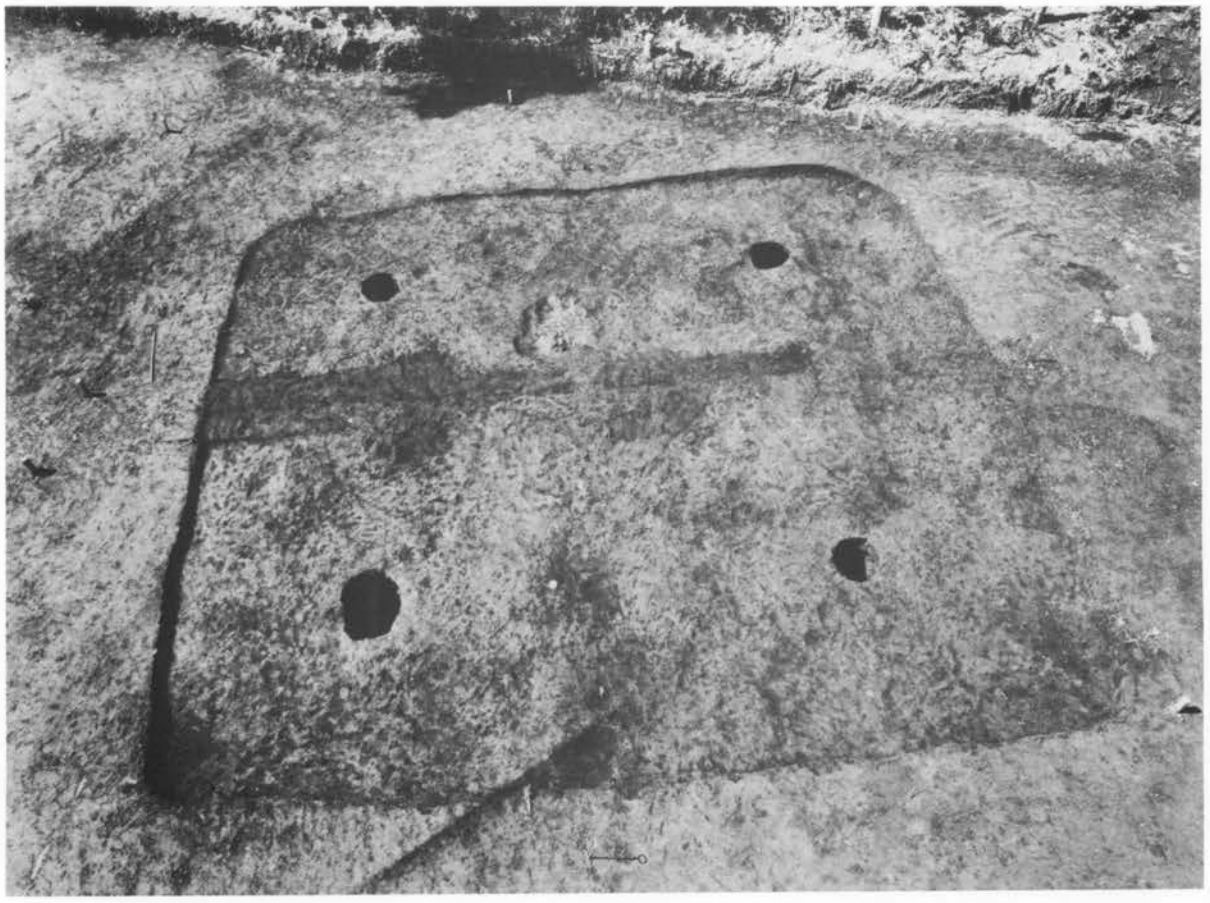
1.　8号住居跡全景

2.　9号住居跡全景

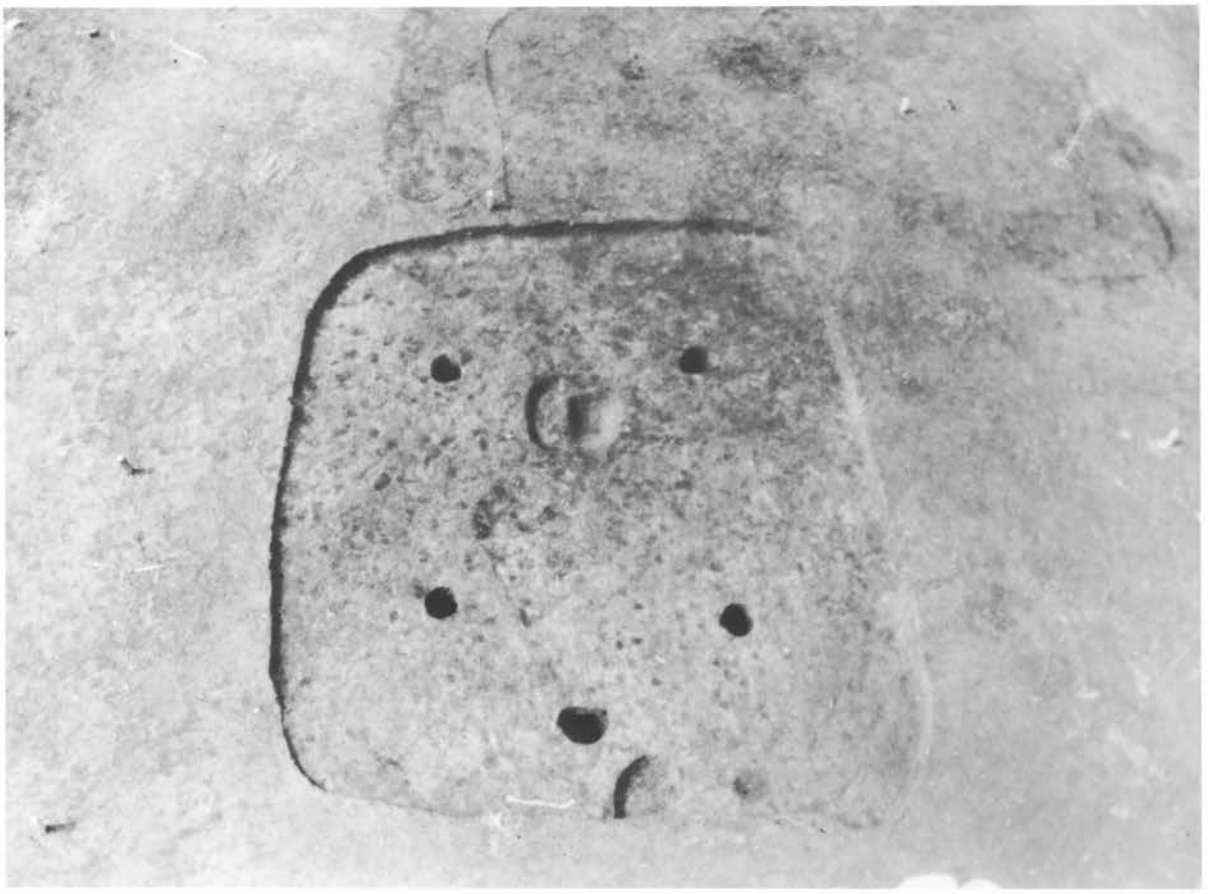
図版　8



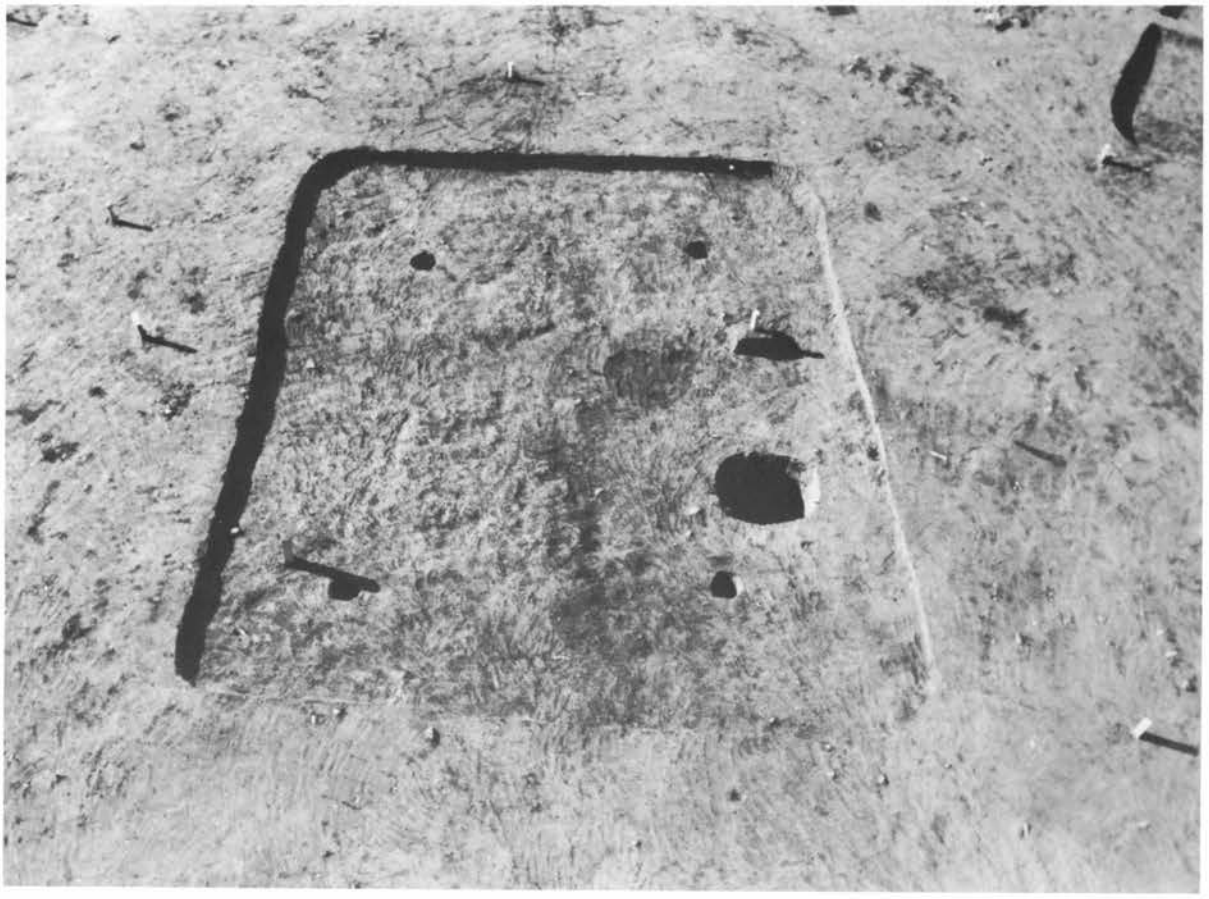
1.　12号住居跡全景



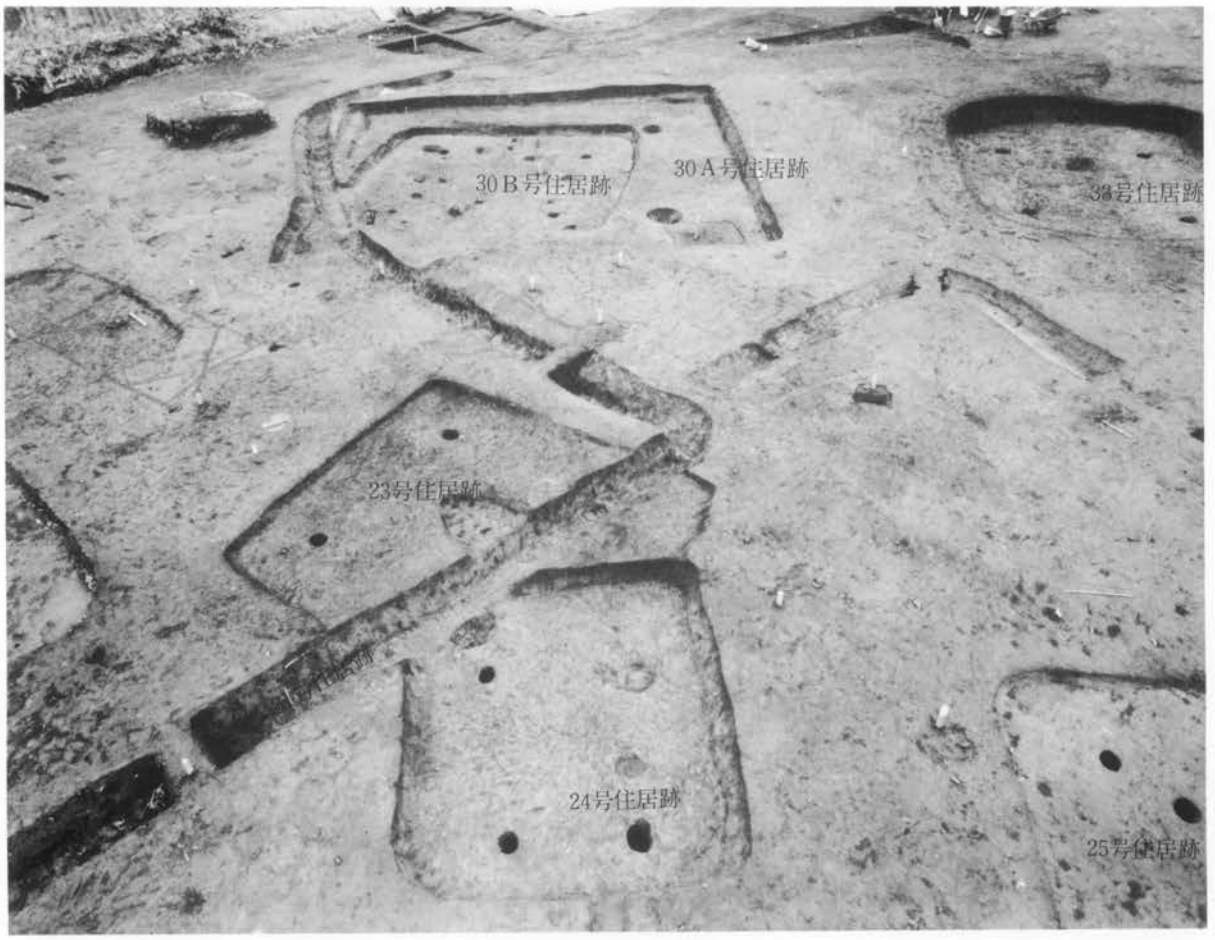
2.　16号住居跡全景



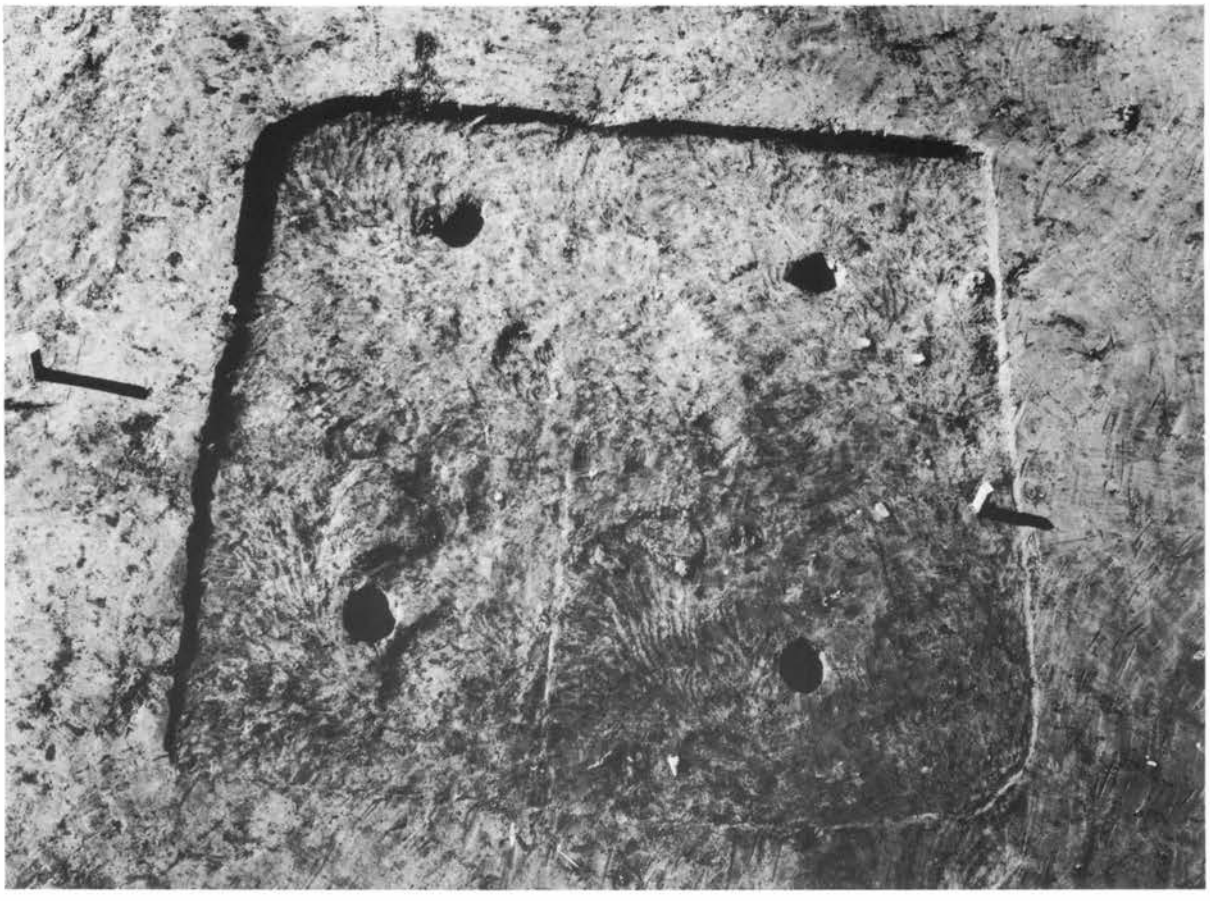
1.　17号住居跡全景



2.　18号住居跡全景



遺跡近景



1. 19号住居跡全景

2. 23・24号住居跡全景

図版 12

1. 24号住居跡遺物出土状態

2. 同上

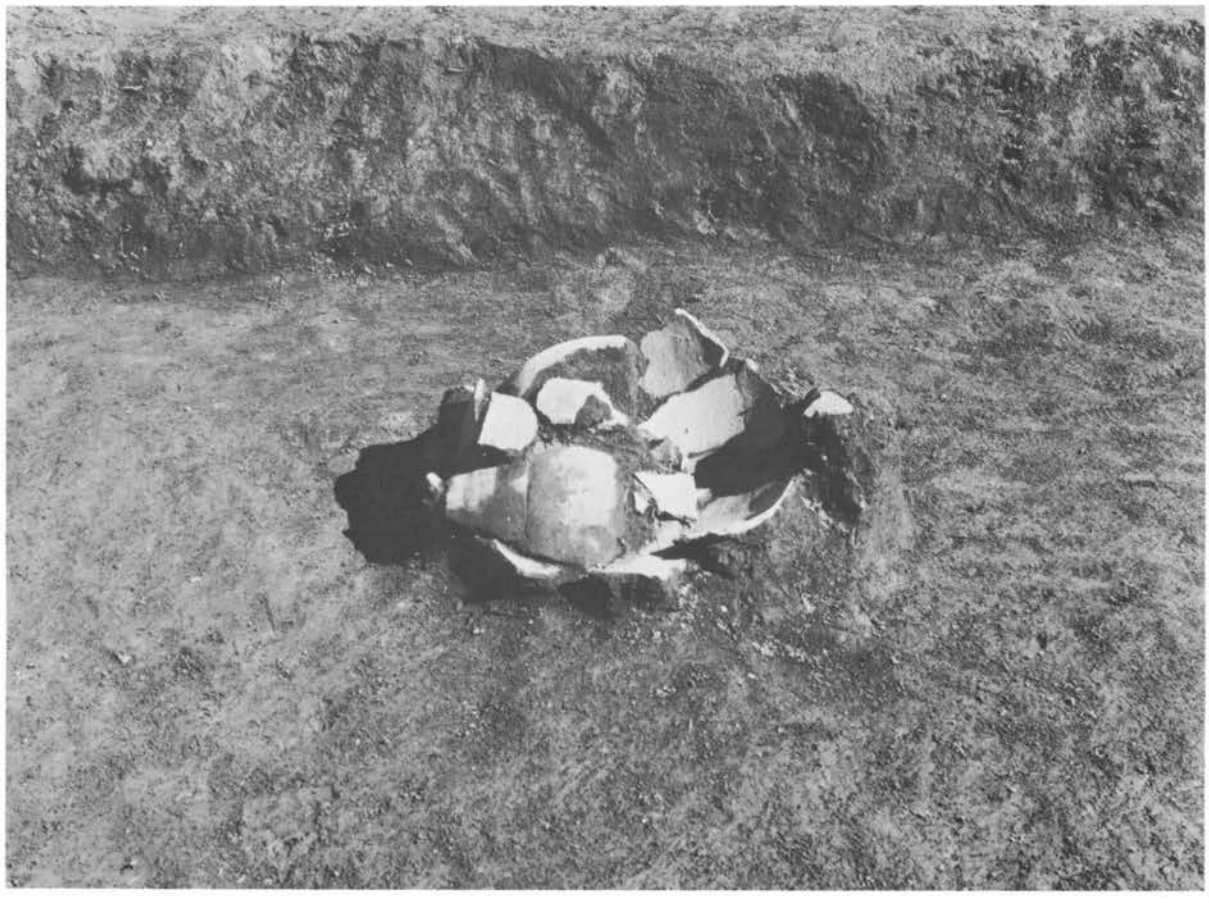
1. 25号住居跡全景

2. 26号住居跡全景

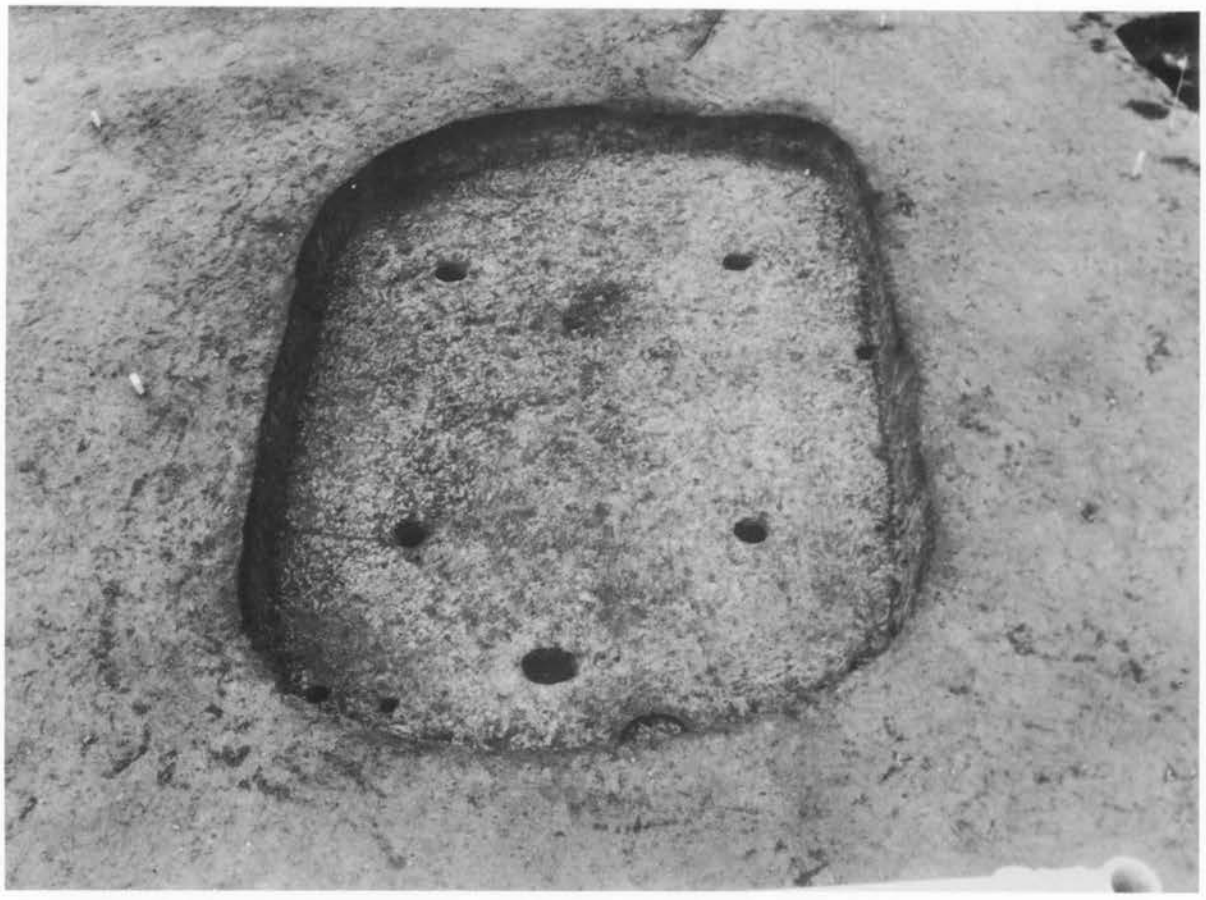
1.　26号住居跡遺物出土状態

2.　同上

1. 30A・B号住居跡



2. 30B号住居跡遺物出土状態



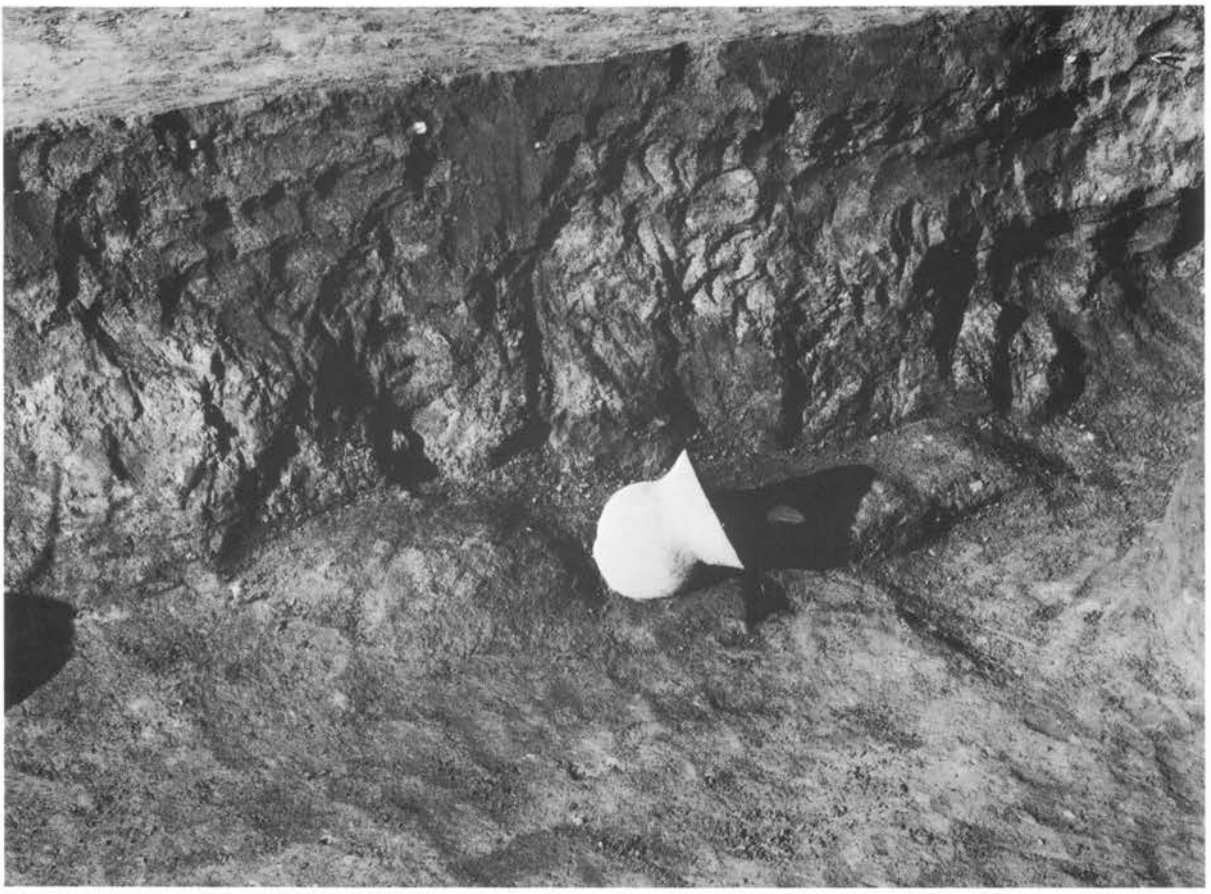
1. 33号住居跡全景

2. 33号住居跡遺物出土状態

遺跡近景

1. 36号住居跡全景

2. 34号住居跡遺物出土状態

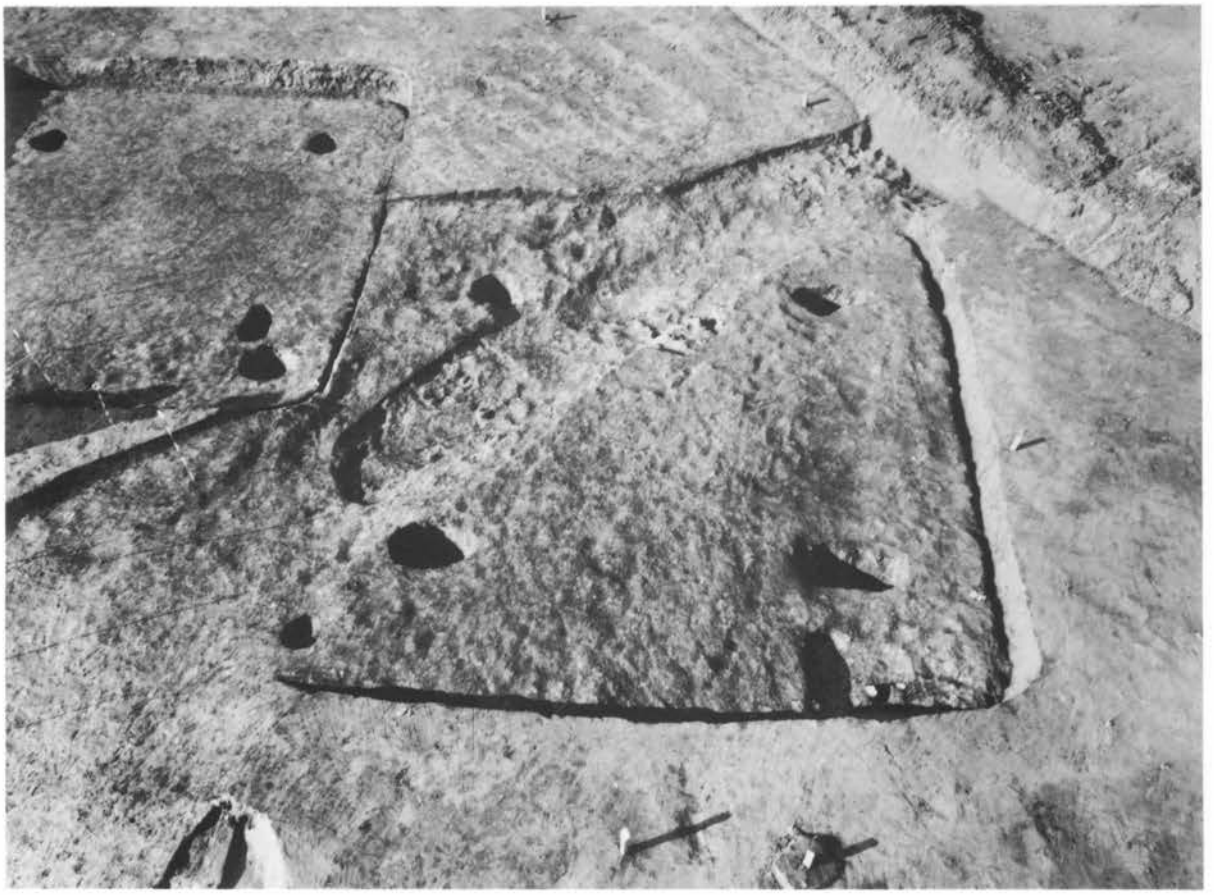


1. 35号住居跡遺物出土状態

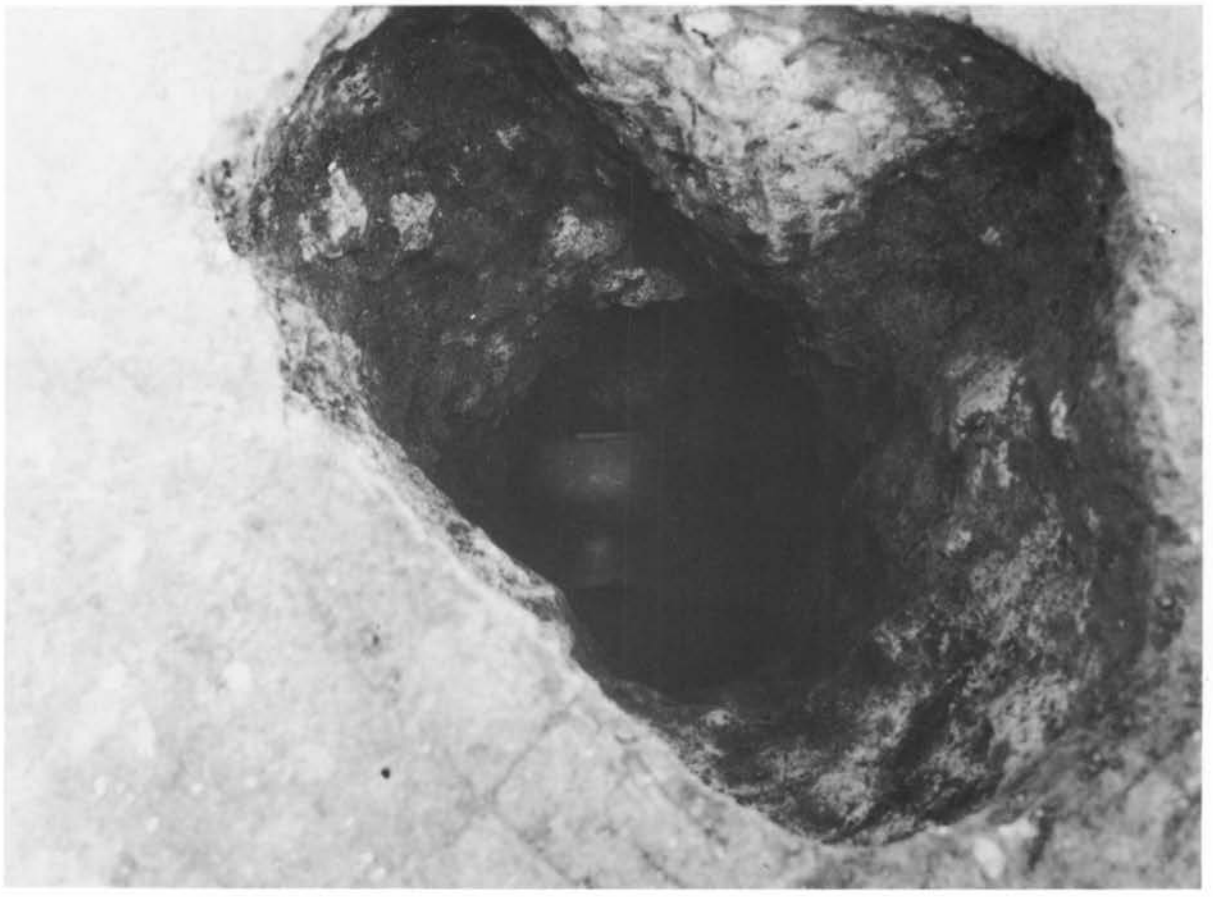
2. 同上

1.　36号住居跡遺物出土状態

2.　同上



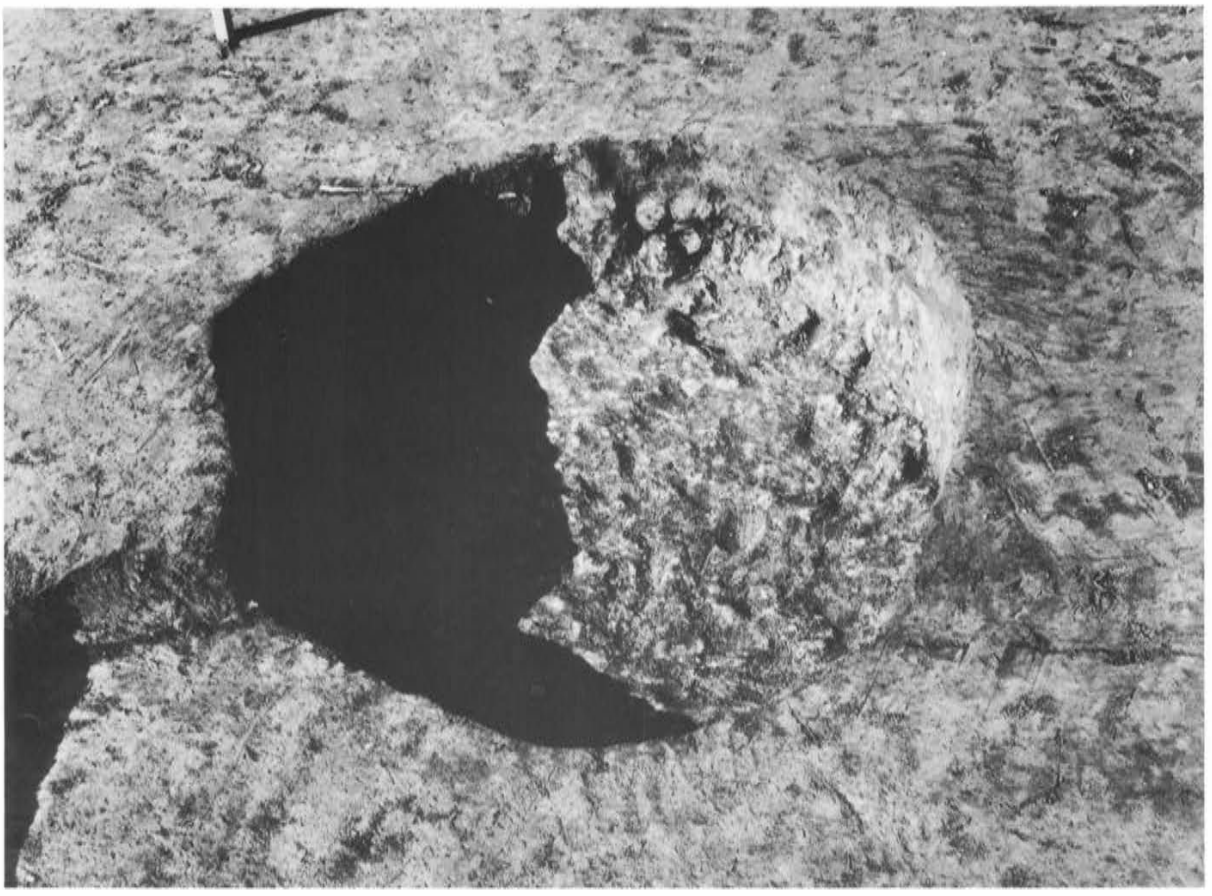
1. 37号住居跡全景



2. 37号住居跡遺物出土状態

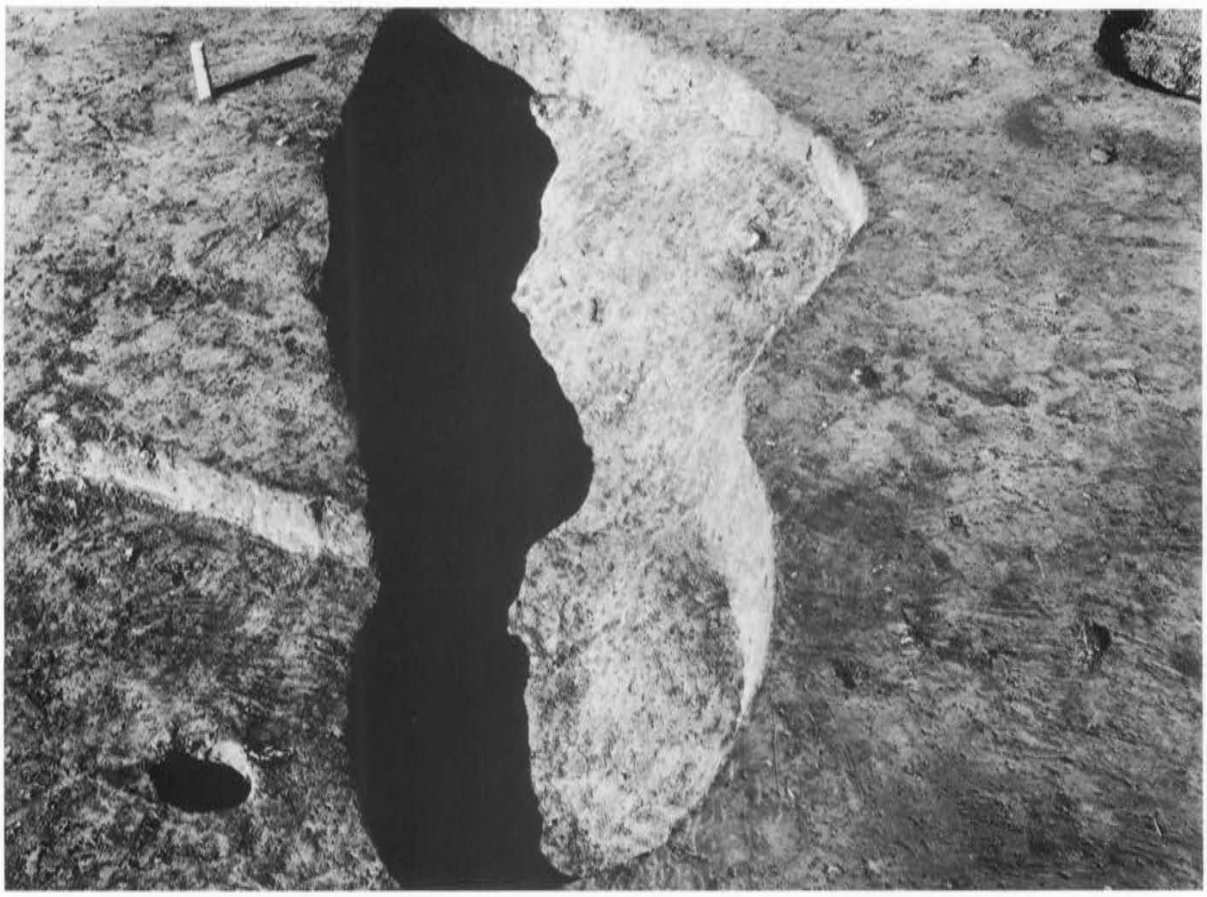
1.　46号住居跡全景

2.　21・22号址全景

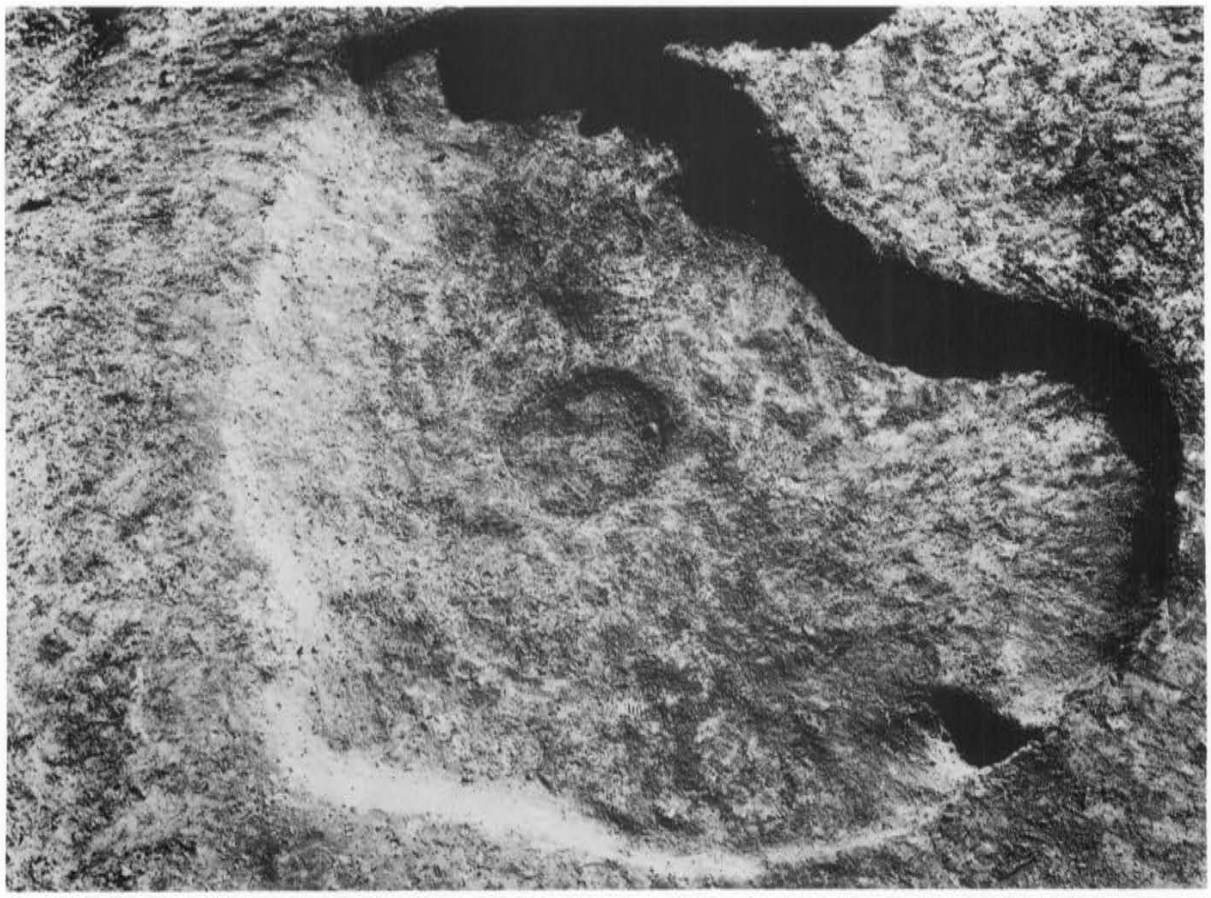


1. 39号址全景

2. 41号址全景



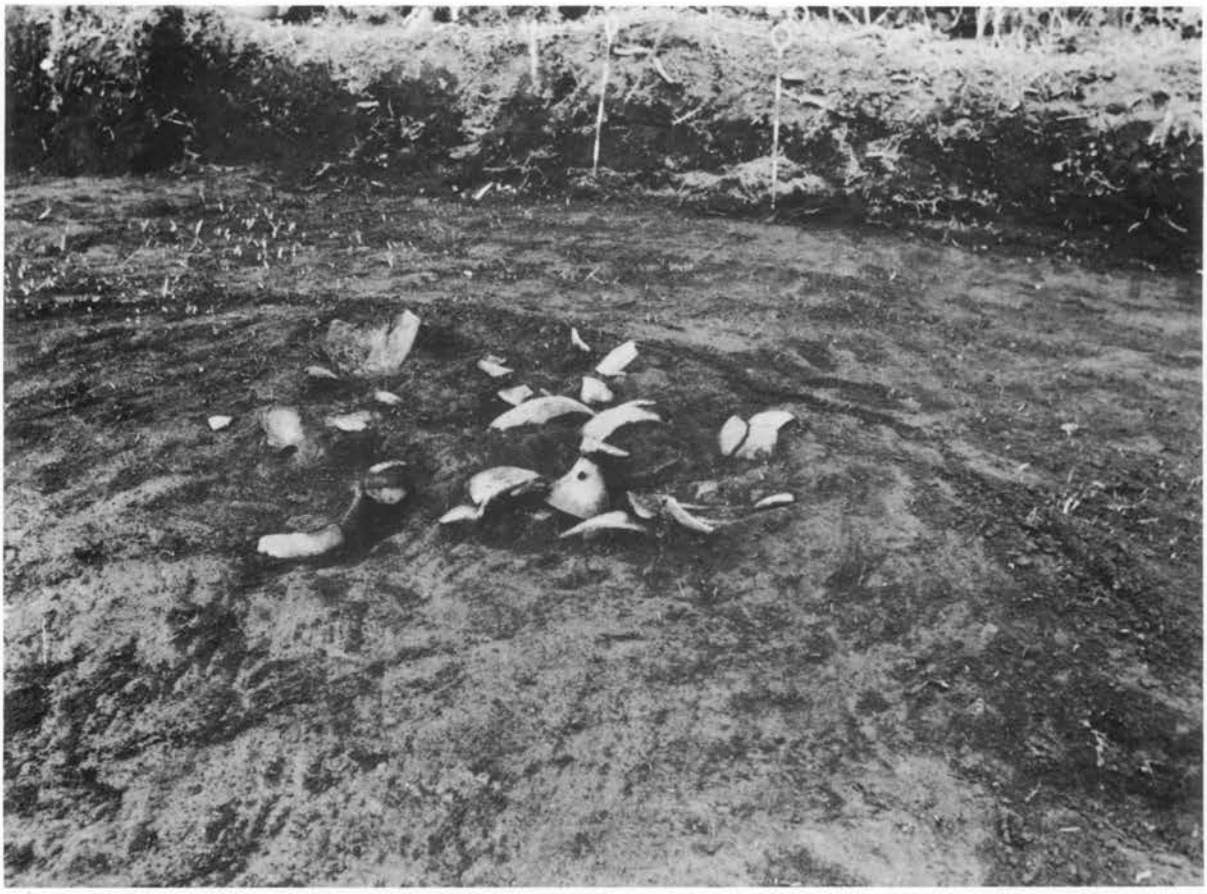
1.　42号址全景



2.　44号址全景

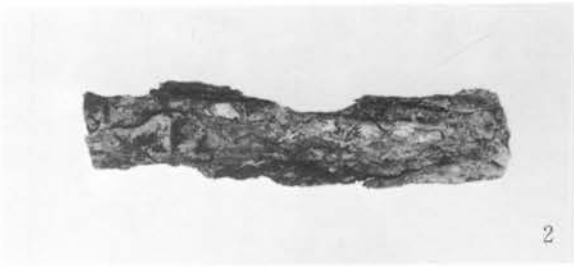
1. 48号址全景

2. 52号址全景

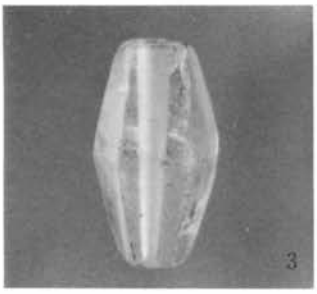


1.　H31グリッド遺物出土状態

2.　同上



1.　1号墳出土遺物

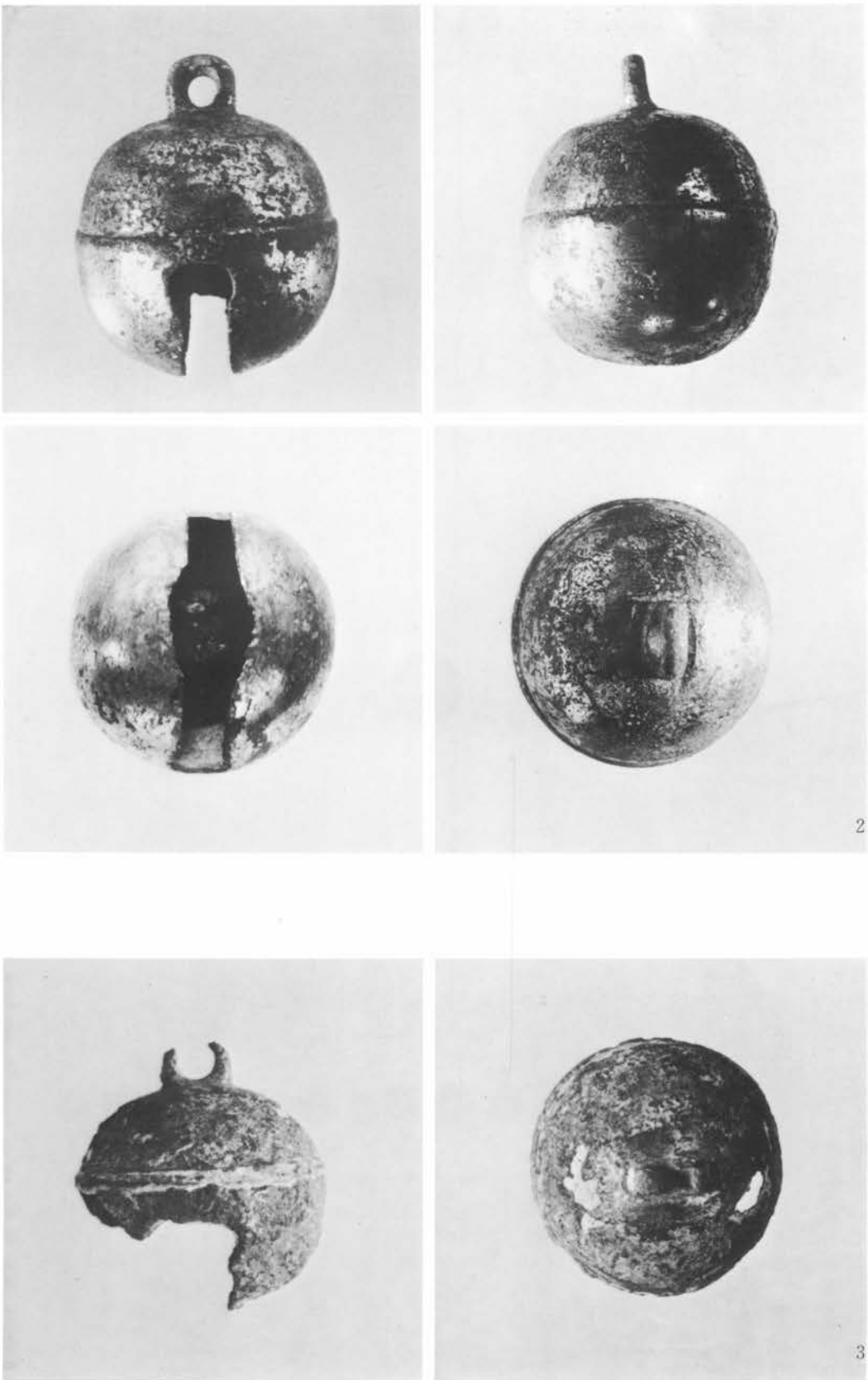


(主体部内)

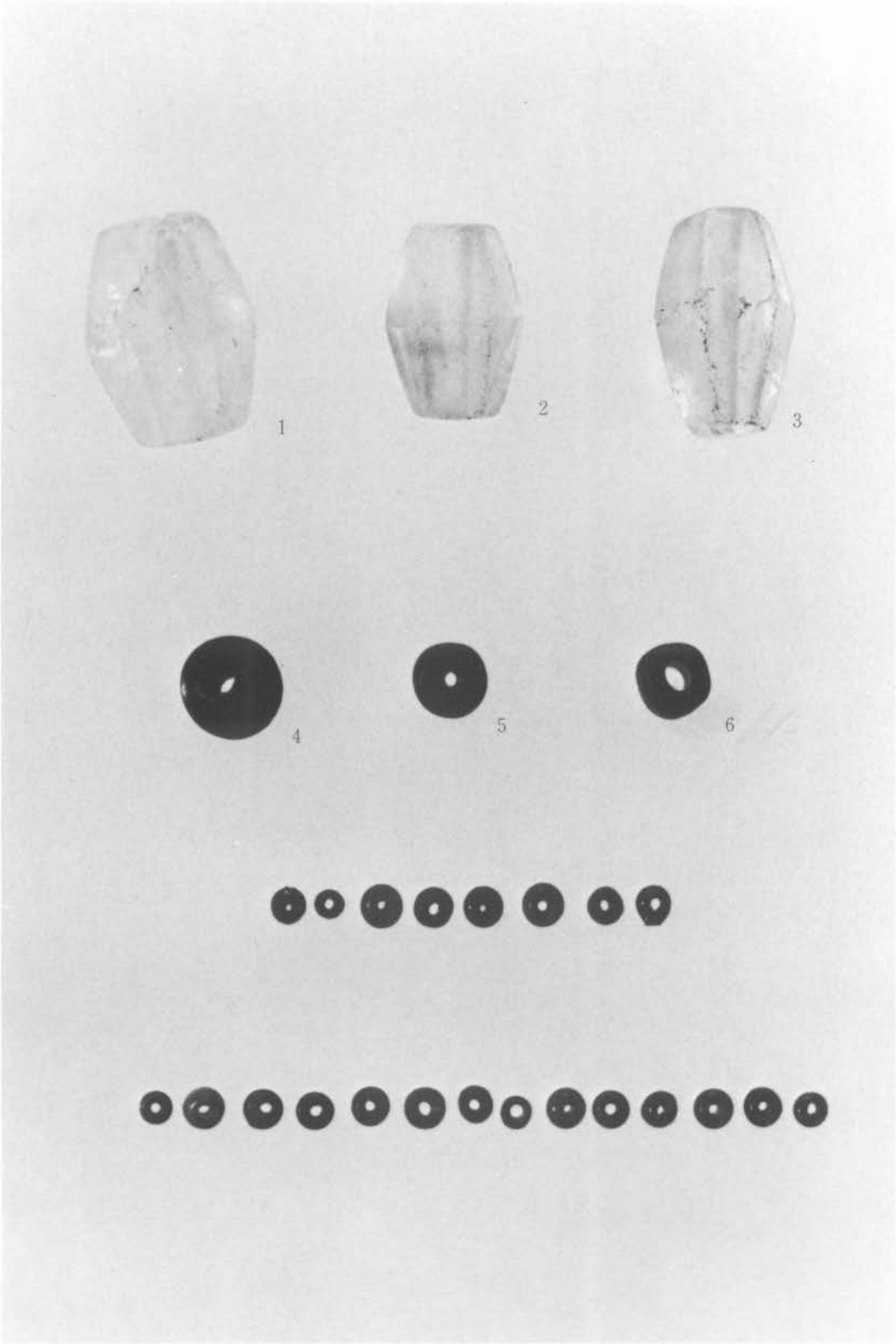
(周溝内)

2.　2号墳出土遺物

2号墳出土遺物（周溝内1.）



2号墳出土遺物（周溝内2.）



3号墳出土遺物

1. 7号住居跡出土遺物

2. 8号住居跡出土遺物

3. 12号住居跡出土遺物

8

7

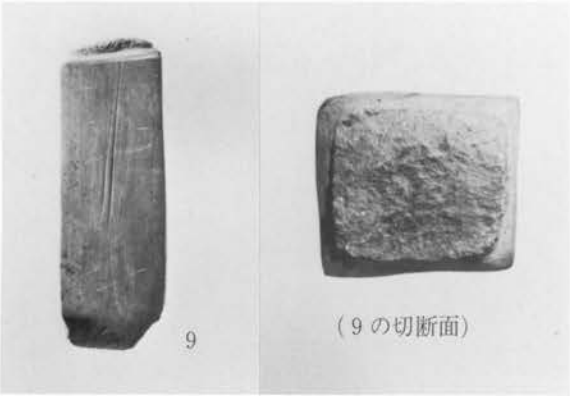
10

12

23

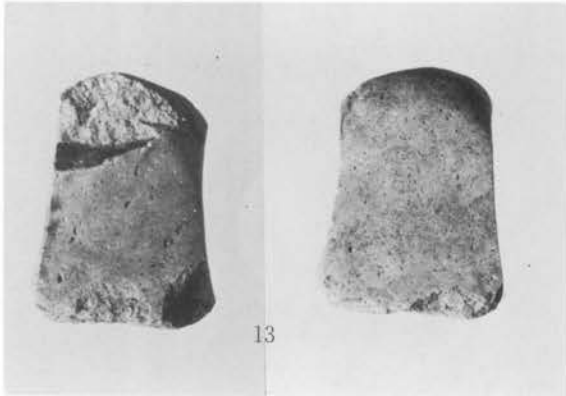
24

1.　14号住居跡出土遺物


9

（9の切断面）

2.　16号住居跡出土遺物


13

3.　18号住居跡出土遺物

1. 23号住居跡出土遺物

2. 24号住居跡出土遺物

3. 25号住居跡出土遺物

1

3

10

11

12

15

25

30

26号住居跡出土遺物（1）

34

35

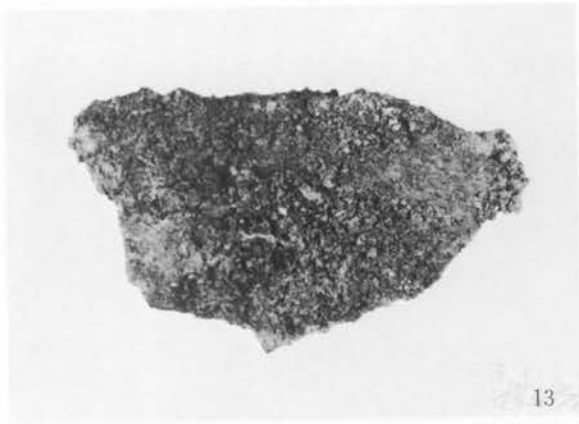
38

41

44

45

26号住居跡出土遺物（2）



29号住居跡出土遺物

14

15

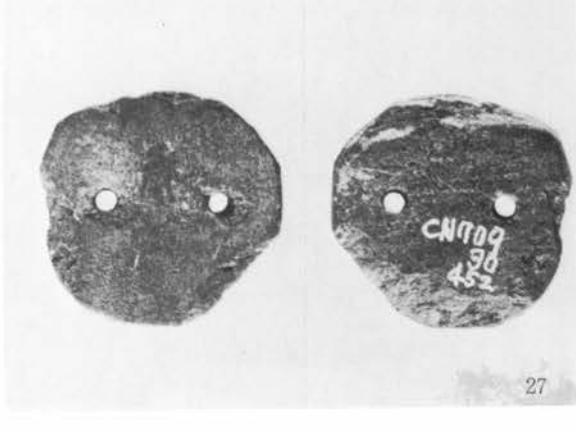
16

21

22

23

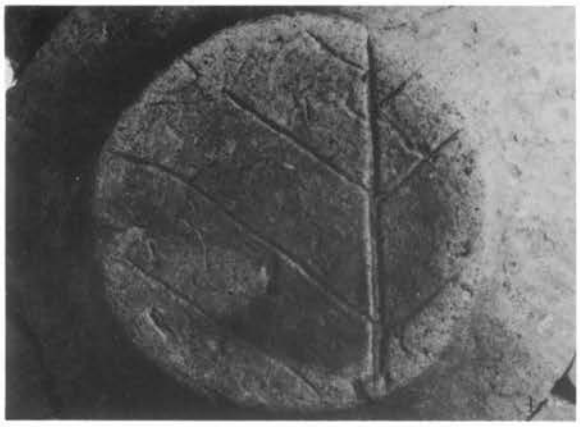
26


27

30 A号住居跡出土遺物

1. 30B号住居跡出土遺物

2. 33号住居跡出土遺物



1. 33号住居跡出土遺物

2. 34号住居跡出土遺物

7

13

15

17

20

23

26

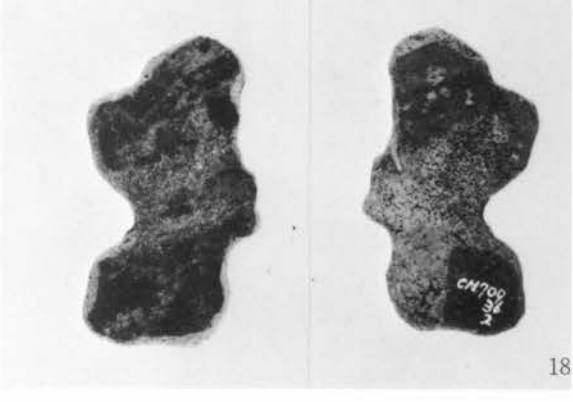
28

35号住居跡出土遺物

7

8

10


18

1. 36号住居跡出土遺物

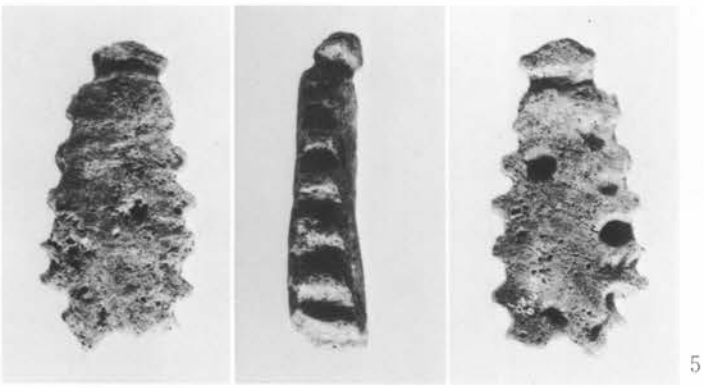
1

2

6

7

2. 37号住居跡出土遺物

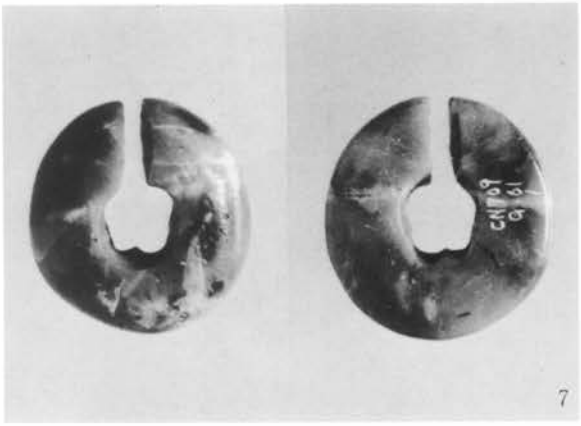


1. 46号住居跡出土遺物

2. Aグリッド出土遺物

3. Cグリッド出土遺物

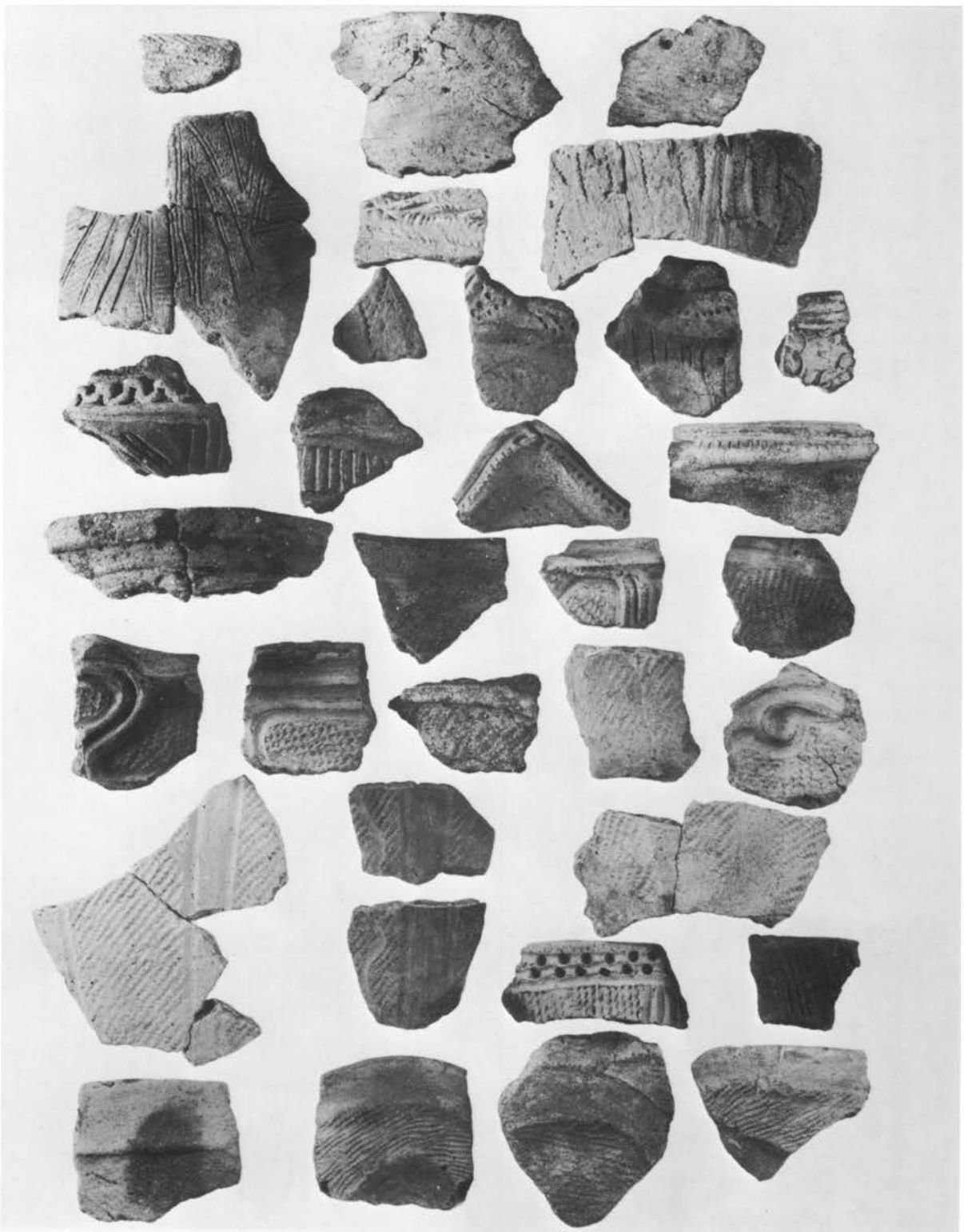
4. Dグリッド出土遺物



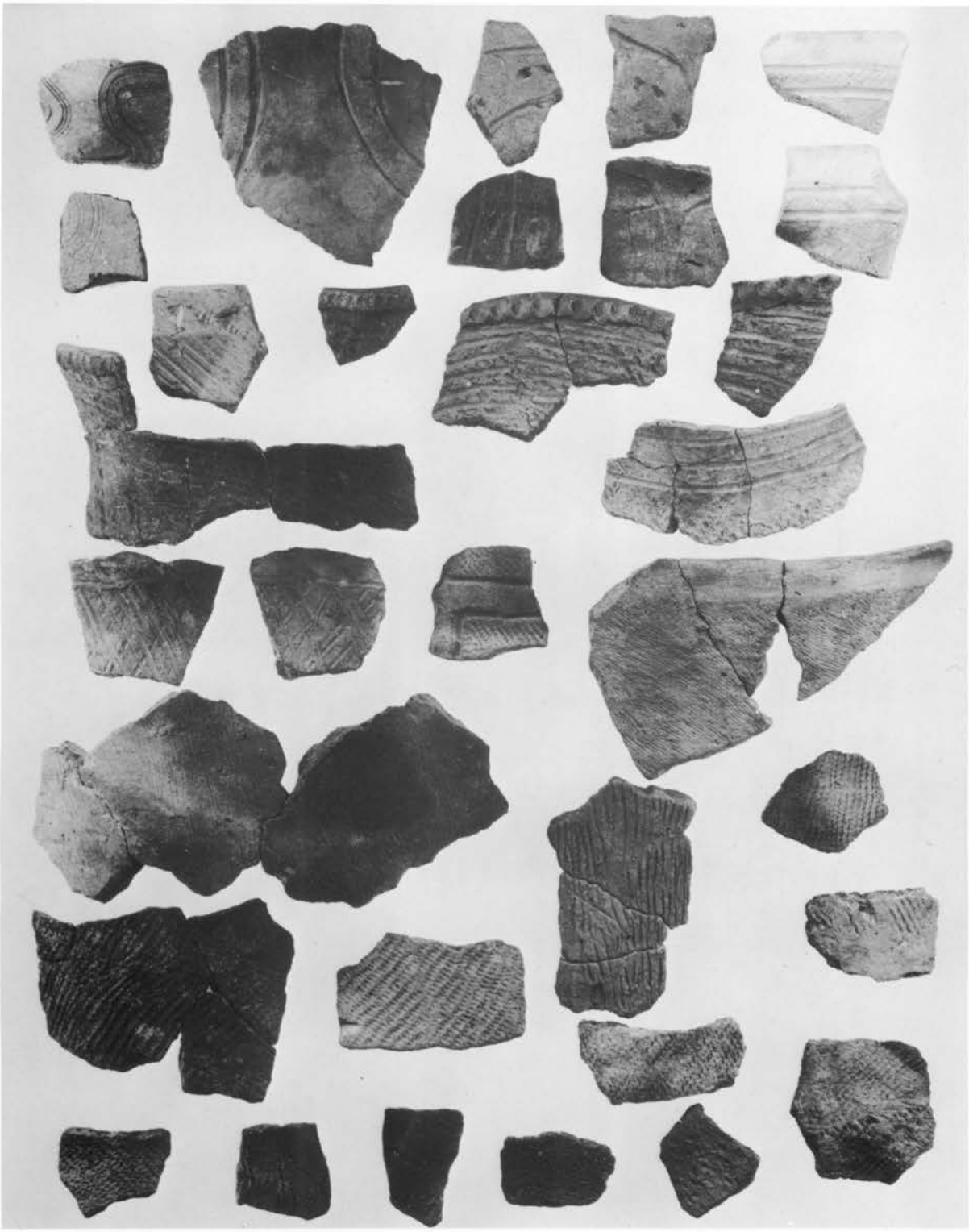
1. Gグリッド出土遺物

2. Hグリッド出土遺物

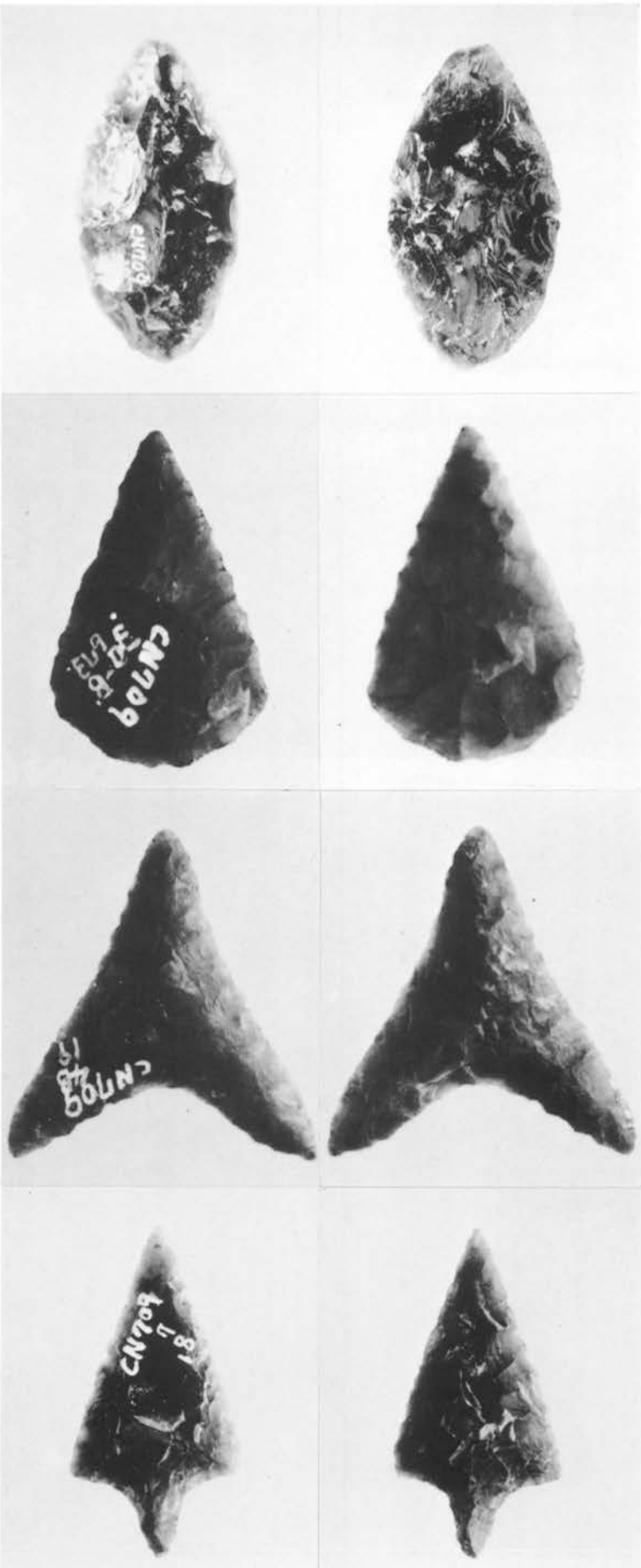
縄文土器（1）



縄文土器（2）



縄文土器（3）



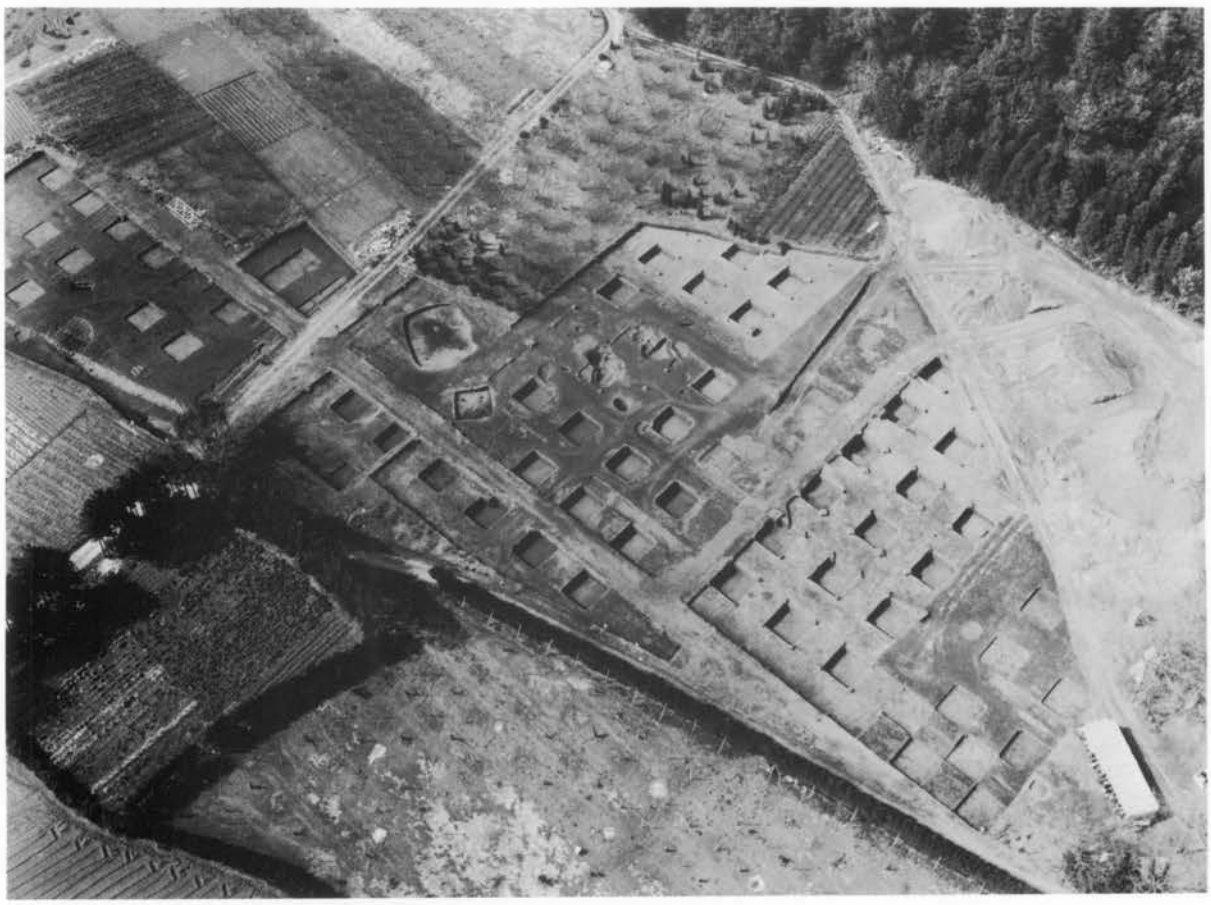
10 - 0008

30B - 673

48 - 0019

7 - 0018

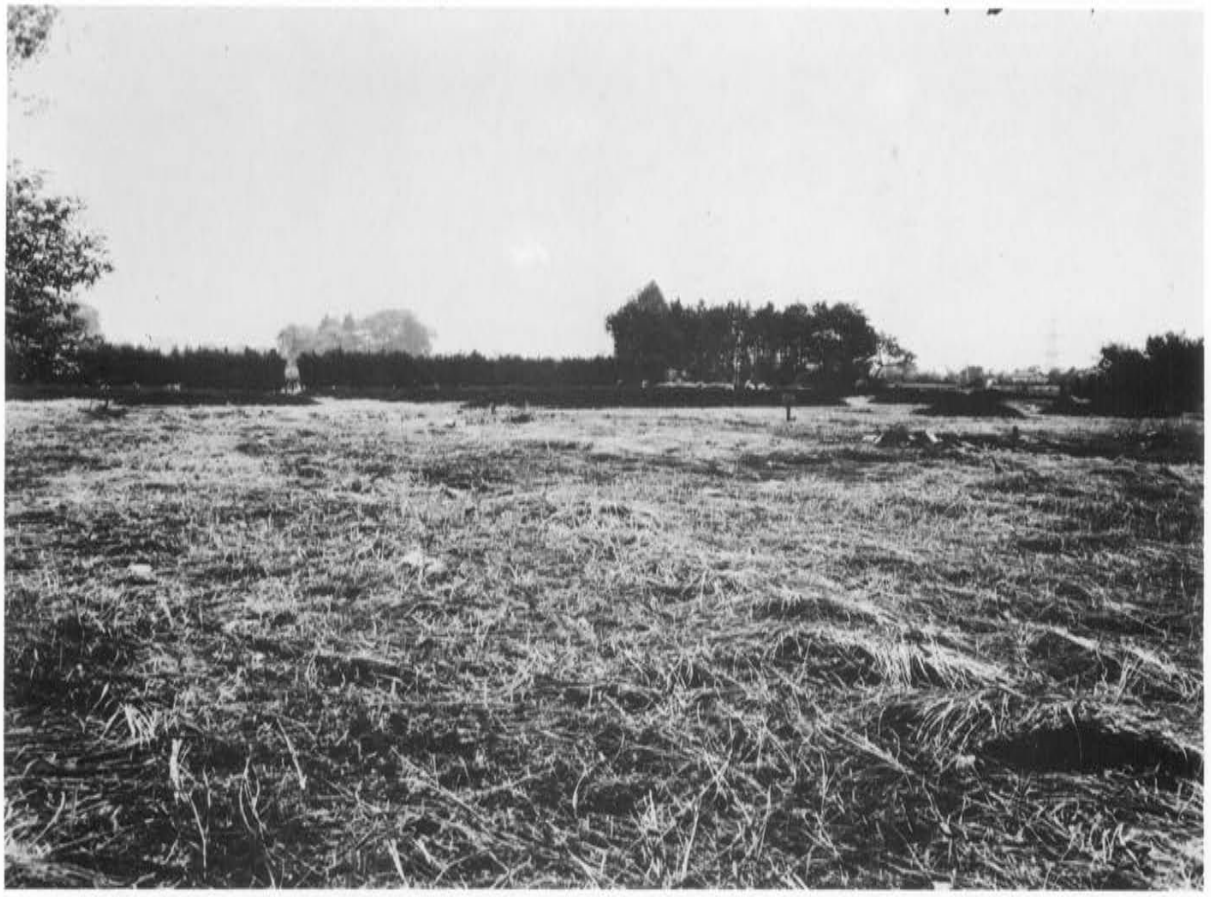
1. 遺跡全景（航空写真）



2. 53年度調査区全景（航空写真）

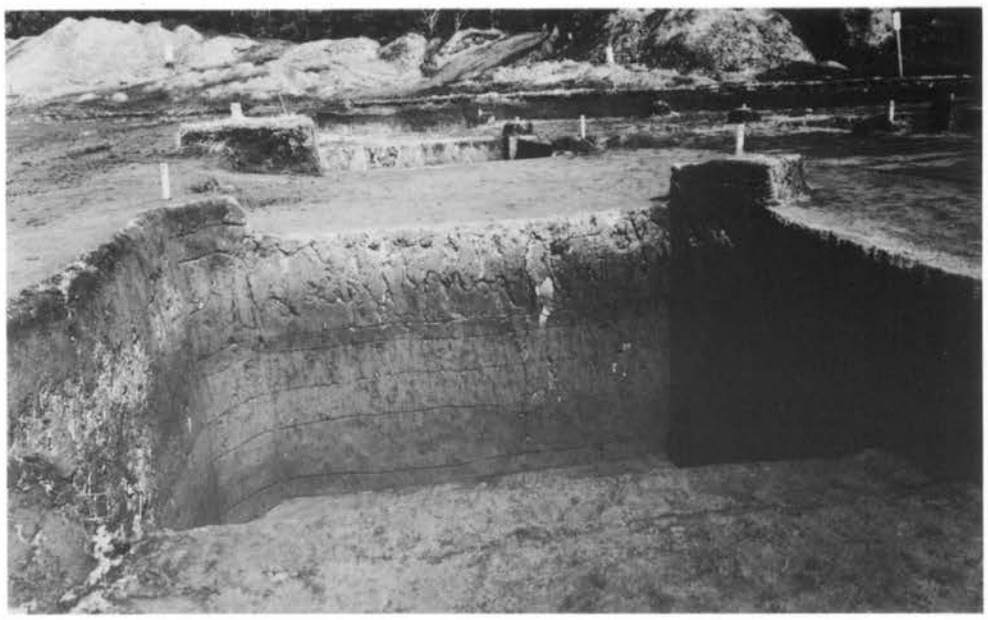
1. 54年度調査区全景（航空写真）

2. 遺跡近景（53～55年度調査区）



1．遺跡近景（53～55年度調査区）

2．遺跡近景（56・57年度調査区）



1.　2 B - 19
土層断面

2.　6 D - 86
土層断面

3.　3 D - 15
遺物出土状態

1.　6 D - 53
遺物出土状態

2.　6 D - 64
遺物出土状態

3.　6 D - 64（0021）遺物出土状態

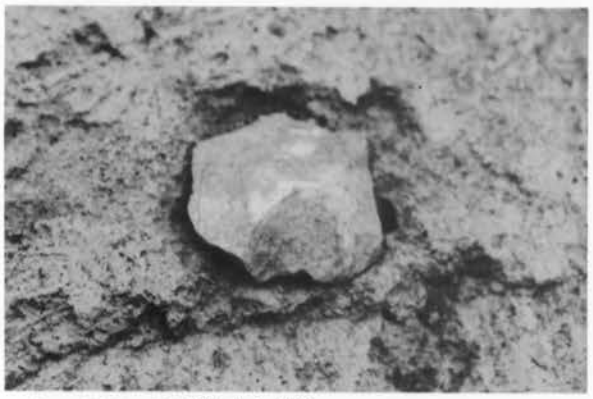
4.　6 D - 64（0028）遺物出土状態

1. 6 C - 53
遺物出土状態

2. 6 D - 97
遺物出土状態

3. 6 D - 85
遺物出土状態

1. 10E－24・25 遺物出土状態



2. 10E－13 遺物出土状態

3. 10E－14（0007）遺物出土状態

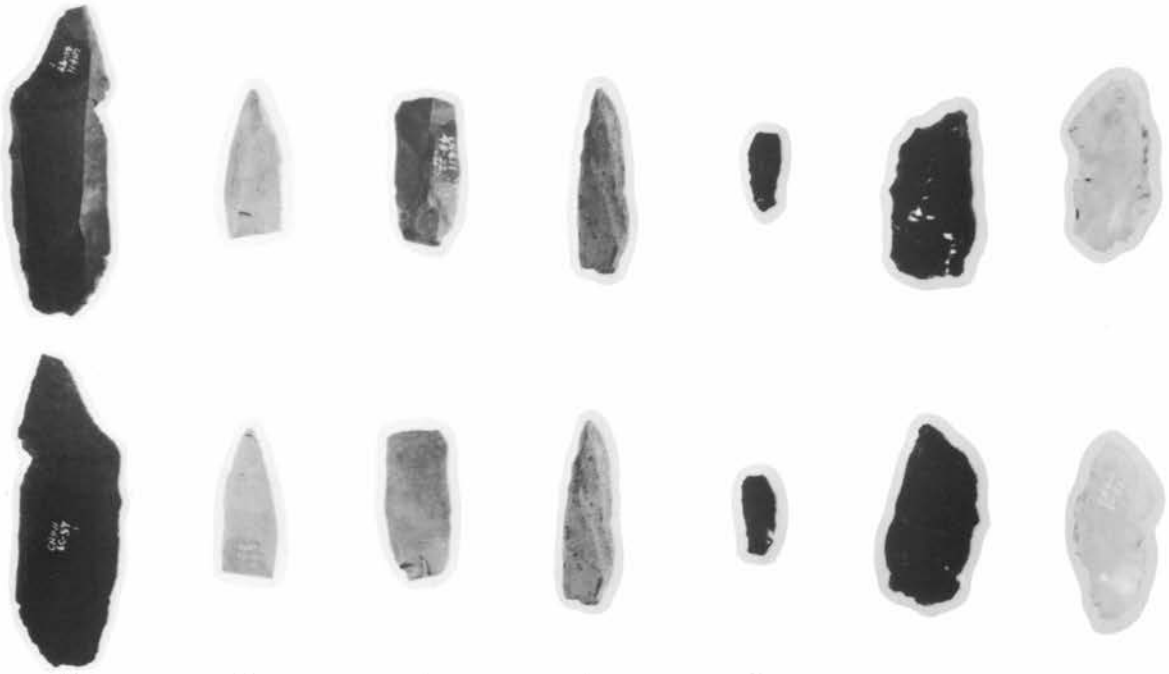
4. 10E－24（0001、0006、0010）遺物出土状態

5. 10E－25 遺物出土状態

1.　12F－13（0007）遺物出土状態

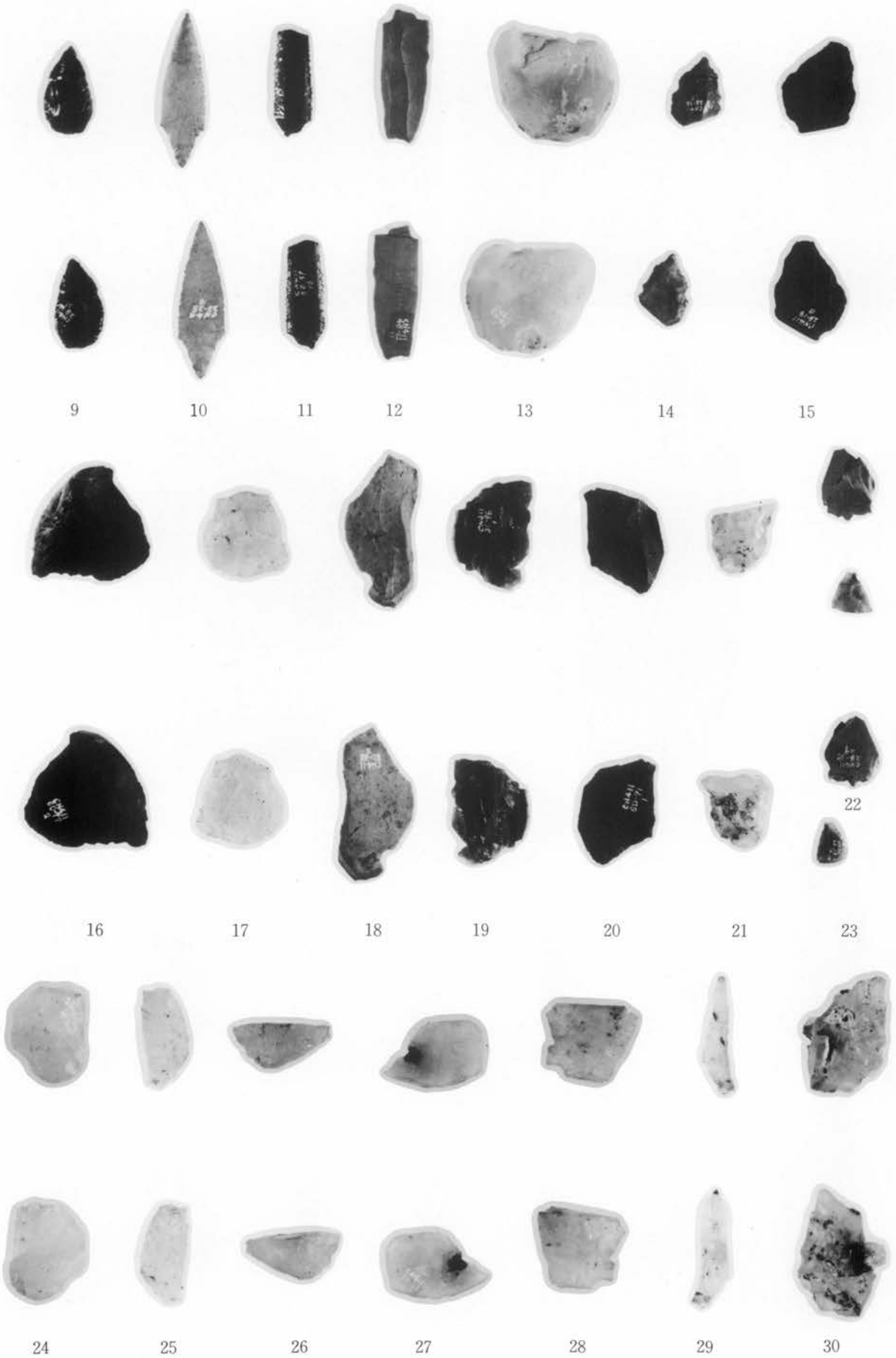
2.　12F－50（0002）遺物出土状態

1

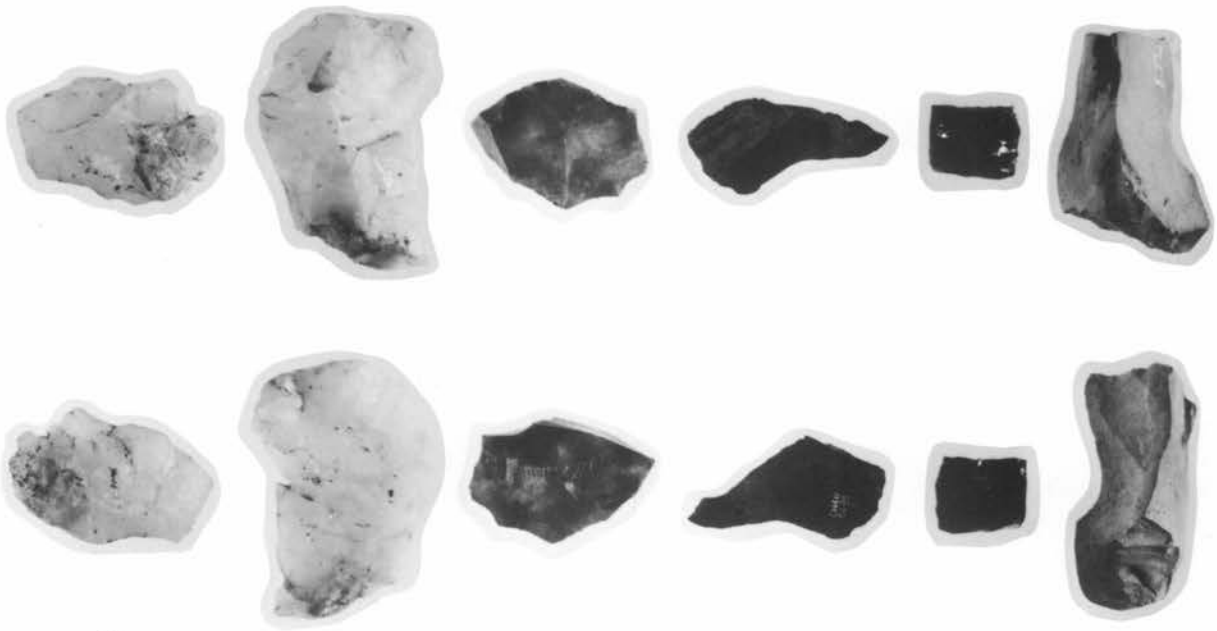


2　3　4　5　6　7　8

3.　先土器時代の遺物（その1）1～8

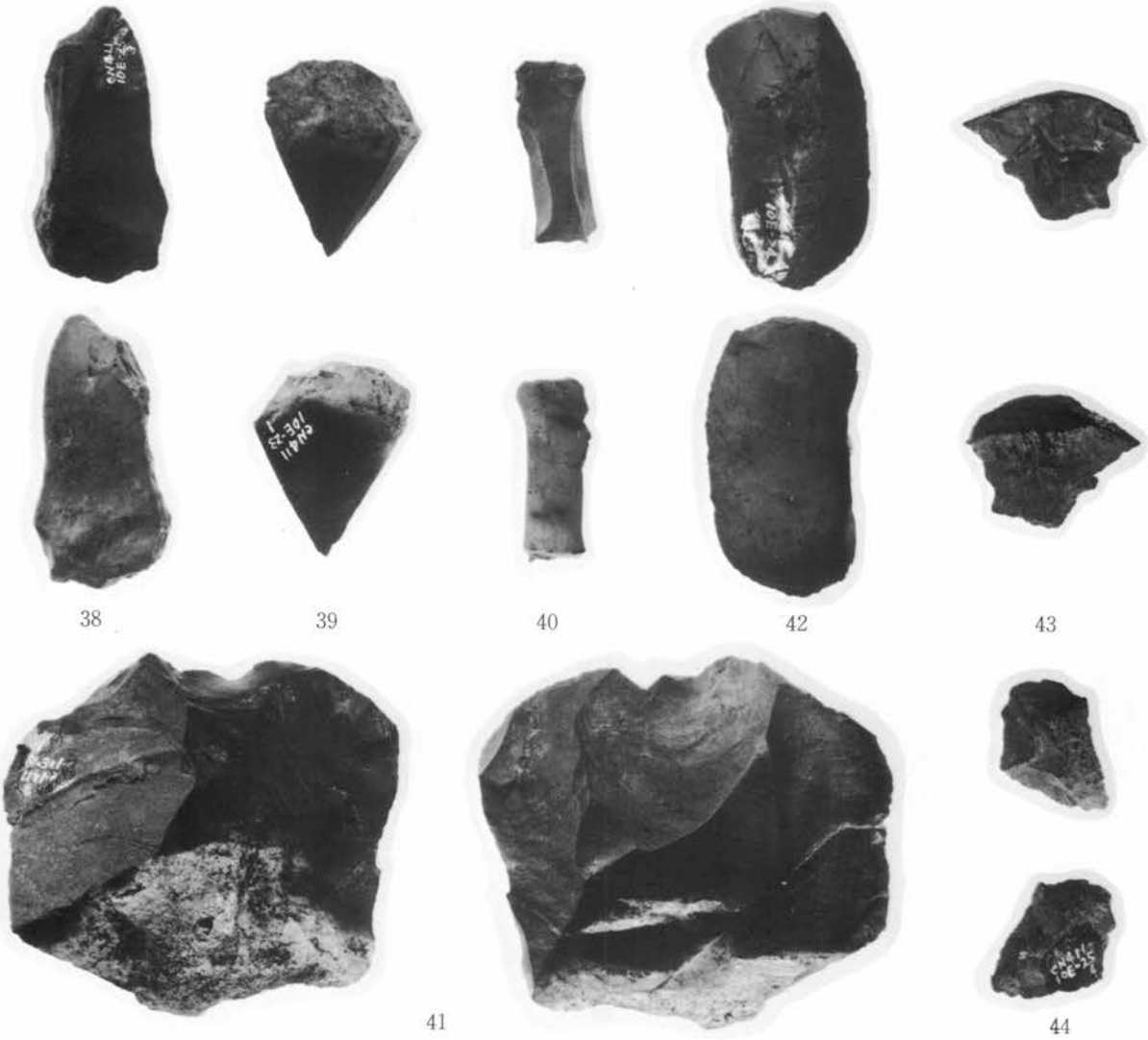


先土器時代の遺物（その２）９～30



31　33　34　35　36　37

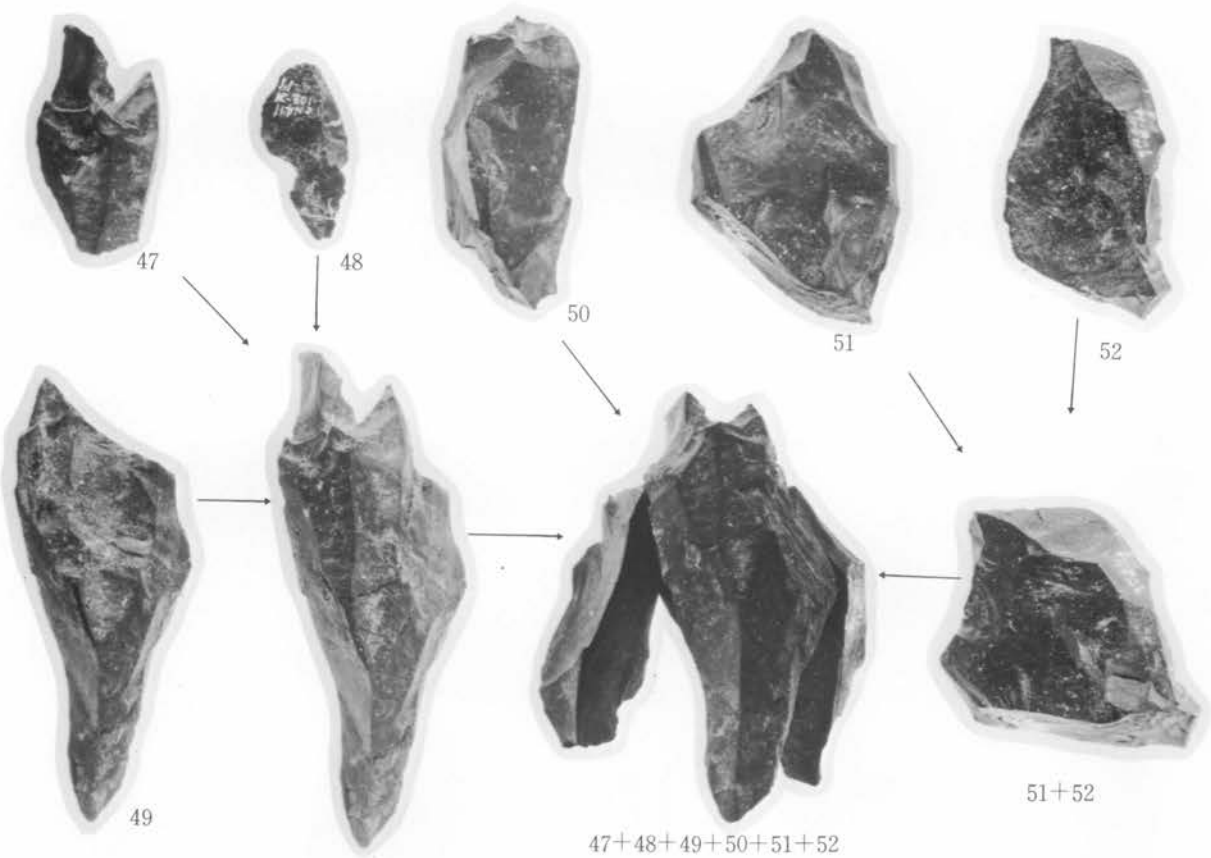
1. 先土器時代の遺物（その3）31・33～37〔以上53年度～55年度出土遺物〕

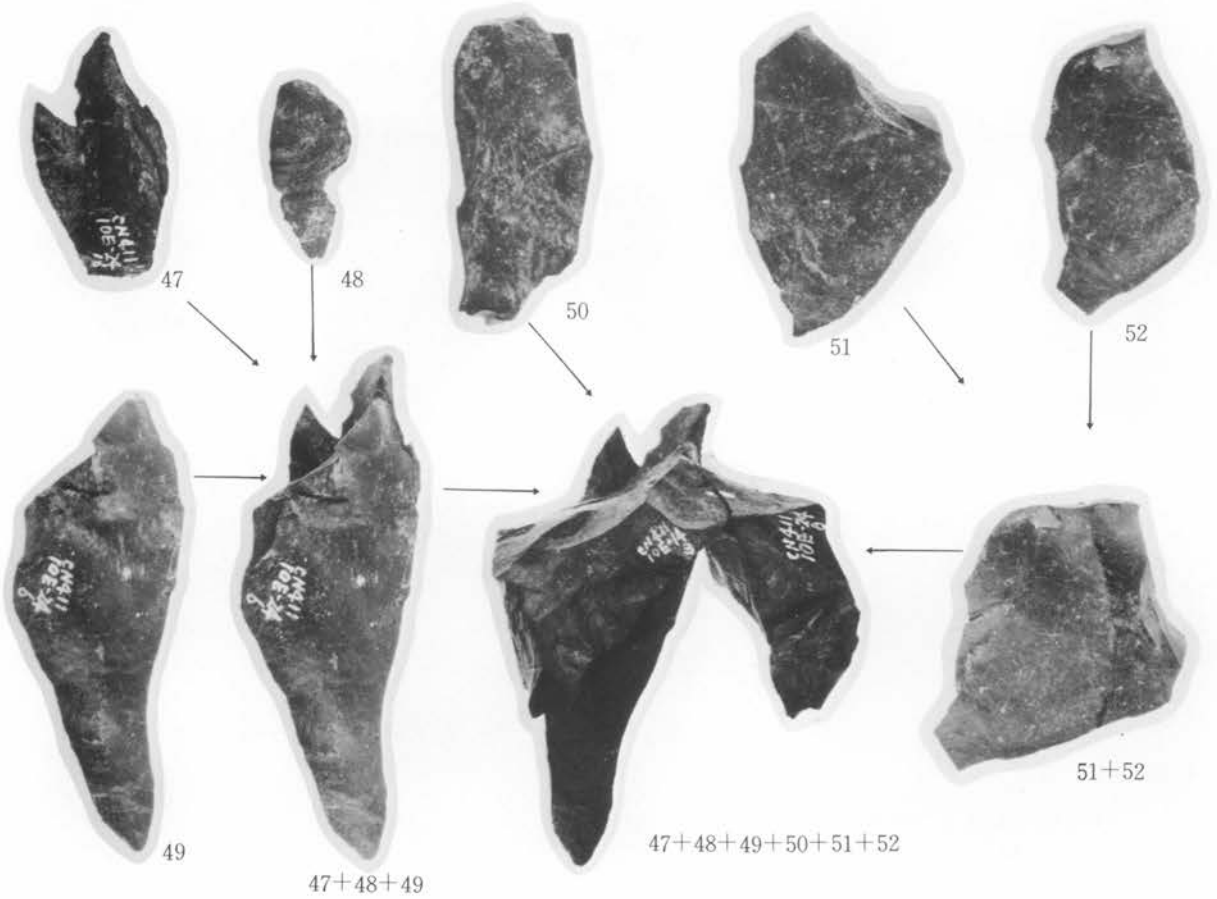


38　39　40　42　43

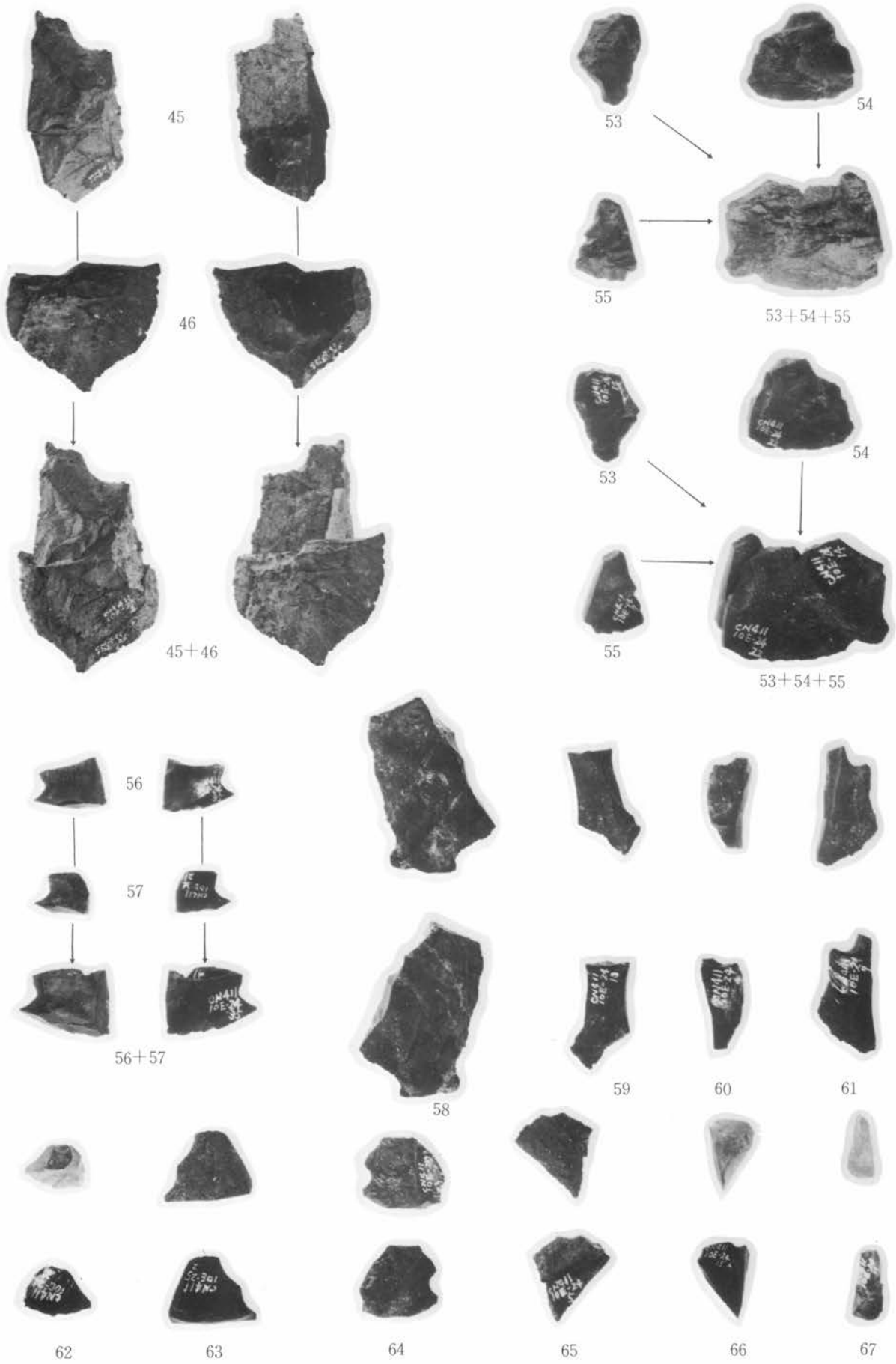
41　44

2. 先土器時代の遺物（その4）38～44

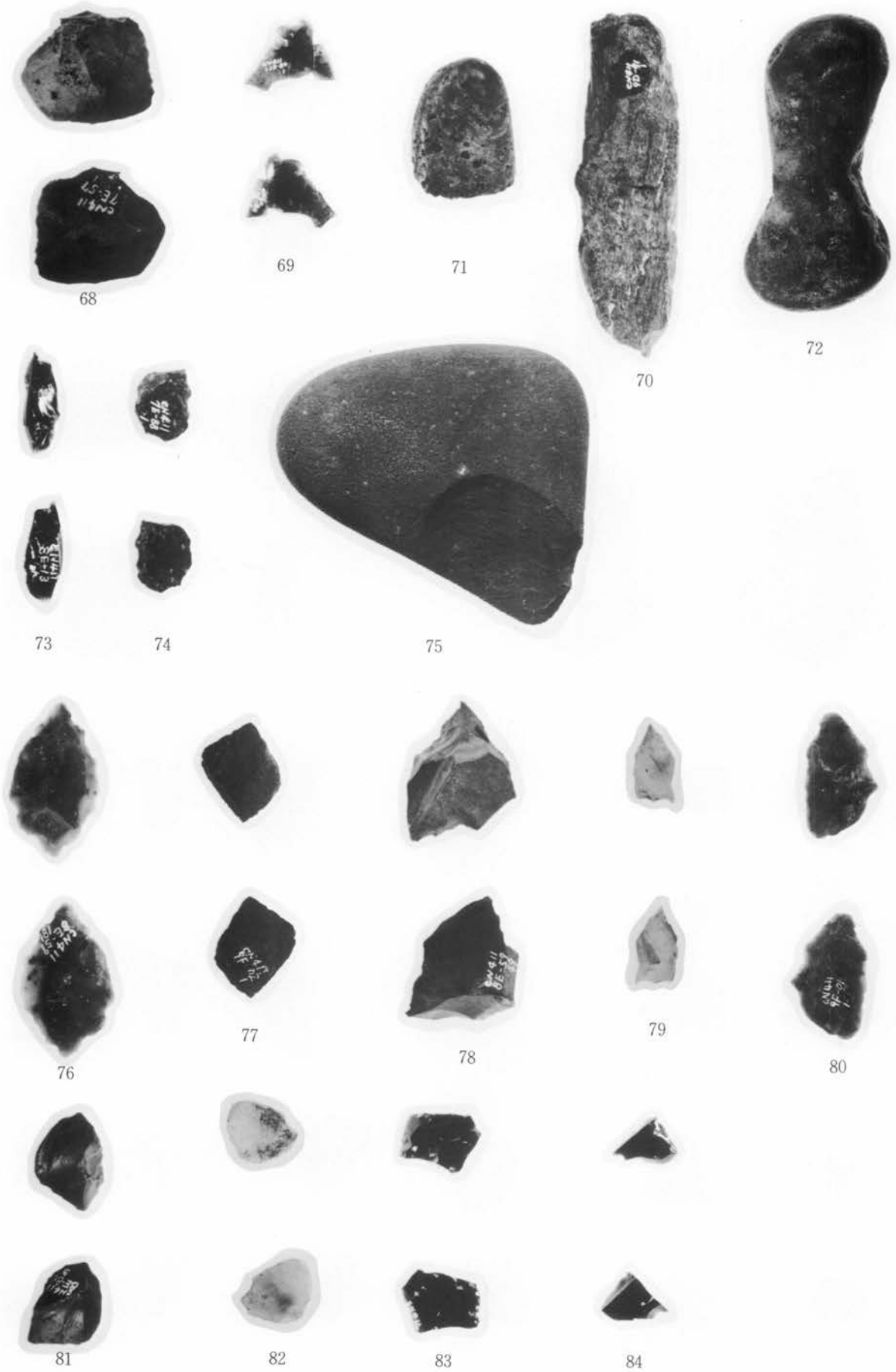




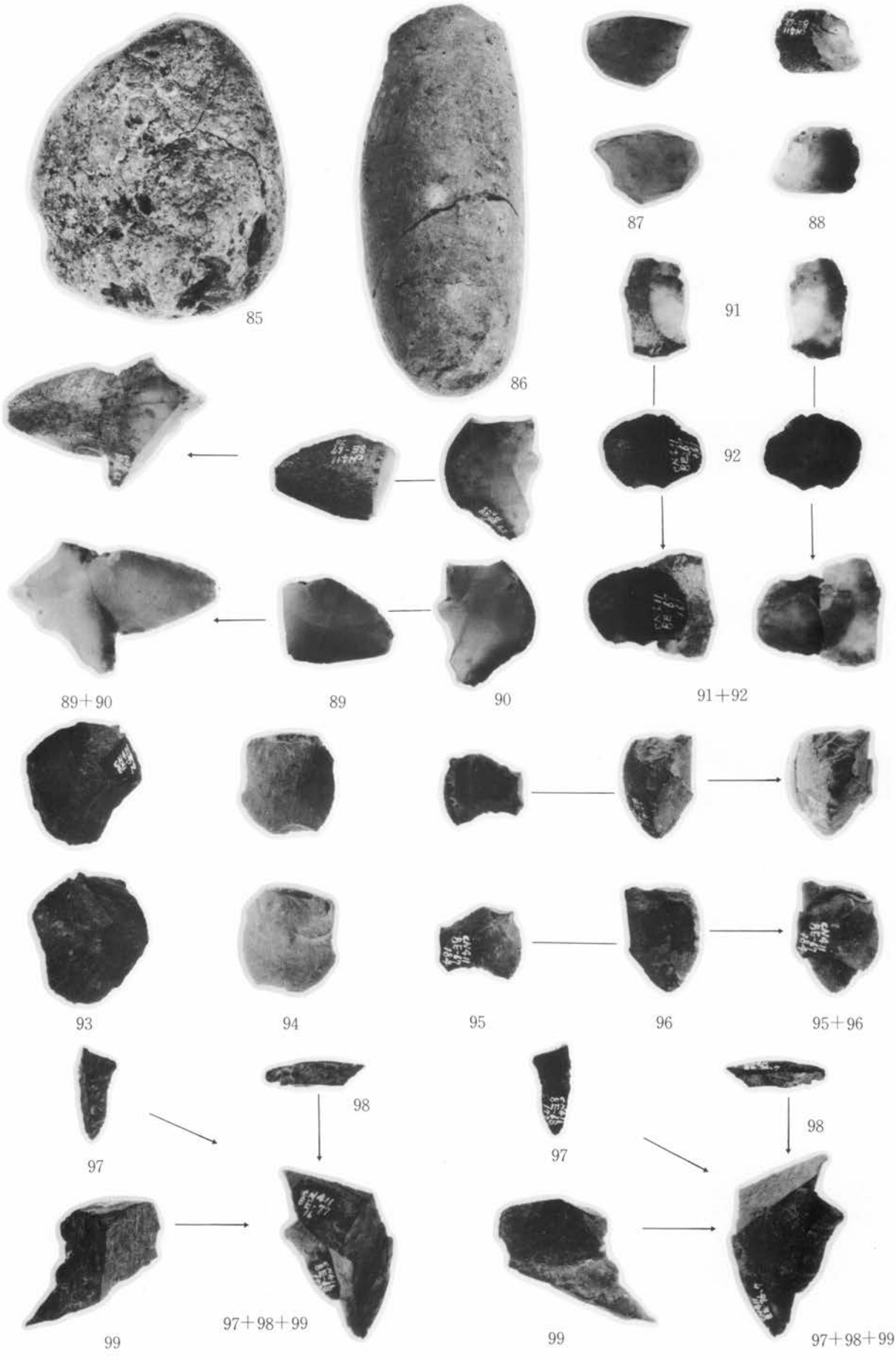
先土器時代の遺物（その５）47～52



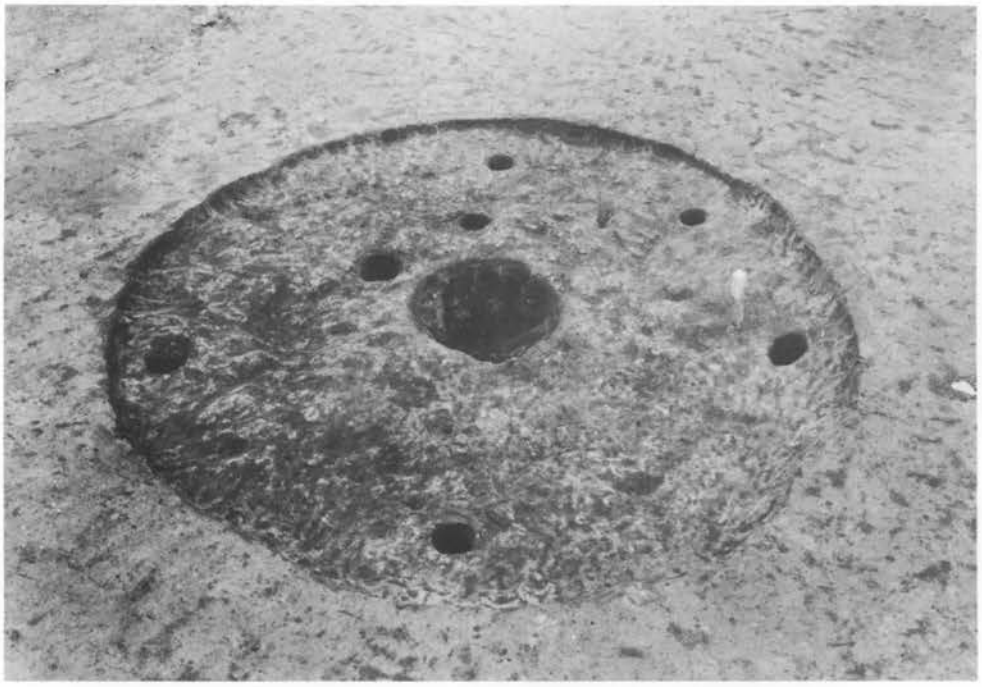
先土器時代の遺物（その６）45・46・53～67



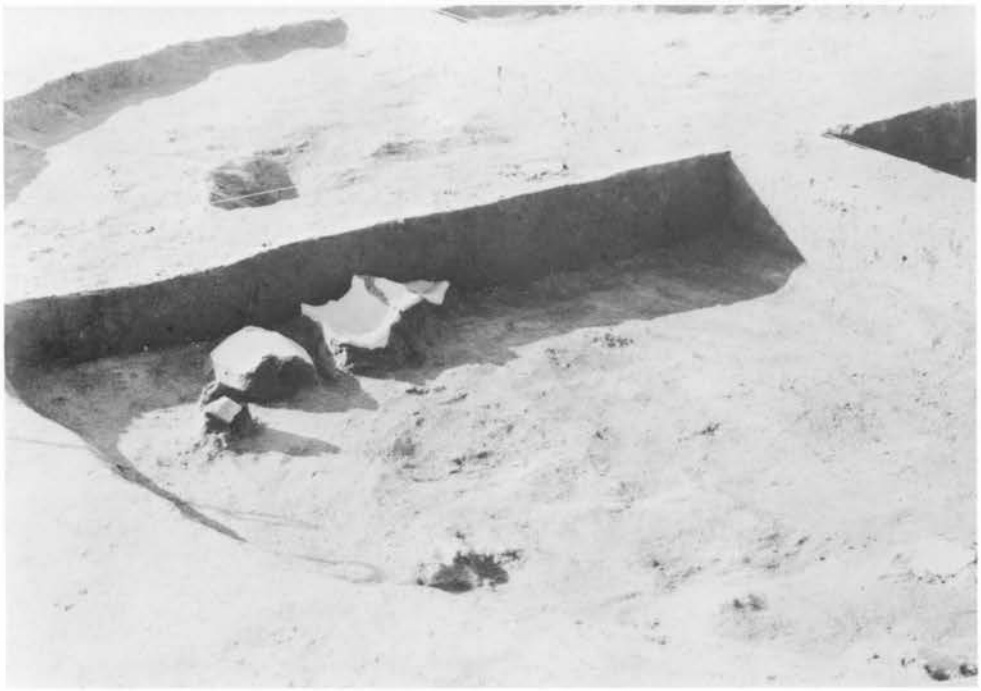
先土器時代の遺物（その７）68～84



先土器時代の遺物（その８）85～99



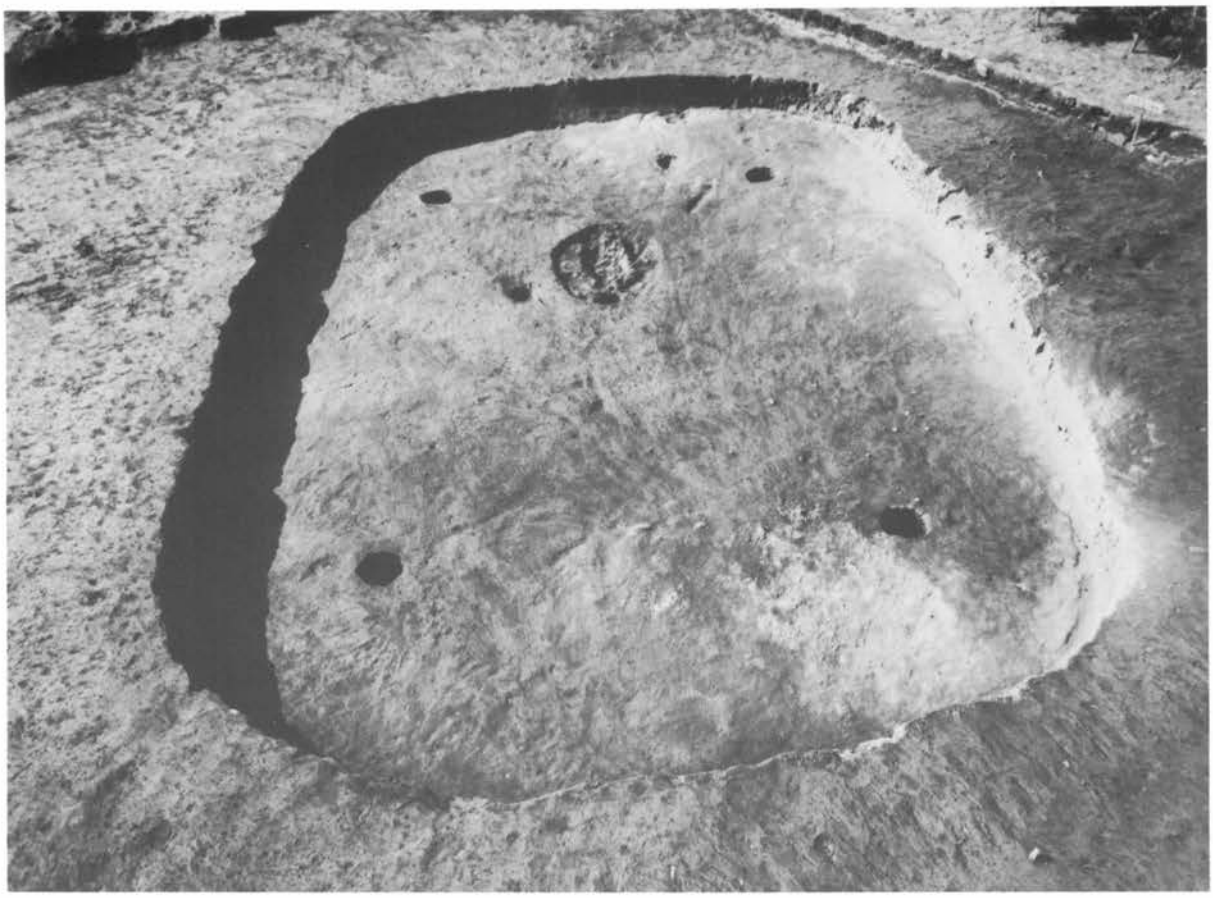
1.　021号住居跡
全景



2.　021号住居跡
遺物出土状態

3.　021号住居跡出土遺物

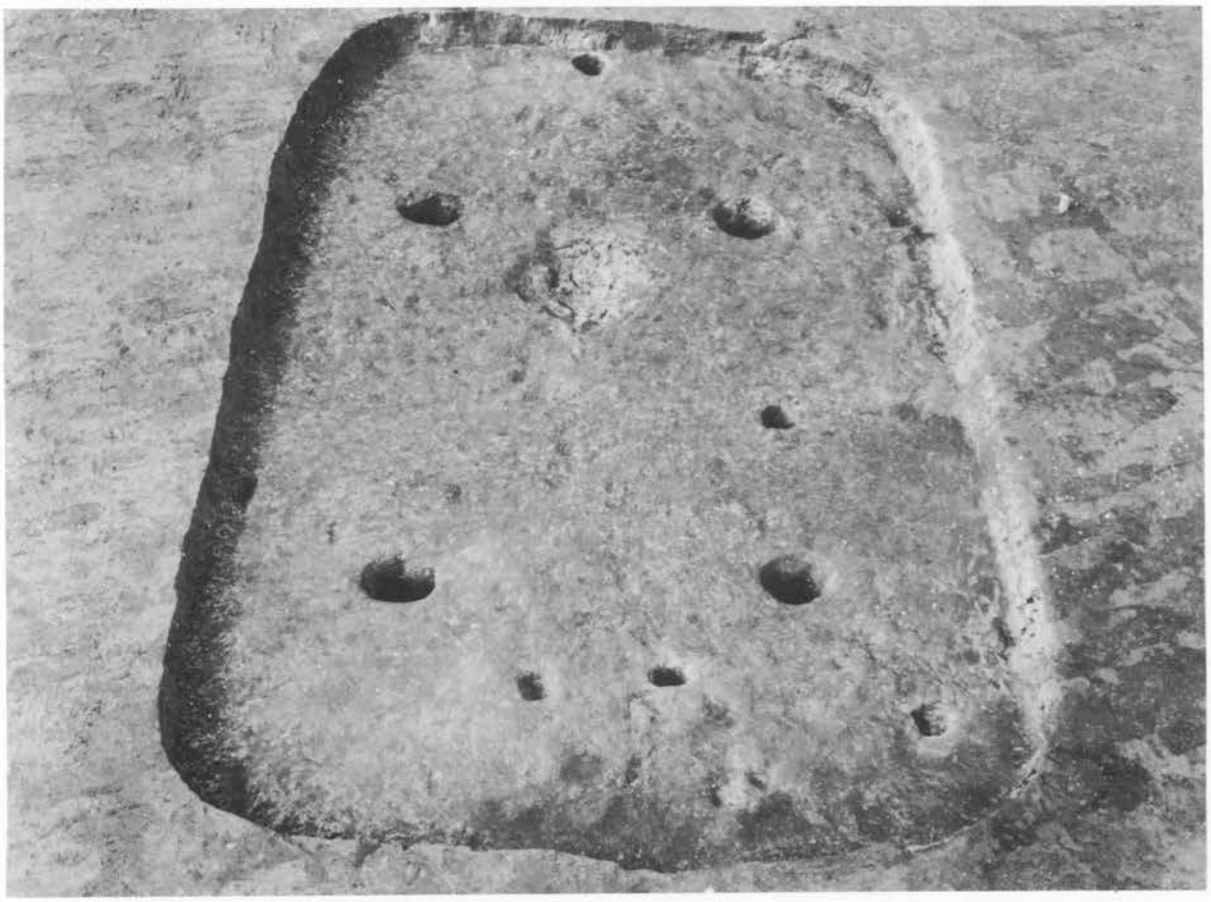
4.　グリッド出土の縄文土器



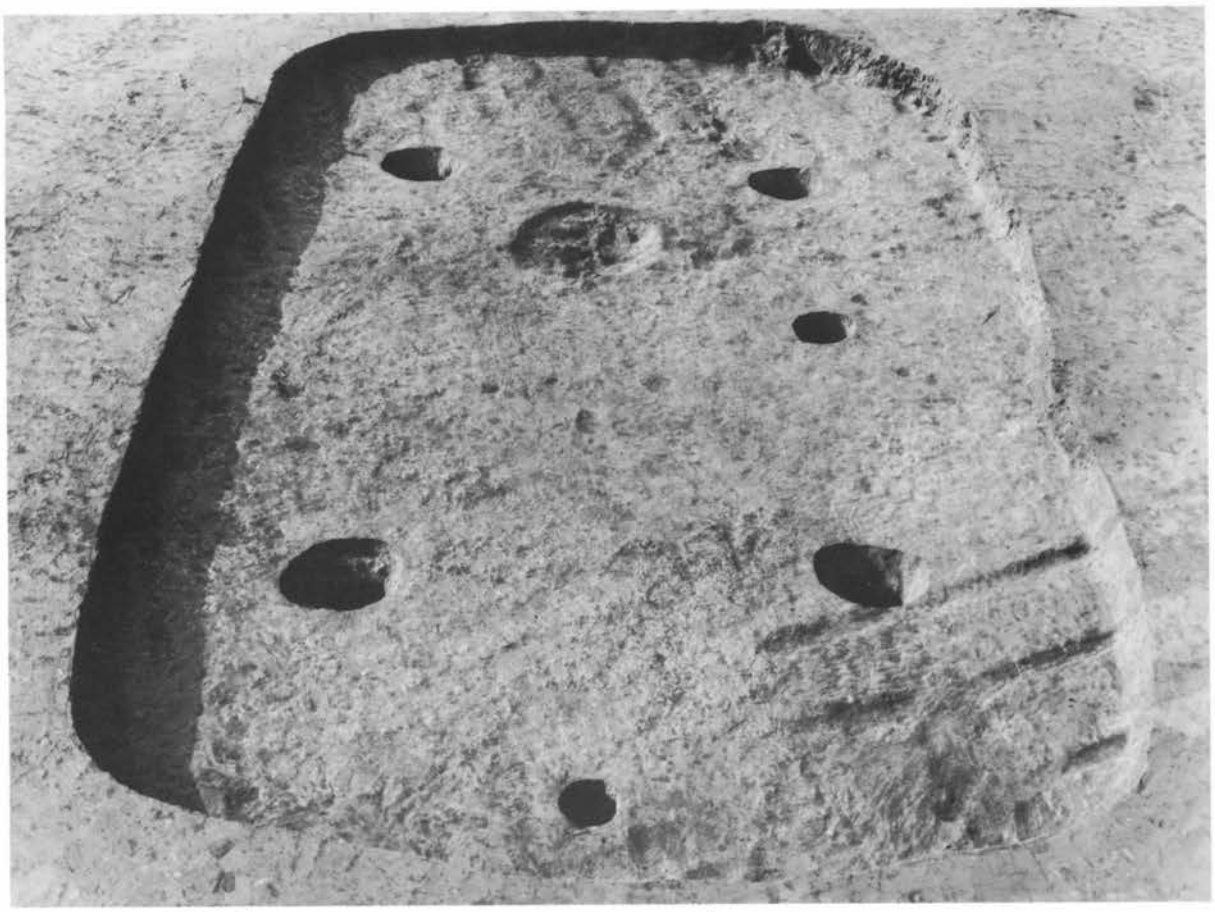
1. 001号住居跡全景

2. 001号住居跡炭化材出土状態

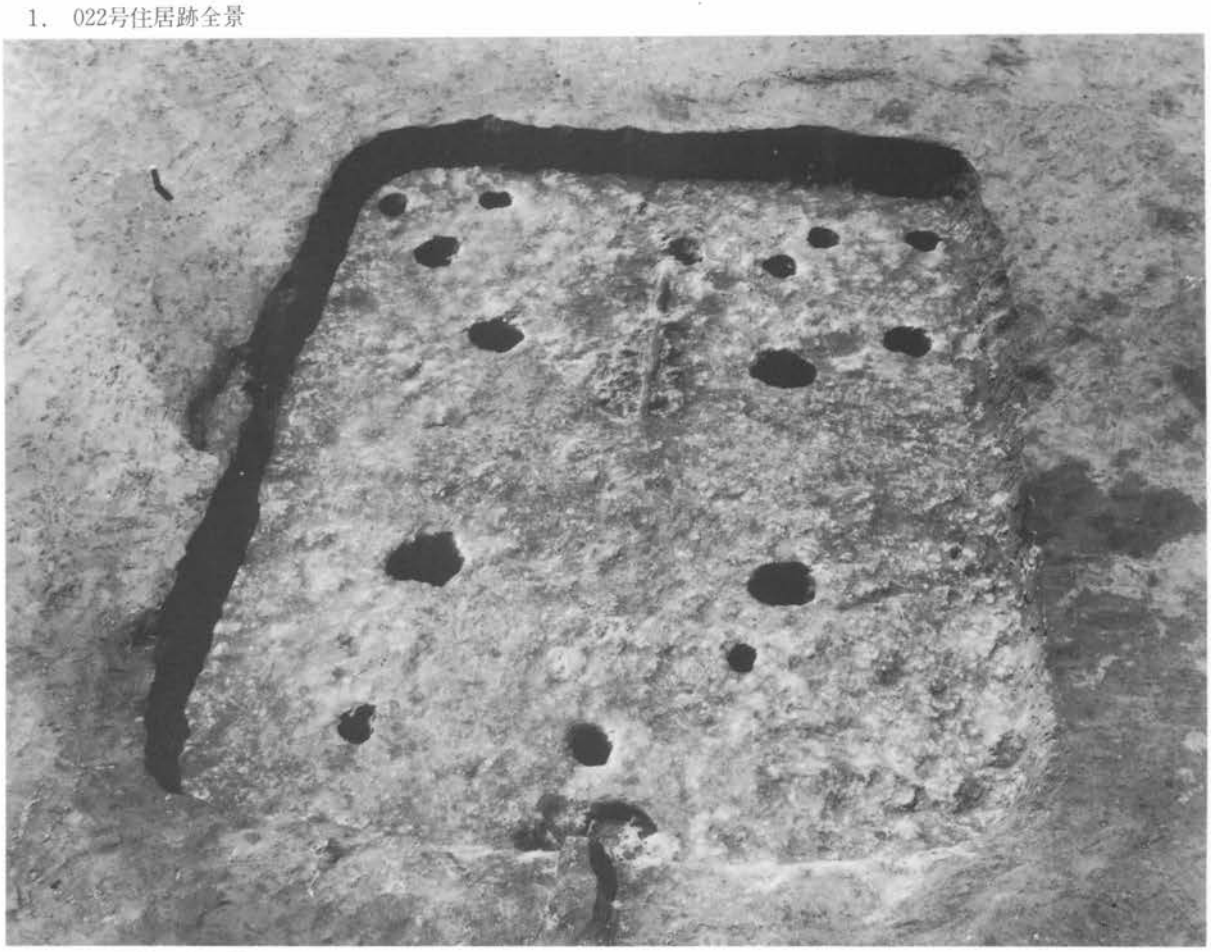
1. 010号住居跡全景



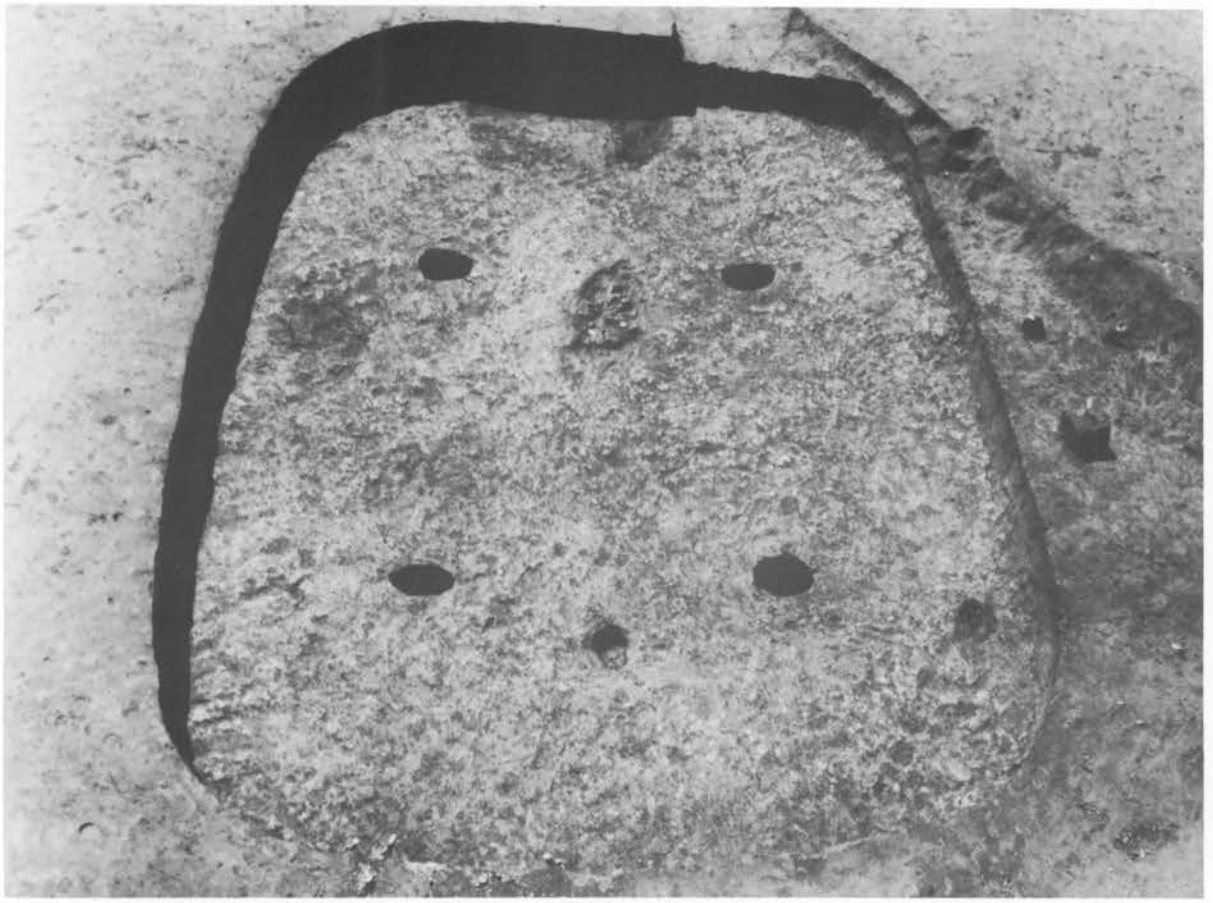
2. 019号住居跡全景



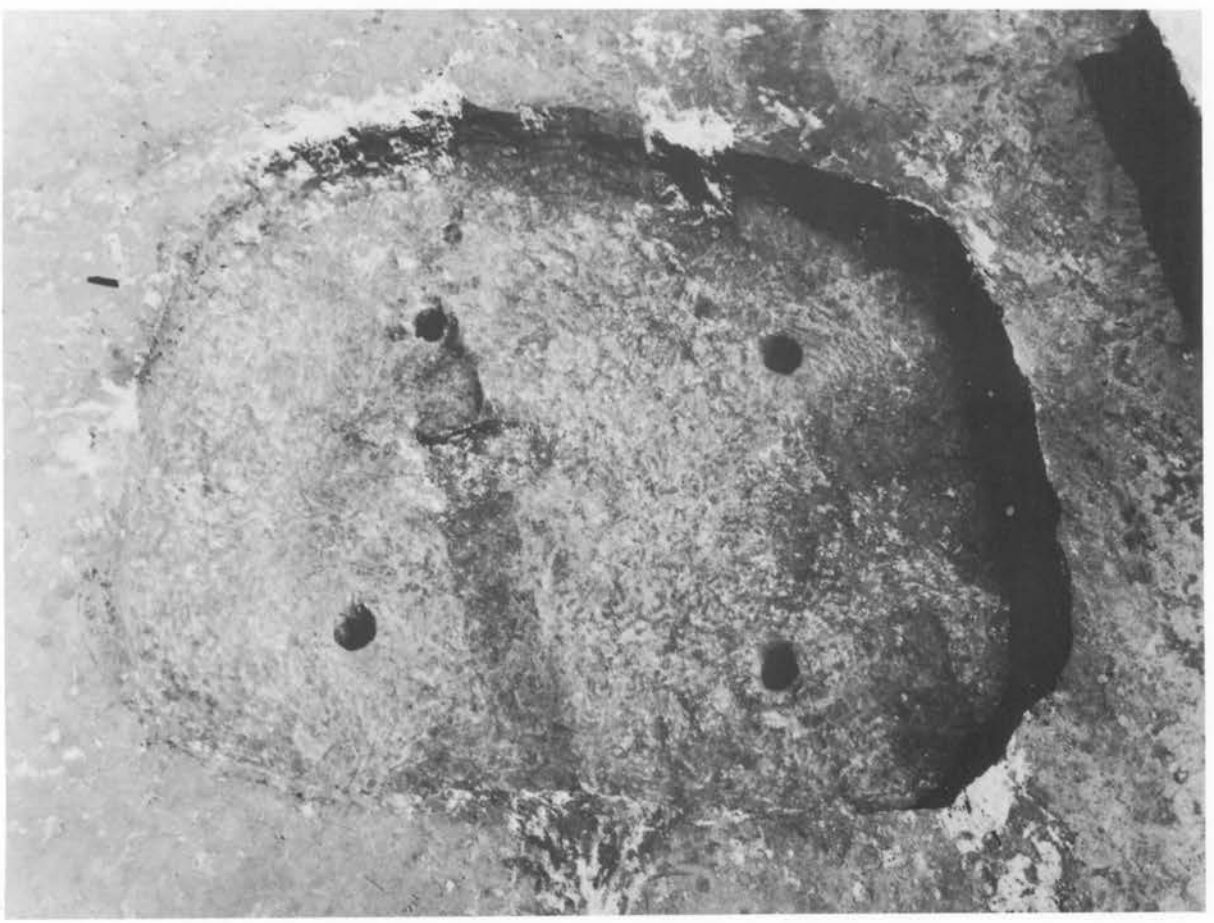
1. 022号住居跡全景



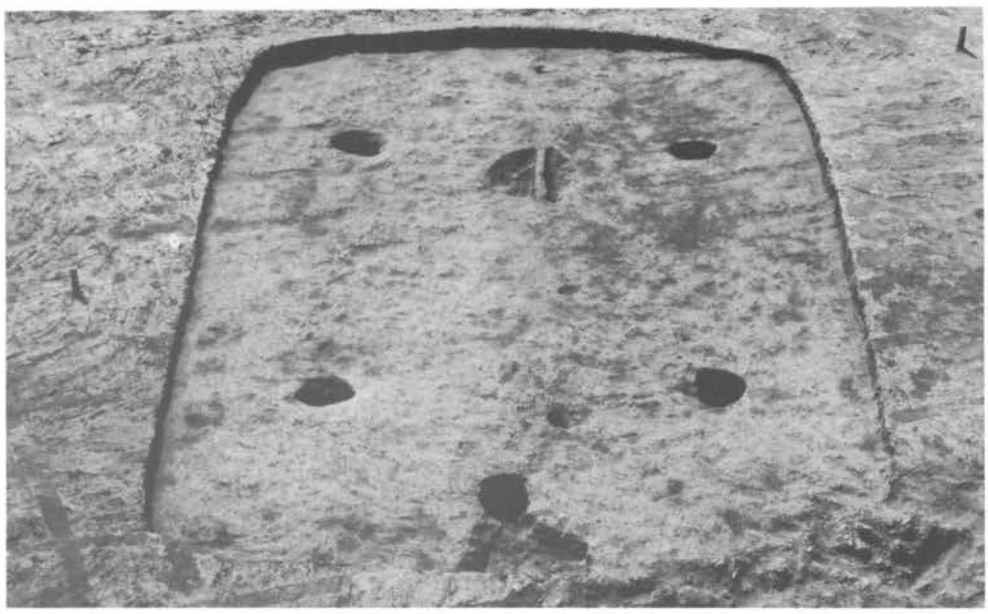
2. 026号住居跡全景



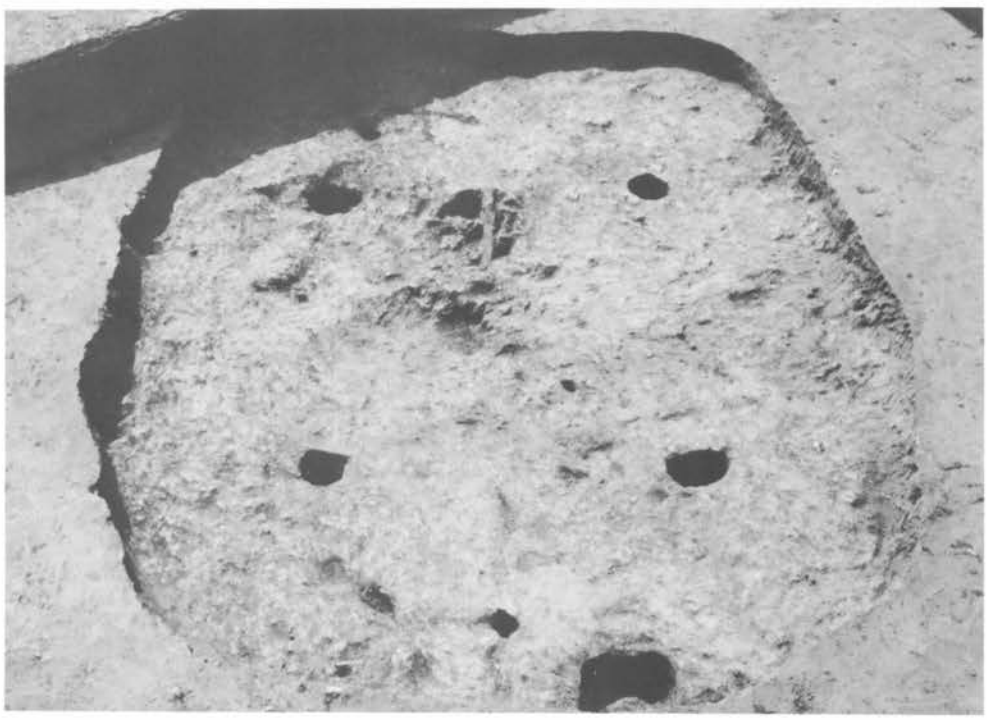
1. 028号住居跡全景



2. 031号住居跡全景



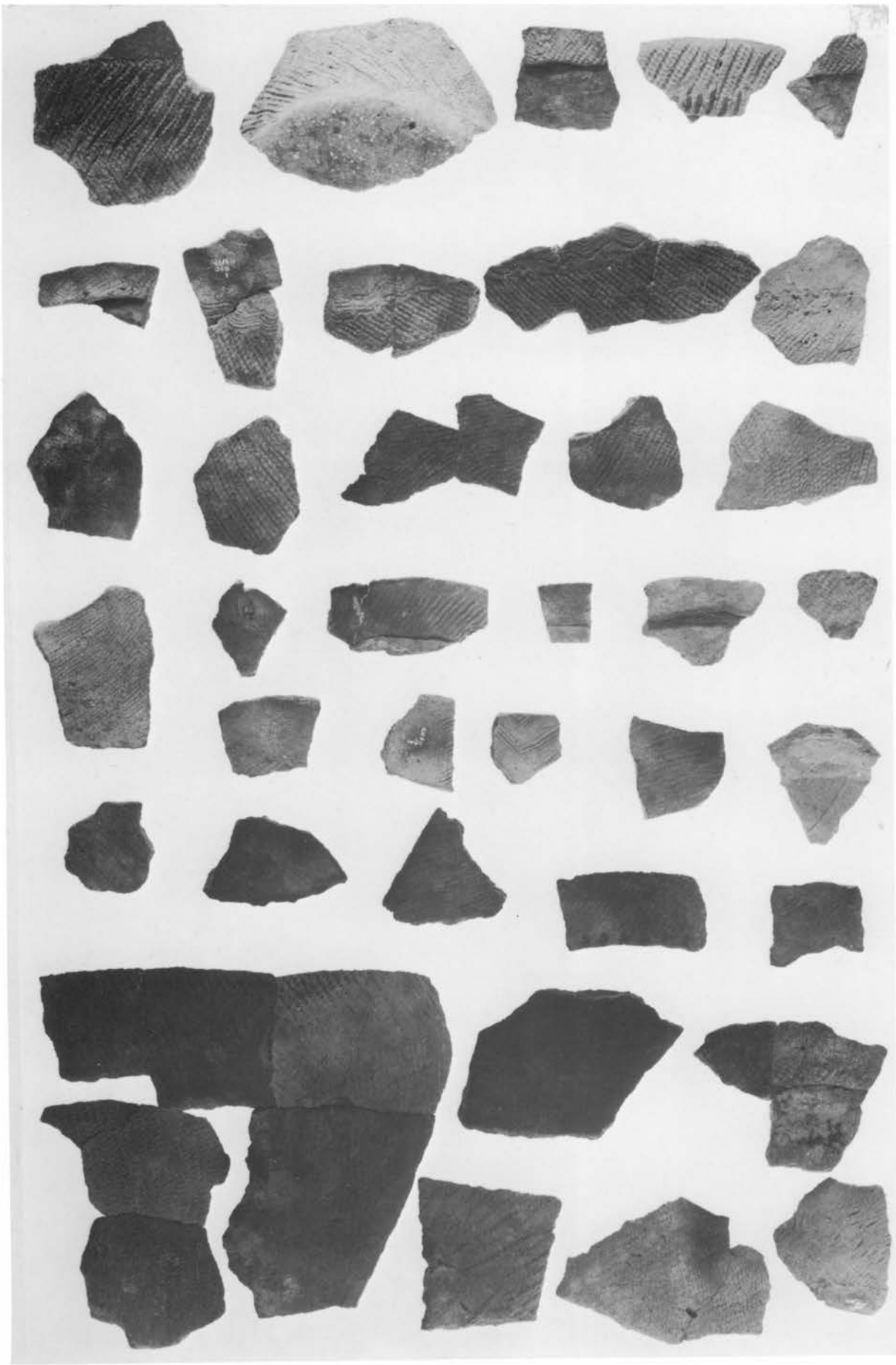
1.　035号住居跡
全景



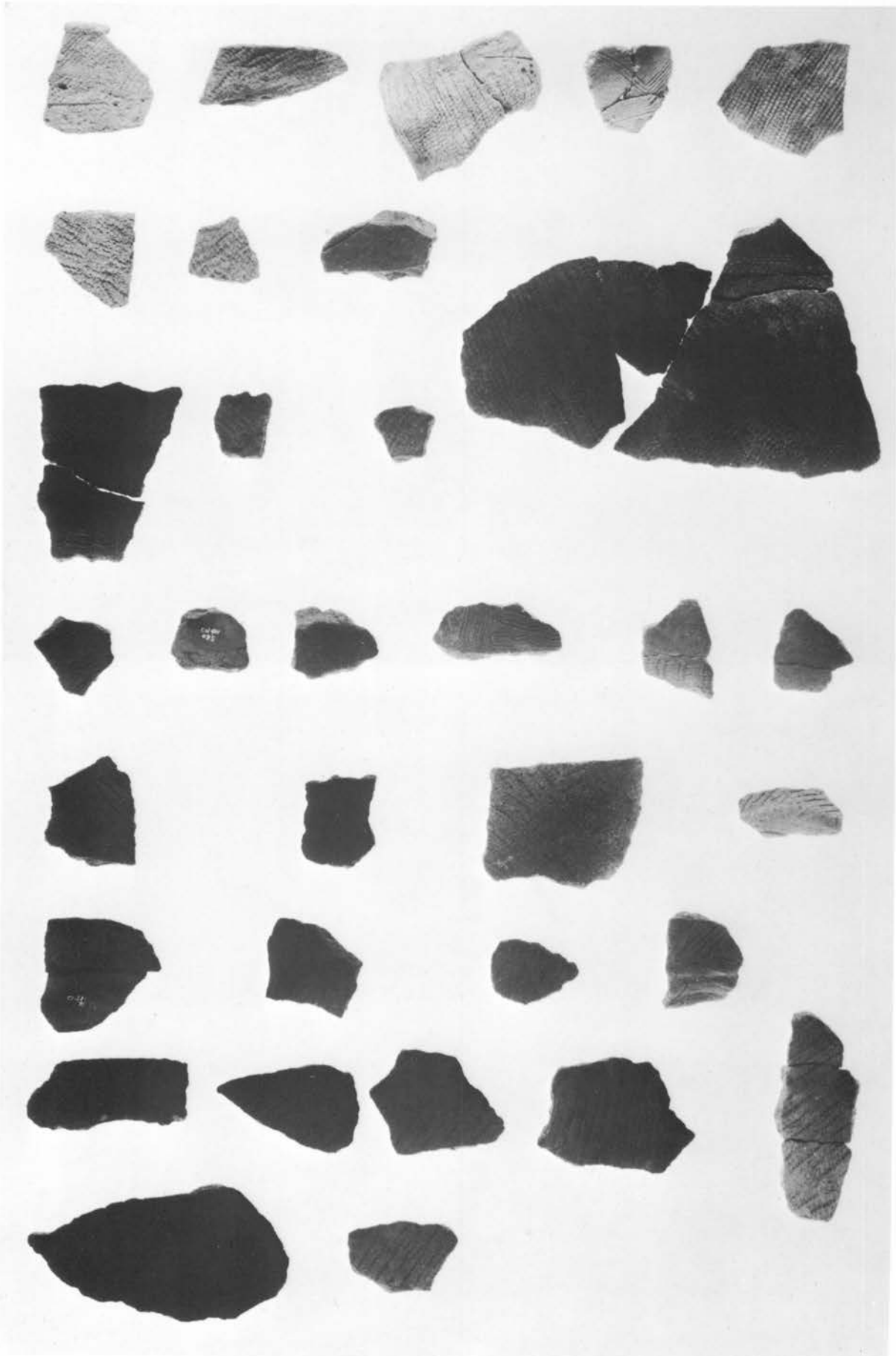
2.　038号住居跡
全景

3.　026号住居跡出土遺物

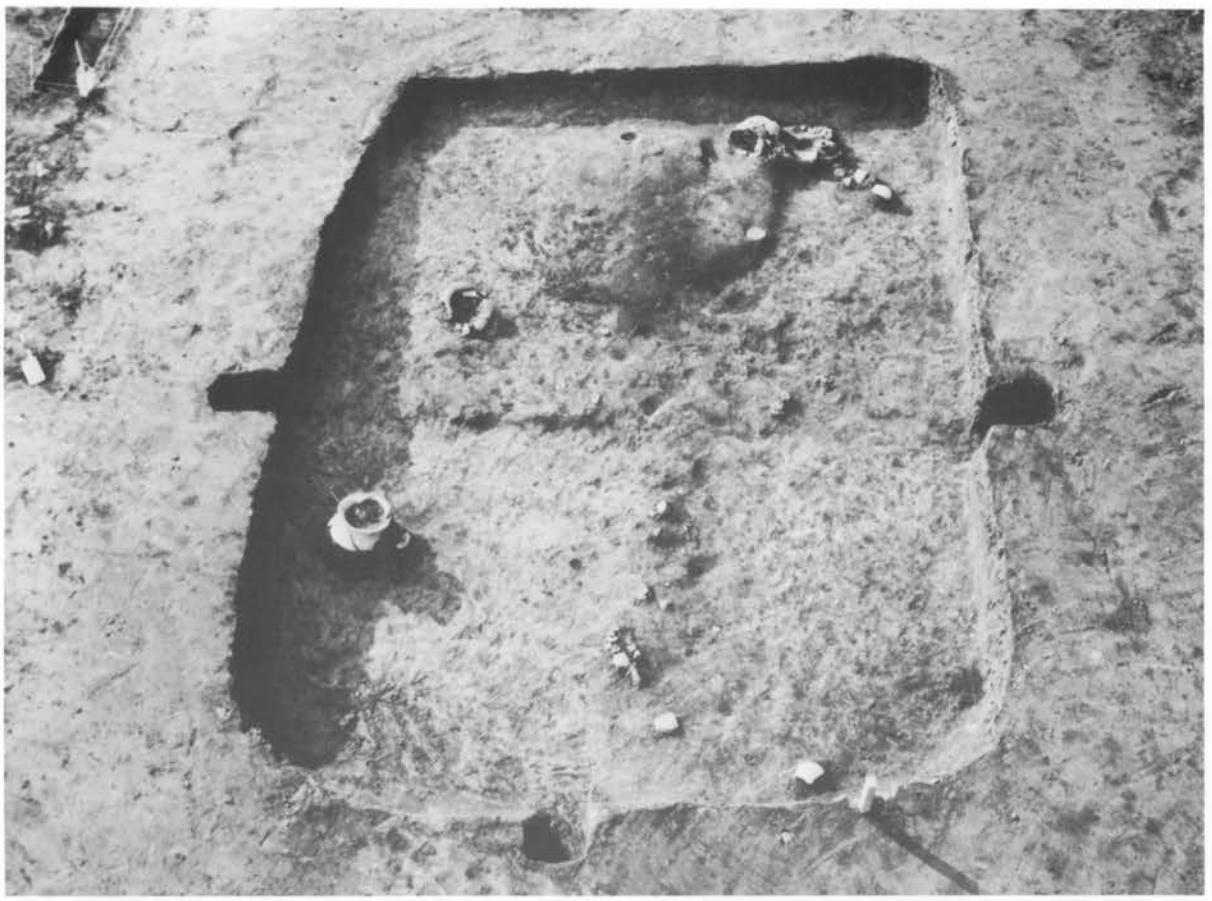
4.　035号住居跡出土遺物



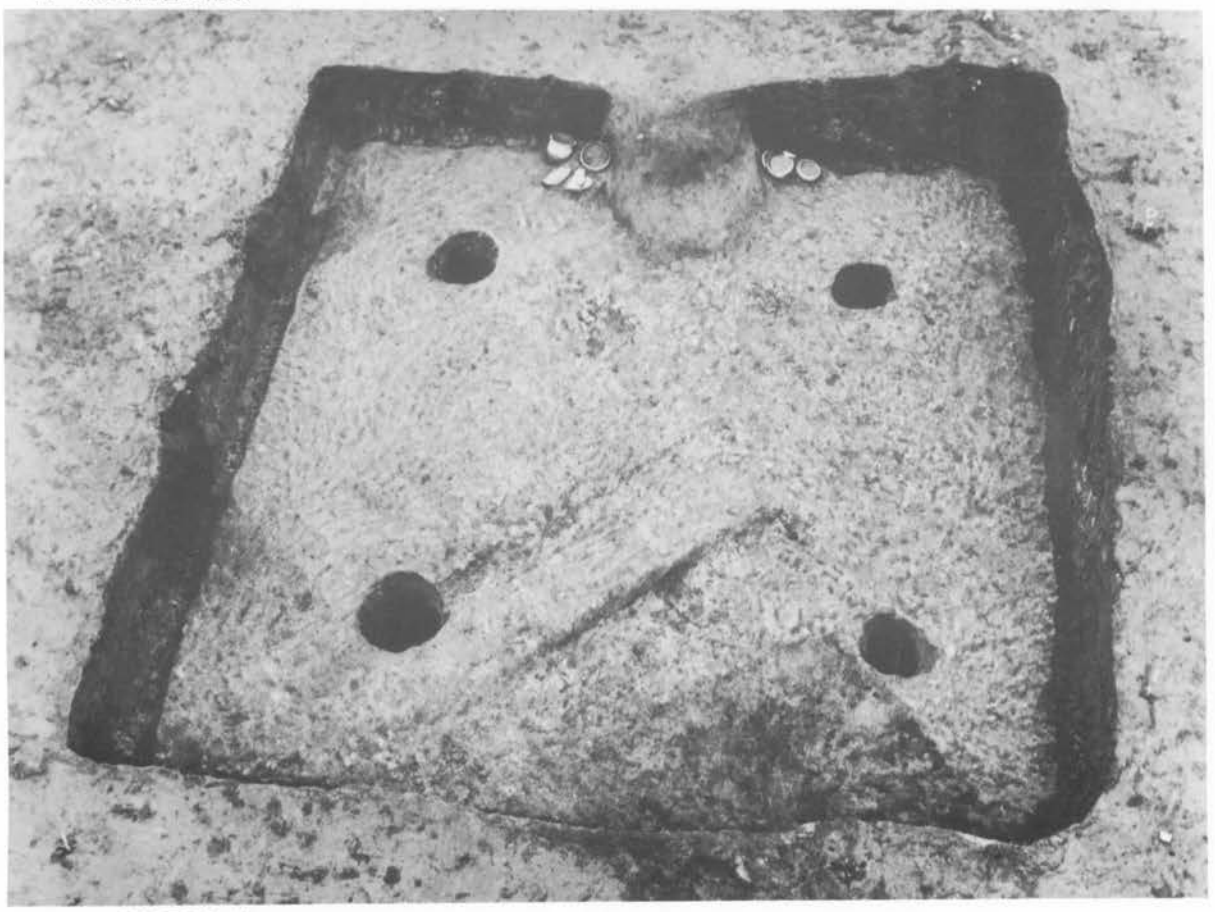
遺構出土の弥生土器（その１）〔第149図〕



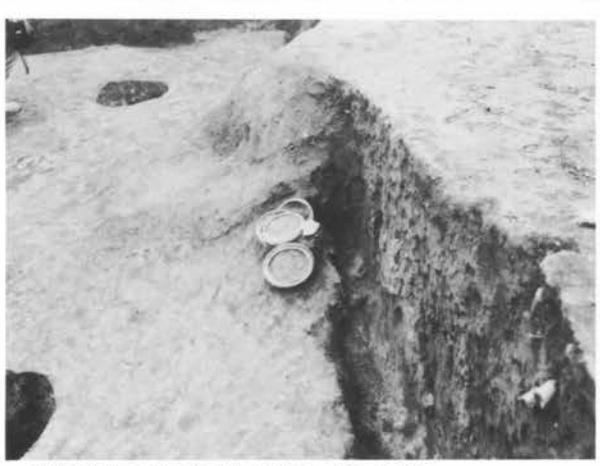
遺構出土の弥生土器（その２）〔第150図〕



1．　002号住居跡全景

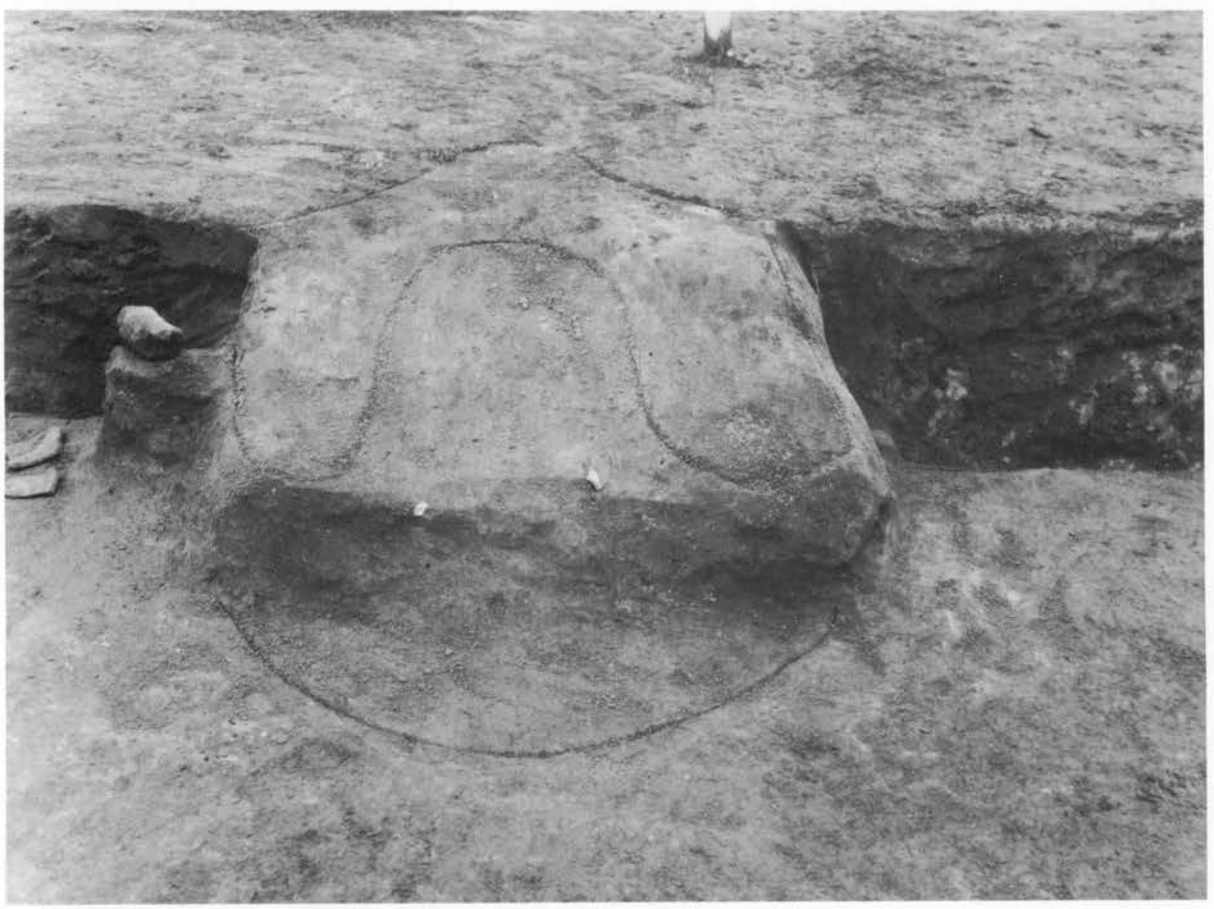


2．　004号住居跡全景



004号住居跡遺物出土状態及び調査風景

1.　023号住居跡全景



2.　023号住居跡カマド及び遺物出土状態

1. 002号住居跡出土遺物

2. 004号住居跡出土遺物

3. 023号住居跡出土遺物

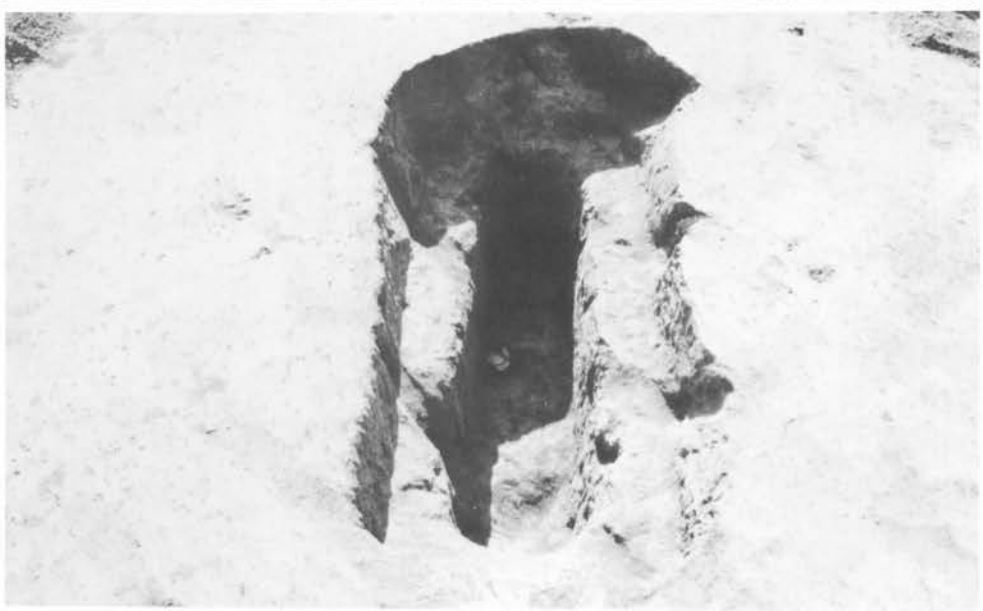
4. 005号址出土遺物

1. 036号址(塚)
全景

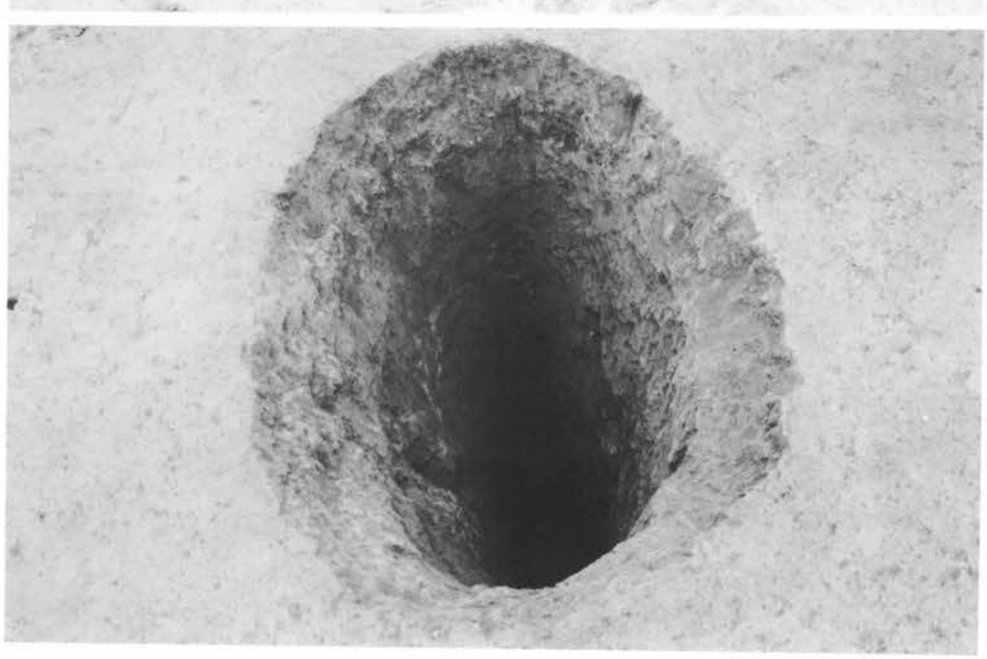
2. 036号址
全景

3. 036号址
土層断面

1.　003号址
全景

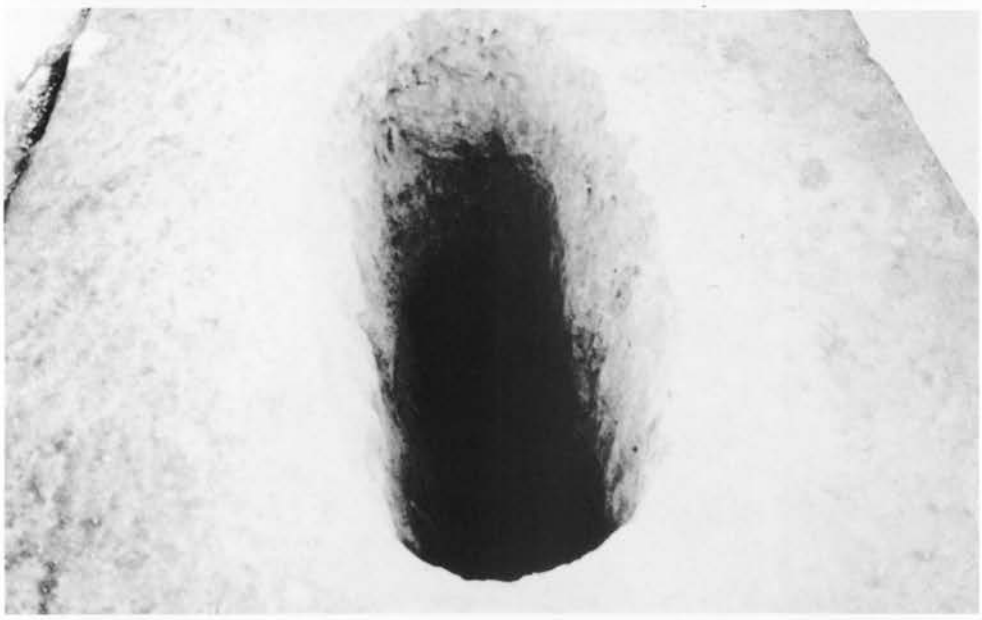


2.　005号址
全景

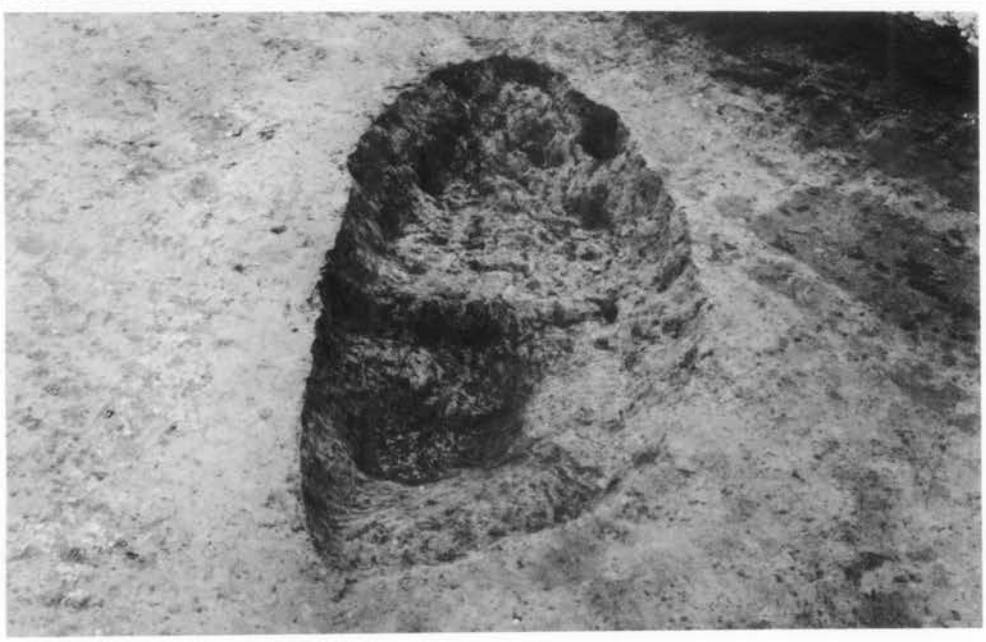


3.　012号址
全景

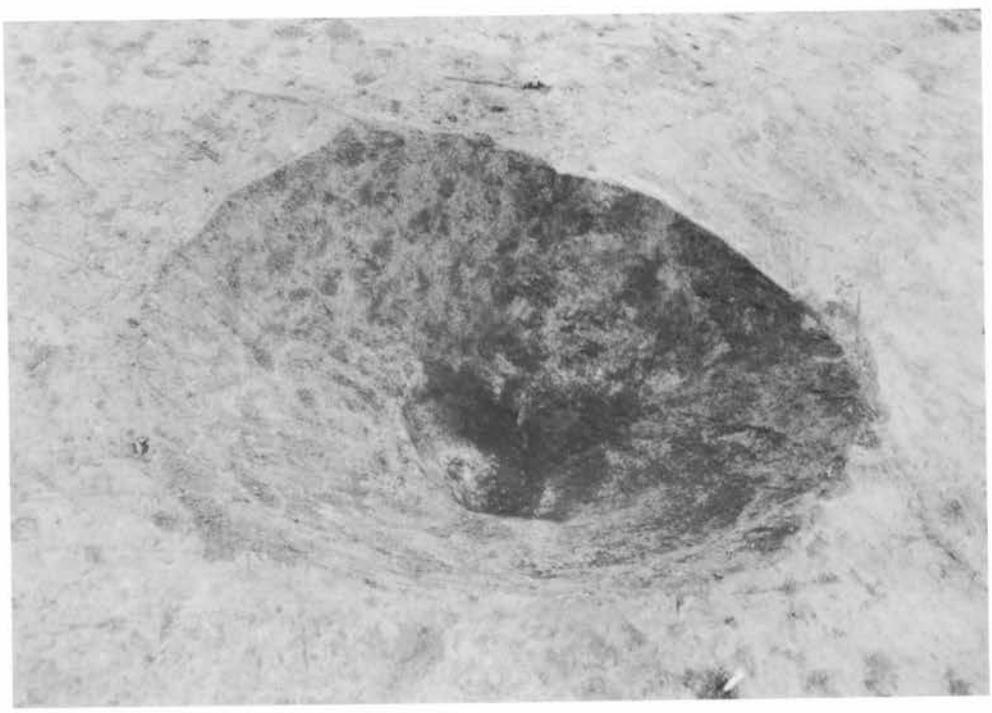
1.　013号址
全景



2.　025号址
全景



3.　027号址
全景



1. 052号址
全景

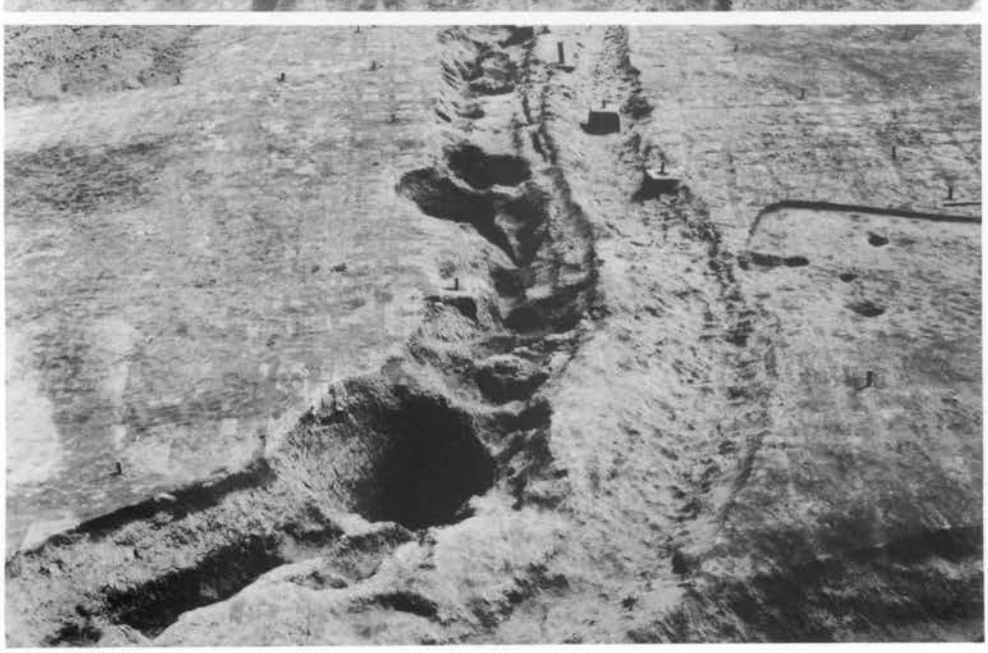
2. 061号址・062号址全景

3. 061号址土層断面

4. 062号址土層断面

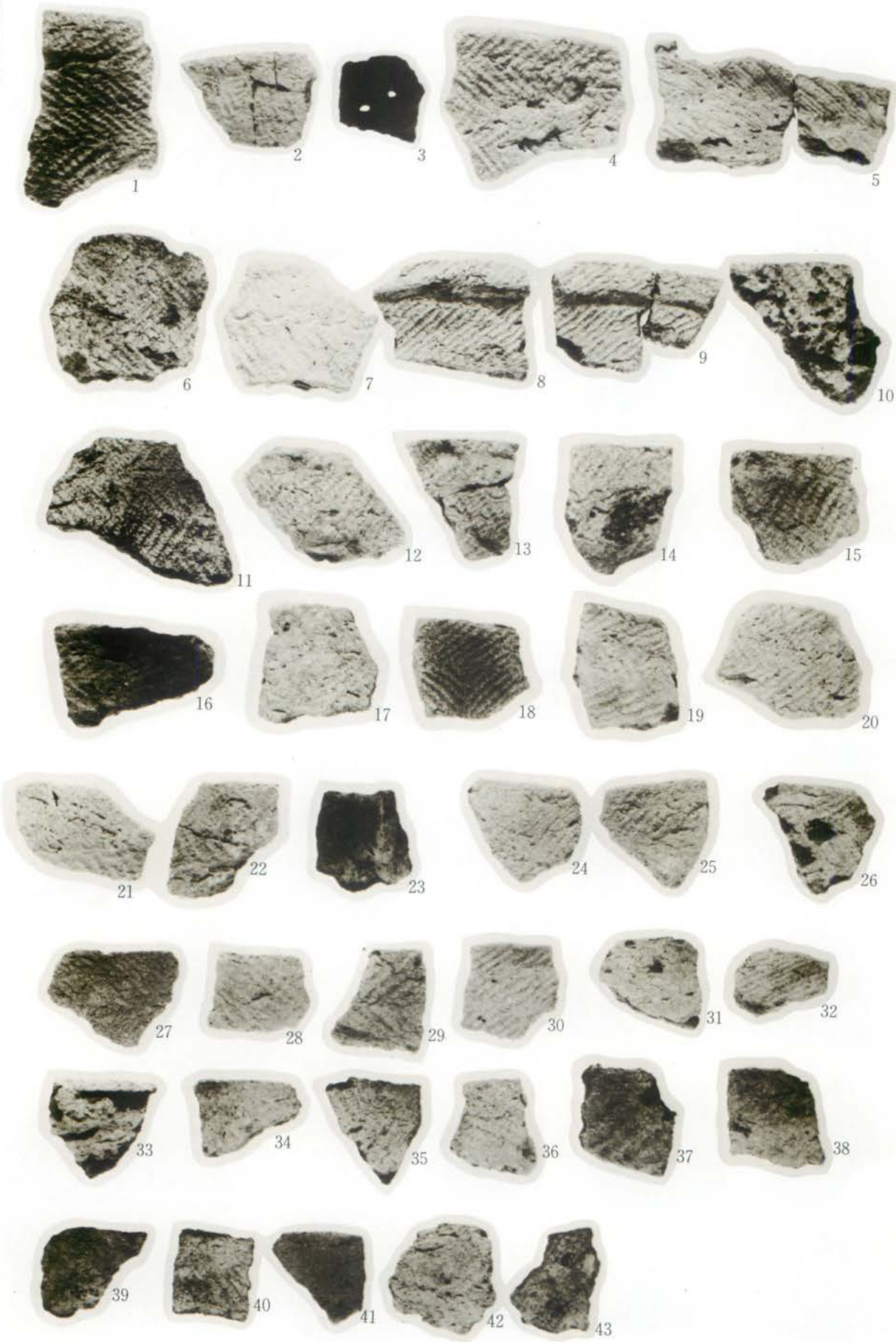
1.　014･015･016号址
全景

2.　024号址
全景

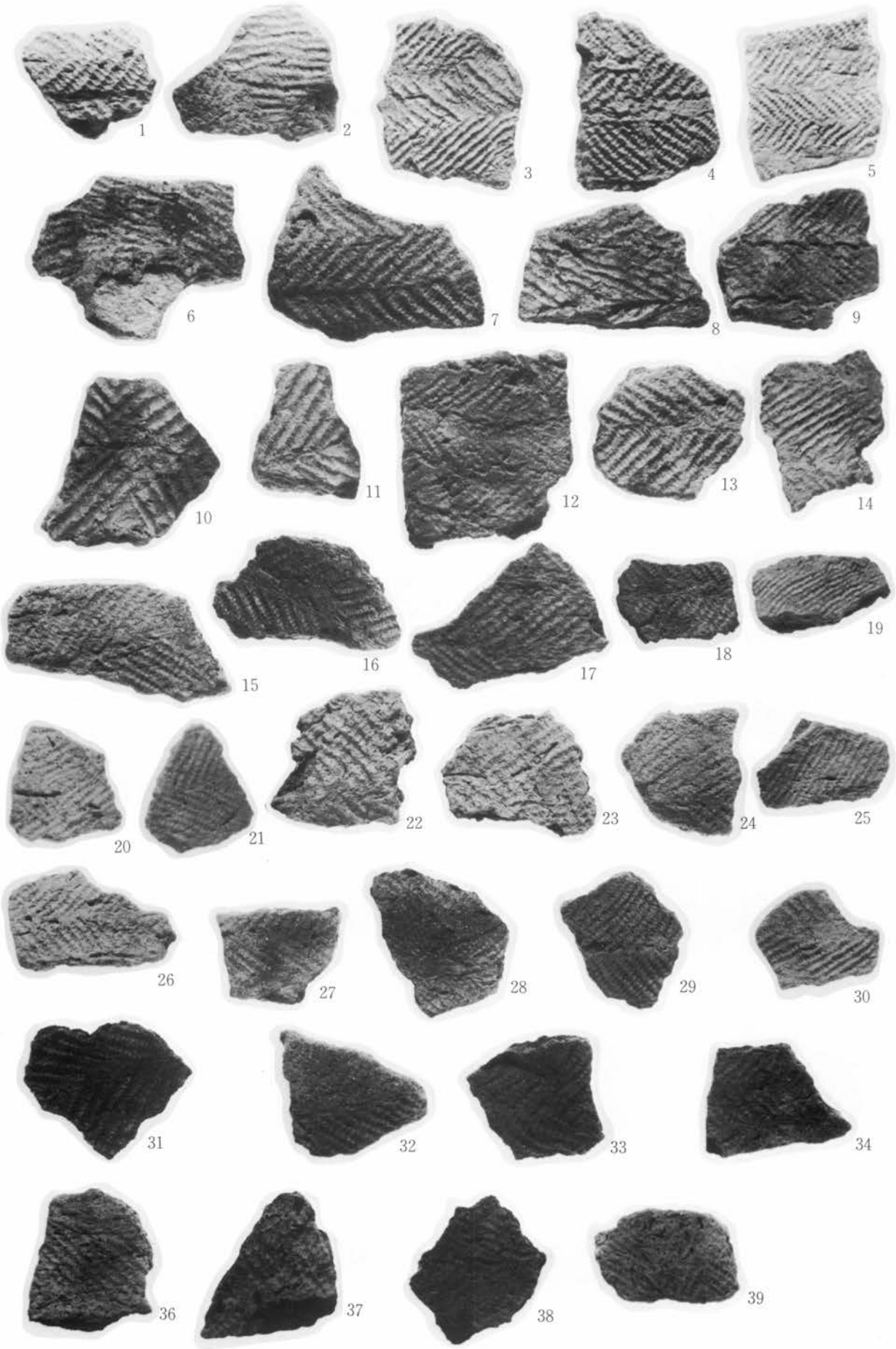


3.　032･033号址
全景

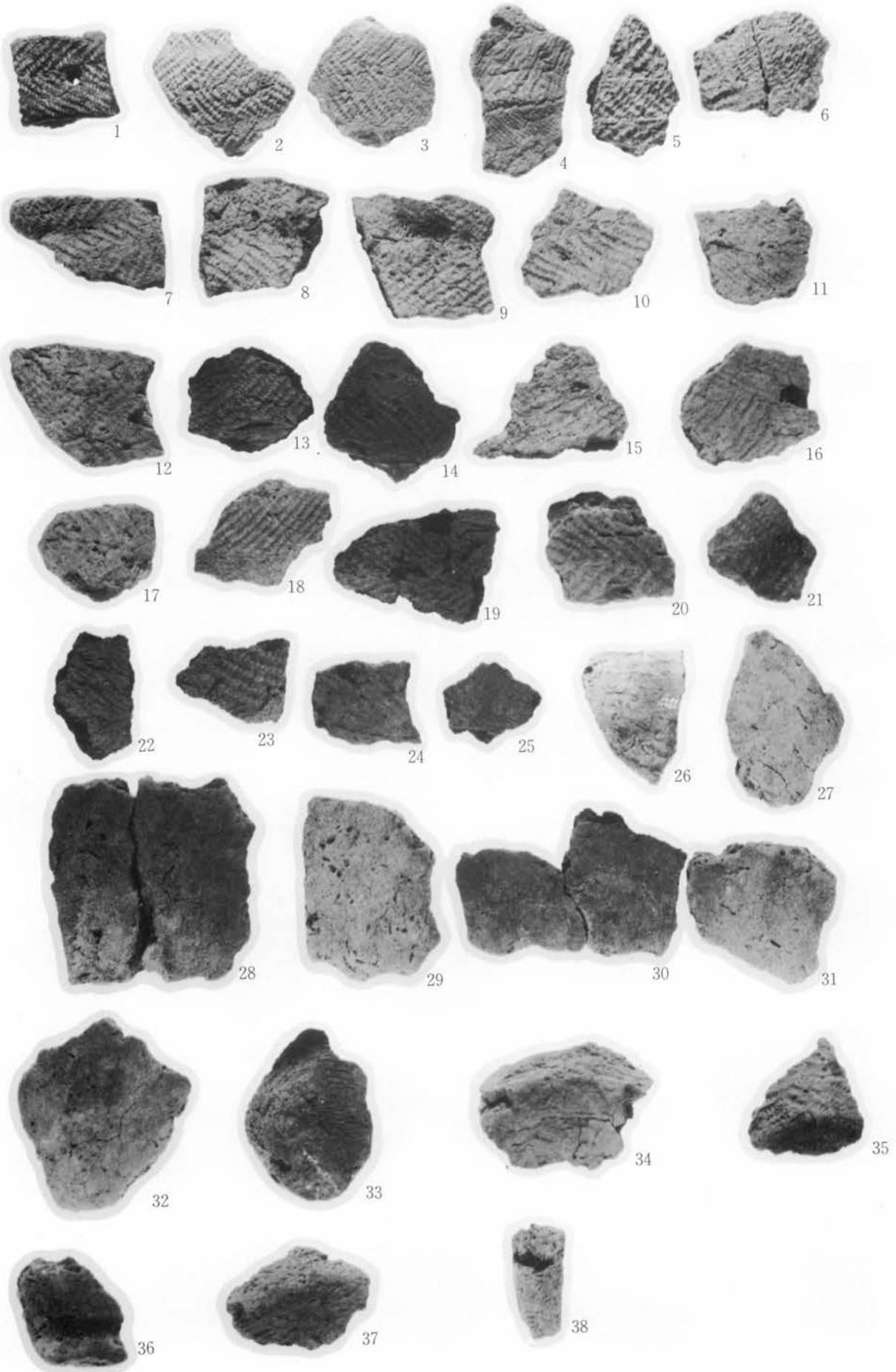
グリッド出土の縄文土器片（その１）〔第169図〕



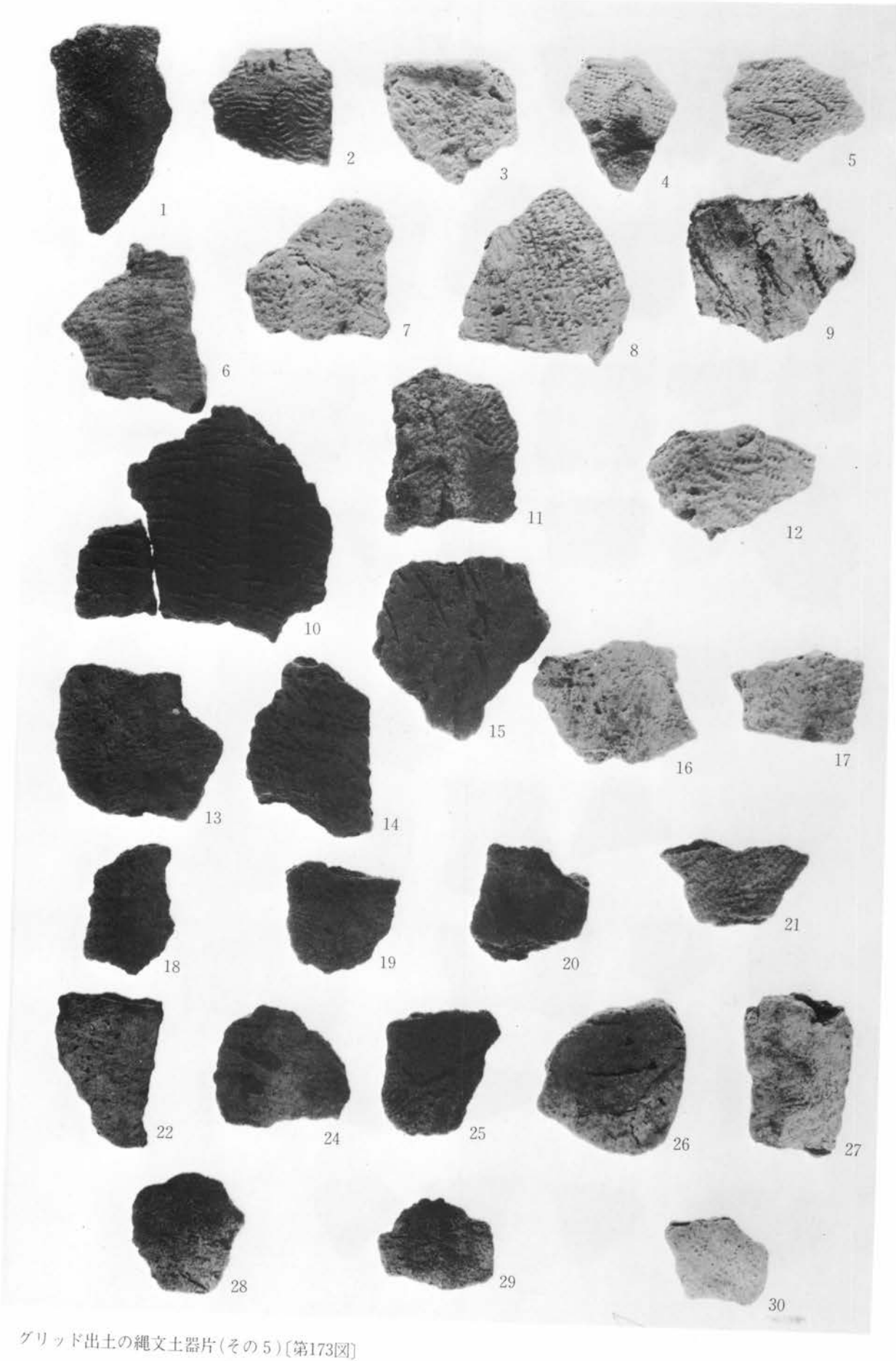
グリッド出土の縄文土器片（その２）［第170図］



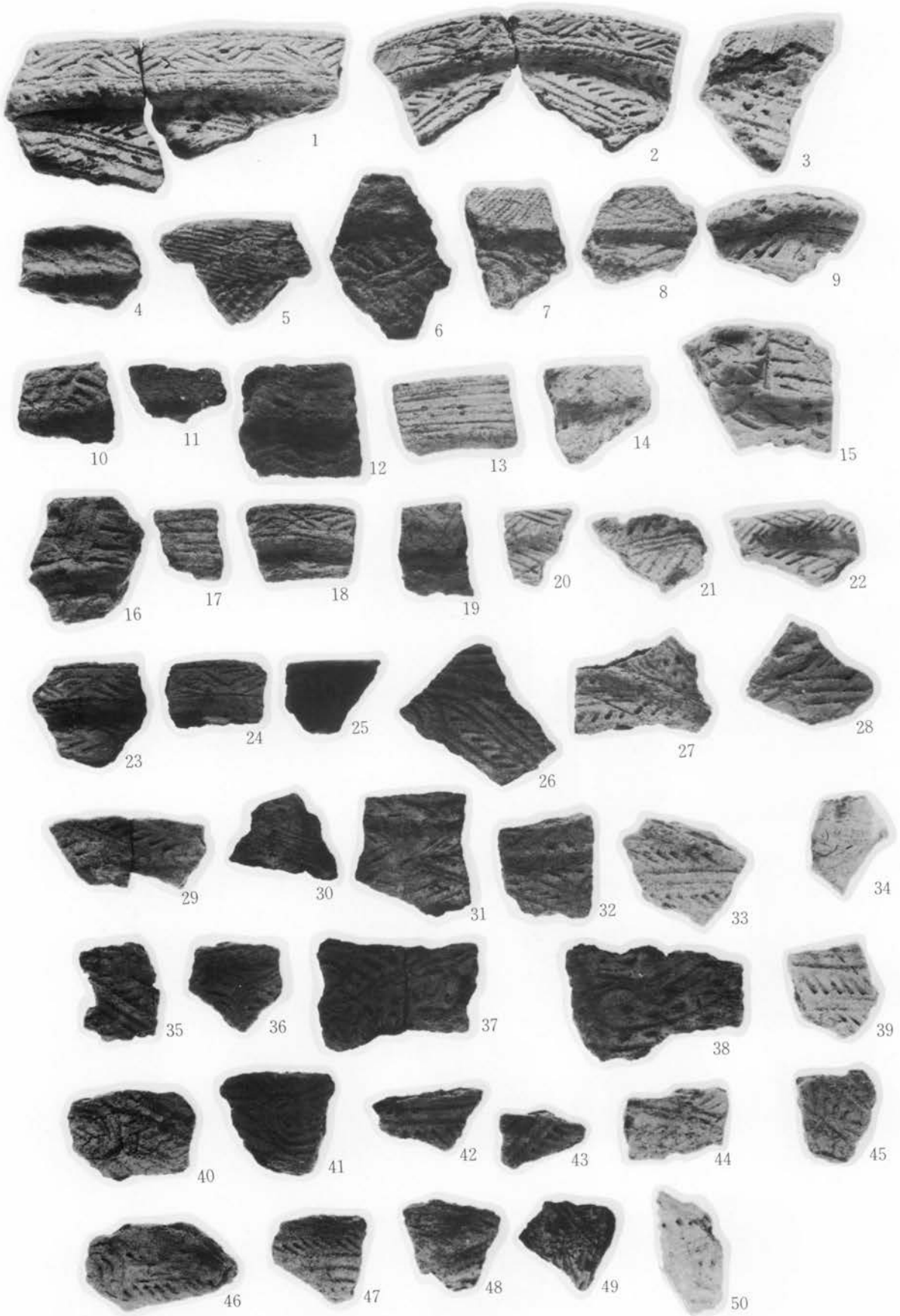
グリッド出土の縄文土器片（その３）〔第171図〕



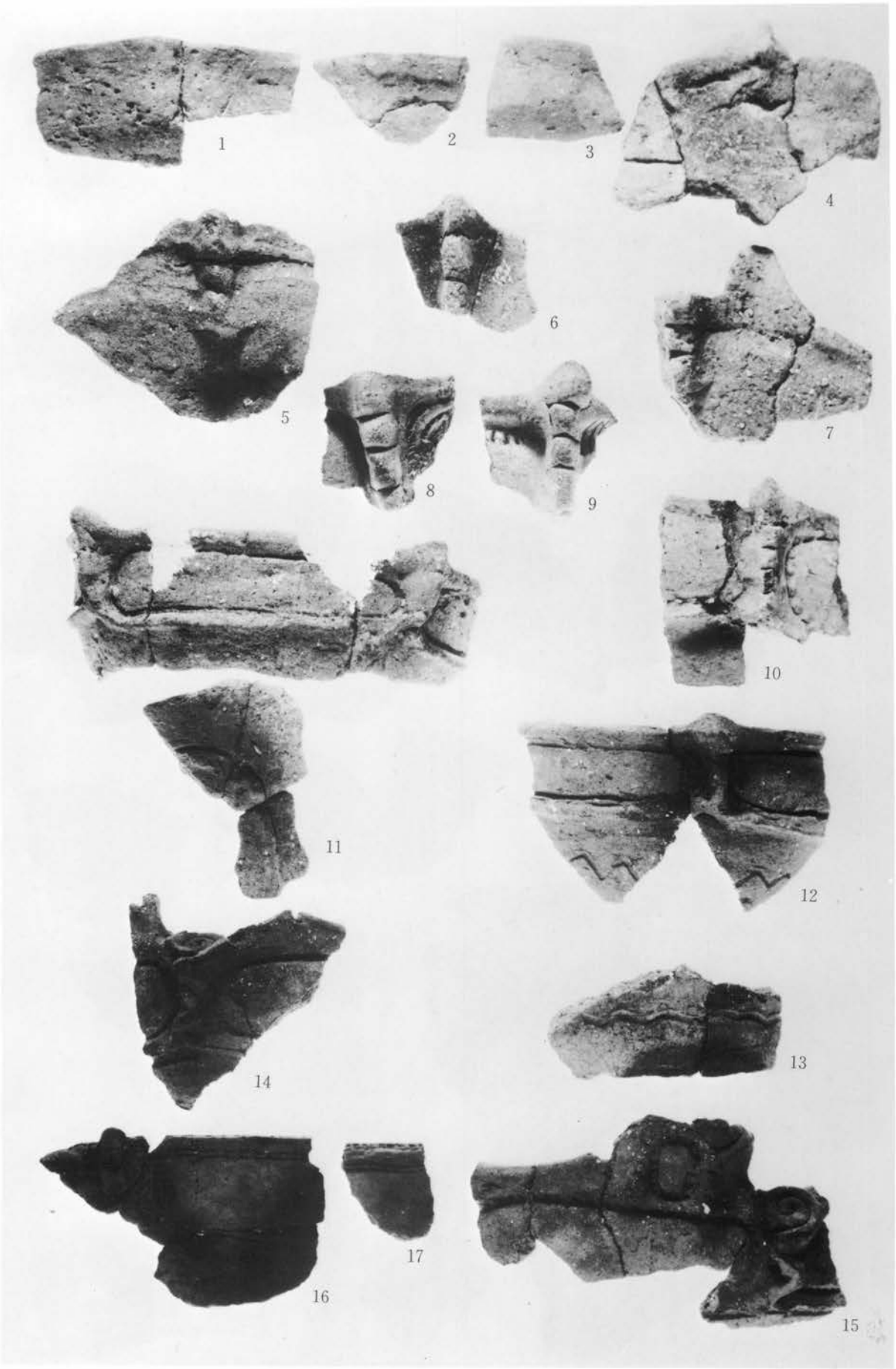
グリッド出土の縄文土器片（その４）〔第172図〕



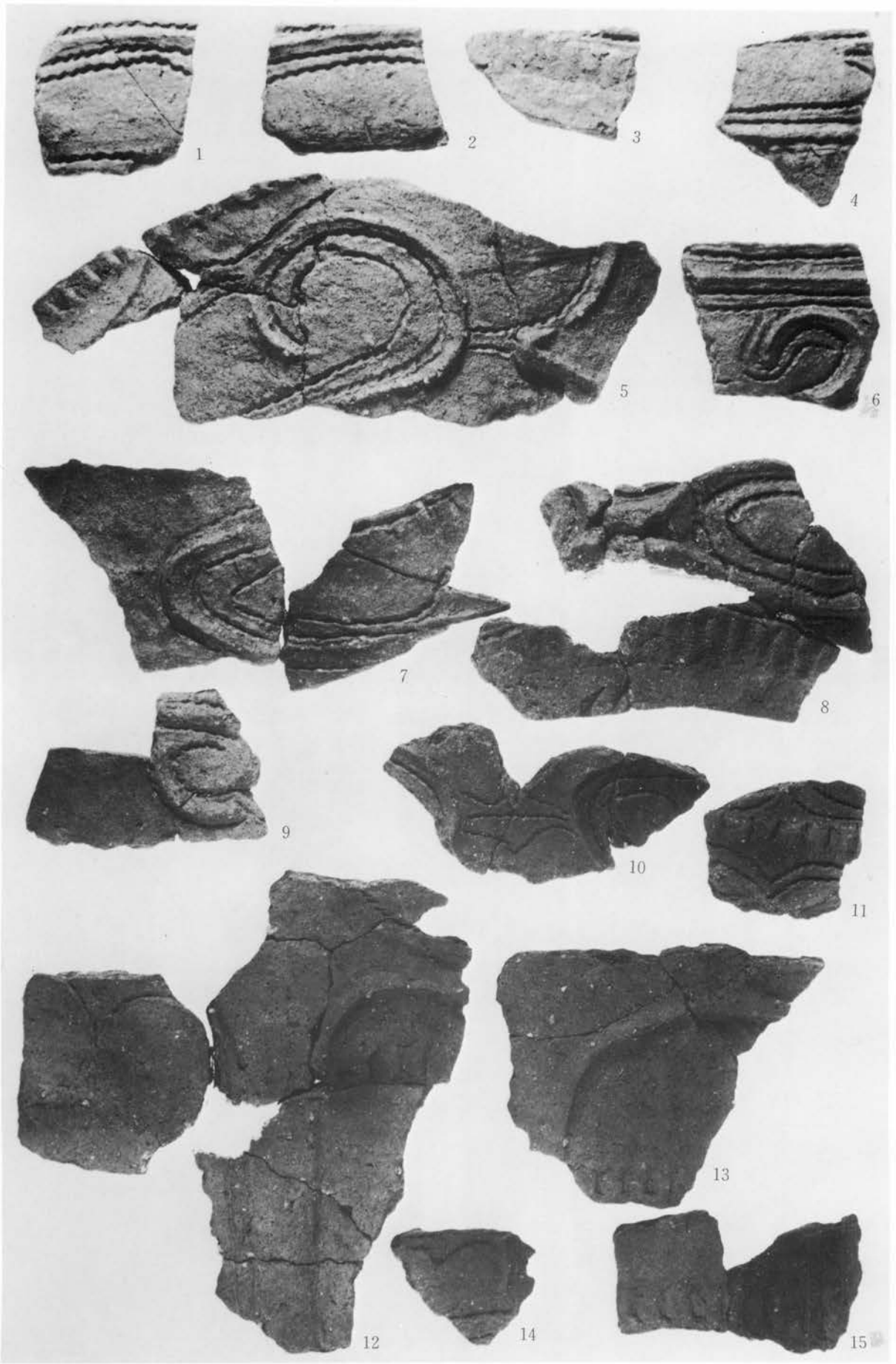
グリッド出土の縄文土器片（その５）〔第173図〕



グリッド出土の縄文土器片(その6)〔第174図〕

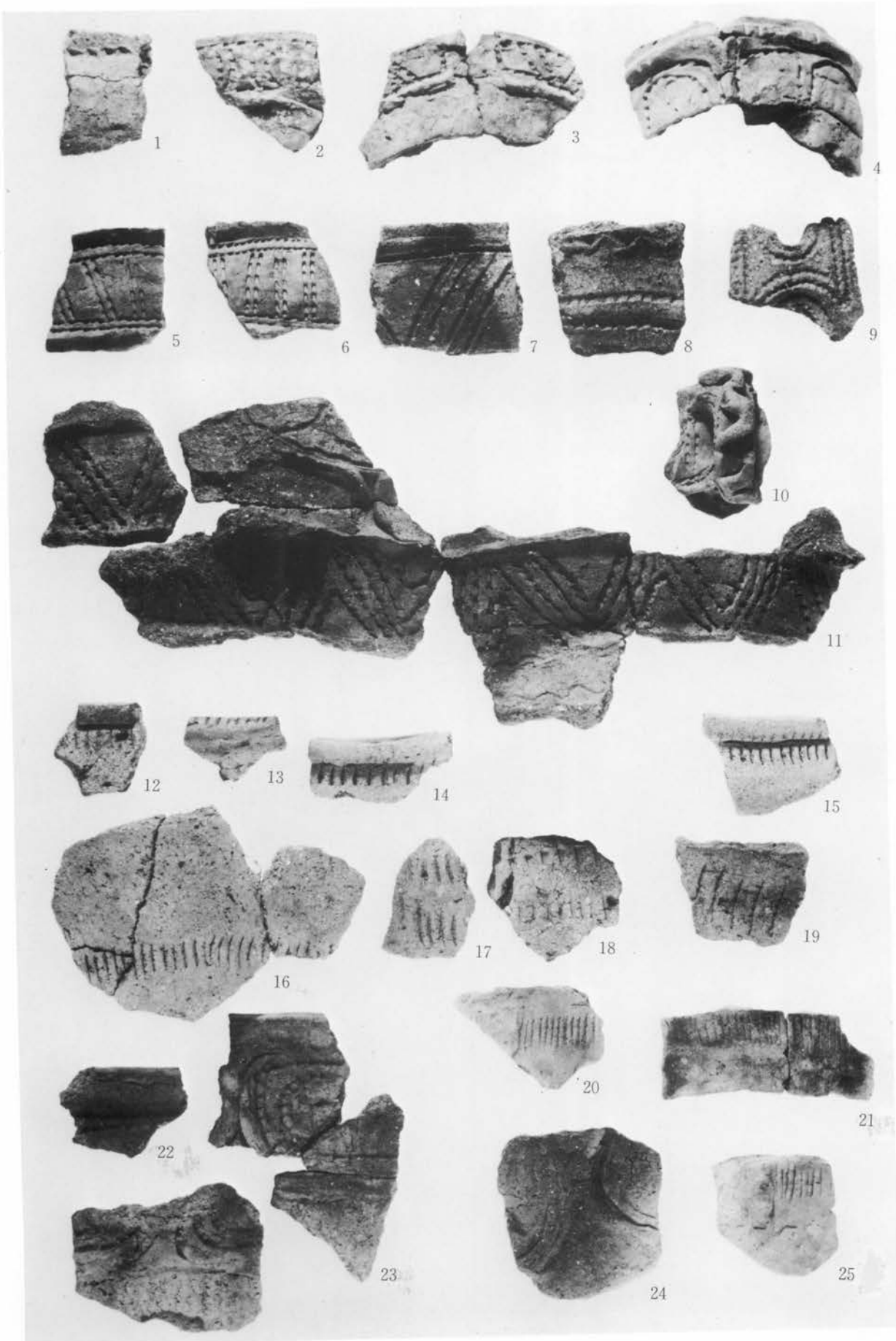


グリッド出土の縄文土器片(その7)〔第175図〕



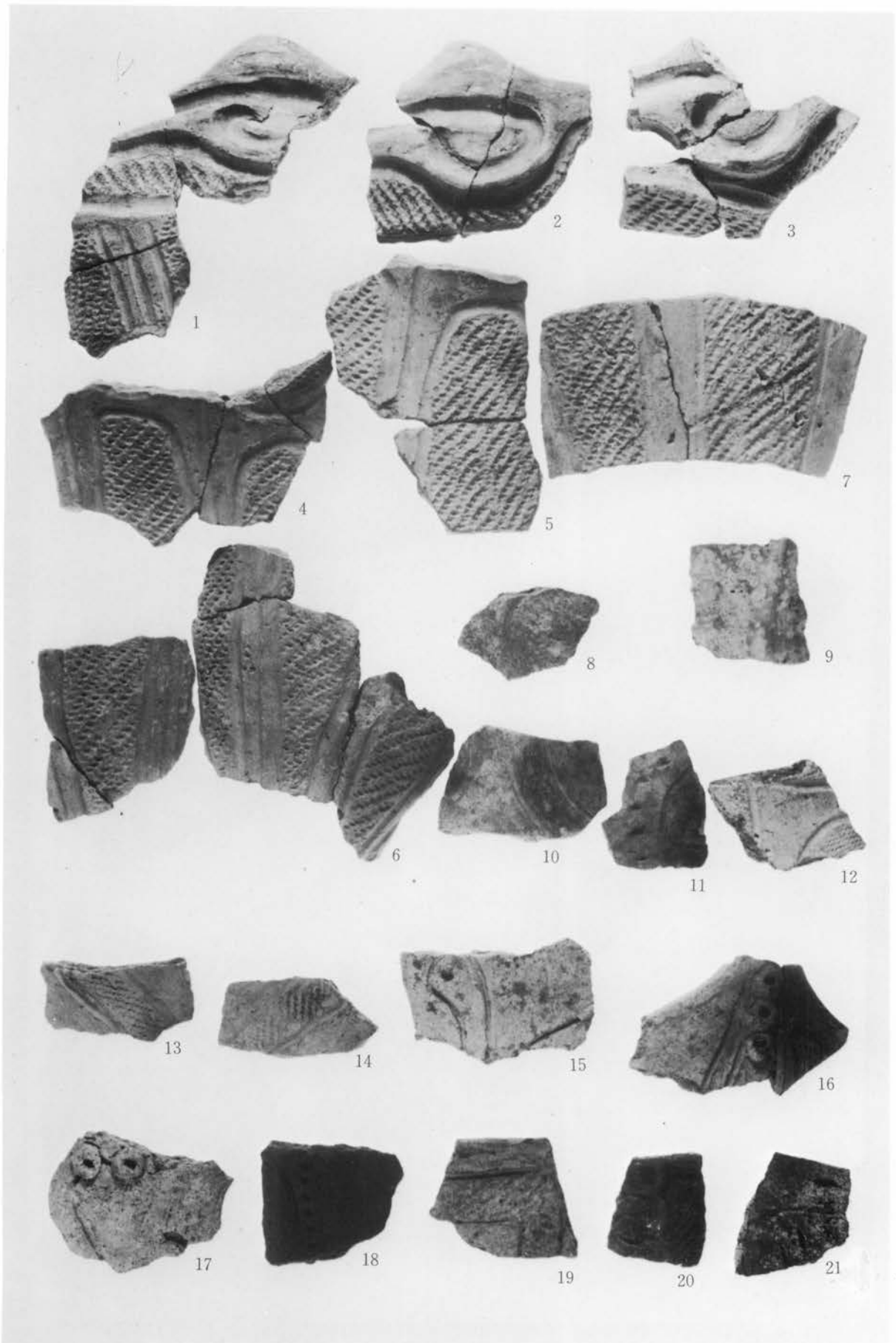
グリッド出土の縄文土器片（その８）〔第176図〕

グリッド出土の縄文土器片（その９）〔第177図〕



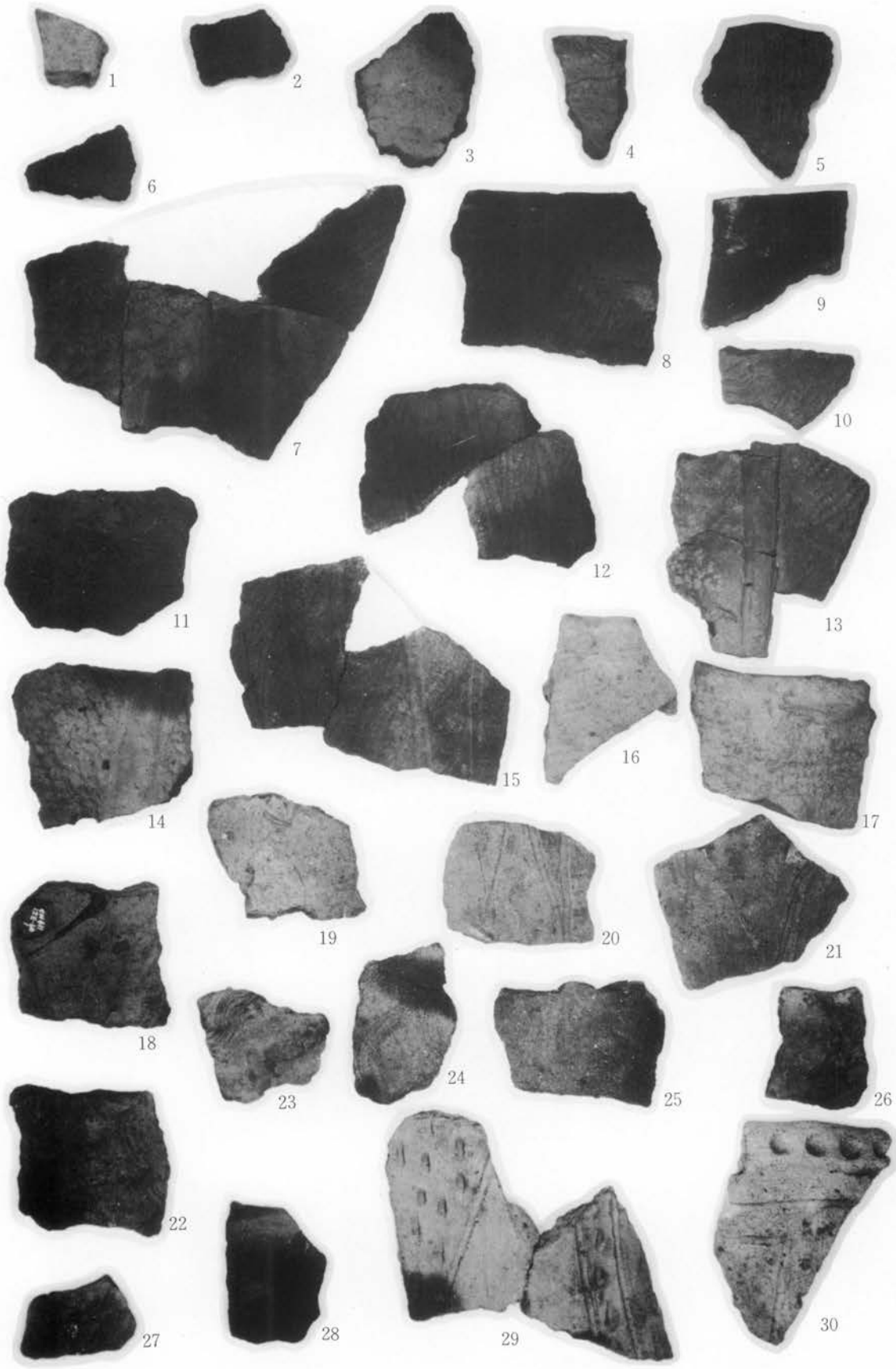
グリッド出土の縄文土器片（その10）〔第178図〕

グリッド出土の縄文土器片（その11）〔第179図〕

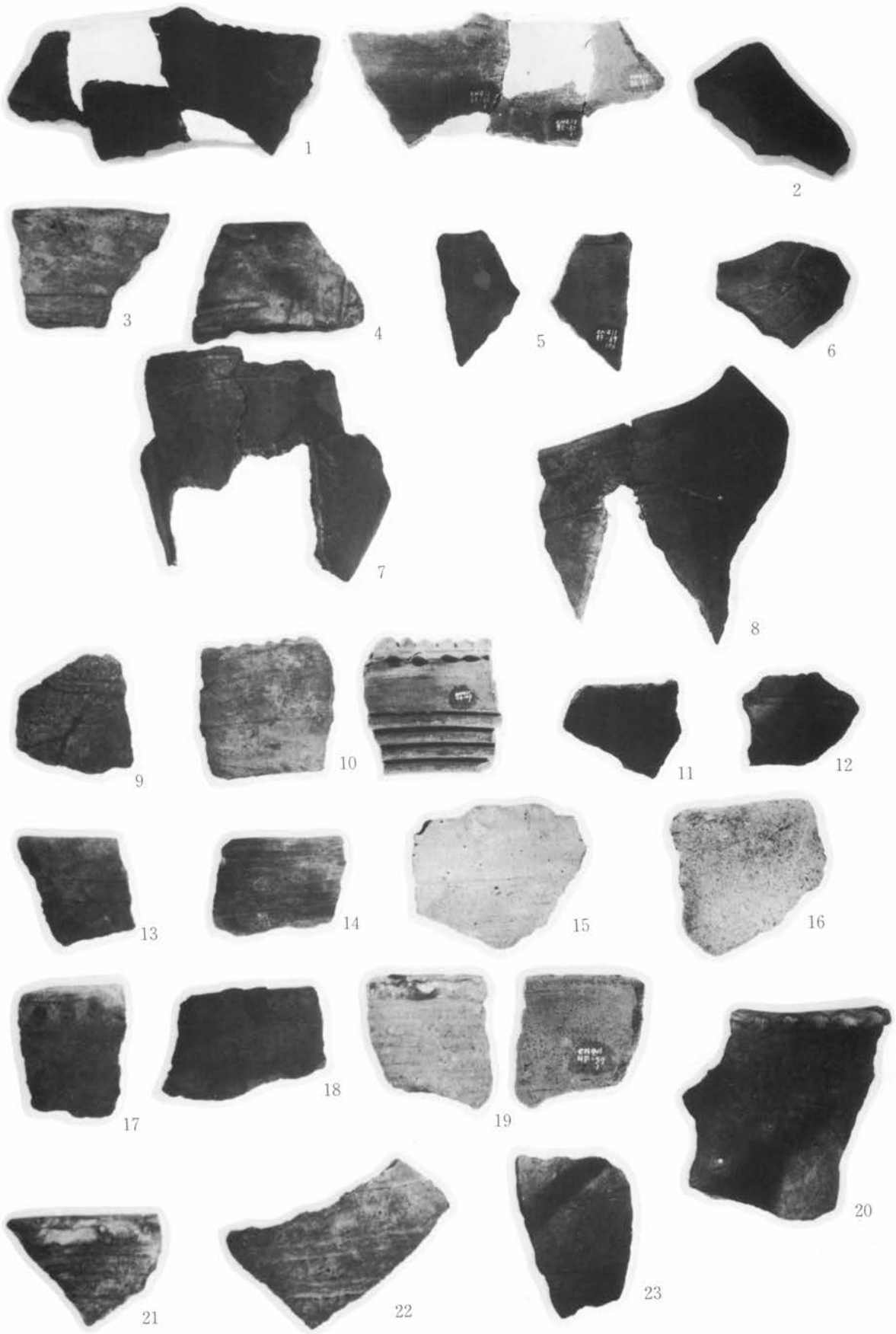


グリッド出土の縄文土器片（その12）〔第180図〕

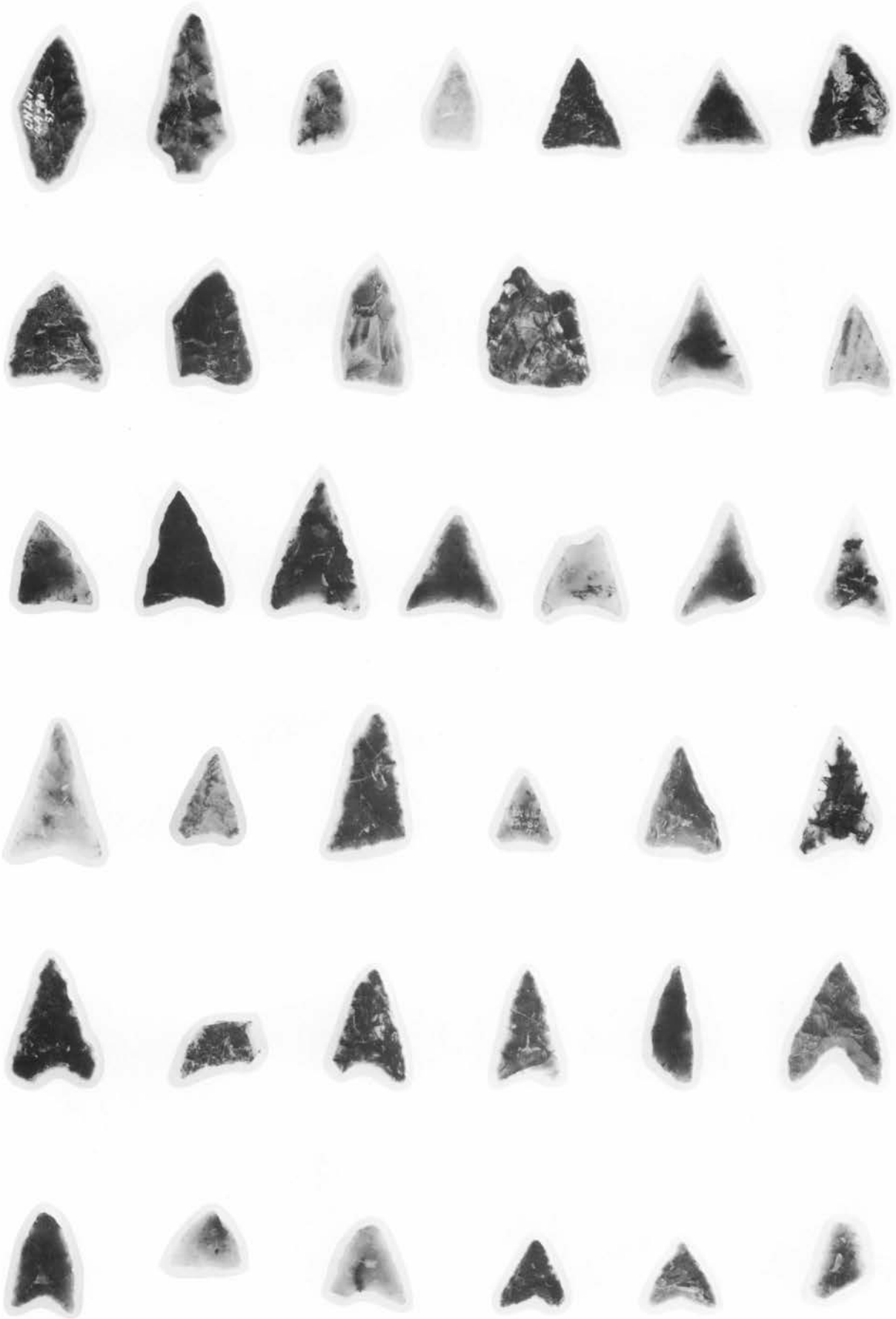
グリッド出土の縄文土器片（その13）〔第181図〕



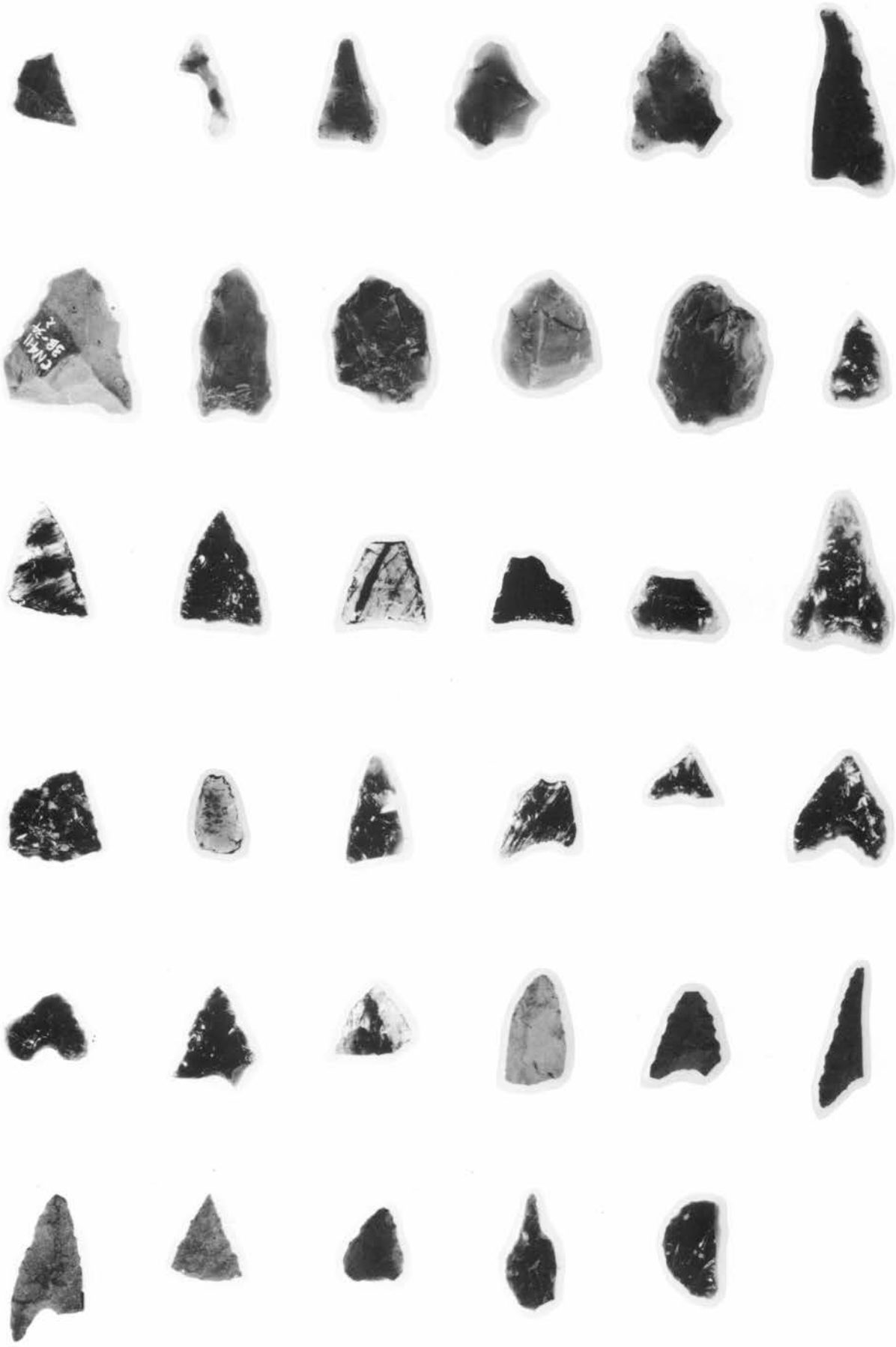
グリッド出土の縄文土器片（その14）〔第182図〕



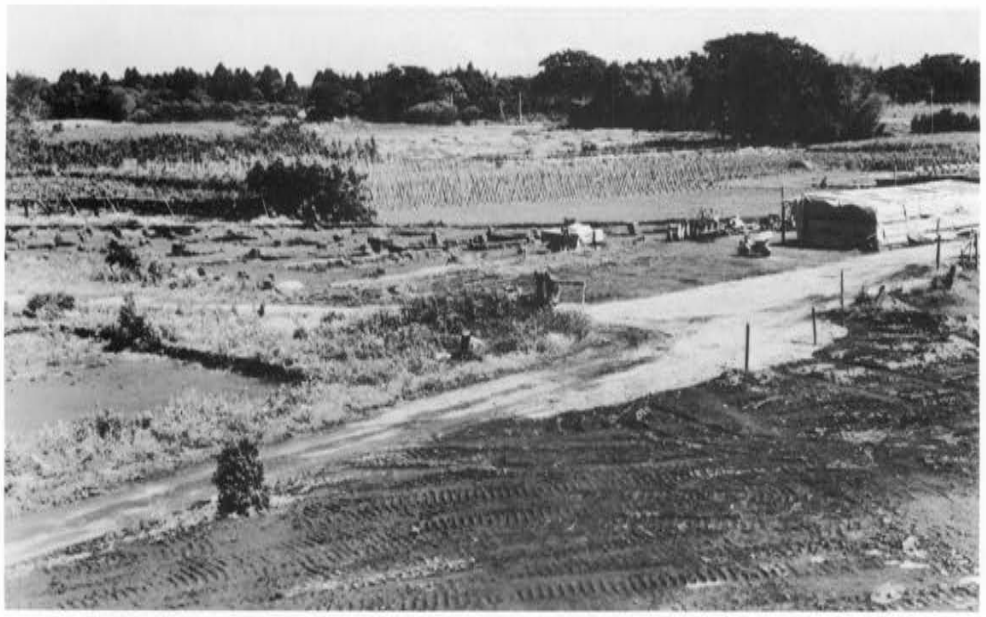
グリッド出土の縄文土器片(その15)〔第183図〕



縄文時代の石器（その１）１～38



縄文時代の石器(その２)39～73

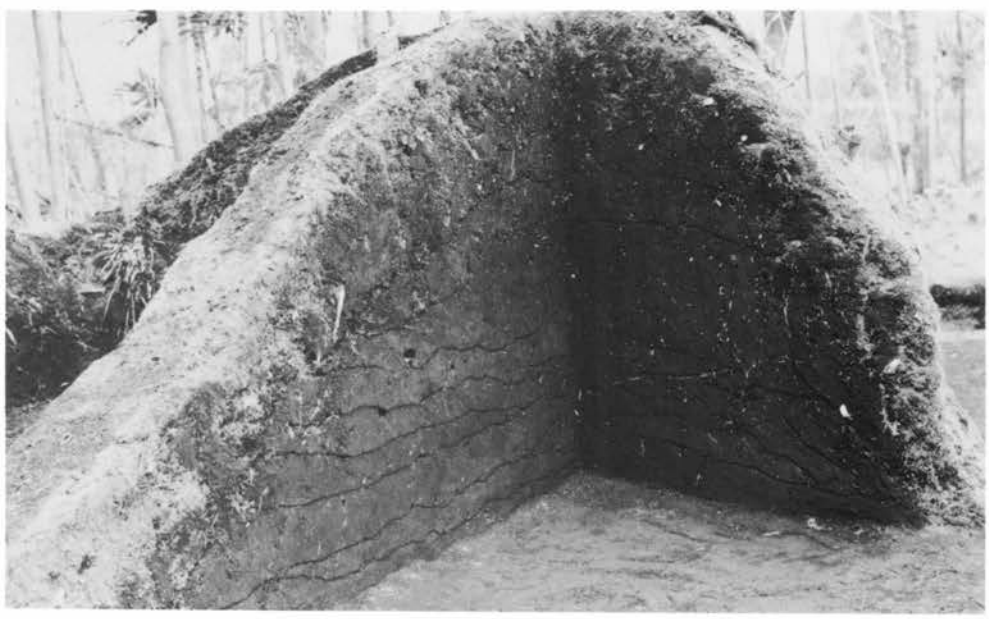


1.　遺跡遠景
（谷田木曽地遺跡より）

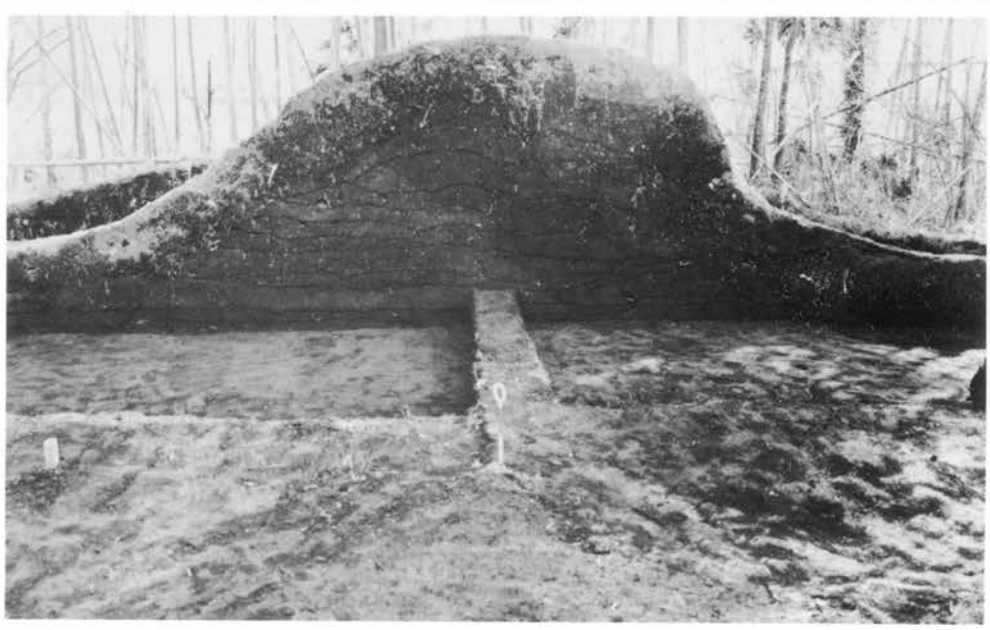
2.　遺跡近景

3.　遺跡近景

1. 001号址（塚）
全景



2. 001号址
土層断面



3. 003号址
土層断面

1．002・003号址（塚）
全景

2．　002号址
土層断面

3．　003号址
土層断面

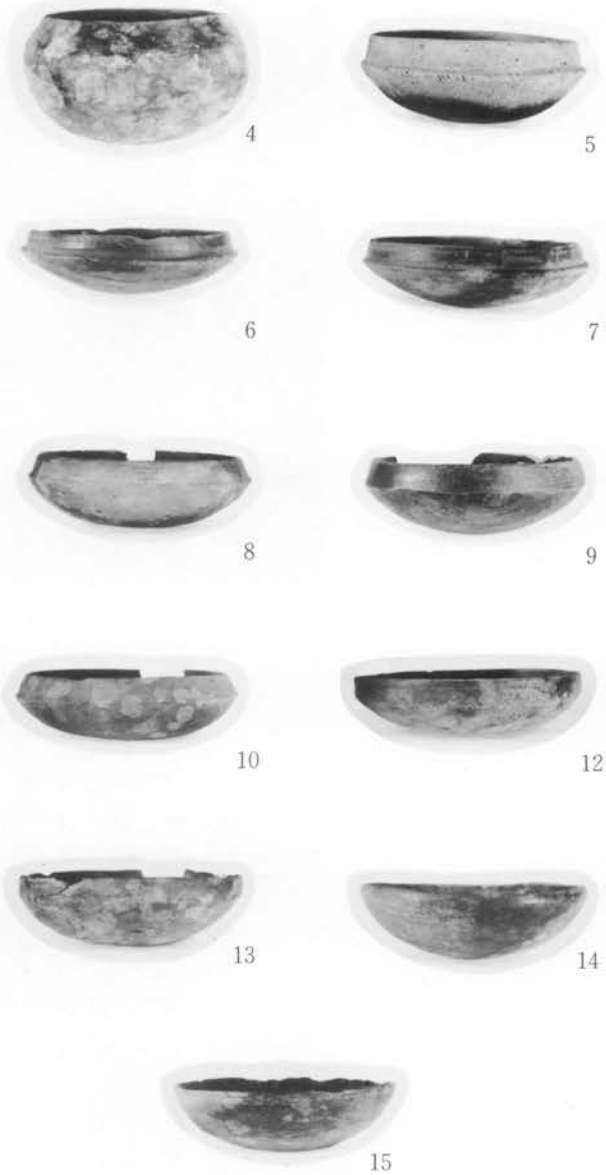
1. 005号住居跡
全景

2. 005号住居跡
土層断面

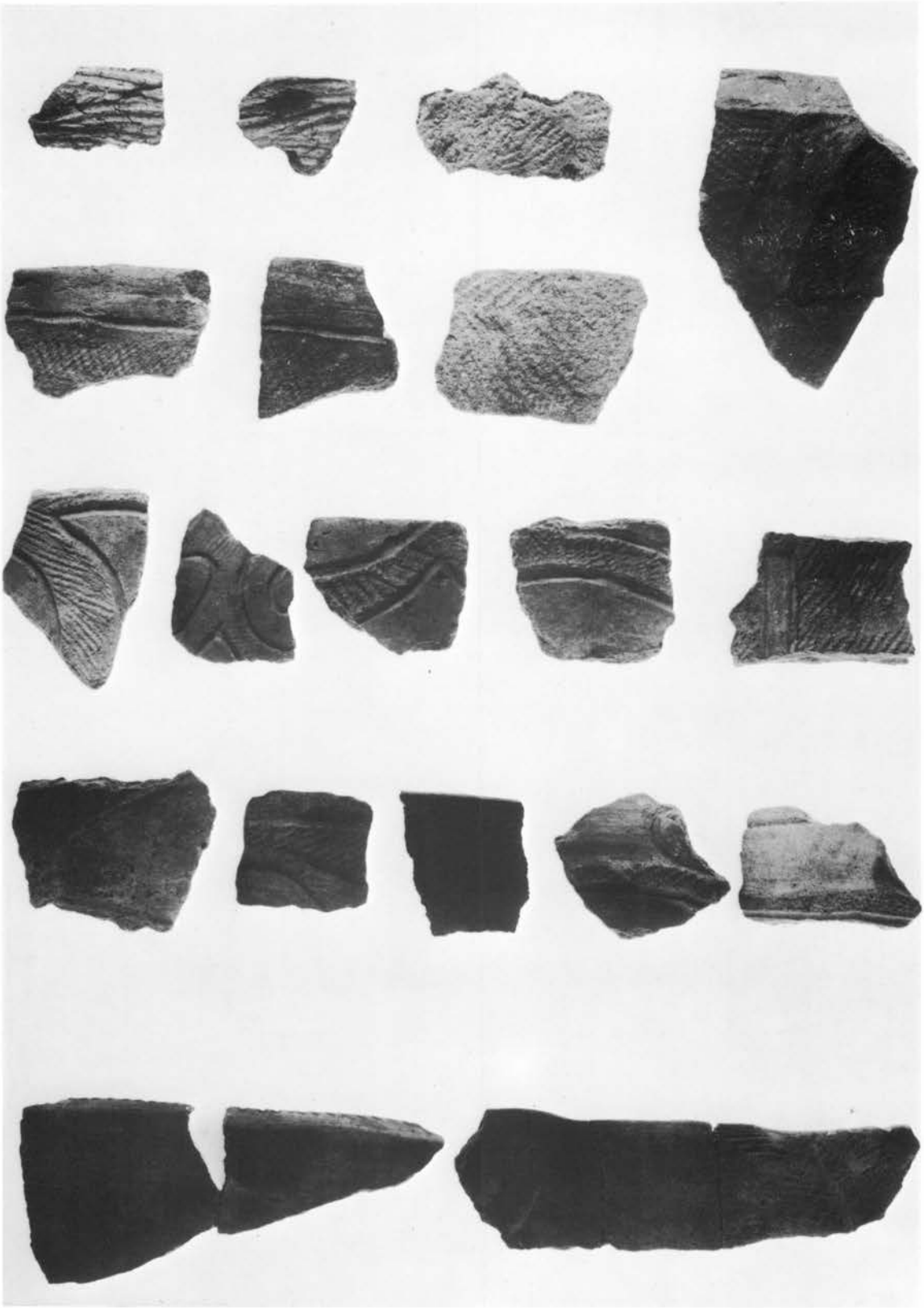
3. 005号住居跡遺物出土状態

4. 005号住居跡遺物出土状態（カマド右）

1.　005号住居跡出土遺物

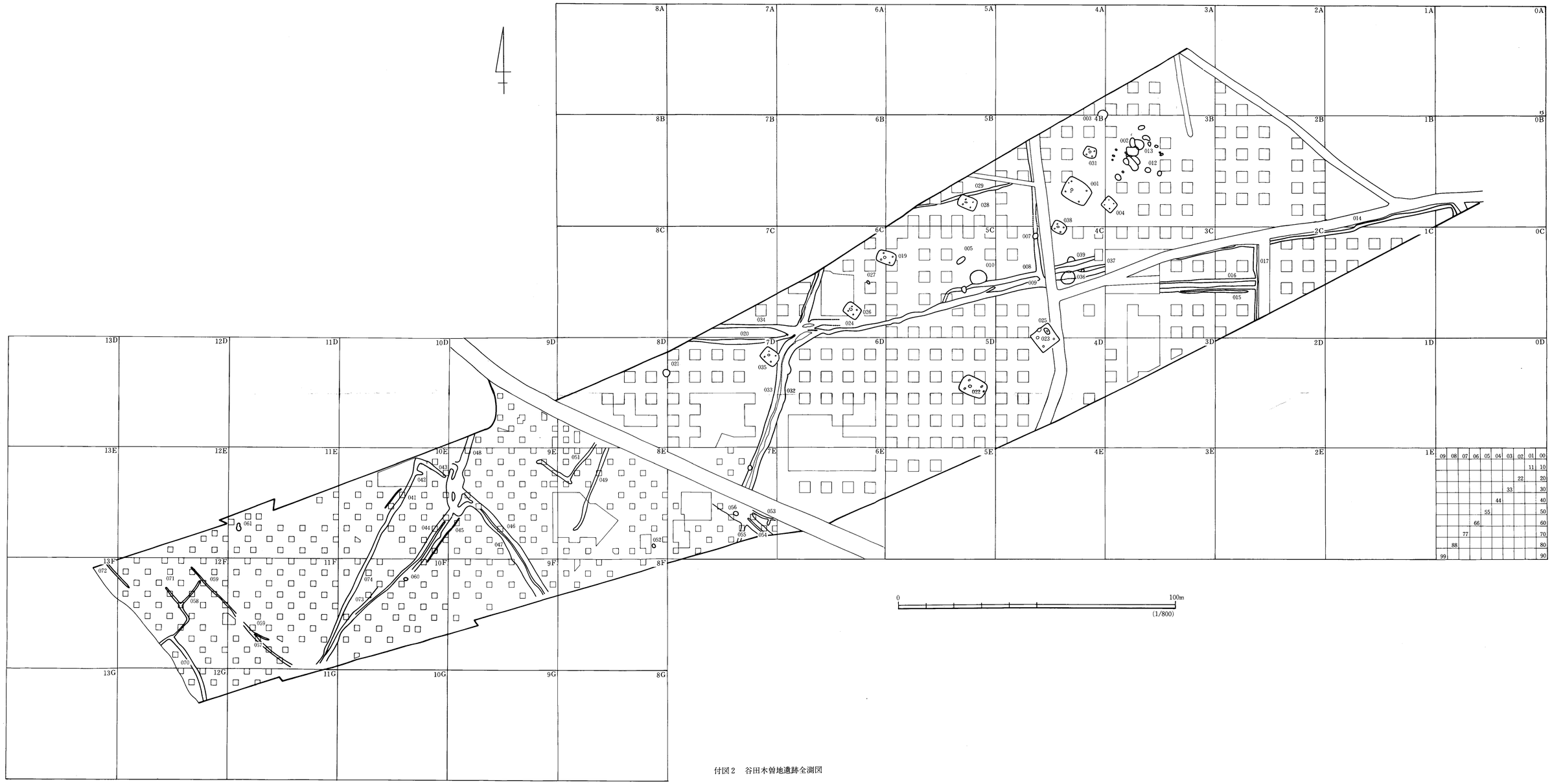


2.　住居跡外出土遺物（その１）〔第195図〕



住居跡外出土遺物（その２）〔第196図〕

付図1　船尾町田遺跡全測図　S＝1:500



付図２　谷田木曽地遺跡全測図

昭和59年3月21日　印刷
昭和59年3月31日　発行

千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書 Ⅷ

発行　千葉県企業庁
千葉市長州1－9－1
財団法人　千葉県文化財センター
千葉市亥鼻1－3－13
印刷　株式会社　多田印刷